文學博士三矢重松著

增訂改版

高等日本文法

東京 明治書院

緒言

本書題して高等日本文法といふは、中等教育の程度より一歩を進めたればなり。敢へて最高等の大文法に擬するにあらず、中等教育を經たる者は本書に由りて我が文法を更に的確に學習し得べし。

本書もはら文法の實質を說く。中には理論に亘れるものあるは、說明の法やむを得ざるに出づ。古語及今の口語を併せ說けるは、國語の眞を發揮せむには一時代の語をのみ對象とすること能はざればなり。

本書獨習用たり得べく、又教科用たり得べし。さるは兩者を兼ねて一方にのみは極めて適當せず、隨つて所說或は繁簡中を得ず、體裁また同じからざるものあるは、竊に遺憾とする所なり。

國語文法書の大成せる者、まづ大槻氏の廣日本文典及別記を推さゞるべからず。予が研究大抵先人の力に由れる中にも、大槻氏に負ふ所

最多し。かくて本書は舊說を統合補正したる者なれども、新說も亦おのづから無きにあらず。

諸成音　格　法　性相　敬語　助動詞　助辭
補足語　敍述句　省略　記錄對話

等に關する者是なり。中に就きて並立格及前提法の名は清水平一郎氏の創意にして、前提法に順逆の兩態を立て、直說命令の二法と對せしめたるは、予が案なり。敬語の「御」「樣」の別は松下大三郎氏の所說に係り、助辭ガの意義・記錄對話の諸說は、恩師物集先生の教を受けたること頗多し。茲に特に竝べ書して感謝の意を表す。

改版につきて

高等日本文法は、三矢博士の力作なり。而して是れが編著の要旨は、其の緒言中にも見ゆるが如く、主として高等學校程度の教科書、若くは參考書たらしめんとするにありしものなれども、亦博士が國語學上に下されたる一定石として、學界を稗益すること尠少ならざりき。然れども出版後年數を經たるを以て、一度之を改訂せられんの意ありしが如く、其の手澤本は實に韋編三絶の概あり。試みに其の内容を檢せんか、毛筆又はペンにて、いづれの頁にも殆ど余白なきまでに記入しあるのみか、或は大小の附箋、又は挿入紙を用ひて、説明又は例證の補入せられたるを見る。是れ即ち博士が實地授業又は讀書の際、その必要と認むるものを書き入れ置かれしものに係れり。

大正十二年五月下旬、國學院大學が飯田町より澁谷に移轉せんとする際なりき。博士は偶同所に於ける最後の授業を了へ、此の本を置き忘れて歸宅せられしが、是れも亦、同學所藏の圖書雜品と共に梱包して運送せられし爲、暫く其の所在を失し、折しも病中の博士をして、いたく憂慮せしめき。而も幸にして當時の圖書係伊川讓

君の好意に依り、諸方を搜索して漸く之を得、博士の病床に致しゝかば、博士も始めて安堵の色を顯はされたり。かくて其の年の七月、博士は長逝せられ、同九月の大震火災は、本書の發行所明治書院を襲ひて、書冊の殘部と其の紙型とを併せて、悉く之を奪ひ去れり。是れ本書と、其の著者との運命なり。

越えて一年、明治書院が本書を復興せんとするに當り、余等の同窓にして同所の取締役たる森下松衞君は、著者に對する好意上、此の手澤本より内容の增補を計らん事を提言せり。是に於て余は之を博士の令弟三矢宮松君に報じ、且是れが補修者として榊原朝雄君を推薦し、余も亦應分の力を效さん事を約せり。余はもと榊原君と一面の識なしと雖も、君は博士が同鄕の後進にして、又直接博士の敎授指導を受けしもの。又曾て『文法敎本』の三訂に際しては、特に君を煩しゝ如き關係もありて、博士が愛弟の一人たるを知ればなり。

かくて君が一度三矢家の囑を受くるや、喜びて之を受諾し、公務の余暇、孜々としてさしも困難なる此の事業に沒頭し、一々手澤本に就きて其の補入材料を整理し、殆ど其の全部を適當なる位置に按排せり。其の凡例は、大要左の如し。

一、改訂增補は手澤本の記入或は附箋に依る。その大部分は用例を蒐集し說明せ

られたる者なれど、所說の訂正、分類項目及內容の增減などなきにあらず。

二、手澤本の行間に欄外に左右の餘白に附箋に記入せられたる語句歌文など、成るべく適當なる個所に配置挿入せむとしたれども、又その項の末に纏め置きたるもあり。

三、傍注に？を附し、或は……カ……カ……カなどと並書せられたるをば大體そのまゝに存したり。決定を與へられざる憾なきにあらざれども、亦讀者考察の一助ともなるべければなり。

四、項目のみありて說明なきあり、或は項目と例とのみありて說明なきあり、體裁上いかがと思はるれど、これ亦その儘に存したり。

五、句讀點、濁點などは少しく增し、んむらんらむなど混用せられたればむらむなどに、略一定したり。引用書名の(後)(金)なども(後撰)(金葉)などと改めたる所多し。その他の用語の朱記なきものは敢へて改めず。助動詞は常に助動辭とのみいはれたれど、舊來の儘になし置きたり。

六、本文中に『國學院雜誌第何號參照』などありたるを「附錄參照」としたり。

七、增補の結果、本文に於て約百五十頁、附錄約百三十頁を增すに至れり。

『作歌と助辭』は曾て單行本として出版せられしものなれども、久しく絕版に爲りゐしを、偶博士の病中再版成りて之を其の枕頭に致し、かば、博士はいたく悅ばれしも、未だ發賣するに至らずして、其の全部を烏有に歸せしめきと。されば之を附錄とする事も、亦著者の意志を尊重する明治書院の進みて提言せし所なり。

猶又、論文數篇は博士が曾て『國學院雜誌』上に發表せられしものにして、本書と參照して便益多かるべきを思ひ、榊原君の注意に由りて併せて之を附錄としたり。（但し其の中の「國語に特有な文の三體」は「崇敬體」のみを說いて、未だ「記錄體」「對話體」に及ばれざりしのなり。）

斯の如くにして、本書は期せずして、實に斯の如き大冊を爲したり。是れ果して博士の意志なりや否や、之を知るべからずと雖も、博士がさしも愛惜せられし手澤本の、空しく埋沒せんを悲みしと、且は其の著書と論文との一部を長く世に行はんとせし後人の情とは博士と雖も之を甘受せざるを得ざるべく、殊に博士が國語學に關する一大論文を草せんの志を抱いて、空しく幽冥に歸せられたる今日、本書の出づる事は、博士に取りても亦幾分の新意義なきに非ざるべし。余は博士が同學の後進にして、而も親善なる友誼を辱うせしもの、今しも本書の校正を終り、近く其の發

行を見んとするに方り、感喜の情に堪へず、卽ち一言を述べて其の由來を明にし、且關係諸君に對し、謹みて深厚なる謝意を表す。

大正十五年十月

島野幸次

高等日本文法目次

總論

第一篇 音字

第二章　漢字音……………………………………一九

第二篇　詞辭

第五章　動　詞……七六

第六章　形容詞……一二二

第八章　助動詞

第九章　副詞……四〇四

第三篇　文章

附錄

（目次終）

高等日本文法

文學博士　三矢重松著

總論

一　文法の性質

文法は文の法則を知る學科なり。文とはアヤの義にあらず、又一篇一章の文といふ意味にもあらず、一箇の完結せる思想を表せる結付をいふ學問上の術語にして、英語の Sentence に當るなり。さて我が國の文には文語と口語とあり。其の法則は何れも文法なり。文の法則は歸納的に研究し、之を演繹的に應用すべきものなるが、今は專ら我が歸納的に研究したる結果を説くに止むべし。

二　文法の目的

(1)　正しく文を作る爲に

元來作文は構成的のもの、文法は解剖的のものなれば、全然其の趣を異にす。前者は作者の地位に

ありて之を實行し、後者は批評家の位置よりして之を研究するものなり。故に文法を能くする者必しも作文に巧なりといふべからず、又特に文法を學ばざる者、文を作る事能はざるにあらず。但言文一致せざる今日に於いては、正しき文を作らんが爲には特に文法を學ぶべき必要あり。上世言文一致の世にありては口語卽文語にして、文を作るに特に其の法則を學ぶ要は無かりしなり。平安朝の末漸く言文相分れ、詠歌の如きは一種の技術の如く師傳を以て授受する如き勢を成すに至れり。卽ち言語は時と共に推移すれども、文章にあらはすに至りては依然古の法則に從ひ、其の標準を延喜天暦の頃に取ることとなれり。これ言文兩途に分れし初なり。かく言文は時代を經るに從ひ益ゝ其の差を生じ、鎌倉時代に至りては、詠歌に作文に自其の法則を學ぶこと必要となり、所謂定家假字遣の如きも此の時代に成りしなり。此の定家假字遣は古格に比ぶれば用法已に亂れ、同時代の西行、寂蓮等の筆跡にも一般に假字の誤を見るなり。足利時代に至り、應仁の亂後は大に變遷を來し、戰國を經、德川時代に及び、全然言文不一致の世となり了れり。かくて文學復興の事あるまでは當時の學者にして「花こそ咲け」「花ぞ咲く」等の係結の區別をだに知らざるもの多かりき。引きつゞき現時に於いても猶依然言文兩途に分るゝ上に、日常我等の正しく文を作る爲には是非とも文法を學ばざるべからざるなり。

(2) 解釋訓詁の爲に

文章を解釋するに當りて、文法を知らざれば往々誤れる解釋を下すことあり。例へば「三笠の山に

出でし月かも」を「出テキル月」と思ひ、「名にめでゝをれるばかりぞ」を「居レル」と解し、「入らつしやる」を「居らつしやる」、「御出で」を「御居で」、「ござんなれ」を「御坐んなれ」、「御坐る」を「ござんなれ」の訛などとも強ひ、古訓古事記は「所御佩」を「ミハカセル」と訓じ、世俗又は「ねなましものを」を「ねなまじ」と濁り、催馬樂の「なりやしなまし」を橘守部の「入綾」には平氣に「しぬらし」に作り、新古今集には「雪はふりけり」を「ふりつゝ」、「衣ほしたり」を「ほすてふ」に作れるなど、皆正しく語を解せざるよりの事なり此の如き誤謬は實に枚擧に遑あらず文法に通ぜざれば到底的確なる解釋は下すべからず予は此の點において深く世人の反省を促さむとするものなり。

(3) 正しき國語を知らむが爲に

正しき國語を知らんには標準語を知らざるべからず、文法は標準語より歸納的に研究して得たるものなれば、正しき國語は又文法によりて知るを得べし吾人が日常用うる言語極めて多き中に不正の語亦多し是等は後來標準語を立つる上に於いて、文法によりて取捨せざるべからず正格の語といへどもその用、一地方に局する者は標準語と立つること能はざる物あるを忘るべからず例へば口語の「何々でござります」と「何々でおます」の如き、「ござります」は廣く一般に用るられ、「おます」は或一地方に限り用るらるゝ語なれども、文法の上より是を論ずれば「ござります」は「御坐り坐」にて重語なれば正しからず、「おます」は「御坐」にて古く「おましますす」など神皇正統記にも見えて正格なり。然れども今「ござります」を廢して「おます」を用うること能はざるが如し。

(4) 文法を知らむが爲に

文法を文法として硏究すること卽是なり、文法の目的の中、最も肝要なるものとす。かくてよく文法を知る時は巧に言語を取扱ふ事を得べく、又一般分類上の智識を得ると共に精確に論理的に事物を硏究する力を養ふべし殊に中等敎育等に於いて最此の必要あるなり。

三 文法の種類

各國語文法、比較文法、時代文法、文語文法、口語文法、方言文法、標準文法、混合文法

我が國語には其の文法あり、淸、英、獨等の國語またその文法あり是各國語文法なり、異なる國語の文法を比較するは比較文法なり。同じ國語も時代によりて相違あれば、その一時代を對象としたる時代文法あり。我が國語にては奈良文法、平安文法、鎌倉文法、江戶文法、明治文法等あるべし、されど是はいまだ著書として見るべきものなし近來僅に口語文法、文語文法の別を認むるに過ぎず。同國語中、方言の文法また無かるべからず近時數所の方言文法書出でたり、文語口語の共に標準とすべき規則を專に述べたるは標準文法ともいふべく、普通の文法書は多く之を目的とせり、我が今說かんとするは、標準文語を主として各種の語をも比較すべく一種の混合文法なり。

四 文法の三部

何種の文法にても、之を音韻文字篇、詞辭篇、文章篇の三部に分ちて說くが自然の要求なりされど中に就いて詞辭篇その中堅たるは爭ふべからず。學修する者、最意を此に致すべし。

第一篇　音字

第一章　音字

一　言語と聲音

言語は意義ある人間の聲音なり。人が思想を發表するに言語の外にも身振、手眞似、眼付などあれども、最明確なるは聲音に依る言語なり。言語は聲音に依るも、意義ある聲音ならざるべからず。(意義なき聲音は言語にあらず)さて之を記すものは文字なり。故に言語文字の間に密接の關係あるを知るべし。聲音言語は人種に依りて異なり。是各國語の起れる所以にして、言語異なれば文字も隨つて異なるは從來の大勢なり。

二　文字の種類

音字と意字との二あり。音字には成音文字、音韻字（アルハベツト）あり。成音文字とはイロハの如く一字一音を表し、音韻字とはa b cの如く數字相依りて始めて一成音を表すものなり悉曇、諺文など後者に屬す。意字は漢字及古代埃及文字の如きものなり。

我が國太古には文字はなかりしならん。所謂成音文字なる國字即ち假字は中古時代に至りて作

られしものなり我が國にて字のことを「ナ」と云ふ「ナ」とは物の符牒の意義を有す(漢字「名」と似たり故に假字をカリナカンナカナと云ふ(假字に對して漢字のことを眞字と云ふ)假字は我が國の固有の文字にして次は漢字次は擬漢字なり。擬漢字は我が國にて作れる文字にして「國字」ともいへり。辻、麿、畠、榊など其の數三四十あり(麿、粂、衞、などは日本合字とも云ふべし)假字に片假字、平假字、變體假字の三種あり。この外に合字といふものあり。二字を合して一字とせるなり。卽𪜈 片の類なりヿ及〆はコト及シテの合字にあらずして「事」及「爲」の略字なり。又符號には、、〱 ー ヘ「 」( ) ! ? ・など用ゐらる。

三 諸聲音

(1) 成音　母韻　子音

國語の聲音は五十音圖の諸音の如く皆一成音(成熟音)なり。而も之を母韻子音に分解することを得。羅馬字の如きアルフワベットを用うれば、最明瞭に之を悟り得べきが、我が假字のみにても說明せられざるにはあらず。

まづァイウエオは氣息が聲帶に觸れ顫動して起る音の口の開方の廣狹扁圓の如何によりて五つに分るゝものにて、其自身一個々々の成音とも見らるれど、又カサタハマヤラワ等諸行音に通じて根本の韻なれば、之を母韻といふ。

カキクケコの如きは氣息が聲帶を顫動して出づる時に喉頭及舌根に激し觸れ、さて前のアイウエオの場合に於ける口の開方(アキカタ)によりて成る者にて、それより母韻を除けばカキクケコの子音となる。我が國にては之を表す者なし。クよりウの母韻を除きたる者、カキクケコより母韻アイウエオを除きたる者是にして、成音クと稍相近き者なり。サ行音以下すべて之に準じて知るべし。

子音といふ語當らざるが如くなれど、慣用上之にて通ず。子音を父音と呼び、成音を子音と呼ばんといふ說もあれど、一般に通ぜず、兩者の稱を混ずべからず。

近代の口語この子音を發すること有るが如くなれども、之を表記するには從來の如く成音假字を用う。たゞ「ン」のみは子音なるが、後の撥音の所に言ふべし。

(2) 成音の種類　四あり

平短音　撥音　促音　長音

(イ)平短音　平短に發する音なり。その子音によりて又二種三類に分つ。

平短音
- 直音
- 拗音

　　清
　　濁
　　半濁

直音はアカサタナハマヤラワガザダバパの十五行の音にして、拗音はキャ　シャ　チャ　ニャ　ヒャ　ミャ　リャ　ギャ　ジャ　ヂャ　ビャ　ピャ　クヮ　グヮ　の十四行の音なり。直音はスナホに、拗音はネヂケたる音

の義なるが、發音學の上より言ふ時は隨分議論あり、ヤワ行音を拗音なるやうにいふ人もあるが如くなれども、表記文字の單直なるを直音といひ、複拗なるを拗音といふこと、習慣上より定りたりと心得て可なり通俗に言はむに、カ行音のカキクケコと拗音のキャ　キュ　キョ　クヮ　と比較せば明なるべし。

清音はその子音清澄なる者、濁音は其の清音の子音を少しく聲帶を狹めて重く鈍く發する者、半濁音は兩唇を觸れて鋭く反撥せしめて發する者なり。此の半濁音といふ名は習慣上の名にして實は不當なり。又ハ行濁音は此の半濁音を濁れるなれど、すべて慣用の名に從ふなり

拗音に於いては前述の外に近代は「オトッツァン」「ゴッツォウ」等の「ツァ」「ツォ」もあり、他にも又言ひ得る者あるべけれど、文語を主として、之を略せり。キャとクヮとの類を區別する爲に俗ながらヤ行拗音、ワ行拗音と呼ぶ事あり。

さてこの平短音の數を見るに、(音の轉訛をいはず)

清直音は五十音圖の五十
濁直音はガザダバ行の二十
半濁音はパ行の五
}計七十五

清拗音はカサタハマラ七行アウオ三列及クヮの二十二
濁拗音はガザダバ四行三列及グヮの十三
半濁音はパ行三列の三
}計三十八

通計百十三なるが、その中「ミュ」は言ひ易ければども通常の國語になし。

(ロ)**撥音**　前項の語の後（シリ）を撥（ハ）ぬる者にて、(鼻音、鼻聲などともいへり)平短音の下に「ン」「ん」を添へて之を表記し、合して一聲音なり。「ン」は單獨に發せられず。故に之を呼ぶに上にウをおきて「ウン」といふ。是文字の名なり。假字の中、發音以外の名あるは唯此のンのみなり。さて「ン」はナ行の子音の撥ねたるものと見るべし(マ行の子音亦「ン」に轉ず)直拗音百十三すべて撥音となり得べければど、國語に用ゐざるも多し。

(ハ)**促音**　直拗音平短に發せられず、その氣息口内に於いて促る者なり。之を表すに、「ツ」「つ」字を假りて平短音の右下に稍小く記す。亦合して一成音なり。而して常に下他音に接す。此の「ツ」はカサタハバ行等の子音の轉訛の如くなるが、分解せずに一成音と見なす。

(ニ)**長音**　直拗音平短に發せられず、長く引く者なり。その表記法三樣あり。

一、純粹の國語には母韻を添ふ。

ああ　いいえ　つう　せい　せえ　をを（古）等

此のオ列音なるにはオを用ゐず、ヲを用うること古書の用例なるが、新しき書には「オ」を用ゐたるもあり(コヲロ〳〵　古事記、鹽こをろこをろにかきなして　ヲヲ　源語、夢浮橋、涙のおつるを、はづかしと思ひてまぎらはしに、ををと、あらゝかに聞え居たり)など二音に發したるにはあらざるが如し)(どう　のう　おう(をう)等は新し)

二、漢字音にはイキウを添ふ。

せい(西)　へい(兵)　する(水)　こう(工)等　(紅蕉)

三、字音以外の新外國語には「ー」を添ふ。

アーチ(穹窿)　チーフー(芝罘)　ソーダ(曹達)等

近來文部省にて小學校にては漢字音の長音にも此の「ー」を用うることゝ規定せり。國民すべて之を用うる樣になるべきか、未知るべからず。この符號を特に發音を表す場合に用うることは何種の語にも差支なし。

(3)　諸音と文字

音と文字と道理上一致せざるものあり。今平短清濁直音をとりていはんに、ヤ行のイとワ行のウとは今の發音ア行のと同じく、文字も區別せられず。ヰエヱは文字は區別すれども、發音はア行のと略同じ。シチツは清濁共にやゝ拗音の如く發音せられ、從つて濁音に於いて混同生ず。フの子音はハヒヘホと異に、唇を合する所、同行ながら別種の音なり拗音も之に準ず。

	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	△シ si shi	ス	△セ se she	ソ
タ行	タ	△チ ti chi	△ツ tu tsu	テ	ト

行					
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ行	ハ h	ヒ h	フ(△) f	ヘ h	ホ h
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	𛄠(イ)	ユ	𛀀(エ)	ヨ
ラ行	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ行	ワ	ヰ	于(ウ)	ヱ	ヲ
ガ行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ行	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ行	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ行	パ	ピ	プ	ペ	ポ

四　音の變化

音の變化するは廣き音便に外ならざれども、慣例により之を五種に分つ。

1、轉呼　他音の下にてハ行の音をワ行の音に呼ぶ。（本來の國語なり）

例、あは(ワ) awa（粟）　いひ(イ) ii（飯）　いふ(ウ)（言ふ）　いへ(エ)（家）　かほ(オ)（顏）　等。

これ子音hが或はWと換り、或は默せるなり

古くは他音の上にても轉じたるものあり「わかる」(別)は「はかる」、「うり」(瓜)は「ふり」、「わしる」(走)は「はしる」、「わづか」(僅)は「はつか」より轉ぜるを見るべし、

みちのべのうまらのうれにはほまめのからまるきみを波可禮かゆかむ(萬葉二十)

アワ通用 「あがつ」「わかつ」(頒)、「わかる」「あがる」、「われ」「あれ」(我)

ハマ通用、「はだら」「まだら」、「はぐれる」「まぐれる」、「わけ」「まけ」

てにをはの「は」もすべて「わ」と發音することとなるが、或る地方には尙「ハ」と發音するもあり。

2、二短音が一長音となる 「あふ坂」の「ふ」が轉呼により「う」となり、「あう」が「おー」となるが如し。

更に之を細別すれば、

ア列音の下にウ音來ればオ列の一長音に轉呼せらる。甲(カフ)、雜(ザフ)などの字音も然り。

イ列音の下に「う」又は轉呼「ふ」ある時はウ列拗長音となる。例、邑(イー)いふ(ウ) 瓜生 桐生 萩生 等。

ウ列音なるは すふ(ウ)(吸) くふ(ウ)(食)など、或は一音なることあり、或は二音なることあり。空(クツ)の如き字音、および「くうて」(食)のクウは一長音なり。

エ列なるはオ列の一長音となる例ゑふ(イヨッ)(醉) 業(ゲフ)(ギヨウ) 今日(ケフ)(キヨー) 蝶(テフ)(チヨー) うれふ。

オ列なるは 劫(コフ)(コー) 乞(コフ) 添うて(二音を一音に讀む)

ウフの外にホチが長音となるもあり例 大(オホ) 赤穗(アカホ)(アコー) 眞岡(マヲカ) 青梅 「俗言に物を棄るをほをると云も」

(記傳二十三)

3、連聲(レンジヤウ) 撥音の下なるアヤワ三行の音が變化してナ行となり、或はマ行となる(撥音ンは舌内n唇内m)

其の一、ナ行となる(舌内n)

觀音(オン・ノン) 因緣(エン・ネン) 算用(ヨウ・ニヨウ) 輪廻(ヱ・ネ) 親和(ワ・ナ) 親愛(アイ・ナイ) 善惡(アク・ナク)

其の二、マ行となる(唇内m)

三位(ヰ・ミ) 陰陽(ヤウ・ミヤウ) (感應(オウ・ノウ) 探幽(イウ・ニユー)と呼ぶは實は誤なれども、今はそれにて通用す)

促音の下の音はタ行となる

闕腋(エキ・テキ) 舌音(オン・トン) 八音(イン・チン) 雪隱(イン・チン) 發意(イ・チ)(新發意(シンボチ))

特例ラがタとなることあり。

出來(ライ・タイ)(此の外にはなし)

右の外、似合(ア・ヤ)ふ、仕合(ハセ・ホハセ)、一越(イツ・コツ)、別役(ヤク・チヤク) 後尾(シリヲ)(シリツポ シツポ) うつちやるなどあり。

○撥音の下のハ行音

心配(パイ) 軍配 看板(バン) 甲板 勤番(バン) 印板 案配 心法(バウ) 傳法(パウ) 三把(バ) 三八(パ)(二十四)

三歩 關白 煎餅 蓮府 蓮歩 半白 按分

○促音の下のハ行

壓迫(パ)　一杯(パイ)　鬱憤(プン)　法被　切符　屈服　發布　失敗　切羽(ッパ)　出帆(シュッ)　薩兵　十把　接賓

日本　突張(ツッパル)

4、キクがカサハタ四行に接して促音となる。

此の時從來假字を變へず、ひきかく、引さぐ(ッ)、六方(リクハウ ロッポー)、獨歩(ドクホ ドッポ)、六遍(ロクヘン ロッペン)、ひきたぐる(ッ)、ひきはぐ(ッパ)、等の如し。イッカといふ假字の如き、「幾日」なるか「一荷」なるか「一個」なるか知るべからず。イクカと書けば誤ることなけれど、又「イク」を一促音に發することを表すこと能はず。現時は兩樣の表記法あるなり。

右の「3、連聲」「4、キクが……促音となる」は更に連濁、拗音(すれあ　なけあ)等と共に音便中に收むべきか。

5、音便　總べてその假字を變ふるを以て特色とす。此に四種あり。長呼い、長呼う、撥呼ん、促呼つ、是なり。

甲、長呼い　キシの二音イに轉ず。例、書(キ イ)て kakite—kaite　k の子音默す。

乙、長呼う　クヒの二音ウに轉ず。例、言(ヒ ウ)て ihite—iute　h ぬけ i が u に變ず。同じ(ク ウ)す onaziku—onaziu　k の子音默す。

丙、撥呼ん　ニミビの三音ンに轉ず。例、讀(ミテ ンデ) yomite—yomte—yonde

丁、促呼つ　チリヒの三音ッに轉ず。例、取(リ ッ)て

此の外にも此の四種に變ずる者あれども、今は最普通なるをいへり。

今更に之を他の方面より見るに、所謂音便は左の二種となる。

(a)二音が一音となるもの、此に二種あり。

其の一、子音默するもの

其の二、子音變じ、或は母音も變ずるもの

右に擧げたるは皆この(a)に屬す

(b)一短音が長撥促音となるもの

再この兩種を前四種に配して說明せんに、

甲、(a)カ行ガ行四段活より「て」「た」に接する時及形容詞の「き」イに換る。只「行く(イ)」のみ促音となる。サ行四段活も或はイに換る。增(シ/イ)て、指(シ/イ)て(上方の音)待(チ/イ)て(此は方言なり)單語にては櫂(カキ/カイ)、朔(ツキタチ/ツイタチ)、衝立(ツキタテ/ツイタテ)、同(ジ/イ)年、私(ワタシ/ワタイ)等。

(b)四時(シイジ) 詩歌(シイカ) 弑(シイ) 見(ミ)い 爲(セ)い 來(コ)い はい 見ろい あい おい やい か(疑意)い、六日(ムイカ)(昔はムユカと云ふ) ちいと きいと 等。

乙、(a)形容詞のクがウに換り又ハ行四段活より「て」「た」につゞく時ウに換る。

有り難(ク/ウ) 宜し(ク/ウ) ごきげんよ(ク/ウ) か(ク/ウ) 遑し(ク/ウ)す 全(ク/ウ) 忝(ク/ウ) 戰(ヒ/ウ)て 云(ヒ/ウ)て 思(ヒ/ウ)て

又商人(アキビト)(アキンウド) 獵人(カリヒト)(カリウド) 困(コン/コウ)ジ等もあり。

(b)夫子(フウシ)　八日(ヤウカ)　給ぶ(タウ)　さう　どう　もう(もは今なり)　行李(コウル)？(其ウ　此ウ　而して)

丙、(a)マ行バ行四段活用及ナ行變格より「て」「た」に續く時

富(ミテ/ンデ)　飛(ビテ/ンデ)　死(ニテ/ンデ)　飲(ミタ/ンダ)(ノウダは方言)　給(タビテ/ウデ)

(b)眞中(マンナカ)　ちやうわんに盛りて(大和)

假字(カリナ/カンナ)　後取(シリトリ/シンドリ)などは單語中の變なり。　件(クダン)　榛(ハン)　お(と/かん)やりなさい　分ら(ン)ない

丁、(a)ハ行タ行ラ行四段活より「て」「た」に續く時　言(ヒテ/ツテ)　立(チタ/ツタ)　取(リタ/ツタ)

(b)眞暗(マツ)(白、黑、青、直)　唯(タツタ)　きつと(急度/屹度)　さつぱり　どつさりと　しつかりと　あつぱれ

國語の音は平短音が元にして、此が變化して、或は撥音となり或は促音となり或は長音となれり

古代の言語には長音は少々ありしも、撥音促音などは全くなかりしなり。

尙次の例を考へ見よ

大船爾末加伊之自奴岐　(萬葉二十)

麻宇氣受(マウケズ)

あきちかう野はなりにけり白露のおける草葉も色かはり行く(古今物名、友則)

おほいまうちぎみ　(古今)

かちおん(勝臣)

箒　皮茸　小路　首(カミベ)　栗田(クンダ)

町刈田、我張る、一五、
岸破(太平記)、つきさく、
さかん、よん所、そんなら、とんや、けれど、かほばせ、ほとんど、かぢとり、とんび、
をん、めん、あんまり、
とつくり、やつぱり、よつほど、眞向、まかんづ、ついで、はんべる。
於毛乃末以多利、又於毛乃末以奴(侍中群要、三)
(參)

五　假字遣

現今假字遣に關して二說あり。甲、表音的假字遣、乙、語原的(又は歴史的)假字遣是なり。甲は近來の新說にして異なる字を書きて發音せしむるは惡しければ、宜しく發音通に書くべしとなり。乙は古來襲用の說なり。今この兩說に對し孰れを採用すべきかを考察するに、書く上に於いては甲法便利なるが如きも、讀む上に於いては頗る困ることあり。例へばコーテと書けば「買うて」なるか「乞うて」なるか判定し難きも、乙法に依りて「カウテ」若しくは「コウテ」と書けば一見してその意義の「買」若しくは「乞」なることを知るを得べし近時、佛國にても表音的を排斥して、やはり語原的を主張せりといふ。言語獨貴く文字は何にても好しとの說は妥當ならず。現在通用の日本語のみならず、古代の日本語をも知悉する必要あり。假字遣を表音的にするは弊多ければ、宜しく語原

的を採用すべきなり。

古も定家假字遣の如く一種の私說を立てしことあり。一體假字は語原的に記す時はツカフといふ語不當なり、假字は私にツカフべきものにあらず、有の儘に正しき古來の書方に從ふべきものなり。尤も新しき音を生じたる時は新しき表記法を定めざるべからず。

兼載雜談云「かなづかひといふことおをいゐのさかひとのみ心得たること淺き事なりかなつづけに有也。たとへば夕されればとかゝんをゆふされればと書くほどの事なり。」

第二章　漢字音

一　成立・分類及體

(1) 漢字は畫より成立つ。畫集りて字をなす。畫には｜一コ乙ノ丶の如きもの約二十五あり。

(2) 漢字を分類するに形よりすると、音よりすると二あり。形よりするものを部首といふその數約二百あり。その左にあるを偏、右にあるを旁といふ、外に冠、垂、脚等幾多の名稱あり名なきもあり。

(イ)偏　イ扌ネ丬　(ロ)旁　彡、頁　(ハ)冠　宀冖　(ニ)垂　厂广疒　(ホ)脚　辶走夊　の類なり。

(3) 體とは書體にして楷行草あり。楷書の元は隸書、隸書の元は小篆、大篆等なり

附言　漢字の漸增

後漢	許愼の說文		九三五三字
魏	李登	聲類	一、一五三〇字
晋	呂忱	字林	一、二八二四字
後魏	揚承慶ノ字統		一、三七三四字
梁	顧野王ノ玉篇		二、二七二六字
唐	廣韻		二、六一九四字
宋	集韻		五、三五二五字
明	字彙附補彙		四、五五五〇字
清	康熙字典		五、七二一六字

二　字音卽音

元、支那の語なりしを當初日本に持ち來り習ひしものにて、支那音が多少の轉訛を受けて日本の音となれる是現行の字音なり。支那にても古音は大に變轉したるを以て支那現在の音とは大に異なり。

(1)、一音なるもの、音(オン)、阿(ア)、以(イ)、馬(バ)、

(2)、二音の如く聞ゆるもの、第（ダイ）此の字は假字にて記せば二成音の如く聞ゆるも、實は一成音なり。章（シャウ）塔（タフ）の類、共に一成音なり。國（コク）kok 一（イツ）it 共に我國語にては二音に呼べど、實は一音なり。假字を幾つ用うとも、一漢字は一成音なり。一體、支那語は單綴なり字音は結局一音に過ぎず。

三　韻の假字

二個以上の假字（拗音を除く）にて表せる字音の下の韻に當るものを韻の假字と云ひ、凡そ十種あり。い、ゐ、う、む、ぬ（今は「む」「ぬ」の代に「ん」を用う）ふ、つ、く、ち、き、是なり（韻の假字といふ名は俗稱なれども便利なれば用う）

(1)、い　アエの二列音に附きてイ、ウ、オ、の三列にこれなし。

例、愛、階、大、西、禮、（「ヤイ」なし。焙（ホイ）は唐音、かはゆいは別なり）

(2)、ゐ　ウ列音のみに附く。

例　水、推、錐、鎚、對、唯、維、惟、遺、類、壘、累、

(3)、う　アイウエオの五列音に附く。

例　孝（カウ）、修（シウ）、通（ツウ）、朝（テウ）、條（デウ）、能（ノウ）、

(4)、む　m脣内、アイエオの四列音に附く。

例　感（カム）、嚴（ゴム）、三（サム）、陰（オム）、伊（イ）甚（シミ）、夷（イ）灊（シミ）（隅は轉訛）燈心（シミ）、美（ミ）甘（カミ）、紺（コム）口（ク）（河内石川郡又感玖）汗（カ）衫（ザミ）

鹽冶(エムヤ)(止屋(ヤムヤ)) (下)覃、坦、垣、咸(上)寝、感、淡、豏(去)沁、勘、艶、陷、

(5)、ぬ　n舌內、五列音に附く。

例　寒(カヌ)、元(ゲヌ)、散(サヌ)、乙訓(オトクニ)、雲梯(ウナテ)、遠敷(ヲニフ)、信濃(シナノ)、因幡(イナバ)、員辨(ヰナベ)、(眞、文、痕、寒、先、(上)軫、吻、阮、旱、潛、銑、(去)震、問、寸、翰、諫、霰) 日本の昔には「ン」の如き撥音なかりき。(盆、錢、緣、蘭、讃岐、近衞)

(6)、ふ　アイエオの四列音に附き、ウ列音にはこれなし。

例　狎(カフ)　甲(カフ)　雜(ザフ)　挿(サフ)　塔(タフ)　納豆所(ナフ)　法度(ハフ)　蠟(ラフ)　獵(レフ)　揖(イフ)　急(キフ)　吸(キフ)　集(シフ)　執(シフ)　十(シフ)　習(シフ)　蟄(チフ)　入聲(ニフ)

立(リフ)　葉(エフ)　脅(ケフ)　怯(ケフ)　業(ゲフ)　接(セフ)　妾(セフ)　攝(セフ)　聶政(セフ)　葉公(セフ)　蝶(テフ)　貼(テフ)　法師(ホ)　刧(コフ)　鴨綠江(カフ)(アリナレ)

漢字に四聲とて平、上(アガル)、去(サガル)、入(ツマル)の四韻あるが、い、ゐ、う、ん、は平上去の三聲に混入すれども、ふ以下の五韻は入聲の韻に限る。

(7)、つ　ち　五列音に附く。ツは漢音、チは吳音なり。

例　一(イツ/イチ)　切(セツ/セチ)　罰(バツ/バチ)　喝(カツ)　屈(クツ)　骨(コツ)

(8)、く　き　五列音に附く。

例　惡(アク)、郁(イク)、福(フク)、役(エキ/ヤク)、益(エキ/ヤク)　德(トク)

う韻は原音のuとngとを合す。(喉內)上(シヤウ/シヤン) shau—shang 廣(クワウ/クワン) kwau—kwang 東(トウ/トン) tou—tong 三內とは喉內唇內及舌內を云ふ。

四　音韻

短韻五、長韻八、撥韻九、促韻二十、合計四十二韻あり。(是は前の「韻の假字」といふ如き俗稱にあらず)左の如し。

1、短韻、a　i　u　e　o

2、長韻、ai　ei　ui (uwi)　au　iu　uu　eu　ou

3、撥韻、an　in　un　en　on　am　im　em　om

4、促韻、ap　ip　ep　op　aku　iku　uku　oku　iki　eki　atu　itu　utu　etu　otu　ati　iti　uti　eti　oti

さて之に附く子音(コンソナント)換言すれば四十二韻に對する子音(字母)は直拗の清、濁、半濁を合せて二十八音あれば、道理上一千百七十六種の發音をなし得らるべきも、實際それだけなく、假字書の字音約四百六十ある中、現今の發音に隨へば連濁を合せて僅に三百七十七音あるのみにして、過半數は音韻の組合せ出來ざるなり。

附言1、mim なきにより min 是をみゝともかり、任もにむなるをみまとかる。

2、陸法言は二百六韻とし、南宋の劉淵約して百七韻(平、上、去三十づゝ入十七)とし、清の毛奇齢百六韻とす北京官話は百六七十種の音よりなる。

五　字音の種類

漢音、呉音、及唐音あり。日本に早く傳りしは呉音なりといひ、或は又漢音なりともいふ。漢音は支那北方の音にして、呉音は南方の音なるが、繼體天皇の朝に支那より佛經を持來りしは南方の人なりしかば、呉音の方早かりしなるべきか。次いで北方の漢音來り、兩音混淆せしかば、奈良朝より儒書は漢音にて、佛書は呉音にて之を讀ましめたり。かくて漢字は大抵漢音呉音の二種を有す。今儒書を讀むに呉音の混ぜるは戰國時代に五山の僧侶儒書を傳へしにも因るべし。漢字は同音にして異義なるもの多きが、支那は一音に對し四聲を具ふるも、我が國にはこれなき代に、漢音呉音の別あるは實際上便利なりともいふべし。唐音とは當時に於ける支那音にして宋以後の新舶來音をいふ。黄檗宗にては讀經に明音を用うと云ふ。

例、「日」の字漢音ジツ呉音ニチ、　昨日(ジツ)　今日(ニチ)　唐音にて、　普請(シン)(鎌倉時代よりの語)　外郎(ウキ)(員外郎が賣り出しし藥)　行宮(アン)　行燈(アン)　看經(カンキン)　明(ミン)　淸(シン)

漢呉音を比較すれば其の種類大略左の如し、(漢音は右に記し呉音は左に記す)

1、淸と濁、

大(タイ／ダイ)　治(チ／ヂ)　十(シフ／ジフ)　時(シ／ジ)　現(ケン／ゲン)　顯(ケン／ゲン)　彦(ケン／ゲン)　上(シヤウ／ジヤウ)　貧　凡　土　神　讀

2、ザ行とナ行、

二 兒 壬 忍 人 肉 弱 若 如 入(ジュは轉訛) 繞 然

3、ダ行とナ行、

男 乃 內 諾 女 溺 納 農 娘 年 難 娜 尼

4、バ行とマ行、

馬 美 武 免 苗 目 木

5、長韻と短韻、

ai と e、外 悔 愛 埃 會

ou と u、功 工 貢 豆 頭 奉 封 豐 謀 某 樓 丯(邦) 逢 蜂

iu と u、有 九 求 宮 洲 修 流 留

you と u、供 凶

uu と u、數

6、直音 ak ek au。ei ak a と拗音 iak iau iok ia。

格 客 隔 益 役 嫡 尺 寂 釋 歷 行 莊 享 杏(唐音にて杏子、銀杏) 永 京

形 刑 慶 生 性 青 貞 定 明 名 冥 令 濁 沙 差

7、拗音 io iau iou iok と直音 o au ou ik

所 處 居 去 御 呂 相 向 香 强 鄕 象 像 興 矜 極 續 億 食 式

軾　色　職　直　辱　燭　緑

8、クヮ行とワ行、

囘　淮　穢　黄　皇　横　丸（萬十一相狹丸）

（附）狎　恵（霍亂）

○漢呉同音　鴨　楷

9、短韻列の變、

a と e、下　家　夏　牙　假（馬　亞）　i と o、己（古音）期　棊　a と o、个（箇、個）　賈

i と e、衣　依　是　氣　o と u、父　都　奴　五　歩　（附）維　惟

10、長韻（i）ai と ei

西　體　弟　第　米　帝　禮　宰　才　綵

11、長韻（u）au と eu、au と ou、ou と uu、iou と iuu、eu と iu、

包　雹　拗　孝　教　校　交　江　講　巷　通　桶　痛　勇　用　重

12、撥音（n m）an と en、in en と on、en と an、am と om、an と on、un と on、

間　限　監　還　諌　山　品　今　近　金　音　慇懃　飲食　權　建　献　言語　元

紺　含　感　反　煩　文　聞

13、促韻（p）（f）、ap と op、ap と ep、ep と op、

法度　法師　夾峽　業劫　脅

14、促韻つち(t)　at と ot、it と ot、ut と ot、et と at、et と ot、at と et、

發乙物沒月越殺（附）別節結切罰達鉢撥一逸律筆

七質八埒

15、促韻くき(k)　ak ik と ok、ak ek と iak、

濁啄六陸格億昔益

六　字音假字遣

ツカフことの論、前章國語のと同じ。是は個々の字につきて之を知る外に途なきが、大數をいへば左の如し。

1、**オー**〔**アウ**〕央殃鞅鴦盎奧襖媼櫻　鶯鸚嬰（櫻以下呉音イヤウ）　拗（呉音エウ）　〔**オウ**〕應謳嘔鷗甌歐　〔**アフ**〕狎鴨押壓凹　〔**ワフ**〕王往枉旺汪尩皇凰黄横（皇以下漢音クワウ）　泓　〔**ヲウ**〕翁甕瓮雄嫗

2、**コー**（附**ゴー**）　〔カウ〕高稿鎬豪膏告浩羔皐翺槹好考號昊顥杲岡綱剛鋼康糠亢抗航昂仰向香郷强庚坑行衡更梗硬享杏羹幸耕耿鏗莖肴殽膠爻交郊效校挍孝教巧江項講巷降（江以下呉音コウ）　迎など百三十餘字　〔コウ〕公空控孔工功紅攻虹貢鴻洪口扣叩吼垢苟鉤寇厚侯候喉后後恒肯肱薨弘興など七十餘　〔**カフ**〕合蛤閤洽恰夾峽盍闔甲匣　〔**コフ**〕業劫怯脅（呉音ケフ）　〔**クワウ**〕光晃恍觥廣曠荒宏

轟嶸惶蝗篁など二十有餘

3、ソー（附ゾー） 〔サウ〕早草造曹漕遭操藻蚤騷嫂艘棗掃倉滄藏桑奘葬喪壯莊裝妝床相想箱廂爽象像爭傖諍 壯以下漢吳音の別にてシヤウとも 梢稍爪抓抄鈔巢鏁 雙以下吳音セウ 雙双淙牕窻 雙以下吳音ソウ など〔ソウ〕聰總送樓叢崇宗宋走叟奏湊藪漱 以上吳音シユ、ス 曾僧增贈層憎など 〔サフ〕雜帀颯插など。

4、トー（附ドー） 〔タウ〕打橙 以上吳チヤウ 棹 吳音テウ 橈 吳音ネウ 幢 吳音トウ 稻蹈滔刀叨桃逃到倒道導濤禱陶討島悼盜蘘唐塘糖當堂棠黨儻湯蕩宕菪など 〔トウ〕東凍棟同洞銅筒桐童董動慟僮瞳通痛桶冬彤統豆逗頭鬪偸透兜竇登燈磴滕藤騰など 〔タフ〕答塔沓踏納榻蹋

5、ノー 〔ナウ〕腦惱瑙囊曩 以上漢タウ 〔ノウ〕農濃膿能 以上漢ドウ 〔ナフ〕納衲 二字漢ダフ

6、ホー（附ボー） 〔ハウ〕保褒襃寶報抱袍暴方芳房防訪彷妨坊放髣傍榜毛毫冒帽亡茫莽妄罔望芒邙忘 毛以下吳マウ 亨烹彭棚 以上吳ヒヤウ 盲甿孟猛 以上吳マウ又ミヤウ 包苞庖疱胞飽鮑豹 以上吳ヘウ 茅卯昴貌 以上吳メウ 邦龐蚌 以上吳ホウ 尨厖 以上吳モウ など 〔ホウ〕蓬鳳豐封峰逢烽鋒縫奉捧棒俸部菩棓捊仆 以上吳フ 夢蒙蠓瞢 以上吳ム又モウ 戊茂矛牟眸 以上吳ム又モ 朋崩鵬謀 〔ハフ〕乏法 二字吳音ホフ

7、モー 〔マウ〕網魍毛帽など二十許 〔モウ〕蒙艨朦 以上漢ボウ

8、ヨー 〔ヤウ〕陽楊揚煬羊洋佯痒養樣恙央影瓔永 三字吳エイ 〔ヨウ〕用甬俑勇踊容蓉庸雍擁邕癰膺鷹蠅孕媵 〔エウ〕幼拗窈遙搖謠瑤陶姚要腰曜燿耀夭妖殀杳幺など 〔エフ〕葉曄燁魘

9、ロー 〔ラウ〕老牢勞郎朗廊浪狼琅稂潦醪 〔ロウ〕籠瀧朧聾壟瓏隴弄婁樓縷鏤艛螻髏陋漏

〔**ラフ**〕拉臘蠟

10、**キヨー**〔附**ギヨー**〕　〔**キヤウ**〕薑姜彊疆羌強繈享鄉饗響行更京卿敬慶竟鏡競頃兄經形刑匡筐狂誑況貺怳など五十許　〔**キヨウ**〕共供拱恭蛬恐蛩凶匈胷龔顒興矜兢凝　〔**ケウ**〕肴交校孝樂喬驕嬌矯橋堯驍曉翹澆叫竅徼梟　〔**ケフ**〕業怯叶協夾俠挾頰狹愜など

11、**ジヨー**〔附**ジヨー**〕　〔**シヤウ**〕章樟障彰昌唱菖倡尙商常掌敞嘗賞裳將醬漿牆詳庠翔匠餉傷觴殤上莊相湘襄讓穰壤釀淸情精請生性姓牲笙正政鉦成城誠盛淨靜井省聲聖靑晶星猩醒など六十餘〔**シヨウ**〕鍾鐘種腫衝誦松訟頌從縱蹤舂悚竦茸冗稱升昇證勝丞蒸承繩乘仍など　〔**セウ**〕梢抄召昭招邵詔沼紹詔照小少肖宵消蛸銷硝逍焦蕉樵醮笑椒燒蕘繞擾蕭簫嘯瀟　〔**セフ**〕妾接攝捷睫婕涉葉燮屑など

12、**チヨー**〔附**ヂヨー**〕　〔**チヤウ**〕長張帳脹漲丈仗杖場暢腸昶瓺娘孃釀三字呉ニヤウ　貞丁町頂定錠聽廳停挺　〔**チヨウ**〕重冢寵濃醲穠徵懲澄　〔**テウ**〕朝潮兆晁超迢貂趙挑誂窕眺調凋蜩鯛彫鵰鳥蔦弔條刁釣肇糶鼂尿溺嬈嬲四字呉ネウ　〔**テフ**〕帖貼牒蝶疊輒聶捻呉音ネフ

13、**ニヨー**　〔**ニヤウ**〕孃娘　〔**ネウ**〕嬈尿など　〔**ネフ**〕捻

14、**ヒヨー**〔附**ビヨー**〕　〔**ヒヤウ**〕平評丙病並幷瓶屛兵　〔**ヒヨウ**〕氷憑　〔**ヘウ**〕豹表俵票標漂膘瘭瓢飄鏢猋飆苗廟眇謬繆二字轉音

15、**ミヨー**　〔**ミヤウ**〕明名冥命鳴猛など　〔**メウ**〕妙猫など

16、**リヨー**　〔**リヤウ**〕良兩亮梁粱量糧凉涼魎令靈など　〔**リヨウ**〕龍菱陵凌綾稜楞、〔**レウ**〕了聊料
寮燎繚療僚鐐廖蓼など　〔**レフ**〕獵鬣

17、**ユー**　〔**イウ**〕尤郵幽憂優由油柚遊猶猷攸悠酉卣誘有宥囿又友右祐　〔**ユウ**〕勇雄熊融裕など
〔**イフ**〕邑挹揖熠（シフ）

18、**キュー**（附**ギュー**）　〔**キウ**〕九鳩仇久灸咎柩臼舅舊求裘毬救究丘糾蚯糺廐休朽弓躬窮宮牛
〔**キフ**〕急及汲吸笈給泣翕歙

19、**シュー**（附**ジュー**）　〔**シウ**〕周秋愁啾秀州洲酬囚酋遒收蒐臭袖岫醜讎舟羞繡獸修首授受就酒
手守狩聚驟柔蹂衆終充嵩螽戎從縱主など　衆以下シュウなれど通用す　〔**シフ**〕十什汁拾入摺褶執集緝楫葺輯澀
濕襲

20、**チュー**（附**ヂュー**）　〔**チウ**〕宙抽紬冑丑紐肘紂酎籌疇晝稠惆中仲沖忡忠蟲衷重柱拄注註駐住
株誅蛛廚躕頭偸　中以下チュウなれど通用す　〔**チフ**〕蟄縶

21、**ニュー**　〔**ニウ**〕柔乳　〔**ニフ**〕入

22、**ヒュー**（附**ビュー**）　〔**ヒウ**〕彪謬繆

23、**リュー**　〔**リウ**〕留溜騮柳劉流旒隆龍　〔**リフ**〕立笠粒

24、**イ**、**ヰ**　〔**イ**〕伊以異怡易已移夷肄貽詒倚頤圯彝　矣意懿衣依扆　〔**ヰ**〕爲韋位威謂渭偉委萎尉
惟維唯帷遺逶恚鮪違圍闈慰畏胃彙葦　〔**ヰキ**〕域棫閾　〔**イク**〕育昱郁彧など　〔**イツ**〕乙一壹逸佚溢佾

〔井ツ〕聿鴥 〔イン〕殷慇隱音飲陰蔭 以上呉オン 因姻茵氤寅湮禋印引蚓胤淫婬 〔井ン〕尹允匀筠韻殞隕員院

25、エ、ヱ 〔エ〕哀埃愛衣依 〔ヱ〕隈磯囘會繪淮壞廻畫烏 〔エイ〕英霙嬰纓癭盈楹瀛瀛贏影郢映榮營瑩永詠泳穎翳曳洩裔泄銳容叡 〔ヱイ〕衛 〔エキ〕益亦奕易液腋掖繹驛懌斁役疫 〔エツ〕謁噎咽悅閱〔ヱツ〕越粤曰鉞 〔エン〕煙宴燕讌堰偃鹽炎琰奄淹簷厭閻艷延演焉衍羨沿鉛鳶捐緣など 〔ヱン〕袁遠轅猿園爰援猨湲宛苑怨婉鴛垣寃 以上呉音オン 淵瑗媛圓

26、オ、ヲ 〔オ〕於飫など 〔ヲ〕烏塢惡乎など 〔オク〕憶臆億 〔ヲク〕屋 〔オツ〕乙 〔ヲツ〕越膃 〔オン〕恩隱音など 〔ヲン〕溫蘊穩袁など

27、ジ、ヂ 〔ジ〕自次辭慈事字寺侍時恃似姒二貳耳餌兒爾邇尒而 〔ヂ〕治持痔尼膩儞など 〔ジキ〕食 〔ヂキ〕直 〔ジク〕熟肉 〔ヂク〕竺軸舳衄 〔ジツ〕實日 〔ヂツ〕昵暱帙 〔ジン〕甚尋腎盡迅訊人仁及忍仭壬任姙袵荏 〔ヂン〕陣沈塵

28、ズ、ヅ 〔ズ〕受從など 〔ヅ〕豆頭圖途徒杜 〔ズ井〕隋隨髓瑞蘂

29、ジヤ、ヂヤ 〔ジヤ〕蛇邪闍麝 〔ジヤク〕寂雀若弱鵲昔 〔ヂヤク〕著

30、ジユ、ヂユ 〔ジユ〕樹壽受豎需儒孺濡入〔ヂユ〕、 〔ジユク〕粥熟塾 〔ジユツ〕述術秫戌恤 〔ヂユツ〕求怵 〔ジユン〕淳惇准盾閏順旬巡純遵など

31、ジヨ、ヂヨ 〔ジヨ〕序敍徐舒助鋤恕絮如汝茹筎 〔ヂヨ〕除杼女絮 兩音あるなり 〔ジヨク〕辱蓐褥 〔ヂヨク〕濁

第二篇　詞辭

第三章　言語の分類

一　分類の標準

言語を分類するに、一は形態上よりし、一は性質・職掌上よりす。

(1) 形態上の分類

是我が國古來の分類法にして、主として語尾變化の有無により分てるものなり。卽ち左の如し。

- 詞辭
  - 獨立詞
    - 體言
      - 廣義
        - 狹義：名詞・代名詞
        - 副詞・感動詞・接續詞
    - 用言
      - 狹義：動詞・形容詞
      - 副詞・接續詞
  - 附屬辭—助辭
    - 助用言（動助辭）—助動詞
    - 助體言（靜助辭）—てにをは

獨立詞は獨立にて意義あるもの、附屬辭は獨立にて意義なきものなり。獨立詞は更に語尾變化の有無により、體言と用言とに分つ。昔は詞辭の分類單純なりしかば體言を名詞・代名詞とし、用言を

動詞・形容詞とし、他の副詞接續詞感動詞等は寧、問題外として、分類せられざりしなり。文法の學漸く進み分類亦隨つて複雜となるに及び、副詞接續詞感動詞等もその形態上よりそれ〴〵分類せらるゝに至れるが、是意義の分類にして、此等を體言用言に配する意義古と異なり。

(2) 性質職掌上の分類

この分類法はその初、蘭學者等が外國の書を讀むに當り、彼我東西文法の對比より起れるものなり。

甲 獨立詞

名詞	事物の名
代名詞	名詞の代用(代指)
動詞	動作
形容詞	性狀
副詞	動作狀態を修飾定限す
接續詞	語、句、文をつなぐ
感動詞	感動

乙 附屬辭

助動詞	又は動助辭ともいひ、形の變化あるものなり。動詞の意義を補ふ。他詞の意義を補ふものあり。
てにをは	又靜助辭ともいひ、形の變化なきものなり。諸詞に附きて關係感嘆を表す。疑問の「てにをは」は廣義に於て感嘆の中に入る。

二　詞辭

上に述べたる標準によりて言語は七詞二辭に分つ。

(1) 獨立詞

各論に至り詳論すべきを以て爰に之を論ぜず。

(2) 附屬辭

甲　助動詞(動助辭)

(イ) 動詞に附くもの

相 {被　る、らる / 使　す、さす、しむ}

打消　ず、じ

時 {完了　つ、ぬ、たり / 過去　き、けり}

推量(想像)　む、べし、まじ、まし、らむ、らし、めり、けむ

希望　たし

(ロ) 名詞(或は代名詞)に附くもの

指定　なり、たり

從來「ごとし」といふ語を比況の助動詞として扱ひたれど、こは形容詞に屬すべきものにして、助動詞にはあらず後の形容詞の所に詳論すべし。

乙

てにをは（靜助辭）（村上織部「助辭」といふ名を用ふ。殘夢は「綴目」）

古く漢文を讀む便法として漢字の四隅に圈點を附し、以て「てにをは」等に讀み分けたり之を「をこと」點といへり即ち左の如し。

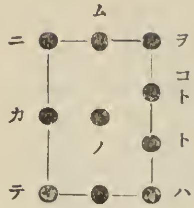
點圖

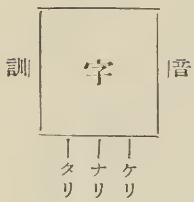


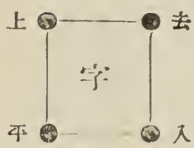
例へば學時之と書きて「學びて、時に之を」と讀むなり

「てにをは」の稱、此より起れり（栂尾道敏明和七年「網引綱」三卷を著して之を斷言す）

（註）中右記云寛治元年十二月壬寅今日未剋許有㆓御書始事㆒以㆓式部權大輔正家朝臣㆒爲㆓侍讀㆒以㆓左大弁敦宗㆒爲㆓荷復㆒其儀如㆑式云々件三點圖正家朝臣御書始所註進也白色紙小作子書付之無表紙







（案ズルニ之明經家ノ點也）

（イ）名詞（或は代名詞）に附くもの
　が、の、に、を、へ、と、より、から、まで（つ）
（ロ）動詞に附くもの
　ば、ども、とも、て、つつ、を、に、も、が（と）
（ハ）諸詞に附くもの
　は、も、ぞ、や、か、なむ、こそ、のみ、ばかり、すら、だに、さへ、かし、よ、
　な、がな、し

右は「てにをは」を所屬の詞によりて分てるものなるが、更に其の意義によりて分つときは左の如し。
（イ）關係の「てにをは」　名詞に附くものは格を表し、動詞に附くものは法を表す。
（ロ）感嘆の「てにをは」「はも」の類にして本來感嘆よりおこり、轉じては諸種の意義を有するに至れり。
（ハ）添意の「てにをは」

（項ヲ設ケタルノミニテ說明ナシ――編者）

三　接頭尾語

接頭語は他語の頭に接し、接尾語は他語の尾に接して、一詞となり、夫々意義を添ふる語なり。

例へば我らは、初春、かなしさ、(古いの、にひなの(出雲)の如し。

古は之を冠(カムリ)、沓(クツ)などともいひたり。獨立詞にもあらず、附屬辭にもあらず、他の獨立詞に附屬してなほ一獨立詞をなす所注意すべし廣日本文典に概略擧げたれば就きて見るべし但接尾語につきては隨分むづかしき問題あれど今は言はず。

第四章　名詞　代名詞

一　名詞の種類

(甲)名詞を大別して次の二種とす。

(イ)普通名詞

(ロ)固有名詞

普通名詞は一種屬に通じて用ゐらるゝも、固有名詞は一々個々の名なり。かつ無意義にして命名の自由あり、換言すれば普通名詞は國語によりて自然になれるに、固有名詞は特別故意的に命名せられたるものなり。

さて固有名詞は個々の名なりといへば、「源」の如き氏の一族に通ずるものは普通名詞なりやとの疑起るべし、されど「源」「平」などいふは別に確なる意義あるにあらず、かつ一團體の特別固有の

名なるを以て、之を一種に通ずるものとせずして、なほ一個體に附せられたる名とすべく、從つて固有名詞とせざるべからず。もと普通名詞は一種屬の名なれど、時として唯一個の名にして猶且通名詞なるものあり。例へば「日」の如し。「日」は天空に唯一個存在するも「日」といふ名普は故意的命名等の性質なく自然にいひたる名にて、もし二つ以上の日現ればなほ皆之を「日」といふべければその普通名詞たること明なり。

固有名詞は一面に必普通の名あり、普通名詞は必しも固有の名あらず。固有名詞「日本」「富士」「秀吉」「小鳥」「磨墨」等は普通名詞「國」「山」「人」「刀」「馬」等の固有の名なれど、未開の地には命名せられざる山川あり、野蠻人には名と稱すべきものを有せざるもあり、畜類、動物、植物、器具等には通常固有の名を命ぜられざるが如し。而して固有名詞は多くは普通名詞又はその他の詞より轉來せる者なるが、更に普通名詞に變ずることあり。玆に又記すべきは普通固有共にその名に廣狭ある事なり。「生物」「動物」「鳥」「雀」は等しく普通名詞にして、「源」「足利」も共に固有名詞なるが如し。又「書」「歌書」は普通なるが、「萬葉集」は固有なり。今萬葉集は版本、幾千萬部ありとも普通にあらず。又「團十郎」といふ名、幾人に命ぜらるとも固有たるを失はず。こゝに於て普通固有の別は事物の數に關せざるを知るべし。なほ普通名詞は別國語に飜譯し得べきも、固有名詞は然らず。

性質を表す普通名詞

半平、三助、唐傘、天竺あふひ、くれなゐ、メリケン粉、朝鮮あさがほ、高野豆腐、和蘭

いちご、東コート、東鄕下駄、パナマ、備後表、七島、小倉織、博多、チヤウ、甲斐絹、丸善いんき

命名の自由。

普通名詞　隱元、南禪寺、サツマガスリ（ネルソンは英の東鄕なり　西鄕も西鄕だ……）

固有名詞　正宗、白鷹、ダイヤモンド

(乙)次に成立より之を見れば

(い)本來名詞　例　國(クニ)、山(ヤマ)、人(ヒト)、日(ヒ)、源(ミナモト)

(ろ)拔萃名詞(又抽象)　例　戰、働(ハタラキ)、仁、忠、平(タヒラ)

に別ち得べし。(い)は本來のものなれど、(ろ)は他の語より轉じたるものにして、動作又は性狀より抽象拔萃し來れる名なり。

一つ、二本、三戸は個數、四里、五尺、六圓は名數、七つめ、第八、九番は序數、ひとふたは語根とも接頭語とも云ふべし。　數詞は種々の用法あれども、本來は名詞といふべし。

右の外に無形名詞、有形名詞、集合名詞、物質名詞等の名あれど、無形有形は事實上のことにして言語上の事にあらざれば贅名なり。集合物質は數の關係のやかましき西洋語には入用なるも、日本文法には不用なり。

附言　熟語の名詞を構成上より見れば

(1)並列せるもの　あけくれ　ゆきかへり

(2)修飾語を有するもの　（修）衣手　うき世　あひ見る　とき洗衣　ねざめ　千鳥　川原

手向　なる神

(3)接頭語を有するもの

(4)接尾語を有するもの　川上（尾）　川下

(5)客語を有するもの　日ぐらし（客）　物いひ　宮守　文通（カヨハシ）

(6)主語を有するもの　（主）夜あけ　雲居の如し。なほこは一般の熟語につきても「こぎかくる」（修）

「ちりみだる」（修）「文通す」（客）「心細し」（主）「渦まく」（主）などと見るべし。

二　代名詞の種類、稱、成立

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	これ	それ	かれ	いづれ　なに（それ）
場所	こゝ	そこ	かしこ	いづこ
方角	こち　こなた	そち　そなた	あち　（かぁ）あなた	いづかた、いづち　どなた

何ごとをいかに思ふとなけれどもたもとかわかぬ秋の夕暮　（續後撰）

どこ、どれ(梁塵秘抄)　どこ山伏(義經記)

ココ、コチ等は語源には名詞を含み居れど、職掌上之を代名詞とす。而して廣義にいふ時は場所も方角も事物の中なり。

事物の不定稱、「いづれ」と「なに」とは少しく異なり。「いづれなるか」と人の問ふ時は必ず「これ」等の代名詞にて答ふるなれど、「なになるか」と聞けば、多く代名詞を用ゐずして、名詞を以て之に答ふべし。

不定稱は之を「疑問」といふ人あれど、よろしからず。疑にも問にもあらず、只物を汎く不定に指すことあり。不定といへば疑問をも含むなり。

人代名詞

第一人稱自稱	第二人稱對稱	第三人稱他稱	不定稱
われ	なれ	(ワレ)	たれ
わ儕(なみ)	なむぢ	こ・そ・か れ	それがし
(オノレ)	(オノレ)	(オノレ)	
(オレ)	(キミ)	この・その・かの もの・人・方	
(ワタクシ)	(アナタ)		
手前	御前		

まろ それがし やつがれ わ文字 自身 自分	あ(紀州野上) ワタクシ ソレガシ ミ ワレラ ミドモ 身共ラ ミヅカラ ワラハ ワガミ
おこと そ文字 貴様 御身	な(長岡の奥) ワシ(出雲) オレサマ ワレメガ メガ ソナタ ソナタサニ ソノ方 コナタ(貴所貴方) コナタサマ(貴殿御邊)
こ・そ・か ｝奴 か・くれ ｝がし それがし(卑)	

サヌキ典侍「黑戸の道をおれ(朕)らしらぬに教へよ」

大日孁貴此之於保比屢咩能武智。むち。こゝは獨立詞みことと同じ

汝(シ)が身のほど(落窪下)

しがあれば(記)　しがつくる(紀)

しがなけば(紀)

間もなく我に歸る

おれは何事いふぞ(宇拾十)

私の茅屋に御入候て　(太平記三十三)

わたくしらは云　(義經記)

貞任　紹巴ヲ　御手前

紹巴　貞任ヲ　おこと　(戴恩記)

あつぱれおのれは日本一の剛の者とくんでうず{よなうれ。/なり(山田校本)}(平家、實盛)

いざうれ源太(平家二度の懸)

やうれ夷のくなたぶれ(平田)

やノ延ナリやをれトモ(靈の眞柱)

「しやつ」は「しやつ」か「そやつ」か

「なむぢ」の「な」は本來、「むち」は大己貴などの「むち」の如く、敬語の接尾語なり。それ今は敬意を失へり。「わたくし」も亦轉じたるものにて、主上を國家、公など申すに對して臣下が自稱せしより來れり。「きみ」は名詞より、「あなた」は方角の遠稱より、「手前」「御前」「まろ」「自身」「自分」なども皆名詞より來

れり。「それがし」の「それ」は事物の不定稱なり。「もじ」「さま」などは名詞より轉じたる接尾語なり。
「先生」「宅」「宿」などは名詞なり。
第三人稱には全く本來の代名詞なく、他より轉用し、近、中、遠の別あり。是國語の一大特徴なり。漢文入りてこの語法少しく亂され、歐文入りてその直譯の爲に著しく亂されたり。國文を學ぶものの最注意せざるべからず。「そ(こ)れ」「そ(こ)の人」「そ(こ)の君」などいふべきを「かれ」と指して怪まぬ人多し。

三　數及敬語

(1) 數、　日本語には正確に數を表すことなし。唯複數を表すには、
(イ) 接尾語「ら」「ども」「方」「達」等をそふ。　東ら、西ら（畿內、中國）　是の如き等の（アミダ經訓）熟語としてつけるなり
(ロ) 接頭語「諸(ショ)」「幾(イク)」などをそふ。「諸人」「幾世」の如し。
(ハ) 語をたゝむ。「われ〳〵」「人々」「山々」「木々」
されど複數にても此等の形をなさぬものあり。又この形の複數が、常に複數のみを表さずして單數をもいふ事あり。かゝるものは「の如きもの」「など」などの汎稱の意となりて謙遜の意を含む。
謙遜　わたくしども　我等　人どち（相互）　子ども　おいら　みども
(2) 敬語、　名詞代名詞の敬語は動詞のと異にして、比較的簡單なり。

（イ）本來の敬語としては、

君、すめらぎ、あなた

の如し。

又接尾語接頭語を附して敬語を表すもの甚多し。

（ロ）接頭語

御（み、ぎょ、ご）　おほみ〔御身 大身〕—おほん—おん—お（平安朝ノおハお前、おもと、おもの、おまし、おとど、

お身（記）　宇都志意身（記、雄略）

みはかせ（御佩刀）　おほみき（酒）　おみ帶

「おみ輿」「おみ酒」などはミコシミキにて敬語なるに、俗人之を忘れて更に「お」を添へたるものなるが、「おみ帶」「おみおつけ（汁）」「おみあし（足）」の如きは敬語を重ねたるにはあらで、口調その他の要求よりオミコシ、オミキ等の「おみ」を添へたるなり。

御みきのみだれさせ給ひにしなり（大鏡、道隆）　かゝりける御佛を少しにてもおろかなりけんは（落窪四）　現御神（續紀）　明御神（出雲神賀）

又「お」を人の名の上に附す。

お（阿）花、　お仙（仙千代丸といふ本多作左衞門の男なり）

是等は寧ろ敬語にあらずして親愛美稱なり。

(ハ)接尾語

女御、父御、嫁御、(是こそ殿の父御下野殿の御首よ(平家長門本)の如きあり殿、樣、君、公などを添へて敬語とするあり。「殿」はもと「宮」「殿」の「殿」にて、人を直に指さずして、その居處をいひて敬ふなり。「樣」は「有樣」の「樣」、またその主體を直接に指稱せざるなり。但「足利殿」といへば殿は接尾語なれども、「保元物語」などの「高松殿」「白河殿」といふ殿は名詞なることに注意すべし。又敬語として獨立に「殿」と用うる時は接尾語にあらずして名詞なり。

「陛下」「殿下」「閣下」「足下」は二人稱の接尾語なり、然るに「閣下」より以上は今三人稱にも用ゐらるゝ甚しきに至つては「殿下」を一人稱に用ゐしことあり秀吉の如し(殿下を三人稱に用ゐしことは頗る古し)なほ天子樣と先生樣との比較も面白かるべし。

「御」と「樣」とは所有者を敬すると、主體を敬するとの異あり。

天子さま(主體)　あなたの御帽子(所有者を敬して)

御人、御方、御客、御神人樣、御僧(忠度ニ二三處アリ)など轉用と見るべきか。

この區別往々忘却せられ、濫用せらるゝことあり。他の母なる人をその子に對して「御母上樣」といふはよし、おのれの母に對して「御母上樣」といふは大なる誤なれど、今の慣用よりいへば一種の特例として許容せざるべからざらん。

かみさま、若君樣（義經記）、公方樣富士御覽（雅世富士紀行）、六波羅樣（平家）、禁裏樣（康富記）、公方樣（園大曆）、かんの殿（玉葛内侍ヲ）（源氏）、關白殿攝政殿と御前にていふ（海人藻芥）、父（ヒコ）さま、花子さま、おきく樣（狂言記）、（司馬相如が諭巴蜀檄に陛下を三人稱に用ゐたり）

女名のき。

いぬき（後戀）、昔の承香殿のあこき（後秋下）、いぬき（源）、あてき（葵）、あれき（竹川）、こもき（手習、及順集）みゆき、ほめき、すいき（榮花、みはてぬ夢）、あとき（落窪）、たてき、あやき（空穗、藤原君）

四　格

格とは位格の義なり。名詞代名詞が文中にて、他の詞に對して如何なる位にあるか、その位をいふなり例へば

甲乙うつ

といふ文は、

1、甲ト乙トガうつ
2、甲ガ乙ヲうつ
3、甲ヲ乙ガうつ
4、甲ト乙トヲうつ

といふが如く、格一定せざれば、その意味明瞭ならざるを以て、格を確定し置かざるべからざるなり。

格を分ちて左の七種とす。

一、主格　二、領格　三、副格　四、處置格　五、呼格　六、同格　七、並立格

(1)主格　は文の中にて、動詞、形容詞若しくは他詞の主となるものなり。

(イ)てにをはなきもの

花（主）{さく／美し}　　われ（主）{ゆくべし／男なり}

(ロ)がのを添ふ

汝が（主）いふ所は　　鶯のなく

鳥がなく

がの共に詠歎的婉曲にするものにして、その係る詞の下に名詞あるを例とし（換言すれば連體語の主となる）然らざるは極めて少數なり。古文乃至近文にても、がの意義稍認識せらる而してのはがよりも多く用ゐらるれども、今代口語に比すれば極めて少し。口語にては、主格はがを添ふるを本則とし、のを添へたるものは文語の本項の用法をなす。「雨が降る」「雨の降る日」の如し（漢文讀には下に體言なき主格のがなし）

(ハ)はもぞやかの類（なむ、し、こそ、だに、すら、さへ、のみ、ばかり）を添ふ。

是等は皆自ら固有の義ありて、右の(イ)の場合に添ふるものなり。他の格の是等のてにをはを添ふる者亦同じ。

雨 ｛は
　 ｛も降る
　 ｛こそ(ぞ)降れ

などの如し。

はは提示し、區別し、抽出し、感歎する意あり。

此の時楠正成は｜

薩摩の士早田八右衛門は(ト云フモノ)元文二年五月任滿ちて大阪の藏屋敷より歸ることになつたが

………

(支那人ノ名)は｜年月日我が家を訪はれたり云々(大江敬香)

杉浦重剛翁は｜云々(賀會案內)

神沼河命坐(はトヨメルモノアリ)葛城高岡宮治天下也(記、中)

父｜病氣の處

も｜は重ね詠嘆する意あり。

目も｜見えないのに學問が出來

ぞは強指する意あり。

こそは更に強指する意あり。

やかは詠嘆し疑ふ意あり。

なむは和かに取りあげて指す意あり。

だにさへすらは一を擧げて他を類推せしむ。

だに　ナリトモ、デモ、サヘ（消極）

すら　スラ、デモ、サヘ（中間）

さへ　マデ（併加）（積極）

のみばかりは單一の意なり。

はを添へたる主格とがを添へたる主格とは意義大に異なり。近時此のはがを濫用する者多し。嚴に區別せんことを要す。但はの極めて輕く用ゐられたるは、がと大差なきもあり。

彼が（ハ）途中で友人に出あつた時（テ）「あすこにあるのは私の小い時に通つた學校ですから、私と一處に來て見て下さい」と申しました。（名古屋高工）

氣毒な憐むべき猫は久しくそこに留つて私の邪魔をした。（四二、十、二三、讀賣）

君は手で飯を食ふよりは頭で飯を食ふのはすきであるか。（商船入學試驗）

庭には櫻、垣には山吹にほへり。

文法は富士谷氏、歌は景樹勝れたり。

……は是 ⎫
……が ⎭ ○○なり。

(2) 領格　は名詞に接續して、所有者を表す、又關係、形容をいふものもあり

國の財産（領）　人の頭（全分）　金の冠（形容）

秋の旅（ニ於テスル）　日本語の研究（關係　ニツイテ ヲ スル）　雪舟の畫（關係　居ル アル　ガ ヲ ニオイテ カケル）

長沼賢海 ⎧ 一名丸(覺信の後の夫たる禪念房の子)
　　　　 ⎩ 惠澄(覺信の妾たりし日野廣綱の子)

いつゝのむつになりにけり(忠岑)（關係　三十也）

子供の遊ばせ方

銀座の通、山の道、越路、大山海道

春宮の女御(紅葉賀)（母ナル）

人妻とわがのとふたつおもふにはなれこし袖はあはれまされり(好忠集)

(イ)のをそふ。　るのしし、　かのしし(著聞集)

（ロ）がをそふ。

「の」と「が」とをそふるには自ら慣例あり。

梅がえ――梅のえだ

君が代――（君の代といふは稀なり）

天の河ガハ　道のべ

（ハ）てにをはなきもの。

藤原道長

「藤原の道長」といふべきのを省略したるものにて、氏は名に對して領格なり。

東京飯田町

「東京の飯田町」の意にて、東京は飯田町に對して領格なり。

右の例は固有名詞のみなれど、

私父

「私の父」の意にて「私」は「父」に對して領格。

貴君御兩親

「貴君の御兩親」

の如きもあり。

八百萬神もあはれと思ふらん犯せるつみのそれとなければ(須磨)

足檜之山橘乎(萬七)

木戸、木野戸、木ノ戸(大和眞土山の邊、紀伊ノ門の意)

筑前「灘」を那珂郡

紀國那賀郡(同上なり)ナンガ(土音)

兄は米國、弟は英國のドクトルなり。

出雲者新墾にひばりの十握ほの稻(顯宗紀)

?

貴家皆樣………

小宅(主) 一同(修) 無異(叙)

小宅(修) 一同(修) 無異(叙)

デハ家族カ？ニ

古語につをそふる者あり。一種の領格なり。

沖つ浪　天つ神　庭つ鳥　外つ國　種つ物(眼つ毛　眼のこ　安麻能日繼(萬十八))

此等は近代語にてはつの代にのを添へず、むしろ之を略して熟語とするものなり。「沖浪」「にはとり」「たなもの」などの如し。

(ニ)指示代名詞　代名詞の中「此」「其」「彼」「孰」など「れ」を略してのを添ふる時、半形容詞とな

る。之を指示代名詞といひ、領格と分つ。

こノ　こヲ
そノ　そヲ
かノ
（わ・ど）ヲ
なヲ
（た・おの）

これ	ノ、ニ、ヲ、ヘ、ト、ヨリ、マデ
それ	〃
かれ	〃
われ	〃
なれ	〃
たれ	〃
おのれ	〃

コノ項ニモトガヲ入レタルヲ削除シテ大正十二年三月二十一日ト朱記セラレタリ

（重衡）縁によりゐたりけるぞそなりける（盛衰記四十五）

右の中にてこヲそヲは古の語なり。今の普通文には用うべからず。

これの表紙（領格代）

この表紙（指示代）（この帳面の表紙）（指 領 名）

事物、場所、方角を都べて指示代名詞といふ人あり。その名稱は今用ゐず。

（ホ）副詞（體言の）にかゝるもの。

天地のむた

風のむた

猶「例のあそぶ」の如きもあり。

(3) 副格　は動詞に對する間接の目的及形容詞の目的となるものなり。

紙に字を書く。　宇治川の水は茶に宜し。

右の如く直接のものに副ふなれば「副賓格」といふも可なり。而してこれにはにへとよりからまでを添ふ。

(イ) に　抑ふる義ありて目的を表す。

紙にかく。　君に捧ぐ。

茶は宇治に產す。

學校に通ふ。　水氷になる(化成)

貧に屈せず。　富に誇る。

對の間に聞きなし給へり(住吉)

人を馬鹿に見る。

馬を鹿にいふ。

松風を琴に聞く。

襷に短く、帶に長し。

圓形は見るにさやけし。

寢ぬるに早く、仕事を始むるにおそし。

目に見、耳に聞く。　足にはく。

音／話に聞く（オイテ）。　學校の講義に習ふ。

枯野を鹽に燒き、其があまり琴に作り（記下）

病／風に（デ、ニテ）倒る。

我は丈夫にあり（指定）（動詞）

（デ、ニテ）なり（助動詞）

候ふ。
侍り。
いまそかり。
おはす。
おはします。
います。
ござる。
入らせらる。
（肯定の時）

庭なりける櫻（新古、詞書）

肯定の時は「にあり」をつゞめて多く「なり」といへど、否定の時は今文も「丈夫にあらず」「丈夫ならず」同様に用う。

○風に?なびく。

○高根おろしに^(ヨリテ)なびく草木。（副詞小句）

○忘｛れるゝに／るゝこと｝かたし。

にを省く時は下の濁ること。

奥山之木葉隱^(ニハ)而行水之音聞從常不忘（萬十一）

おきめもやよあふみのおきめあすよりはみやま賀我くりてみえずかもあらむ（記紀十五下）

いはがくりかかよふ玉（萬）

いはがくります。

（ロ）へ　はもと邊の義にて、名詞より轉じたる接尾語なりしが、助辭になりたるなり。

東京｛邊に／へ｝出づ。（何方^(イカサマ)（萬）コレハ副詞ナリ）

「西に行く」といへば確に定めていふなれど、

「西へ行く」は漠然とさし、方角又はその邊を表す。

「隅田川南へ流る」は方角を表す。然るに漢文讀にて「南に流る」といふ。こはその目的を表したるものなれば、決して誤にあらず。されば「へ」はなくとも日本文は書き得べし。又

君へ捧ぐ。

君に捧ぐ。

は共に同一にして「に」と「へ」とたゞ語氣の差あるのみ。

こゝに（へ）置く。　場所に「へ」を用う。

「へ」は弱く婉曲にその邊をいふなり。口語にては多くの場合に「に」を「へ」と換へうべし。されど

丈夫に（へ）あり。

風に（へ）たふる。　水に（へ）なる。

などいふ折「に」を「へ」とし難し。

但し口語を婉曲に「へ」といふはよけれど、文を書くに「へ」を亂用するは締を失ふ。

「へ」は形容詞の目的なるには用ゐず。

(ハ)と　抑ふる意ありて「稱謂」とも云ふ。ゆゑは「……といふ」と用ゐて稱し謂ふ意なればなり。（されどよき名にもあらず）

馬を鹿といふ。

東京といふ處

四の君おもしろの駒いはれて（ノコト）（をカ ミカ）いといみじとおもふ（落窪二）

こゝに得たまふ同じこと（ミノ格ナベシ）（大將ノ詞）（落窪四）

さるに「と」を略していふあり。中國地方に多し。

東京いふ處

の如し。その意は解しうべけれど「と」といふ抑なければ締なき心地す。

枕草子に「と」抜けの事あり。就いて見るべし、又「あらんずらん」といふは、「あらんとすらむ」といふべきを「と」を抜きて云ふなり。

水｛となる／になる　「と」「に」にかよふ。

君と遊ぶ

といふ時は抑ふる意にあらずして與同の意なり。

これと同じ　それと異なり

の如く又形容詞の目的にもそふ。

花雪と（ノ如ク）ふる　彈丸雨と飛ぶ

の如く用ゐられたるは雪と雨とにて副詞をなせど、その元は「雪と等しく」「雨と等しく」などにてなほ副格なり。

（ニ）

より、から、起點發點を指す。

「より」は文語の如く「から」は口語の如く思はるれど、實はさならず。

より　（近文に用ゐ、比較の時は口語に用う）

から（古文及口語に用う）

東京より（カラ）出でたり。　發點を表す。

霜葉二月の花よりも（比較）紅なり。

色よりも香こそあはれとおもほゆれ。

よりの比較を表すは、なほ比較の發點を事物に取る義なり。

この發點を表す「より」「から」が所由、依託を表はすことあり。

　酒は米より（デ）釀す

或は

　徒　より（ニテ）
　舟　から（デ）　ゆく

　人の前から（ヲ）通る

然るに

　彼は一度失敗したる處より（發點）（ノデ）再擧の勇なし

こは發點より轉じて原因を表すなり。これ更に轉じて今の口語原由を表すからとなるなり。

雨ふる(處)(より / から)行かず

暗き(イカラ)より見えず

見る(より / から)厭になる

是は「見るまゝに」などに通ず。

(ホ)まで　着點を表す。

大阪まで行く

「まで」は終局の點を表し、それより先へは前まざる意をいふなれど、「に」「へ」は目的として定めたる地又は方角をさす。又

(あ)苔のむす　まで

(い)人のとふ　まで位(程)

は皆□の中のものを一の名詞と見て用うるなり。

(う)御印まで(のみ / ばかり)に(に代へて)

(あ)(い)は積極的なれど(う)は消極的なり。自ら異なるを見む。

(え)風まで(サヘ)吹く

こは併加の意にて、此の例は主格なり。已上種々の意あれど、元をいへば同じ事と知るべし。

「まで」は形容詞の目的なるに用うるは稀なり。（これまで同じ）。路、駒返まで（平たり よし）

(4) 處置格　は他動詞の目的となるものなり。

(イ)「を」をそふ。

酒をのむ

(ロ)てにをはなきもの。

酒のむ

路知れる人

矢をりかけ

我は煙草、君は酒をたしむ

(ハ)前二項に「は」「も」「ぞ」の類を添ふ。

酒｛は／も／をば／をも｝のむ

(ニ)「の」をそふるは多く上に撥音ありての變なり。

二人のもの共大納言の左右の耳に口をあてて、いか樣にも御こゝろの出づべく候とさゝやきて引き立て奉れば(平家)

これも心のすべきによりてなり。(十訓抄)

(5)呼格　は呼びかくる名詞にして、他の詞に對して獨立するものなり故に獨立格ともいふ

風ふけ

といふに風は吹くといふ動詞の主たるべきものにあらず、獨立し居るなり又「ふけ風」ともいひ得べし。是に二種あり。

(イ)てにをはなきもの。

汝(呼)こゝに來れ

諸君(呼)よ、諸君(呼格)、諸君(主格)は………

夫差(呼)　汝(主)　越人の汝が父を殺したるを忘れたるか

(ロ)「よ」「や」「かな」をそふ。

風よふけ〳〵たこ上れ

(ロ)の形親愛の意あり。(イ)の形

瓢(呼)や瓢(呼)や我汝を愛す

わが君が代(呼)や(感嘆)

坊(主)やはよい兒

の如き「や」は呼格の爲につけられたるが忘れられて、意味なき一種の接尾語的のものとなりたるなり。

回や愚ならず

（感的主）賜や始めて與に詩を言ふべし

の如き主格を感嘆的にいひてなほ主格なるものなり。

此の日や天氣晴朗

日やを名詞と見れば呼格なれど、こゝにては副詞に轉じたり。

（主）彼や實に當代の俊傑なり

「や」を添ふるも、意味上より主格と見るべきなり。

主(疑)花や咲く

是は疑の「や」にて論なく主格なり。

更科やをばすて山

さゞ波や滋賀

朝倉や木の丸殿

石見のや高角山

河内野のやかたしき山の(六帖)

いではのや

錦のや紐とく花と見ゆる哉(堀川百首)

(おしてるや難波
招くか野邊の花薄)コハ連體法ニツクルやかナリ。

右は「の」を略し又は略せずして「や」を入れたる感嘆的領格にて、呼格とはいふべからず。かく領格と呼格とは往々相混同するを以て注意すべし。

(ハ)古格　「こそ」を添ふ。

忠こその君　　普通の係結の「こそ」にあらず

姫許曾　　接尾語の樣になり變りたるならん

右近の君こそ（呼）まづ物見給へ（命）(源氏、帚木)

(ニ)修辭上間投格やうのものあり、呼格に準ずべし。

淡路島(ソレニ)通ふ千鳥

川社(ソレニ)しのにをりはへほす衣

命なりけりさよの中山

(6)同格　は他の名詞を説明するものなり。

國學院（同格）といふ學校

私の（領）親爺の（同格）太郎兵衛

(イ)てにをはなきもの。

文部大臣牧野

私父（同）太郎（主格）儀（接尾語）云々……

（同）吾人身を學界におく者

吾々人民は………

年比もいのりなどし給ひし（同）吉水僧正かの長歌の座主（主）のたまひつかはしける……(増鏡、新島守)

(ロ)「の」を添ふ「が」を添ふるは後世なり。

（同）弟の次郎（處）を呼ぶ

但しこは時に主格とも領格とも見うべし。

牧野の大臣

學生の佐藤

老爺の權助

是等には慣用あり。

日の神　同(本居)　領(守部　平田　中庸)

丹つゝじのにほはむ時の櫻花さきなむ時に……(萬、六)

安御てぐらの足幣の

八束穗のいかしほ

萬千秋の長秋

よき日の足日

富士の山　ふじがね　鶴が岡　龜が崎　高天の原　それの國　某の人　これの學校

(ハ)「なり」「たり」を添ふ。この中に三種あり又指定辭を添へずして中止するもの亦同格たり。

(1)「なり」「たり」を終止に用うるもの。

鯨は哺乳動物なり

牧野は大臣たり

君君たり

(2)「なり」「たり」を連體に用うるもの。

長官たる東鄕

(3)「なり」の中止にてを用うるもの。

木曾は張魂なる男にていひたちたることを……(盛衰)

(4)煙管は兩端は金、中は竹なり

父は大將、兄は博士、弟は畫家なり

(ニ)「といふ」を添ふ。

佐藤といふ學生

何{といふ／たる}（ノテ）事

いふを獨立動詞と見れば、佐藤と何とは副格名詞なり。されどこのといふはちふてふなど略してテニハの如く用ゐらるゝにより、大觀する時はといふをそへたるが同格名詞となるなり。

兄なる（ヂヤ）者　　母なる（ヂヤ・ツテ）人

「なる」と「といふ」とは詞全く異なるによりて濫用すべからず。多くは固有名詞の下に「なる」を附せず。されど伊勢物語に、

母なん藤原なりける

在原なりける男

とあり。こは決して怪しむに足らず。何とならば一人の藤原にあらず、在原にあらず、廣く藤原在原といふ（（トイフ）の意ならば不正）ものなればなり卽ち是等は一の集合體なるを以て猶「なる」を附しうべし。

正直なるもの（形容詞の意ならば正）

さて又普通名詞なりとてすべてなるといふべきにあらず。なるとといふと意義の全く異なるを忘るべからず。一齋點頃より此のなるといふ用法漢文讀に行はれ、遂に現時の文に大不都合をおこせり。

哺乳動物なる鯨(正)
鯨なる哺乳動物(不正)

右の例によりて「といふ」「なる」の區別を知るべし。

(尙つぎの諸例につき考へむ)

うつゝにて夢なるものは長き夜のねざめにおもふ昔なりけり(續古今十九)

あしかれとおもはぬ山のみねにだに生ふなる(テフ)ものを人のなげきは(詞花)

住吉の岸に生ふてふ(なる)忘草

老らくのこむといふなる(テフ)道

近江にかありといふなるみくり

火鼠の皮といふなるもの(竹取)

戀すてふ(ナル)名

今といふ(眞ノ/の)今まで知らなんだ

學生・人・木・魚(アラユル)　といふ　學生・人・木・魚

蟲　といふ／と名のつく　蟲

腹がぐう〳〵 { いふ / す / あり } （ト云フはす・ありに通ふなり）

誰しの人

たれといふ人（萬、十一）

きく人もあはれてふなる別にはいとど涙ぞつきせざりける（後二十）

「かつらなる（ニアルの場處のなるなり）ところにまゐらんとすと人にいひ侍りしそこにはまからで、月の輪といふ處にまかり歸り云々」（元輔集）

前大納言光頼春身まかりけるを桂なる（ニアル）所にてとかくして歸り侍りけるに（新古、惟方）

豐雄なるもの（雨月物語）（外三處）

昔久七なる男云々（頭書に久七は下をとこの名なり）（好色伊勢物語）

(7) 並立格　は二以上の名詞が相並立するをいふ。他の詞に對しては自ら別の格あり。

（イ）「と」を添ふ。

名と利と（並）（處）併せとる

松下君と（並）三上君と（處）をとふ

の如し。されど

松下君と三上君をとふ

は「松下君と」は副格とも解すべし。各名詞に「と」を添ふれば混雜せず。されば各名詞に「と」をそふ

るを正則とするが如くなれど、古來の用例必しも然らざるものあり、

源氏澪標に

世の中のことたゞ半をわけておほき大臣とこの大臣の御まゝなり

とあるが如し又上に略して下にのみ添ふる例も多し。

一の君(ト)　二の君(ト)　太郎君と三人おはす

紅梅のいと紋うきたるえび染の御小うちぎ今樣色のいとすぐれたるとはこの御料(玉葛)

物見車大將中納言とをみて(國讓下)

君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける(宗于集、後撰七)

青柳梅との花を折りかざしのみての後はちりぬともよし

ソレハ甲と乙と(修)二人(修)が(主)でやらう

題名などは、下なるは「と」を添ふるに及ばず。

戰爭と文學(ト)

「と」を附せざれば混亂するも、韻文などに「と」を附して拙となる時の如きは固より添へざるも可なり。

君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにぞありける(宗于集、後撰七)

青柳梅との花を折りかざしのみての後はちりぬともよし

いもとわがぬる常夏の花

このいもとは並立格なりや副格なりや、人によりて論あるべし「妹とせ」のいもとは明に並立格なり。

(ロ)助辭なきもの。

德禽獸蟲魚に及ぶ

禽獸蟲魚を一の熟語と見るべしといふ說あれど、禽獸と蟲魚とは相離るべきものなれば然らず。

四十年の春秋

といへば熟語なれど、

春秋の優劣

といへば相並べる並立格なり。

英佛に遊ぶ

と同じ。是等は熟語と混同する恐あり、注意すべし。

人は少くて侍ふ限みなねたりこの院の預の子むつましく使ひ給ふ若きをのこ又上童ひとり例の隨身許ぞありける(夕顏) 同 並

(ハ)「に」を添ふ　口語に多し。

西洋の强國英に佛に獨に露あり

（英と佛と獨と露とあり）

「と」を用うると「に」を用うるとには區別あり「と」は對等に並列し「に」は先づ列擧するものありてそれに添へ附する心あり。

(ニ)「や」「が」を添ふ。

簫やびはや笙の笛ひちりきなどふきあはせ（竹川）

英や佛は弱國なり
（或ハ、ノ如キ）

紙か筆を與へむ（疑）

「や」はやゝ疑の意あり。且感嘆の心地もす。

「か」は二者の一を選ぶ意あり。

さてこのやかは必しも各の名詞にそふ事を要せず。又「英も佛も一等國なり」などは主格名詞を二つ重ねたるものにて、並立格とは見ず。

(ホ)「なり」を添ふ。漢文直譯流に名詞の上に「曰はく」と添ふるに近し。

英なり佛なり皆强國なり
（ダ）

（曰はく英曰はく佛皆强國なり）

英(副格)といひ(動詞)佛といひ……(副詞小句(フレース))

(ヘ)「ぞ」を添ふ。

(文覺)裸になり仰のけにふす蝱ぞ蚊ぞ蜂蟻などいふ毒蟲どもが身にひしととりついて……(平家五)

この外

何とか、 かとか

何だとか、 かだとか

何だの、 かだの

何の、 かの

など口語に用う。又

月にむら雲、 花に風

の如きは並立にあらず、動詞を除きたるにて。

月に村雲(アリ、カヽリ)　花に風(フク、アリ)　の如し。

松に鶴、 猫に小判

も亦同類なり。

已上にてほゞ名詞の格を網羅せり。

同一の形なれど、意味よりいへば太だ異なるものあること左例にて一端を知るべし。

(1) 酒は百薬の長
(2) われ酒は飲まず
(3) 東京は九段下にすむ
(4) 東京は行かず

(4)の例は通常にあらず。副格に「に」を省略するは少けれど。

帚木　をのこしもなん子細なきものは侍るめる
夕顔　くはしきことは下人のえ知り侍らぬやらん
葵　人の心こそうたてあるものはあれ

あなどの例は随分あり、又こその上には

保元物語　入道大に驚きくち惜しきことごさんなれ
平家物語　さては惜しむござんなれ

など常例なり。

紀ノ一書「不負於族」此云宇我邏磨概茸
こち來、こちよりては(大鏡娍子立后の段)
かゝりける御佛を少しにてもおろかなりけんはわが身の不幸なる目を見ん(に略カ)とてこそ(しかナド略カ)ありけれ(落窪六)

夜や暗き路(をか)(一)や惑へる時鳥　(古)

落窪、四　まゝ子なんうれしきもの｜にぞありける(秋香本)｜はありける(寛政十一年本)　にありけるは(證解)

平家、八　云々申しつるは｜此處候ふぞかし

しばらく候ふ徳川殿　　天晴候

○○(デゴ)ざ(ィ)ます(花魁語)

平家、八　兼平「千度きらんと申候ひしも｜こゝ候ふぞかし

同、十二　土佐坊「知り参らせぬ候昌俊においては全く腹黒く思ひ奉らぬ候

(「數詞を補ふべし」と朱記あれど稿なし)

第五章　動　詞

一　形　態

一動詞を其の變化する部分と然らざる部分とによりて語尾と語根とに分つ。例へば「開く」といふ動詞に就きて、「ひら」といふ部分までは如何なる場合にも變化することなければ是を語根といひ、「く」といふ部分は場合により「か、き、く、け」等と變化するにより是を語尾といふ。細かに論ずれば語根は更に語幹と語根とに分つを得べし、例へば四段活用なる「さだまる」といふ

動詞に於いて「さだま」までは語根なれども「さだむ」と下二段に活用するときは語根の一部分なる「ま」語尾となるなり。仍つて「さだまる」といふ動詞に於いて「さだま」までは語根にして、其の中にて更に如何なる場合にも變化なき部分「さだ」を語幹とするなり。字義の上よりいへば「さだま」を語幹「さだ」を語根とするが妥當なれども、暫く通稱に從ひ置くなり。尤通例文法上には語幹を論ぜず、

(1) 根尾の有無

多くの動詞は根尾の別あれども、一音の動詞にありては此の別を有せず。例へば來（ク）、爲（ス）、得（ウ）、經（フ）等の類なり。着（キル）、似（ニル）、見（ミル）、射（イル）、居（ヰル）等の語にありても本來一音の動詞にして「る」は語尾にあらず、副活と見るべきものなれば、又根尾の別なきなり。

(2) 語尾變化の種類

動詞は語尾の活用により九種（正格五種 變格四種）に分つ（根尾の別なきものはすべて語尾と見る）

(イ) 四段活用 「あ、い、う、え」四列に變化するもの

(ロ) 上一段活用 「い」一列（本活）に「る、れ」（副活）を添ふるもの

副活を富士谷成章氏は靡（ナビキ）といへり。

(ハ) 下一段活用 「え」一列（本活）に「る、れ」（副活）を添ふるもの

(ニ) 上二段活用 「い、う」二列（本活）に「る、れ」（副活）を添ふるもの

(ホ) 下二段活用 「え、う」二列（本活）に「る、れ」（副活）を添ふるもの

以上(イ)より(ホ)まで五種を正格の活用とす。

(ヘ)な行變格活用　四段活用(本活)に「る、れ」(副活)を添ふるもの

(ト)ら行變格活用　四段活用の「い」列音にて終止するもの

(チ)か行變格活用　上二段活用に「お」列音の加りたるもの

(リ)さ行變格活用　下二段活用に「い」列音(又は上二段活用に「え」列音)の加りたるもの

下二段の「せ、す、する、すれ」に「い」列音の「し」の加りたるものとも、又は上二段の「し、す、する、すれ」にえ列の「せ」の加りたるものとも兩樣に見るを得べし。

以上(ヘ)より(リ)まで四種を變格活用とす

口語には九種活用中「な變」「ら變」「上二」「下二」の四種なきにより、總べて五種活用となる。

古く中二段といへるは今の上二段なり。そは動詞活用中「お」列なるは極めて稀なるを以て「あ、い、う、え」の四列に就き「あ、い」を上、「い、う」を中、「う、え」を下と見たるものなり。之を圖に示せば左の如し。

(昔時)

(現時)



二　活用と行

活用の關するは清濁の平直音（清十濁四）十四行なり。

(1)四段活用「か、さ、た、は、ま、ら、が、ば」の八行。

(2)上一段活用「か、な、は、ま、や(射、鑄)わ(居、率)」の六行。

射鑄等の語は「や」行にして「あ」行にあらず。

(3)下一段活用「か」行蹴の一語。

上一段、下一段の語には根尾の別なし。

(4)上二段活用「か、た、は(強、誣、戀)、ま(恨、試)、や(報、悔、老)、ら(下、懲)、わ(用、率)、が(過)、ざ(掘)、だ(怖、恥、閉、攀)、ば」の十一行。

(楚辭九章渉江「忠不必用兮賢不必以」以用同義)

○和字正濫抄卷二「もちゐ此假名いまだ慥なる證を勘へず、常にかやうにかけり。是正字ならばはたらく時ももちうといふべし」(和訓栞、古言梯、俚言集覽)

(5)下二段活用　十四行總べてに關す。其の中「あ」行の「得」、「は」行の「經」は共に根尾の別なし下二段活用にありて「あ、は、や、わ」四行は假字遣紛れ易きにより左にその語を掲ぐ。

あ行　得の一語

は行　極めて多ければ、其の少き方を知りて他は「は」行とするを便なりとす。

や行　絶、斷、覺、生、肖、肥、越、冷、消、榮、費、潰、、煮、見、聞、癒、寒、

瘻、吠、燃、殞、萌、聳、おびゆ、嘶ゆ、若ゆ、萎ゆ等約三十「悶」は「は」行、「や」

行兩說あり「甘ゆ・甘ふ」（源氏・榮花）「そばゆ・そばふ」（義經記・枕草紙）饐

わ行　植、餓、据の三語。

猶各活用中假字遣の紛れ易き「あ、は、や、わ」四行及「ざ、だ」二行を表にて示せば左の如し。

	あ行	は行	や行	わ行	ざ行	だ行
四段		四段 約(200)				
上一			上一 (2) 鑄射	上一 (2) 率居		
上二		上二 (3) ヵ	上二 悔(3) 報老	上二 (2) 率用	上二 (1) 掘	上二 (4)
下二	下二 (1) 得	下二 約(60)	下二 約(30)	下二 餓(3) 据植（ひう、くう）	下二 (2) まず はず	下二 (7) なづ、出づ、奏づ、秀、抽、詣づ、槃づ、たづ

右の中「は」行四段は他に紛るゝ事なし同上二段下二段は他行の少き方を知りて殘を「は」行と知るべし「ざ」行上二段は「掘」の一語なれば他は「だ」行と知るべし「ざ、だ」下二段にありてはその第一第二變化に於いて「ぜ」と「で」なれば紛るゝことなし。

活用行の轉（ハ行とヤ行、ワ行とヤ行）

萬十三　つゝじ花爾太遙越賣作樂花佐可遙越賣

萬十九　春花乃爾太要盛而秋葉之爾保比爾照有（家持チヌ處女墓ノ長歌）

サク（咲、盛、榮）　サカフ　サカユ

古義說　シナフ　シナフ　シナユ

ニホフ　ニホフ　ニホユ

悶フ―モダユ。　敎フ。ユ。　用ウ。フ。ユ。　强フ。ユ。　植ウ。フ。　据ウ。ユ。　堪フ。ユ。　支フ。ユ。

古事記　鳴はさやらずいすくはし鯨さやる

萬五　百日しも行かぬ松浦路けふゆきてあすは來なんを何か佐夜禮留

萬五　すべもなく苦しくあればいではしりいなゝと思へど子らに佐夜利奴

（さやにさわぐ。さやぐ）

シナビル　シナブ　シナフ　（萬葉）シナエテ

（和名）蹇阿之奈閉　（古事記）跛　足なふ　なふ　なゆ 竹取宇治　もだふ 賴政集落くぼ

たゆむ　つ（よい　を　ほ（お）　（カフ　カヘス　カヤス）

三　變格と語

か行變格

「來(ク)」の一語なり。同義の語ながら「來る(キタ)」といふ語は四段活なり又「出來」といふ熟語にありては上二段の活用となれり。

さ行變格

「爲(ス)」、「御坐(オハス)」の二語に限る「爲」の字を「なす」と讀む時は四段活にして、「成」の義なり、「す」と同義にあらず。又體言の活く時、例へば「筆す」「罪す」等、又漢語の動詞その他外國語を活す場合、皆此の格なり。例へば「勉强す」「及第す」「ストライキす」等のごとし。又形容詞より動詞となるも亦然り。例へば「重んず」「忝うす」「輕んず」等の如し（進ぜヨウ、進ぜタ、進ぜる、進ぜれバ、庄内、下一の如し。）

な行變格

「死ぬ」、「往ぬ」の二語なり。蓋し「死ぬ」の語源は畢竟「いぬ」に歸すべし。

ら行變格

「有り」、「侍り」、「居り」の三語なれど「はべり」は語源「はひあり」、「をり」は「ゐあり」にて共に「あり」といふ一語に歸す。

たとひ五人十人の子を失ひ侍るとも（侍りこもトハイハジ）君だに代に立ち給はゞそれこそ本意に候へ（盛衰記）（侍|

ルトモ四段風にかはれるか）

むすめの齋宮に具して下り侍りて大淀の浦にてみそぎし侍るとて女御徽子女王

大淀の浦にたつ波かへらずば松の變らぬ色をみましや（新古十七）

…………侍るとて（夕顏）（侍ラムトテを侍ルトテといふか）

「ゐる」と「をり」とはその意似て差あり「ゐる」は輕くて單にその存在をいひ、「をり」は「ゐたり」にて即完了存在を意味す

四　活用圖

九種活用の中、その變化の數を示せば、

四段4、上一3、下一3、上二4、下二4、か變5、さ變5、な變6、ら變4

にて、その變化の多きは「な」行變格なり。

活用圖を作るにその標準とする所、次の如し。

(1)、「な」行變格の六形

(2)、各變化の意義

(3)、各變化の附屬辭

動詞活用圖

		第一變化	第二變化	第三變化	第四變化	第五變化	第六變化
四段	書	か	き	く	く	け	け
上一	著	き	き	きる	きる	きれ	き
下一	蹴	け	け	ける	ける	けれ	け
上二	起	き	き	く	くる	くれ	き
下二	受	け	け	く	くる	くれ	け
か變	來	こ	き	く	くる	くれ	こ
さ變	爲	せ	し	す	する	すれ	せ
な變	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ら變	有	ら	り	り	る	れ	れ

各變化の附屬辭

第一變化には「す、る（以上四段、「な」變「ら」變に限る）さす、らる（以上上一より「さ」變まで）しむ、ば、ず、む、なむ、まし」添ふ。

第二變化は名詞に轉じ又中止、連用の格なり。「て、つゝ、つ、ぬ、たり、き、けり、たし、(候、侍)」添ふ。

第三變化は終止の格にして「と、(とも)や、かし、な、べし、まじ、らむ、らし、めり」添ふ。

「な」以下六附屬辭は「ら」變に於いて第四變化即「う」列音に續く。

第四變化は連體の格にして「か、かな、よ、(なり)、を、に、も、が、ぞ」添ふ。(如しは形容詞としてこゝに入れず)

第五變化には「ば、ど、ども」添ふ。

第六變化は命令の格にして「よ、や、かし」を添ふ。今の文にて上下一二段には必「よ、や」添へざれば其の意を爲さざれども古文は必しも然らず。

五　法

動詞の語尾變化によりて變る意義を法といふ動詞に法あるは名詞代名詞に格あるが如きものなり。今一例を擧げて法の意義を明にせむ。

書か(ズ、ム、シム、ル)バ　き(キ、ツ)テ　く(ベシ)　く　け(バ、ド)　け

右の例によるに、書かといふ所に括弧内のずむしむるなどいふ類を附するも、かかといふ動詞の法は成立せず。唯ばを附して始めて一の法をなすなり助動詞を添へて書かずなどいひたるは唯その接續にて法はその助動詞に移るなり。法に三あり。直說法、命令法、前提法これなり。

雨降る

雨降り風吹く

雨降る日

などは唯平坦に叙したるものにて直說法の例なり。

雨降れ

と命令に用ゐたるは命令法にして、

雨ふらば…………

雨ふるとも…………

雨ふれば…………

雨ふれども…………

などは雨の降るといふことを主として云ふにはあらず、その次に來るべき文の前提として置きたるものにして、前提法といひ、或は條件法又は接續法とも稱す。

右のばともども杯は前提法を明にする爲に添へらるゝものなれば、之を「法のてにをは」といふ。故に是等のてにをはを省くも猶前提法たるを失はず。

口語にて

そんなら(バ)

したら(バ)

などいひて法のてにをはを略し、或は文語にても

花こそさけ(ドモ)鳥はなかず

といひてどもはなくとも云ひうべし。

今大保方必可仕奉之止所念坐世(バ)　(廿六詔)

少將殿を始め參らせて幼き人々も皆とらはれさせ給ふべきよし承りて候へ(バ)急ぎ何方へも忍ばせ給ふべくや候らんと申しければ…………(平家、小松教訓)

人麿の歌に、

おほゆきのみだれてきたれ(バ)まつろはず立ちむかひしも…………

とあるが如きは「きたれ」の下にばを省きたるものなり。

歸り來てしはぶれつぐれをぐよしのそこになければいふすべのたどきをしらに(萬十七)

の如きもつぐれの下のばを省きたるもの。

已下項を分ちて詳述せむ。

一、直說法

動作をありのまゝに直說するものにて、終止、連體、連用の別あり。故に之を終止直說法又は直說終止法などいふべし。されば

- 法
  - 直說法
    - 終止法
    - 連用法
    - 連體法
  - 命令法
  - 前提法

〔一六三二年(寛永九)羅馬府出版日本口語文典(ドミニカン派宣教師 Fr. Didaco Collado 著)には動詞の活用を論じて三種とし「(1)交(ゼ・ズル) 合(セ・スル) 恥(ヂ・ヅル) 案(ジ・ズル) (2)讀(ミ・ム) 待(チ・ツ) 殺(シ・ス) (3)習(ナライヒ・ナローフ) 思(イ・ー) 食(クイ・クー)」とせるはこの直說法についていへるなり」

とすべきを、

法
- 終止法
- 連用法
- 連體法
- 命令法
- 前提法

とするは通俗的にはともあれ、理論上は悉しからずといふべし。

(イ)終止法　動作をいひきりて文を終止す。而して終止法は動詞の第三變化を用うれども第三變化の形が常に終止法にはあらず。なほ口語の時の終止は文語の終止と異なるを以て注意すべし。

(ロ)連體法　體言に連續するものにて、體言は名詞代名詞と副詞(用言にもあり體言と)の一部分なり。この法には動詞の第四變化を用う。

書く(第四變化)　筆(名ー體言)

夏の夜はくるゝすなはち（副|體言）明く

おほゆるやがて（副|體言）忘る

忘る故に後る

（この例は、職掌の上より觀ればゆゑには副詞なれど忘るといふ第四變化の動詞はゆゑといふ名詞に連り「それがゆゑに」となりて副詞となりたるなり）

又連體法はその下に體言を略して名詞に用ゐらる。

進むを退く

（この例の進むは明に名詞なり。口語には「進むのを退ける」といふを以つても知るべし凡そのは名詞なるを示す爲のものなり）

右の如きものを動詞狀（形的）名詞といひ、略して動名詞ともいふ。

終止法も亦名詞と見なさる。

「死ぬ」といふことは難し

（とうけたるは名詞の副格にして、卽ち死ぬを名詞と見たるなり）

繁（シゲル）信（ノブ）治（ハル）勝（カツ）　磐排別（紀注 飫時和句）之子　苞苴擔（珥倍毛菟）之子

の如く人の名に動詞の第三變化を以つて名詞としたるもの多し。

又連體法にのを添ふるは非なり。

進むの時　進むの人を退く
笑ふの輩　至れるの道
衣曝始午の日は昔より京中に上中下の人稲荷詣とて參り集の日也(今昔)
更に如此きの事を惜みて不隱して皆汝に傳へてむ(同上)

是等は皆漢文の直譯より來れる誤なり。

入ㇾ德ニ之門

などの場合の如し漢語にては語尾の變化なければ「入德」は一の名詞と見て以つて「之」を附したるのみ然るを直譯して

德に入るの門

といふは極めてわろし。但し

徒に思ふの學ぶに如かざるを知る
人を殺すの罪たるは明なり

などの例は已に名詞となりたるものにて主格なれば、連體法とは謂ふべからず。尤かゝる時にも、純正なる國文にてはの代にがを用うる例なりと知るべし。

又

「君や來むわれや行かむ」のいざよひに

といへるは、行かむと切れてあるを一の大なる名詞と見てのを添へたるなり故にこののはといふに代へうべし、然かる場合は誤ならねば克く注意せよ。

連體法の下に嘆辭をおくことあり。

うつやつゞみ

まねくか野邊の花薄

（なほ次の例を視よ）

山里にて湯あむるとて久しくこもりゐられたりしに（右京大夫集）

蘆分のさはる小舟の紅の深き心をよするとぞしれ（同上）

……おもしろき處あるとて立入りしかば（同上）

余ばかりをのがるもあり（熊坂）

あさりしてかひありけりと思ふ身をうらみてふると人やみるらむ（中務）［連體（身）ト譯スベシ］

都には君に［も］あふ坂近ければなこその關は遠きとをしれ（頼朝）

さぬきの御局には乳房の恩を報い奉らぬ）?あまつさへまた歎をかけ申す事（十郎手紙）

うたゝねのこの世の夢のはかなきにさめぬやがての命ともがな（後拾）

酒のめどのむます〳〵に涕し流る

出づるとも入るとも見えで足引の山の尾の上にすめる月かげ（續後拾、法印守禪）

潮待つ間に爲すべき事のなき(アラザル)といふはなし(露伴)(なしとはいふべからず)

かすみつゝくるゝとおもひし春の日は朧月夜になりにけるかな(景樹)

ほのかにたゞ小き鳥の浮べると思ひやらるるを(須磨)

程もなく暮るゝと思ひし冬の日の心もとなき折もありけり(詞花、道命阿闍梨)

篇中の歌、その主人公の詠ずとするものにして實は業平の作にあらざるものあり(藤岡)

誰も見よみつればやがてかく月の

妻こふ鹿の音(昔は皆妻とふ鹿)

取與(アタフ)物しなければ(萬二)

仰す旨(盛、二、清水寺詣の段)

いよ〳〵なりとゞろきておはします(メヅラシ)につゞきたる廊下におちかゝりぬ(明石)

旅にして物戀之伎の鳴くことも聞えざりせば孤悲而死萬思(萬、一)

千くさにもほころぶ(ほころぶる(紅葉賀))花の錦かなつら青柳ぬひし一すぢ(源順集)

連體法は領格の如く一種の關係ある體言に接續すること甚自由なり。

敎へるがものはない

洋服着たるが父なり

喜申すの日(枕草紙)

宮中に「申すの口」あり

申すべきの候(宇治拾)

監督到らざるの致す所

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはんはかなき世をもうつゝとはみず(古今十六)

現にはさもこそあらめゆめにさへ人目をもると見るがわびしさ(古今十三)

秋の田のいねてふことをかけしかば思ひいづるが嬉しげもなし

故に
爲
中
上
うち
が……思ふ

する
との
櫻の
○
その
ことの
が
べき
なる
との
といふ
との
せん

連體の誤多し。

日に斃る馬供養もす殘暑かな

二本の梅に遲速を愛すかな(蕪村)

暮れむとす春ををしほの山櫻(蕪村)

まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻（蕪村）

（ハ）連用法　第二變化を用ゐ、次の二種あり。

（甲）熟語的なるもの

書きやすし

ふりやむ

（乙）中止するもの

字を書き書を讀む

ツヾク

されば

字を書き書を讀む時は

の如き場合はかきよむ共に時にかゝるを以つてかきも連體の中止法なりと說くは難なけれど、

君子儒たり小人儒たること勿れ

酒を飮み麥酒をのまず

の如き例を君子儒たりも勿れにかゝり酒をのみもずにかゝるといはゞ全く意義を變ずるに至るべし。こは前に述べたる助動詞との接續を法と誤認したる失なり「のみ」は「のまず」といふ終止に對する中止「君子儒たり」は「たること勿れ」といふ命令法の中止なり「のま」を不定法などいひ、

「のみ」をその中止として「ず」にかゝると說くは非なり「長を取らず短を捨てず」を

　長を取り短を捨てず(ずの外らるしむんなどすべて)

ともいふ事あるは「長を取り」を「短を捨て」に接續して併せて之を否定せるなれど、此の形は「長を取り」をば肯定したる場合に用うるが國語の本體にて、「松もひき若なもつまずなりぬるをいつしか櫻はやもさかなん」(後)の如きは稀有の變例なり。

　春風はふけどふかねど(ふきふかねどもトハイハレザルカ)梅の花さけるあたりはしるくぞありける(金槐)

　花もさき紅葉もせねど松が枝の綠はとはにめづらしきかな(大平)

　いづれ勝ち負けたる(イヅレカカチイヅレカマケタル)(堤中納言)

連用法にてを添ふるものあり。古文、口語に多く近文に少し。

　風ふき(テ)雨ふる

　風がふいて雨がふる

　(風がふいてといふが口語の本體なるべし。それを「風がふき雨がふる」といふは文語に引きつけられたるなるべし)

見てをり
見をり　(文)

見てをる
見をる　(口)

是等は修辭上又は習慣上の問題にして、文法よりしてその得失を說くべきにあらず。

鮪がはたでに妻多弖(終止)理美由(記下)

苅薦の亂出所見(ミダレイヅミユ)(万二)

あま許伎(漕)久見由(來所見)(万十四)

朝月日向ノ山ニ月立(タテリ)所見(万七)

(右は終止法にて連用法にあらず)

さて第二變化は連用法なれど、佐行變格のす及良行變格のありには連續せざる習慣あり。

書き{す(サ變)/あり(ラ變)}非ナリ

備へ{(テ)ある品/をる品/たる品}てヲ附スレバ可ナリ。コレハ正し。時の所にて更に述べん。

うちあること(接頭的)

まかり在り(新シキ語)

但佐行變格の方には

流れたえせぬ隅田川(第二變化)

つきせぬ恨…………

くちせぬ名…………

雨ふりせば…………

いさなとり海や死爲流山やしにする

死ぬれこそ海は潮ひて山は枯れすれ(萬葉十六)　肯定は殊に少し。

思遣すべの知らねば片もひの底にぞ吾者戀成爾家類(萬四)

念西死爲物爾有麻世波(萬四)

眞珠者緒絶爲爾伎登聞之故其緒復貫吾玉爾將爲(萬十六)

戀爲死爲物有者我身千遍死反(萬十一)

物思にしにするものとは(狹衣二)

はぢにしにせぬ身を(同上)

この昔物語はつきすべうなんあらぬ(橋姫)

何やかやとつきすまじかりけれど(同上)

つきすべくもあらねば(濱松)

いかに生ひやらんとすらん(葵)

おもひ{やる／なる／上る}　　こひ{する／なる}

ふきみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべき心ちこそすれ(野分)

窓かうしあげなどして
聲はして姿は見えぬ
｝山田氏は同類と見たり。

十月雨眉毛不置零爾西者誰里間宿可借益(萬十二)

和可禮須流｛伎美(萬十五)
　　　　　可聞(同)

柳こそ切ればはえすれ(萬十四)

吾念君爾不相死爲目(萬四)

の如く用ゐられたるあり。或る人はたえつきくちは名詞にて之にせの添りたるなりといへど、予はその名詞なるか動詞なるかについては暫く斷言せざるべきも、せは意味を强うする爲に用ゐたる者なるを記憶すべし「降りせば」などの「せ」には異說あれど、時の章において詳論すべし。

二、命令法　動詞の第六變化を用う。

書をよめ

讀書せ

來

死ね

あれ

四段活につける「よ」

この膝の上に大殿こもれよ(若紫)

あれとだにおほしおけよ(藤袴)

萬事をすてゝ參れよ(枕)

きこえ奉れよ(宇都保菊宴)

詞にて申せよ(大和物語)

過去の事實に反したることを希望するにも命令法を用うべきか。

(大宮詞)こおとゞ(攝政殿)の今しばしだに物し給へかし(乙女)(讃岐本ニハこナシ、サレド源氏ノコトニ見ンモイカヾ)

然るに

上一　見よ　や
下一　けよ　よや
上二　おきよ　よかし
下二　うけよ　ロイ……口語に

富士のねのならぬ思にもえばもえ神だにけたぬ空し煙を(古今、雜)

ゐごひする君がはしたかし(も)たかれの野にな放ちそ早く手にするゐ(順集)

それしてよせとらせとのたまはするに(宇治十六)

ゆきて見む駒に沓かけ石原や十市の里にはなさきぬめり（夫木十二）

いざ子ども小舟はやよせかの見ゆる嶋わの蓮たをらまくほし（同上）

の如くよといふ「てにをは」を附するものあれど、必しもよを添へざれば命令の意を成さずといふ理なし。やを添へ、よやを附し、よかしを置くも皆親愛の意を添ふるなり。されば現に地方によりてよを添へずして命令にいふ所あり。關西に多し。かしは感嘆詞とするもあれど非なり。輕く抑ふる心地あるテニヲハにて副詞にも終止法にもつく。

よを動詞の活用中に入るゝ人もあれど、よは全く動詞と別物なり。古文にはよを附けずして命令に用ゐしこと多し。但し近文にては上下一二段活には「よ」を添ふるを本則とす。

東京語に「よ」の代りに「ろ」を用うる事あり。思ふにろはよの變音なり。也行と良行とは極めて相近ければなり。

又別に命令として第二變化にねをそふるものあり。

よみね　　かきね

の如し。今口語に、およみなさいといふことをおよみいと云ふは命令の語尾を略したるにて、右の例とは異なり。又おきなといふはおきなさいなのなさいを略したるなれど、よみねはよみなさいねのなさいを省きたるものにはあらざる如し。案ずるに此のねは「てにをは」にあらずして助動詞完了ぬの第六變化なるべし。

な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

即「よみね」は「よみたれ」といはんが如き語法なり。

古格　第一變化にねなを添ふるものあり。

名のらさね（サ行四、第一變化）　（萬葉一）

こは命令なり。されど「よみね」と同じく完了のねなりやといふに、よみは第二變化にしてこれは第一變化なれば同樣に說くべからず。併し

雨ふらな（シ）　家聞かな（シ）

のなは想像にて命令にあらず。古き一種の語法なり。

野邊の秋萩な散りそね（萬葉）

千早振いづしの宮の神の駒なのりそやたゝりもぞする（重之集）

ねもころにな戀ひそよとぞ（萬十七）

これは打消の命令なり。この外口語に「前に出ろ」といふを「前に出る」或は「前に出た、おい出た」などいふ事あり。

いけ
いく
いつた　待つた（名詞ニモナル）
いかう

など皆然り。是等は命令法といひ得ざるか。「出ろ」といふが命令なればでるもでたも共に命令なりといふは事實にはあたれど、その詞に果して命令の語氣ありや、否やを考へざるべからず。然るに

直說終止法
- でる——は「此の際汝はでるのだ」といふ意
- でた——は未來をいふに完了のたをそへて、命令せられて、しか動作したる様をいへる者
- でよう——は未來にて勸誘の意ある

にて、語氣は全く直說法の終止法なり。事實と言語との異同關係深く注意すべし。

三、前提法(條件法、接續法) 動詞が他の語句の前提となりて之にかゝるものなり。

一、雪ふれば寒し

二、雪ふらば寒からむ

右の例にて普通(一)のふればを已然といひ(二)のふらばを將然といふ。將然は將に然らむとする意にて、ふらむとすならば將然なれど、ふらむは將然にあらず。況してふらばは時に關係なき事明なり。(一)のふればは已に降りてありといふ意の時は、已然といふも稍可なれど、一般には

雪のふる日はさむくこそあれ

などと同一にて時に關係なし。又古は極端に

降	ら	り	る	る	れ	れ
	未來	過去	現在		過去	未來

と様に說きたる人あれど、動詞そのものは時に何等の關係なく、已然將然は時に關係したるものなれば、動詞の本體を說くに之をいふは非なり。

(1) 前提法を分ちて次の如くす。

(甲) 假定(假言)

一、順態　第一變化にばを添ふ。

雪ふらば寒からむ

二、逆態　第三變化にとともを添ふ。

雪ふる{と / とも}寒からじ

(一)「むげにしるしなくばかひなし」とやおほしけん(落窪)

わがせこは玉にもがもな手にまきて見つゝゆかんをおきていかばをし(萬十七)

ひとりして世をしつくさば高砂の松のときはも甲斐なかりけり(拾、貫之)

をりとらばをしげにもあるか櫻花(古今)

(二)、おのづからおもひいづともかひぞなきちぎりしまゝの心ならずは(續千、爲定)

君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほなるらん(拾)

ちりぬともよし

あすか川せきてとゞむるものならばふちせになるとなにかいはせん(後撰)

(乙)確定(實言)

一、順態　第五變化にばを添ふ。

雪ふればさむし

(これは實際にふるといふ事ありて「それによりて寒い」と言ふ意なり)

二、逆態　第五變化にどどもを添ふ。

雪ふれ{ど／ども}寒からず

(丙)不定(一般)

雪ふれば寒し

(このふればといふは、降る降らぬの問題にあらずして、兎に角「ふると」「ふる時」といふ意なり)

不定は詞の上よりは、確定と同形なれど、意味は異なり。

酒を飲めば醉ふ

生るれば死す

（形あるものは破る）

などにて動作の上より時に何等の關係もなし。

世をそむく苦の衣はたゞひとへかさねば（不定ニスベキ所）うとしいざふたりねむ（遍昭、後撰）

(2) 口語に於いては、前提法は文語と異なること多ければ次に聊か述べむ。

(甲) 假定

一、順態

(イ) ふるならば　ばを略しても。

(ロ) ふつたらば　（フッテハ）

(ハ) ふれば　文語の確定變じて、口語の假定となる。

(ニ) ふると　文語假定の逆態と同形なれど順態にて「ふるに」の義なり。

(ハ)(ニ) は主に不定に用ゐらる。

二、逆態

ふらう（想像）と
ふらう（想像）が

(乙) 確定

一、順態

ふるから
ふるので　副詞的ナリ。次ノモ。
と

二、逆態

ふる｛が／けれども　（ふつても）

大凡右の如し。なほ左に二三の例をいはむ。

少しく進まば（めば（ムト））一の川あり（假定にいひたるにて惡し。めばといふべし。）

ちりぬれば（テシマヘバ／タラ）戀ふれど（ヒテモ（不定の前提）／フトモ）しるしなきものを今日こそ櫻をらばをりてめ

酒を飲めど（ンデモ（一般の事をいひたるにて飲んだけれどもの意にあらず））ゑはぬ人あり

「たら」を確定に用うることあり。

日が暮れたら涼しくなつた

私が行つたら逃げた

此等は文語と特に異なり。

家づとにゆるせばとても（ユルスカラトテモ）梅の花見すべき人のあらばこそ折らめ（茂睡）（妻なくなりて又の年の上野花見）

さゞなみのしがの大わたよどむとも（メリ、サリトモ）昔の人に又もあはめやも

花サケリ、サラバ（ラバ）見ニユカン

(3)準前提法　なほ準前提法といふべきものあり形は前提法と異にして副詞的なれど意に於いては全く相類せるものなり。

一、順態　第四變化（連體）にときは（名詞の副詞となりたるもの）を添ふ。事にはを添ふるもあり。

ふるときは

「ふれば」と全く同じ。

知ら{んことには / なければ}話が分らぬ

曾我(時政ノ心)されば時政が家に源氏を聟にとりて後たのもしく繁昌する例ある事よとおもひめぐらす時はあながちきらひおもふべきにもあらず。

「……とねたましげにいふ時は腹立たしくなりて」(帚木)

然る{間 / さかひ}により

さる程に

ふる｛上は / 以上は / からは｝

行くにつけては（場合）

二、逆態　第四變化にを|に|も|が|を添ふ。

ふる｛を / に / も / が｝寒からず

「ふれども」に似たり。共に副詞的なり。

（を|は強くて古く、に|は中程にて口語ののに|と云ふに同じ）

ふる［體言］を（連體）

ふる(に)も

即ちを|はにといふべきを強くいひたるなり。又も|はに|もなるべし。

縱（へ）通（ズルモ）類書亦不知訓毋讀子之轉化則其道難矣（倭字古今通例全書ノ序（元祿九））

都へとおもふもものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり（土佐日記）（ニモ）（前提）

かやうにておはせましかばとおもふもむね(にイ)ふた(のみイ)がりておぼゆ(源、夕顔)

さて別當をたづねらるゝもなく(平治)

矢は當らざりしも痛手はおひぬ(平治)

忘れなんとおもふも物の悲しきをいかさまにしていかさまにせん

「むくいせん」と(順接ナリ)おもふも胸はしる(落窪)

今よりはいとうれしく明暮も侍ひぬべしとおもひ給へしも命の(バカリニテモ)(秋香註)びてなん(落窪、中納言)

已上の如く連體の下にもを添へて副詞的に用ゐたる例多くして、さまで新しきにはあらず。

がが動詞に附きたるは新し。

いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり(源、桐壺)

の如きがは明に名詞につきたるものなるが、後、鎌倉頃より已上の例より一轉して動詞の附屬となるに至れり。

ふるが

候ふが

などなり(廣日本文典にがを是認してもを非認せるは穩ならず)

(4)連用法との關係　連用法と前提法とは、其の應用せらるゝ場合に於いて關係を生ず。例へば

風も吹けば雨も降る

の吹けばは形は全く前提法なれども、事實

風も吹き雨も降る

とあるべき連用法にして、口語には又「風も吹くし」といふ連用法を用うるところなり。

男も居れば女も居る
(口、別)も二件ツテ動作事情ヲ並ベテ云フモノ

形　居れば——前提法

事　居り(文語)／居るし(口語)——連用法

など皆同例なり。これに反して

日暮れて道遠し

の「暮れて」の例は、形は全く連用法にして、事實は逆態前提法なり。卽ち「日暮れたるに道遠し」の意味なり。

知りて知らざる眞似す

の「知りて」も「知りつゝ」「知りながら」の意味にして「知りたるに」と解かば明瞭なり。卽ち形は、依然連用法を用ゐて意味に於て逆態前提法なり。

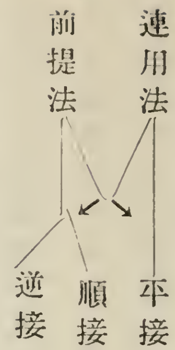
言へばえに（イフニニカヨフナルベシ）

……と申せば（スニ）おろかなりや(大鏡、基經)

成らんといへば（强意）ならん（ハヤクアキラメロ、實ニ）

まからんといつたら一文もまからん……(省略セルナリ)

連用法は平坦に接續し平坦に說明するものなれば、「平接す」「平說す」といふを得べし前提法に於ける「順態」「逆態」といふも接續態の順或は逆なるよりの名にて、順接逆接といひて平接と相比すべし、さて兩法の錯綜する態を圖示すれば左の如し。



「て」の添へる連用法にはもの「てにをは」を添ふる時は、特に前提的となるべし。例へば

　氷消えては波舊苔のひげを洗ふ

の消えてはの如きは順態前提法「消ゆれば」の意味となり、

　……につき「其國の法令に遵由するに於ては」內國臣民又は人民と同一の條件に依り之が自由を享有すべし(日米新條約第一條)

のてはは不定の意となり、又

　視ても見えず

の視てもは逆態前提法「見れども」の意味となれり、漢籍に

　視而不見

とあるを、古く博士家の點より「視れども見えず」として道春點なども之に從ひたりしに、後藤點一齋點に至りては「視」をみれどもと讀みては「雖視」と混同する嫌ありとてか「視テ見ズ」と讀ませたり。古點の「みれども」又は「みても」「みるも」などは逆態前提法なること明なれど、「視て」とのみいひては不完全なり。理窟はつくべくともかゝる場合に然は言はぬ例なり。「見えず」を「見ず」といへる殊に甚し。仍「視る而して」とさへ讀めるものあり。すべて漢文を直譯したるのみにては國語にならぬもの多し直譯のみならば如何樣にせんも隨意なれど、國語に應用することは愼まざるべからず。

口語にてもてではてもの三種を用う。

(5) 順態と逆態との關係

美味なるを知りて食ふ

急病なるを知りて見舞はず

の「知りて」の意味を考ふるに、前者は或る食物の美味なるを豫め知りたれば食ひたる義にして順態的なり。後者は人の急病なるを知つて居ながら見舞はざる義にして逆態的なり。尚

知りては驚き　(順態)

知りても驚かず(逆態)

とはもを添へなば意味明瞭とならむ。卽ち順態と逆態とは兩極端にして而も斯の如き意味の相通を見るは甚しく遠ざかりて再合體する自然の理に因れるものか。

小倉色紙に「さびしさに宿をたちいでゝながむれどいづこも同じ秋の夕暮」とある如きばどの異傳古書に少からず。

又

積れば消ゆる庭の白雪

などは口語ツモルトの義にて順態にて事なけれど、事實の上にては積レド、積リテモ、積ルノニなどの場合に近し。

積ると思へば消ゆる雪かな

などいふは「積ルト思フノニ」の意にて逆態なり。是は「思ヘバ然アルベキニ」などの義にて逆態前提法の語を省略せる者とも見らるべし。

黄葉におく白露の色にはも出でじとおもへばことのしげけく（繰分に）（萬十）

から衣新しくたつ年なれば人はかくこそふりまさりけれ（同上）（貫之集）

夏草はしげく日毎になり行けばかれにし人は見えずなりゆく（同上）（躬恒集）

又助動詞の例にては、

わたり果てねば（ヌニの意）明けぞしにける（古今）

いひもはてねば（ヌニの意）

官軍既によせ候ふと申しもはてねば先陣已にはせ來る

忠度……とのたまひも果てねば六彌太後よりさつまの守の首をとる(平家)

秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝けの風は手本寒母(萬八)

秋立ちて幾かもあらぬにこのねぬる朝けの風の袂涼しも(後撰・拾遺)

から衣新しくたつ年なれば人はかくこそふりまさりけれ(貫之集)

ねばのねは動作を打消す助動詞「ず」の第五變化にして「果てねば」「あらねば」といへば前提法順態の形となるを、意味は純然たる逆態なり。

俗語の

- てへば(と言へば)關東、東北
- てふに
- といふのに
- ちふに九州

は何れも現在に於ては同義に用うる言葉なるが關東東北にて重に行はるゝ「てへば」は「と言へば」の約言にして、もと順態前提法なるべきを、逆態前提法の形なる「てふに」「といふのに」「ちふに」と義を同じくし逆態に通じたるものにて、「といふに」よりも強く用ゐらる。

いやていば(こんくわい)

「お身に覺が無うてから詮議まんぎも喧しい(傾城反魂香)

六　特殊動詞

す

あり（ある）

いはゆる　あらゆる

もちて　おいて（おける）

つき

み（見なり。堀氏はもしの約といふ）

ふりみふらずみ

なきみわらひみ

荒み　重み

天降る

いさつ

二人して見る　省いたからして分らぬ

心が變つた（か／のか）して來ない

それからして

七　他詞に轉ず

動詞の他詞に轉ずるものを述ぶれば、

(1)名詞に

(イ)第二變化より　たゝかひ(戰)　かすみ(霞)　うたひ(謠)

第二變化必しも悉名詞に轉ずるにあらず、單獨にては語をなさぬものもあり。元來第二變化を名詞法として說く學者あれど、動詞の第二變化より名詞に轉じたる上からは、動詞の法として論ずべきにあらず。然れどもこは學者の議論多き所、今こゝに詳論せざるべし。

(ロ)第三變化より　第三變化よりのは、人名に多くして普通の名詞には極めて少し。例へば勝信(カツノブ)といふ名の如く、勝は四段活、信は伸と通じ「のぶ」といふ上二段活にして、もし普通の名詞が第二變化よりする如くならば「かちのび」と讀まざるべからず。又昇(ノボル)、登(ノボル)は通常第三變化なれど、今の渡邊昇氏の如きは「のぼり」と第二變化にいへり。尙

治(ハル)、繁(シゲル)、照(テル)、守(マモル)、順(シタガフ)、競(キソフ)、省(ハブク)、濟(ワタル)、角力(スマフ)、出立(シユツタツ)、居候(キサフラフ)、そほづ、うるふ、かげろふ、雫、

火垂、樽、谷漏、御統、贄持之子、曙立(アケタツ)子

など極めて多し。されど人名にも第二變化の甫(ハジメ)　元(ハジメ)　一(ハジメ)　守(モリ)　賴(ヨリ)　行(ユキ)の如きもあり。又「のぶる」「あつる」「みつる」など呼ぶ名あるは普通「のぶ」「あつ」「みつ」とあるべきを、俗語の副活ある動詞

多きにつれて「る」を添へて第四變化の如く讀めるまでにして實は訛なるべし。

臺記別記に「故尼上ノ侍女榮ヲ左加由留」とも書けり（玉勝間十二）

高い子、崇い子、明けい子の類も連體形なり。

(2) 形容詞に

疑はし（四段）　厭はし（四段）　願はし（四段）　痛まし（四段）

胸つぶらはしくおぼゆる（榊）　荒まじ　面向かし

の如きは一種の接尾語によりて全く形容詞に成り了りたる者なり。

動詞の連體法は皆形容詞といはざいはるべけれど、我が文法は語尾變化として轉成形容詞とはいはず。西洋の文法は動詞、形容詞の性質を分有する意味より分詞と名づけたり。

流るゝ水

といふに「流るゝ」は連體法の動詞にして且つ水を形容したり。されど連體形のみを用うるものは形容詞といふべし。例へば

或る人　いはゆる道

の「或る」、「いはゆる」の如し此等は今は全く連體形のみを用うれども、もと「或る」は「有り」「在り」といふラ行變格の第四變化連體法にして、「いはゆる」は「イフ」の被役ヤ行下二段活の第四變化連體法なりしなり。

「ある人」を「側に在る」「奉仕人」の義に竹取に多く用ゐたり。

(3)副詞　接續詞に

極めて（マ行下二段）　例へば（ハ行下二段）　申さば（サ行四段）　しかれども（ラ行變格）

の如し。尚後章にいふべし。

八　轉成動詞

他の品詞より動詞に轉じたるものを述ぶれば、

(1)名詞より

(イ)さ行變格に

(a)　筆す　あらそひす　意味す　罪す　閱す　私す　心せよ　宿す

(b)　儒者を坑にす　口にす　花を手にす　心を花にす　食をパンにし衣を毛織にす　聖書を足にす（足にかく、（物す））

(ロ)語末を活用せさするもの　「裝束」の音「さうぞく」の語尾はカ行四段に似てあれば「さうぞきて」などカ行四段活にいふ。又「宣(ノリ)ごつ」の「ごつ」は蓋し言(コト)といふ名詞ならむを、タ行四段に活したり。此の外

はいかる〔洋語「ハイカラ」より〕　料る〔料理する〕　酌ふ　問答(モンダ)ふ　猿樂ふ　序づ　彩色(サイシ)く

力む　目論む　濕ける　吟む　獨言つ　政つ　かこつ　乞食く　敵對ふ　野飼ふ(後、後拾)　息生く　隣る　境ふ　身そぐ

おもひ／＼に勝負をさうどき(騷動)あへるもいとをかしう(增鏡、オドロ)　まとゐる(宇津穗、春日詣)

の如きあり。

(ハ)敬語のときに　御勉强あり　勉强なさる　勉强遊ばす　出御なる

(ニ)動詞形なきもの　隨分(副詞)御勉强(動詞ナサレテ(連用))可然候　非常に御働(動詞ナサレ(連用))奉感謝候　御繰合(ナサレテ)御出被下度　ひとつお上り(動詞ナサレ(命令))

(ホ)接尾語を添ふるもの　腹む(孕)　深む　靑む　貴む　危む　痛む　窪む　明らむ　唐めく(めかす)

うめく　ひしめく　きしめく　ひらめく　おほめく　きらめく　さゝめく　そゝめく

生めく　學者ぶる　大人ぶ　塵ばむ

神さぶ　涙ぐむ　やじる(彌次馬ヲスル)　得手る(得手)　くびる縊る(首る)　退治る

罪なふ　音なふ　トなふ　友なふ　荷なふ　商なふ　蠱なふ呪　仇ふ　行ふ　あざなふ

香ぐ嗅　股ぐ跨　肩ぐ擔　綱ぐ　項ぐ　味はふ　業はふ　賑はふ

恥らふ　休らふ　(中らひ)名　問ふらふ　數まふ　わきまふ　見まふ

あげつらふ　さ丹づらふ　かゝづらふ　しつらふ

黄ばむ　氣色ばむ

筋ばる　氣ばる　散らばる　四角ばる（だつか めくか 張るか）　息ふ　うたふ訴　集侍（ウゴナハル）　疊有（タゝナハル）　横たはる　遲（オソ）

なはる（見ソナフ ソナハス）

早る　澁る　赤る　強る　直る　皮肉る　直す　正す　白く　丸ぐ

の如し。

(2)代名詞より　は無し。唯「誰何（スヰカ）す」といふ語あるも「誰何」といふ漢語動詞をサ變に活したるまでなるべし。

(3)形容詞より

（イ）語根に「み」といふ接尾語を添へてサ行變格に活したるもの

重んず　輕んず　安んず　難んず　疎んず　嘉みす　なみす（サミス）

家なる妹いぶかしみせん（萬十二）

あづさ弓ま弓つき弓年を經てわがせしがごとうるはしみせよ（伊勢物語）

柔にして人になつかしんぜられよ（いそほ、中）

の中、重んず以下五語は形容詞の語根に「ん」の添はりたるものなれど、「嘉みす」の「み」の接尾語添はれる語あるより惟ふにんはみの撥ねたる音なるべく、それより「す」をも「ず」と濁りたるなるべし。

能くす　完うす　忝うす　逞しうす

右は形容詞の連用法よりサ行變格に續きて活きたり。

諳にす（ソランズ）　先にす（サキンズ）

(ロ)接尾語を添ふるもの

あはれがる　賢がる　強がる　廣がる（ニナル）　廣む　畏む　慥む　高む　貴む　赤む　疎む

早む　輕む　淸む

赤らむ、しが葉の比呂理いますは大君ろかも（記下）猛る（梟師、倭建、建部（和名抄　イロアノ郡　太介無倍））

花やぐ　若やぐ　たをやぐ　速く（スミヤ）　鮮く　和ぐ　薄る

の如し。

(4)聲貌より　きしる　すゝる　かむ　すゝむ　きしむ　あく　とゞろく　うつ

なげかしがる（クアル（ニテ良變ノ轉カ（非ナラン）））　心もとながる（ニナル義カ）

(5)副詞より

(イ)佐行變格に活くもの　ふら〳〵す　くら〳〵す

(ロ)接尾語を添ふるもの　いなむ　ざはつく　ぶらつく

イナ（否）の根本をいへば感動詞なり。

(6)動詞の疊語

行きゆきて　たどり〳〵て　（かもめ）たちたつ　流れ〳〵て　あり〳〵てわびしき目をも

みる哉　たゞのみ（熟語　副名）

これにて一先動詞の章を講了せん。

第六章　形容詞

一　種類形態

形容詞は活用の狀によりて四類に分つべし。

甲｛く活
　　しく活　△（富士谷氏ハヤク之ヲ在狀(アリサマ)トイヘリ）

乙｛なり活——「ことばのその」またさまことばとす
　　たり活

例へば

善し　善き……………く活

惡し　惡しき…………しく活

明・靜・速・爽 }なり……………なり活

漠然・忽如 }たり……………たり活

の如し。「月明けし」といはゞ形容詞ク活に屬するは勿論なれど、ナリ活なる「月明なり」といはゞ動詞態にてもあれば近來形容動詞と名づくる學者あり。

(1) ク活　好「く」「し」「き」「けれ」と活用す。

(2) シク活　宜「しく」「し」「しき」「しけれ」と活用す。さて「宜し」までを語根と見なしてク活と一致せしめんとする說もあり。然れども

大人し（名）　久々し（副）

の如き形容詞は「大人し」「久々し」を語根と見ざるべからざる不都合を來すべし。

(3) ナリ活　助動詞「なり」によりて活用するものにして、明「なら」「なり」「なる」「なれ」と變化す。

○名詞と形容詞との轉用

達者（ナリ）　丈夫（ナリ）　上等　最下

○動詞と形容詞との轉用
　拔群ナリ　勉强ナリ　自由

(4)タリ活　助動詞「たり」によりて活用する者にして、茫漠「たら」「たり」「たる」「たれ」と變化す。

漠　　　　　　鏗爾（接尾語）
茫漠　たり　　忽焉
岌々　　　　　忽如　たり
　　　　　　　忽然
　　　　　　　牢乎

の如し。

(5)カリ活　ク活シク活のラ行變格「あり」と合したるものにして、好「から」「かり」「かる」「かれ」と活用す。

「多布止可理家利、米太々可利雞利」
「於豆閉可良受夜」(佛足石歌)

「好からむ」を「好けむ」ともいふ、「け」は「から」の變なるべし。
　戀しけば來ませわがせこ(萬十四)

以上五種の活用を圖示すれば、

	ク活	シク活	ナリ活	タリ活	カリ活
第一變化	○	○	なら	たら	から
			バ　ズ　ム　マシ　シム		
第二變化	く	しく	なり・に	たり・と	かり
	バ　ト　トモ		キ　ケリ　ツ　ヌ		
	テ　シテ　ヤ　カ　ハ　モ　ゾ　ナム　コソ　ノミ　バカリ				
第三變化	し	し	なり	たり	かり
	ヤ　ナ　カシ		トモ		
第四變化	き	しき	なる・の	たる	かる
			メリ　ラン　ベシ　ラシ　マジ		
	カ　カナ　ヲ　ニ　モ　ガ				
第五變化	けれ	しけれ	なれ	たれ	かれ
	バ　ド　ドモ				
第六變化	○	○	なれ	たれ	かれ
			ヨ　ヤ　カシ		

の如し圖の中片假名は所屬の「てにをは」なり。ナリ、タリ、カリ活はすべて動詞に準ずべきも、第一變化には受身、可能の「る」つかず。同活第二變化には助動詞完了の「つ」「ぬ」稀に添ふことあり。「降りつゝ」「ありつゝ」の「つゝ」「たり」「たし」の助動詞も附くことなし。ナリ活の「に」、タリ活の「と」を除く外三活ともに助辭「て」「して」につゞかず。第三變化には禁止の「な」添ふことなきなど、動詞との差を見るべし。

時鳥無流（ナカル）國にも行きてしが（萬八）

好（ヨ）かり相（さ）だ

藤原隆信朝臣集　廻文しなだまもをかしなまひもまてしばしにまもひまなしかこともまたなし

明月記、寛喜二、五、二十日　いかなようゐまさずと申

吾妻鏡、元曆二、四、十五日　不覺氣なもの

徒然草、六二　すぐなもじ

○「の」の形容詞の事（よほど書き加へざるべからず）…………に進軍の日。…………に絶好の日。

まめやかの心の友には（徒然）　特別の

○口語を入るべし。

好かり相だ　高かりげだ

二　法

西洋の文法には、形容詞の法をとかざれど、國語にては然ること能はず。今動詞のと同じく直說法、命令法、前提法の順序に述べんとす。

(1) 直說法

(イ) 終止法は第三變化を用う。

〔附言〕シク活の「し」

基俊集　家苞にさのみな折りそ櫻花山の思はんこともやさしし

永長二年東塔東谷歌合　秋深み夜風烈しし宜しこそ四方の里人衣うつなれ
盛衰、祇王　歌の音のよさよ、いししいししとほめられけり
逆艫　平家のもれきかんもをこがましし
長門本、競　ほししほしゝとおもはれける
無住法師雜談抄　何事も常にみるまはいとほし、いつもあかぬは粥と大乘
カリ活
萬十二　吾妹子にこひすべなかりむねをやき朝戸ひらけば見ゆるきりかも
萬十七　わがせこにこひすべなかりあし垣の外になげかふ我しかなしも
忠岑　おもひやる心の程に果もなし風の到らぬ隈は多かり
(ロ)連體法ば第四變化を用ゐ、法の大體に於ては動詞と異なることなければいふべき事なし。
(體言ニ「の」ヲツクルモノ、說明ヲ入ル)
(ハ)連用法は第二變化を用う。中止法副詞法あり。
a、中止法
b、副詞法
中止法には常にて　して　を添へても言へど、副詞なるは少し異なり。
彼は善く此は悪し

善くは中止法にして「善くて」「善くして」といふを得べく、

月明に星稀なり

の「明に」も中止法にして「明にて」「明にして」といふを得べし。

明に知る

「明に」は知るを形容して副詞法なり。又

彼はよく談ず

の「よく」も副詞法なれども、共に「明にて」「よくして」と「て」「して」を添へず。

斷然として行ふ

「斷然として」も副詞法なれども、「斷然とて」とはいはず。即タリ活の「と」には「て」を添へざるなり。

(2)命令法　は第六變化を用う。

人の爲 よかれ と思ふ

「よかれ」は形容詞の命令法なるが、名詞の副格に準じて「と」と受けたり。

男兒は雄々しかれ

男兒は堂々たれ

人には懇なれ

○臆病であるな(尋小修身書、四)

○……、………であれ（同上）

ともに命令法なり。今、動詞の命令法と比較してその意義を考ふるに、動詞によつて命令を與ふれば必ずその受くる所あれども、形容詞によつて與へたる命令はその受くるものなし。例へば

能く學べ　　善き事をせよ

といへば被命令者には學ぶか、學ばぬか、するか、せぬか必ずそこに應ずる者あるべし。形容詞によつて

容態よかれ　　品性高かれ

と命令するも被命令者はその命令に對して直接に應ずる事能はざるべし。畢竟一は直接の命令、一は間接の命令なり。形容詞は性質狀態をあらはす詞にしてその性質狀態は他の命令によつて如何ともする事能はざれば、形容詞のはその實、命令にあらずして希望なり。

然れども人間以上の威力あるものはその希望を命令となし得べく、その際には動詞の命令法の意義と全く相一致す。これによりて考ふるに形容詞にはもと此の法なきが、全く動詞の力を假りたる者なるべし。卽ち

白かれ——白くあれ（ラ變命令）

堂々たれ——堂々とあれ（ラ變命令）

懇なれ——懇にあれ（ラ變命令）

の本態に歸すべし。

(3)前提法　ナリ活、タリ活は動詞に準ずれば今いはず。

〔い〕甲順態

一、假定　第二變化にばを添ふ。

善くばとれ　悲しくば泣け

二、確定　第五變化にばを添ふ又不定となる。

よければとる　苦しければなく

乙逆態

一、假定　第二變化にとともを添ふ。

よく（とも／と（古））とらじ　悲しくとも泣かじ

二、確定　第五變化にどどもを添ふ。又「不定」となる。

よけれど　よけれども

位高けれ（クテモ／クトモ）ども驕らず

〔ろ〕をにもが時は故にてはてもの添ひて準前提法となる事、動詞に同じ。

〔は〕第二變化にもを添へて逆態前提法とする事あり。

錢なくも憂へず（なくも：クトモ（假定）／ケレド（確定不定）／キモ（準前提法）／クテモ）

の如し。「無くも」は「無くとも」に近く、「なきも」は「無けれど」に近し、蓋し「無くも」の語法は鎌倉比よりあり、徳川時代の文にも隨分見らる又先年萬朝報の懸賞文に見えたる

牛羊放つ野はなくも堤を築く栗なくも働く腕に汗垂りて懶者を鞭うつ氣概あり

の如き「も」は「ても」の略せられたるならむ。

〔に〕ク、シク活に本來前提法なし。その第一變化を缺くも此の爲なり。よし形容詞に第一變化をおきて「好くば」「惡しくば」とするも動詞の如く「ず」「む」の添ふことなく、又それに「よくとも」とトモの添ふも動詞に準せず畢竟「よくば」「よくとも」などの假定前提法は、

よく ｛ アラ ば ／ アリ とも ｝

の意にて順態逆態ともに動詞「あり」の略せられたるもの、卽「よく」を連用法第二變化と見るべきなり。而して「ば」「とも」は形容詞の所屬にあらずして動詞所屬の「てには」なることを記憶すべし又

天氣よしとて遊ばじ（ず）(正)

天氣よしとも…………(誤)

前者は正しく後者は誤れり、「よし」は名詞の副格にして「と」にて受けて「好しといひても」「よしとあ

りても」の意味なり。「好しとても」とあらば「も」は前に述べたる連用的逆態前提法なり。後者の如く第三變化に「とも」を添ふる前提法はなきなり。

高しとも思はず（名詞副格）
よしともよし

などは誤なけれど、

家貧しとも憂ふること勿れ

などは前の言方と紛ひて誤れるなるべし。逆態前提の假定ならば第二變化に「貧しくとも」とあるべきなり。

玉葉　さそふべき木の葉も今は殘らねばはげしくと（アリ）ても山おろしの風
ふるさとはこひしくと（アリ）ても吉野山花のさかりをいかで見すてん

さて又確定前提法にては右の如き省略なき樣なれど、實は然らず。まづその第五變化の性質を述ぶべし。

記下　梯立のくらはし山は佐賀斯祁杼

多けれ｛バ・ドモ｝…………ク活第五變化
多かれ｛バ・ドモ｝…………カリ活第五變化

ク活第五變化も、カリ活第五變化も意味に於いて異なる事なし。而して萬葉時代などは多くカリ

活の「〇〇かれば」「〇〇かれども」「けば」「けど」を用ゐてク活の「〇〇ければ」「〇〇けれども」は甚少し。（萬五、いたはしけれど、同五、和可家禮婆道行き知らじ）これより思ふに「かれ」といひ「けれ」といふ、もと「くあれ」の約にして「あれ」は矢張動詞ら行變格なるべく、「かれ」は規則的に、「けれ」は非規則的に音の約れるなるべし。（或は「きあれ」の約音とも思はる）「きあ」「くあ」の「か」となる事は勿論なれど、又「け」となる事も數多例ある事なり。

こゝにおいて前提法も命令法と同じく、形容詞の本體にあらざる事を知るべし。かく國語の形容詞は常に動詞に引かるゝ趣あり。

因にいふ形容詞の語根と、動詞の語根とは大に異なる處あり。形容詞のは語尾なくとも意をなせども、動詞は語尾なくては意をなさず。

白（シロ） クシキ　（形容詞）

書（カ） カキクケ　（動詞）

の例について思ふべし。形容詞の語尾の「ク」は「コト」などの義ありて副詞を作るもの「シ」と「キ」とはもと「チ」なりしが二つに別れたるならむ。羅馬字のchは「シ」「チ」「キ」と發音せられ、我が東北地方及支那（或は一般の幼兒）の發音にも「チ」「キ」を混ずる者あるなど參考すべし。

三　諸用法

(1) 名詞になること

(イ) 語根

白　青　赤　高　圓　酢

飛驒にて前をたかといひ、伊勢にて空をたかといふ

記傳三　高へ上る

山梨、日向、岡山、佐賀にて長一尺といふ

他名詞と熟するものに多し。

鼻高

の例にして、鼻低と熟するものにはあれど、唯「低」といはず。尚

端近　遠淺　鹽辛　日長　氣短　幅廣　目太　黑塗

の如し

(ロ) 第三變化より（人名ニ多シ、義、齋、正、棟）

からし（辛）　すし（酸）　おもし（重）　あかし（明）

お人よし　仲よし　生絹　よしあし

御存じなし　心なし　意氣地なし　骨なし　たのもし(頼母子)

但、おしろい(白粉)は第三變化「おしろし」とある「し」の音便にあらず、「おしろき」の音便にて、古は「しろい物」といひしなり。

(ハ)語根にみさげを添ふ。但シク活にありては第三變化に添ふ。

高 ─ み　トコロ　　憎しみ(シク活ノ意ニナレリ)
　　 さ　コト　　　腹立さよ(ハラダチ名詞ニツケタル誤)
樂し ─ げ(氣(様子)　相)

「げ」はナリ活となりて名詞にならぬもの多し。

悲しげもなく…………名詞
いと悲しげなり…………形容詞

の如し。

◎「げ」は名詞にも動詞にもつく。こゝにも除くべきか。

ありげ　熟語
さてのみ御心は通はせ給ふげ(連體名詞)なる御けしきなれど(大鏡、貞觀殿ノ尚侍の段)

厭味
翁みづから(みナリ)もわらはげて(めきてナリ)なんひとりうたひて云々(伴蒿蹊、門田の早苗)

ねてばかり居るも氣づまりさに雪のけしきも見ようと思ふ(廿四孝、ヒデ藏母詞)

◎さげ、げさ重用

にくさげ(天德歌合判詞)

うらゝかげさ(源氏、初音)　美しげさ(同上)

御きみのはづかしげさなり(玉葛)

さる歌のきたなげさよ(伊勢、百二段)

又「樂しみ」は動詞マ行四段活の第二變化より來る者と見るべし。

樂しみ(シク活尾)　(したしみ、かなしみ、あやしみ、いつくしみ、くるしみ、可笑しみ等)

樂(動詞二變化)　(いつくしみ　くるしみ等)

の如くにして今は一般に動詞の方の語氣なり。送假名も形容詞、動詞によつて右の如くすべし。

(副詞をつくる接尾語、參照)

「面白味(オモシロミ)」などの「味」は本項の「み」にして宛字なり。酸味の「味」も然り。正しくよまば字音「サンミ」といはざるべからず。味覺の味の文字と接尾語と偶然一致せるなり。但、卵の白身(シロミ)の「み」は「身」なり。

(ニ)第二變化より

近く
遠く
多く

(近く)チ望ム
(遠く)ガ、、
(多く)ニ、、

の如し。此の例は少し。

(ホ)第二、第三變化を體言にし、に|の|をそふ(なほ眞の名詞にあらず。ロ)にふくめて可なり)

時じく|のかぐのこのみ(萬十八、登吉時支能香久乃菓子乎)

早く|の事

戀しく|の多かる我

古く|より

母なしに|汝生りけめや(推古紀)

來る人なし|の宿の庭(新古十六)

(2)熟語となるとき

ク活は語根のみを以て他語と熟す。シク活は第三變化より。

高山　細長し　薄暗し　遠鳴(ナリ)(ナル動詞ハ非)　高光る 高ゆく　近づく 近よる　遠のく 遠ざかる　正無事(マサナ)

いせの海の渚によするうつせ貝むなしたのみに世をつくしつゝ(六帖、三)

動詞と形容詞とは熟せざるが原則なり。

むなし|煙　さかしめ|

かうばし|飴　かなしめ|

かなしいも|　長々し夜|

くはしめ　空手（ムナシテ）（神代紀）

いかし鋒

（「遠々し古志の國」などは別語と見る）

つまし（シク活ニヤ）道

かたしは（堅磐）（記傳ノ説）

特例　あたら夜　友なし千鳥　徒手（ムナテ）（山家集下）　涼風（スヾ）　優男（ヤサヲトコ）

△みがほし（主・連體）君　よしなし（主・連體）事

(3)感嘆的言方

語根が終止、或は連體の職務をなす。

（イ）終止

あなたふと（尊）

現今　おゝこは（怖）　おゝあつ（熱）　おゝいた（痛）

（ロ）連體

あな面白の景色やな

ありがたの心

あなにく（憎）の鳥や　おだやかの御いらへや（夕霧）

後拾遺十二　いかにせんあなあやにくの春の日や夜半のけしきのかゝらましかば

詞花十　朝な〳〵鹿のしがらむ萩が枝の末葉の露のありがたの世や

シク活は第三變化を用う。

あやし(怪)のさまや

（終止　あな（おそろし／あやし））

の如し。

新古今十六　有明の月ばかりこそ通ひけれ來る人なしの宿の庭にも

これは普通の終止にそへたるにて、(ロ)よりは感嘆の意少し。

後撰　郭公きるる垣根はちかながら待ち遠にのみ聲の聞えぬ

同　關こゆる道とはなしにちかながら年にさはりて春をまつ哉

續後撰　みちのくのちかの鹽かまちかながらからきは人にあはぬなりけり

(4)疊語　すべて語根を疊めばシク活となる。

長し――→長々し　深し――→深々し

角い――→角々しい　久し――→久々し

事々し　忌々しなどなほ多し。

重々し　輕々し　遠々し

物々し　女々し　馴々し　つき〴〵し
にぎ〳〵し　うひ〳〵し　おどろ〳〵し
うや〳〵し　くだ〳〵し　毒々し　美々し　凛々し

(5) 一語兩活

(イ) ク活とナリ活

明・あきらか ｛ 明ーけ　し ／ あきらかなり

ちひさし ／ さひさなり ／ ちひさやかなり(帚木)

兩様のいひ方殆ど意を同じくし、かはけに當る。

寒・安・惜し ｛ けく は からく なり ／ けし・けき とはいはず

明ら・しづ・ゆた ｛ け ／ けれ トイフハナキヤウナリ(廣文典) ごとけれノナキニ類ス

「あきらけし」を「明し」と書かば「あかし」と讀まるゝ恐あれば、「明けし」とけを添ふるなり。もとより語尾にもあらねば讀まする上の便宜なり。此はもとケク活ともいひたれど、ク活に含めてよし。

速カケ（スムヤケシ）　爽カケ　遙カケ　靜カケ　長閑カケ　和（軟）カケ　暖カケ　青やか（夕顔）　あてはか（同）

高ヤカ・ラカ　鮮（アザヤカ）　あざ〳〵（平家）

など皆同例なり。

而して「けし」を「かし」といふは近頃の訛なり。

暖カ（ケ）き家庭　軟カ（ケ）き物

の如し。「暖（ケ）し」「軟（ケ）し」といへば古きやうに思はれて、ナリ活「暖（カ）なり」「軟（カ）なり」の「か」をとりて「暖（カ）し」「軟（カ）し」とはいふなり。此の方言、今は特例として許容せらるべく、文法に於ける許容はかかる場合に行ふを以て當れりとなす。

梓弓よらの山べの之牙（繁）可久爾いもろをたてゝさねとはらふも（萬十四）

あひ見てはいくひささ（萬、寛水）にもあらねども年月のごとおもほゆるかも（拾十二）（コレハ萬葉十一幾久毛（イクバクヒサモ）（古）（イクバクニシモ）（折）チヨミ誤レルナリ）

されば口語の

暖カな（暖カなり）　細カな（細カなり）

は正しく、

暖カい（暖カし）　細カい（細カし）

は訛れる方なり。

従つて語根にさ及みを添ふる時も注意せざるべからず。

あたゝけさ…………(正)　　のどけさ…………(正)
あたゝかさ…………(不正)　のどかさ…………(不正)

「のどかさ」の「のどか」を語根とすれば「のどかさ」としてもよきやうなれど、さみけはク、シク活に附くが本體にして、ナリ活に附くは特例なれば、矢張「のどけさ」といふべし。

ナリ活の「立派」は「立派さ」ともいへど、「立派み」といはず。

あたゝかげ(末摘花)
あはれげに(平家、二)
康頼の弟の僧……あまりの無慚さに(長門本)
あはれさも(朝顔)

同じ　じく　じ　じき(じ)　じけれ
同じ　なら　に なり　なり　なる　なれ

多し　く　し　き(い)　けれ
多い(大)　なら　に なり　なり　なる　なれ

もと「多い」は現今の所謂「多い」といふ意味と「大きなる」といふ意味とをふくみて、「多」「大」いづれもおほしといへり。今位に正從といふを古は大廣といひて「大き(オホ)」「廣き(ヒロ)」といひしかば、今も正三位を「オ

ホキミツノ位」などいふなり。

(ロ)ク、シク兩活

うたて{く／しく}　「うたてく」（萬葉、うつぼ）は一般に、「うたてしく」は撰集抄に用ゐられたるを見れば、早く兩活併用と見ゆ。

○寶物集　金はうたてしきものとおもふが故にすつるなり。

いちじる{く／しく}　○源氏、末摘花、處女、明石、初音などには志久活。

「しるく」とのみも云へり。

不完全なれどもク活なり。

まだ{き／しき}　「いまだしき」ともいふ。

○續紀、宣命　「許貴大斯伎意保伎天乃事乎」

あつ{く／しく}　源氏桐壺に「あつしくなりゆく」と見ゆ。　痛(イタ){く／しく}

深{く／しく}　淡{く／しく}　古{く／しく(方言)}

前項疊語がシク活となり、或はこれらク活がシク活となる例によりて考ふるに、シク活は性狀を

更に形容的にいふが如し。而してその意味を他語にていへば、

まだ〳〵し
あつ〳〵し
痛々し ― イタ相な
女々し
深々し ― アツイらしい
古々し
淡々し

の如し。之に反してク活は性狀を直寫する趣あり。

「大人(オトナ)し」といふが如きは、もと「大人らし」といふ意味なりしならむも、今はたゞ溫順などの心に用う。

よき人 ｛善人／貴人｝

よ(ろ)しき人 ｛凡人、通常人／先、適當せる人｝

「よろしき」は「ろ」といふ無意義の語(或はろはみの轉か)を添へたるが、「よき」をシク活に活したる者なるべし。今は下注の如き意味の相違を見る。

(6) 不完全(混合)活用

まだく――まだき　もし――もしく
けだし――けだしく　しばし――しましくも(萬十九)

少し　しく|「少し」とも云ふ――しき|徒然草、落輪譜などに用例見えたり。字鏡、俩小良。須古志支奈留
少し　なら|に|なり　なり|なる|の　なれ|

の如きものなり。

副詞をつくる尾のく|

○
ま　さきく(し/けれ)　ハイカヾ

おほき(く/し)　然く　悉く

漸く　安けく　いはく

(7) 特殊の語

如(く/○)　し　き　けれ

この「如し」は特殊形容詞といふべし。物集博士は形容詞にいれおかれたれど、大槻博士の助動詞に立てられし以來之に從ふ人多く、己も從來は助動詞とせしかど今は又獨立詞と立てたり。

如く　なら（バ・ム・ズ・シ・ムシ）　に（テ・シテ）　なり（キ・ケリ）　なり（トモ・ト）　なる　なれ（バ・ドモ）　なれ（ヨ）

かくナリ活にも活きて第五變化の「如くなれ」あれば、ク活なる「如けれ」を用うる事なし。其の用るらるゝや、

い　名詞代名詞　領格のが
ろ　動詞形容詞　連體法　}如し
は　連體法　名詞領格が

い　花の　愚劣我が　}如し
ろ　流るゝ　貧しき　}如し
は　流るゝ　貧しき　}が如し

○支那如きが（尾的ナド）　油やうの者（の如き）
……風狀（尾）
此引（コレ）程位式

の如く、連體形を受くるは形容詞として類なきものなり。「ごとし」の「ごと」は「事」にして體言なれば連體法に連るなり。かくて「ごとし」の「し」は用言なれば前體後用の詞ともいふ。意味も「樣なり」と謂ふべ

く、「樣」は體言にして連體に連るところ用法全く同じ、
尚「ごとし」に就いては國學院雜誌四十年一月の分に詳しく論じおきたれば就いて見るべし(附錄參照)

(8)名詞より「ナリ活」に轉ずる者

夢中、勝手、上手、丈夫、十分、一杯、源助 ｝なり

私、公、巧(動詞ヨリ名詞)、だて(動詞ヨリ名詞)、伽藍堂(殼堂カ)、角、本氣 ｝なり

大人、徒目(ムダ)、事、大儀、變、大變 ｝だ

の如し。

四　形容詞を造る接尾語

(1)くしき

知る{く　し　き　けれ

「知る」といふ動詞に「く」「し」「き」の接尾語添ひて「著(シル)し」といふ形容詞となる。尚「執念し」「眠し」「四角い」「面倒い」「へぼい」「長(タケ)し」も同例なり。

(2) しく　し　しき

名詞につけば

大人　事々　骨(コチ)々　勞々　際(キハ)々 } しく　し　しき　しけれ

敬々　業々　宗々　長(ヲサ)々　神々 } し

不具(カタハ)し　由(ヨシ)々しく(初音)　才(ザエ)々し　生(ナマシキ)(香兼抄)　男々し

となり、動詞につけば

狂は(四段第一變化)　行か　望ま } し

立たし(正し、直立の形)　忌(イマ)はし　心(ウラ)はし(愛)　潤(ウル)はし(愛、善、美カ)

願は ── くはし(美)　うつくし
慕は ── 食はし(細、精)
向は ── ○願はし、望まし、などを他に對して言ふときは敬語の關係を生ず。

の如く、

狂はし＝狂ほし　厭はし＝厭ほし　戀ひし＝戀ほし　(萬葉集五に「百鳥の聲の古保志枳」とあり)

はいづれも轉音なり「痛まし」といふに又「痛はし」あるは、「ま」より「は」に轉じたりとも見らるべく、「痛はる」の語もあれば、或はその語の四段に活きてかく形容詞になり來れるか詳かならず。なほ「歎かし」の「なげかはし」と「は」の添はれるは「ナゲカフ」といふハ行四段活より來れるなり副詞には

甚(ハナハダ)
未(イマダ)
うたて
おほく
} し ── いとゞし　けにくし　きらくし　うべくし

の如し。

(3) けく

のど　よけく　いとゝけき
露(名)　あしけ
靜(形ノ語根)　けし　平けし　矢の繁計久(かるこゝノ義)
さや　明けし　むくつけし　あはつけし

古今、雜　世の中のうけくになきぬ

萬九　筑波嶺のよけくと見れば

萬一　みよしのゝ山下風の寒久爾

貫之集　なかけくに色をそめつゝ

ク、シク活よりけくとなるもの

いらなけく記　かなしけく紀

うけく萬　つらけく萬　寒けく

をしけく　うれしけく

萬十八　黄金かも多能之氣久あらむと

けくの第五變化稀なり。多くかり活にして言ふ。葵「何にしのぶのといとゞ露けけれど」

(4) たし

重(オモ)(重し)
平(扁平)
ねむ(ねむし)
臈
煙(けむし)
めで
こち(言痛)
うれ(憂)
冷(ツメ)
口幅っ
じれっ

} たし

(5) らし シク活

男
女
學者
} らし

但、古今集神樂歌などの「深山には霰ふるらし」の「らし」は助動詞なり。

(6) なし ク活

はした
覺束
おつか
いわけ
しどけ
かたじけ
勿體
うしろめた
をさ（幼）
あぶ
屹度
すく（少）
切
いら
如在
きた
難（カタ）

なし

荒け
さが
せはし

此の「なし」を打消の「無し」と思ひ誤ること多し無覺束、無端、無勿體などゝかくは、宛字なり、「はしたなし」と云ふも「はしたなり」といふも、「切なし」といふも「切なり」といふも皆同義なり「うしろめたなし」を「うしろめたし」といふなど思ひ合すべし。

尙次の例を檢せよ

古今　あはれともうしとも物をおもふときなどか涙のいとなかるらん

後撰　あしのいとなき戀もする哉

日本後紀　大同九年の詔詞、正月云々、雜亥毛繁久無暇支月利奈

篤胤　月花をわれもあはれと見てはあれどあはれとうたふいとなかりけり

御堂關白集　いとけくて春の都とみるからにうゑけん花のもとをしぞおもふ

今昔　うしろめたなし

すげなし(すげむはすげなくなること)

伊勢　さる歌のきたなげなさよ

古今著聞、義家法師の妻に忍ぶ段　のがれかたなくて

長門本平家　荒けなき兵

もつけない、(武藏、川越在、ツマラヌ)

オボツカン(丹後)

徒然ナカ(佐賀)

さびしない(福井)

(7)がまし、がはしも同語なるべし。名詞、動詞の連用法(轉名)に

をこ(嗚呼)
へだて
かごと(託)
差出
違背
色
賄賂
躾
みだり
} がまし

それは恐れがましいことでござる(樽聞)　(入ツタ)

初音　罪えがましく心苦しとおほす

(8) はゆし

鹽はゆし
面(おも)はゆし

かはゆし（可恥也）

(9) 勝なり

天氣
雨
晴
}がちなり

(10) ほい　口語

濕っ
仇っ
忘れっ
艶っ
子供っ
ぐちっ
おこりっ
安っ
むせっ
}ほい

(11) こい

あぶら
やに
ねばり
すべ
しつ
ひや
} こい

(12) どい

際
する
灰汁（アク）
辛（シン）
} どい

(13) だらけ

埃
泥
} だらけ

(14) がはし

(15) かし

みだり
亂（ラウ）
がはし

あるべ
古め
はづ
あぶな
よわ
かし

〇もどかし、なつかしなどの語尾の類推もあるべし。そゝつかし（そゝくヨリカ）

(16) かまし　厚かまし

(17)
走り
食ひ
通しなり

(18) らなり
べらなり
わびしらに

妹こひしらに

(19) たらしい

惨(ムゴ)・虚(ウツ)　}たらしい

(20) やかなり

際・速(進(スミ)ヤカ?)・あざ・あて・にぎ・さわ　}やかなり

(21) はか

浅・あて　}はか

(22) まし

あらましう(若紫)

(23) はし

如何はし
かたくなはし(右京大夫)
そゝらはし
にぎはし

第七章　動詞の性相

第一節　自他性

動詞は、其の性質、事物を處分するものと、然らざるものとあり。前者を他動詞といひ、後者を自動詞といふ(自他といふ語、彼我の意に聞えて極めて不穩當なれども、慣行久しくて今急に改めがたし)

一　自他

雨降る　　風吹く

の「降る」「吹く」といふ動作は、何等事物を處分せず、卽ち物に及ばざれば自動なり。然るに

犬をうつ　　本をよむ

の「打つ」「讀む」の如きは、その動作が「犬」「本」に及び「犬」「本」を處分す「よむ」「見る」「考ふ」の如きは無

形の動作にしてなほ他動たり。又

自ら其の身を｛殺す
　　　　　　　刺す
　　　　　　　打つ

の「殺す」「刺す」「打つ」の如き、他には關係なく、われと我が身を處分する動作も他動なる事勿論なり。

蠶、絲を吐く

の「吐く」の如きも、蠶自身以外には關係せざればとて往々自動詞の如く誤らるゝことあり。是自他の本義を誤り、「絲」を處分することを忘れたるなり注意すべし。

動詞の自他性によつて、名詞に關する方式左の如し。

主格—副格｛有るものと／無きものと｝—自動詞

主格—處置格（略スベシ）—副格｛あるものと／なきものと｝—他動詞

二　自他の特例

動詞の自動性他動性は明に別たるゝ如くにして、而も中には頗る別ち難き特例も多し。（學者の異

說もありと知るべし）

(1)一語兩性　一の動詞にして自動他動の兩性を併せもつもの。

(イ)自動を他動に

鳥天に舞ふ　　舞を舞ふ

馬に乘る　　馬を乘る（御する義なり）

事去る　　妻を去る

○七人つれて入り給ふ

上段の「舞ふ」「乘る」「去る」の如き自動詞は、下段の如き文にては全く他動詞となれり。

「何は何なり」といふ

ちりん／＼いふ

ぐづ／＼いふ

何を何といふ

この「いふ」は口にて言ふことにして「いふ」といふ言葉の本義なれば自動性なるを

の如き「いふ」は他動性なり。

何は何なりといふ（自）　何は何なる事をいふ（他）

何は何なりと思ふ（自）　何を何と思ふ（他）

毒を仰ぐ(他)(ギ飲ム)　天を仰ぐ　扇にて人をあふぐ(他)

これらを對照して考ふべし。

(ロ)他動を自動に

笛を吹く(他)

風吹く(自)

風吹くは風動く程の意なり「笛をふく」「火を吹く」「息を吹く」等の「ふく」の義は各少しづゝの相違あれど、蓋し語源は「フヽ」とふく意味に出でたるらしければ「笛をふく」の如き他動性なるを本とし、「風吹く」の如き自動性はこれを襲ぎたるものと考ふるを至當とす。(又は兄弟の關係とも見るべし)

侍者を避けて(他)密議す

暑さを避けて(自)箱根に行く

「避く」は「遠ざく」といふも同義にして、もと他動性なり。「暑さを避けて」といへば「自ら暑さに遠ざかる」義にして自動詞といはざるべからず。

馳せて救ふ　○川あり、その川より孔雀出で來てその川を渡しつ

引ッ返す　○谷あり、その谷より龍出できて越しつ

などは今は全く自動詞として用ゐられたれど、もと「馬を馳せて」「馬を引ッ返す」といふ意味にして他動詞たりしなり。正しくは「はしりて」「かへる」といふべし。斯の例、武者言葉に多し。

身を寄す（他）
岸による波（自）
敵よせ來る（自）

波が岸に身をよせ、敵が身をよする意味なり「岸に寄る波」「敵寄り來る」といひて可なり。
「岸による波」「敵よせ來る」等の「よする」「よせ」は今自動詞なれども、もと「身を寄す」の「よす」と同性、

二時うちたり（自）
宇治川を金にわたす（自）

前と同例にして、「うつ」「わたす」ももと他動詞なりしを、こゝは自動詞に用ゐたり「うちたり」は「鳴りたり」「わたす」は「馬を渡す」といへば意味明かなり。
又佐變の「す」は「何々をす」といひて全く他動性なるを、

上野に物す
人に屈す
グヅグヅす

の如きは自動性となれり。

東京にして生る
此は金にして其は銀なり

本ハ一基爾爲°天（倭姫世紀、垂仁廿七年）

の「し」は今は「あり」の稍强き意味にして全く自動性なり。「し」の自動頗る多ければ注意すべし。

(2) 一性兩語

人にも{まして（自、モト他）/まさりて}　　黑白を{わく（他）/わかつ}

本をとり{いだす/いづ（他、モト自）}　　髮を{みだる（他）/みだす}

し・やり・驅け・ふり・怒り}出す

の如き、共に自動或は他動の同性にてありながら兩樣にいはるゝなり。

(3) 熟語のとき

(イ) 他詞と　動詞が他の詞と熟したるとき、其の原性をかふるものあり。

心配す（自／他）「配す」はもと他動なるを「心配す」といひて全く自動

自殺す（自／他）

絶命したり（命絶の義）（自・他）……………… 傳言す（自・他ニモ）（他）

心得（自・他ニモ）（他）　我折ル　意地バル

面クラフ　暇ドル

の如し。

（ロ）動詞と

雷を恐れ思ふ（＝雷に怖づ＝思ひ恐る）（自・自他）

待チ{カネル・ワビル}（自他）　踏ミ・逃ゲ}外ス（他・他）　探シマハル

泣キ明ス（自他）（他）　突合フ　切リ抜ケル（他・自自）

の「恐れ」「思ふ」の二動詞熟せば「恐る」の義にして自動性なるが、「思ふ」は「雷」を思ふ義の他動性なるべし。

賛成す（自・他他）　ハセ込ム　引キ違ヘル　詰メ寄セル

「賛成す」は同意する意味の時は自動性なり。

(4)自動に對する「を」

（イ）地位の活動するもの

鳥空を飛ぶ　・　道を歩く　　山を登る

「空に」「道に」「山に」といへば、その飛ぶべき、歩くべき、登るべき大體の位置場所を示したるが如く、「を」を用うれば「飛ぶ」は翩翻飛翔の樣を表し、「歩く」は歩行の樣を寫し、「登る」は現在登りつゝある其等の地位の活動を表すものにして、「に」の靜止固着的なるに反し、意味の發表に就いて活動的なるものなり。

又源氏物語、手習の卷に「年月を行く」といふ例あるが、年月が一歩一歩、行くが如き心あり。

(ロ)よりからの義

山を下る　　人の前を通る　　家を去る　　國を去る

の如き、古く古今集の「人を別る」の如きも同例なり。

(ハ)に就いての義

雷を恐る

は雷に就いて恐るる義にして、俗に「恐る」をば他動詞となせり。

泰平を喜ぶ　　國事を憂ふ　　茶を樂む　　人の奸策を怒る

の如き情意の動詞には此の義の「を」の例多し。

かの「谷間の姫百合」に「ゝゝゝに好く」とあるを或る人難ぜしに平田盛胤氏、古く萬葉集などに「妹に戀ひ」「妹に戀ふらく」「古に戀ふる鳥かも」等の例あるを摘出して辯解し、末松氏も謠曲「鉢木」に「鉢

の木に好きて」とあるを引きて論ぜしことあり。又義經記に「義經は女に喜ぶものと」などの例もあり此等すべて自動詞たる好證なり。されど說の立方によりては他動詞となりかはれる者とも見られざるにはあらず

造麿を喜び給ふ（竹取ニ多シ）

彼者禪法にすきたる由申候ほどに（放下僧）

かく能にすき給ひしに因て（太閤記、十四）

秀次公人を伐し給ふことを一入にすき給ひつゝ（同、十七）

（ニ）動詞に省略の義あるもの

家をかはる

は「家をかふ」といひても可なるべきを、さてはうちつけなるべければ、「を」を添へて、自動詞となして間接にいひなせるなり。而してこの「を」の下には「かへて」といふ他動の言葉を省略したる如く、

家をカヘテかはる

にて意義全きやうなり。

御湯をかゝらせつゝ御氣色なり（太閤記、十六）

難波ぢをゆきて來ませと我妹子がつけし非毛我乎多延爾けるかも

根を絕え　舵をたえ　雁などの羽をつらねたるが

尙此の外の例をあぐれば、

名をツケテ付く［カ四、自］

能をツケテつかん［自］とする人(徒然草)

名をや立テラレテ立ち［自］なん

人の女をヌスミテすむ［自］

乙女をトラヘテ道問へ［自］ば　タヾニハノラズ　タギマヂヲノル

ねを立テゝなく［自］

いをモノシテねぬ［自］妻や衣うつらむ(忍草、上句、あびきする船の夜さむを身にしめて)ヲ物集

氏ハねられぬ……………ト修正

腹を立テゝ立つ［自］

口をアケテ開いて［自］舌を出す

清きその身を汚濁の中にシヅメテ沈み［自］行く

あた國の人をえ戰はぬなり(竹取)

何を(考ヘテ)快(フサ)いでる

米洗ふ前を螢の二つ三つ

たらちねの母をわかれて蓑むしの又もやちゝと泣かんとすらん(高見)

萬十三　人寢味眠不睡而

同　上　眠不睡吾思君者いづくべをこの身誰とかまてど來まさぬ

榮花、歌合　なかぬ夜もなく夜も更に時鳥まつとて安きいやはねらるゝ（茂義忠イ）

の如し。蜻蛉日記に「腸をたゆるは秋の天」の文あり。「腸を絶チテ絶ゆる云々」と解せば解せらるべきも、文法上穩ならず漢文直譯には此の例多し尚、文調を整へんが爲にをを添へたるものあり。

澪標　深き山にあとをたえたる人だにも

萬十三　今更にこふとも君にあはめやも眠夜乎不落夢に見えこそ

三　自他と活用

(1) 同根同行

(イ) 自下二、他四　一の動詞が自動としては下二段に活き、他動としては四段に活く例なり。

裂く｛自　け　く　くる　くれ ／ 他　か　き　く　け｝　燒く　貫く　すぐる　切る　摩る　知る　解く

碎く　揉む　折る　取る　破る　使ふ　仕ふ

(ロ) 自四、他下二

開く　附く　向く　屆く　立つ　染む　黑む　弛む　入る　退く

止む　育つ　違ふ　番ふ　潜く　被く(カツ)　進む　澄む　従ふ　生く

滿つ　伏す　坐す　隔つ　並ぶ　集ふ　添ふ　叶ふ　込む　明く

(ハ)自上二、他下二　延ぶ

(2)同根異行

(イ)同活　成(自)なる(他)なす 四段活　足する　渡する　殘する　餘する　起する　鳴する（他鳴(カ)す　ハ古シ）

來する　見すゆ

(ロ)異活　上(ノボ)する（四自下二他）　寄する　外する（下二自四他）　表する　放つる　毀(コボ)つる

壞(コハ)する　越すゆ　倒する　燃すゆ（又もやす）　減(ヘ)する

(3)異根異行

(イ)同活　動(ウゴク／ウゴカス) 四段活　ハタラク／ハタラカス　驚(オドロク／オドロカス)　輝(カヾヤク／カヾヤカス)

急(イソグ／イソガス)　積(ツモル／ツム)　包(ツヽマル／ツヽム)　增(マサル／マス)　照(テル／テラス)

塞(フサガル／フサグ)　跨(マタガル／マタグ)　走(ハシル／ハシラカス)　○狂ハカス（信友）　○紛ラカス（平田）

(ロ)異活	過 スグ 上二 スゴス 四	盡 ツク ツクス	干 ヒル 上一 ホス 四	怖 オヅ 上二 オドス 四
	伸 ノブ ノバス	亡 ホロブ ホロボス	生 イク イカス	起 オク オコス	滿 ミツ ミタス
	免 ユル ユルス	明 アク 下二 アカス 四	解 トク トカス	更 フク フカス	費 ツヒユ ツヒヤス
	馴 ナル ナラス	當 アタル 四 アツ 下二	添 ソハル ソフ	代 カハル カフ	埋 ウヅマル ウヅム
	極 キハマル キハム	定 サダマル サダム	集 アツマル アツム	重 カサナル カサヌ	連 ツラナル ツラヌ
	○隔 ヘダタル ヘダツ	別 ワカル 下二 ワク 四	慴又怖於比也須(字鏡)		

第二節　被役相

「相」はスガタなり。自動他動は動詞の性質なるが、それが又被役可能使役等の言方の時はスガタを變ふる、卽動詞の相なり。相は通例助動詞によりて表さる。

被役相は又受身とも(所相とも)いふ。他より被る動詞の相なり。古は「しかせらるゝ詞」などいへり。

一　形式

甲　四段ナラ變格の第一變化に助動詞ル(下二)を添ふ。

乙 上下一二段カサ變格の第一變化に助動詞ラル(下二)を添ふ。

ル・ラル共に下二段活にして活用・法・附屬辭、一に動詞と同じ唯第一變化に同辭のラルの承けざるのみ。而して被役相はニヨリカラを添ふる副格名詞を標的とす。之を圖示すれば左の如し。

主格名詞 — 副格名詞 に・より・から（標的）

	第一變化					
四段、ナ、ラ變	れ、	れ、	る、	るゝ、	るれ、	れ
上下一、二段、カ、サ變	られ、	られ、	らる、	らるゝ、	らるれ、	られ

花人に折らる

忠臣惡人より讒言せらる

被役相ならぬ尋常の動詞折る讒言すなどは別に名目を立てず。強ひて言はゞ平相などともいふべし。その平相動詞の有する標的名詞は被役相になりても變ることなし。

我賊に金を盜まる

罪人吏に手に手枷をはめらる

金をは被役相の標的にあらず、盜むの標的(處置格)にして、被役相の標的は唯一にして賊なり。卽前表の如く副格名詞に限るものなり。

二 非情の受身

かゝる場合に動作を被るものの即被役相の主は我罪人にして金手枷にあらず。「我が金賊に盗まる」「手枷吏に罪人の手にはめらる」とやうに言へば、言はれざるにあらざれど、非情の物の受身となるは特別の事なり。西洋の語にては、

コロンブスの發見せられたる亞米利加

スマイルスの自助論は中村敬宇氏によりて飜譯せられたり

とやうに非情の亞米利加・自助論をも受身に言へど、我が國語にては然らず。受身は有情のもの、特に人或は人に擬し得べき物が消極的に他より動作を被る場合、特に迷惑する場合に用うるを最も普通なる方法とす。近來は西洋式の受身が隨分廣く行はれ、

書生に愛讀せらるゝ小說

書生に歡迎せらるゝ辭書

飼はれた猿と兎(竹内栖鳳)

日本人に消費せらるゝ米の高

など耳立たぬ樣になりたるは言語の大變動としては許容せらるべけれど、純正なる國語の語脉にあらざるを忘るべからず。今いへる

西洋式被役相次第に世に行はる

の行はるなどは古き語なれど、是は漢文の直譯より出でしならむと思はるゝさるは漢文にては此の「行」は尋常の自動詞なるを、國語にてはオコナフといふ時は他動詞にて、他に當るべき恰好の自動詞なき故に、已むを得ず他動詞の被役相を用ゐて自動詞に準へたるにて、形は立派に被役相なれど意は自動詞と見るが穩當なるべし。

春は霞にたなびかれ………冬は霜にぞせめらるゝ(忠岑長歌)

我が買はむとせし珍書人に買はれたり(イ)

われ我が買はむとせし珍書を人に買はれたり(ロ)

某珍書某氏に買はれて主を得たるを喜ぶべし(ハ)

(イ)の被役相の主は「珍書」なるが如き外見なるが、多くは(ロ)の意義にて「珍書」は處置格、主格名詞は省かれたるなり。(ハ)に至りて「珍書」が受身の主となるなり。

われ大切の本を蟲に食はれたり(文語)

私は大切の本が蟲に食はれた(口語)

此の口語にて「本が」の「食はれ」の主たること論なけれど、其の上に又「私は」といふ主もあることを思ふべし。されどかゝる區別明ならずして、非情をも受身にいふ轉換式なるも全然なきにはあらず。

木風に倒さる

床に懸けられたるは元信の筆なり

今昔、三十　紙端に被書たる物有あり

後撰　秋の野の露におかるゝ女郎花はらふ人なみわびつゝぞふる

空蟬　なぞかう暑きにこのかうしはおろされたる……屛風もはしの方おしたゝまれたるに

香川景恒に與へられたる書翰

子どもに喜ばるゝ菓子

なども隨分あり。

三　自動詞の受身

事實に於いて動作を被るその動作は他動性ならざるべからず。されば被役相は他動詞に附隨する事論なけれど、間接に動作の影響を被る事は自動性にもあり。我が國語はこの間接の影響を被るにも普通の被役相を以て表はすこと、他動性に於けるに同じ。是國語の一特徴たり。

母子に泣かる　（被小兒泣）

我早く親に死なれて孤となる

隣家に騷がれて安眠を得ず

客に來らる

閑人に長座せらる
たけ高き人に前に居られて見えず
さ樣なる事にあられば如何せむ

四　受與

等しく他動性にして受者より云ふと與者よりいふとの別なる動詞あり。その受動なるは動作を受くる事は被役相の如くなれども、言方において被役相なるとは異なり。

生徒學校より賞を受く（與へらるトハ語氣異ナリ）
與へられたる物にて滿足すべし（受けたるニアラズ）
甲乙に金を借る（貸さるト異なり）
入らぬものを貸さる（我ヨリ借リタルニアラズ）
月給を貰ふ（遣らるニアラズ）

教ふと習ふ、納むと取る、賜ふと賜はる、預くとあづかるなど皆この例なり。之を理窟づめに受動與動一方の被役相にて間に合せむとするは極めて愚なる事にて、且は被役相といふ事の眞意を會得せぬわざなり。第二項と共に心得置くべし。
とらはるハ受動とらへらるの變語と見るべし。

やる——與　くる—給　（馬來語カシは與ふくれに通ず）

撰集抄　小袖衣みな乞食共にぬきくれて

後爲（タメニ）（レテ）城中人ノ請ハ居ニ此居一

第三節　可能相

動作のなし得ることを表はす相なり。大槻氏は之を勢相と名づけ、被役相を所相といひ、平相なるをば所相に對して能相といへり。こゝにいふ可能相と混ずること勿れ。

一　形式

可能相は被役相と全く同じ形なり。

此の書は我に解せらる

我は一升の飯も食はる

此の二文において動作をし得る者は共に「我」にして、事實上可能相動詞の主は「我」ならざるべからざるは、一は「我に」とありて被役相の標的なると同形にして、目的たるべき「書」が却て主の形をとり、一は「我は」と主の形なれども「飯も我に食はる」と解せられざるにあらず、可能相と名詞との關係頗

る不明瞭なり。今之を

我この書を解せらる

我は一升の飯をも食はる

とする時は何の苦もなき様なれども、慣用の例は前者にありて、後者にあらず。案ずるに被役相は動作の表れたる現象にして、可能相はその現象を生ずべき力あるを表す者、即結果の形式を以て能力を表す者なれば、全然被役相そのまゝの文が又可能相にも成るべき理なれば、前者は之にも叶ひて正しき者と定めざるべからず。されど事實可能相に轉じたる義とすれば、「我」は主格なるによりて「我は」といふ形になりて、下に「我に」といふを略せるものなるべし、後者の「書を」「飯をも」といふも通ぜざるにあらざれど近代の語法にて、古は無かりしなり。是において形式を定むること左の如し。

可能相の動作の主は主格にも副格にもなる。

可能相の動作を受くる者は主格の形になる。

處置格は他動詞には打ち合へど、可能相とうちあはず。

其の主格の形なるは助辭なきものと、ノガハモゾヤカナムコソなどの添ふものとなり。

我はまだ死なれず

君は明日學校に行かるゝか

かく自動詞の可能相なるは疑義なし。(なほ次の例を考へよ)

萬二十　我が母の袖もちなでゝ我がからになきし心乎和須良延努可毛

隆房艶詞　いつとなき苦しさをあぢきなく案ぜられて

花宴　藤つぼわたりを思しいでらる

紅葉賀　上も藤壺の見給はざらんをあかずおぼさるれば

同上　こゝかしこあまたかゝづらひ給ふをぞまことに大人び給はん程にはむつかしこともやと覺えける

可能相の命令は少くて、希望となる。

さる事もわれにせられよかしと思ひ願ふ（彼トノ區別ムツカシ）

二　自然的可能相

尋常の可能相は動作のし得る義なるが、こゝに自然にしか成りて止むに止まれぬ意のものあり彼を消極的とすれば此は積極的なり。しばらく自然的可能相と名づく。

故郷のしのばるゝは誰しも同じ

あなたの空のみ眺めらる

筆とれば物かゝれ

老いぬればおなじことこそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ(拾、源順)
我はその精神に泣かるゝなり
待たるゝものは鶯のこゑ
彼が行く先こそ案ぜられれ
云々被存候(轉ジテ卑下ノ意ニナル)
なほこそ國の方は見やられれ
君もよゝと泣かれ給ふ
住めば住まるゝ世にこそありけれ(可能)

三 口語の一種

四段活が下一段活に轉ずれば、助動詞なくして可能相をなす。佐行奈行變格も或は之に準ず。(命令法を缺く)

此の本は讀めない
一日に十里はあるける
ボートが漕げるか
解せぬ事は言へぬ

あれは一人で死ねまい

是は平安時代より被能共に

人知れぬ心の内を見せたらば

おのがあたりを人に知れつゝ

おほし知れける

などいへる下二段活の名殘にて、處によりては今も二段活に言ふなり。

太閤記、十二　立身之勵み盡思惟觀侍れ共事之行（イケル）べき道もなし

佐渡古謠　浪がざんざめけあ目がねれぬ

榊　人しれず待ち聞え給ひけり

後拾、雜三　人しれずのみ

若菜　世の人わらへならんことを

露にもうて（打タレ）ぬ色

新古　おのがなみ（涙）に同じ末葉ぞ萎れぬる

たのめぬハ被能ノ義ナルベシ

後選、雜二　萬代と契りしことのいたづらに人わらへにもなりぬべき哉

中務集　人わらへなる若なつむ哉

今昔、三十　モシ舊キ男ニテアリシ人ノ故(ゆかりナドノ訛カ)ナドニテモヤ御マスラムト思フレバ申ザリツルナリ

四　や行下二段活の被能

奈良時代にはルラルを多くヤ行下二段にいへり。

老人は人に厭はえ

音のみし泣かゆ

昔しのばゆ

比登波加由登母(輕太子)＝人議(ら)ゆとも(記傳)

伊喩之々(被射)

中矢(イエ)　神武紀

被矢(イエ)　天武紀

此の名殘は「謂はゆる」「有らゆる」の二語となれり。方言には今も此の語法殘れり。

五　生得被能動詞

助動詞なくして被能の意を成す者の前第三項の下一段の如きは可能相と謂ふべきが、それに準ずべき特別の動詞の用例およそ三種あり。

(1)普通の形態を有するもの　前に擧げたる「知れ」の外に、

心あてに折らばや折らむ

吹く風にあつらへつくるものならばこの一本はよきよといはまし

此等は尋常の他動詞と見ては解すべからず、可能的動詞もしくは可能相の略格といはざるべからず。但しツクルは下のモノにて助くる模様もあり。

うらみわびほさぬ袖だにあるものを

人知れずこそ

人しらぬ苦痛

空蟬　數ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるはゝきゞ

落窪　身をわけて君にしそふるものならばゆくもとまるもおもはざらまし

古今　大ぬさのひくてあまたになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

記、衣通女王　君が行け長くなりぬ山たづのむかへをゆかむまつには待たじ（眞淵云待たれじ也）

大鏡、道長　四位五位の程は數やは知りし

(2)ヤ行下二段活の四語

山見ゆ＝山我に見らる（見らゆ―見ゆ）＝我山を見得

音聞ゆ＝音我に聞かる（きかゆ―きこゆ）＝我音を聞き得

昔覺ゆ＝昔我に思はる(思はゆ—おもほゆ—おぼゆ)＝我昔を思ひ得

湯煮ゆ＝湯人に煮らる(にらゆ—にゆ)

此の火にては煮えず＝(にられ—にらえ—にえ)

此等の語は一口には自動詞といひて可なれど、皆被役或は可能の意ありて他動詞より轉じたるなり。自動他動共に被能相をなせど、被能相はすべて自動性なるを知るべし。

いでおぼえん(他)(回想シ話シ出サン)

聞きしをおぼえて(記憶)(他)

物も
末を覺えず

我政府の取締は更に幾多の偏見に富めるやに覺えらる(四三、三、廿五日讀賣)

晩翠、五丈原　蠻觸二邦爭の蝸牛のたとへおもほえば世々の姿はこれなりき

同、出廬　治亂興亡おもほえば

(3) ラ行四段活

鏡壁に懸る＝懸けらる

懸けむとすれど懸らず＝かけられず

危き命を助かる＝助けらる

天より授かる＝さづけらる

をそはる＝教へらる＝習ふ

「鏡」「人」などのカ、ルタスカルサヅカルといふ動作を自身にてすることは事實上あり得ぬにて、皆他動の被役なるが、轉じて生得の自動詞の如く成れるにて、更に轉じて可能の意をも表すなれば、被能的自動詞と謂ふべし。又ヲソハルは口語のみにて無くても濟む譯ながら、前者に準へて被能的他動詞といふべし。此の種の語法近代特に多きが、隨分古くよりも有りしにて、ゾナハルなどは明に「備ヘラル」の義。クフの敬語のアガルも上ゲラルの義なり。其の外

あづかる＝預けらる　　すわる＝据ゑらる
こもる＝籠めらる　　そまる＝染めらる
まがる＝曲げらる　　まざる＝交ぜらる
まうかる＝儲けらる　　つまる＝詰めらる
つとまる＝勤めらる　　つもる＝積まる—(積む)

ぬからぬやうにして求めてこいヿぬかれをつたヿいやぬかれは致さぬヿ都のものゝやさしさに抜かうならば唯もぬかいで

抜かる(ラ四自)　所下ニ　下らぬ(讀下不成章 下サレヌ)　下さる(口語四段ナレドモさヲツケザルベカラズ)

など極めて多し。此等の語に漢字を充て用うる時「助カル」「曲ガル」とやうにしてはタスカ マガと四

段に活く語の被能相下二段活げに見えて體裁惡く、巻カルなどは全く混同すれば、カがは送らざるを正則とすべし。送假字はさる文法的の事に關せずして可なりといふ論もあるべけれど、我は取らず。如何にも讀み惛き場合には漢字を用ゐざる事と定むるが最良きなり。

六　被能を表す他の形式

(1) 被役

辱を受く＝辱めらる

罰を被る＝罰せらる

(2) 可能

此こそ讀み得れ＝よまるれ

見ることを得＝見らる

え書かず＝書かれず

行くこと能はず＝行かれず

鐵も斷つべし＝たゝる

我能く此の刀を用ゐむ＝我この刀は用ゐられむ

此等すべて被能相と同じ意を表せど、被能相にあらず、他の動詞、助動詞、副詞などを用うるなり。か

くして可能を表す時はその他動詞の標的名詞は皆處置格なるに準じて、可能相の時にも同樣に言ひて聞ゆる心地するより、近文には「此の書をよまる」の如き語法も起れるならむと思はる。

行くこと得ざるべし（禁止的意味の時「能ふ」を用うることなし）

「行くべし」「行き能ふ」「行かる」「行き得」との別

序にいふ「讀ミ能フ」ニ「ヨミ能ハズ」と樣の用法近頃盛に用ゐらるゝは文法上は害なけれど、從來の慣用には痛く反けり。アタフは此の如き補助動詞的ならぬ時には肯定否定共に用ゐたる少數の例はあれど、一般には「アタハズ」と否定にし、その上をば必「……スル事」ニ「……スルニ」とやうに體言にのみ言ひなせるが純正なる語脈なり。

第四節　使役相

他に動作をせさする相なり。

一　形式

(1) す、さす　を動詞の第一變化に添ふるもの。

標的に／副格名詞をしてを

四段 ナ、ラ	せ	せ	す	する	すれ	せ
上下一、二 カ、サ	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ

(2) しむ　を諸活用の第一變化に添ふるもの。

亦下二段活用をなす。兩者共に動詞に準ずれども、第一變化よりサスシムを重複せず。

(3) 口語

(イ) セルサセル　文語の二段が一段となること普通の例なり。之を正則とす。然るに又一種

(ロ) サ行四段活　なる者あり、西南地方に多く用ゐらる。之を比較すれば左の如し。

食は						
	せ（ヨウ、ナイ）	せ（タ、テ、マス）	せる	せる	せれ（バ）	せ（ロ、ヨ）
	さ（ウ、ヌ）	し（タ、テ）	す	す（ト）	せ（バ）	せ

東京語にも此の四段活を交ふれど、「クハシマス」は用ゐず。想像・否定・前提・命令等も多く下一段の方を取る。

砂石集（泰時ノコト）大方ハ御用心ノ爲ニモ築地ニツカレホリホラシ〔レノ誤カ〕テ候ハンハ目出タク候ヒナン

砂石集　チガマシケリ

(4) 轉訛

(イ)サ變のさす「爲」の使役相はセサスなるべきを單にサスといふこと相應に古くより有り。近文にては許容すべし。被能のセラルをサルといふこと亦同じ。口語にてもサセルサレル(シラレル)など言ふなり。

寶物集　說法をさせ參らすべきよし

狂言　皆させ

(ロ)一音の動詞にシムを添ふる時、「見シム」「得シム」と言ふべきを「見セシム」「得セシム」と樣に「射シム」などは「射サシム」と樣にも言ふことあり。前者はサ變動詞の多きより、後者は「射サス」と樣に言ふ其のサスより混じたるものなるべし。是も平家物語・源平盛衰記などより散見する言方なり。

今昔、廿五　我レ今夜孝養ノ爲ニ思企ツルヲ心ニ不違令爲得給ヘト祈念シテ屈リ居タルヲ露知ル人ナシ

腰いのり　祈つてくれさしめ

伊曾保、中　わが野山の草をほしいまゝに損ざすことときつくわいなり

(ハ)四段活動詞にサスを添ふる　讀マサス折ラサスなどは誤なり。增鏡「おどろが下」に

水飯やうの物など若き上達部殿上人どもにたまはさせて

とあるは「人シテ殿上人共ニ賜ハセテ」の意か、又は「タマハス」といふ四段活の使役か明ならず。外にも軍記などに「參らさす」といふ語處々に見ゆるも、一寸解しがたき語なり。

大鏡、師尹　御門いとかしこく時めかさせ給ひて（サ四他敬）

謠、山姥　聞かさせ給へ

土佐　いさゝけわざさす物もなし

けしからず人にてんつかるべきふるまひはさせじ

枕、二　よき男の車とゞめて物いひあないさせたる

二　他動との關係

被能相の自動性なるに對し、使役相は他動性なり。是によりて種々の現象を生ず。

(1) 上一段の三語

著ル似ル見ルは使役相キサスニサス見サスなるに、又キスニスミスといふ語あり、此等は一種の他動にして又その使役相をもなす。

甲洋服を著る（尋常他動）

甲乙に洋服を著さす（同上使役相）

甲乙に洋服を著す（一種の他動キスは被覆の義にして全然甲の動作、乙はあづからず）

甲乙に　をして丙に洋服を着せさす(同上使役相)

「見ス」「見サス」「見セサス」「似ス」「似サス」「賢セサス」亦此の例なりさて玆に文章の混同を來すことあり。

甲乙をして洋服を
　著(チャク)せしむ
　著(キ)せしむ(第三者丙にを略せる時及前項(4)の(ロ))

我をして之を
　見せしめよ(前項(4)の(ロ))
　見せしめよ(第三者を略せる時)

(2)使役的他動

前述の三語は他動詞なりといへども、幾分使役的の意義あることは爭ふべからず。其の外サ行四段活の他動詞には使役的なる者多し。

國を亂る大夫少正卯(純他)

校規を亂す(使役的ミダレサス)

檄をとばす　　禮をならはす

手を鳴す　　年月をすぐす

日を暮す(クレサス)夜を明す(アケサス)

有明の月を待ち出づ(待チテ出デサス)

帚木　小君を傍にふせ給へり

萬、十四　さゞれ石に駒を波佐世底心痛み吾がおもふ妹が家のあたりかも

盛衰　使者を走らかす

乙女　思ふやう侍りて大學の道にしばしならはさんの本意侍るにより(大宮詞)

無名抄　雨やめて(ハラシテ)出でさせ給へ

大鏡　安子后御袖をとらへ奉りて(帝ヲ)立て奉らせ給はざりければ

○寝(ネ){さす / せる(かす)}　○生す　○負す　○あたふ(能)

○あたふ(與)　○あたはす　○湛(タヽフ / タヽハス){四 / 下二}

これにて同じ他動にミダルミダスナスナラスなどの二語ある理由を悟るべし。又四段活を下二段にいふもあり。是は近代の口語に多し。

短き文に長き意味を含めて書く(フクマセ)

あはれ此の願を叶へ給へ(カナハセ)

一夜を泊(ト)めやらむ(トマラセ)

さきはふ(四他 / 下二使他)　はらふ　込む

天氣に{し／ならせ}たいもんです

方言にては此の法をすべてに用うる處あり。

此の反對に使役相なるを他動の義に用うる「知らす」あり。是は「報ず」と全く同意なり。されば使役相に關する標的名詞は無きなり。

友に近況を知らせやる

友には他動詞の副目的にて使役の標的にあらざれば、「友ヲシテ」といふこと能はず。

(3) 他動的使役

人{に／をして}笑は{す／しむ}

人を笑はす

前者は全然使役なれど、後者は他動的なること「小兒ヲ懐カセル」と「ナツケル」との如し。されば標的名詞にニ ヲシテ ヲの三種ある中に前の二つは眞正のものなるが、後のヲは下の動詞の他動的なるに應ずる者にて、眞正のにはあらざるを知るべし而して前二者にありてもニが本體にして、ヲシテは實は副詞小句をなせる者、ヲは略しても言ふべく、シは動詞「爲」にて使令呼などの動作を汎く言へる代表者なり。

人を{使ひて / 呼びて / して}茶を客に勸めさす

人{に / して}言はしむ

彼稻ヲ伊佐波登美神乎爲天拔穗爾令レ拔云(倭姫垂仁紀廿七年)

後漢書陳寵傳「鮑昱高ニ其能一轉爲ニ辭曹一掌ラシムニ天下訟狀一」

刑法十三條「懲役ハ懲役場ニ拘置シ定役ニ服ス(コレハ省略)」

さて此の他動使役相は他動詞にも代へらるゝ事あり。

子を學校に{入らす / 入る}

人を西洋へ{行かしむ / 遣る}

愚者を{怖ぢしむ / おどす}

かゝる場合に子を人を愚者をが眞正の使役相の標的ならばニとあるべく、然る時は他動詞には

應ずべからず。

(4)形容詞及指定助動詞の使役

ナリ活カリ活及指定のナリタリは動詞アリを含めるより、シムに接して使役となる。

我をして過無からしめしは友の力なり

人をして長歎すること久しからしむ

人心を爽ならしむ

衆をして後に瞠若たらしむ

孔子をして明治の人たらしめば如何にかせむ

蘇秦をして洛陽負郭の田二頃の所有者ならしめむには六國の相印は帶びざらまし

此等は皆他動に「我が過を無くせし」「長歎する事を久しくす」「爽にす」「瞠若たる樣にす」「明治の人とせば」「所有者とせむには」と言ひ得べき者なり。されど口語には此使役相を用ゐざるは純正なる國語の語脉にあらざるにもあるべきか。されば同じくアリを含めばとて被能相としてルに接することなし。

前例は又自動的に改めて「我ノ過無カリシハ」「人長嘆スル事久シ」「人心爽ナリ」「衆瞠若タリ」「孔子ニシテ明治ノ人タラバ」「蘇秦ニシテ所有者ナラバ」とやうにも言はるゝなり。

○反實假設の使役

十八史略　嗟乎使平得宰天下亦如此肉 是肉矣（史記）

同上　使我有洛陽負郭田二頃豈能佩六國相印乎

三　可能相被役相との關係

(1)可能相と

青年元氣の銷沈 ｛人をして長嘆せしむ
　　　　　　　｛に長嘆せらる

其の壯烈 ｛人を泣かす
　　　　 ｛に泣かる

使役と可能とは大に相違せることなれども、せしむる結果はすることとなり、することの奥にはせらるゝ可能力あれば、平相を中に置きて使役と可能との相通ずることあるも理なり。而して第一例の「長嘆せしむ」の如きは多くは漢文の口調にして、國語にては自然的可能を用うる習なるを、漢文直譯體に染みたる人は使役相を用うるを意強げに心得て只管物するなり。かくて使役の標的をも略しては、

彼の擧動たゞ己の利をのみ謀るにあらずやと疑はしむる者あり

つら／＼前途の事ども考へ候に、のるかそるかの大飛躍を試むべき時期かとも思はしめ候

杜鵑雨ふる夜半の一聲に遠き昔を偲ばせにけり

などやうに好みて書くもあれど、實は「疑ハル、」「存ゼラレ」とするが純正穩健なるなり。されど此の外に外國語脉を受けずして兩者相通ふ者もあり。(因果關係の顚倒の類か)

腹がすくと何でも食はれる
すき腹は物を旨く食はせる

よき景色はおのづから憂を忘れしむ
憂も忘れらる

萬、十四　信濃路は今のはりみちかりばねに足ふましむなくつはけわがせ

足カリバネニフマルナ
足ヲシテカリバネニフマスナ

(2) 被役相と

しどけなき樣を人に見せ させ 見えられむは心なし

この事君にきこえむ
きかせむ

いか｛でなほ／にして｝ありと知ら｛せ／れ｝じ高砂の松の思はんこともはづかし（右六帖 左源氏引歌）

此等よく通ひたれど語は全く異なり。之を「見エム」は「見セム」の義、「キコエム」は「キカセム」「シラレ」は「シラセ」の義なりなど說けること往々物にも見ゆれど悪し。さては事の意は變らねど語の意は得られぬなり。又武者語に

あまりに仰向きて内兜を射さすな

親は子を討たせ兄は弟を失ひ

敵に右を取らすべからず

などいふは「イラル」「ウタレ」「トラル」の變なり。

足｛ふましむな／ふまるな｝

僅の事にて賊｛を逃れしめたり／に逃れられたり｝

などいくらもあり。

○連歌秘訣傳授せしむる（對敬）に就き可守之法度の事

一此抄他見ハ勿論恣ニ不可令談說事
一師恩を忘却し傳書自慢致す可らざらしむる事
右之趣可相守若自由之働仕馳走せしむるに於ては可蒙和歌之神之御罰者也仍起請文如件
貞享四年卯二月　　芭蕉

第五節　被能使の重用

ラルサス等の助動詞は種々に重ねて用ゐらるゝ。之を區別すれば、

一　被役と使役

(1) 使被相

我明日より(學校に)京都へ出張せさせらる

正行なく〳〵櫻井より(父に)河内へ歸らせらる

此等は使役を被役にしたる者にて、全體にては被役相なり。さればその標的は「學校ニ」「父ニ」などの語にて、隱るゝか現るゝかにて必有れども、使役の標的たるべき語はなきなり。「酒を飲ませらる」「誤らせらる」「居させらる」等用法極めて廣し。

さて此の中使役なるを他の動詞に變ふる方、明瞭に聽き取らるゝ場合多し。

派遣せらる　かへさる　振舞はる　起さる

の如し。されど「厭ナ酒ヲ強ヒテ飲マセラレル」等の場合には、なほ使役を重ねざるべからず。

(2)被使相

父子を(して)母に抱かれさす

味方を救はずして敵に討たれしむ

母不注意にて子を蚊に食はれさす

此等は結局使役相なるが、多くは被役を略して、

母に子を抱かす　討たしむ　食はす

とやうに言ふ、然る時は尋常使役相となる、是は春秋の趙盾弑其君の如き言様にて間接使役又は被役的使役と稱すべし。

甲乙をして丙を笑はしむ
甲丙をして乙に笑はれしむ

の如き轉換多し。

二　可能と使役

(1)使能相

化學術にて鐵を金にならせらる

我が思ふ事を口に言はでも分らせらる

如何に頑固なる人にても三年交る間には我が說に從はしめらる

此等は文語よりも口語に多し。此にて解せられぬ事は無けれど、少しく混雜する樣の恐ある時は、せらる　分らすべし　從はしむることを得

とやうに他動詞を以て自動詞の使役に代ふるか、又は可能を表す他の方法に代ふるなり。

(2)能使相

人をして憂を忘れられさする法もあるべし

我汝をして毎朝六時に起きられしめむ

かやうに言ふこと無きにはあらねど言方混雜せり、「忘レサスル」「起キシメ」にて事足るべく、又は「起クル事ヲ得シメ」など樣にも言ふべし。修辭者適宜に取捨せむ事を要す。

三　其の他の重用

(1)被役と可能

我泰然として打たれらる

の如く被役の可能として考へられざるにあらねど、無き語法なり。「打タル、ヲ得」「能ク打タル」などいふべし。可能の被役といふことは全然なし。

(2)三重の相

我 ｛汝をして彼の人に喜ばれし｛めらる／むるを得｝／彼の人をして汝を喜ばしめらる｝

藥にて眠｛られさせらる／らせらる｝

本因坊｛甲をして乙に一目置かせられしむ／甲をして一目置かしむ｝

此等の言方も皆強ひたるにて實際には避けざるべからず。

第六節　敬相

他の動作を敬ふものを敬相といふ。是は國語の特性なり。

一　二種の形式

(1) 被役形

校長訓諭せらる

友人尋ね來らる

君はこの書を讀まれたるか

敬相は特別なる標的なく、自動なるは尚自動に、他動なるは他動にて他に影響することなし。案ずるに被役形は可能相をなし、其の可能相なるは自然にしかなる心あれば、動作をわざとせさせぬ樣に言ひなせるものなるべし、此の敬相は平安朝の中葉以後より起れるが如し。

伊勢 堀河太政大臣…四十の賀九條の家にてせられける屛風に中將なりける翁、櫻花ちりかひくもれ

若紫 源氏紫上ノ家ニテ女房ニ「人々ちかくさぶらはれよかし

ひと一人まるられよかし

(2) 使被

御機嫌よく入らせらる

精勤せさせらる

此の語法は被役形のよりは更に敬へるにて、時代も古くよりあり。さて「入ラセラル」を「居ラセラル」と書く人近來出で來たるは誤なり「ヰ」は上一段活なれば「居サセラル」とは言ふべけれど「ヰラセ」と

は言ふべからず。在リ行ク來を見方によりては出ヅとも入ルとも言ふべきに心づかで、うかと誤れるなり。方言に「見ラセ」「居ラセ」「起キラセ」など言ふ者あるに混ずべからず。

をらつしやる‖三河、三重、滋賀、富山、能登、鳥取、和歌山、播州、廣島、福岡、熊本、長崎、島根、千葉、香川、出雲

をらはる‖京都

御手を打たさせられ(太閤記二)

馬來語「ビーギ」ニ行け來れ去れノ三義アリ(山田毅一氏)

二 古格

(1) 使役形

云々と宣はせて　使、動作ヲ間接ニスルニテ眞ノ敬ニアラズ

(時平道眞)共に世の政をせしめ(サセ)給ひし間(大鏡)

此等多く敬意ある動詞と聯關したれど、使役形にて敬相を作れること明かなり。

増鏡、新島守　父御門をば本院とぞ聞えさする…………軍兵をたまはせば……(義時詞)

桐壺　かのおくりもの御覽ぜさす(ニ入レル？ニナル？)

使役の義明白なるが直接に事をせずして人してせしむる義なり。後には漸に使役の義を失して

敬法とのみ思ひなせり。

國讓、上　鞠遊ばず

同、中　御文遊ばし

新千　御製を遊ばし

狐鶴にいふ「我宅所に來らせよ（萬治二年イソホ下）（れヲ誤ル）

（れトセト互ニ誤ル俗アルニヤ）？

(2)サ行四段

大御身に太刀取り佩ばし

初國知らすすめらみこと

菜摘ます子

國作らしし大神

事よさす（サ四）（萬十四、都麻余之許西禰）（今下二）

之良志賣之家流（萬十八）

之良志賣之祁流（萬二十）

志良志賣師家類（萬十八）

此等は下二段の使役の四段に活ける形にて、奈良時代以前の敬相の本體なり。その名殘今は名詞

に

　御とらし　　はかせ(はかしノ轉)

　御けし(御衣)　言寄(ヨサシ)　(國看之勢志弖(ミシテ)(記傳))〔敬相〕

などあり。

序にいふ、助動詞の名詞になるは多からねど、此の敬相の外に「トラハレ」「謂ハレ」「嬉シガラセ」「思ハセ」「使ハシメ」など被役相の名詞となれるあり。「懲ラシメ」「見セシメ」は俗の訛より成れり。

三　生得の敬相

賜ふ‖與ヘラル

宣る‖仰す｜命ず‖言ハル

めす‖見サス

しろす‖知ラス‖シス(八隅知之(ヤスミシシ)〔連用〕いさなとりの例)〔古義〕安見爲賜カ(シシ)うちなびき

○豐宴見爲(ミシマス)(ヤス)今日者(萬十九)

○大矢氏　安見(ヤスミシ)セス(安ミシトイフ語アルベキカ)

きこす‖聞カス

おぼす‖思ハス—オモホス

遊ばす‖セラル

ます—います—（續紀十三詔橘夫人……守川川在自之事 イマシ/アラシ?）おはす—御座る‖在ラセラル

助動詞を添へざる眞正の生得敬動詞はマスタマフなどなり。ノルは實は大臣が上命を下に宣ることなるに、直に長上の動作に轉じても用ふ。メスシロスなどは前項古格敬相の變じて一個生得の動詞となれる者なり。

四　補助敬動詞

(1) 敬動詞

前の敬動詞の中ラルなどの代に他の動詞に添ひて敬相をなす。之を補助敬動詞といふ。

花を見たまふ

字を書かしめ給ふ

君もよゝと泣かれ給ふ

敬意を加ふる爲には敬相動詞にも添ふ。

思しめす

人して書かせさせ給ふ

古今、物名　二條后……よませ使たまひければ
大鏡　三所ながらかしこまらせ使給へりしかば
若紫　渡らせ敬給はんには　　宮へ渡らせ給ふべかんなるを
同上　君もいとまなくめしまつはしつゝ御琴笛など樣々に仕うまつらせ使給ふ
正統記　陸奧太守に任ぜられましくぬ
敬相のラレに給フとつゞくことなし「讀者ソノ心シテ見ラレ給ヘカシ」などは誤なり。
あそばし給ふナシ
國定修身、五　御覽じ給ふ？
御拜あらせ給はん（ましますべしカ）と定めさせ給ひぬ（小池道子）
（いまし給ふ（巳）？らレカ）
義仲の最後を語りおはしませたまへニ適用
(2)　あり　なる　なす　めす
出京あれ
行幸なる
倭姬命世紀、雄略廿二年　吾久代太神託宣カヽリノタマヒ　坐支摩志萬之木イ

同上、垂仁廿四年　「從」其行幸奈留

同上、廿五年　從飯野高宮遷幸于伊蘇宮「令」座支

幸行須留爾

幸行志天

撰集抄「長き世のくるしきことをおもへかしかりのやどりを何なげくらん」と御託宣なりぬ

體言はサ變に活くべきに、アリナルを以て活用するは自然的に勞せぬ樣に言ひなすなり。

御覽なさる

御控へめされよ

御かへりめされた

セラルをナサルといふは爲の義、ナスは成の義にてシアゲたる樣に言ひなせる、その被役形なり。

京極殿より打刀を御あつらへ候（アリの對敬）

御屆候や（用言ノ尾ヲ略ス）

更に

御覽遊ばす

といへば、敬意又加るなり。さてアリナルナサル遊バスは體言を活用せしむるにて、

御ヨミナサル

などのヨミは用言にあらず。されば名詞の敬語の例に準じて接頭語「御」をそふるなり。「オヨミナサル」はすべて一動詞なれど、ヨミのみは體言なるを忘るべからず古訓古事記に「所御佩」を「ミハカセル」と讀みたるは此の事を注意せざりし誤にて、舊訓に「ハカセル」とありしが正しきなり。想ひまどふこと勿れ。さて又「御」をそへたる敬體言は常に敬補助動詞にて活用すること前例の如し「御覽ず」のみは一つ特例なり。

御出京したり

忠臣藏、四　閉門を御赦さるゝ吉事の御趣向…………

船守源三郎へノ日蓮書　又使申され候は御かくさせ給へと申上候と日蓮心得可申候

などは言はれぬなり。さて此等の敬動詞は補助のタマフの外はすべて更に他の敬相の形を加ふることを得。

行幸ならせらる

きこしめし給ふ　おほしめし給ふ　ハナカラン

伊勢の國に鎮りおはしまさせらる

云々とのたまはせて見やらせたまふ

此の如く助動詞の重複する時、いづれか何相なると好く心して見わくべし。

平家、康頼の歸京　渡りありなる

大鏡、道長　御出家し給へれど

玉襷、一　神ながら御傳（ミツタヘ）閉座せる眞の道しひて御むかへし給ふ（奉り給ふニハアラジタヾ尊他ナラン）

增鏡、おどろの下　御元服し。た。ま。ふ。

狂言、瓜盜人　眞平御（ゴ）ゆるされませい（御免ナサレマセイの誤にや）

故鄕の方のみ打ち眺められさせ給ふ

恨みられ思しめす

仲正が女に琴彈かせさせ給ふ

人に崇められさせらる

御馬より落ちさせ給ひ御首取られさせ給ふ

走り車の輪には薄墨にぬらせ給ひておほきさのほどやなどしるしには墨をにほはせさせ（イナシ）給へりし

平家　又人なくぞ見えられける

お○ ｛ あり / あらせらる / あらる―トハイハズ ｝

敬相の下に可能相の附くもあり。
恨み思しめさる
恨みさせらる
梧窓漫筆 （東照宮）御稱譽あらせ給ひ
同拾遺 常憲院殿の御時代上奢侈を好まれ給ひ
こんくわい 博士をめし占はせられ給へば

五 口語

(1) 被役形 使被形

共に下一段活をなすこと一般の例に同じ、然るに其の使被形は通常形を變じて四段活をなす。

入ら・せ・られ	られ	られる	られる	られ
入らッしやら	り（イ）	る	る	れ
起きさッしやら	り	る	る	れ

シャルは方言ハルとも變じ、又第二變化シャリよりテタに接する時はシッとも變ず。
△「捕へらる」「下さる」（下二）のとらはる（四段）下さる（四段）と轉化するが如き例。
△仁王 早う行かしめ對話カ

稼がしめ　稼他カ

(2)轉成補助動詞　及敬助辭る(らる)の下に「給ふ」つかず。

(イ)なさる　下さる　あそばす(遊ばさる)　はナス下ス遊バスの被役形ながら轉じて四段活をなせり。共に獨立詞にも用う。而してナサルは又は方言には必ず動詞の下につくナハルヤハルヤル(御書きやるのやるはあるの訛ともいふ)などとも變ず。

勉强をなさる(獨立詞)

御勉强(し)なさる(補助、獨立詞シは常に用ゐざるはスをやがて敬相にしたるなり)

御勉强な｛さつて／すつた｝(シャッテをシッテといふ變化の如し)

低き敬語の時は「勉强ナサル」の樣に「御」を略していふは文語と異なる點なり。

菓子を下さる(獨)

運動を遊ば｛さる(獨)／す｝

御運動あそばさる(補)

御かき／書いて／御書なすつて｝下さる(補)

「書イテ」「御書キナスッテ」の下の「下サル」は獨立詞ともいふべけれど、今は一種の補助詞と見たり。さて此等の詞の命令法は當然ナサレ下サレ遊バサレなるを、ナサイ下サイと様にいふはレの變音なるべし。(オレラをオイラといふが如く)されど又「ナサイマシ」「下サリマセ」などのマセマシを略したる連用形なりや遽に定めがたし。

御出アツサリ（アツセ）(ナサレ)(肥前)

行きやる（するノ敬）　おツ取りやつた

おいでやれ（ヂヤ）　おいでやりませ（ン）

書きやした（ますナリ）　オンナル(岩城北川濱)

御見エレ(駿河北方)　御出ナイ（レ）

もらひむこ(親ノ詞)「一時もおかぬ御かへりやす」

下しかれい(大垣下シ置カレイ)　下(クダ)ンセ（タモレ）(伊勢)

何シガッシャルノ（入ラテ御座ラ）(筑前)

上(アガ)らつしやりませ＝あがつしやいませ＝あがしやンませ

なさいませ＝なさんせ

着させ（シヤ）られ

書きやい（レ）(博多)　起きゴサイ（レ）(佐賀)

來（コ）ツサイ(福岡)

（ヤシの下にますつかぬを思へ

御出やシ（テ／タ）

ヤス(直接命令)

ヤツシヤ(假定前提)

ヤツシヤタラ(京都)

(ロ)成る　は文語と少し違ひて獨立的に　御書きになる　御免なれ(柿山伏)

と様に動詞を副格名詞として受くるが、全體をカクの敬相とするよりナルをも補助動詞と見るなり。是は命令法は用ゐざるが如し。

居ル行ク來の敬相は「御居ナサル」「御來ニナル」などは言はず、特にデルイルを用ゐて「入ラッシヤル」「御イデニナル」といふなり。(記傳三十九、二百三十頁いますを「往」に用うる說)然るに之を「居ラッシヤル」と誤り、又は「御居デニナル」など書く人あるは此等の特性敬詞なるに氣づかざるなり、出ヅルも入ルも見方によりては「居ル」「行ク」「來ル」事になる意味を一考すべし「御見ナサル（イ(尾張)）」「御爲シ

ナサル」「御言ニナル」なども規則立ちて簡便なる樣なれど、「御覽ナサル」「遊バス」「オツシヤル」の熟せるに如かず。

春嶽公の老臣本多太藏より立花壹岐への手紙に「當節御多忙に被爲居」とあり。

(ハ)御・・です　名詞を指定したる形。

第七節　敬語

敬語の中には前述の敬相も含まるれど敬語にして敬相ならざるものあり、すべての敬語の意義を知らざれば敬相の意義も亦知るべからず。これ茲に更めて敬語といふ一節を置く所以なり(附錄參照)

敬語に四種あり。

(一)尊他敬語　は他の主體・所有・動作・狀態を尊敬するもの。
(二)自卑敬語　は自己の主體・所有・動作を卑下するもの。
(三)關係敬語　は自己の動作の他に關係するを、他を尊び己を卑むるもの。
(四)對話敬語　は聽者を尊敬する爲に語を丁寧にするものなり。

(二)と(三)とは稍相類似せり。或は(三)は(二)の變化、又は(一)と(二)との混交とも見るべし。

一　尊他

(1) 主體の尊敬　主體は體言なれば名詞代名詞なり。

あなた　方(カタ)　君(キミ)　この御人

又あなた樣、殿さま、何某どのなど皆、主體を敬したる語なり。

所有と主體との限界の明ならぬ場合

續紀、廿三詔　朕婆々皇太后(コレハサモアルベシ)ノ朝爾母云々婆々爾波(敬語ナキガ本體カ)仕奉倍自止所念行弖奈母……

人と人體　神と神宮

(2) 所有　換言すれば所有者を尊敬するなり。

あなたのお靴

この「お」は靴を尊ぶにあらずしてその所有者を敬するなり。但し

あなたのお頭(つむり)

といへばこの「お」は頭をたふとべるが如く思はば思ひえらるゝも他の例より推してこれもなほその所有者の尊敬なるを知るべし。

御父(所敬)　御父君(能敬)　御(オン)僧(主)は自が事を仰せ候か(巳)

出雲神賀詞　申賜（奏賜）波久登（前後三處）
中臣壽詞　終申給波久止（中）　說カ關係敬語タルベシ

(3)動作　前節にいへる敬相即是なり。今更めて說かず。

○熟語か二語か

御書（キ）下さる）？　拜見致し候（拜見仕り候）　有之候　無之候？（一語）

仕る（ラウ）べく候（ゴザル）　仕り候（マセウ）ふべし　御立寄被下度（下サ）（尊他ナレド關係ノ義アリ）

(4)狀態　狀態を尊敬するは極めて新しき語にて古きものにはなし。

大きく――　おみ大きく入らつしやる

御上手

お美しい　お苦しい

平家、二代后　先帝の昔もや御戀しうおほしめされけん

著聞集、八　此御目出たさをばいかゞ思しめす

狂言記　鬼の槌いや又おしをらしい事でござる

醒醉笑、八　何事もおめでたい

吾吟我集　文ならであひていはじやおゆかしく思ひまいらせそろと計を

是等は候文又は口語にのみ用ゐらる。さてこの狀態を尊ぶは形容詞が主なるものなれど、時としては副詞もあり。

○姿勢が立派なり
お立派で{ございます / 入らつしやいます}

二　自卑

(1)主體

私　手前(時としては共をそへてなほ更に卑しめたる語として用ゐらる。私ども　手前ども)

(2)所有　卑下したるが如き形容の語を附す。

粗品　野父　愚母　伜　豚兒

是等は主體をおとしたるより轉じて用ゐらるゝなり。

(3)動作

候ふ　侍り　存ず　致す　仕る　承る　給ふ(下二)(生得動詞)

(2)(3)ヲ關係自卑ト合スベキカ。

三　關係敬語

(1) 名詞—事物

早速御返事可差上

(かぐや姫)おほやけに御文（フミ）（返事ナラデモイフナリ）奉り給ふ(竹取物語)

自らの返事なるに「御」といふ字を用うるは一見その當を得ざるが如きも、その返事が宛名人の手に入りてその人の物となるを以て、かく「御」といふ敬語をそふるなり。

客にお茶をすゝむ

(2) 動作

(イ) 生得

奉る　まゐらす　拜む　上ぐ　捧ぐ(献、呈)

申す（イフスノ敬）(啓)　（鍼灸療治を申し上ぐ）　きこゆ(低きより高きに)

頂く　頂戴す(高きより低きが)　罷る(朝より私宅へ退出)　詣づ(參內)　上る　伺ふ

御尋申(低)　……に預る　御目にかゝる

まみゆ(謁)　仕る(仕へ奉る)……自卑ニ轉ズ

承る(受け給る)……同上

此硯者拜賜之物也(三條實方)　〔拜トハイハレズ〕

(昇位)のかしこさによみ奉りける(足代弘訓)　〔たまへナラン〕

平忠秋勘文　砂川なる(九條家の)御別殿の地を借り奉りて(貫之)朝臣の祠を…………

方便品をよみ奉り給ひてぞうせ給ひける(大鏡)　〔?〕

わが車にてゐて奉る(空蟬)　〔ツレテイツテ上ゲル也〕

(ロ)助動詞　接頭語

諫め ｛奉り給ふ／まゐらす／申す(聞ゆ)｝　御諫め申す(御は御返事の御に同じ)

……て上げる

御とぶらひを聞え給ふ(葵)　〔補助ヲ獨立ニ用キタリ〕

〔南朝へ〕御志あるたぐひ(正統記)

拜見、拜借ノ拜ハ尊ブベキ者ニカヽリ、奉ハソノ人ニ關係ス

落窪　(姨アコギヲ)御むかへすれども

(3)狀態にいふは稀なり。

御氣の毒に存じ候

「氣の毒」は自己の心の狀態をいへるにて、それを「御」といふは他の上をさ樣に思ひ奉ればなり。「氣の毒」は形容詞の「なり活」なり。

御あいにくです

御厭し

おかはゆ相

など皆この例なり。

三德をかねて恩深き佛は釋迦一佛に限り奉る(日蓮ノ南條七郎へ)

おのれは公もかしこくもおはしまさずたゞあが君のみこそうれしくかたじけなくおほえ給へ(落窪、四)

佛足石歌、第八　さかのみあといはにうつしおきうやまひてのちのほとけにゆづりまつらむ佐々義麻宇佐牟

關係敬語の下には更に尊他敬語をそふる事を得。

四　對話敬語

是は新しながら延喜比より發生せり。而していづれも前の三種より轉じたる者なり。前三敬にも

添ふなり

(1) 主體（名詞 代名詞）

お足（錢） おつむり（頭） 御飯（めし） お天氣 わたくし（わたし―わし―おれ）

(2) 動作

（イ）本動詞

如何｛すべき／致すべき／仕る｝

どう｛しまして／致しまして／仕りまして｝

……氏死去被致候ふ（尊・對話）

御存じ（尊・對話） 承る 申す 申されたり（對話・尊）

まかる 物へまかりけるに

上野に參る 御持參被下度

けふの御あるじに仲忠手仕らんは蓬の野べに蛙の聲する心地なん仕るべき（俊蔭）

おりやる（人ナルベシ）

御いそぎ｛あれ（尊）／候へ（對）｝

名 中(萬葉十一、十二ノ巻ニ四處アリ)

大鏡(道長ノ段)「四條大納言の云々を、大入道殿(主)いかでかゝらん…………わが子どものかげをだにふむべくもあらぬこそくちをしけれと申させ給ひければ」(道隆道兼道長ラニ對シテイヘルナレド、子ラチモ記者ノ敬フヨリおほせトハイハヌ也。此等ヨリ次第ニウツル)

(ロ) 助動詞

よみ
- 侍り
- 候ふ
- ます

行幸せさせ給ひ(尊他)侍りき(對話)

御すゝめ(關係)申上候ふ(對話)　奉らせ(關)給ひ(尊)侍り(對)

存申候(對話ニ轉ジタルナリ)　移り申した

マスの活用　ませ　まし　ます　まする　ますれ　ませ

子日行幸和歌序　けふのみゆきはあります也

さらば(頭を朝成に)さりまさん(申)(大鏡短観抄 伊尹詞)

古今　二條の后の東宮の御息所と申しける時

落窪　腹のごほ／＼と申しゝを一二度は聞過し

龍を殺さんともとめ給ひ〔尊〕候へ〔對〕ば(竹取)

若雖爲一事、存曲折、令遂犯者(貞永式目)

令啓上候(しむモ對敬トナレリ)

拙者とても其右に坐せども

かゝる道はいかでかいまする〔尊他カ〕といふ(伊勢物語)

竹取「……心ばせも世人に似ず侍ると奏せさす(人ヲ以テ奏スルニヨリヤガテ自卑トナル)

天保十四年刊、善惡道中記　十六七な妾を一人おきましたく〔對〕

申しヨリ轉レルカ

傾城反魂香　是を御緣に御知人になりましたし〔申(闕)〕

同　是申し(此遠國の我々 / 神の告に任せしからは云々)

同　赤松ぶちわつたやうに御座有りしが(庄屋の松兵衛若い時には相撲とり)

同　ちよつと葛樣にあはせていなせましたいものぢやが

(ハ)接頭語

差上　相成

妻がござないによつて

罷出 { 退出 / 往—訪 }

(3) 狀態

御氣の毒樣(敬語の濫用といふべし)

いかゞ樣

(4) 接續詞　副詞等

{ けふ / こんにち(敬) }　{ きのふ / さくじつ(敬) }　{ されば / さ候へば(敬) }

{ ついて / つきまして(敬) }　東京に { おいて / おきまして(敬) }

お蔭をもちまして(敬)

おさらば(敬)

(5) 感動詞

いや——いゝえ

へイ——はい

◎一六〇三年(慶長八)ヤソ舍學林出版、葡萄牙宣教師 Joam Rodriguer ノ編セル日本文典 Arte da

lingoa de Japam ノ中ニ十二種ノ書ヨリ實例ヲ引ケル中ニ

二、教化物語　伴天連樣へ逢ひまらする(二)こともたまさかにござれば何時の間に事細なことをば聞きまらせうぞ　○われに教へまらする(三)サ變樣にござる

三、左近物語　普請は大略出來よりまらしたか　○ふかうはなりまらせぬ　○とりまらせうず

四、黑船物語　旅へいづるにはさのみ結構なものをばもたぬならひでおりやるさへ　○かゝる鬼は黄金の鎖を幾筋もつけた道具でおりやる

五、豐後物語　およろこびの出來まらしたことござるか　○お談りあつたものかな　○大友樣の御内心を語らせられたでなほ明かに思ひだしまらせた　○まづ語りまらせうずるを言葉のさきがおりなうて唯今申す

六、加津佐物語　一切舟がのびぬやうに思ひまらせた　○途方がござない

七、緣邊物語　おのし(主)は巧者ぢや程に言ひ含むるに及ばぬ　○この頼をもたせて往て猶々定めさしめ、やがてあさてといふことをよう調べさしめ、いかしめ、いひなさしめ　○仔細をばこれに申されまるら(本ー)せうず　○ござない

八、客人物語　殊の外辛勞しまらした　○ござる、

九、客物語　遠のきまらした　○聞きまらしたい　○さうおりやらうず　○平生は居まらせ

ず　○おさかづきのおまらし（御マキマセ）やう、○貴所は當宗の信心を失ひあらぬか　○それがし今まで類もないい（御カ）いたづら者でおりやつた

十、醫師物語　さては治定でござつたよ？　○此許の寺に用の儀ござつて居まらする

十一、物語　左やうに承らばらつしも無う語りまらしては曲もない　○南蠻舟がつきまらした

十二、ぐわんらい　（大正十一年二月藝文新村氏吉利支丹文藝斷片）

ござ｝ある
おり（お入）｝ない

五　（附）卑罵

接尾語　め　野郎　やつ　ばら

履中紀、元年　阿曇目　姓氏錄　大來目部

平家、西光きられ　憎い入道めが何事をか奏聞すべかんなる

盛衰記、くりから山　その信救めいかにもして打殺せよ

義經記　ことねりめらに仰付て

狂言記　おのれまでが樣といふかめといへい

大和物語　うかれめばら　夢浮橋　弟子ばらの中に　枕、八　女院宮ばらの屋、
殿ばら

接頭語　シャツ面

名詞　男　女　餓鬼　あま　畜生　坊主　馬鹿

代名詞　おのれ　われ　貴樣

卑罵は廣義にいへば嘲弄の意味も之に加ふべし。

先生　大將　奴さん（是は反對にいへるなり）

動詞　ぬかす　けつかる　あがる（上ル）（サガル（三重縣、出雲））　ほざく　くさ（る・する）　こく

てこねる　ごねる　くたばる　うせる等

張蛸　おのれは眞實それを求めてうせ（來）をつたか

何のかのとぬかすあちへうせう（去）

ゐほし折　先こちらへこき入つて

助動詞　をる

第八章　助動詞

第三章に於いて述べたるが如く助動詞は之を二種類に分つべし。

(甲)名詞に附くもの
(乙)動詞に附くもの

これなり。而して其の活用と法とは動詞又は形容詞に準ず。

第一節　指定

一　なり　にありの約。「に」は副格に添ふものなれば、上は必名詞・代名詞なり。

正成は忠臣｛なり／にあり（動）｝

其の變化は

- なら｛バ、ム、ズ、マシ、シム｝
- に｛テ、シテ｝
- なり｛キ、ケリ｝
- なり｛トモ、ヤ、カシ｝
- なる｛カ、カナ、ガ、モ、ニ、ヲ｝
- なれ｛バ、ド、ドモ｝
- なれ｛ヤ、ヨ｝

第二變化の中止は「に」なり。又「にて」「にして」といふ。

正成は忠臣｛に／にて／にして｝　正行は孝子なり

これ「孝子なり」の「なり」に「あり」といふ動詞あるを以つて「に」の下に「あり」を略したるなり。「にして」の「し」は動詞なれど、いつしか其の意味忘れらるゝに至れり「にて」はテの上に動詞アリを略せる者、共にテニヲハの如く用ゐらるる。

福澤は正成を凡俗の人にしてしまへり

こは形の上よりいへば同一なれど、前例のにしての「し」は「あり」の強めにて自動、この例の「し」は他動なり。

此の如くにして我はつひに死せむか

燈火明にして書をよむ

この「し」は他動にも自動にも解せらる。かくの如く「し」の自他は區別するに困難なれど、多く「なり」の中止と見てよろし。

ナリ活の第二變化の「なり」は「安固ナリ難シ」など用う。「一日再晨ナリガタシ」はこの助動詞なる様なるが他に例なからん。

さて「なり」は動詞形容詞の第四變化を體言と見て之に添ふ。

繡難相似畫難眞(鳥野氏引、薔薇ノ詩)

我はいつも六時に起くるなり

これはよきなり

我たゞ「今の名公鉅卿耆儒碩德の未必しも皆善談の人ならずして而して未必しも善聽の士と相得る」ならむことを恐るゝや切なり(四四年四月八日、露伴)

或は動詞の第三變化よりも受くる事あり。やゝ感嘆の意をなす。

丈夫の鞆のおとすなり

蟲のねすなり

松蟲もなきやみぬなり秋の野に誰いふとてか花見にもこん(伊勢集上)

いひさしてとゞめらるなる池水のみないづかたにおもひよるらん(後撰、戀)

しどろに聲の聞ゆなる哉(山家集)

みちのくにありといふなる名取川(忠岑)

この「なり」は昔より感嘆の「なり」といへども、なほ指定の變化したるものにて「鞆のおとす」を一團のものと見て「なり」を添へたるなり。

……といふなる人

この時の「いふ」は第三變化第四變化いづれなるか一見わき難し。されどこの「なり」は「鞆の音すなり」の「なり」とよく類似せり。なほ第三變化とするも不可なからむ。

又一種場所を表すものあり。

大井なる所にて人々酒たうべけるついでに(後撰雜三) (イ)

東京なる學習院　(ロ)

(ロ)の「なる」を指定といひて可なるかといふに、こは元の意の「に在る」として指定外に置くを穩當とす。さて(イ)は同格「といふ」の意とすべきか、又「に在る」の意とすべきか、或は指定の中に入るべきか極めて困難なり。なほ(ロ)は

學習院は(ソノ所在地ハ)東京なり(ダ)

の「なり」と同一なりとも考へられざるにあらず。

なほ諸例を示さむ。

君が家の花橘はなりにけり花なる(指定ナリ)時にあはましものを

師となることもあるなるものを(山家、下)

……となん仰せらるなる

このもちになん月の都よりかぐや姫のむかへまうでくなる(竹取)(指定ニシテ難ナシ)

かの殿の女君たちは鷹司なる所にぞ住み給ふに(榮花、四)

大君の命爾作例(シア)波(萬十九)

有事君人者(ナル)(注ニハ「ト云者」トアリ)……有安社稷臣者(ナル)……有天民者(ナル)……有大人者(ナル)(元祿板俚諺抄)

何々の雄なるもの(雨月草紙)

人々大原なる處に遊行に各騎馬而俊頼朝臣が俄に下馬す(袋草紙、三)

松浦の海にいづるてふ（なるカ）眞玉の如く（平戸小學校々歌）

よび坂といふなる處の（紫式部家集）

行くちふ（ナル）人は

あて宮の御方にとのもりといふなる人ありけり（藤原君）

風はやみよしのゝ山のさくら花ちらぬに春のすぎぬてふ（ナル）らん

あふみてふ（ナル）よさみの原を行く人は妹があたりのこと語らなん（萬代）

梅の花ちるてふ（ナル）なべに春雨のふりでつゝなく鶯のこゑ（伊勢）

唯一筋に念ずならば（誓願寺）（エテ勝手ノ用法ナリ）

我もしも世に出づならば（烏帽子折）

五十騎ばかり切りふすならば（同上）

三つが三つながら消ゆるならば（同上）

「ざり」「まれ」の類。

○參考に ナリトモ／デモ ならう

二　口語　だ

ならバ　　(ぢや)　だモト
　で　だ　コト　なれバ
だらウ　(や)　な

此の口語の助動詞はゞ形容詞ナ活に似たり。連體法は概して用うること少き上にナダに慣用の別あり。其の「ノ」を添へたるは領格名詞としたるなり。

甲は乙と敵な筈だ　彼の人は宅の隣なんです

此の計算も嘘の皮なことは知れ切つてゐる　彼はさういふ人なんだ

母ぢや人　兄ぢやもの　毛の靴下

モノコトは體言なれど、全體を副詞句又は感動的の文とする所、接尾語風なり。

「私は知らないのだもの」仕方ないさ

あしたは休だこと

「ダラウ」「ダ」を「デアラウ」「デアル」の約なりと思ふべからず。

金　ダ
　　デアル
　　デゴザル
　　デゴザイマス

「デアル」以下の詞は「ダ」と意味は同じけれど、ダは助動詞、デは副格名詞に添へるテ、ニ、テハ、アル、ゴザル等は動詞なるを以て兩種區別せざるべからず。されど「です」は助動詞とすべし其の成立は次

の如し。

デ ─ ゴザンアス
ガンス
ゲイス
エアス
ス

でせゥ　でしタテ　です　です　「　」　「　」

「です」は「であります」の略なりと思ふ人あれど然らず。「でござります」より轉ぜるなり。この語徳川時代は濱詞又は吉原詞などとて賤めたれど、今は泛く用うるに至れり。さて越後彦根邊に「でせん」といふ詞あるは珍し。又マスレに倣ひてデスレデスルなど言ふ人もあれど惡し。

記　伊那佐

紀　五十田狹ノ小汀

紀　五十狹々ノ小汀

紀　羽企爾磨梨（ウキニマリ）

あかは（な（舊）／だ（紀））劍

わだく　わなく

空徒（ムナ）（シタ）

（中納言）御高所から御見物しなりやまだしも（仰天子、春日局）

だもの（前提法）
なもの（名詞）

だのに
口語ニテハ終止ニツク勢トナレルナルベシ。

（桃水）院長さんのよりも奇れいだつてよ
でしてよ

（高野辰之氏調）惜めどもねたらおきたら春である（鬼貫）

狂言、宗論　なむあみだ佛と申すればよい

狂言　行きまうせう

「フゥ寺岡平右衛門とはエ、何でえすか

狂言福の神「これは福の神がたべるのです

連體 ますする　太閤征韓ノトキトラヘラレシ韓人ノ著述ニアリ

早々乗物を遣すであらう

八幡大名です(狂言、文相撲)

申すれば(狂言、宗論)　申するもの

申すれども　申し達する子細がある　主人の無念を晴する爲なれば(辰雄)　正

連用附屬辭

てす(てゴザイマす)　おもひだしましてす

三　たり　とありの約

たら{バ　ズ　ム　シム}

と{テ　シテ}

たり{キ　ケリ　ツ}

たり{ヤ　トモ　カシ}

たる{カ　ヲ　ニ　モ　ガ}

たれ{バ　ド　ドモ}

たれ{ヤ　ヨ}

「たり」は「とあり」の約にて「なり」といふよりも存在的にして、や丶動作的なり。口語の「として居る」「となつて居る」「といふ」などに當る。

薦めて大臣たらしむ(トナラセル)(「ならしむ」より多く用うることあり)

汝學者たらば我は實業家たらむ

ニナルナラバ
ナラバ｝何れにてもあるべし。

千家男東京府知事たり

（この場合のたりはダといふより、としてゐる、になつてゐるとみるべし）

君はつひに學者たり得じ（連用として動詞につゞきたるなり。なりにはこの事なし）

人たる（ト云フ／トアル／ツテ）ものは

大臣たる（トシテヰル）牧野

身公侯たれ（トシテヰルが）ども驕らず（なれといふよりも動作的なり）

汝君子たれ（トナレ）

「たり」は主として漢文直譯に用ゐられたるものと覺しく、純國文には多く見えず。唯「古今六帖」に螢をかくして、

すみとげむいほたるべくも見えなくになどほどもなき身をこがすらむ

と詠めるがあり、又蜻蛉日記に「明くれば五日のあかつきにせうとたる人ほかより來て」とあり、十訓抄に「古今の歌たるによりて限ありて」なども少しはあり、口語にも「何時たりとも」などいふは珍

し。

「たり」は連體形の名詞には連續せず。

おくるなり
たり

漢文に、知與之爲取政之寶也(史記)とあるを讀みて、

與ふるの取るたるを知るは政の寶なり

といふは特例といふべし。

天守は一城の中樞たり重鎭たること（中止）

盛衰記、二　千早振現人神ノ神（天照大神ヲサセリ）タ（な神田本）レバ花モ齡ハ（を）ノビニケルカナ

いそほ、第九　以外（もつてのほか）御ちじよくたるべし

袋草紙、二　依爲古今歌有限云々

又　經衡爲後生に難レ入之由を存不レ入

寶基本紀　心乃神明之主。利他

花にざりけるはぞありの約とす。

やらんはニヤアランの約にしてならんかに近し。

青海波とは是やらん(高砂)

「どうやらかうやら」の時は「か」と同職てにはといふべし。

一　ず

動詞第一變化に添ふ。

［　］　ず｛バ　テ　シテ　トモ｝　ずヤ　ぬカ　ね｛バ　ド｝　［　］

此の助動詞はく活形容詞に類せり。その第一變化なきは當然なり。

ず｛アラ　ば　／　アリ　とも｝

ずてはずアリて、ずしての「し」は例の自動なり。ずてをつめてでともいふ。

ずけりずけんといふ語、萬集に「なほしかずけり」「求めあはずけん」などとあれど古し。なほ

よむ　動作的

よまず　狀態的

なるを知るべし。

足はもよあるかずもよし天の下事し知らせばあるかずもよし（直助）

淡路仁正寺ノ領主市橋下總守直擧乞雨歌「及ばずも惠の雨のふることをかけてぞ願ふ露のことのは(燕居雜話、四)

さらねども難波の春はあやしきに我知顏に鶯のなく(俊成五社百首)

限あればふかねど

旅ねしてなほ心みよ女郎花さかりの色にうつりうつらず(蜻蛉、辨のおもと)

古今、戀一　人の身も習はじものをあはずして(萬葉ニ六アリ)いざこゝろみんこひやしぬると

同、戀二　逢はずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしとおもはん

拾、兼盛　なよ竹のわが子のよをばしらずしておふしたてつとおもひける哉

同、重之　雪つもるおのが年をばしらずして春をばあすときくぞうれしき

古今、八　掬ぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人にわかれける哉

二　ざる

ら變にてずあるの結びつきたるなり。

- ざら ― バ、ズ、ム、シム
- ざり ― キ、ケリ
- ざり ― 大槻博士「鎌倉頃ノモノニ一ツアリ」ト云フ
- ざる ― カ、ベシ、メリ、ラム、ラシ
- ざれ ― ド、バ
- ざれ ― ヨ、ヤ、カシ

この中止と終止とは用ゐず。命令は佛書漢文の訓讀等に多けれども今は少し。

知つて知らざれ

ヌザル共に打消の連體法なるが、ヌにはベシラン等の助動詞の添はぬこと好く注意すべし。

三　な

動詞の第三變化（ラ變は第四變化）につく。命令法なり。もと「ぬ」の變化なるべし。

見る	な＝	見
來		こ
爲		せ
		ざれ

「ナ」は本來の命令、ザレは動詞のアレを借りたるなり。

	に	ず	ぬ	ね	な
	第一變化につく				第三變化に

又「ヌ」の變化と覺しき「に」あり。古格にて連用中止に用う、

いへばえにいはねばくるし「イハントスレバエズ」ズ

行くへも知らに舍人はまどふ

などの如し。

又「なそ」の格といふものあり。なそにて動詞の第二變化を挾み（カ・サ變格は第一變化 サ變ハ第二變化ナルモアリ）

な焼きそ　なこそ　なせそ　（「なしそ」も少しはあり）

古くは「そ」を略して、

あれ無しとなわびわがせこ

雲なたなびき

ともいひたり。「そ」は指示辭と同じ、然るに平安朝の末より「雲タナビキソ」「ワビソ」とやうに言へるは甚しき誤なり。さてこの「な」は副詞とも見るべけれど、助動詞の變例と見るが好きなり。

紀　いもはわす邏珥。

紫日記（十一日）　人々涙をえほしあへずゆゝしくかうなと（セソ）かたみにいひながらえせきあへざりける

葵　おとなくしきごぜんの人々はかくなセソなどいへど

紀、十六　しびのわくごを阿婆理逗那（アサリツナ）偉能古（完了命令）

馬な（ニテハ　ヲ矢イ）いたくうちてなゆきそ

落窪　只今の太政大臣の尻はけるともこの殿の牛かひに手なふれてんや

拾、一條攝政　花の色はあかず見るとも鶯のねぐらの枝に手なふれそも

古今　隱沼の下より生ふるねぬなはのねぬ名は立たじくるな（連體形名詞）いとひそ

異奈念（四十五詔）

萬六、長歌　父母毛表者奈佐我利

東屋　な思し屈せそ　こんくわい　な御隱やつそ

四　なく

第一變化につく。前提的にして體言にいひ据うるものなり。

淺き心をわが思はなくに

從來「ぬ」の延言といへり。されど「ぬ」は體言につゞけど「なく」は然らざれば單に延言といふは非なり
實は「ぬコト」の義なり。

道のしらなく

すべてくはことものなど體言にする義あり。いはくきかくすらくなど皆然り。延約といふこと濫用すべからず。

古今六帖　春雨のふるにおもひのきえなくていとゞおもひのめをもやすらん

能因　匂だにあかなきものを梅が枝の末つむ花の色にさくべく

東京朝日　げにや妥協成つて以來の政友會といふものは驕る平家のそれならなくにひとり天下の春を占領して太平樂を謳つてゐる（四十三年二月十一日）

五　じ

第一變化に添ふ。終止法の外連體的なるものもあり。打消のやゝ輕きものにて、ズとマジとの間に位す。口語或はヌ、或はマイに當る。

必ずしも然らじ　（正）

必ずしも然らず　（近代の言方）

恐らくは｛然らじ
　　　　　然らず　（近代）

されば

さはせさせじ

まけじとすまふ

餘事不承望（ズ（近）ジ（古））　（遊仙窟）

僕（アハ）不（ジ）得（エ）白（マヲサ）（古訓、舊訓）　（古事記）

おきつどり鴨どく島にわがゐねし妹はわすれじよのことごとに（古今六帖には忘レズとかへたり）

かにかくにほしきまにまにしかにはあらじか（ザランカ／ズヤ）（憶良）

さはあらじものをや

いく世しもあらじわが身を

の如きは連體と見てよし。此の「ジ」に疑問辭は「カ」のみ多く附きて「ヤ」は稀なり。こその結ともなる。

願はく我未來に惡聲を聞かず(じノ中止)惡人を見じ(觀無量壽經)

わが身の幸あらましかばかくうちつゞきてありき給はじもこよなき程ならでいかによからましと思ふ(落窪二)

兼政さへかくすなりと仰せられじやたい／＼しきことなり(空穗、初秋上)

なか／＼に定なき世はあすか川玉つくりなる宿にならじや(榮華)

なか／＼今めかしきやうに見え聞えて人のとりなさじやはと世の人の口さがなきを(樺)

枕(したり顏なるもの)　おほく拾ひとりたるもうれしからじや

平家(首わたり)　先北の方への御文には都には敵みち／＼て御身ひとつの置所だにあらじにをさなきもの共引具して

新續古今、二　人はなどとはですぐらん風にこそ知られじとおもふ宿の櫻を

詞花、六　又來むと誰にもえこそいひおかじ心に叶ふ命ならねば

萬、八　吾妹子が形見の合歡は花のみにさきてけだしも實にならじかも

帚木　心おかれじやは

類聚雜要抄、四　ちりを入れじ料なり
新古今　玉の緒の長くとまでは惜まれじ身を

じ ｛ カヤ　ヤ　ヨ　ナ　カシ　チ　ニ

六　口語　ぬ　ない

□ ず ｛ ニ　ト　　ぬ ケレドモ　ケレバ　んデ　［カツタ］［クテ］［バ］　ぬ ト　ん　ねバ　□ヲ施セルハ動詞及方言ナリ

□ なく テ ［スル　ナル］　ない デ　ケレドモ　［バ］　ナラ　ない ト　なけれバ

と活く。ズは上方西南に、ナイは關東東北に多し。されど命令ナは全國同じく、マスの下には一部の方言「マシナイ」を除く外すべて「マセヌ」といふ。
第一變化に附く「ない」と形容詞の連用につゞく「ない」とは明に區別せざるべからず。

よまない(助動詞)
好くない(獨立詞)
好からぬ(助動詞)

文語口語共に打消の名詞あり。「鼠入ラズ」「論語知ラズ」の如し。

歌よみの詞いとはなき歌(西公談抄)

三條實教(ノ門人ヘノ消息) 歌はたゞ戀の題の歌の趣向を種としてよまんにしかなく候

打消の順態前提法八形あり。

ば
と
ん ければ
　 では
　 かつた
ないで
なくて　ハ
いで
んで
ずに
と(土佐、連用)
逆假提ニモ
見なく
んく　てハならん

第三節　想像(推量)

一　む

第一變化に添ふ。

□ □ む（ヤ、カシ） む（ヲ、ニ、モ、ガ、カ、ナリ） め（ド、ドモ、ヤ（ヤモ）、カモ）

「む」には第一變化なければ假定前提法なし。但之に代ふるには

　雨ふらむには（も）……………… むには前提法と目的副詞と兩意の用法あり。

とやうに他の法を用うるなり。又第二變化の連用なければ助動詞を省きて、

　風吹き雨ふらむ（カン）

と言ひうるを以つて差支なし第三變化の假逆前提法なきはムを添へずして動詞より直に「降ルトモ」と樣に言ひなす本例あればなるべし。

　雨ふらんとも（非）（にも）（正）ゆくべし

第五變化に「バ」は添はねど「ド」「ドモ」は附く。

　汲みに行かめど道の知らなく（萬）

　花の木にあらざらめどもさきにけり（古）

　あらざらむなれども

こは古言にて、新しくはムの第四變化にナリを添へて其の確逆前提法を用うるなり。

是は選集抄に、

　我等も幾度か彼の國王となり侍りけむなれども

などあるを見れば、その比より次第に移れるものと思はる。又之を「あらざるべけれど」といふも固より可なり。

草がくれ行く水清しこの里の少女がけはひすがしくあるらん（ラン）（三井甲之）

力もてひき止むべきものならば隙ゆく駒のとくすぎんとも（安江靜）

ふらむからにゆかではあらず

頂の上を蓬萊の山になさんとも手裏の内に黃金の大殿を作らんといふとも、忠言がいはんことは違へじ（忠言）

なぐさむことはいかにしてかあらんなれば（右京大夫集）

こゝより西の方へ行かぬへだてに小障子を立てたるならめばさへぎるべきにもあらず（帚木餘釋）

かの君も思ふ時（へばナリ）は上達部の女にはありなん（二字ナキ方ヨシ）なれど（落窪）

囃事で尋にやうず（ねナリ）（狂言全集、烏帽子折）

將通（カヨハム）　鹿將鳴（ナカム）山曾　（萬一）

將行（ユカム）　將待（マタム）　將息（ヤマム）　（萬二）

めを終止に用う。

豫人事しげしかくしあらばしゑやわがせこ奥もいかに荒海藻（アラメ）（萬四）

玉かづら花のみさきて成らざるは誰が戀ならめ吾はこひ念ふを（萬二）
見えずともたれ不戀有米（萬三）
よしこざるらめ（萬十四）
わが背子をいづこ行かめと（萬七）
かなし妹をいづこ由可米と（萬十四）

も｜
我が夫をつくしへやりてうつくしみ帶はとか奈奈奇にかも（寢も｜爾毛）（萬二十）
上つ毛のさぬだのなへのむらなへにことはさだめつ今は いかに世母（萬十四）

二　口語　う　よう

雨が降らう

ウはムの音便ンより轉ぜしか、むより直にウとなりしかは一考を要す。フラウをフロー、マセウをマショーとオ列の長音に呼ぶを、フロマショと樣に短音にも呼ぶは訛なり。さてヨウはウの變音にて主として下一段活より起り、上一段・變格にも及ぼせる者なり。

見・受け・おき ｝よう＝受け（ウン｛キョウ・ケヨウ（一拗長音）＝ケョウ（二直言）

ほめう｛ミヨウ
　　　　メヨウ‖メヨウ

見う‖ミヨウ（ミヨウ）

せう‖シヨウ‖シヨウ

せう事なし　何とせう

どうしようか

來（コ）う
來（コ）よう　來（キ）よう（是は上一段的なり）

四段（カサ變も時として）＼
その他　　　　　　　　　／第一變化＜う／よう

その變化を見るに、

終止	連體
う よう ｝ ト トモ	う よう ｝ カ　ナラ ガ ケレドモ

かゝる場合の「よう」を本居宣長翁が「やう」と書けるは誤にて、富士谷成章氏は正しく「よう」と記せ

り。

見やう（名）（様(方)）がわるい

ならばこの「やう」は正しけれど、

…………て見よう

視ようと見えまい（視ルトモ見エジ）

といふ時は「よう」と書くべきは明なる事なるに、夏目漱石氏などはこの助動詞の「よう」を名詞的接尾語の「様（ヤウ）」といふ字を用ゐをりかゝる文士外にも多し。注意せざるべからず。

しやう（様）ない　どうしよう　言様が悪い　言はう様が無い　志は受けようが物は取らぬ　うけ様もやり様もある

○青森地方にては四段活なるにもすべて降りョウ、書きョウと言ふ。

○ず、うず（來ウズ）＝靜岡、山梨、愛知、岐阜、長野の内にあり。

○尾張語ノ歌　貸つて來いさずか（ナニシニの義）おそがい（怖）おぞい事鼻にあらずさうであかうであは（雅俗語字解）

○そんなことの有やうはない（ラウ筈—正、ノりやう筈—誑）

三　べし

想像なれどやゝ意味あるものにて適當、可能、勸誘、義務等の義あり(命令の義ありといふはよろしからず)

今年は必富士山に登らむ
明日より早く起くべし　}(想像、一轉して決意)

雨ふるべし(想像)

死すべき(適當)時に死すべし(勸誘。場合によりては適當と見ても可なり)

すべきことすまじきこと

「當」といふ漢字は國語の「べし」に好く適當せり。

「宜」も同樣なれど、考へ方によりては勸誘ともなるべし。

國民は宜しく國家の大本を思ふべし(ガヨイ。勸誘)

……………といふべし(可能。テヨイ。レル。ガ出來ル)

この水飲むべし(可能)

腰間の秋水鐵もたつべし(可能)

汝よくつとむべし(このべしはつとめるがよいと思へば勸誘なれど、つとめねばならぬと解すれば義務を果することゝなるなり)

人或は動もすれば、義務を課すると命令するとを混同すれど、是は同一のものにあらず。前者は命

令的にいふにあらずして務むるがよしといふなり。事は同一にても語の違ふことあるを心得ねば、言語の學問は出來ぬなり。今人命令しても可なる處にべしを用うればとて、命令なりとは言ふべからず。そは命令的に直接に言ふよりは勸誘義務教訓的に間接に云ふ方婉曲にもありて對手を動すこと多ければ、彼を避けて此を取るなり。君上の臣下に命ずるにも此の語法を用ゐらるゝはやがて我が國柄を説明する者なり。

親には孝行すべし　皇運を輔翼すべし

の如し。

秋の野にやどりはすべし(ヤドリヲショウ位・タイ)女郎花名をむつまじみたびならなくに(適當、ヤ、決意、ショウ)

季吟、宣長、景樹―オナジクハ宿ルベシ

元臣氏―旅ナラヌニタビメイテ泊リハシサウナワイ(シカラバやどりしぬべし(はしなんカ)カ)

わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひ今夜しるしも(適當、想像。來サウナ)

いそぎつゝ舟出ぞしつる年の内に花の都の春にあふべく(適當、可能。アハレル樣ニ)

見わたせば比良の高根に雪消えて若菜つむべく野はなりにけり(適當、可能。ツメル樣ニ)

御詞をかへすは恐なれども花は春ならば今に限るべからず(適當、想像。カギルマイ。ト云フ譯ハナイ)

「べし」は第三變化(ラ變は第四變化)につく。ク活なり。

□　べく｛テ・シテ・ハ・モ・トモ・バ｝　べしャ　べき｛カ・ヲ・ニ・モ・ガ｝　べけれ｛バ・ド｝　□

べから｛バ・ズ・ム・シム｝　り｛キ・ケリ｝　［りトモ］　る｛メリ・ラム・ラシ｝　れ｛バ・ド｝　□

べけム

「べから」に「む」の添はるは「べし」が理にかゝる辭なればなり。

見る｛べけん｜や（べケは可能、適當。ムは想像）
べからしむ
べからしめむ｝

口語にては「べき」は少し用う。されど多くは「む」と同じく「う」「よう」と云ひ、或は略す。

さうする｜ものでない（スベキノ略ナリ）

「べい」は今は方言なれど、古き物語日記等には少からず見ゆ。

○住吉物語ニあるめかしくハあるべかしくナリ。

○「先々我が家に歸りつゝ夢想の如く｜するべし」と（鐵輪ノ女）

清正記　城の堀に手を掛け乗り越すべきとする處に

同　のり入るべきとおもふ志

男どちは心やりにやあらん唐うたなどいふべし（めリニ近シ）(土佐、十八日)

夕顔　右近は物もおぼえず君につとそひ奉りてわなゝきしぬべし（爲カ）(死なんとすニ似タリ)

西公談抄　四納大師言所方大事にてすでに死すべくなられける時

擦過　某これにゐませう（ベキナレ／ベケレ）けれども（ドモ）太郎冠者をこれにおきまする。ゆるりと御話なされい

「べみ」

いでゝいなば限なるべみ（シイ）ともしけち年經ぬるかと泣く聲を聞け(伊勢物語)

さほ山のはゝそのもみぢちりぬべみ夜さへ見よとてらす月影(古今)

反實假定を受くるべしはましに通ふ。

かくばかりこひむとかねて知らませば妹をば見ずぞあるべくありける(萬十五)

さよふけてねざめざりせば時鳥人傳にこそ聞くべかりけれ(忠見)(鈴木重嶺コノ歌ヲ難ジタレド非也)

中々に戀に死なずば桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり(伊勢)

逢ひ見ずば戀しきこともなからまし音にぞ人を聞くべかりける

藤原の君　みかどゝなり給ひ國しり給はましかば天の下豐なりぬべき君なり

あるべかしく（玉カツラ）べくヨリしく活ニナレルモノ。

べらなりはナリ活にて所屬べしに同じ

わがこひの數にしとらば白妙の濱の眞砂もつきぬべらなり（後撰）

冬くればなげおかれなん物故に君が手にはたなる（誤）ゝべらなり

○萬九　墓（ツカ）の上の木の枝靡有聞く（三本）がごと陳努壯士にし依倍家良信母（ベケラシモ）（べかるの場合）

○あやしくみけしきのかはれるべき（ナキモ三本アリ）頃かな（朝顔）

四　まじ

第三變化（ラ變は第四變化）に添ふ。べしの否定なり。

まじく（ヤ・バ・トモ）	まじゃ	まじき（カ）	まじけれ（バ・ド）

と活く。さてこの「まじ」と「じ」と「べからず」とを比較するに、

雨ふ
- らじ（ン）（打消にて想像の意を含む）
- るまじ（マイ）（想像の意を強くして打消す）
- る
  - べからず（マイ）
  - べく（モ・ハ）あらず（ラレナイ、理ハナイ、筈ハナイ）
- らざるべし（マイ、ナカラウ、ナイダラウ）

せざるべし＝＝すまじ（イ）

すべからず＝＝すまじ（ロ）

（ロ）は強く「シテヨクナイ」の意なれど、（イ）は弱く「スマイ」と云ふ意なるより見るも、「まじ」には強弱の意あるを知るべし。大體は「べからず」の方「まじ」よりも意強く用う。

仁德紀、御製　よる麻志枳（マジキ）川のくまぐ（連體格）（釋日本紀・外古本數種には「志枳」の間に「士」を加ふ）

齊明記、同　今來のうちは倭須羅庚麻旨珥（ワスラユマジニ）（シ ジ（橋本說））

萬二十　君が心は和須良由麻之目（モ）（自—（元曆本））

續紀三十、稱德　王等波己我得麻之岐帝乃尊岐寶位乎（德川侯金澤文庫舊藏寫本＝得方之字支）

ぬきかへまじき心地する（サヌキ典侍）

帚木　なのめなるまじき人のうしろみのかたは（形）

「まじ」の古格

續紀、廿六詔　敢末之自時止爲弖辭備申

同、四十五詔　己我得麻之字°岐帝乃尊岐寶位（一本）

同、五十八詔　暫之間毛忘得末之自美奈母悲備賜之乃比賜比

萬十四、遠江國歌　あら玉のきべのはやしになをたてゝゆきかつ麻思自いをさきだたね

口語　まい

まいシ　　まいケレド、ナラ、カラ、カ

此の「まい」の所屬は地方によりて區々なり。

四段	第三變化	まい（東京語）
一段	第一變化	
カ變	第一變化	
サ變	第二變化	

四段	第一變化	まい（諸方言）
一段	第三變化、第四變化	
カ變	第二、第三（廣島、岡山地方）第四變化	
サ變	第一、第三、第四變化	

二重想像二重打消を用ゐる處あるは珍なり。文語に「なからざるべからず」「なからざらんや」など用ゐる人あるも此の例なるべし。

（ふらうまい
　あらうまい

なかるまい

○しよう{かい / こい}(出雲)

○{す / 來(ク)}まい(土佐)

しようまいか(デハナイカ)(近江)

いこまつか(イ)

{す / せ}まいか(但馬)

（以上、誘引的）

行こまいか(愛知)

降るまあ(長門)

行かまい(岐阜)(人ヲサソフ「行カウ」ナリ)

行かまい(稀ニ / か)(南信、尾張、美濃)

金などない(アリ)もせぬに(今治カ、尾張)

樓の上、上　みかどにて子をもたらんもめでたくもあるまじからむ

遍昭集　などかこゝにだに消息をいはざるまじき

あらざるなきか

無からざるを得ず

なけ(から / ら)ねばならぬ

吉野拾遺、熊王發心　などか心を許さぬことのなかるべき

謠、木賊　いはんや一世の親子としてなどかその情なからざらん

枕草紙　三十餘ばかりの僧のいとにくげなからぬが…………

帚木　いかゞ淺くはおもひ給へざらむ

五　まし

事實を假定する想像。眞實に反してさうも思つて見る場合に用う。

鶯の谷よりいづるこゑなくば春くることをたれか知らまし（古今集）

口語にては「シラウゾ」と譯すべし。さらば「誰か知らむ」と何程の差あるかといふに、「む」とすれば假定の意すくなきなり。事實は「聲あるによりて知れる」なるを假定するがマシの職なり。

千はやぶる神の社しなかりせば春日の原に粟まかましを（萬葉集）（事實—社あるにより粟まかれず）

今日こずば明日は雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや

未來の事實は今無きことなれば假定する事を得るなり。

彼もし女ならましかば賢母たらまし

是も事實にあらざる事を假定したるにて「女ナランニハ」「女ナラバ」にても通ずれども、平安時代

の語としては不精密なりとて

彼は女ならむ

といふは、事實を想像するなれば、この場合「まし」は用ゐられず。而してこの假定は過去現在未來に通じ、就中過去にかゝれるもの克く本性を發揮す。左の例の如き最多きを想ふべし。

管仲なかつせばわれ袵を左にせまし（シテマシ）（セムは略）（足利抄本（異本））

大方保元以來のみだりがはしきに頼朝といふ人もなく泰時といふものもなからましかばこの日本國の人民いかゞなりなまし（神皇正統記）

知らまし

ト悔ミテイフ樣ノ辭ナリ（守部）。待花―さきそめばちるをなげかん櫻花まつ間や花のさかりならまし（守部）御杖ノ燈ニイハクましハ設ケタルコト虚ナルニイフ脚結ナリ。

春くれば雁歸るなり白雪（雲イ）の道行きぶりにことやつけまし（ツケレバヨイカ）＼出來ヌヲ假定シテ也

秋の野に道もまどひぬ松蟲の聲する方に宿やからまし（ヲ借リタモノデアラウカイ（遠鏡）。心ナラヌ事ヲ先ヅ思ヒ見タル也。）（ノレバヨカラウカ（非））

いづ方に身をばよせまし世の中に老を厭はぬ人もなければ（寶物集）ヨスベキ方ナキトノ事

われ鶯に劣らましやは（古今）劣ラズ泣クベカリシニ

秋なれば山とよむまでなく鹿にわれ劣らめやひとりぬる夜は（古今）

秋の夜の曉方のきり〴〵す人傳ならで聞かましものを(天曆帝人ニ秋夜聞蛬といふ歌よませて)(新古今)

たちそひてきえやしなましうきことをおもひみだるゝ煙くらべに(柏木)

しやせましせずやあらまし(徒然)

るなか人にておはしまさましよ(玉葛)

戀せずば人は心もなからまし物のあはれはこれよりぞ知る(俊成)

そのたなばたのたちぬふ方をのどめて長きちぎりにぞあえまし(レバヨカッタ)(帚木)

家にありて母がとりみば慰むる心はあらまし死なばしぬとも(大伴熊凝)

肇朝清王ノ面ヲ打チテ柱ニカケタリシヲ「子覺助入リ來テ下シ見テ「穴心ウ此定ニテ被進タラマシカバ淺猿カラマシトテ腰刀ヲ拔ムズ〳〵トケヅリ直シテ云々」(古事談、六)

いせならばひが言ぞ(ヤ)とも思はまし大和なるて(リカ)ふ美作の池(源忠房)

北條氏に泰時なくばはやく滅亡せしや明なり

今も世の母しいまさば人のごと髮も結びてもらひしものを(吉富春水)

櫻花風にしちらぬものならば思ふことなき春にぞあらまし(天德歌合、能宣)

春の心はのどけからまし

花だにもちらで別るゝ春ならばいとかくけふは惜まざらまし(同、朝忠)

ゆく春の泊をしふる（し著き）ものならば我も船出をおくれざらまし（同上、博古）

花にあかで何かへるらん女郎花多かる野べにねなましもの（タラヨイ・レバヨカラウ）を（平貞文）

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし（、レバヨカラウ（分キ様ガナイ））（友則）

御幣にならましものをすべ神の御手にとられてなづさはましを（拾）

形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝこともあらましものを（古）

車持のみ子玉の枝につけたる。　徒に身はなしつとも玉の枝を手をらで更にかへらざらまし。入江昌憙の頭注に「かへらましやはカかへらざらめやトアルベシ」、田中大秀の解「イマダ採得タマハヌ前ノ意ニテヨメルナリ」とあるは皆誤解なり。

かぐや姫　おく露の光をだにも宿さまし（ぞイ）小倉山にてなに求めけん。解「云々コソ有ベキナレ」トイフ意ナリと、これも誤れり。

高光る我が日のみこの萬代に國知らさまし島の宮はも（日並皇子ノ舎人）（萬二）

○韓娥宋玉（ト云ヒシ顔ヨキ人モ）見（マシカバ）則愁（ヘマシ）生（ケル事ヲ）　蜂樹青琴對（ハマシカバ）之羞死（ナマシ）

○綿因針而連不因針而總（ヌハレマシヤ）

○天之將（ニ）喪（サント）斯文（ヲ）也後死者不（ザラマシ）得（ル事ヲ）與（セマシカバ）於斯文（ニ）也天之未（ザル）喪斯文也匡人其如予何

「まし」は第一變化に添ふ。

奈良朝ヨリ　ませバ　まく　ましヤ　ましニ モノ チ　新シ、奈良ニナシ? ましかバ

かねてより君きまさんと知らませば門にやどにも玉しかましを(萬)
思ふどちまどゐせる夜は唐錦立たまく惜しき物にぞありける(古)
見ても又またも見まくのほしければ馴るゝを人は厭ふべらなり(古)

マクは下にヲシキとか思フとか欲ルなど續くより連用として第二變化に置くは通俗の說明法なれば、今も之に從ひたれど、其の實ムコト位の意にて「ク」は例のコトモノの義に體言に言ひなせるなり。されば下に受體助辭「ノ」も添ふにて、然らざるは助辭を略せるなり。かくて「マク」には假定の意少くして、ほゞムコトにて盡せり。

(宮内卿)この人年つもるまであらましかばげにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなまし。に早くて失せにしいといとほしくあたらしうなん(增鏡、おどろの下)
なかなかにうかりしまゝにやみにせば忘るゝほどになりもしなまし(後拾、十三)
「何とかいはまし」は「何トイツタラヨカラウ(ツタ)(ワルイコトヲイツタ)」
留めおかまし大和魂ハ非ナリ。
おもふことなくてぞみましほのぼのと有明の月の志賀の浦浪(增鏡)
ゆきくれて木の下かげを宿とせば花やこよひの主ならまし(平家)

かゝる香の秋もかはらず匂ひせば春戀してふながめせましや(大和物語、百三十八段)

これに何を書かまし(枕)(一種ノツヨメ)

わざと承らまくて參りしなり〔非ナリ〕(新釋「末」)(春滿之ヲ難ズ)

かなしいもをゆづかなべきまきもごろをのことしいはゞいや可多麻斯爾(萬十四)

柳瀨美仲　初瀨路や初音きかまく尋ねてもまだこもりくの山時鳥(鈴木松園まくノコト少シイヘリ)

をしむにし花のちらずばけふもたゞ春ゆくとこそよそに見ましか(赤染)

年くれぬとばかりこそはきかましかわが身の上につもらざりせば(金、四)

待つとてもかばかりこそはあらましか?おもひもかけぬ秋の夕ぐれ(千、十四)(以上三首玉の緒五)

よの中の人には葛の松原といはれん身こそうれしからまし(拾玉)

待つらんと思はゞいかにいそがまし跡を見るだに迷ふ心を(千載、哀)

後の世と契りもおかばいそがまし逢ふにはかへぬ命なりとも(續千、戀)

知らぬに似たりとぞいはまし

片岡のもりの木の葉も色づきぬわさだの小しね今やからまし(爲家、新勅)(ドウモセヌコトノ反實)

いかにせまし〔シタラヨイ〕とおぼしわづらひて(花宴)

いかにしておもひ立たまし世のうさを隔つる雲の深き山路に（續千、源兼氏）
いかにして影をも見まし澤田川袖つくほどの契なりとも（新後撰、家隆）
穂には出ぬいかにかせまし（シタラヨカラウカ）花薄身を秋風にすてやはてむ（後撰、道風）
瓜作になりやしなまし（イカニセン）（瓜タツマデニ）（紅葉賀）
梅の香のふりおける雪にまがひせば誰かこと〱わきて折らまし（古今）
わすれ草種とらましをあふことのいとかくかたきものと知りせば（同）
深草の野べの煙となりにせばいづれの雲をわけてとはまし（道綱母）
玉桙の道の空にて消えにせばうきことありと誰か告げまし（赤染）

次に前提法には逆態なき處注意すべし、さるは「ム」は積極的に事實を想像するなれば、「降ラメドモ」とやうにも言はるれど、「マシ」は消極的に事實に反したることを假定するなれば、それを又逆態に言ひなす要もなく、せられもせざるなり。

降ら ｛ めド［バ］
　　　 ましかバ［ド］

「マクトモ」の無きも自明なり。さて「マシ」は本假定の意なれば、第一變化の「マセバ」も第五變化の「マシカバ」もともに假定前提法にて確定といふは無き理なるを、如何にして兩樣の語遣あるぞといふは古來の難問題なり。之を假定の中にも將然と已然との別ありなどいふは、通ぜざる事にて、言

ふ人自身も了解し居るにあらず。又さる先輩は大よそに「マセバ」は歌に多く、「マシカバ」は文に多しともいへる、是は歌と文との用語の例の異なる者あるに注意せる好きことなれど、偶然の現象か必然の現象か明ならず。案ずるに「マセ」と「マシカ」は此の如く圖すれどすべて不完全不通常なる活方にて「マシカ」は「マシ」に感嘆の「カ」を添ふること猶キシ｜シカの如きもの、「マセ」は「マクセ」の義にて、「セ」はサ行變格動詞、猶「無カラバ」を「ナカリセバ」と強めたるが如きなるべし。さらば「マセバ」「マシカバ」の別は其の語の成立より心得べく、これぞと言ふべき用法の差は無しと知るべし(文語歌語云々は偶然なり)

常よりもなげきやすらむ棚機のあはまし（七月ナリセバアハマシト）暮をよそにながめて(詞花)

人知れず絶えなましかばわびつゝも無き名ぞとだに言はましものを(古)

これ及「マシヂ」などは連體といふべけれど、その用例におのづから定りあるを忘るべからず。さて今人「マシ」の義を心得たらぬげに見ゆる者多く、歌などにも「マシ」を用うべきに

あはれ君露と消えずばから國に我が言の葉の花も咲きけむ(豐太閤を詠じたる)

とケムを用ゐて過去の事實を想像するものとせるなどの類、歴々の人にも多し室町以後の歌はすべて當にならぬなり。又

春來ぬと紐とく梅や天地のおのづからなる暦ならまし

などは「ナルラム」と想像すべき處なるべし。

なほ次の諸例につきて考ふべし。

春見麻之從者夏草の茂くはあれど(萬九)

玉敷而待益欲利者云々(萬六)

筑波根にわが行けりせば霍公山彦とよめ鳴かましやそれ(萬八)

ねたく言はざらましものをとくやしがる(土佐)

道遠み人も通はぬ奥山にさける卯の花誰か折らまし(天德歌合、忠見)

ますぐなる日本心にまなびてば神のまことの道は得てまし(大平)

かやうの物語申さば夜も明けなまし(ぬべしノ誤)(熊坂)

たしかに案内せさせてこそおりさせ給はましか(秋香本ノ外ニハナシ)

誰が里もとひもやくると時鳥心の限まちぞわびまし(新古、紫)

夕さればあらましことの面影に枕のちりをうちはらひつゝ(右京大夫)

もし海べにてよまゝしかば波立ちさへて入れずもあらなんともよみてましや(土佐)(燈、コノツヾキナキ例ナリ)

見し人を松の千とせに見ましかばとほく悲しきわかれせましや(土佐)

安田長穗　大瀧のつらゝが中の那智ごもり聞くわれさへに身もこほりつゝ

神も驚くいのりならまし(諸平修正)

りけんニテ事ナカラン

（忠盛）内々思ひけるはこの者さしも猛き者とは見えず狐狸などにてぞあるらんそを射も殺し斬りも殺したらんにはむげに念なかるべし（平家）
らましト流布本

武藏野にすてられぬとも久延彥の又秋の田に立ち榮えまし（篶亂）

家づとにいざ拾はまし貝濱や打ちよする浪に袖はぬるとも（千代梅）

かく知らましかば君たちとこそ我よりも先に失せ給ひねと祈りおもふべかりけれ（大鏡、伊周）

然者汝心之淸明何以（イカニシテ）知（ラマシ）（古訓）

六　めり

第三變化につく。（ラ變は第四變化）

此の助動詞はなりを少し和げ（想像して）たるものにて、べしのべのラ變に活きたるに近し（或はむありの約かとも思はる。舊說に見えありなりとあるは非なり）口語には或はだと斷定するを得べく、おもむき樣子氣（ゲ）などゝも當つべし。

立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絕えなむ（古）

同じ想像ながらむべしまし等とかはり、「流るなり」と斷定してもあるべきを少し和げたるなり。べ

しにても其の意聞ゆべけれど、それよりは稍輕し。彼の古今時代に多く用ゐられたるべらなりといふ語はべしと全く同じ意味にて、めりのめはべと互に通ふ音なり。

うたてげなる翁二人おうなと來あひてゐぬめり(大鏡)

畢竟斷定すべき處を右の例の如く和げてべしめりなどせるもの多し。殊に大鏡にはその例多きを見る。

……聞かせまつらむといふめれば……よく聞かむとあどうつめりし(大鏡)

右の例のめればめりしをべければべかりしとしては其の意あまりに強くなるなり。

人毎にいふめれど……春の氣色にこそあめれ(徒然)

鶯の笠にぬふてふ梅の花ぬるめる人に着せて歸さむ

此の格その意は皆斷定すべき處ながら少し和げたるを知るべし。此のめりは平安時代特有の辭にしてその前後には極めて少し。萬葉集には僅に一つ見えたるのみ。但平安以後のものにても擬古文には用ゐたり。その活用は

	めり	めり	める	めれ	
	キ、ツ、ケム	カシ、ヤ二トモ		バ、ド	

第三變化にヤトモのつく例なし。

伊奈太吉爾伎須賣流玉者二無此方彼方毛君之隨意(萬三)

乎久佐乎等乎具佐受家乎等斯抱布（平イ）爾乃那敝氏美禮婆乎具佐可知馬利（利イ）（萬十四）

この確信こそやがて世の花とも實ともなりなむめれ（靜軒）

…………たらんにはいかに心のゆくわざなめりとて

賴む人露草ごとに見ゆめれぱきえかへりつゝ歎かるゝかな（堤中納言）

人しれぬ人待顏に見ゆめるはたが賴めたる今夜なるらん（拾）

あてたがはせ給へることやはおはしますめる（大鏡、道長）

あらざらめり（太閤記七、めりヲむト同ジ義、同ジ接續ト思ヒタルガ如シ）

七　らむ

第三變化につく。（ラ變は第四變化）

此の助動詞は動作狀態を見てその心・原因を思ひ、又見えざる動作を想ふなり。而して必現在想像に限り、過去未來には決してかゝることなし。

今もかも咲き匂ふらむ橘の小島が崎の山吹の花

「匂ふらむ」は口語に匂ウテルダラウの意なり。尤らむには相當の口語なければ直譯は出來難し。

故鄕に今宵許の命ともしらでや人の我を待つらむ（武時）

憶良らは今はまからむ子泣くらむそのかの母もあをまつらむぞ（萬）

まからむはラ行四段活第一變化にむの添はりたるにて未來想像なり。らむとまがふべからず。

白雲にまがひ〳〵て櫻花（山櫻）つひに雪とも降らむ（未來）とすらむ（現）

久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ(古)　玉緒「かなニカヨフ」

此のらむは靜心なくを受くるなり。古說多くは「靜心」の上になどをいれて解けど、それに及ぶまじ。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ（事實）夢と知りせば覺めざらましを

此の場合のらむを過去の想像とするは非なり。人の見えつといふ事實の原因を想像するにて時間には關係なし。

袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つけふの風やとくらむ(古)

是亦目に見えぬよりの想像にて、未來の動作にはあらず。

誰が方になびき果てゝか富士の根の煙の末の見えずなるらむ（ぬなるらむ(一派ノ人ノ調)）(十六夜日記)
（ツテヲル）
晝見シガ今見エズナリタルニヨメルナリ

此の「ナビキハテヽ」を過去なりとしてなるらむをばなりけむとすべきなりなど論へる學者もあれど然らず。(物集氏も「折りためし花こそ見えねつゞらをりもと來し道やいづこなるらむをけむにすべしといふは却つて非なり。)こは現在想像なれば正しきなり。らむの誤用は古く南北朝の頃よりありしが如し。後說の「時」と相俟ちて深く考ふべし。去る三十八年宣長翁追贈從三位の時に豐頴翁の詠まれし歌に、

御惠の露霑けし來む春はいかにのどけく花か咲くらむ

とあるらむは未來を想像せるにて如何ながら非なりと言はざるべからず。其の他「花咲カバ鳥モ鳴クラム」とか「明日ハ友人モ立ツラム」とか坪内氏の新曲浦島の「量り知られぬ樂しさを容れなばわたつ大海も溢れて空をやひたすらむ溢れてや空をひたすらむ」など皆誤例なり。

らむ(トモ)　らむカ　らめドヤ

らむともとして逆提とせるは徒然草に一つあれど疑ふべし。恐らくは後の書きあやまりならむ。らめどの例は

色も香もおなじ昔に咲くらめど年經る人ぞあらたまりける(古)

猶らむの事は卅九年の國學院雜誌に二回詳論せることあれば就いて見るべし。(附錄參照)

○らむ　疑と想像とは古より混じたりけむ。

十月鐘禮乃雨丹沾乍哉君之行疑(ユクラム)宿可借疑(カルラム)(萬十二)

世のしれものやかく危き枝の上にて安き心ありてねぶるらむよ(徒然四十一段)

嵐蘭の燒蚊辭にそへて、子や泣かむその子の母も蚊の食はむ

わびはつる時さへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ(古十五)

秋風は身をわかちてもふかなくに人の心の「ナド」空になるらむ

人のみることやわびしき女郎花「ナド」秋霧にのみ立ちかへるらむ

わが身からうき世の中となげきつゝ「ナド」人の爲さへ悲しかるらむ(「ナド」チイル、ニ及バ

ジ」)

や、かなど上になきらむを片響と富士谷流にはいふ。なほ誤れり。

○井上翁七十賀

庭松の千歳を友に今よりはいよゝまれなる年をへぬらむ(正辭)

ながらへて君ぞ見るらむときはなる松の十返の花(岩次郎)

老松も千歳の友は君ならで誰をかはとて心よすらむ(可)(原宏平)

十返の花さく松を友としていく千萬を君はへぬらむ(眞佐子)

ときはなる松を齡の友として七十八十をゆめにこゆらむ(賴教)

獨述情　身にあまる惠あるよはよむふみの少きのみや(ヅ)なけきなるらむ(リケル)(保己一)

和歌の浦にあさる海士舟かぢをたえあしべをいつかこぎいづるらむ(テイヅベキ・モイデナン)(瑞穗舍和歌)

風と浪とはおもふどちにやあるらむ(不定時)

おもへばわが織る布錦いづくの誰が身を明日まとふらん(不定時・想像)

長門の口語「ふるらう」「な{くらう／イチヨルラウ}」(兩用)は理想的と言ふべし。

八　らし

		らし	らし	らし
		ヤ トモ モ	ガモニヲ カ	○

第三變化につく。(ラ變は第四變化)

根據ある現在想像にて推定ともいふべし。

み山には霰ふるらし外山なる正木の蔓いろ付きにけり

立田川紅葉流る神なびの御室の山に時雨ふるらし

平安朝時代には此の語活用なし。

ぬき亂る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖のせばきに(古十四)

年月のゆきふりゆけば草も木も老いこそすらし白きを見れば(菅家萬葉)

この川にもみぢば流る奥山の雪消の水ぞ今まさるらし(古六)

ふる雪はかつぞけぬらし湖足引の山の瀧つせ音まさるなり(古六)

忍びて心かはせる人ぞありけらし(帚木)

こそのかゝりにもなほらしにて結べるにて知らるゝなり。

現今は之をシク活に活すべし。

人ある｛らしく　覺ゆ
らし
らしき　樣なり
らしけれ　ば止めむ

又奈良朝時代にはらしの外にらしきあり。されどこそかもの結にのみ限り、連體法はなきにやらしとのみいへるが如し。

古も然なれこそ現身も妻を爭ふらしき(萬)

みよしぬのこの大宮にありかよひめし給ふらしものゝふのやそとものをも(萬)

此のらしは終止とも見れば見らるべけれど、連體といひても可なり。

今語にては此の助動詞と接尾語のと別つこと肝要なり。

人らしきことをいふ（名・尾・形）

男(女)らし(古くは女しなど見えたり)（名・尾・形）

遙に見ゆるは人ナル/ダ(ロ)らし（助）

彼は男ナル/ダ(ロ)らし(是は接尾語にもなるなり)（形・助）

以上べしまじらむらしは第三變化(ラ變第四)所屬なれど、上一段に添ふ時は第二變化を承くることあり。

　之を射べきか射まじきか(盛衰記)
　春立てば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯の鳴く(古)
　來て見べき人もあらじなわが宿の梅のはつ花折りつくしてむ(後撰、一)
　白妙の波路を遠く行きかひて我に似べきは誰ならなくに(土佐)
　春日野にけぶり立つ見ゆ處女等し野の邊のうはぎつみて煮らしも(萬)

是等は皆一種の古格なり。盛衰記のは後世の訛ならんか、斷言しがたし。
近代まじべしを第二變化に添ふることあるは鎌倉頃に起りし訛なり。

　棄て(第二) { べからず / まじ }

口語にては棄てマイヅといひて正し。
此の所屬の混同よりましまじと紛ふことあり。

　逢ふことの絶えてしなくばなか〳〵に人をも身をも恨みざらまし

之を「恨ミザラマジ」といひては何の意とも聞えず。

　さきがけて又さきがけて死出の山まよひはせまし皇の道(淸川八郎

この歌のごときはまじとましとの所屬の誤より、其の意いづれとも聞き分き難きにいたれり。こは論なくすまじの誤なり。セマジは文口混交なり。

光仁卽位詔　此の天日嗣高御座之業者天坐神地坐祇乃相宇豆奈比奉相扶奉事爾依弖志此座者平安御坐弖天下者所知物爾在良之止奈母所念行須

後拾　聞きつるや初音なるらし（不穩當）時鳥老はねざめぞうれしかりける

現身のよを淸めむと天つ神雪ふらすらし年の始に（正風）

萬六　三日の原ふたぎの野べを淸みこそ大宮處定めけ等霜

同　うべしこそ我大君は………大宮此處と定異等霜

紀卄二　うべしかもそがの子らを大君のつかはすらしき

萬二十　大君のつぎてめすらし（山田氏ハ熟語的ニ體言ニツヾケリト見タリ）高圓の野べ見るごとにねのみしなかゆ

神武記　今うたば余良斯。（好）

應神記　伊邪佐々婆余良斯。那

「……事をおもひて撰べるならし……終りぬることになむありけるといへり（ミナ人事ニイヘリ）

萬十　かりがねの寒き朝開の露有之春日の山を令黃物者

萬六　萬代に見ともあかめや

古今　朝なげに見べき君としたのまねば思ひ立ちぬる草枕なり

枕五　さすがにおきゐらむ怪しくて

子夏之門人問交於子張、子張曰子夏云（イヒケン事）何（子張十九）

子貢曰……夫子之云（イヒケン事）不亦宜乎（同）

九　けむ

第二變化につく。

此の助動詞は過去の想像をあらはすなり。

けむ（ヤ・カシ）　けむ　けめ（ド）

古にありけむ人の倭文機の帶ときかへて伏屋立て妻問しけむ葛飾の眞間の手兒名が云々

（萬）

過去にありし事實を想像したるにて、ましの假實と異なるを知るべし。

大久保も西郷も死なざりけむには我が國はいかゞなりけむ

こは事實に反する事の假定想像なればけむと云ひ難し死なざらましかばいかになりなましと假定の助動詞にあらたむべし。又

……ざりしならば

の如きは近代の俗文にて正しくは「シ」を用うべきならねど、マシも今は少し古くなりたれば近語法として認むべし「ケム」を「シナラム」「シナルベシ」といふは相應に古くより有りて誤れる處なし。

文覺の精力や如何に強{かりけむ／かりしならむ}

義經は高館をば逃げ{けむ／しなるべし}

昔は…………なり{しか／けむ}も計りがたし(想像と疑問との相通)

この曉の古音Hなり{けん／し}かKなりしか

無かつた{らう／か}も知れぬ

鐘の音木の音遠く聞ゆなりいづれの里か火を出しけむ(ヌラン)(海野遊翁)

枕　神は……八幡この國の帝にておはしけむこそいとめでたけれ

萬十八　かたり家末久(ケマク)は

重之集　古を今日にあらするものならばひとりは千代をおもはざらまし

尤、太刀に差手の自由を利かしめば金剛力の吊り上げ萬目を驚すの藝當ありけむものを差手の一本遂に不滿足の勝負に終りしは惜しいことなり(東朝43、1、20西ノ海トノ取組ワケの評)

(宣長もし心敬の「日の御影花に匂へるあした哉」といふ句を)もし見給ひけむ(非)にはさもつゞけさせ給はざりけむをといぶかし云々

落窪「からうじて足(ツレテキタリ)づから行かずばいますう(まカ)じかかりけむ」(?)とのたまへば

葵　袖の上の珠の碎けたりけんよりもあさましげなり

太閤記或問　恨むらくは寛永之制禁五分一同と秀吉公之時代に有しかば今程はきりしたんの法種絶果んものを

天、富士谷氏に年を假し云々或は又さなくとも之を祖述して精錬を加ふる者ありしならば或は日本語學の一旗幟を東洋の天地に押立つることを得けん(誤)ものを

泊洦筆話　(しづこ)命長くて老にいたるまでもよみいでたらむにはいかばかりめでたき歌どもいできけ(誤)むかし

第四節　希望　(希(ケ)求(ク)、誂(アツラヘ)、願望)

一たし

第二變化につく。

此の助動詞は動作の主が動作したき(セントヲ欲スル)を表すなり。さてたしは語根いたしにて例へば行きたしは行きいたしの略なれば、此の語は助動詞にあらで形容詞なりと說くものあり。

凡ならばかも〳〵せむをかしこみと振痛袖を忍びたるかも(萬葉、遊女兒島)

この「痛」の字をたきと讀ませたるは勿論ながら、たしがいたしと同語なりとは遽に斷ずべからず。よし假にこれを是認するも、今日の語法上たしは純然助動詞の性質を備へ居れば形容詞に入るるはいかゞあらむ、又大槻氏は之を接尾語に入れ

ゆき(い)たし（動｜尾、形）

と說かれたるは一說なり。畢竟たしは歌詞に多からず耳だちて聞きぐるしとて排斥せられしかば、種々の說をも生ずるに至りしならむ。そは千五百番歌合に

いざいかにみ山の奧にしをれても心知りたき秋の夜の月(季能)

此の時の判者は定家卿にて「たき」の語を難ぜられたるにてもしらるゝなり。活用はク活。

たく(バ・トモ)　たし(ヤ)　たき(カ)　たけれ(バ・ド)

たから ズ ム バ　　たかり キ ケリ　　たかる ベシ ラム マジ

タクの音便タウは「死ニトモ無イ」「見ットモナイ」など變訛することあり。

山寺は（モ）法師くさくて居（ハキ）たからず心淸くば糞ふくにだも（ナリト（岩崎本明惠上人歌集）にても（圓珠庵雜記））（明惠上人）

などは思ひ切りたる歌なり。

助動詞變じて一詞の中に入る。

目出候　めでたく候（たくハ希望辭ニテ謙遜シテイヘルガヤガテ形容詞トナレルナリ）

俊成女消息（新勅撰八）中納言入道ならぬ人のして候はゞ見たくだに候はざりしものにて候（今ノ口語ト同ジ、ましノ處）

友は歸りたき（傍寫、疑問）樣（か）なりしも

二　なむ

第一變化につく。（テニチハなるべし）

此の助動詞は他の動作を希望するにて所謂誂なり。活用はなし。

彼早く行かなむ（イッテ欲シイ、イケバヨイ）

此のなむはやゝもすれば第二變化につく未來想像のなむとまぎるゝことあり。そは上下一二段活用に於いて第一第二變化の形等しければ、

雨も晴れなむ

右の場合の如きははれを第一變化とすればなむは誂となり、第二とすれば想像となるなり。

小倉山嶺の紅葉心あらば今一度の御幸待たなむ(貞信公)

此の「待たなむ」は「紅葉ガ御幸ヲ待ツテクレレバヨイ」と貞信公が紅葉の動作を希望するなり。

我が所作にはなむは用ゐず但し

我が體大きくならなむ

頭さわやかにならなむ

の如きは我と體若しくは頭とを分ちて考へたるにて、卽我は體若しくは頭の動作を希求するなれば差支なしされば

われ博士にならなむ

我が子博士にならなむ

は非にしてなりたしとすべけれど、

は正しきなり。

第二變化になな(完了)む(希望)と添ふることあり。ぬの第一變化になむを添へたるなり。又たらなむなどとも

いへり。

人知れぬ我が通路の關守は宵々毎にうちもねななむ(第二)

燒かずとも草は萌えなむ春日野は只春の日に任せたらなむ(第二)

このなむを單になむと同じ事に思ひて第一變化にそふるは誤なり。次の歌の如きはその例なり。

梅の花庭もせきまで咲き充ちぬ吹き來る風よ心せななむ(第一)(鈴木重嶺)

こはたえなゝむなどの如く上下一二段活用の第一二變化の同形なるより、第二を第一と思ひ違へたるなり。

墨染の鞍馬の山に入る人はたどる〳〵もかへりきなゝむ(後撰)

のごときも第一變化のこにはあらずして第二のきなるを見るべし。

なむ―大槻氏ハ希望感動詞トス。

萬、十四　上つ毛野をどのたどりが川路にも子等は安波奈毛ひとりのみして

同　子等はあは奈毛　せなはあは奈母　まとほくのぬにもあは奈牟

萬、二十　鶯はうゐきの樹間(コマ)をなきわたら奈牟

同　ほとゝぎすなほもなか那牟

萬、一　雲だにも心有南武(アラナム)

其の夜の月は程なく入りぬともやどれる水に影はとめなむ　第一、誂

御製　國民も常に心を洗はなむみもすそ河の清き流に　第二、想像

一重づゝ八重山吹は開けなむほどへてにほふ花と頼まむ(天德歌合、兼盛)

あだなりと常はしりにき櫻花をしむ程だにのどけからなむ(同、朝忠)

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげて入れずもあらなん(古今)

岡崎の月見に來ませ都人門の畑芋煮てまつらなむ(蓮月、八月十五夜)　非ナリ

濁る酒濁らぬ酒とよしゑやしゑひなきしつゝ笑はなむやそ(惺窩ノ長嘯ニオクレル)

さゞ波や近江のをとめ明日よりはみ山がくれて見えずもあらなむ(續古今)　他人ニ誂ヘタルカ

山櫻ちりて深雪にまがひなばいづれか花と春にとはなむ(新古、伊勢)　みてむ

淺くとも心ふかめて青ぎりの葉かげの清水われはくまなむ(陸實、碧梧井、愚庵十二勝ノ一)　きてむ

磯草のかりそめながらしばし世のあらしを波の音と聞かなむ(臥病、同)　非

言の葉の道をさとして外つ人もわが日の本の人になさなむ(植松有信の門人、吉川樂平)　第二

おしなべて峰も平になりななむ山のはなくば月もかくれじ(紀有常)

旅ねする身には涙もなからなむ常にうきたる心ちのみする(藤原ノ君)

人をおもふわが身のたまはなからなむむなしきからはなげきしもせじ(同)

唐衣たつたの山も今よりはもみぢながらにときはならなむ(後撰、秋下)　指定辭モ動詞ニ準ズ

こひわびてうちぬる中にゆきかよふゆめのたゞぢはうつゝならなむ(古戀二、敏行)

三 まほし

(準助動詞)

此の語はもとまくほしの約なれば第一變化につく。たしの意に用うるが本義にて、

ならまほし(ナリタシ)

有らまほし(有タマホシ、シカ有ルニ逢ヒタシ)

などはなむにやゝ近し。

古くは「見まくの欲しき君」のごとくまくとほしとを離しても用ゐたり。

こゝにいひ置くべきはたしを他人の動作につくる變例あることなり。

御出相成度候(御出アラマホシク候)

「御出相成」は他人の動作なるに自己の動作を希望するたしにて承けあらまほしく候の意とせるなり。こはもと

御出を蒙りたし(蒙ルハ我ノ動作)

の意なる

御出下されたし

の「下サレ」は本來受動にて我の動作なれば、其の方に「タシ」と附きたるが、何時の間にか其の「下サレ」は尊他の敬相に轉じたるも、其のまゝにつくることとはなれるにて、さて被下と相成と其の意相近きより終に「御出相成度候」と様にも一般に言ふことゝなれるなり。

上京ありたし（尊他）

の如きも尊他の意にて右と同例なり。

家にありたき木は（徒然）

此の例にては木にあることを希望するにはあらずして、我が木をしてあらしむることを希望する意なり。さればこゝにはあらせたき（有ちたき）おきたき、植ゑたきなどいふ程に心得べし。

萬十四、常陸歌　筑波ねのにひくはまゆのきぬはあれど君がみけししあやにきほしも

平治　落ち行けば命ばかりはいきの守みのをはりこそ聞かまほしけれ

後撰、戀六　狩人の尋ぬる鹿はいなびのにあはでのみこそあらまほしけれ

金葉、戀下　人しれぬ思ありその浦風に浪のよるこそいかまほしけれ

「欲」の字も他の動作を希望するには用ゐず。「ほり」も然り。

歸つてほしい　私をつれて行つてほしい

四　想像辭　む　まし　べし

是亦希望を表す。（めり、らむ、らしはあづからず）

いかで行かむ（希）｛ドウシテイカウ／ドウカシテユキタイモノダ｝

明日よりは早く起きむ（決意）

一度はふじにのぼらむ（ト願フ）

一人のみながむるよりは女郎花わがすむ宿にうゑて見ましを（古）

櫻花見るにも悲しなかなかに今年の春は咲かずぞあらまし（千載）（假想）

猿澤の池もつらしな我妹子が玉藻かづかば水ぞひなまし（萬）

御出可被下候　勉强可相成候

可候は度候と略同意にてやゝ粗末なる言方なり。

聖武紀、宣命　欲奉造止思

光仁紀同　御躰欲養止奈母所念須

燒かばやと毛蟲に怒る法師哉

日の本の大和心を經として武備に學にたゆみなく進みゆくよの唐錦緯の色々おりてまし

（丸山氏幼年校歌）

五　附説　感嘆のテニヲハ

〔が〕（がハかノ變　奈良ニハ清音カ）　もが、がな　以上名詞副詞を受く。

しが（な）、にしが（な）、てしが（な）　以上動詞を受く。

是亦轉じて希望を表す。

老いず死なずの藥もが（アレカシ　アラナン）

世の中は常にもがもな渚漕ぐあまの小舟の綱手かなしも

君が爲惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひける哉（アラン）

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子の爲

長きを花の命ともがな

何をがな（書かん）

ならべてもがも（紀十一）

副而毛欲得（タグヒテモガモ）（萬四）

水にもがもよ（萬十四）

是等は皆感嘆辭の下に動詞の含まれて希望の意となれるものなり。

又動詞を受くるは過去辭につゞく。

思ふどち春の山邊に打群れてそことも知らぬ旅寢してしが(シタシ)

あな戀し今も見てしが山がつのかきほに咲ける大和撫子(古)

甲斐がねをさやにも見しがけけれなく横ほり臥せる小夜の中山

大寺の餓鬼のしりへと思へどもおもわをいかで見むよしもがな(重嶺)

薄雲　いかで思ふこと{してしがな(諸本)／とくしてむ(爲氏本)}

蓬生　いかで{○／かゝる}世の末にこの君をわがむすめどものつかひ人に{し／○}なしてしがな(曼本)

萬十一　潮みてば水沫に浮ぶまなごにも吾は生鹿(ナリシカ／ならまし)こひはしなずて(しかハ然ラムヲ希ヒましハ／然リシヲ悔ム—然ラヌヲ希フ)

同　眞十鏡見之賀(カ ガ?)登念妹相可(アヘル アハスル?)聞玉緒之絶有卿之繁此者

玉葛　かゝるものありといかで人にしらせて兵部卿宮などのこの籬のうち好ましうし給ふ心みだりにしがな

ばや　は順假提法にやを添へたるにて亦希望の意を表す(動作の主の希望を表す)

見ばや(タラナア)と存し候

諸共に死なばや(ンダラナア)

かり暮し歸る旅の中ざしにさゝばやと思ふ山櫻花(名和大年)

見せばやな「タラナア(ナア)」をじまの海人の袖だにも濡れにぞ濡れし色は變らじ

いとむくつけきまで人のおどろくにほひを失ひてばや(橋姫)

今は臨終正念までとく〳〵頓死をし侍りなばやとのみこそ覺ゆれ(愚管抄七)

みかうしまゐりなばや(紫式部日記二段)

美女うち見れば一もと葛なりなばやとぞおもふもとより末までよられぱやきるともきざむとも離れがたきはわが宿世(梁塵秘抄)(なりやしなましョリ出デタラン)

是等皆順假提法のばに感動のやの添ひたるものにて、その意いひきるゝなり形は同じばやながら、疑のやなる時は希望にあらず、やにてその意きれずして下の句にかゝりて結ぶなり。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを

薄雲　いかでこのことをかすめきこえばやと(いかでの下にばやあるべきか「爲氏本には「きこえむ」とありてとゝのへり)

平家七、都落　吉野山の奥の奥へも入りなばやとはおぼしけれども

紅葉賀　誰としられでいでなばやとおほせど

兼好歌集、詞書　いづ方へも又行きなばやと思ひながら云々背く身はさすがにやすきあら

ましになほ山深き宿もいそがず

宇治拾、七　やはら之を賣りてばやと思ひて

同十一、則光ノ段　行かじはやとおもへど

拾玉　わが心かくさじはやとおもへども見る人もなし知る人もなし

梁塵秘抄　ひじりをたてじはや袈裟をかけじはや珠數をもたじはや年の若きをかたはれせむ

愚管抄　時ノ君ノツヨクウルサキ簇臣ヲアラセジハヤトオボシメス御心

「ばや」に誤用あり、「人の親になりにし(非)後にとはばや(非)な子をおもふ道にあさきものかと」(樂翁)など調子はづれなり。

なば前提法アレバやヲモツクベキ心地ス。玉緒巻四ニハソノ例ヲアゲタレド、ツクリモノナリ。

○な　いざむすびてな(萬　一)自コヒネガフ。

○ね　なのらさね　他ニ誂フ。

朝夕なありそね(變)

なりをしまさに

第五節　時

一　定時と不定時

動作は事實上「時」に關せざるものなきは勿論なれども、言語上にては「時」に關係せざるも亦多し、其の過去現在未來の何れかに屬する者を定時といひ、三時に關係せざるものを不定時といふ。不定時は固より時なきを、なほ不定時と時をいふは定時に對して說明する時の便宜上の名なり

指定助動詞ナリタリ及カリ活形容詞は又動詞に準じて時に關す。

(1)　定時

格段なる動作はそれ〳〵の時あり。

我が中學校にて敎を受けし先生昨日上京せり

御兩親はおはしますや

明日は雨ふらむ

(2)　不定時

一般の動作にて時の如何を定めず、過現未に通ずる眞理習癖又は動作を事柄として記述するもの皆不定時なり。

犬も步けば棒にあたる

我は每日六十本の紙卷煙草をのむ

酒をのむは品行を害する本なり

酒をのめば｛ゑふ／ゑふべし（想像ナレド未來ニアラズ）

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す

大日本帝國は神國なり、天祖始めて基をひらき日神ながく統を傳へたまふ

「讀む」は四段に活く

毒を食はゞ皿まで

老ゆれども衰へぬ人もあり

人を殺さばおのれも殺されむ

是は定時にも用ゐらるれど、今は「人を殺せばおのれも殺さる」と假定し想像したる意にとりて不定時を示す。前の「食は」も然り。

矢を負ひたる猪の猛り狂ふ如し

何處にもあれ海岸に立てる家は眺廣くて心地よし

不定時には動詞のみなるあり、タリリリムベシなどを添へたるあり。

二　定時の三種

記述說話をするに、或る一定の時を標準としてその範圍内の動作を現在とし、其より前のを過去とし、後のを未來とす。

(1) 現在

直說法の動詞の他の時に關する助動詞を添へざるもの、現在の動作を表す。

春立つ今日の風やとくらむ

白雪のかゝれる枝に鶯の鳴く

ますらをの鞆の音すなり

某生病氣にて缺席す

朝學校に行く、午後大川氏來る、古事記を讀む(日記)

此の年始めて内國勸業博覽會を開く(史表)

風吹き雨ふれば出立を止む

元來動詞その物には時なく、過去未來の場合には相當の助動詞を添へて之を表すにて、其の然らざるを定時にては又現在といふなり。さて三つの時はすべて直說法(終止、中止、連用、連體)において認知せらるゝ者にて前提法にては不明瞭なり。「雨ふらば行かじ」などの時の假定前提法は動詞その儘ながら、定時にては未來といふことを得べし。之に反して前例「雨ふれば」の確定前提法においては動作フルの現在なる場合には現在時なりともいひ得べきを以て之を擧げたり。前提法は當然

「時」に伴ふものと思ふべからず。その不定前提法といへるもの、時に就いて不定なるが前提法の本體なり。又命令法も時に關係せず「汝之を讀め」といはむに、動作讀むは後來生ずべきものなれば、として未來とも云はゞ云はるべけれど、命令するは現在なれば、未來と定めむも如何なり。畢竟過去現在未來の時は直說法にのみ存する者と心得べきなり。以下之に倣へ。(過去未來の助動詞の前提法となるは又自別なり)

(2) 過去　き　けり

動詞の第二變化に添ふ。活用左の如し。

○	○	き　カ　シ	し　カ　カナ	しか　バ
けら　ズ	けり　キ	けり　ナ　ヤ	ける　ヲ　ニ　モ　ガ	けれ　ド　ドモ

昨夜牛込に火事ありき

入らぬ事を言ひしを悔ゆ

此の頃度々彼を訪ひしかど居らざりき

昔男ありけり

眞白にぞ富士の高ねに雪はふりける

延喜の天皇………歌よみども に各歌よみて奉れと仰せ給ひければ皆よみて奉りたりける
を(今昔物語)

思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風のふく

この兩助動詞第一第二の變化なし。萬葉に「吹きにけらずや」とあるは一種の古格なり。八幡愚童記に「當社ニ御祈禱アルノミノ賴ナリケリキ」とあれど、まづ無き語法と定むべしさて連體の「シ」を終止に

一時過ぐるまで鎭火せざりし

我が師は極めて短氣におはせし

など用うるは皆後世の終止連體を誤る類なり。文部省にて之を許容すること、したるは唯衆に從へるにて不可なり。多くは歐文直譯の誤れる口調より來れるなるが、又上にぞなむなどの係あるを略せるよりも起れるげなり。但

萬葉二　もみぢ葉のちりていにしと玉梓の使のいへば云々

など「し」といふ連體の下に「コトヨ」などの省略あるは、他の連體なると同じく誤にはあらず。

シシカの接續に特例あり。カ變にキのそへる實例なきは口調の惡しき爲なるべきが、その外にシシカは第二變化の外に第一變化にも附く是は第二變化につけるより少し古き格なるが、平安時

代には兩樣混用せる姿あり。サ變にてはシシカは第二變化につかずして、第一變化にのみ添ふ。是はサ變の變格たる所以にして此の時は下二段の語氣を用うる者と見ゆ。之を左に圖示す。

四段	書か	き（キ シ シカ）	く	く	け（シ）
四段	記さ	し（キ シ シカ）	す	す	せ（シ）
下二	寄せ	せ（キ シ シカ）	す	する	すれ
カ變	こ（シ シカ）	き（シ シカ）	く	くる	くれ
サ變	せ（シ シカ）	し（キ）	す	する	すれ

特例は是のみなるに、サ四活のエ列音即第五變化にシシカを添ふること今は普通にて、文部省にても之を許容することゝせり。是はサ變及サ下二の動詞の多きによりて四段活なるもそれに引きつけられて訛れるにて、室町以前より有りきと覺ゆ。されば宣長翁を始めその道の博士とある人にも俗文の影響を受けてシルセシ起セシなど用ゐたる多し。されどその誤なるは書ケシといはれぬにて明なり。

父にておはせし人
この大臣はいみじく文學に堪能におはしませしなり
京なる友よりふみおこせし返事をかく
花咲ける旨告げよこししかば云々
始は毛筆にて記せしが後にはペンを用う
一たび任せしことは功を見るまで干渉せぬがよし
色々運動しし甲斐なく失敗せり
某事に心を動せしは利欲に眩惑ししなりき
此等の正否を斷れ。
さてキとシとはカ行とサ行とにて根本別意のものならずやとも疑はれ、富士谷氏の「あゆひ抄」には別物として說明せり。さるはキには特別に對話の語氣ありて、過去の動作を現在の時にて話し甲の場處にありし事を乙の場處にて說く樣の氣味、シに比して顯著なるを見るなり、されど又思へばク活シク活にキシの變化ある如く、チを中に置きてキとシとに別れたる者と見られざるにあらず。今は少しく研究の餘地を存しおけども、大體同義辭の活用と立てたり。(キケリの差は後段に說くべし)
○白たゞむきまかずけばこそしらずともいはめ(記下)(けばハ記傳「けらば」ノ畧トス。「來ば」ノ轉

カ)

春樹顯秘抄　おもひそめしが（一體のかなり）

さても君忘れけりかし鶯のなく折のみや思ひいづべき(大和)

けりハ現實ヲ基本トシテ囘想ヲ起スナリ。

大鏡　みこたちのおはしまさひ゜如く(明子ヲ大切ニス)

草深き霞の谷に影かくし照る日のくれしけふにやはあらぬ(康秀、仁明崩御ニ)

音もせで木づたひわたる時鳥見しとばかりや人に語らん（可（つき））

萬十一　不思寸（ザリ？ズキ）　不及けり（飽止）　不逢（來）けむ

申せしと保元物語にありといふ人あり

慕景集、詞書　勝元朝臣短慮不成功と昌黎が作りし詞など消息のはしにかきつけ……

源、末摘　たのみこしかひなくてすぎゆく

同、總角　きし方ゆく末おもひつゞけられて

廣蔭　きしハ讀寫誤也

古今　見つゝわがこし

古今　里をいとひてこしかども

後撰　ふりでゝぞこし

山田氏きしかの例中古文に見ずトイフ。

拾、神樂　住吉のきしもせざらむ

六帖　住吉のきしもせじとや思ふらむ

紀十、大サ、ギ　水たまる依羅の池にぬなはとり破陪雞區しらに……菱がらの假辭雞區しらに

はへ(き　しコト)

さし(けく。)　けらくとは異なりしくの一法なるべし。けむこと(けまく)

日蓮　唐之蓬子將軍と申せし人の御子李遲將軍と申せし人(妙法比丘尼への返事)

(3)　未來　を表すに二法あり。

(イ)想像辭ムベシを添ふるもの。

明日は雨降らむ

歸り來む日を待て

梅の花いざ見に行かむ

彼は休暇には歸省すべし

出版近日成るべし

ベシは適當・可能など理にかゝる者多ければ、打ち任せて未來なりとは思ふべからず。「我がせこが來べき宵なり」なども時は未來なれど、單に來の未來を表したるにあらず。されど近代はベシを輕く用うること行はれ、方言のベイなどウと同一に用ゐらるゝは皆未來を淺く想像せるのみなり。ムの想像はベシより輕けれど、さりとて是もすべて未來なるにはあらず。

これは何ならむ

人を教へむには先づ己を正しうせむことを要す

思はむ子を法師になしたらむ云々

誠なからむ人は遂に信を失はむ

此等不定時の想像なり。

マジは否定ながらベシに準じて未來をも表す。

この雨は夕まで晴るまじ

忘るまじと思ひつめしも甲斐なし

マシは未來にもかゝる樣に見らるゝもあれど、概して假定想像にて、時には關せずと心得べし。

(ロ)動詞その儘なるもの。

未來の動作は斷定し難きものなれば、(イ)の如く想像するは當然のことなれど、さりとて疑ふ方なき事は想像を要せず。是は時代によりても用法を異にせり。

來む年　　來（ク）る年　　來（キタ）る幾日　　翌くる日（本體ハ不定ナリ）

足引の山の雫に妹まつと我が立ちぬれし山の雫に

妹を待たむとしてぬれたり

女を待つとてぬれた

土産を買｛ふとて／はむと｝町に出でたり

順をおひて說かむ

順をおうて說｛かう／きませう／きます｝

何時頃出立｛し給はむや／し給ふや／ナサイマセウカ／ナサイマスカ｝

落窪　今よくまうす（中サン）とのたまへり

同、四　（播磨守ヘイヒヤル詞）（帥夫妻）この月廿八日になむ舟にのり給ふ（はむトハイハレズ／らむとし給ふトイフベシ）

その國につき給はむあるじまうけ給へ

○ラ變の一特例(とてに對して)

拾遺、雜上　橘直幹……遠き處にまかり侍るとて（侍りトイハレヌ特例／らむノ意ノ時トイフベクヤ）

帚木　ある博士のもとに學問などし侍るとてまかりかよひしほどに

此等ムなきもの不定時と見られざるにもあらざれど、其の動作の定時的なる事の顯著なるより未來と定むべきなり。なほ次例に見よ。

雨ふる時は傘をさす(不定)

雨ふる時は行か{じ／ず}(定時、未來)

彼は歸り來{べき／む／る}筈なし(不定)

彼は必明日{歸り來む／カヘッテ來ル}(未來)

さて又未來と現在との紛はしきもあり。

いで物申さむ(未來)

賴まう　（未來）
賴みます　　御願申します（現在）
人來〳〵といとひしもをる（現在）
今行く（現在又は未來）

三　完了態

動作の完了せるを表す一つの態なり。（完了せしにあらず）例へば「今手紙を書いた」といへば「書ク」といふ動作の完了せるを表せど、其の動作の過去にありしをいふにあらず。故に現在時を表す副詞「今」ありて、時は現在なり。又「手紙を書く」といへば「書く」といふ動作は現在なれど、單に「書ク」といふ動作あるを表すのみにして、「書キ出ス」か「書イテ居ル」か等の意を明にせず。かく等しく時は現在なれども、語の相違あるは其の言ひなし方、卽態の異なるに因る。又「昨日書イタ手紙ヲ今日郵便ニ出シタ」といふ「書イタ」は等しく「タ」なれども、文語にては「シ」と云ふ處にて過去に屬し、「出シタ」は此の完了なり口語にては過去の助動詞なく、完了の「タ」を假りて用うるより、過去と完了との區別極めて立てにくけれども、文語にては明瞭なる別あり。一たび之を思ひ明らむる時は更に紛ふべき節なし。心を潛めて思考すべし。
完了態に對して單に動作のみを表すものを平態とも常態とも謂ふべけれど、特に名を附くる

に及ばず。

完了態は定時にも不定時にもあり。今まづ其の形式・意義を說くべし。

(1) つ　ぬ

第二變化に添ふ。其の活用・附屬辭は略左の如し。

つ	ぬ	附屬辭
て	な	バ　ム　ヌ　マシ　ナム　デ
て	に	キ　ケリ　ケム　ツヽ
つ	ぬ	トモ　ヤ　ベシ　メリ　ラム　ラシ　ナ
つる	ぬる	ヨ　カ　カナ　テ　ニ　モ　ガ
つれ	ぬれ	バ　ド　ドモ
て	ね	ヨ　ヨ（後世）

さざ波の滋賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちかねつ(萬)

春の野に若菜摘まむと來しものを散りかふ花に路はまどひぬ(古)

其年月日なにがししるしつ

夜明けぬ

郭公鳴きつる方を眺むれば唯有明の月ぞ殘れる

暮るゝかと見れば明けぬる夏の夜を飽かずとや鳴く山時鳥(古)

時鳥なきつれど姿は見えず

夜　あけぬれば起き出づ
彼にこれ取らせてよ
早く書きね時たゝむに
藤原隆信ガ兼實ニ送レル歌　いかに又ひとりあかすかしのぶてふ人はつらしなおもひこりねよ(沓冠いひし日をたがふなよ)
玉葉　世にもらば誰が身もあらじ忘れねよこふなよ夢ぞ今は限に
紅葉賀　いで給ふべしとありつれば人々こわづくり聞えて雨ふり侍りぬべしなどいふに
同　くものふるまひはしるかりつらむものを心うくすかし給ひけるよ
ありつる某

完了態の命令法は平態のよりは意強く已にその動作を完了せる樣に言ひなすなり動詞の命令法の段と參照すべし。中に就きて「テヨ」は「テアレヨ」の意にも取らるれど、此の儘に見てよし。さてツヌ中止法なし。「テ」は中止法とも見らるれど、其の職掌テニヲハに轉じて完了の意は僅に殘れるのみなり。されば「テニヲハ」の「テ」は完了辭より出でたることを心得る丈にしてあるべし。

春來 { つ(サテ) / て } 花咲きつ

さてツヌは終止形の儘にして連用中止の場合に用ゐらるゝ事あり。

なし鳥のつたふ岩根に浪かけて浮きぬ沈みぬ身をぞ恨むる(堀川後百首)

浮きぬ沈みぬゆられけるを(平家物語)

起きて見つ寢て見つ蚊屋の廣さかな

取(ト)(り)つ置(オ)(い)つ　くんづほぐれつ

天子さへさゝげつうけ取つする帛も同ことぞ(論語抄)

此等は相對の語を置き、さて然シテといふ意を添へて見れば明なるべし。而して一種の小句を形成し、副詞的に下の用言にかゝれるなり。對語のなきは

その腹に女子一人生ませつかなしうすること限なし(俊蔭)

件の男息を殺しつさし寄れり

此は新しき語法なるが、「殺して」と云ふよりは修辭に都合よき場合多し。これも前の樣にシテを添ふるかテツ、に換へて見る(前例も)時は意明なり。「殺シツ、」といふは「殺シツ殺シツ」といふ如き語にして、ツ、は助動詞ツを重ねて成れる一種のテニヲハなり。

なほ次の如きをも考へよ。

行く〳〵　なく〳〵(副詞の類)　おくをかぬかぬ(萬十四)

ツーヌーの順逆假定前提法は未來とも見るべき場合多けれども、なほ完了の假定なる意義を失はず。

梅が香を袖にうつして止めてば春は過ぐともかたみならまし(古)
いざ櫻われも散りなむ一盛在りなば人に憂き目見えなむ(古)
秋萩に匂へる我が裳ぬれぬとも君が御船の綱し取りてば(萬)
誰か又花橘におもひいでむ我も昔の人となりなば(新古、俊成)一本セハ非ナリ
身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし日本魂
鳰鳥の息長河はたえぬとも君に語らむ言つきめやも(萬二十)
ありときかれ我もきくしもつらき哉只一すぢになきになしなで(右京大夫)
「テバ」は「テアラバ」の義にて、テニハなりとも見らるれど、倚こゝは助動詞とすべし。さて「ツトモ」といふ逆假提法は極めて稀なるが、狹衣の卷三に
思ひわび遂に此の世は捨てつとも逢はぬ嘆は身をも離れじ
とありさらば「命を失ひつとも悔いじ」なども言ひて可なる譯なれど、通例は「タリトモ」「リトモ」「ヌトモ」のみ用う。「同じくは君とならびの池にこそ身を投げつとも人に言はれめ」などの「ツトモ」は前提法にあらず。混ずべからず。
徒に身はなしつとも玉の枝を手折らで更にかへらざらまし(竹取、車持の御子)
忘れじやなびく草葉につけつとも露のいのちのあらむ限は(重之女集、大口本)
さてツヌは等しく完了ながら、意義の差いかにといふに、

ツ　動作的故意的にして急、(短、硬)對話體の文に多く、

ヌ　狀態的自然的にして緩、(長、軟)叙述體の文に多し。

さて多くツは他動詞に、ヌは自動詞に接して「暮シツ」「暮レヌ」「明シツ」「明ケヌ」と樣に云へど、動作的といふは他動詞のみにあらず、狀態的といふは自動詞のみにあらず、自動詞にも動作的なることあれば、「有リツル」「來ツル」「鳴キツ」「侍リツ」「起キツ」「寢ツ」などいくらも言ひ、他動詞にも狀態的なることあれば、「爲ヌ」「暮シヌ」「明シヌ」「花ヲ折リ取リヌ」などと言はるゝなり。其の中に自動詞を動作的ハタラキカケにいふ事は多けれど、他動詞を狀態的にいふことは(總べてを狀態的にいふ叙述文は別なれど)割合に少きなれば、ヌは多く自動詞に添ふと心得る方は誤少けれど、ツを他動詞に限る樣に思ふは惡し。さて文體より言へばツは直接叙述の對話などに多く、ヌは間接叙述の物語の地の文など自然に完了する動作に多く添ふなり。アリは最狀態的なる動詞なれば、「有リヌ」といふは固よりなれど、動作的に言ひなせば「有リツル云々」となりて、「有リヌル」とは決して言はざる事など思ふべし。かくて此の區別は「テム」「ナム」「ツベシ」「ヌベシ」「テバ」「ナバ」にも著し。前例「止メテバ」をナバとしては止ムル故意の動作を受け損じて「止ムルコトアラバ」のやうに緩く聞え、「有リナバ」をテバとしては自然に生存スル意味を失ひて特に或る動作をシタラバの樣に聞ゆ。「我モ散リナム」をテムとしては死ナウを自殺ショウなどともいひたらん樣にて「今イクカ有リテ若菜ツミテム」をナムといひては自然に摘ミ相ダと聞えてツマレヨウの意通らず。「謂ヒツベシ」をヌベシとし

てはイフの動作的なるを受けてイハレルイツテヨイの意聞えず、イヒ相ダなどの意に變じ、「雨フリヌベシ」はフリ相ダなるをツベシとしては何の事とも聞えがたし、動作的状態的といふこと國學院雜誌七卷の四（三十四年四月）に述べ置きたり、就きて見るべし（附錄參照）

藁一すぢが柑子三になりぬ、柑子三が布三反になりたり、この布の馬になるべきなめるとおもひて

新古、十八　浮き沈み來む世はさてもいかにぞと心にとひて答へかねぬる
寶治百首　長しとは名にこそ立てれ春雨のふりつるなべにけふも暮しつ　｝ニトモ誤
後撰、七　秋の夜に雨と聞えてふりつるは風にみだるゝ紅葉なりけり（コノ外ハ皆ふりぬナリ）

軍の來たるにこそ有ぬれ？（今昔）

弘訓門人、生川正香ニ「言葉の二道」三卷（つるぬるノ辨）アリ。

又ツヌの語氣はテニヲハのトニの如く、指定助動詞のタリナリの如し。「夏トナル」「夏ニナル」「學生タリ」「學生ナリ」に比較して味ふべし。

ツヌ口語にはタといふより外なけれど、ヌはシマフと言ひかふべき事多し。

色は匂へど散りぬるを

散りぬれば戀ふれどしるしなきものを

此等皆チツテシマフと心得べし「日なごりなく暮れぬればかへりぬ」のヌレバと異なるを見るべし。されどヌーといふ時は一つの完了態にして、シマフといふ時は一個動詞の平態にて、兩者の文法上の形式は相當らざること猶かのダーは助動詞にしてデアルのアルは動詞なるが如きを忘るべからず。

近來ヌーの濫用あり。跋文奥書の樣なるに「何某シルミヌ」と書くは間接になりて自身の上を自身にて言ふにはあらざる樣に聞ゆ。「シルシ畢ヌ」など古くよりあるはヲハルの狀態的なるを受けたるなり。謂はゆる新派の歌人の「舟待チカネヌ」とやうに自身の動作を「何ト思ヒヌ」とか「友ト語リヌ」とかいふも叙事めきて異樣なり。

老人が生ける敎の物語月はわかきがおもわ照しぬ(セリ)(トキハ會)

(2) たり

第二變化に添ふ。もとツーの變化テーとアリと結合せる者にて大抵ラ變に準ず。

たら	バ ムズ マシ
て たり	キ ケリ ケム ツ
たり	ヤ トモ
たる	カ、ヲ ニ、モ ガ ベシ メリ ラム ラシ
たれ	バ ド ドモ
たれ	

是はすべて近代の語と同じければ引例を要せじ但中止にはアリを略したるテを用うること、終止のタリを副詞的に用うること、名詞にも轉ずること等、注意すべし。

命令法は少きが、左の如き例なり

隨身一人二人おほせ掟て(置き)たれとのたまふ(若紫)

居よ〱とうほ(蜻蛉)うよ片脚(カタシ)をまるらむさてゐたれ働かで簾篠のさきに馬の尾より合せてかいつけてわらべ冠者ばらにくらせて遊ばせむ(梁塵秘抄)

落窪に存在態の命令多し。

いでたゞおのれにあづけ給へれ(榮、三見はてぬ夢、隆家ガ伊周へノ詞)

師に就きて學問したり

見たり聞きたりして知識を廣む　取つたり

たぐひなき光に色もそひなましこよひの月を君と見たらば(拾玉、五)

したり顔　似たり貝

(3)　り

「リ」は實は「アリ」の語尾にて動詞と結合せる者なり。而して同じくラ變をなす。其の結合する動詞は四段活とサ變とに限る之を助動詞としていふ時は兩者のエ列音にそふなり。

書け／せ } ら バ ム ズ マシ	り キ ケリ ケム ツ	り ヤ トモ	る カ チ、ニ モ、ガ ラム	れ バ ド ドモ	れ

此の活用中、第三第四變化の外は今は古語となりたり。(第二變化の連用法は今用ゐず)

生けらむ程は斯の道にいそしまむ

櫻の散りがたになれりけるを見て(古)

立てれども居れども共に戯れ(萬)

秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鳥や鳴きなむ(伊勢)

春日野に粟種有(マケリ)世伐(セバ)待つ鹿につぎて行かましを社しとむるを(萬三)

命令法なるも少しはあり。

秋さらば我が舟泊てむ忘貝よせ來て置けれ(於家禮)沖つ白波(萬)

白妙の我が下衣失はず持てれ(毛弖禮)わがせこたゞに逢ふまでに(萬)

續日本紀の宣命には「面幣利(オモヘリ)」といふ名詞あり、日本紀にも「顏」「色」などを訓めるは珍らしき例なり。

さてこの助動詞は四段サ變以外には添はぬ事を牢記すべし近來は下二段・ナ、ラ變・ナリ活などをも此に活して「棄テリ」「居レリ」「死ネリ」「異ナレリ」など誤るものあり。ナリ活以外のは皆タリを添ふべきなり。リとタリとは意義ほゞ同じく、テの有ると無きとのみの差なり。タリリのことは尚次項

に說くべし。
鈴木朗、言語四種論に「形狀作用と分ちて二種とせるは云々、リは有リなり、居リはヰアリなり、聞けり、見たりは聞きあり、見てありなり云々、リ文字終につく時は本作用の言なるも皆その形狀になるなり」とあり
紫式部日記　上の袙たゞ二つ奉り給へりたり?
縣居本金槐集序論　後に心を得たまへりては今の都と降ちたる姿ならねば云々
記　妻たてり見ゆ（第二ヵ）
萬　船出爲利所見
同　あまのいさりはともしあへり見ゆ
同十四　筑波ねに由伎可母布良留いなをかもかなしきころが爾努保佐留可母
助辭音義一覽
來むといひて來ざりし夜もありしかばまたぬしもこそ待つにまされれ（六帖）
別れにし玉をかへすに難ければ涙のみこそ袖にかゝれゝ（榮花、玉の餝）
これら取りおかせたまへれ（藏開、下）
春の夜をおぼろ月夜といふことは霞のたてる（立テタルカ）名にこそありけれ（景樹）

方丈記　まさきのかづらあとをうづめり

羽衣　　空はれり

まかぢをり沈みて失せれ(豐穎)

春秋を留めたり(琴歌)
（富めりニナマレリ）

四　存在繼續態(進行態)

口語に「雨ガ降ル」といひ「雨ガ降ッテ居ル」といふ、共に現在なれど、一は平態にして他は其の動作の存在もしくは繼續を表すものにして、言方卽態の相違あり後者の「フッテ居ル」は形の上より見れば「フッテ」は「居ル」といふ動詞の副詞の位置を占むれど、意義は「降ッテ居ル」と結合したるものにて「降ッテ」は「ヰル」といふ不完全動詞の補充とも謂ふべけれど「ヰル」はむしろ「フル」といふ動作の存在の意義を助くる助動詞の用をなす者にして、補助動詞又は準助動詞と見做すべきものなり。

さて此の形式に於いて細別する時は三種の意義あり。

雨が降つて居る(繼、存)

草が生えてゐる(存、繼)

景氣が好い方に向いてゐる(進、存)

而も此の三種は全然特異なる者にはあらで互に類似する處あれど、其の場合に於いて最も強く

勝ちたる意義について繼續態とも存在態とも進行態とも稱へ分くべきなり。
狀態的動詞の存在態は前のと少し意義の異なることあり。「木の下露は雨にまされり」「太つて居る」などはアリを修飾する方强し。
此の態には大略二種の形あり。

(1) たり

完了態の助動詞の中ツヌを除きて、タリリは繼續・存在を表す。是は前にもいへる如く動詞アリの變なれば固より然るべき筈にて、之を完了態に用うるは却つて轉用なり。されば奈良朝時代には完了のタリリほとんど無く、平安朝になりて次第に此の轉用の端緒を開けり。萬葉集にタリリには多く有在の字を用ゐたる、さるべきことなり、又アリタリといふ語近來物に書けど、タリの意義を知る時は不當なるを知るべし。古は「アリツ」「アリヌ」「アリキ」「アリケリ」とのみ言ひしなり。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣乾有天の香山(萬)
御民われ生有しるしあり(萬)
我が宿の梅咲有と告げやれば來ちふに似有散りぬともよし(萬)
荒有みやこ見れば悲しも(萬)
念はぬにしぐれの雨はふりたれ(零有)どあま雲晴れて月夜さやけし(萬)

是ハ完了ナルベシ。

我が里に大雪ふれり(落有)大原のふりにし里に降らまくは後(萬二)

我が岡のおかみに言ひて降らせ（令落）（しめし(古義)）たる雪の摧けし其處に散りけむ(同)

今の代の人もことごと目の前に見たり知りたり(見在知在)云々(萬)

吹く風をなきて恨みよ鶯は我やは花に手だに觸れたる（完了）(古)

咲く花は千種ながらにあだなれど誰かは春を恨み果てたる（完了）(古)

春霞立てるや何處み吉野の吉野の山に雪はふりつゝ(古)

淺緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か(古)

我し知れらば(知有者)知らずともよし(萬)

いきとし生ける者いづれか歌をよまざりける(古)

滄浪の水清めらば以て我纓を濯ふべし（完了）(古訓)

いみじう忍びて鴻臚館につかはしたり(桐壺)

源氏物語枕草紙などには存繼なると完了なると同じ位にまじれり。

萬十四　筑波禰爾由支可毛布良留いなをかもかなしきころが爾努保佐流可母

西公談抄　西行は古今のを「春霞たゝるやいかに」といへる由

○「述而」子之燕居（セルトキニ）申々如也（タリ）夭々如也（タリ）

○盡心　知命者不立（タテラ）乎巖牆之下

○しばし居たれ(落窪、少將詞)

○しばし入りてふし給へれ(同下)

(2) あり　をり

「アリ」は常にテツ、を添へたる連用語に連り、ヲリ(又ヰル)は直に第二變化にも續く。此等は立派なる獨立詞にて、上の動詞と熟語をなすか、然らざれば上の動詞は補充的修飾語にはあれど、近代の語にては口語の「テヰル」に當りて助動詞風に用ゐらるれば、此處に併せて說くなり。

梅が枝に來 { ゐる / たる / テヰル } 鶯

「來居ル」は熟語と見るべけれど、「來タル」「來テヰル」は存在態の動詞といはざるべからず。

我がせこを見 { つゝしをれば / テヲレバ / テル時ハ } 思遣る事もありしを(萬)

花 { 咲きてあり / 咲きたり / 咲けり / 咲きをり }

鴨山の岩根しまける我をしも知らずと妹が{待ちつゝあらむ(萬)／待ッテキヨウ}

(前略)老いにてある我が身の上に病をら加へてあれば晝はも歎かひ暮し……兒等を……見つゝあれば心は燃えぬ云々(萬)

右の例の本文のチリアリは獨立詞なるべきも、今代の語に比ぶれば尙補助動詞と見らるゝなり。さてアリとチリ(キル)とは狀態的と動作的との差別あり、口語にては獨立詞の時は有情のものにキルと云ひ、非情の物にアルといひ、補助詞の時には其の區別なし。又テとツ、とは前にも少し說ける如く共に完了ツの意義を下に含むが、ツ、はその動作を重ぬるに用う卽「見ツ、アリ」は「見ツ見ツシテアリ」なり。されど「テアリ」も語の上にこそ明に重複のことを出さね、輕く「ツ、アリ」の場合に用ゐて差支なし。「テアリ」をば存繼態に、「ツ、アリ」をば進行態に限るは非なり。而して此のアリチリもタリリにても表し得べく其の方正當なる場合少からず。

今昔二十六　男俄に出て犬に嗽をれ〳〵(くヘれ二近シ)といへば

(3)　第二變化と「あり」

艦首に備へある十二吋砲

其の書は机上に置きあり

等の語法は理論上は不可なけれど、慣用上宜しからざる事はやく動詞の法の處にいへり。然らば

此等を如何に言ふぞといふに、「置きアリ」は卽「オケリ」、「備へアル」のソナヘは下二段活なれば此の例に倣ふこと能はず、必「ソナヘタル」と言ふなりタリリは轉じては今は完了態をも表せど、實は此の例の如き存在態を表すが本職なれば、此の二種の形式以外には他の語法を用ゐざる慣例をなせる次第なり。然るに近來前の如く第二變化の動詞に互にアリを連結せる語遣の行はるゝは何故といふに是亦理由あり。

(一)タリリは完了を表す者とのみ誤認せること

(二)テアリテヰルといひては俗なる樣に誤認せること

(三)候文に「机上に飾り置き有之」候などの語調あるより「之」を省けば普通記述文になる理と速合點せること

等なり。今前說を總合していへば、

備へ｛つ
置き｛ぬ
……(イ)本體の完了。口語ソナヘタ　オイタ

備へ｛たり
置き｛
置けり
(又)備へ｛てあり
置き｛
……(ロ)本體は存在繼續、轉じて完了にも。口語 オイタ　ソナヘテ居ル　オイテアル

備へ｛をり
置き｛つゝあり
……(ハ)本體は繼續進行。口語ソナヘテヰル　置イテヰル

尙いへば(ロ)のアリは人に處分せらるゝ事物の動作にして、(ハ)のアリヲリは事物を處分する人の動作なり。

此の如くなれば「備へアリ」「備ヘツヽアリ」といふ語法は無くても事缺かぬなれど、理論上よりは許容しても差支なしさて又この二つは明治も二十年以後より廣く行はるゝ語法なるが、德川時代の物にも「備へアリ」とやうの言方は二つ三つ目に觸れしことあり。「ツヽアリ」よりは自然の轉訛なるべきか。

桂園遺聞　歯はそろひ有之

蔚山書　本丸三ノ丸堅固に相拘在之事に候

諸侯大夫等に久しくつかへ有と云共組付などに成、多はかたすみにをしこめられ有物也(眞太閤記)

(4)　居り　侍り　けり　の本義

(イ)「をり」　はラ行變格に活き、「ヰル」は上一段に活き、兩者混用すれど、實は差異あり「ヰル」は實の平態なるが、「ヲリ」は「ヰアリ」の義にて存在態なるが本なりしなり。されば

男やなぐひを負ひて戸口にをり(伊勢物語)

手をひきはなたず拜み入りてをり(源氏、玉葛)

猿のやうにかいつきてをるもをかし(枕草紙)

戀しきが形も形こそありと聞け立てれをれども無き心地する(古今)

いづれも「ヰタリ」「ヰタル」「坐テ居テモ」の意なり。候文などには、もはら「居リ」を用うる慣例となれるより、口語にも「ヰル」より「チル」の方立派げに思ひて用うる人も多けれど、必しも然らざるなり。(方言「臥ス」を「フセル」「ツム」を「ツメル」といふは此の「チリ」に似たり「爲ル」「貸ス」を「セル」「カセル」といふは異なり)

黑鳥といふ鳥いはほの上に集りをり(終止カ中止カ)そのいはほのもとに浪白くうちよす(土佐)

女しばられをりていふ(藤原君)

板敷にふせりて(古今、十五)

立てりて見ければ(伊勢)「もたりて」ナド一動詞ニナレルカ。

月の傾くまでふせりて去年をこひてよめる(伊勢)

いとこなせの君居居而(ヲリくテ 不審)(萬十六)

いたうつみ(つめりナリ)給へれば(紅葉賀)

其儘に相成爲申候(高尙ヨリ信友ヘノ書、文化十四、正、九)

(ロ)「はべり」は「ハヒアリ」なり。貴人・強者の傍には立ちて居るを憚れるより出でし語とおぼし。さてやがて「ハフ」の存在態なり。この外にもラ變に活く語はすべて「アリ」を含みて存在態の意あり。タリナリメリなどの助動詞も然り。

へなる(萬)
古、四、自
へだつ
へだゝる＝へだ（てり ラ變／たる ラ四）
自
へだつ 下二
つくばねに雪かもふらる（レル）(萬)
横（たふ／たはる＝(たひあるノ義カ)（おこなふト同じ(秀成)）
な
まさるハましありノ轉カ
たゝなはる

ハ)「けり」も「キ」の存在態なり。されば「キ」と等しく過去ながら、此はその過去の動作を存在的に間接に記述するにて、或る場合には繼續態とも見るべし。

富士の高ねに雪はふりける
今一しほの色まさりけり
都は野べの若菜つみけり
又山部の赤人といふ人ありけり

故郷となりにし奈良の都にも色はかはらず花はさきけり(古)

かくて語氣をいへば、ツとキと通ひヌとケリと通ふなり。此の存在・繼續の意義次第に轉じては、時に關せず事道理にかゝること、動くまじき事の意を強むるに用う。是の用法ケリの半を占む。「色マサリケリ」も過去といふよりは過去にも然りし事、今も然り未來も然る理を述べたりと見る方穩當なり案ずるに物の道理は歸納によりて定る。その歸納は過去の事實なれば過去の形式やがて理を表すにもあるべし。されば「キ」も「我誤レリ。サナリキ〳〵」など理にかけて、しかも感嘆的に用ゐらるゝなり。「都ハ野ベノ若菜ツミケリ」「ノベノ綠ゾ色マサリケル」いづれも〳〵歌には此の詠嘆的なるが多し、是にて過去辭は理をいひ咏嘆の意を表すもの、必しも事實の過去を表すにあらざるを悟るべし『詞の玉の緒』卷六に「おしはかるケリ」とて擧げたるも此の用法の少し移れるなり。

○吉岡氏、餘情を添ふる「けり」といへり。

これや惟茂の妻の手いたうこそかきけれ

よき折にこそありけれ行きてたばかれ

○上見れば及ばぬことの多かりき笠着てくらせおのが心に

(5) 略態

完了・存在等の態なる動作も之を略して平態に記述することあり。不精確なる樣なれど、實際それにて事足る場合も多きなり。歷史傳記日記樣の文特に然り。

何日晴る。七時起く。新聞を讀み來客に接して午前を費す。午後某氏を訪ふ。某叔父に手紙をやる。某生來る夕飯をふるまふ。夜折たく柴の記を讀み時の誤多きに驚く。

安政六年秋橋本吉田等の志士江戸小塚原に斬らる。而も改革の氣運ます／＼迫る。

……東都の寓居において著者しるす。

音に聞く高師の濱のあだ浪は

此等いづれも完了態を略せり。

後樂園は今の小石川砲兵工廠內にあり。……門に云々の額を懸く。……池を作り上水を注ぐ

女郎花草むら每にむれ立つは誰まつ蟲の聲に迷ふぞ(後撰)

艦首に備ふる大砲

今出川の院の近衞……作文、詩序などいみじく書く（形容詞的）人なり

晴るゝ（、レタルナリ）夜の星か川べの螢かもわがすむかたのあまのたく火か(伊勢)

此等は存在態を略せるなり。

花盛は過ぎにたるを外のちりなむとや敎へられけむおくれて咲く櫻二本ぞいと面白き(花宴)

一本の淺葱櫻が夕暮を庭に曇る。拭き込んだ緣は立て切つた障子の外に靜である、內は小形の長火鉢に手取形の鐵瓶をたぎらして前には紋羽二重の座蒲團を敷く。蒲團の上には甲野

の母が品よく坐つてゐる（「虞美人草」八の一）

此のクモルシクは存在態を動作的に言ひなせる趣もあり。

或る人、廣日本文典別記九七頁に「御坐せり」といふ例なしとあるは如何にと問ふ。オハスは四段にも活ける例ある語なれば、ラ變再轉活は有り得べし。もし果して無くば偶然ならむ。

五　完了態と定不定時

(1)　不定時　（つべし、ぬべしヲ(4)ヨリ(1)ニウツス）

此は極めて分り易きことなり。完了・繼續・存在・進行とも同樣なり。

高等の教育を受けたる人は何となく人品高し

松にかゝれる藤のおほつかなさよ

おのが書きつる物は誰しも惜しく覺ゆ

女兒の爲には親をさなくなりぬべし（土佐）

ほど〳〵しくうちはめつべし（同）

言はれた義理か

ほめた事でない

この女もし奉りたる（たらむものならばトハイハレジ）ものならば翁にかうぶりをなどかたばせざらむ御心

假設法

をりつれば手ぶさにけがる

東方に聳ゆる山(たるチしトハイハレズ)

左の場合に於ては保險契約はその效力を失ふ

一、保險料ヲ拂ヒ込マズシテ猶豫期間ヲ經過シタルトキ

二、被保險人失踪の宣告を受ケタルトキ

三、第八條異動ヲ會社ニ通知セザリシトキ及會社ガ特別保險料ヲ請求シタル場合ニ於テ七日以內ニ之ヲ拂込マザルトキ

未來過去ハ國語ニナシ。

玉霰「古今の序は貫之の書きし文なり」ハ誤ナリ云々(詞に三つのいひ樣ある事)

(2) 現在

定時完了態のは現在完了ともいふ。(全現在といふ名は大抵差支なけれど、小過去、半過去などいふ名は避くべし)他は繼續態現在・存在態現在・進行態現在と呼ぶべし。此等すべて前例によりて心得べし。

(3) 過去

過去完了は過去に完了したる動作、卽完了したる動作の過去に在りしを表す者なり。(全過去・大過去といふ名は避くべし)その形式完了辭に過去辭を重ぬ。

雨降 { りて / りに / りたり / れり } { き / けり }

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき(古)

花のごと世の常ならば過してし昔は又も歸り來なまし(古)

あしう言ひてけりとおぼして(若紫)

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな(古)

垂れこめて春の行方も知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり(古)

み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ(古)

思ひつゝ經にける年をしるべにて馴れぬるものは心なりけり(後撰)

思ふにし餘りにしかば術をなみ我は言ひてきいむべきものを(萬)

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに戀ひむとか見し(古)

奈良麿我兵起爾被雇多°利°志°秦等乎婆遠流賜都(續紀廿一詔)

タリキリケリの方は存在繼續態の過去も交れり左の例につきて味ひ見るべし。

かのありし院に此の鳥の鳴きしをいと恐しと思ひたりし樣の(夕顏)

山里にうつろひなむとおほしたりしを今年よりはふたがりける方に侍りければ(若紫)
攝政太政大臣に勅してかなの序を奉らしめたりき卽この集の詮とす(後鳥羽院新古今奥書)
侍もあまへたりき(大鏡)
消息など遣したりき(夕顏)
傍やすきものにはおぼしたりきかし(朝顏)
人々以外に感じあはれたりき(西公談抄)
この歌を上人いたしたりき(同上)
薄切斑の鷹の羽割り合せてはいだりけるぬための鏑をぞさしそへたる……扇も射好げにこそなりたりけれ……海へさつとぞ散りたりける(平家物語)
嶺高く深き岩の中にぞ聖入り居たりける……近衞の中將をすてゝ申したまはれりける司なれど……殘の齡ゆたかに經べき心構もになくしたりけり……山里人にも久しう音づれ給はざりけるを思し出でゝふりはへ使はしたりければ僧都の返事のみあり(若紫)
ふくよかにかい給へり故尼君にぞ似たりける(同上)
西の京に女ありけりその女世の人にはまされりけりその人形よりは心なむまさりたりける(伊勢物語)
沖つ浪高く立つ日にあへりきと都の人は聞きてけむかも(萬)

春の葉の茂きが如く念有之妹にはあれど憑有之兒等にはあれど(萬)
秋の野のみ草かり葺きやどれりし宇治の都の假庵しおもほゆ(萬)
榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまどゐせりける(拾)
やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける(古)
我が御門千代常とはに榮えむと念而有之我し悲しも(萬)
死も生も君がまにまと思ひつゝありし間に(萬)
天地と共にもがもと思ひつゝありけむものを(萬)
雨ふるとゝのぐもる夜のぬれひづと戀ひつゝをりき君待ちがてり(萬)
式部卿のみこ閑院の五のみこにすみ……女みこの帳のかたびらのひもにふみをゆひつけたりけるをとりてみれば昔の手にてこの歌をなむ書きつけたりける(古今、哀傷)

此等の中、繼續・存在・進行態なるは心得易けれど、完了態なるは誤解せらる。さるは完了を現在より離して過去に近きものと思ふより、過去完了は過去よりも前に過ぎし動作と心得て「我が入學せし前に某甲氏は卒業したりき」「君の生れし三年前に我は生れたりき」とやうに言ふべき者と說く人あるは、詳しき樣なれど實は非なり完了は一種の態にて時の前後に關するものにあらざれば、之を以て過去に等級を附すべからず。もし論者の如くならむには、三個以上の過去の前、前々と次第したらむには如何にしてか之を區別せむ、「生れたりし其の又前に我が兄は生れにたりき」

「卒業したりしその昔に某乙氏は已に教師にてありにたりき」などとも言はむか。その上に尚も一つ比較して過去の動作を言はむとする事あらむには抑之を如何にせむ。二種以上前後の過去ありては言語は混亂して却つて之に苦むべし。之を明白にするには時の副詞ありて一分一秒より日月年の數多ありて之を表すにて、助動詞によるにはあらず。さて又完了は場合によりては省略することもあるなれば、此の過去完了の用法は國語にては實は極めて自由にて、前例の如きも

我が入學{したりし／せし}前に某氏は卒業{したりき／しき}

四種の語法あるなり。英文にては過去完了は過去以前の動作に用うる樣なれど、それは根本義にはあらで一種の慣用例なるべく思はる。國語を強ふる材料とはすべからず。現に前に擧げたる「待チシ櫻モウツロヒニケリ」といふ「待チシ」は「ウツロヒニケリ」より前の動作たるに相違なけれど、後の「ウツロフ」を「ニケリ」としたる、何の差支なく、「待ツタ櫻モウツロウテシマツタ」と聞ゆるなり。その外

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか
花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに
菅原や伏見の里の荒れしより通ひし人のあとも絶えにき(後)
頼めとやいなとやいかに稻舟のしばしと待ちし程も經にけり(千)

此等の外、前の例にて完了過去の決して尋常過去に對せざるを悟るべし。

著者尙稚かりし時しば〳〵人の白河樂翁公を語るを聽きその話柄に上ること多き人たるを感じたりき。稍長じて賴山陽の外史を繙くに及び、其の卷首に挿める山陽が公に上る書を讀み、閣下は今代の韓魏公なりといへるを見て公の果して偉人なるを悟りき。後國史を修むるに當り、畧その人物と事業とを窺ひ得て益その非凡の人たるを知れり。（白河樂翁公と德川時代）

此の文は著者が三段に時の使分をせられたるものと聞けり。「タリキ」「キ」「リ」の法果してかくあるべきにや研究の好例なるべし。さて又「ニケリ」「テケリ」などに過去の意味なくて感嘆完了にのみ用ゐられたるが多き事は第四項の(4)に言へるが如し。口語「タッケ」に當るが正しき完了過去なりと知るべし。

いで此度は負けにけり（空蟬、軒端の荻ノ詞）

おしなべて花の盛になりにけり山の端ごとにかゝる白雲（千載）

岩間には氷のくさびうちてけり漏り來し水も絕えて音せず（好忠集）

かたくなる人ぞ「此の枝かの枝散りにけり今は見所なし」などはいふめる（徒然）

昔見し妹が垣ねはあれにけりつばなまじりの菫のみして（堀川百首）

此等は「完了態過去の存在態」とも解すべけれど、事柄より言へば完了感嘆に歸するなり。

(4) 未來

未來完了は未來時に完了すべき動作にして、平態未來に比すれば一種の强意未來ともいふべし。その未來に繼續し存在せむことを表すは、存在繼續態の未來なり。此等の形式は三態に想像辭ムベシを添ふ。テムナムタラムツベシヌベシなどなり。(附記ツベシヌベシハ不定時ニカフベキカ)

梓弓おして春雨けふ降りぬ明日さへふらば若菜つみてむ(古)　ツマレヨウ　ツメヨウ

我なりけりとおもひあはせばさりともつみゆるしてむと思ふ(夕顏)　ユルスダラウ　ユルサウ

秋の菊にほふ限はかざしてむ花より先と知らぬ我が身を(古)　カザサウ　カザシテヤラウ

櫻花けふよく見てむ吳竹の一よの程にちりもこそすれ(後)　見テオカウ

世にふれば憂さこそまされ三吉野の岩のかけ道ふみならしてむ(古)　フミナラシテ居ヨウ

よみてむやは詠みつべくばはや言へかし(土佐)　ヨメルカイ詠メルナラ

形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ(古)　ナラウ　ナレヨウ　ナリキラウ

今日よりは天の川原はあせななむ底ひともなくたゞ渡りなむ(後)　ワタラウ

人知れず思へば苦し紅の末摘む花の色に出でなむ(古)　出テシマハウ

あかでこそ思はむ中ははなれなめそをだに後の忘形見に(古)

よの中のうき度ごとに身を投げば深き谷こそ淺くなりなめ(古)

足の向きたらむ方へいなんず(竹取)　向ク　向イタ方
夜明くるまで立ちたらむ　立ッテ居ヨウ
おのれは目さむるまで寢たらむ　ネテヨウ
生れたらむ子女ならば「玉」と名づけむ　生レル　生レタ
彼處には已に生れたらむ(完了想像、タラウ)
御はかししばし貸し給へらむ(大和物語)　是ハ希望ニ轉ジタリ
三年の後には紳士となれらむ　ナラウ　ナッテヨウ
あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや(後)　不定時ノ想像
此の由告げずば彼は何時までも待ち{居らむ／つゝあらむ}　マッテヨウ
行かぬ我を來むとか夜も門さゝずあはれわぎもこ待ちつゝあらむ(現在ノ想像)
雁がねの來鳴かむ日まで見つゝあらむこの萩原に雨な降りそね(萬)　見テ居ヨウ
君子と謂ひつべし　イッテヨイ　イハレル
政見つべきものあり　見ラレル
身方に射つべき仁は誰かある(平家)　射ル　イラレル
人ごとの賴みがたきは難波なる蘆の裏葉のうらみつべしな(後)　恨ミラレル

夜も明けぬべし　アケヨウ　アケ相ダ

無き名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はゞいかゞ答へむ(後)言ッテモ{居ラレヨウ／置カ}

年をへて行きあふ坂のしるしありて千年のかげをせきもとめなむ(第一)(榮花とりべの／東三條院宣旨)(湯處ニイヘルハ非カ)

大井川行幸和歌考證「このこと云々の書に見えたり猶この外にもありぬべけれどこと〴〵しく擧ぐるにいとまなし(文雄)

汽車とは如何なるものにてありなむ

京の樣はとやありなむ

さもありなむ(ぬべし)　サウモアリ相ナ　あらむ　アラウ　ありけむ　アツタラウ

上に洩れたるもあまたあ{りぬ(或正)／る(適正)}べし

無も一きはよき人を尋ねなば有む對曰尋やうに因て有ぬべし(眞書太閤記)

小牧山御城に宜しかりなむと申上げ奉る(秀吉、信長へ)(同)

おのづから物いひもらしつべき(サウナ)眷族もたち交りつらむ(夕顔)

鬼貫　四季折々の草木生類に至るまで一つ〳〵その物をとらへて精しく所詮を辨へ知りて句に催しぬべき(非)事にて侍る

なほかゝるありきは輕々しくあやふかりけりといよ〳〵おぼしこりぬべし(相ナコトダ)(空蟬)「たるべ

し」ニハアラズ

春海、歌がたり　今の世には古今集をこそむねと學びつべきことなれ

未來完了は口語には前提法の外にはなければ、固よりテムナムは直譯せられず、場合に應じ他の語法にて意味を解くこと各例の下に注せるが如し。さてタラムは未來にもなれど、タルベシは完了想像のみにて未來とならず。

蓮の花咲きたるべし行きて見よ　サイタラウ

是はタルラムに近く、場合によりてはタ筈などと強く理にかゝることもあり。

今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし

是は假定ながら未來にかゝれり。されどこの類は極めて稀なれば、マシをば未來の中に擧げざるなり。

平態の未來に想像辭なきがある如く、完了態などにも稀には想像辭なきものあり。

半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしを(枕)

あからさまに宿に罷りつとておのが男にいふ樣(宇治)

童「……只今外へ行ぬ」といひて出づとも不聞で搔消つ樣に失ぬ(今昔十七)

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬとおもへば(古)

さゝがにの空にすがける絲よりも心細しや絕えぬと思へば(後)

うつろはむことだにをしき秋萩にをれぬばかりもおける露かな(拾)

二十日マデ延ベバ返ッテ景親ニ襲ハレヌト覺ユルゾ(盛衰)(長門本平家モ)

法皇ノ身ニ……災害ハ只今有リヌト覺ユル者チヤ(盛衰)

遠き國に流し置かれぬと覺えたり(曾我)

此等は皆テンナムヌベシの略なり。近代の文にも口語にも

我が出(でたる/タ)後に來むも知るべからず

もう一合のんだ上はきつと止める

此等もタラムなどの略なり。かく未來の意明なるをタといへばとて、やがて文語にシと引き直す人もあるは思はざるも甚しきなり。香川景樹の紅葉淺といふ題の歌に

みな散りし後にそめむともみぢ葉の淺きは深き心なりけり

とあるは「外ノ皆チツタ後ニ」といふ口語を直譯せるなり。さりとは古今集に

見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞ咲かまし

と立派にナムとしたる手本もあるには心附かざりけむ。此等は現在完了や不定時完了をシに誤るよりも一層惡しきなり。「ならまほし」を「なりしがな」と希望する時にのみ過去辭は用うれど、その他に過去辭は決して未來に用るられぬなり。

(道長)殿には年來おぼしめしつることなど細に聞えむと強く思しめしつれど、まことになりぬるをりはいかになりぬる事ぞとさすがに御心さわがせ給ひぬ(大鏡)

むとぬと相通ふ。

公能「五月やみ名をあらはせることよひ哉　「たそがれどきもすぎめ(ムノ誤)(ヌイ(ぬべしノ義))とおもふに(平家)

かくはかなくて我もいたづらになりぬるなりとおぼす

我この人を助けずば只今の程にかはゆき目を見{るべし／ヌ(神田本)}と思ひければ(太平記、阿新)

惟光詞(左近ハ)谷にもおち入りぬ{べくなむ(湖頭)／と(萬水)}見給へつる(夕顔)

……………候はずば……………謗に落{つべく／ちぬと(神田本太平記ニコノぬ多シ)}覺え候

○{さうした(いふ)癖の人だ　ソノヤウナ／さなる(完了)}

○さしたる(アリ)事なし

○櫻色に衣はふかくそめて着む花のちりなむ後のかたみに(古)

(5) 將然態　(一種の進行態)

未來動詞を一團とし之を名詞と見て、トと受けてサ變動詞スに續くる語法あり所謂將に然らむとする動作なり。舊說に未來もしくは假定前提法を將然といひたれど、余は取らず、其の語をば此の一種の進行態に名づけむと欲す。

家を出でむとする時來客ありて止る

今朝雨ふらむとせしかば行かざりき

此の肉を彼の犬の前に出さば必食はむとせむ(すべし)(竹取、くらつまろ申やう燕子うむ(まカ)とする時ノ類カ)

一度は死になんなんとせしかど恢復せり

之を個々に說明すれば未來にムとセム、シ、セリ、セシカなるが、大觀すれば動作がしか進行する態なり「死にかけて居る」を方言に

死に居る

といふ時、之を存在態とも繼續態とも言ふべからず、普通語より見てその進行態なるを知るべく、死「ナウトシテヰル」と言ひ換ふる時その義益明瞭なり。この態は

木の葉さやぎぬ風ふかむとす(古事記)

潮みちぬ風も吹きぬべしと騷げば船に乘りなむとす(土佐日記)

世の中をかく言ひ〳〵て果々はいかにやいかにならむとすらむ(拾)

など現在なるが多けれど、過去にも未來にも言ひ得べき事前例の如し、英語の直譯に「我ハ今學校に行キツヽアル」など云ふは「行ク所ナリ」とか「行カントス」とすれば、苦もなく分るものなることを知るべし

續紀　日嗣之位且絶矣

行與子還兮(魏風、注猶將也)

長夜向半(后漢邊讓章華賦)

殘燼將向殄滅(段熲傳)

漢王已幷漢中且東(項羽本紀)

垂當拔之(盧植傳)

垂當到郡(趙苞傳)

いつか又空しきからのからだにも殘なくともならむとすらむ(宮のせじ)(榮花)

はかなきによそへて見れば櫻花折しらぬにやならむとすらむ(同、根合)

浦の潮貝ひろひ集めとれりとすれど(古、貫之、長歌)

おもひ殘すことはあらじ(かしこさすむ人の心イ)とすらむと覺しやらるゝに(明石)

否定は古に少し。(口語ハ尋常)

守部曰く、ましハむとすノ義ナリ。

あゆひ抄ニ「とす」の段見あはすべし.

橘を守部の五十戸(サト(古義)・イヘ)の門田わせ刈る時過ぎぬ來じとすらしも(ントス)(不來跡爲等霜)(萬十)

(内侍ノ中將ガ)この君をいかにしなし聞えぬるにかとわびしさに(紅葉賀)

戸あけ侍り(ントシヲ略シテモイハル、コトアリ)しに(落くぼ、典藥詞)

こひむともせず(後)

こひむとすらむ(拾)

をらむとすれば(萬)

すまむとすらむ(詞)

たえむとすらむ(濱松)

たゝむとすらむ(金)

ちらむともせじ(玉)

つまむとすなる(後)

とはむとすらむ(拾)

なかむとすらむ(大鏡)

葉がくれをまだ明けぬよと思ふらむ咲かむともせぬ(否定)朝がほの花(景樹)

御かどゆるさじとすとてゐておはしまさむとするに(竹取)

今のみと頼むなれども白雲のたえまはいつかあらむとすらむ(後撰)
懷くべき人も放てば陸奥のうまや限にあらむとすらむ(蜻蛉日記)
高ねなる花もちりなば山里はいとゞ人目もかれむとすらむ(平忠盛)
初草の生ひゆく先もしらぬ間にいかでか露のきえむとすらむ(若紫)
いつまたそたといはれむずらむ(袋草紙)
いかゞはせむ〔ずる〕といへば(讃岐典侍)
本意なきやうにやおぼされむずる(和泉日記)
人々まうで來むず(竹取)
おのれ死なばいかなるふるまひあり樣をし給はむずらむ(大鏡、伊周)
更に調査を進め其の完璧(ナラムコト)を期せ(ス)むとす

(6)兩態結合

完了と過去·想像などゝ結合することは前說にて明なり。然るに玆にタリツ ニタリなど結合せるもの有りて學者を苦しむ。

絕えはてにたり(源) (イ)
夜べの事にめでゝ入りにたりけるなり(枕) (ロ)
冷え入りにたれば氣はひ物うくなり行く(源) (ハ)

雀の子をいぬきが逃しつる、ふせごの内に籠めたりつるものを(源)　（ニ）

少納言よ直衣着たりつらむは、いづら宮のおはする(源)　（ホ）

此等も皆く口語には當らざれど、其の意、(イ)は「絶エハテ、シマッテ居ル」、(ロ)は「入ッテアッタ（チヤッタ）」、(ハ)は「テシマッタ」、(ニ)は「テアッタ」「テオイタ」、(ホ)は「テ居タ」などにて、完了と存在との二態の結合と見れば解せらる。さて其の完了にも今の口語にてはシマフといふ動詞に當り、存在にもテアルテオクなどに當るもありて、完了存在態又は存在完了態などとも謂ふべし。されど此等は近文には少し耳遠ければ、必かく用うべき者と思ひたらぬがよきなり。さてタリツといふ結合は此の如く有れど、タリヌとは言はぬことなるを、讀賣新聞には好みてタリヌを用うる人ありき(タリキといふらん樣の處に)　蘇峰氏の瘦我慢說の中に

當時の事情を察するに主戰論者は何人も忠臣なり義士なりと歡迎せられ死するも尙忠義の鬼なりとして尊崇せらるべくありぬ

とあるアリヌなどもタリヌの調子なり。ハイカラ助動詞などとも言ひつべくや。古今集に「有りぬやと心見がてら逢ひ見ねば戲れにくきまでぞ戀しき」とある「アリヌ」は前の(4)に云へる未來「アリヌベシ」の略にて此に云へる如き過去にあらざるを思ふべし。「さもありぬと覺えたり」及前の盛衰記の「只今有りぬ」などは「アラウ」と平態未來に言ふか「アル」と斷定に言ひなしてもありぬべきなり。

いたうこそ困じにたれ(徒然)

淵者淺而(アセニテ 古義)瀬二香成良武(略解アサビテ)(萬六)

われかたきにせめられてわびにて侍り(大和)

一つ二つ夕げの酒やすぎつらむ眠るともなく眠られにつゝ(畠山健)

物いはず價(ケ)爾弖今ぞくやしき(萬二十)

加藤次……内へ攻め入りて見れば額突の前に火おこしたりぬ(存)火白くかきたてたり(長門本平家、屋牧夜討)

うちでてもありにしものを中々に苦しきまでもなげくけふ哉(新勅、和泉日記)

逢見でもありにしもの(けるトイフベシ)をいつのまにならひて人の戀しかるらむ(拾、十二)

かゝらでもありにしものを白雪のひともふればまさるわが戀(同)

よそにてもありにしものを花薄ほのかに見てぞ人は戀しき(同)

かゝらでもありにしものを春霞思ひたちぬる今日にもあるかな(同)

軍の來たるにこそ有りぬれ(ゾ居ル)(今昔、余五將軍)

そら色の衣を「吸」はせて君ありぬ倚子のうしろの籐の網代に(晶子)

鶯をきゝ鶯もありにけり(鳴雪)

思ひ切てぞ有にける(太閤記二)

かゝる事多くありぬ。(土佐日記)

時鳥なきやむ時を知りにけり(一非、曠野)

……………と仰ありぬ(南谿)
（セラレヌト同ジ）

六　形容詞及指定助動詞の時

形容詞は事物の性質狀態を表す者なれば、時に關係せざるべきこと明瞭なり。指定助動詞また動作にあらざれば是も同然なり。されどカリ活ナリ活タリ活及ナリタリは皆動詞アリを含有する所より、多少時に關することを得。今その助動詞より見るに、

(1)　き　けり　は過去を表す。完了過去は無し。

大原山は住みよかりきや(新古)

今はつらかりける人のちぎりになむ(桐壺)

めでたかりける事かな

良覺僧正と聞えしは極めて腹あしき人なりけり(徒然)

清正行長先鋒たりき

花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり(徒然)

戀々たりし故郷の山を望みぬ

(2) つ　は完了を表す。

美しかりつる兒かな（枕）

大將たりつる程

色こそ鮮なりつれ

此のツのキと同語調なることは前にいへり。もし過去に言ふ要ある時は此等の場合にシシカとなるなり。さてぬは通常用ゐられざる所、注意すべし。

小牧の山よかるべしとて忠次して見せらる。此の山誠によかんぬと申しければ、やがて御陣を移されたり（藩翰譜）

あしかりぬとおぼえたり

などは前にいへるヌベシの略言と見るべし。口語のヨカッタワルカッタは文語にてはキツに當つべく、ヌとは言ふべきにあらず。又たりも用うべからざるは、アリタリといふが誤れるに同じ。異なりたりなど今の人の言ふことあるは、コトナリのナリ活形容詞をラ行四段の動詞と誤れるなり。

いかならむ今宵の雨に常夏の今朝だに露の重げなりつる（能因）

女の聲にていづこより入り來つると問ふなりつるは女御とのこと疑なくおもふなるべし（紫日）

春樹顯秘抄　幾世ねざめぬ（らむと見るべし）

(3)　む　べし　は多くは單に想像を表せど、未來にかゝる事もあり。

彼は未來{に / の大臣{にならむ（動詞の未來想像） / ならむ（助動詞不定想像）} / に　ならむ（助動詞未來想像）}

我も大臣{たらむ（未來） / たるべし（未來又ハ不定）}

遠からむ者は音にも聞け（存在的想像）

しか善けむ（不定）

あすは天氣よからむ（未來）

戀しかるべき夜はの月かな（未來）

さて形容詞につくにツベシテムは無くて、なむぬべしのみ有るは前の完了と反對なり。（動作的なるツの添ひ得ぬ意味を思ふべし）

心だて優しかりぬべき樣したり（强意想像）

彼處は蚊なども多かりぬべし（同）

與一重ねて辭せば惡しかりなむとや思ひけむ（平家）（同）

かのたのもし人はゆくさき短かりなむ（帚木）

逢ふことの形は異になれりとも心だに似ばあはれなりなむ（多武峰小將物語）是ハメヅラシ。此等は古文の中にても稍新しく且稀なるものなり。ウレシカラマシクヤシカラマシのマシなどヌベシに近きものは多し。

さて此等は時に關すべきことを言ひたるにて、常にかくあるべしといふにあらず。されば

我幼き（かりし）　時詩書の素讀を受けし（くる）　師は多病なる（りし）　人なりき（り）

昔の○（にぎやかなりし／る）　處も今はさびしくなれり

かの嚴しかりし（しき／つる）　威容も見るべからず

近からむ（き）　者は目にも見よ

たけばぬれたかねば長き（かりしト文ニイフベシ（井上通泰））妹が髪この頃見ぬにかき入れつらむか（三方沙彌）

子罕　吾少也（ワカウシテ（甲）ワカカツシ寸ニ（俚））賤（イヤシカリキ（甲俚）共）

など兩樣に言はれ、殊に完了辭は近文には殆ど用ゐられざるなり。

幼時より人づき好｛かりしか／かりつれ／けれ｝ば誰にも愛せられたりき

清閑な｛りし／りつる／る｝　京の假寓は實に心地好かりき

之につきて忘るべからざるは否定語の時なり。否定は其の性質形容詞的なること前に說けるが如くなれば、時も亦之に準ずるなり。

知ら｛ざりしかば／ざれば｝　答ふること能はざりき

見｛ざりし／ぬ｝　古には　無｛かりし／き｝　事なり

其の容貌父なる人に似｛たり（似テ居ル）／たらず（ニテヰナイ）／ず（ニナイ）｝

知れる事は人に告げよ(「知ル事」ハ文語ニハ有レドロ語ニハナシ)

知{れらざる / りたらざる / らざる} 事は言ふべからず

著{たる / ざる} 著物 (キタ、キテヰル)(キナイ、キテヰナイ。「キル」ニ「キタル」兩方ノ打消)

一度も行か{ざりし / ざりつる / ざる} 處に行きたし

會{する / せし} 者三十人に過ぎ{ざりき / ず}

彼はかつて人の惡口を言ひし事{なし(あらず) / なかりき(あらざりき)}

岩崎彌太郎も一圓の金だに無{き / かりし} 事有{りき / り}

此等の例、時の助動詞あるは動作的の言方にて、然らざるは狀態的なるを玩味すべし。

うかりし事ありてこもりをりける春(景樹) きこゝの黒川翁

七　口語

時に關する口語は文語に比して極めて簡單なり。而して文語も平安時代の語に於いて最精密なれば、是までは其の精密なる方を說けり。口語の時は一口に言へば今の支那語に似たり以下之を說かむ。

(1)　た

たら	たり　たっ	た　たり	た	たれ	□

文語タリの下略、ツヌタリリの四つに當る。完了を表すが當然の職任なれど、口語には過去辭なきより過去をも表す。(言語そのものより言ふ時は過去はなきなれど、文語には現然たる區別あるにより、之に對して完了形をも過去と言ひ得るなり)

今來た(タリ)　　是はしたり　　敎へも敎へたり覺えも覺えたり(リヲノンデハヨワシ)

先刻來た人が又來ました(シ………タリ)　　したりしたり(ホメ詞)

昨日雨が降つた(過去カ完了カ不明ナリ)　　(遠州、降ツタツキ)

聞いた(キケル、キ、シ)人も聞かない(キカザル、キカザリシ)人もある

聞かなかつた人も聞いた人もある(否定ノタハ明ニ過去ナルヲ知ルベシ)

花の咲いた時に又來よう(サキタルナリ。サキシニアラズ)

此の頃瀧の川に遊べり（シダ）

不思議は立ちません（ナンダ）だかな（デシタ）

二年以上奏任の職に居つた（在りたる）者（タルハ非ナリ。此ノタハ過去ナリ）

二年以上奏任の職に居る者又は三年以上奏任の職に

夜になつたら（なりしかば）涼しくなつた（なりたり）（過去シカニアラズ）

先に見た（たる）時とちがふ（タハ過去ナリ。タルニアラズ）

はれぬとおもへばふる時雨哉

晴レヌト思ツタラ（ノニ）又降ル

アノ人ハ來タラ（ノニ）直歸ツタ（逆態）

現代文の語の多くは口語のタを文語に改むる所にあり。よく注意すべし。タの活用は

たら　バ　ウ　て　アル　キル　たり　タ　ケ　た　シ　ケレドモ　（たり）　たが　カ　ノ　たれ　バ

閑吟集　いとほしいと言うたらかなはうず事か　（室町時代）

雜兵語　唐辛を……手にもぬつたらばよかんべいか

タラバの前提法を確定にも用ゐらるゝ事は前例の如く、東京語はむしろタレバを用ゐざるなり。さてこゝに論ずべきは完了過去の事なり。口語は此の形式なくとも用を辨ずれども、人によりてはタッタを用う。之を關東東北の語にてはタッケといふ。

そんな事もあつたつけ

昨日來たつけが何も言はなかつたよ

昔アッタ｛トサ／ケト｝

此のケは今はタリに結びつけてのみ用うれども、少し以前には直に動詞に添へしにて、今も地方によりては、

太郎樣は家の方に來るけが寄らないけか

お隣にはお客があるけ

さうだつけ

とやうに用う。指定ダに添ふは東京にもあり。此のケは文語キの變音にして、正しき過去、他の場所・時にありし動作を移し持ち來りて噂する樣の義あり。黑澤翁滿の「言靈のしるべ」にも此の説あるにて、余は自説の一家言ならざるを知りて喜べり。ケは此の如く過去辭として必要なるものなれども、現時の大勢日に〳〵滅びむとするは惜しきものなり。タッタはテアッタと同義なれども必

しも存在を表さず。タを少し丁寧にいふ樣なる處より完了過去めきて用ゐらるゝなり。さてテシマッタといふ形式が完了を確實ならしめむと欲する時に用ゐらる。シマフは補助動詞なり。

行
- つた‖行キツ‖キヌ‖キタリ‖ケリ‖キキ
- つたつた‖行き（ニ／タリ）キ‖キタリツ‖キニタリ
- つてあつた‖行キテアリ（ツ／キ）‖キタリ（キ／ツ）
- つてしまつた‖行キタリツ‖キニタリ
- つたつけ‖行キ（ニキ／タリ）
- つてしまつたつけ‖行キニタリキ

(2)　てある　てゐる

「掛物かゝれり」は口語「掛物ガカヽツテ居ル」に當り、「掛物かけたり」は「掛物ガカケテアル」に當る時は共に存在態なること已說の如し。此の口語にヰルアルを主動詞と見る時は、カヽツテカケテは其の副詞に當れど、そは形式上の事にて、眞意はカヽルカケルの存在態なれば、今は一種の動詞の形式と立てたり。是も已に說けることなり。さてアルとヰルとは

紙がある　　用事がある(共ニ非情ノ物)

猫が居る　　子供がゐる(共ニ有情ノ物)

と樣に有情非情によりて用ゐ分くるを正則とす。(方言には「筆ガ此處ニ居タ」など非情にもヰルを

用うるもあり)是は獨立詞としてなるが、存在・繼續・進行態を表す場合には補助動詞となりて、ヰル
は有情非情に通ず。

　　花が咲いてる　　掛物が掛つてる
　　人が寢てる　　蝶が飛んでる

さらばテアルとの別は如何にといふに、

　　掛物が掛けてある

の如く、存在態にのみ用ゐる、前のカヽルといふ自動的動詞が變じて他動的動詞カケルとなる時に、
ヰルがアルに變るなり。而してこの他動的動詞は此の儘にして其の主語を補ひて

　　掛物が(人ガソレヲ掛ケテ)ある

としても說明せらるれど、又

　　掛物が　(人ニ)掛けられてる
　　　　　　掛け――てある

とやうに事實被役相なるべきもの、平相に言ひなさるゝ時にヰルがアルに代ると見るべし、此
の後說の方分り易きが、其の語形は前說の言方より出で來れるなり。

庭に松が　ある
　　　　　植ゑてある

うわつてゐる ⎫
うゑられてゐる ⎭(テアル)

人がゐる

人が庭に松を植ゑてゐる

人が手紙を書いてゐる

手紙がある

手紙が書いてある(書かれてゐる)

地方によりては「山ガ見エテアル」などの語法あれど、「山ガ見エテ」と云ふ時はヰルと受くるを正則とすること前例「ウワッテヰル」の如し。それも「ウワッテアル」にても通ぜざるにあらざれども、存在態の形式としては純正ならず。さてこのヰルをヰルと四段活にもいふは今は難なけれど、實はヰルの上一段活の方正しきことは第三・四項に言へるにて知るべし。然るに候文などにては四段活なるを便宜として用ゐ來れる習慣より、ヰルは俗、ヲルは雅なりと心得て、丁寧なる場合には「ガヲリマス」「テ居リマス」とやうに用うるは誤ながら現時の勢なるが如し。

それでゐ(アッ)て屈しない

徳島方言　旗を立ててあります(紀州、泉、久留米、上州、信、甲、千葉)

(3)　う　よう

想像辭としては已に說けり。未來辭としての用法も異なることなけれど、口語には未來にも確定したる事は想像辭を用ゐざること多し。

必參上致｛すべく候／します（「ませう」ニテハ曖昧ニナル）

人は食｛はむが／ふ｝爲に生くる者にあらず（「食はうが」ト直譯スベカラズ）

歸｛り／り／つて｝來｛む／る／る｝まで（直譯「歸り來よう」）

思｛はむ／ふ／ふ｝子を法師に｛なしたらむ／なしたる／したの｝こそいと心苦しけれ

此の四例の中一・三は未來ともいふべけれど、二・四は不定時なり。文語にても時代に因りては想像辭を用ゐざるも可なり。まして口語にて平安文を直譯せむは聞き苦し。かくて口語にては單に未來の爲にウヨウを用うることは極めて稀なり。

明日は雨が降{らう/る}　きつと行{かう/く}

來學年は勉強{しよう/する}

然るに茲に一つの反對なる現象あり。逆態假定前提法の時

勉強{すとも/しようと}　優等には{なられじ/なれまい}

の如く文には想像を用ゐざるに、口語には必想像するなり。文語にムトモの無きと併せて記憶すべし。

八　雜說

(1) 標準

時に關する語形は略說き盡したれど、之を如何樣に用うべきかは尙容易ならず。それには正しき文例に馴るゝが良法なれど、分解的には「時の標準」を心得るをよしとす。およそ言語は思想事實を表すものなれど、同一の事實に對する思想は必しも同一ならず。隨つて同一の事實は常に同一の言語にて表さるゝものにあらず。この事實と言語との關係を第一に心得ざるべからず。「御出デ

下サイ」といふ事は「御出下サレ」「御出下サルベシ」「御出下サレタシ」「御出アラマホシ」「御出ヲ乞フ」など十數樣の言語にて表さるゝ如く、時に關しても同樣の現象あるべきは想像するに難からず。特に時は事實としては過去と未來とあるのみにして、現在時といふものは人力にては捕捉すべからざる者なる事は誰人も合點すべきに、思想言語の方にては此の三時を旨く調へ用うる處まづ事實のみを以て論ずべからざるを知るべし。是に於て時には

事實と一致する者

事實と一致せざる者

の兩種を立てざるべからず。

今朝雨降リキ

今モ降レリ

後ニ晴レム

といふは一致せる者、

今降ル

といふは思想に於ては現在なれど、事實においては如何あるべき。之を一日の日記として

朝雨降ル。十時ナホ止マズ。夕方晴ル。

とせば、すべて事實の時は過去なるを、思想において現在としたるにて相一致せざるなり。事實の

時を主とする時は世に存在せし事實は皆過去なれど、之をすべて過去として記述せんは煩しきに堪へず、且我等の思想は過去の動作にても之を時より離して事柄と考ふることを得るなり。されば

橿原の宮に即位し給｛ひき／へり／ふ｝

と三樣に云ふ。其の差別を考ふるに各の言方に於いて或る標準を有し、その本は現在にあり。事實の現在は捕捉しがたき上は、思想上その現在をば或る範圍内に於いて定めざるべからず。その現在の本位を立てたる上にて、過去も未來も比較的に出で來るが言語の時の本體なり。かくて一分時を現在ともすべく、三十秒前を過去ともすべし。その立樣によりて現在の範圍は十分間なるもあり、一時間なるもあり、一日、一月、一年、十年、一世紀、一時代、有史來、人類生息來、地球成立來もあるべし。而して事實上の時は言語にては副詞にて表すを本體とす。歴史現在と稱するも、身を其の時代時代に置きて事を敍ぶるにて、現在が次第に推移する樣に言ひなすなり。芝居にて過去の事を現在に演ずるが如し。歴史以外傳記小說記事文等は皆動作を現在に記し、見る人讀む人をして其の事實を眼前に髣髴たらしむる所、小パノラマと謂ふべし。沿革由來など記せる文は事實の現在を基本とすること多きにより、過去の記載多くなるなり。而して實際に於いて此の兩種の文の入り

交りたるが多きより、初學ふと思ひ惑ふことあるものなり。

天叢雲の劒と申すは代々御門の御守なり。天武の御宇熱田の社に籠められたり。天羽々切の劒は本は十握の劒と申ししが、大蛇を切つて後はゞ切の劒と號す。彼の劒後には石上布留社に納れり。昔素盞嗚尊出雲の國におはしける時、彼の國の簸の河上の山に大蛇あり。尾首共に八つあり。八つの尾八つの谷にはびこれり、眼は日月の如し。背には諸の木草生ひたり。年々人を呑む云々。尊……如何にと問ひ給ふ手摩乳……と申しければ、尊……と宣へば、……と申しければ、尊大蛇を討ち給ふべき謀をぞし給ひける。(平家物語)

講談師などの過去の事實を話すに現在法を巧に用うるなど合せ考ふべし。支那語には時なき反對に、英語などは記事文叙事文共に過去を用うること多きは、其の國語の特性にて、何處の國語にも亙る規則にはあらず。(我が古事記大鏡などの史書に過去を多く用ゐたるは一段々々を對話の姿に物したればなり)叙述的なるには現在を普通の則とす。英語などの過去は多く我が完了に當るなり。さる人の西洋歴史の一段々々を悉くキにて書きたるを見し事あり。一異彩なれど膠せる琴柱にて、整はざる文なりしを記憶す。

昔は頭を露さざるを禮とせしが、戰國以來一般に脫帽の風となれり

昨日施行せし試驗答案を調ぶ

奈良時代は摸唐なりしが、明治の代は摸歐なり、後には同化して固有の發達をなすべし

來むと言ひし人來たり

袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つけふの風やとくらむ

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみ分けて君を見むとは

霜さえし矢田野の淺茅埋れて深くも雪の積る頃かな

去年の今日こよひの月を見し折にかゝらむものと思ひかけきや（榮花）

定時の現在基本を定むると共に、不定時に言ひなすべき場合も心得ざるべからず。

「霜さえし」の歌は兼好法師がよめるなり

是は事實は過去なれば、ヨミシといひても誤とは定め難き樣なれど、思想として過去に言ふ必要なく、又しか言はぬが國語の例なれば、ヨメルを正とし、ヨミシを誤とせざるべからず。

菅公和魂漢才の誡を遺し給{ひき／へり}

此の机は木にて造{りき／れり}

是の如く我聞けり（過去ニハイハレズ）佛或時室羅婆城逝多林の給孤獨園、大莊嚴重閣に在しき（對話的ナラヌトキハ「在せり」トモイフベシ）

共に事實は過去の動作なれば、キといひてもあるべきが如くなれど、言はでも著き過去を言ひ斷りたりとて功名にもあらず。必要もなく、事柄を言へば濟む所に、「造リキ」などありては何の意かと

却つて疑はるゝにて惡しきなり「遺シ給ヒキ」の方は場合によりては可なれど、その要なき時には「造リキ」と同じく惡しきなり。

昨年脱稿せし書此の頃發行となれり之を君に贈る

「脱稿セシ」は事實「脱稿シタル」に相違なけれど、下の「ナレリ」に對して過去に言はでは明瞭ならず。「脱稿シタリシ」としても可なりオクルはオクラムとしても義をなせど、オクル動作は我が手を離れて人の落手するまで少し手數を要するものなれば、贈りはてずとも現在にオクルと言ふべきなり。來ル行ク讀ムなど全動作の一部分のみ現在なるに、全動作の現在形に言ひ得べき者少からず。是も亦記憶して實例に充て試むべし。

(2) 想像と時

想像は未來のみにあらず、未來は想像のみにあらざること、前にも言ひたれど、此の境を明に心得ぬ人の多きに因り、こゝに又一言せむ想像は過去現在未來の三時にわたりてある其の中に、

(イ)現在のはムベシラムラシメリなどにて表し、それ又不定時なる動作をも想像するなり(第三節を再讀すべし)

(ロ)未來のはムベシにて表すこと、本節前述の如し。

(ハ)過去のはケムにて表すを本則とし、ベカリキシナラムなど之に準ず。(之を過去未來など言ふべからず)

太古には文字無かり{けむ／しな{らむ／るべし}}　文字あり{き／し／けむ}とはおぼえず

小野小町は何處にてか死に{けむ／しならむ}　詳ならず

韓國のからきにわびて日の本の國しのびつゝ領巾はふり{けむ／しなるべし}(黑川眞賴)

「無カリケム」は過去の事の斷定し難きより想像し、次のは「死ニ」「フリ」の事實は確なれども、其の處及原因の不確なるより想像せるにて皆「ナラムナルベシ」に換ふべし。されど

惟喬の親王の父の侍りけむ時によめりけむ歌ども乞ひければ云々(古今、哀傷)

生れけむ年は知りたりや(大鏡)

などは想像の意輕くて近文の體には換へられず。又「ベカリキ」の「マシ」に通ふものあり。(「マシ」と「ケム」とは大に異なり)

さ夜ふけて寢覺めざりせば時鳥人傳にこそ聞くべかりけれ(拾)

此の時もし義貞早速に下向せられたらましかば一人も降參せぬ者はあるまじかりしを(太平記)

此等は「聞キケム」「アルマジカリケム」とは言ふべからず、「聞キタラマシカ」「アラザラマシ」とは言

ふべし。

今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり

戀しとは誰が名づけけむことならむ死ぬとぞたゞにいふべかりける

是は過去想像にも假定にもあらざれば、ケムにもマシにも換ふべからず。

あはや今數歩後れなば已に事の後なりけむ

君が代の靜けかりせばかねてより身は花守となりけむものを

などは過去の假定なるべき場合にてケムは當らず、「ナラマシ」「ナリシナラム」「ナルベカリキ」などにて表すべし。

(勤操の事)は私にて八講行はむとて修法せし故第七卷を二つにわかちけむなるべし猶公にては昔に從ひて七卷を用るられしならむ(類聚名物考)

(3) 前提法と時

時は主として直說法に存すれども、多少は命令法・前提法にも關すること、本節第二項にいへり。而して命令法なるは事簡にして前に盡きたり。今前提法の事を一わたり說明すべし。まづ本動詞の前提法は時に關せずと言ひても可なれど、强ひて言はゞ假定なるは未來、確定なるは現在又は不定時と云ふべし。助動詞のタリ、リ、ツ(ツトモのこと前にいへり)ヌも同樣なり。ムベシも假定なるは未來、確定なるは未來又は不定時とも言ふべし。

雨降｛らむには／るべくとも｝　行か｛じ／む｝　（動作ふるハ未來）

雨降｛らめども／るべけれど｝　行かむ　（ふるハ未來、又ハ不定）

彼は我を嫉｛はめど／ふべけれど｝　勉めて感情を和げむ（きらふハ不定）

過去のキケリには確定前提法のみありて假定なきは理の當然なり、假定の時には過去の事にても單に假定想像辭のマシを用うるが國語の本體なり。

雨降｛りけむには／りしならば｝　行かざり｛けむ／しならむ｝　を

ケムニハ、ケム共に非なり。シナラバはフリシを一種の體言と見てナラバと受けたる近代の語法なれば、是はさてもあるべけれど、「降ラマシカバ行カザラマシ」の純正なるに如かず是が古く思はるゝ場合には

雨降らば行｛くまじかりし／かであるべかりし／かざらむ／かざるべき｝　を、悔しくも行きけり

と様に色々に省略しても言ひなさるゝなり。又マシカバに代る一つの前提法あり。

管仲無かりせば

梅の香の降りおける雪にまがひせば誰かこと〳〵分きて折らまし

(鹿持氏セバをナバと釋せるは非なり)

此のセは第五章連用法の處に少し言ひおける「つよめ」のすの第一變化にして、第二變化を受けて假定前提法を成せるものなり。セは强意の爲に用ゐられたるものなれど過去の意味は少しも無きを、過去の事實を假定する處に用ふるより、之をキの第一變化ならむと古人の考へ出でたるは一往は尤なれど、過去辭に假定前提法のあるべき理由なければ偶然に過去と假定と一致したる現象と見ざるべからず。されば此の强意のスは

絶えせぬ流　　朽ちせぬ石

盡きすまじき　　絶えすれ

など色々に用ゐらる。セヌは過去の打消とは如何にしても言ふべからざるを思ふべしさてこのセバの助動詞につけるものあり。

玉桙の道の空にて消えにせばうきことありと誰か告げまし(赤染集)

深草の野べの煙となりにせばいづれの雪を分けてとはまし(新千)

つくばねに我が行けりせば時鳥山びことよめ鳴かましやそれ(萬)

此のニリは第二變化連用なり。此等は過去動詞のにあらざれど序に言ひおくなり。

言玉の當國(サキハフ)度會古語爾流來禮留神語爾傳來禮留傳來事任萬爾(續後紀)

といふの上は過去稀なり事柄につきて完了なるはあり。

世にいふ和歌十體の撰ありし　非ナリ

和歌十體
の撰ありし
の撰あり　といふ　源道濟
を撰べり

死なざり き / し とするも　モ同例

楠公湊河に死なずとも世の恢復はなりかねまし　望なかりしならむ

九　練習

時に關する助動詞の用法は容易ならず。こゝに正非雙方の例を擧ぐ。學ぶ者心を潛めて之をことわれ。

(1)　正例

我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て(古)

誰しかもとめて折りつる春霞立ち隱すらむ山の櫻を(古)
稻荷山社の數を人とはゞつれなき人を見つと答へむ(拾)
武隈の松は二木を都人いかにと問はゞみきと答へむ(拾)
春每の子の日は多く過ぎつれどかゝる二葉の松は見ざりつ(後拾)
梅の花見にこそ來つれ鶯の人來々々と厭ひしもをる(古)
春の野に若菜つまむと來しものを散りかふ花に道は惑ひぬ(古)
河内の國に正成といひしが一族(正統記)
山深み落ちて積れるもみぢ葉のかわける上に時雨ふるなり(藤原長能ノ能因ニヲシヘタル)
をとめのとこのへにわがおきしつるぎのたちそのたちはや(武尊)
あし引の山行きしかば山人の我に得しめし山づとぞこれ(聖武天皇)
老いぬればさらぬ別もありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな(古)
近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歲は(古)
我のみや子もたるてへば高砂の尾の上に立てる松も子もたり(拾)
たちながらきたりとあはじ藤衣ぬぎすてられし身ぞと思へば(金)
身にかへてあやなく花を惜むかな生けらば後の春もこそあれ(拾)
人知れぬ心のうちを見せたらば今までつらき人はあらじな(拾)

こと繁ししばしは立てれよひのまにおくらむ露は出でゝ拂はむ(後)
いなをらじ露の袂のぬれたらば物思ひけりと人もこそ知れ(後)
かく世を離るべき身と思ひ給へらましかば同じうは慕ひ聞えましものを(須磨)
生ける代を此の宿にだに過してば物思ふことは永く絶えなむ(出羽辨集)
久方の天の川原の渡守君渡りなばかぢ隱してよ(古)
古にありきあらずは知らねども千歳のためし君に始めむ(古)
植ゑし時花まち遠にありし菊うつろふ秋にあはむとや見し(古)
垣本にうゑしはじかみ口ひゞく(記)
わが宿の垣ねにうゑし撫子は花にさかなむよそへつゝ見む(後撰)
もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬ中ぞはるけかりける(古)
里の子が庭に作りし雪の山梅のさくまでなほのこりけり(明如六華集)
昨日の狐まかりつきて告げはべりにけり、男ども詣でにたり、……これ見よまことおましたりけり(今昔利仁)
其の頃の主上は後鳥羽院にてましましけるが、御遊をのみむねとせさせおはします、政道は一向卿の局のまゝなりければ、人のうれへ嘆もやまず、呉王劍客を好みしかば天下に傷を蒙る輩絶えず、楚王細腰を愛せしかば宮中に餓ゑて死する女多かりき。上の好む事に下は從ふ習なれば、世の

危きを見ては、心ある人の歎き悲まぬはなかりけり(平家)
うらゝかにいひきかせたら［不定］むはおとなしく聞えなまし(徒然、二三五段)
紅はうつろふものぞつるばみの奈禮爾之衣になほしかめやも(家持)(史生尾張少咋舊妻ヲ去リ新妻ヲ娶リタレバ過去ニイフ)
皇室典範第二十七條　先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任ゼザリシトキハ攝政ヨリ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ之ヲ選任ス

(2)　誤例

吹く風に夏の暑さも忘られて着てし衣の薄きをぞ知る
なまめきし女はらから住むと聞く家の垣根の紅梅の花
厚衾重ねし人は知らざらめ鋒に劍に霜氷る夜は(安芳)
庚子四月十五日の朝、杜鵑の始めて鳴くを聞きぬ。立夏後十日なり。去年は立夏の日より鳴きぬ。去年より十日後れたるは季候の遲速あればなるべし(馬琴)
かゝりし程に今の隱岐守藤詮衡の我を誘ひて兄の詮房朝臣の家の庭に入りて膳をすゝむ。夜べ侍醫の坂本といひし人の庭上に來りて我をひきのけて袖より物出して與ふ。湯にひたしたる飯を茶碗に盛りしなりき。それを食ひし後、程經しかば飯うち食ひ酒うち飲みて出づ(折焼柴の記、地震ノ段)

我(家宣)いとけなき時に上野の花見し者どもの群れ居しを見しに似つるかなと仰せられて笑はせ給ひぬ(同上)

ワッツの畫廊に在りし時或る國の前大臣がその國の官吏を具して此の畫廊を見しにあひぬ(姉崎正治)

間には是福島中佐の向を張りしものにて徒に奇を好み險を冒す者の如く難ぜしものあり(郡司成忠)

今吾が生めりし御子ふさはず(古訓古事記)

藻鹽草の堆積せし中より眞珠を拾ひ出せし心地す

岩清水むすびて立てば其の底にやせし我が影老いし松かげ(直文)

年老いし父し此の世にましまさば汲ましましものを今朝の若水(同上)

世には學術にすぐれし人もあり德行に秀でし人もあり

(佐藤兄弟の妻)只今兄弟凱陣しきと其の俤をまなび老母に見せ其の心を慰めきとぞ(東遊記)

集中清濁に拘らぬこと上に屢いひたりき。婆字改むるに及ばず(木村正辭)

本書は公が正しき傳記を世の學童に知らせんが爲、先生が快筆を以て面白く書き綴りぬ(中村秋香著菅公傳廣告文)

(上略)松江のつとに造り始めしものは山口彩雲堂なりぬ(八重垣糖の披露文)

十七年があひだの寝忘れやしぬらん後の思出にやせんとて筆立しつるものなるが(言海跋)

此の外尙多けれど煩しければ略きぬべし

今朝よりの戰に味方疲れぬべし(藩翰譜、忠勝ノ言)

海原の沖の高くも見ゆるかな幾世積りし水にかあるらむ(景樹)

駒のはないざひき向けてかけ立てむ色めきそめし山かげの敵(安芳)

頸飾は大勳位ニ叙セシ者ニ特別之ヲ賜フ(廿一年一月勅一號)

約せし時間違へぬもすべての約に從ふも常に守れる規律より起れることよおのづから……(處世の歌)

ちるもよし吉野の山の山櫻花にたぐへし武夫の身は(山田公章)

天の下かわける程のなければやきてしぬれ衣ひるよしもなき

いつかれし神やうゑけむ廣前をおほひて立てる松の一木は

廣前に杖ゆるされし老松は神に仕へていくよへぬらむ

童に侍りし時女房などの物語よみしをきゝていとあはれに悲しく心ふかき事哉と涙をさへなむおとし侍りし(帚木)

廣德寺の門格別大なる門にもあらず又彫琢の工を極めしといふにもあらず(南谿)

年老いし親のなげきはいかならむ身は世のためにおもひかへても(平野二郎文久二年)

この二十年が程にかゝる風俗は大方は跡なくなりにけむ（ぬらむナリ）かし(醒雪、光田村)

昔誰岩に烏帽子をきせぬらむかた〳〵としてよい男なり(芭蕉)(象潟烏帽子岩)

文辭を知らぬ人にいふとも御心ゆかぬ事なるべければいはでやみぬべし(春海、眞國に答ふ)

かゝる事試み給はむも少しは御學問開けむはしともなり侍りぬべし（コレハ是ナリ）(同上)

綱こそくちたれこのふるつるべ桶こそいためれ……………學期試験の準備につとめし（ムル）幾千の學生が苦む腦（アタマ）冷していやさん氷となりぬ（キ）彼等がわざを助けん爲に雨の日雪の日つるべのなはの休まる時なく汲まれしつるべ屋根もる月こそ昔をしらめ

ろくろの音の絶えにし（タル）ひまなく汲まれしつるべ

うまいより呼びさまされし人のごと開き目をあき我を見つむる(鷗外)

(勳記領案)……有セシムル旨ヲ明載セシ勳位記ヲ授ケラル

(3) 正誤混交例

物思はで過ぎぬる方の年月は如何に寢し夜の夢にかあるらむ(後醍醐天皇)

よひ〳〵に枕定めむ方もなし如何に寢し夜か夢に見えけむ(古、戀一)

さりともとかきやる浦の藻鹽草誰が下り立ちてかづき上ぐらむ(岩倉具視)

人は皆しづまり{ぬらむ／にけむ}音もなし(平家)

君が着京せむ日は都は花の錦もて飾られつらむ

孔子祭典古器物展覽………特に天球は………當時の人の智識を窺ふべき好記念なりき

王子の御前より一葉の舟に棹さして萬里の滄海に浮び給ふ遙の沖に山なりの島といふ處あり
き「ヤ、對話的ニイヘルナリ」。中將それに舟こぎ寄せさせ(平家、維盛入水)

我が國は英國の如く大陸と離れたりしかば自然外寇を受くること少かりき

大汝少彥名のいましけむ志都の岩屋は幾代經ぬらむ(萬)

我見ても久しくなりぬ住のえの岸の姫松いくよ經ぬらむ(古)

鏡山いざ立ち寄りて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると(古)

年を經し松も小松と見ゆるかな根ざす巖のかげ高くして

何をして身のいたづらに老い{にけむ／ぬらむ} 年の思はむこと{も／ぞ} やさし{し(朗詠)／き(古)}

かぞいろは{如何にあはれと思ふらむ／あはれと見ずや蛭の兒は} 三年になりぬ足立たずして{(朗詠)／(竟宴)}

後日………主戰艦隊の見たるものは「ボロヂノ」なりしを知るを得たり(日本海々戰詳報)

都いでし春のなげきに劣らめや年ふる浦を別れぬる秋(明石、將ニ別レムトスル時ノ歌)

花の雲ちらす（は／を）惜し（き／み）春の暮しばし止（めし／むる）蛛の糸卷（京山／彥麿）

降りそむる今朝だに人の待たれつる深山の里の雪の夕暮(新古)

御題は出でぬればあな恐し罷り出でぬとて立ちぬ(枕)

忘れめやよるべも浪のあら磯を御船の上にとめし心は(後醍醐天皇)

來る十日懇親會相催すべく候ふ間御出下されたく候

君必後に之を悔いつらむ(常山記談、吉川元春ノ言)

世をすてゝ山に入る人山にても尙憂き時はいづち行くらむ（正）(古)

白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經（去良武(萬)／爾計武(萬一本)）

昨日までさばかり有りけむものを夜の程に消えぬらむ事と言ひくんずれば(枕、雪山)

里はあれて人はふりにし宿なれや

心とはどんなものにてあるやらんこんなものにてありやしぬらん(馬琴)

荒れたりし處に住みけむ（ッ）ものゝわれに見いれけむ便にかくなりぬる事(夕顏)

この宮の四つになり給ひし年の秋、はかなき御心ちのやうにて父宮にはかにかくれさせ給ひぬ（キ）

（手枕）

かつらぎや久米路にわたす岩橋のたえにし中となりやはてなむ（新古）

ながくもがなとおもひぬる哉（小倉色紙）

昔西王母といひし人も東方朔と聞きし人も

東の國にわれをれば朝日さすはこやの山のかげとなりにき（實朝）

わらはに侍りし時、女房などの物語よみ（侍リ）しをきゝていとあはれに悲しく心ふかきことかな
と涙をさへなむおとし侍りし（帚木）

たのしみはそゞろよみゆく書の中に我とひとしき人をみし時（曙覽）［非］

よき香のするにかへり見れば木犀のさかりにさき居たるなりき

この間承り｛候／し｝　紀念日は何日にて候ひし哉ふと失念

大井川をすぎ給へば都にありし名を聞きて（太平記東下）

手を折りて經にけることを數ふれば十といひつゝ［つ（群）］四はへにけり（伊勢、十五段）

年だにも十とて四はへにけるをいくたび君をたのみ來ぬらむ（同上）

此の日あること末とほらずといひてその日いひたりしことしたりし事叶はず得たりしものは
失ひつ企てたりしこと成らずといふ愚なり吉日を選びてなしたるわざの末とほらぬを數へて

見むもひとしかるべし(徒然、九十一段)
いづくより來たりしものぞまなかひにもとなかかりて安いしなさぬ(萬五)
我この頃家を買ひて移り住みけり(鳥山啓、新樹トイフ文ノ始)
成りいでし昔ながらの姿かも空に聳えし雪のふじのね(泥舟)
ねになきてひぢにしかども春雨にぬれにし袖ととはゞこたへむ(古、戀二)
靜はなく〱立ちかへりみれば鼓ばかりにて君が形見も雜色もいづち行くらむ影もなし(近松
吉野忠信)
けふまではすぐれし人とおもひしに人と生れし神にぞありける
「河井繼之助」生して置きたらば如何なる事を明治の世に爲す人なりし乎
住吉の岸の姫松人ならば幾代か經しととはましものを
この御酒は……祝ぎもとほしまつり來しみきぞこの御酒をかみけむ人は横臼にかみし大御
酒(記)
俊蔭申す、日本に歳八十歳になる父母侍りしを見すてゝまかり渡りにき今はちりはひにもなり
侍りにけむ
殘雪の峽輪塔に似し古墳(國雜)
マッチ箱に似し列車(吉水省三)

一八に似し草ありぬ塚の道に（鳴雪點）

八重葎生ひにし宿に唐衣たが爲にとかうつ音のする（貫之集）

宮城のゝ萩や小鹿の妻ならむ花咲きしより聲の色なる（千、秋上）

右二首非上文雄の伊勢の家づとに擧げて宣長の玉霰を難じたり。

吾王、皇子之命乃、天下所知食世者（未來想像ノ假定）、春花之貴在等（カラン）、望月乃滿（タヽ）波之計武跡、天下四方之人乃大船之思憑而、天水仰而待爾（萬二、哭日並皇子、人麿）

その身朝敵となりぬる（にし（落合讀本））上は仔細に及ばずとはいひながらくちをしかりし事共なり（平家）

調伏なんども申しつけられぬらん（なん・ぬべしノ誤）と思ひしに（建治二年三月の日蓮の書）

日本のたのしき（有福）人々は……いはうや……庖丁師がまないたに於ける鯉鮒の如く

星屑の暗き光におもひ足るやからは（ヤ）眞日に向ひかねけむ（ヌルナラム・ネツル）（安江不定、烈日歌）

（高松殿ばらの子）今一所は「故中務卿の宮具平の親王と申すは村上の七の御子におはしましき（ますニテモ可ナリ）その御男君三位中將師房の君と申すを」「今の關白殿の上の御はらからなる故に關白殿御子にし奉らせ給ふを」（客ノ重並）入道殿むことり奉らせ給へり（大鏡、七）

はつせにまゐりしに水鳥の隙なくたちさわぎしがいとをかしく見えしなり（枕）

第六節　助動詞相互の接續

前第七章以來助動詞の本動詞・敬語・諸相および形容詞ナリタリカリ活の動詞に準ずべき者に接續する法則は之を說けりその助動詞の中、動詞に準ずべき活用語氣ある者は更に又他の助動詞に連結することも略之を說きたれども、本節に於いて特に相互の接續を櫨めむとす。そは近代文・口語などにては事も無げに自然に心得たる樣なれど、古文には判斷し易からぬもあり、かつ學問上には研究の利益少からぬ事なればなりさてこの接續は三種に別つを便とす。

一　敬語と相

(1) 本則　敬語の下に被能使相なし。

尊他・自卑・關係・對話の四種敬語は多く補助動詞、又は助動詞を添へて成るものなるが、その下には被能使相の助動詞は續かぬなり

よゝと泣かれ給ふ(泣き給はるニアラズ)

叱られなすつた(叱りなさられたトイハズ)

人に書かせ候ふ(書き候はすトイハズ)

子供に勉强させます(しまさせるトイハレズ)

足を揉ませさせ御坐します(敬使ト考ヘラレズ)

父君若君に御學問遊ばさしめ給ふ(學問せしめ給ふ＝學問せさせ奉り給ふ)

老臣若君に父君を諫め給はしむ（諫めさせ奉る）

尊他敬語の使役相といふ事、實際ありげに思はるれど、その時は關係敬語に變ずるが國語の特質なるを思ふべし。さて被能使三相の連結は第七章の第四節に說けるにて事足れば、今は言はず。

(2) 特例一　補助動詞及助動詞を添へざる生得の敬語は三相に續くもあり。「思しめす」の如き生得尊他動詞の可能相をもなす由は早く第七章の第六節にいへり。助動詞風の者ならねば、さもあるべきことなりされど「思しめさす」と使役相にはせられず。被役相の「思しめさる」は「思はれ奉る」と關係敬語になる。

人に物を奉ら{す / る}

左様に存ぜられ候ふ（可能ノミ）

人{を / に}侍ら{す / る}

いかゞ致させませう

子供に怪我を致されまして
それは私にも致されませう（普通ニアラズ）

其の旨奏せさす（被役ハナシ）

「賜ふ」は被能共になしタマハルは四段活受動にて異なり語によりて某相をなす者と然らざるとあるを見るべし

(3)特例二　關係敬語は使能相をなす。

申ス奉ルなどは補助動詞となりても尚獨立詞の力あればか、關係敬語に限りて使能相をなすことあるなり

侍臣をして｛諫め奉らしむ(君ヲ敬フ)
　　　　　｛諫めしめ奉る(侍臣ヲ敬フナリ)

寵愛の御姿に殿樣を御諫申させた

但「教へ奉らしむ」の如き文語はあれど、「御教申させる」の如き口語は、多く「教へて上げさせる」と樣に言ひ換ふるがよきなり。

序にいふ、關係敬語の尊他となるは「姫宮父宮にこのみを奉り給ふ」など文にはあることなれど、口語に直譯して「御上ゲ申シナサル」といふは拙なり。申シは上ゲにて事足れば略して「御上ゲナサル」と言ふべし。「兄樣が父樣に英語を御教へ申しなさいます」なども「教ヘテ御アゲナサイマス」と言ふべきなり。

そんな事はあまり御ほめ申されません

褒め奉られぬ御行狀なり

之を被役相にして、

某宮外人に佛蘭西語を敎へ奉られ給ふ

など言ひ得べき場合もありげなれど、多くは「習ひ給ふ」といひ、然らざるも奉るの關係を略して「敎へられ給ふ」といふ。もし之を「敎へられ奉り給ふ」とする時は、敎へらるゝ者は某宮以外の人となるを記憶せざるべからず。

兩宮林伯に育てられさせ給へり（育て奉られ給へりトハイハズ）

太郎は伯父様に{ほめられ／しかられ}申した

此等は「ホメ申サレタ」などとは言ふこと能はず。

彼の男は好い加減に御上げ申されてゐる

などは通ずる様なれど、之は「オアゲ申ス」といふ語の關係敬語なるを忘れて一個の獨立詞様に使用するより、かく被役相をもなせるにて、關係敬語よりは使能相には續けど、被役相には續かずと定むべきなり。　大鏡の序に

法華經一部を說かれ奉らんとてこそまづ四經をば說き給ひけれ

といふ文あり。かの書を讀まん日に判斷を試みるべし。宗祇隅田川物語に

この道の事色々尋ね侍られしを思へば

とあるは對話敬語の侍りの被能相となれるなるが、かゝる文はよし近き俗文にはありとも許容すまじき惡文なり關係敬語の語氣などゝ混じたるにもやあらむ。

(4)特例三　自卑敬語タマフは補助動詞として可能相をなし、接續すべき二動詞の間に挾る。下二段活のタマフは見聞思に主として添ふものなるが、

思う給へらるれど　　見給へらる

身づからはえなむ思ひ給へ立つまじき(桐壺)

思う給へ忍びつれど(落窪物語、少將ノ詞)

などあるは「思ひ給へ」を「存じ」位に用ゐたるなり。

二　希望・完了・否定・想像・過去

此等の諸助動詞は本動詞にも前項の敬語及諸相にも添ふことは前に說けりさて其の重用は概して此處に揭げたる順序に依る。

(1)希望

たしは助動詞中にて獨立詞樣の者なれば、第一に置きたり。さてカリ活となりてツ、ズ、ジ、ム、ベシ、マジ、マシ、メリ、ラム、ラシ、キ、ケリ、ケムの各に接し、ザルに接しては更にム、ベシ、キ等に接す。まほし亦之に準ず。なむは他辭に接せず、ばや、もがの類亦然り。されば希望辭として完了以下四種辭に接する

が本體なるにあらず。アリを吸收するより獨立詞樣になりて他辭に接するを得るなり。

	たから	たかり	たかる
見 御覽ぜられ	ズ、ジ ム、マシ ザラム ザリキ ザルベシ シム	ツ キ ケリ ケム	ベシ マジ メリ ラム ラシ

家君欲被（コノ字將ニ近キナラン）奉當今之間（菅原本朗詠、奥書）

奉らんと欲せらるゝ間

奉られんとする間

(2) 完了

完了辭のたりは動詞形なれば勿論なるが、つぬも本來否定・想像・過去辭に接すべき性質あり、又希望なむにも接す。漆着性の最強き助動詞なるを思ふべし。

咲き	たら　ズ、ジ ザル、ナム ム マシ	たり　ヌ、ツ、キ、ケリ ケム［ケラシ］	たる　ベシ、メリ、ラム ラシ
	て　ヌ	て　キ、ケリ ケム、ケラシ	つ　ベシ、メリ、ラム ラシ、ナリ
	な　デ、ヌ ナム	に　タリ、キ、ケリ ケム、ケラシ	ぬ　ベシ、メリ、ラム ラシ、ナリ
	さけら　ズ、ジ ザル	り　ツ、キ、ケリ ケム、ケラシ	る　ラム マジ、メリ

年月經たりぬれどあかざりし夕顔をつゆ忘れ給はず(玉葛)

さなりたるべし(蜻蛉)

昔だに人まどはし給ひし御ことゝいかになりにたるらむ(宇、沖つ白浪)

ほと〳〵ゑみぬべかりしに(枕、四)

テナの打消は古く僅の例あるのみ。

かくながら散らで世をやは盡してぬ花の常磐も有りと見るべく(後撰)

みるめなき我が身を浦と知らねばやかれなであまの足たゆく來る(古)

道知らでやみやはしなぬ逢坂の關の此方はうみといふなり(後撰)

更にしほにぬれたる衣をだにぬきかへなでなむまうで來つる(竹取)

此處にや夜べより立ち給へりつる(空穂、俊蔭)

かく世を離るべき身と思ひ給へらましかば同じうは慕ひ聞えましものを(須磨)

山里にちりなましかば櫻花にほふさかりも知られざらまし(後撰、二)

引きこめられむはからかりなまし(末摘)

奥山に立てらましかば渚こぐ船木も今は紅葉してまし(拾、十七)

うるはしと思へりけらし忘るなと結びし紐の解くらく思へば(萬)

空目をぞ君は見たらし河の水淺しや深しそれはわれかは(拾)

新玉の年こえつらし常もなき初鶯のねにぞ泣かるゝ(後撰)
いさりする與謝のあま人いでぬらし浦風ゆるく霞わたれり(新古)
など此處には置きたるらむ
さか行く春にたちいでさせ給へらましかば
忘れじよ忘るなとだにいひてまし雲居の月の心ありせば(新古、十六)
ふる雪はかつぞけぬらし足引の山の瀧つせおとまさるなり(古)
いせわたる川は袖より流るればとふにとはれぬ身はうきぬめり(後撰)
五月雨に日もくれぬめり道遠み山田のさなへとりもはてぬに(後拾)
秋風に初雁がねぞ聞ゆなるたが玉章をかけて來つらん(古)
きのふ迄さばかりありけむものを夜の程に消えぬらむことと言ひくんずれば(枕)
たがまきし紅なればみわ山をひたくれなゐににほはせるらむ(新古)
誰見よと花さけるらむ白雲のたつ野と早くなりにしものを(古)
是はいと樣かはりたるかしづきぐさなりとおほいたんめり(若紫)
人は皆春に心を寄せつめり我のみや見む秋の夜の月(更科日記)
我が宿の庭の秋萩ちりぬめり後見む人やくやしと思はむ(後撰)
まことかとくらべてみれば我宿の花のつゆには倘うてぬめり(和泉式部續集)

海とのみまどゐの中はなりぬめりそながらあらぬ影の見ゆれば(後撰雜、伊勢)
昔人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ(古)
又聞けば侍從の大納言の御女なくなり給ひぬなり(更科日記)
暮れ行けば淺茅が原の蟲の音も尾の上の鹿もこゑ立てつなり(後拾)
今日もまた午の貝こそ吹きつなれ未のあゆみ近づきぬらん(千載)
まぶしさす賤男までさへたへかねて鳩ふく秋のこゑたてつなり(堀河百首)
秋たつといぶきの山の山おろし袂涼しく吹きつなるかな(堀河院初度百首、仲實)
一人はいたづらになりぬめりき(國譲、中)
春ごとに花のさかりはありなめどあひみむことは命なりけり(古)
あかでこそ思はむ中は離れなめそをだに後の忘れがたみに(古)
まして龍を捕へたらましかば又こともなく我はがいせられなましよくとらへずなりにけり(竹取)
中々にうかりしまゝにやみにせば忘るゝほどになりもしなまし(後拾、十二)
さらばよと別れし時にいはませば我も涙におほゝれなまし(後撰、十九)
かく世を離るべき身と思ひ給へらましかば同じうはしたひ聞えましものを(須磨)
花のごと世の常ならば過してし昔は又も歸り來なまし(タラウニ)

白玉か何ぞと人のとひし時露と答へて消なましものを
隱沼に忍びわびぬる我が身哉井での蛙となりやしなまし(後撰、十)
忍ぶれば苦しかりけり篠薄秋のさかりになりやしなまし(拾、十二)
古の山ゐの衣なかりせば忘らるゝ身となりやしなまし(新古今、十八)
これもまたながき別となりやせむ暮をまつべき命ならねば(新古、十四)
これもまた情ある世になりやせむ契りし末も誠なければ(玉、十三)
忘草かるとだに聞くものならば思ひけりとはしりもしなまし(伊勢)
世の中のうけくにあきぬ奥山の木のはにふれる雪やけなまし(古、雜)消エレヤヨカツタニ
今はなぐさみ給へるめり(空穗、藏開)
やすらはでねなましものを
宮などをばむつび遊び給へるめり(樓上)
完了にマジ續かずルにはラシ添はず。
御子などもたまへるまじき(澪標)
少々の人はえ立てるまじき殿の内かな(行幸)
など用例の少きなるべし。
事實ならざるは假定想像の場合に、

我をして維新風雲の際に生れたらしめば必大功を樹てたらむ

など言はゞ言はるべきが、その時はタラはテアラと特に存在を示せる義なり而して此の假定にシムを用ゐるは漢文直譯より出でたるにて、眞正の國語にては、「生レ(タラ)マシカバ」「生レタラムニハ」「生レムニハ」「生レバ」と言ふ語脈なれば、まづ此の連結をば採らざるなり。

買{ひてある / ひたる} まじ

なども存在動詞として聞けば通ず。「生きたるまじき心ちするは(蜻蛉日記)」などタルマジと續けるは皆存在態のなり。

(3) 否定

ズヌネジ共に助動詞を添へず、諸動詞・諸相・希望・完了(想像の中のベシも)を打消すに止る。「風吹カヌベシ」「何トモ思ハヌラム」など決して無きことなり。ズケリズケムは間にアリを略せる古格にて正しき接續にあらず。但アリと結合する時は新に一個の動詞の如くなりて下諸辭に接す

書かせ給は / 打たれ候は
- ざら
  - ム、マシ
  - シメ { ツ / ヌ }
  - シム { タリ / キ }
- ざり
  - ツ、キ
  - ケリ
  - ケム
  - ヌ
- ざる
  - ベシ、ラム
  - ラシ、メリ
  - ナ、ナリ

前々モ狹キニ依リテ取ザリケルナリケリト取ラザリヌ?(今昔、三十一)

けさはしも起きけむ方も知らざりつ‖おもひいづるぞきえてかなしき(後撰、千里)
なかつた　なんだ

否定の使役相といふこと極めて不自然なり。一言の辯なかるべからず是は使役相の否定とも異にして、元漢文の直譯より出でたりけなり。

思はしめず ══ 思はせない
思はざらしむ ┐ ║ ┌ 思はない樣にさせる
思はずあらしむ ┘ ║ └ 思はないで居させる

ザルベシも純國文にあらず。「ズアルベシ」といへばなだらかなるが、口語に「ナイダラウ」といふは「ザルナラム」に當り、「ザルベシ」にはひたと合はぬも考ふべし。ベカラズ・ザルベカラズ皆純國語にあらず。此等を二つに分てばなだらかなるを思ふべし。

見るべからず ── 見るべく{ハ／モ}〇あらず
見ざるべからず ── 見{で／ず}は{あるべからず／あられず}
　　　　　　　　　見{ナケレバナラヌ／ナクテハ}
藥を飲ませざるべからざ{らむ／るべし} ── 飲マセネバナルマイ

ザルナと接續するは稀有の例なり。

吾妹子を早見濱風やまとなるあをまつ椿吹かざるなゆめ(萬)

是は「吹カズアルナ」と釋すべく、ザルは打消の外に存在動詞を含むものと知るべし。口語方言に「聞カザツタ」「持タザリマシタ」などは新造語めきたり。

(4) 想像

想像辭は諸助動詞の最終に在るが大體の定なれど、その中ラ變アリの語氣ある者は過去否定などをも添ふるに因り、過去の上に置きたり。ムベシマジラムラシ皆それにて止るが、メリベカリマジカリラシカリ(近語)は

忘れさせ給ふ
- めりキ、ケリ
- べからム、ズ、ジ、シム、マシ
- らしからム、ズ
- まじからム

- べかりツ、キ、ケリ、ケム
- らしかりキ
- まじかりシ

- べかるラム、ラシ、メリ
- まじかるメリ（承認）

メリはキシシカを添ふる外メリケムとも言ひぬべく思はるれど、未其の例を得ず。ベカラシムは此の尊他敬語には續かざれど、「忘ルベカラシム」などの例は多し。ラシカリは近語なれば古き助動詞をば添へぬが穩當なり。

我も人も物思なくて過し給ひつべかりける世を心とおぼし嘆くを(須磨)

さらばさりぬべからむ折に物ごしに聞え給はむ(末摘)
内の人々も心づかひすべかめり(若紫)
猶朝政は怠らせ給ひぬべかんめり(桐壺)
心苦しき程になむあめりける(蓬生)
尼君その程までながらへ給はなむとのたまふめりき(若菜上)
紫のゆかりにも似ざめれど(竹河)
さしも思ひよるまじかめり(橋姫)

(5) 過去

キケリケムのタリリテニに添ふは已に説けり此等の下には添ふべき助動詞なしと謂ひてもあるべきに、ケムは實はキにムの添へるもの、今一つはケルにラシの添ふことなり(ラシのラ變に添ふもの多く上のルを呑む)

沖つ風吹きにけらしな住吉の松のしづえを洗ふ白波(後拾)
をしのねのいたく鳴くなる朝ぼらけ池は氷にとぢてけらしも(兼盛集)
夜の程にかりそめ人や着たりけむ淀のみこもの今朝みだれたる(千)
父のよめりけむ歌
沖つ波高く立つ日にあへりきと都の人は聞きてけむかも(萬)

夏山に戀しき人や入りにけむ聲ふり立てゝ鳴く時鳥（古）

櫻花さきにけらしも足引の山のかひより見ゆる白雲

つゝゐ筒ゐ筒にかけしまろがたけおひにけらし（ワガ上ヲモ想像スル事ハ難ナケレド）なあひ見ざるまに

諸石神、見人毎爾、語嗣、偲家良思吉、百世へてしぬばえ行かむ淸き白濱（萬六、終ノ長歌）

わがせこがけせる衣の針目おちず入りにけらし（ヽオツラム）なわが心さへ（安倍女郎）

ふる里の棗がもとの萩が花こぼれにけらし（ニタラム　ヤスラム）秋風ぞふく（諸平）

「タリケラシ」もあるべきか、いまだ見出でず。

○うちなげきかたりけまくは……（萬、十八）

○おもひつゝ通ひけまし（何ゾノ誤ナランカ）ハ

〔「ケマク」「ケムク」「ケマシ」といふ助動詞萬葉集に一つ二つあれど、極めて特例なり〕

(6) 候ふ侍りと他の助動詞

「候ハズ」「侍ルベシ」「候フマジ」「侍ルラシ」など對話敬話より否定・想像辭に續くは尋常の事なるに、其の位置顚倒することあり。

参りたく （「参り候ひたし」ト對話敬語ニたしハ添ハズ）

存ぜず （存じ候はず）

致すべく ―― 候ふ （致し候ふべし）

有るまじく　　（候ふまじ＝御座候ふまじ）
降るらしく　侍り　（降り侍るらし）
忘れて　　（忘れ候ひつ）
成りにて　　（成り侍りぬ）

此等の場合に候フ侍リは獨立詞にて口語のマスには當らでゴザルに當るなり。されば其の上なる語は、熟語的連用法にはあらで、補足的副詞的なり。かく兩種の位置に因りて言語の構成異なる樣に意義も同じからざるに、中には同意に通じ用うるもあり。

存じません――存じ候はず
存じませんで御座います――存ぜず候ふ＝存じ申さず候ふ
唐物語「雪々」に「たふべくもおぼえずはべるを」とあり
候はずハ前ニテ、ず候（歎異抄、謡曲）ハ新シ。
慈圓の公經に送れる書（史料第四編十五）「如此申聞候は又非無本說候ぞかし」

三　指定

タリナリ共に體言を受け、ナリはジマシを除きては諸助動詞の連體形を受くる事前に說けり。さてその下には否定・想像・過去辭附きて說述を便にす。

大將たら シム ル（ズ、ザリ　ジ　ム　マシ）　たり（ツ　キ　ケリ　ケム）　たるマジ（ベシ　ラム　ラシ　メリ　ナリ）
盡くるなら　なり　なる

聞きつるや初音なるらし時鳥老はねざめぞうれしかりける（後拾）

あかつき盜人ありといふなりつるはなほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれ（枕、十）

余をして彼ならしめば（近文ヨキカ）必他の方策をとらむ

使役相はまづタリに限るとすべし。ニキテケリなど添はず。ナルナリと同辭の重るは怪むべき樣にもあれど、口語にも

私の下駄は山桐な（の／ん）です（ナルナリ）

あの子は啞なんだらう（ナルナラム）

とやうに一度指定したる事を更に指定し得るに因りて、誤ならぬを知るべし。

人や咎めむと隱し給ふなんなり（紅葉賀）

龍王の后になるべきいつき娘なんなり（若紫）

おいや聞きし人ななり（宿木）

ななり落窪に多し。

「候はず候ふ」「御座いませんで御座います」など同種の語法なり。

曉近くなりにけるなるべし(夕顔)

打たれさせ給ふべかりしなるべし

打たれさせ給ふなるべかりしに

艶だち氣色ばまむ人は消えも入りぬべきすまひの様なめりかし(夕顔)

美しきなりしならむ

「散ルラム」と「散ルナラム」「有リケム」と「有リシナラム」「無カラム」と「無キナラム」など似て非なる由は前にも說けり。ナリは一たび用言を體言にしてそれを指定するものなることを忘るべからず。口語の指定は

大將	だらウ	(で)だつタ	だ　ラシイ	な
盡きるの	でせウ	でし(タ/テ)	です　ラシイ	

口語及近代文語には指定辭を用うる事極めて多く、動作的狀態的に言ひ切りて然るべき所を、それを體言的にしてさて指定辭にて言ひ切るなり。是は指定辭は事物を說明する語氣あるに因りて、說明的に言ふを喜ぶ習と見ゆ。

大雨ふりき(タ)――ふりしなり(タノダ)

我は丙午の年に生れたり(タ)――生れたるなり(タノダ)

風吹かざりき——吹かな{んだ／かつた}

風吹かぬなりき——吹か{んだつた／ないのだつた}

明日は來ざらむ(まじ)——來{マイ／ナカラウ}

明日は來ざるなるべし——來{ン／ナイ}ノダラウ

今日は行き候{ふまじ——行キマスマイ／はざるべし——行キマセンデセウ}

ナリの終止用言に附くことあるは第一節に言へり。助動詞にては、相の以外にツナリ、ヌナリと續く。「夢にも人のあはぬなりけり」など否定に附けると別つべし。口語にても終止を受くるダデス漸次に多くなり行くは、語を强めんとすると、敬意を添へんとするとの二に因るなるべし。上にノンあるとの別を心得べし。

あの人から金を借りただ——借りぬなり

あの人から金を借りた{人の／譯、事情等}だ——借りたるなり

きつと参る　　　です――参り候ふ
きつと参ります

きつと参りますの　(譯、事情)です――参り候にて候ふ
きつと参りますん

此は好いです(うございます)――好し(好ク候フ)
此は好いんです(いのでございます)――好きなり(好キニテ候フ)

此の形容詞クシク活の對話敬語「好イデス」の類は特に近頃流行し來り、延いて動詞の「行キマス」と簡單に言ふべきさへ「行クデス」とやうにも言ふ様になれるは、唯對話敬語を作らむ爲のものと見えたり。

四　助動詞連結表

第九章　副詞

一　釋義

副詞は事物の動作・性狀を修飾限定する者なること早く之を言へり。されば其の動詞・形容詞に係

(甲) 文語助動詞連結表

	被能敬 る・らる	使敬 す・さす・しむ	指定 たり・なり	希望 たし・たかり	完了 つ・ぬ・たり・り	否定 ず・ざり・じ	想像 む・まし・べし・べかり・まじ・まじかり・めり・らむ・らし・らしかり	過去 き・けり・けむ	對敬 候・侍り
る・らる*		させ・せ・しめ + らる	たらる						
す・さす・しむ	られ・れ + さす・しむ		たらしむ・ならしむ			ざらしむ	べからしむ		
なり	る(ゝ)・らる(ゝ) + なり	す(る)・さす(る)・しむ(る) + なり	たるなり・なるなり	たきなり・たかるなり	つ(る)・ぬ(る)・たる・る + なり	ざるなり・ぬなり	む・べき・べかる・まじき・〔まじかる〕・〔める〕・らむ・らしき・〔らしかる〕 + なり	し・ける・けむ + なり	
たし	られ・れ + たし	させ・せ・しめ + たし							
つ	られ・れ + つ	させ・せ・しめ + つ	たり・なり + つ	たかりつ	にて・たりつ・りつ	ざりつ	べかりつ・まじかりつ・めりつ・〔らしかり〃〕		
ぬ	られ・れ + ぬ	させ・せ・しめ + ぬ			たりぬ(源氏)	?ざりぬ(今昔)	べかりぬ		
たり	られ・れ + たり	させ・せ・しめ + たり			にたり				
ず(な)	られ・れ + ず	させ・せ・しめ + ず	たら・なら + ず	たからず	てぬ・なぬ(で)・たらず・らず	ざるな	べからず・らしからず	けらず	
じ	られ・れ + じ	させ・せ・しめ + じ	たら・なら + じ	たからじ	たらじ・らじ				
む	られ・れ + む	させ・せ・しめ + む	たら・なら + む	たからむ	てむ・なむ・たらむ・らむ	ざらむ	べからむ・。まじからむ([illegible])・らしからむ		
まし	られ・れ + まし	させ・せ・しめ + まし	たら・なら + まし	〔たからまし〕	て・な・たら・ら + まし	ざらまし	べからまし		
べし	る・らる + べし	す・さす・しむ + べし	たる・なる + べし	たかるべし	つべし・ぬべし・たるべし・るべし	ざるべし	らしかるべし		
まじ	る・らる + まじ	す・さす・しむ + まじ	たるまじ	たかるまじ	。たるまじ・るまじ([illegible])	。ざるまじき([illegible])			
めり	る・らる + めり	す・さす・しむ + めり	たる・なる + めり	〔たかるめり〕	つ・ぬ・たる + めり・〔るめり〕	ざるめり	べかるめり・まじかるめり([illegible])		
らむ	る・らる + らむ	す・さす・しむ + らむ	たる・なる + らむ	たかるらむ	つ・ぬ・たる・る + らむ	ざるらむ	べかるらむ		
らし	る・らる + らし	す・さす・しむ + らし	たる・なる + らし	たかるらし	つ・ぬ・たる・る + らし	ざるらし	べかるらし	けらし	
・き	られ・れ + き	させ・せ・しめ + き	たり・なり + き	たかりき	て・に・たり・り + き	ざりき	べかりき・まじかりき・めりき・らしかりき		
けり	られ・れ + けり	させ・せ・しめ + けり	たり・なり + けり	たかりけり	て・に・たり・り + けり	ざりけり・ずけり	べかりけり・まじかりけり・めりけり・らしかりけり		
けむ	られ・れ + けむ	させ・せ・しめ + けむ	たり・なり + けむ	たかりけむ	て・に・たり・り + けむ	ざりけむ	べかりけむ・まじかりけむ・〔らしかりけむ〕		

〔〕印を附けたるは用例あ[illegible]の無い[illegible]

。印を附けたるは例あれど定めがたきものなり

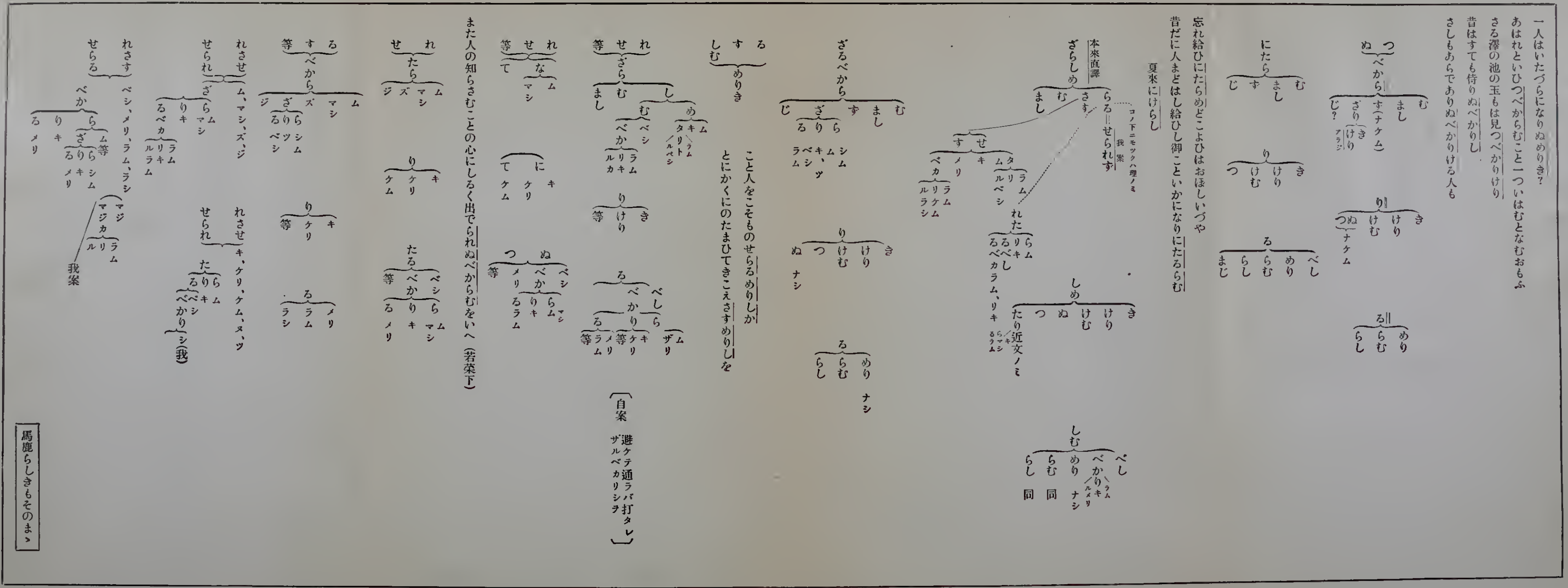
・印を附けたる〔る〕は校訂者の補入したるものなり。

(乙) 口語助動詞連結表

□印を附けたるは方言なり

	られる	させる	だ・です	ます	たい	た	ぬ・ない	う・よう	まい	らしい	け（過去）
被能敬 られる・れる		(られ・れ)させる	(られる・れる)です	(られ・れ)ます	(られ・れ)たい	(られ・れ)た	(られ・れ)ぬ	(られ・れ)よう	(られ・れ)まい	(られる・れる)らしい	〔(られる・れる)け〕
使役 させる・せる	(させ・せ)られる		(させる・せる)です	(させ・せ)ます	(させ・せ)たい	(させ・せ)た	(させ・せ)ぬ	(させ・せ)よう	(させ・せ)まい	(させる・せる)らしい	〔(させる・せる)け〕
指定 だ・です			なのです			だった・でした	〔でせぬ〕	だらう・でせう		だらしい・ですらしい	〔だっけ〕〔ですけ〕
対敬 ます			ますです			ました	ませぬ	ませう	ますまい 〔ませらまい〕		〔ますけ〕
希望 たい・たかり			たいです			たかった		たからう		たいらしい	〔たいけ〕
完了 た			たです			〔たった〕		たらう		たらしい	たっけ
否定 ぬ・ない・なかり			(ない・ぬ)です			なかった 〔なんだ〕〔なきった〕		なからう	〔なかるまい〕	(ぬ・ない)らしい	〔ないけ〕
想像 う・よう・まい・らしい・らしかり			(う・よう・まい・らしい)です			らしかった	らしからぬ	らしからう	〔らまい〕		〔(よう・う)け〕〔まいけ〕〔らしいけ〕

（丙） 三個以上の結合


一人はいたづらになりぬめりき?
あはれといひつべからむこと一つはむとなむおもふ
さる澤の池の玉もは見つべかりけり
昔はすても侍りぬべかりし
さしもあらでありぬべかりける人も
忘れ給ひにたらめどこよひはおぼしいづや
昔だに人まどはし給ひし御ことなりにたるらむ
夏來にけらし
本來直譯
我案
こと人をこそものせらるめりしか
とにかくにのたまひてきこえさすめりしを
自案 避ケテ通ラバ打タレザルベカリシヲ
また人の知らさむことの心にしるく出でられぬべからむをいへ（若菜下）
我案
馬鹿らしきもそのまゝ

る者なるは言はずして明なり。さて他を修飾限定する副詞そのものはなほ廣義の狀態なるより、更に他の副詞を以て之を修飾限定することを得。

夏も已に過ぎたり

風景すこぶる美なり

空いと好く晴れたり

甚明に　頗面白く　遙{むかふに（のモ入ル）名詞／遠方に 名詞}

聊退屈に

又指定助動詞ナリタリは動詞に準ずる者なれば、副詞の之に繫るものあるなり。

某は眞に君子なり（名）（夏は實に愉快なり（形））

今はまだ宵なり（彼は尙幼稚なり（形））

某大將は十年前はわづかに佐官たりき

此の終の二例に於いて今ハ十年前ハは時を表して下の語を修飾限定すれば、尙副詞にして、二つの副詞の一語に並び係れるなり。三つ以上並べるもあり。

思ふに彼の人は二年も三年も必よく忍耐すべし

此の例にては四つの副詞並びて忍耐スベシに係れり。さて思フニは下の事柄全體を修飾する者にて副詞なるが、一語に係るにあらず。副詞はかく數語の結合せる一團に係ること少からず。左例

の如し。

明日も「波必極めて靜ならむ」

昔「義家勿來の關にて名歌を詠みけり」

何とぞ「少々御待下されたく候」

我もせめては「二種の外國語を學ばむ」

二　形態種類

（甲）形　態

副詞は用言に係る者なれば、大體に於いて連用詞なれども、さりとて用言なりとは言ふこと能はず、廣義に於いて體言用言混交せりといふべし。

(1)　體言副詞

たゞ　もはら　もとも　皆　しか　なほ　凡　まづ　極　大抵

一體　さと　きつと　しんと　ばらり　から〱　よろづ　時々　何樣

(2)　用言副詞

好く　惡しく　明に　斷然と　總べて　思ふに　たとへば　泣く〱

（乙）種　類

副詞は體用混交せる詞なること前述の如し之を意義の上より類別するは頗る難事なれども、多少その種類を別ち置く必要あり。今之を程度・狀貌・情意・數量・時・處・原因の七種とす。

(1) 程度

いと面白し	我最秋草を好む
眺望頗佳し	彼の人甚頑なり
此の頃大層忙し	あまり氣樂なるも惡し
元氣いたく衰ふ	餘程恢復せり

いとのきて〔副詞ニカハレリ〕短きものを

天地之神毛甚(ヨクハ)吾念心不レ知哉(萬十三)

御心稍(ヤヽ)寤　稍(ヤヽくニ・シヅカニ)歩　差少(ヤヽスコシ)幸行(記中)

少シイサ、カなどは分量に屬し、極メテヤ、チト大抵などは狀態に屬す。程度のは此の如く積極的の者のみなり。

(2) 狀貌(方法)

狀態・容貌にて、副詞の大部分は之に屬す。

靜に歩む	速く書く
美しく咲く	きつと行くべし

ずん〱進む　どつさり貯ふ
かあ〱啼く　どん〱響く
せめて悲し　いよ〱難し
總べて忘れたり　萬物の中人特に貴し
咲きてかつ散る　げに美しき景色や
ちやうど當てはまる　ほとんど死せんとせり
けだし然らむ　もし雨ふらば中止せむ
近度（キト）(著聞)　しかいふ君が………
……としかいふ（準頭）　……とさういつた(コノシカサウハ準接頭語トモ見ルベシ、（準頭動）しかいふ)
同じくは（コトニハ）　もし雨もぞふる（ふらんや）
たのもしきすぢながらもよそ〱にてならひ給へるは同じうこそうとう覺え給はめ、今より見奉れど淺からぬ志はまさりぬべくなむ(若紫、源氏ノ詞)

(3)　情意　(言動)

此の名目は新しけれど、願望・推量・意識・言動等を含ましめむとて名づけたり。動詞を修飾的に
願はくは花の下にて我死なむ
思ふに然らむ

聞くならく南洋に無人の大島ありといふ

恐らくは此の説當らざらむ

など用ゐたる、又感歎的の

あに其の理あらんや

まさかさうでもあるまい

よもあらじ　　成程さうだ

うたてにほひの袖にとまれる

推量ながらサゾサコソなどは狀態に屬し、「何トゾ」は願望なれど、狀態より出でたり。

(4)　數量

數と分量とを併せたり。數詞は國語にては大體名詞なれど、副詞にも用ゐらるゝ處、一特徴なり。

梨をひとつ（副）買ふ　(ひとつの（名、領格）梨を買ふ)　梨のひとつを（名、處置格）買ふ)

紙を一帖下され　(梨（名）ひとつの（領）代金（主）十錢なり)

約一里行きて休む　草鞋をおよそ十足はけり

よろづめでたし　ふたゝび思ふ

百たび戰ひて百たび勝つ　十かへり讀みたり

多分は了解せり　少し疑はし

いさゝか志を表す　人は皆靜りぬらむ
（ソノ差）一寸長い
なゝます神（山王七社）
なゝ行くをとめ（紀、記）
西を行けば虎狼ひと山さわぐ所あり（俊蔭）

分量・程度・狀態の區別易からず。オヨソワヅカ悉クオノ〳〵ソレ〴〵全ク第一第二ヤウヤク次第ニ（順序更番）などは狀態に屬す。聊多ク少クなども狀態と見られざるにあらず。回數は時にあらざれば今數の中に收めたれど、度々屢稀ニなどは狀態に屬す。およそ此の副詞の意義の分類にはその用法の外に詞の本體の意義を考ふることを忘るべからず。

修（領）　客
むすこ三人をよび集めて（伊勢）
領
三人のむすこ
副
三人むすこ
友達の四五人もほしい
客が二三人も來た
檜一本をかく

わが郷人は五人行けり
酒（の／を）一升も取つてこい

(5) 時

いつ行くべきか　　はじめ我が東京に來るや………
午後十時寢ぬ　　明治二十三年教育の勅語を下し賜へり
時に友人來り訪ふ　　年々歲々人同じからず
某は折々缺席す　　夜もすがら物思ふ

「夜もすがら」は接尾語スガラを有する一語なり。「不日」は接頭語不を有する一語なり。「明治二十三年」「共ノ時」「此ノ頃」「此ノ度」などは、まづ副詞小句(文章論に詳にす)と見るべし。「近頃」「近日」などは熟語なり。「頃は二月半(なり)」「維時明治四十年」などは一文にて副詞句をなし下文を修飾するものにて、頃時は主格名詞、維は代名詞にて時と同格、コノと指示代名詞にいふと同義なり時の副詞は大抵名詞にて、それが小句・句を作して副詞の用をなすもの多し。左の例を見るべし。

「辟聞く時ぞ」秋は悲しき
「五月早苗とる頃」野の景色面白し
「藥書を書く間」待ち給へ
「殘暑の候」益御機嫌能く入らせられ賀し奉り候

スナハチヤガテスグシバシ久シク長々常ニトカク兼ネテアラカジメなど皆狀態副詞なり。イツカツテのみは名詞ならぬ「時」の副詞といふべし。(カツテも過去ヲ搗ツル樣の意はあれど)

今は(時ハ)十時なり

今は其の時にあらず

汝のちくやむべし

今こそあれわれも昔は男山さかゆく

さつき歸つた

(6) 處 (場合)

是も皆名詞より轉ず。コヽ、ニソコニなどは代名詞の副格にて副詞と立つる要なけれど、洋文などに準じては副詞と稱する人も多きなり。但

過を見てこゝに仁を知る

などの場合は漢文直譯ながら副詞と見るべし。

道々書を讀む　　路すがら案じつゞく

處々方々かけ歩きたり

「秋冷の砌」御障もあらせられず候哉

「御出下され候處」生憎不在

東京{に（アリ／オキ）て／で} 學ぶ

ニとテとの間に動詞あれば、是は副詞小句なり。口語にてはデをテニテハ又は接尾語と見て副詞としても可なり。

(7) 原因（前提）

單語にては此の副詞極めて稀なれども、熟語・小句・句に多ければ之を立てたり

何故に文法は學ばざるべからざるか

散歩がてら友人を訪ふ

吹くからに秋の草木のしをるれば

爲に報ぜよ

病氣に（因り）て休む

手に（由り）て水をむすぶ

手{し／も}て取る　　人をして取らしむ

差支有之參上致兼候　　急ぎ候程に

閑暇に候間御出遊被下度候

旅行中につき不參
暴を以て(暴チ)暴に代ふ

第五例以下皆小句・句なり。爲ニは本來副詞なれど一個にては多く用ゐず。故ニも詳しくは副詞なれど、今は接續詞に收む。吹クカラニのカラはテニハの轉用なれど接尾語と見る。およそ時處の副詞は場合によりて此の原由副詞に轉じ通ず。時處間砌などの例にて知るべし。此等を一種の接續詞と立つる人あれど非なり。詳しくは文章論にて知るべし。

三 成立

(甲) 本來

(1) 純國語

いと　只　最　皆　もはら　しか　さ(さう)　かく(かう)　なほ　ゆめ
まづ　もし　けだし　たちまち　ひたすら　聊　およそ　かつて
あたかも 重辭ナラン　ほゞ　遂(に)　しばらく　わづか　いつ
夙に(つとに)　既に　げに　あに　あまた　必(實ハかならず)
(つひ／がら)間違つた
埼玉、千葉

ほの見ても目なれにけりときくからに(後撰)
時鳥なかでまつ夜はあけにけりほのに卯の花白く見え行く(順)

(2) 字音

極(ゴク)　一切　專一　再三　本に　平生　大抵　大概

(3) 聲貌

雨さと降る　きと睨む　どつと笑ふ　すつかり分る　そよと吹く　からり
晴る　ふらり出かける　ちと來給へ　のつと出づ　やをら引き開く　ごんと(一種ノ尾辭)
響く　かちと鳴る　とんと打つ　烏かうとなく　「むつとして」歸れば門の柳かな
廻りに疣のあらりとついたを求めてこい(荒リカ、りハ一種ノ尾辭)(張蛸)
ちとけしき知らせまほしくて(右京大夫集)

寫聲・擬貌の語は感動詞となり名詞となる事あれど、多くは動詞・形容詞を修飾限定する副詞となる。之を形容詞タリ活に比するに、彼は事物の狀態を表すを主とし、此は動作・狀態を更に修飾する處に其の別を見るべし。然れども其の間に相交叉する點あり。

事理判然たり ‖ はつきりして居る
行動飄然たり ‖ ふらりして居る
鳴くこと嘴々たり ‖ 嘴々となく

シテヰルがタリに相當するより見れば、判然の類を副詞とするか、ハッキリの類をシテヰルを語尾として形容詞とするか、いづれかに纏めらるべくも思はるれど、言葉の成立上よりは兩者を別つこと容易なり。

さて聲貌副詞は一音なるあり、二三音なるあり、アンケラカンチンチロリンコロリンシヤンの如きあり、清音濁音・直音拗音・平短音・長音・撥音・促音等種々ありて、百般の聲貌を擬寫す。其の語數きはめて多し。(先年來調査中なれど未功を終へず)此の種の副詞、文章には極めて必要なる者なるに、漢文直譯流を主とせる我が國文界にては舊來意味も分らずげなる漢語を用うることを好みて、純國語を排斥したれば、多くは國語にのみ限らるゝ有樣となれるは慨くべきことなり。それより延いて國語のキトサトチヤウドなどの類をも漢語らしく屹度颯と丁度など書く習をなし、言語の眞義を故意に誤解せしむる樣の現象を呈せり。

(4) 疊語

前三種の副詞皆疊語をなす。中に就いて聲貌語を疊む事最も多し。

いと〳〵　しか〴〵(然々、云々)　皆々　尙々　唯々　極々　漸々
段々　萬々　いよ〳〵　しば〳〵　ほと〳〵　はなはだ　つら〳〵
つや〳〵　かり〳〵　ぐう〳〵　ひい〳〵　ちよい〳〵　どん〳〵
すた〳〵　えち〳〵　ころ〳〵　くす〳〵　どし〳〵　てくり〳〵

はゝ　ごほ〳〵　からん〳〵　げへら〳〵　かくり〳〵　こをろ〳〵

ホヾヤ、ヤウ〳〵の如きは實は疊語なれど、元來のものと見てもあるべし。

しば（なく／たつく）

(乙) 轉成

(1) 形容詞より

(イ) 副詞法　能く　久しく　靜に　判然と　特に　切に　別に

(ロ) 語根　はや行け　伊多(甚、痛)那加婆人知りぬべし(輕太子)　はるか遠き所

いたなかす(記)　いたも（すべなし(萬十三)／すべなみ(萬三)）　みしまに疾來(萬神記、歌)

久居(ヒイサ)タ(方言)

(ハ) 疊語　長々・薄々　緩々　遙々（に／と）　とく〳〵　よく〳〵

此の種の副詞最多し「タトヒ」に通ふ許與のヨシは終止法より轉じたるが、他には思ひ當らず。「ヨシ〳〵構フナ」などいふヨシ〳〵は之を疊める者と見るべし。「メデタシトモメデタシ」などのメデタシトモはメデタクモに通ひ、副詞になりたるものなるべし。

(2) 動詞より

(イ) 連用法(テを添ふ)　すべて　敢へて　却つて　極めて　決して

自此之外爾假令止之天……………深憂止毛可在良牟乎波(貞觀十一年十二月伊勢奉幣祝詞)

(ロ) 前提法　譬へば　思へば　言はゞ

(ハ) 準前提法　案ずるに　顧みるに

(ニ) 連用形　たとひ　あまり　つまり

(ホ) 連用形ヲ略スルモノ　不幸(ニシテ)早世せり

(ヘ) 終止形　かつ　すこぶる(是ハ本來トシテモ可ナリ)　中ん就く　海月なす漂へる國

(ト) 連用形(ニトを添ふ)　みだりに　しきりに　有りと有る　生きとし生けるもの

ひた泣きに泣く　たがひに

(チ) 疊語(連用形及終止形)　しみ〴〵　とり〴〵　行く〳〵　見す〳〵　おづ〳〵

泣く〳〵　にがむ〳〵　しぶ〳〵　しぶる〳〵

加(カ)遍(ヘ)須(ス)々々々(續紀十六詔)　ちり〴〵　いき〳〵　たえ〴〵　かね〴〵

つぎ〳〵　重ね〴〵　おもひ〳〵　かくす(爲々)すぞ(萬十四)

(リ) 助動詞を添ふ　思はず　絶えず　知らずに　浮きぬ沈みぬ　寢たり起きた

り　成るべく　いはむや

青柳の糸に玉ぬく白露のしらず幾世の春かへぬらむ(新古、春上)

(ヌ)接尾語クを添ふ　願はくは　恐らく

此のクはコトモノなどの義あること前に形容詞の章及マクの段に說けるが、此の例にては「願フコトニハ」「恐ルコトニハ」(恐ルの古活四段なるより出でたり)の意にて體言副詞なりき。されば曰ハク思ハク體タラクなど名詞にも多く用う。

「子曰はく」仁者は山を樂む(と云へり)

「予おもへらく」然らず

この姫君の宣ふこと「人々の花や蝶やとめづるこそはかなうあやしけれ云々」とて(堤)

此等は副詞句を成せるなり。クはすべて連體形をア列音に變じて添ふ。見ラクスラク聞カク戀フラクスベカラクなど正例なるが疑ハクといふべきを疑フラクといふは類推の誤なり。「老ユラク」を「老イラク」とも云ふは、上一段にオイルと活きけむ、それより出でたるか、もしは變音にもあるべし。奈良以前には過去助動詞の連體シに直に接せるも多し。

「某天皇の宣ひしく」云々(宣命など)—副詞句

「住吉の名兒の濱邊に馬なめて玉拾ひしく」常忘らえず(萬)—名詞句

アマッサへは動詞にテニハを添へたるなれど、本來としてもよし。

あたかも　當哉

己君の事隱す共やはか（副詞ニナレリ）くるべきかと思惟し（太閤記三）

いふならく奈落の底に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり（高丘親王）

くがねかもたのしけくあらむと……　宇禮之家久いよゝおもひて

たのし／うれし｝からく（ケ／ル）

石山寺ノ法華義疏（長保頃ノ點カ）ニ　詰（ふレルラク）　ナド誤ノ古キモノナラン

まめなれど何ぞはよけく（カルコト）刈るかやのみだれてあれどあしけく（カルコト）もなし（古今十九）（共ニ連用法ニアラズ）

萬十　戀敷（コヒシクハ）者氣長物乎今谷乏牟可哉可相夜谷（戀日者氣長物乎今夜谷令乏應哉可相物乎トイフセアリ）（こひしきことノ義カこひしことカ）

管中謂（イツシク）桓公（群書治要、廿一、後德建長、國書案）

(3)　名詞より

（イ）其のまゝ　今　昔　古　こぞ　ひとつ　いくつ　いくら　いくばく

まこと　つね（本副カ）　例（れい）おとなふ（堤中納言）

（ロ）ニトを添ふ　誠に　實に　先に　後に　幸に　ならびに　業と　事

と　仕合と　世に

(ハ)疊語　日々　樣々　色々　數々　人々　間々(往々)　口々　かたがた

手に手に　ことごと(く)　事々　物々　房々

次の如きは修飾なれども、副詞になりたるにはあらず。

刈菰の亂るゝ心　行く水の歸らぬ旅　あきつ羽ににほへる衣

(4)代名詞より　何　何に　何ぞ　いづくんぞ　いづくにか　玆に　何し

かは　各　それぞれ　どう　いづれ

何シカハのシは動詞ならでテニヲハなり。それつまりてナジカハとなれるか、ナニカハの轉音か

ナゼは空穗物語にもあり。イツは代名詞にあらずして本來の副詞と見たり。イカニイカデも然り。

事とあるときは(桐壺)
事と明くなれば(帚木)

少シモ
何も
更ニ
そんな理由はない

はつ草のなどめづらしき言の葉ぞ(伊勢)

なぜに內侍かんの殿の手の限ひきつくし給へらむ(樓上)

(大宮詞)我もなぜしにかゝる目を見るべき(嵯峨院)

なぜうにか世にまじるべき(同)

(5) 熟語　種類極めて多けれど、今は別たず。　さすがに(しかすがに)　折悪しく　程なく　生憎　やゝもすれば　よくせずば　降りみ降らずみ　泣きみ笑ひみ、さもあらばあれ　大方　大むね　何樣　何故　何とて　さ樣に　どの樣に　長いこと待つた　旨いことやつて見せる　とかく　もつと　彼此　あちこち　理不盡に　行成(イキナリ)　尙更　しかし(ナガラ)(動)　終世　始終　萬古(變ラズ)　前後　上下

サスガニは「然爲ガラニ」もしは「サスガニ」になるべし。トカクのトはもとテニハなれど、トアリト見レバなど副詞の用をなすものなり。モツトはモウとチトの結合なるべく思はるゝが如何あらむ。此の種の副詞は枚擧するに遑あらざれば準へて知るべし。

(丙) 接尾語

副詞を作す接尾語の中に純粋に一詞のみを作るはヅ、ヅカラなどにして、他は熟語・小句・句などをもなす。今最用例多き者若干を擧ぐ。

(1) づゝ　個々の義にもやあらむ。數量(時)の語に接す。

一人づゝ教ふ　毎月三日づゝ講筵を開く

百を十づゝとれば千になる

(2) ながら　ソノマヽ、ソレゴメニより轉じてはツヽ、ナレドモ等の意をなす。體言及連用法に接す。(ク活の語根、シク活の第三變化に)

子三人ながら勅任官たり　さながら忘れたり　我ながら呆る　讀みながら書く

思ひながら御無沙汰いたし候　身はいやしながら(伊勢)

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつゝなほぞ戀しき(伊勢物語)

體言ノ格 我が宿のものなりながら櫻花ちるをばえこそとゞめざりけれ(新古)

サもウキも體言なり。サリナガラ　シカシナガラなどは接續詞に用ゐらる。

「某は常に酒を飲みながら讀書す」などは小何なり。

いくばくならぬ齡ながらかゝる世にこそ侍りけれ(乙女)

いとかくめでたく淸げながらゐる中びこちごしうおはせましかばいかに玉のきずなからまし(玉)

かくおほつかなながらやと(明石)

時鳥來ゐる垣根はちかながら待遠にのみ聲の聞えぬ(後撰、夏)

關越ゆる道とはなしに近ながら年にさはりて春を待つかな(後撰、冬)

みちのくのちかのしほがま近ながらからきは人にあはぬなりけり(續後撰、戀二)

わが戀は海驢の寢ながれさめやらぬ夢なりながら絶えやはてなむ(夫木)

思富之坐之奈可良太政大臣之位爾上賜比治賜久(續紀五十四詔)　(コハ順接ニシテおもほしましてヌハますますにトイフニ同ジ。只ノからトノ關係見ルベシ)

簡單ながら分る　(ながら＼レド(ニテ新シキ用法))

(3)　すがら　サナガラの約れる者といふ。さもあるべし。體言に接す。用例狹し。

夜もすがら物思ふ　(すハつノ轉ニテ領格カ)

路すがら月を見る

白露を草葉におきて秋の夜を聲もすがらに明くる松蟲(師氏集)

淺茅生の小野の草臥露寒み夜はすがらに鹿ぞくなる(草庵集)

此のハモを挿めるは二語と見て、スガラニを獨立詞とも見らるべし。

(4)　がてら　一つの事をするに他にも序にせむとすることあるを表す。體言及連用動詞に接す。

散歩(シ)がてら人を訪問す

「花を見がてら」野べを逍遙す

泣き戀ふる涙に袖のそぼちなばぬきかへがてら夜こそは着め(古)

(5)　から(からに、ものから)　(名詞ヨリ尾ニ、てにはニウツレルニヤ)

發起する所を表すテニハ、ヨリ・カラの原因をも表す者となること、第四章副詞の段に說けり。此のカラは今はユヱと略同意に心得られ、「カラシテ」「カラ起ツテ」「ニヨツテ」「ノ儘」などの義をなし、連用及順逆前提法などの樣に種々に用ゐらる。此等を接尾語とす。國柄人柄など名詞のカラも同樣なるべきか。體言(連體法なるも)につゞく。

さるからさぞ

我から不幸を求む

故鄕は遠くもあらず一重山越我可良爾念曾吾世思(萬六)

蜑のかる藻にすむ蟲の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ(古)

「我が身から」憂き世の中と嘆きつゝ人の爲さへ悲しかるらむ(古)

をしむから悲しきものを白雲の立ちなむ後は何心ちせむ(古、雜)

置くからに千ぐさの色となるものを白露とのみ人のいふらむ(後)

谷の底に匂ふからに其の花いやしからず(賀茂保憲女集)

などかは「女といはむからに」世にある事の公私につけてむげに知らず至らずしもあらむ(帚木)

「院におはしまさむからに」子の悲しさを知しめすべからずばこそあらめ(榮花)

終の三例は逆提的バトテの意なり。さてモノカラとひとつ取り立つることあれど、畢竟前例のカ

ラなり。

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから(古)

之を順提と誤るべからず。「秋ならで逢ふこと難き女郎花天の河原に生ひぬものゆゑ」なども同じ。されど近文にては物故を順態に用ゐて差支なし、又「空蟬の世の人言の繁ければ忘れぬものゝ離(カ)れぬべらなり」などのモノ、をも接尾語と立つることあり。是は實は主格名詞より轉じたるなるが、文章論にて說く丈にて事足るべく思ひて今は取り立てず。モノ故は熟語乃至句と見たり。

がのつなす ｝から（體言ナリ）

萬十八　人の欲(ヨ)可良(カラ)爾(ニ)

萬九　一夜耳(ノミ)宿(ネ)有(タリ)之(シ)柄(カラ)二(ニ)

續後紀、長歌　七日經志加良

わがゆゑにおもひなやせそ秋風のふかむそのつきあはむものゆゑ(萬、十五)

(6)　づから

春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む(古)

身づから　手づから　口づから　おのづから

辛うじて足づから行かずばいますまじ(ウトアリ)かりけむ(逢)

風をだに待ちてぞ花のちりなまし心づからにうつろふが憂さ(後)

豈もあらずおのが身のから人の子の事も盡さじ我もよりなむ(萬、十六)

あひ見ぬも憂きも我が身のから衣思ひ知らずも解くる紐かな(古)
いとゞしく聞くにもぬるゝ袂かなうき身のからや雨のもるらむ(能宣集)

終の三例によりて見るに、ヅカラとノカラと同義にてヅは領格ノに通ひ、カラは前項のなり。ナガラはノカラの轉、スガラも皆同一のカラより出でたるなるべし。

(7)　がね　(がに)

大丈夫は名をし立つべし「後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね」(萬)
「まきもくのあなしの山の山人も人も見るがに」山かづらせよ(古)
(風俗)玉藻ハマ根ナカリソヤ生毛次可仁也
生毛須金也

此等料ニベク樣ニ爲ニなどの意の古語なり。此のガ前のツノと同じく領格のならむとも思はるるまゝ次ぎて擧げたり。

槇の戸はこよひはさゝじ夜よしとてうちはへて訪ふ友もあるがに(コレハ原因ヲ表スカ)

(8)　ごとに　名詞コトの轉なるべし。體言又は連體法に接す。

年毎に　人毎に　「花を見る毎に」故人を思ふ

(9)　ばかり　テニヲハより出でたるなるべし。程位頃などの義をなす。體言及終止用言に接す。のみも之に通ずることあり。

人をみたりばかりおこせ

いかばかり嬉しからむ

死ぬばかり思ふ　　五日ばかりとまれ

さばかり(さのみ・さ程)苦しくはあらず

マデも之に類したる用法あれど、今はさし置きたり。

(10)　がり　　ノ許ニの意、體言に接す。ハをも受くるはやゝ新し。

文は大輔がりやれとの給ふ(浮舟)

人のがり行向ふ

○寛政之著雅俗語字解に「尾張三河兩國の境には六助がり七藏がりといふ」とあり。よりのりは添尾にて、それと同じく、がりはがといふ領格「妹が許に」などの下略、りは添尾か、或はにの轉音「妹が(許)に行けば」などと解すべきか。

(11)　ため　　領格及連體法に接するは體言なればなり。ニツイテ、ユヱニ、料トシテ、ニ關シテニ係リテ、ニトリテなどの意をなす副詞なれど、常に小句をなす故に此に擧ぐ。名詞になるは轉用なり。ユヱも同類なれど獨立詞なれば今擧げず。

「國の爲に」盡す　　「我が爲に」不利なり

「汝の爲には」恩人ならむ

龍の馬も今も得てしが「青丹よし奈良の都に行きて來むため」(萬)

(12) むた　共ニの義にて領格をうく。

「天地のむた」窮なからむ

「風のむた」靡く

共ニもノを受けて小句をつくることあるに似たり。「秋霧の共に立ちいでゝ別れなば晴れぬ思に戀ひや渡らむ」など。

(13) なべに（なべ）　ニ連レテ、ニ合セテなどの意。連體法をうけて小句句を作る。

「我が門に稻おほせ鳥のなくなべに」今朝吹く風に雁は來にけり(古)

「今朝の朝け雁がね寒く聞きしなべ」野べの淺茅ぞ色づきにける(萬)

(14) など　名詞に接するもの、轉用なるべし。「ト云フ樣ニ」など比況の意あり。口語ナンカナンゾともいふ「ナニト」の約なるべし。

車に乘りなどしてあるく

人に向ひてなど然樣なる事をいふべからず

とかく局どもなどのあたりに侍ひて(枕)

京になど迎へ給ひ(蜻蛉)

うるはしき貝石など多かり(土佐)

若菜こに入れてきじなど花につけたり(土佐)

庭などもいと蓬茂りなどこそせねども(枕)

(15) まゝ　(まに、まにま、まに〱)

マは間などの義なるべくや。體言なれば連體語を受けて熟語・小句・句を作る。任セテ隨ヒテ次第通ニなどの意なり。

氣儘にす　我がまゝに働く　思ふまゝに遊ぶ　天へ行かば汝がまに〱(萬)

足引の山のまに〱隱れなむ憂き世の中はあるかひもなし(古)

「ひとりねのわびしきまゝに」起き居つゝ月をあはれといみぞかねつる(後撰)

時わかず月か雪かと見るまでに垣根のまゝに咲ける卯の花(後)

紅葉のにしき神のまに〱

大君の御言のまにまますらをの心をもちて(萬)

梓弓ひかばまに〱(獨立詞) よらめども後の心を知りがてぬかも(萬二)

此の外に名詞の轉じて副詞の用をなすもの頗る多し。左に數例を擧げて概略を悟らしむ。

「忘れざるやう」心懸くべし

「思ふさま」運動したり

「行くさ來さ」富士を見る

「起き上りさまに」敵を蹴たり
「すはと言ひさま」走り出づ
「原稿どほり」印刷すべし
「教へられたる通」覺ゆるのみ能にあらず
「雪程」白きものなし
「思ふほどは」言はれぬものなり
「あの人位」勉強せむ
「親しき友と語る位」樂しきはなし
「來年あたり」洋行せむと思ふ
「思の外」宜し
金は「十圓しか」無い
「言つた處が」聽くまい
「學校に來るなり」罰を受けた
「出來次第」御屆申すべし
「小兵と言ふ條」手はきゝたり
「怖いんですもの」行かれませんよ

鹿じものいはひふし(萬二)
行きしな　　好しなに
行きなり　　行き切り
これきり(ヨリ外ニ)ない

「あふさきるさ」などのサはサマの義なりといふ說然るべきか。口語のシカはホカの轉、文語には「ノ外」「ヨリ外ニ」「ナラデ」などいふ。

はし立の倉橋山を佐賀斯美登いはかきかねてわが手とらすも(記下)
をさとなる花たちばなをひきよぢてをらむとすれどうらわかみこそ
あられふるきしみが嶽をさかしみと草とり可奈和いもが手をとる(萬三)

「瀨ヲ速ミ」「苦ヲ粗ミ」「里遠ミ」などのミを副詞の接尾語と見ること、全體を副詞小句とするは難なけれど、ミに副詞の語氣ありとは覺えず。是は形容詞より動詞に轉ずる苦シム悲シム弱ム輕ムなど四段活用の不完全なる者にて、他動詞の語氣ある樣に思はる。さて「瀨ヲ速シトシテ」「里ヲ遠シト思ヒナシテ人汲マズ」などと釋したきなり。之を「苦ガ粗サ」と見ても事は誤らざれど語氣を得ざる樣なり。かるが故に今は此のミを擧げず(朝雄云、コノ項訂正ノ意アリシニヤ「瀨ヲ速ミ」ノ上ニ◎ヲ附シ例ヲ集メラレタリ今コヽニ載セテ學者ノ資トス)

心地あしみして物もものし給はで(土佐)
梓弓ま弓つき弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ(伊勢物語)御杖(脚結抄、二)曰クさに

ト譯セレド、實ハがりと聞クベキことばナリ。

燈巻七　「水を淺み」のみもじはもとむの通ひたるにてむはがるといふ心なり。あはれむ悲む
などのむ是なり。されば上にをををおきて照應せさするなり「舟ガ水ヲ淺ガリテといふほどの
心なり。この心を得て亡父脚結抄に水が淺さに」と譯せり

はねかづら今する妹之(ガ)浦若見ゑみゝいかりみつけし紐とく(萬、十一)(コノうらわかみハ自動
詞ニテコ、トハ別ナルヤウナリ)

吉の川逝瀬(ユクセ)之早見(ハヤミ)須臾もたゆることなくありこせぬかも(萬、二)(コレモ四段ニテ自動詞ナル
ベシ)

うらわかみねよげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ(伊勢物語)

山高み出づる日影を待ちとりて四方ににほへる朝霞かな(眞淵)

澤の鶴は命を長み濱に出でよろこびまひて(興福寺長歌)(續後紀)

やまず行かば人目を多みまねく行かば人應知見(シリスベミ)(萬、二)

爲便乎無見

泊湍川速見速湍乎結び上げてあかずや妹ととひし君はも(萬、十一)

……緣由袁……辱美底在乎(止トアルベキカ)(篤胤神拜詞)

秋されば故非之美伊母をゆめにだに久しく見んをあけにけるかも(萬、十五)

ぬば玉の夜半を寒みや急ぐらむ伏見の里に衣うつなり(速水行道明治初年宮内省ニ仕ヘシ人)

四　諸用法

(1)　位置

副詞はその係る詞の直上にあるを原則とす。されど他の詞を隔つることも多く、一定の位置を定めがたし。是一つは漢文直譯の語氣を用うるにより、一つは修辭上より文の成分たる語の位置の顚倒せらるゝに因る。此の爲に文義の精確を損すること多けれども、文法上は之に檢束を加ふること能はざるなり。

三人その子はあり

つく〴〵と過ぎ來しあとを思ひいづれば

をかしくもはたあらざりき

君も行きしか昨日

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから(古)

我は敢へて自說を主張するを咎めず

改革を頻に唱へて止まず

嚴に猥に出入するを禁ず

授末都扆弁等中佐方必不敢伊奈等宣多方弁(續紀三十六詔)

必しも然らず

必然らず

徒に之を祟拜せず

徒に之を祟拜するのみならず

漢文の必不不必甚不不甚など國語にては位置にて之を區別すること能はず、僅にテニハなどにて別つ樣にすれど、それも精確なるにあらず。この位置の事は文章論にて明瞭なるべし。

第八の例に於いて猥ニは禁ズに係るか、出入スルに係るか、形式を以ては判斷しがたし。又之を

猥に出入を禁ず

とする時は、必禁ズに係るとも斷言しがたし。さるは出入は名詞にて副詞とは關すること無き例なれば、しか定むるも無理ならず、大體に於いて左樣に定めたきなれど、動詞の語尾を省略して直に名詞とすること

北の妻戸を入御の時(公事根源)

將門を追討の賞にて秀鄕正四位に叙し(正統記)

俊寛鬼界が島へ流されの事

なにはの芦を御賞翫こそ返す〴〵も詫しけれ(芦狩)

元日や家にゆづりの太刀はかん(去來)

など隨分あることなれば、出入も出入スルの略として通らざるにあらず。又

大船を漕ぎのすゝみに

われらをおもひがほなり

家に急ぎの牛追ふ子

なども修辭上有るべきことなるより、一つの詞が上に對しては用言、下に對しては體言となる場合を認めざるべからず。かた〴〵前例及

深く御心配(ナサルヽ)は御無用に候

是非御奮發(アランコト)祈り上げ候

折角御自愛(ナサレムコトヲ)是祈り候

なども深く咎むべからざるべし(但是は慣用例の多き者を許容する精神にて、奬勵する精神にて奬勵するにはあらず)

反語の副詞の轉用

いかで{見む
見たし}

何様して｛あるものか
　　　　　ありませんか

やかるゝはいかばかりたへがたけれども力なきことなり(徒然、六九)

まさかモ

何國までかその難を遁れがたし(西鶴、おさん茂右衛門)（疑ノベキモノ）

一として若衆の如く仕立てける(一代女)（否定スベキモノ）

(2)　連體語に轉ず

副詞はノナルをそへて連體語となる。そのノを添ふるものはその上に相當の語を含むなるべし。

平生の用意　不斷の着物　再三の御使　近くの親類　わざとの無禮　わざとの聲立てぬ念佛(夕顏)　すべての人　しか〴〵の事　段々のお話　尚更なる事

あまりなる仰　尤なる道理　雨降らん事必定なり　世の中の事何も心の儘なり

宗との郎黨　宗とのもの共(保元)　逢ひ見ての後の心　軍人としての山縣公

すなはちのやうにやはある(發心集)

世と共の御物思

おほよそのなびくを花(蜻蛉日記)

うたての仰候や(高砂)

不定の事かな(宇拾)
あやしき不用の人なり(手習)
例の不斷の御念佛(薄雲)
ふたうの奴(盛衰記)
隨分の勇士ども(保元)
いまはむげの親ざまにてもなし(薄雲)
さの如き非常の事の候はむをばいかでか承らぬやうは侍らむ(浮舟)
幽草歩々の花を發き密樹に聲々の鳥叫ぶ(紅葉)
ホツトいふ息をつく
十年の書を讀む
○夜爪をきる
○日髪をゆふ
必の后なり
とみの事
這ふ〳〵の體
つひの賴所(帚木)

可なりの幅をきかせる
かりそめのかくれ家(夕顔)
やんごとなきまづの人々おはす(若菜)
まほの細しき日記にはあらず
山里の稀の細道あとたえて眞拆の蔓くる人もなし(堀川大行)
如此之狀乎、加久之狀(續紀一)

(3) 名詞に轉ず

我よくその平生を知る
もつと近くを見よ
すべてが奇麗に整へり
聲低くて皆に通らず
何時にも變らず談笑せり

此の用例はあまり多からず。

(4) 連體語をうく

さやうのなみ〳〵にはおぼされず(總角)
時鳥なきしすなはち君が家に(萬八)

御門まひはつるすなはち二所ながらめしあげてかはらけとらせて(空穗)
死出の山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて(古)
友のまにく　我もよりなむ
かやうのかいなでにだにあらましかば(夕顔)
のから、つから、ながら、

(5)　補足的

帽子を輕く〔打つ(イ)／造る(ロ)〕

此の例に於いて(イ)は打方の輕きにして、輕くは副詞なれど、(ロ)は造方にあらで帽子其の物の輕きなれば、輕クは帽子の形容なりといふ說あり。考へたりと謂ふべし。

心を廣くす　固く本をとづ　病よくなる　夜長くなる　玉詠立派に拜見　有り難く思ふ　人を惡く言ふ　惡し樣に言ふ

など皆同例なり。多くの副詞は修飾的なるに、此は下詞の意義を補足するにて「廣キニ」「ヨキニ」「御立派ナリト」「有リガタシト」と樣に、名詞に言ひ換ふることを得るより言へば、意義の上より形容詞なりと斷ずるを得べけむも、尙少しいかゞなり。「何ニスル」「何トナル」の何は代名詞なるが、それを今少し和げて「イカニスル」「イカ樣ニナル」といへば、イカニイカ樣は副詞なり。

「御出下されむこと」を願ふ　ハ名詞
「御出下され候樣」願ふ　ハ副詞小句
「御出下さるべし」と思ふ　ハ挿入文ノ名詞

「御出下さ ⎧れようと」⎫ 　ハ一團ノ名詞
　　　　　 ⎨れ相に」 ⎬思ふ　ハ副詞小句
　　　　　 ⎩るべく」 ⎭ 　ハ副詞小句

と見るは言語の上より當然なるべく思はる。されば前の輕クなども必しも形容詞と言ひて區別するに及ばず、かく補足的なるも一種の修飾限定なりと心得べきなり。七種の副詞は、考樣に因りて皆名詞に係ると見らるゝ事あるにて、獨輕クなどのみ然るにあらず。

「輕く打つ」は打つこと輕く
「輕く造る」は造れるもの輕く
「うまく食ふ」は食ふ事の感、食ふもの旨く
「うまく當る」は當る事旨く
「長くなる」は成ること(もの)長く
「長く延す」は延すこと、延さるゝもの長きなどなり。
その德を二三にす

友を良くせんには己を良くせざるべからず

其老嫗所住屋者近ニ作クリテ宮邊ニ（記下）

大橋の頭ツメに家あらば心悲久マガナシク獨行く兒に宿借さマシ（尾）

連體形が誤用せらるゝ事あり。

ひどいあつい

何とその恐るべき

何かそのわきて願はむ

名詞と熟す

おぼろ月（副）　すゞろごと　あだご　すくよか心（夕霧）

特性副詞の呼應（形根）

あに　もし　たとひ（順ニモ逆ニモ）

第十章　接續詞

接續詞は語・句・文を接續する者にして、同類を並ぶるあり、添加するあり、改說するあり、順說するあり、逆說するあり。而して副詞と同じく語形一定せず、皆他詞より轉ずる中に、副詞より來る者最多

く、或る意味に於いて殆すべて副詞の用をも兼ぬ。之を副詞的接續詞とも謂ふべし。

山又山をこえて行く

金銀銅及白銅は貨幣に用う

金閣并に銀閣は足利氏の建てたるなり

向島さては上野の花も已に過ぎたり

北方の強か南方の強か抑汝の強か

雨ふりはた風ふく

日本の富豪卽岩崎三井の如きもの云々

海濱或は(もしくは)山中に行かむ

榮花物語に「ならびに」といふ接續詞あり。

此等は單語を繫ぎたれど、句·文をつなぐこともあり。句·文のみなるは

差支にて缺席す但(尤)都合よくば出席すべし

差支もあり旁失禮すべし

水害にかゝり將又病人ありて難儀せり

昨日甲氏來り尋いで乙氏も會せり

彼は病めり故に(されば、就いて、依つて、隨つて、さてこそ)元氣なきなり

我は貧なりされど(しかし、而も、さりとて)糊口に支へず
酒を飲みかつ(しかのみならず、併せて、然して)餅を食ふ
之を左例の副詞なるに比較して、接續詞の職掌を心得べし。
雨また降り來れり　遊び旁人を訪ふ
災害ならびに起る　乙氏も尋いで來る
さては惡しかりぬべし　隨つて錄す
抑(一體)源氏の祖先は云々　就いて學ぶ
我はた知らぬにもあらず　併せて食ふ
特に英語を重んず　木の葉かつ散る
酒をのめばすなはちゑふ　尤理にかなへり
其も或は然らん　それはさて置くべし

ソモソモ〳〵は其モの義にて上語を承くるもの、下の全文に係る副詞と見るを本體とす。その時發語の如き態あるより、同じ趣の「夫」をも一種の副詞と思ふことあれど非なり。ソレは代名詞同格なるソレノソ.レナルの義にて、下の名詞にかゝりては指示代名詞ソノの用をなすものなり。されば又カノといひても通ずるなり。スナハチはソノ時ヤガテ取リモ直サズソノ儘などの義の副詞なり。接續詞なるもその義現然たり。漢字漢文によりて「十寸卽一尺」を副詞とし「思則得」を接續詞と

やうに見るはわろし共に副詞なり「さても二人の兄弟は云々」のサテモは前文を承けて後文を起すものにて接續詞と見るべし。

副詞と接續詞との關係此の如く密接なれば好く其の職掌を見て之を判別すべし前章第二項に言へる「御出下され候處」「閑暇に候間」などの處間の類は皆境遇を表す者にして接續の職をなす者にあらず。

御用有之候條明日出頭可致候

の條は「御用有之候」と「明日出頭可致候」との二つを接續するものと見ては文章通ぜず。是非とも「明日出頭云々」を主要の叙述の語句とし、其の修飾として「御用有之候條」といふ原由副詞句を置きたる者と解せざるべからず。此の點英語などゝは趣を異にするを注意すべし。されど口語にて

昨日君を尋ねたところが留守だつたので

など言ふ時はトコロガは接續的となるなり。此の如き姿にては助動詞テニヲハなどの附屬辭さへ一個獨立の接續詞と變ずること「ト見ル」「テモ美シイ」などのトテモなどのテニヲハの副詞に變ずるが如し。

それもさうだが(が、なれども)又事情もある

第十一章　感動詞

一　釋義

感動詞は感動の意を表す詞にして、主に感動の聲より成る。

あ射たり
あゝ悲しきかな
あら笑止
あな面白のけしきやな
あれはめでたき月よな
あはや舟くつがへらむとす
おいやさる事ありや
やおのれは何するぞ
やあ無禮ものすさりをれ
やよや待て山時鳥言傳てむ

やをれえみしのくなたふれしや頸うちぬきくれむ
やはか汝に負くべきか
いで御消息聞えむ
いざ見に行かむ
すは敵寄せ來たり
やら奇特や(貰婿)
やら大儀や(末廣)
わとの原が有樣天晴徒だなき有樣とぞ笑侍りき(いそほ中、第廿八)惡シク拙キ方ニモ「アッパレ」トイフナリ)
大荒波のあはれ名殘か
やれ〳〵それはめでたい事ぢや(素襖落)
さあ〳〵ござれ〳〵(連歌毘沙門)
おう是は映え合うてよかろ(ゐほし折)
やい〳〵此土器を下さるゝ(三人夫)
これそこな奴樣こゝへござんせ雇ひましよ
奴「ない〳〵〳〵」(ないハなの音便にて詞なり)(反魂香)

あい〳〵と愛想らしき聲……(反魂香ノ奥ニ)

應答・嘲笑・作容・命令・親愛の聲のウヲ、エハアハイウンヘンオホンエヘンシドウヨネなども感動詞なり。されど感動の意を表せばとて、獨立詞ならぬは感動詞にあらず。カナヤナカヤヨネナなどはテニヲハなること、早く詞辭分類の處に言へるを忘るべからず。さて感動詞は多く文の頭に置かるれど、他の詞に對しては別に關係なく全く獨立的間投詞に用ゐらるゝなり。

感動詞は歡喜・嘆息・驚愕・恐怖・疑訝・呼掛・注意・警戒(ソレ)・制止(コラ)・發語(えい、あの)・感服(ヘイ、フーン、ナルホド)・應答などに分たる。

感動詞も類化作用によりて判斷叙述をする如く聞かるゝことあり。

二　他詞との關係

(1)　名詞と　感動詞の中「アハレ」は名詞にもなりて「ものゝあはれを知る」など用ゐらるれども、此は稀有の例にして、名詞より感動詞に轉ずるは多し。

南無三寶我を助け給へ　(イ)

南無三寶だめだ　(ロ)

畜生何をする　(イ)

畜生しまつた　(ロ)

弓矢八幡照覧あれ　(イ)

弓矢八幡虚言は言はぬ　(ロ)

(イ)の例にては呼格名詞なるが、(ロ)となりては其の義を失ひて單に感動詞となれり。「(イ)にても南無は感動詞なり」クソを憤慨罵詈の情を表すのみに用うるも亦然り。

(2)　代名詞と　呼格なるより轉じて感動詞となるもの多し。前例のスハのスも其の義なり。

くは珍し　　あれ〳〵破つた

それ見よ破れたるは　　どれ立たう

そゝ來にたなり(今昔)　　なあに構はん

あはや　　これは〳〵　　それは〳〵

クハは此ハ、案内に答ふるドウレはドレの音便、コラソラはコレソレの轉、アラもアレの轉なるべし。ナァニは何にて副詞になりたるが、更に感動詞に移れるものと見るべし。

(3)　物の聲　は多く副詞に用ゐらるゝ由前に言へり。それを感動の聲と混ずべからず。すべて物の聲は又名詞にも用ゐらるゝが、「感動の聲」も「物の聲」の中なれば、感動の外に名詞にも副詞にも用ゐらる。

あといふ聲(名詞)　　あと嘆く(副詞)

やと呼びかけて(副)　　烏はかあ〳〵と言ひて啼く(名)

何せむとたがひは居らむ　いなもうも友のなみ〳〵我は依りなむ(萬)(名)

イナは副詞と思ふ人あれど然らず。人の感動の聲にて、イエイヤなどゝ同じく感動詞なるが、前例又は「いなと答ふ」などいへば名詞になるなり。

拍子・調子や力を入るゝ聲は皆人の聲にて感動詞なり。エイヤエンヤラウントコサコラサヤレドツコイなど。

眞金ふく吉備の中山帶にせるなよやらいしなやさいしなや帶にせるはれ帶にせる細谷川の音のさやけさやらいしなや音のさや音のさやけさ(風俗歌)

衣更せむやさきんだちや我が衣は野原篠原萩の花摺やさきんだちや(同上)

大鳥の羽にやれな霜ふりやれな誰かさいふ(同上)

此のキンダチヤなどは拍子の如くなれど、なほ呼格名詞の義を有すれば、感動詞にあらず。右傍に線を引きたるは全く調子なり。調子には更に長く十音以上なるものあり。

(4)　副詞と　　の關係の親密なることは前にも少し言へるにて知るべし。「忘るなゆめ」のユメは一般について副詞に擧げ置きたれど、その根本は感動詞より出でたるなるべく思はる。今の呼掛に言ふモシ〳〵は副詞の轉じたるなるべく、「いかに與一」のイカニにも副詞より、

なんとあなた私の願を聞いては下さるまいか

まあ立派だこと

それが私のまあ書いたのですか

のナントマアも副詞の何トマヅより來れり。

(5) 形容詞と 「私はそんなことはいや」などいへばイヤはその儘形容詞なるが、かゝる例は多からず。

うらめしや我をばたばかりけり

あなかまなりやめよ

あなかしこ忘れ給ふな

など或る場合には常套の感動語なるやうなれど、なほ事物の性狀を表す意あらはなれば形容詞なるにて、その主たるべき事物は略せられたるなり。あやにくの如く副詞的の所もあり。

(6) 接續詞と 發語やうなる接續詞より感動詞に轉ず。

さて何としよう

さて〳〵ととひ聞えさせ給ひて(榮花、若枝)

さても〳〵困つたことだ

てもまあ美しい花だ

はて解せんぞ

はてな何だらう

此等の外にテニヲハより轉じて獨立詞となり、副詞的感動詞となれるものあり。

然らばやは鬢たゞらとは可歎き(今昔、廿四)

このヤハにカを添へたるがヤハカなり。俗謠の囃の調子にテヤ〳〵といふは

オゝてやあの此の縞でや(假名手本忠臣藏、一文字屋の詞)

のてやを重ねたるにて、もとトヨの意のトヤの轉聲なるべし。

第十二章　てにをは

テニヲハは詞に添ひて他の詞との關係を表し、或は多少の意義を添ふ。而して多くは感嘆の聲より出づ。疑問ヤカの感嘆より轉じたる、ガノニヲの關係を表すが如し。ヨリカラマデノミバカリダニサヘスラは稍それらと趣を異にして、意義を添ふる方主なるが如く、接尾語或は後置詞などいふものに近けれど、獨立詞にもあらず、又獨立詞を形成する者にもあらざれば、倘從來の說に據りて此に收めたり。固より種々の轉用はおのづから之なきにあらず。

テニヲハの分類は總說に於いて、名詞(體言)に附く者、動詞に附く者、諸詞に附く者と三類に分てり。然れども各類互に通ずる者は其の本體極めてあきらめ難し。さて三類の別の外に、

格を表す者　が・の・つ・に・を・で・へ・と・より・から・まで

法を表す者　ば・ども・ど・とも・と・て・つゝ・し

義を添ふる者　のみ・ばかり・だに・さへ・すら

感嘆を表す者　は・も・ぞ・し・なむ・こそ・や・か・よ・な・かな(かも)
ね・が・かし・さ・を・い・ゑ・やし

結合せる者

など別つこともあり得べし今は前者に由りて逐次説明すべし。

(附記)「ことばのその」をことの九種。

位	力ぞなむ	つなぎ
ねがひ	おほせ	せいしとどむる
うたがひ	うらうへ	のばへ

- 助詞
  - 特定關係
    - 句成分ニ關スルモノ
      - 格助詞
      - 副助詞
    - 句ソノモノニ
      - 接續助詞
      - 述スル助詞
        - 係助詞
        - 終助詞(が、か、かし)
  - 特定關係ヲ離レタルモノ……間投助詞(よし、や、を、な)

第一節　單用辭

第一　名詞(代名詞又は之に準ずる者)に附くもの。

一　が

此の發音今は鼻音を帶ぶる地方多し。それ必しも後世の訛にはあらざるべし。輕くさえたる詠嘆ありて、詞の間にありて接續の用をなし、或は意義を含むる用をなす。

(1)　主格

青山に日が隱らば(記)　　鳥が鳴くあづま

下とよみなるがより來ば(武烈紀)　　亡きが多し

亡き人もあるがつらし　　人をば恨みざらむがよきなり

呉竹の夜ごとに物が思はれて(平家)

なでふかゝる見ぐるしき人(己ヲイフ)がさることはおもひかくる(落窪)

あしがちる難波の美津に(萬二十)　　我が立たせれば(記)

たづがなくあしべも見えず(萬二十)

菩提といふ寺に結緣八講せしが(をカ)聞きにまうでたるに(枕二)

(玉)かくいとへだてなく見奉り(源ヲ)なれ給へどなほ思ふにへだたり多くあやしきがうつゝの心ち(枕二ノト似タリ。「戀なり」ナドノ形容詞ニ通フ叙述ト見レバ上ハ主格ニテ事ナシ)

もし給はねばまほならずもてなし給へるもいとをかし(初音)

當世の貴族の專有にかゝる文學が即藤原氏の文學なること言をまたず(藤岡氏)

(2) 領格

我が國　賤が庵　妹がかど　さだが衣(今昔)　十雨がもの　氣にかけるがもの
はない　三が一　みつがひとつ　(四か一、五か一のかはがの變音、よつひとつは成
語なり)

連體形なる名詞にはがのみを添ふる例なり。副詞句・副詞小句などを作るものに例多し。

あるが中に　重きが上に　見るが故に　知られじが爲に　聖のおはしけるが
限聖に使はれて(宇治拾)　萬が中に　四年ばかりがこのかみにおはすれば(紅葉賀)

(3) 同格

佐渡が島　鶴が岡　誰が風流士ぞ

(4) 用言第四變化に附きて逆態前提法に準ず。是は平安朝の終、鎌倉時代より有り、主格より轉じ來れるにて軍記以下に多し。

その時はわびしう堪へがたく覺え候ひしがおくれ參らせて後はなどさ覺え候ひけんと悔しう候ふなり(宇治拾)
簾の内に矢をつまよる音のするが(體。半主。半用)その矢の來て身にたつ心ちして(同)
(夕の)ありしながらうちふしたりつるさまうちかはし給へりしが(ナキ本モアラン)(半、主 半、逆提)わがくれなるの

御ぞのきられたりつるなどいかなりけむ契にかと道すがらおぼさる(夕顔)

或は持たせて中止法に準ず。(前の事を言ひ終へて後の事に續く)

八百屋ですが御用はございませんか

私は大山と申す者にて候ふが先生に御面會仕りたく候ふ

口語にて想像辭の下に附くは假定前提法トモの義をなす。

雨がふらうが風が吹かうが構はぬ

口語にて或は下文を略しがにて文を結ぶ。此に反問的なると警告詠嘆的なるとあり。

おゝてやあの此の縞でや何と確な證據であらうがの

どうも返事があるまいがの(假名手本忠臣藏)

まあ好いが　　奇麗だらうが

人が來たが　　さうはいふまいがの(狂言、宗論)

もひとつ喫ませう過ぎすげうがな(拔殼)

あいつの困る事がありさうなものぢやが(柿山伏)

(5)　(口語)　主格より轉じて副格の如く成り、又は副詞的の用をなす。

甲「當前だ　乙「なに當前な事が(デ)あるもんか

見た所が(ニ、デ)だめだ

後から來る車に叱咤されて已むを得ず道の中央によけたのが思ひがけもなく杳公と相面して立つた

がだが所がは副詞の上略にて接續詞となれり「何がさて當世紳士の事とて」などの何がは副詞の感動的のものなり。人の「無風流よ」などいへるを嘲りて「無風流が聞いて呆れる」などいふは擬人法にやとかに通ひて聞ゆるが、或は複雜なる省略にてもあるべし「茶が飲みたい」などは處置格の如くも見ゆれど然らず、なほ主格なり「言ふ丈野暮だ」を「言ふ丈が野暮だ」といふは副詞が主格名詞に轉じたる形なるが、意義よりすれば、副詞小句といひてもあるべし「安ければ安い程がよい」なども同樣なり。「雪は山ばかりが降つて里はまだだ」などいふも主格と見られぬにはあらねど、副格の變と見る方簡便なるべし「身ヅカラ」といふ語は本副詞なるが、名詞にも代名詞にも轉じ、さては又接尾語樣にも「吾々身づからの」など用ゐらる。それと同じく「そんな事は吾々自身からが知らない」といふは主格名詞にも副詞にも取らる。「さう言つたからが物にはならん」などいふは副詞と見ざるべからず。

二の　柔なる咏嘆にて、接續の用をなす。

我が國のみが（ナホ主格トイフベキカ）米が成るにあらず

(1) 領格

君の家　庭の櫻　春の心　夏の夕　都のつと(伊勢)　本居翁の説　家事の心

配　高御座安麻能日繼登……（萬十八）

一本アリ。ナクテハ通セズ

きのふのおなじところなり（土佐、廿四日）（創見「同じ昨日の處なり」ト見ルベシトアレドソレニハ及バズ）

たゞ昨日の同じさまに中々こと少なに仰せらるる御かへり（大鏡、小一條院ノ段）

「我や行かむのいざよひ」「忘れじの行く末」「上げられ候への由仰せ出さる」（御湯殿上日記）「一目見えもし奉り見もし進せばやの志ばかりの事なり」（盛衰）「あひ見ての後」などは終止語その他を名詞と見たるなり。

今こむのちぎりはたえて中々にたのめぬ月ぞ夜かれざりける（三宮）

日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀眞國（神武紀）（共ニのナシ）

なるに代るの

特別の詮議

大きなる利を得むが爲に少しきの利をうけず（徒然）（なるニ代レルカ）

賢人乃能臣手得弖之（廿四詔）（解云賢く能き人なる臣といふこと）

賢臣ノ能人（四十八詔）

安幣能足幣（祝詞）　生日の足日（同上）

八束穗のいかしほ（同上）

丹管乃將薰時能櫻花將開時爾(萬六)
花の(コトキ)都(コレハのノ下ニ省略アリ)
風ふけば峰に分るゝ白雪の(ゴトク)たえてつれなき君が心か
秋霧の(ゴトク)共に
うづらなす(ゴトク)いはひもとほり

(2) 同格
富士の山　武藏の國　誰しの人　何ぞの者

(3) 並立格(口語)　領格の下略にて、通例合成副詞を作る。
彼の(コト)此の(コト)と世話す
四の五の言ふ
茶の(馳走)菓子の(馳走)色々あつた
死ぬの生きるの大騒をやる

(4) 體言に代る。　領格の下に體言を略して。
君の(服)は絹なり我の服は木綿なり
みづからのをも奉らしめ給ひてなむ(古今序)
梅の花ちりかゝれともおもふ哉雪の中のをとると見るべく(伊勢集)

昔のも今のも雪はれぬらむちぎりし宿にありと見つれば(空穗)
さがなさはたがを習ひたるにか(落窪、少將文)
などいふをがを添へたる領格の下には更にのを添へて、
誰がのなるらむ
人妻と我がのとふたつ思ふには馴れ來し袖はあはれまされり(好忠集)
などいふことあり。此等より轉じて、用言の連體法の下にあるべき體言の代にのを用うること、口語一般の例なり。文語にては連體法そのまゝを體言として別にのを添ふることなし此ののは場合によりて事者考積譯實情狀態所など種々に變るなり。
言ふの(コト)は易い
私は漢學をやるの(考)だ
君は何時歸るの(都合)か
彼は貧乏なの(實情)
御宅は隨分遠いん(所、實際)ですな
雨が降るの(實情)か知らん
雨にとくなりぬるものを牧鹿山霧のふるのとおもひけるかな(景樹)
夏の夜の月の影なる桐の葉をおちたるのかとおもひけるかな(同)

洋服で坐るなあ困るなあ

「のは」はなあと約り、方言にてはののみをもなといふことあり。

「ほしくないの？」とて膳をとりぬ(醒醉笑、八)

(5)　主格　がといふよりは少し沈みたる心地す。而して用言の下には體言ある例なること格の段にいへり。されば其の體言なきも、省略にて、連體法にて用言を結ぶこと多し。終止法にて結びたるは「の」を輕く見たるなり。

秋風の吹く(コトヨ)　來る人のなき(コトヨ)

入りにし人のおとづれもせぬ(カナ)

音のさやけき

主格名詞を同格的に重ぬる時に、ナガラニテナルガ等の意に通ひて一種の接辭の如くなる。

長一丈許なる木の周一尺許なるが立てり

爲朝は六尺ばかりなる男の目かどふたつ切れたるが云々(保元)

いとむげにちごならぬ齡(新釋ながらを略したるなりトイヘルハ非ナリ)の(ニテ、ナガラ)まだはか〴〵しう人のおもむけをも知り給はず(若紫)

大臣の後にて出立もすべかりける人の(ナルガ)世の癖ものにてまじらひもせず近衛の中將をすてゝ(若紫)

九郎はせいの小き男の色の白かんなるがむかばの少しさしいでゝ特にしるかんなるぞ(平家、十一)

此の如き主格一轉して副詞句をつくる。

うつせみの世の人事の繁ければ忘れぬものゝかれぬべらなり(古)

たのまぬものゝこひつゝぞふる

……とはいふものゝお前ではなし

……と仰せらるゝに同じものゝ中心(ナカラ)にはあたるものか(大鏡道長)

……初の(シイ)おなじやうに的のわるゝばかりにいさせ給ひつ(同)

などとなれば、ものゝは副詞を作る接尾語とも言はる「親と同じ心」といふを「親の同じ心」ともいふも領格にはあらで、親のといふ主格の下にある(思ふ)などを略せる語法なるべし。

笑止の候ふ(辨内侍日記)(笑止や候ふ?)

二五の十　内おとりの外めでた(大鏡)

金が一匁五圓の作代が一圓、合せて六圓

「二四が八」の二四が等は主格とも謂ふべけれど、二五のは難物なり。「二五の相乘は十なり」といふ如き文の約にや。又「二五より起る十」といふ如き意味にて、なほ領格にや。又は原因と結果とをのにて單に接續せるのみの一種の言方にや。前四例ののを總べてニテに代ふるに意義の通ずるを見れ

ば、尙主格の變にや副詞をのにて接續する「ドドンのドン」「エンヤラヤのエンヤラヤ」「サのサ」の類にや。研究を要す。（領格ナラン）「縱一寸の横八分の箱」といふを一寸にといひても固より。聞ゆれど、語は異なり。「七つに八つの十五です」の類他に多し。

方言にては主格ののもなとなりて、がと同じ用をなす。「品なわるい」「論なない」「詮なない」などどにも多し。

(6) 處置格の一種　撥音の名詞につきたるをののと變じたるは鎌倉の末よりありて、謠曲な

鳳輦のさしよせ　先陣の仕うまつる　院宣のたまはる　三十餘年の經て（以上保暦間記）

意見の聞くまいといふことでおぢやろ（こんくわい）

然るに後には撥音の下にならぬにも用うることあり。

この肩の尋ぬべき故ありて見ゆるを

なべての馬のわたすべきにあらず

二人の者大納言の左右の耳に口をあてゝいか様にも御聲の出づべく候とさゝやきて引き立て奉れば（平家）

口上の（な）以つて　御免な蒙り　槍の合す　勝賴……御返事のわきまゐずして（理慶尼）

梅の香を夜はの嵐の吹きためて槇の板戸のあくるまちけり(後拾、大江嘉言)(板戸の(人之チ)あくるカ)　切(被カ)符の切らない方

十訓抄に「これも心のすべきによりてなり」とあるは主格にやあらむ、疑はし。「飯の食へる工夫」などは可能動詞に對する主格にて異なり。思ひ誤るべからず。又三河物語に「後之世に御譜代の御主樣之しらせん爲に」などあるはにの處なり。全くの訛誤なるべきか。「彼等チ一番之ヤメサスル事モ」などともあり。「例の如く遊ぶ」又は「例のあそびす」を「例の遊ぶ」といふもあり。初に體言に言ひ續くべくのと言ひたる事が、中途にて用言に代へたる樣の事もあるべし。萬葉九に「問はまくの欲しき吾妹が家乃不知(シラナク)」とある樣なるは、知らなくといふ體言に續ける領格にして、又「世を捨てし身の訪ふ人も無ければ」などいふは、「ソレチ訪フ人モナケレバ」といふ全體の主格なり。此の如き種々の用例あるを類推して、さて氣取りたる積にて「口上な以つて」などはいふにもあるべし。

○とに通ふものか

　昨日の同じ處なり

　廂の大饗の同じことなり

　二位の中納言きのふの同じ樣

　女の心あはせて(伊勢、六)

　敦明)たゞきのふの同じさまに(大鏡)

◎體言の　が（°チウツ）

1、所屬（ヲモテル）　刀の主　　2 所在°（ニアル）　沖の小島　　3 名稱°（トイフ）　守屋の大臣

4 所業（ヲスル）　花守の翁　出山の釋迦　　5 形容?（ノ如キ）　蓬が杣　夢のよ　　6 材料（ニテノ）　水火の責

7 所有者°（ノモテル）　兄の家　　8 作者°（ガモノセル）　正宗の刀　　9 資格（ニテアル）　五位の藏人　兄弟の者

10 目的（ノ爲ノ）　晴の衣　法の場　祈の僧　　11 狀態°?（ニテアル）　朱の玉垣　　12 所屬の部分（ノアル）　白斑の鷹　もかうのす

13 中略　袋の鼠　　14 スナハチ　八郎の爲朝　　15 一物の二面を連ぬ（ニシテ）

我面白の人困らせ　内おとりの外めでた　　16 關係を示す場合の主點　世の中　机の前

三　つ（古語）

二名詞を接續するはのに同じく領格の如くなれど、其の用法に略定れる慣例あり。今より言へば、熟語名詞を作る者の如し。

國つ社　晝つ方　野つ鳥　上つ方　上つ人

邊つ浪　沖つ藻　前つ君　遠つ淡海

上つ毛　下つ總　家（ヤ）つ子

毛つ物　木つ物　御手都物（續後紀十九）

ためつもの　むかつをに（紀、萬）

見おろせば下つ千里のくまもなしふりぬる書や高ねなるらむ(眞淵)

四　に　粘着の義あり、名詞を用言に接續す。

(1)　副格

鄕里に歸る　海に臨む　道に聽く　山に近し　松風を琴に聞く　商人に仕立つ　主義に死す　學問に誤らる　人に勝る　足にはく　音に聞く　見るにさやけし　起くるに早し　こと更心驚かれぬるに侍り(撰集抄)　月に樂む　助くるに能はず　入相のかねに花ぞちりける　人にありせば衣きせましを

あやしう人こそ(へこ俊頼本)物いひさがなきものにあれ(夕霧)　まして心を(指定デ)はぎにあけて(古)

待つ人の香に(へこ俗)あやまたれけり(古、春上)　こゝに使はるゝ人にもなきに(動詞ヲ用ヒザル所)(竹取)

紅葉をぬさにたむけて秋はいぬめり(にけ)(古秋 貫之筆五)

この殿に參りて侍らむ時には(コト、シテ)知る人に(トシテ)尋ねきこえむ(落窪、越前守詞)

さむらふ人々のおろかなるにぞさいなまれむ(若紫)

(2)　敬主にも轉用す。

內にもおほしなげきて行幸あり(賢木)

院の御前にも少しなみだぐみおはしけり

(3)　竝立格　副格の轉にて、物を次第に數へ添ふるに用う。

春に夏に秋に冬を四季といふ

(4)　副詞を成す。名詞・形容詞の語根、用言の第二・第三・第四變化に添へるなどの種類あり。

時に　朝に出づ　明に　靜に　詳に　降りにふる　懲りにこる(あゆひ抄卷二)

思ふに　顧みるに

止むべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か(古)

逢ふまでの形見も今は何せむに見ても心のなぐさまなくに(同)

(5)　前提法　用言の第四變化に附きて法に準ず。順逆平の三種あり、口語にはのにといふ。その形式は名詞に附きたる態なり。

日照るに雨ふる　眼大なるに視力よわし

忠告せしに聽かず　我も行かんに君も行き給へ　上野に物せしに花は滿開なりき

何の役にも立たぬせい(癖ニ)に(ナルニ)鼻紙入より女郎の文として文章どこやら格別と見せかくる(一代女)

(6)　にを略すること。

〇〇(ニ)ごさんなれ

さ(ん)ざうらふ

うたての仰(ニ)ざうらふ(高砂)

あらいたはしや(ニ)候(隅田川)

笑止や候

今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそねたきことは(ニ)あれ(玉葛)

五　を　强辭にて處置する名詞を抑ふ。

(1) 處置格

水を呑む　書を讀む　字を書く　犬を打つ

をの下を他動詞に通ふ形容詞にて受くること。

宮人をも御よういなく(用意せら／勞ら)れずトイフ他動詞ノ打消(處女)…………を斟酌なく

此等を御心配な(ナサレヌ)きやう祈上候

(2) 副格

境を出づ　家を繞れる竹　役所を退く　舟のうちを(ヨリニ通フ)なむせめて見る(竹取)

(3) 前提法　に準ずるは前のにと同じく下略含蓄の法にて後の感嘆なると似たれど、今は區別を立つ用言の第四變化に添ふなり。但ものをはなほ此の類なり。

雨ふるを傘なしに出づ

價高きを質も好からず

君は知りたらむをなど來ざる

そは一度は習ひしものを今は忘れたり

我も行かむを君も行き給へ

六　て(口語)

詞を含みたるものなれば、にてはテニテハとは稱すべからざれども、其の職掌よりいへば文語のにと全く同じきもの多ければ、此にて說くこととせり。

にての約なるが、ては動詞にのみ添ふ者にて此の上にはアリヨリ於キ等の動

(1)　主格を說明する名詞を指定す。(下の動詞・形容詞に對しては副格)

これは筆である(御座ル、オマス)

あれは人でない

之を文語に反せば、「筆ニアリテアル」「人ニアリテナイ」となる。そのアリテアルといふ處は一種の重語なれど、語源を忘れては文語のニと同じ樣に用うるなり。さて之を體言・形容詞に附けて

それは本當でございます

夜は靜である

無事で居ります

御立派で入らつしやる

小兵では候へども(平家)

など言ふ時は名詞に準じて體言を指定せるものながら、副格名詞とも同格とも言ふべからざれ

ば、前章に之をナ活形容詞の第二變化連用法と說きたり。されば副詞となりてアルを修飾する者と見るなり。又

信玄は兵法家で政治家{である(イ)/だ(ロ)}

(イ)の時は兵法家デを政治家デに並ぶ副格と見れど、(ロ)の時はナ活の中止の如くそれを助動詞ダの中止と見ざるべからず。是名目論の上より已むを得ざるなり。

(2) 場處・場合を表す。(にありて)

英國で學問した

海岸で遊ぶ

由井小坪のうちでせめ戰ふ(平家、大庭)

今生で物を思はするだにあるに後生でさへ惡道へ赴かんずることの悲しさよ(妓王)

義仲……十三で元服したりしにも(廻文)

此等は文語はニとも言ふべく、その方よりすれば副格名詞なれど、ニテといふ時は動詞を含みて副詞小句と言はざるべからず。その時はデは接尾語又は後置詞などいふ名目に變ずるなれど、通俗にはテニヲハといひて英國で海岸でを副詞といひても可なり「文語デ言フ」などのデも一種の場所なり。

コ、デ殺サイデハ(史記抄)

此以下一段ハ楚デノ事ゾ(同)

十人ノ中デ二人ヅ、用ニモ立ツベイ物ヲ擇デ(同)

(3) 所由を表す

手で打つ　火で燒く

汽車で行く　船で歸る

鷹の羽ではいだりけるまと矢(平家、競イ)

畠山五百餘騎で御方を仕る(同、大庭)

かみやがみにたてぶみで使にかへしたびて(古今著聞集五)

此等は文語ニヨリテシテチモテなどの場合なるより言へば副詞を作る者なれど、羅甸の器格とか古語の車カラなどいふ例に充つれば、副格とも言ひつべきなり。

役目で働く　一個人で考へる

などは副詞を成せる者と定めて可なり。

(4) 原由(因爲)を表す。

風で倒れた　病氣で休んだ　それで落第した

風デ病氣デは實は副詞なり。ソレデは接續詞と成れり。此のデ動詞形容詞などの連體法の名詞と

見るべきもの、又は同様の句などにつきて準前提法的に副詞(句・小句)を成す。

あれは汚いので困る

雨が晴れたで出かけよう

君はよく勉強するんで愈進歩するよ

かやうの御願は吾山の力でこそ成就することでは候へ(平家、頼豪)

宗鑑はいづくへいたととふならば用が出來たであのよへといへ(宗鑑、辭世)

(5) 副詞に添ひて意義を加ふ。

皆で騒ぐ　唯ではやらぬ　今日でもよい　今では大臣だが郷里では昔の様に
思つてゐる　私でも好いか

されど

茶でも飲んで話でも聞かう(イ)〔すらノ類ノてにはトスベキカ〕

雨でも降り相だ(ロ)

などはナドと同様の職掌にて接尾語と言はざるべからず。而して(イ)は處置格にて(ロ)は主格なり。

「デモ先生」などいふ時は接頭語なり。

(6) 獨立して接續詞となる。

お前はちとなまけるで段々退歩する

案内が參りました　で參らうと思ひます

是は上の語に附くべきが離れて獨立したる者とも見られるど、なほソレデの略とする方穩當ならむデハデモも亦然り。

注意「無クテ」「ナイデ」などを比較するに、テデ共に用言に附きて其の連用中止法を成すが如きより、兩辭の區別を曖昧に心得べからず。テは飽くまで動詞に附くもの、デは必體言に添ひて之を指定し、或は副詞を作る者なりと知るべし。又「書カンデ」「カ、イデ」「噛ンデ」のデのテニヲハなると、文語「書カデ」「カマデ」のデの助動詞たるとも思ひ紛ふべからず。

(7)　名詞を動詞に化す。

母はまだ存命で居ます

私が或る家に書生で居た時

あの人は少尉で行つて中尉で歸つた

此等の語氣は明に動詞を含みて「存命して」「書生となつて」「少尉として」等と解せざるべからず。さてそれより副詞的に動詞に係るなり。

七　へ　方の義、動作の行はるゝ方角を示して副格をなす。

東へ向ふ　　西洋へ行く

世の憂目見えぬ山路へ入らむにはおもふ人こそほだしなりけれ(古)

柯羅國のきのへにたちて大葉子はひれふらすも耶麼等陛武岐底(紀、十九)

四月に内へ參り給ふ(紅葉賀)

阿米弊由迦婆(萬、五)

去來子等早日本邊大伴乃(ハヤヤマトヘニ(古義)ヒノモトヘ(舊訓)ハヤクヤマトヘ(眞淵)ハヤモヤマトヘ(略解))

夜麻登弊邇由久波多賀都麻(仁德記)

いざこども倭部(ヤマトヘ)早(ハヤク)白菅乃(萬、三)

わがせこを倭邊遣登さよふけて(萬、二)

うちひさす宮へのぼるとたらちしや母が手はなれ(萬、五)

新羅へか家にかかへる(萬十五)

惡道へおとし給ふことなかれ(寶物集、中)

天狗道へおつるなり(幸若、未來記)

えんの下へ隱れうず(烏帽子折)

へは本來名詞なりしが接尾語に轉じ、更にテニヲハとなり、口語にては方角の外に地位・目的をも大らかに表すことなど、總べて第四章の格の段に說けるが如し。

八　と　名詞を抑ふ。

(1) 一致する所ある名詞を抑へて副格とす。

之を大化の改新と言ふ

木あるを貴しとす

君子を愚人と思ふ

花を雪と見る

雷を車の聲と聞く

金を米と換ふ

人とある者は恩を知らざるべからず

追々春となる　蛤雀と化す

此等すべてにと言ひ換ふる事を得。トイフをニイフにしては如何しけれど、「馬を鹿にいふ」「西洋にては女にかしづく事を善き事にいふ」など通ぜざるにあらず。されど「君に仕ふ」「人に遣る」「犬馬に劣る」「狼にかまる」等のニはトと言ふべからず。一致化成の場合にニト相通ひても、ニは單に目的として表す意重く狀態的に軟に、トは動作的に硬し。

佐保すぎてならの手向におく幣は妹をめかれず相見染跡衣（萬、三）

花のさかりに阿比見之米等曾（萬、十八長歌）

○あゆひ抄「五のと」……と｛見・聞・言・思・爲｝

サレドコノ外ニ、成る、定む、極む、立つナド物すノ意ナル動詞ニカヽル譯ナリ。又雪とふる、花と匂ふ、花と芳しナドアリ。

(2)　下に動詞を含みて副詞の句・小句を作る。

妹まつと(シテ)わが立ちぬれし

行かむと(　)命を待つ

何でも勝手と(　)放擲す

われこそ大將と(　)威ばる

皇の御代榮えむと(　)東なるみちのく山に黄金花さく

石をのみ玉と(　)いだきてなげく哉

しるべすと醜の物しり中々に横さの道に人惑はすも(玉梓)

物おもふとすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとか聞く(後八)

(3)　與同・對比の意にて、副格又は並立格となる。

人と樂む　君と好し　汝と遊ばむ　敵と戰ふ　油は水と合はず　時と推し移る

才と學とあり　兄と弟は一人づゝなり

かたちなどはかの昔の夕顔と劣らじや(玉葛)
汝乎與吾乎人ぞさくなる(萬、四)
口語に比較の意に用うることあるは此等の轉なり。
私は君とは弱い　　油は水と輕い
(4) 體言と見なすべき者に附きて副詞を成す。
生きとし生く　　讀みとよむ
ありとあるもの(ありとあらゆるハ重疊)　　から〱と笑ふ
いづれをかしるしと思はむ三輪の山見えと見ゆるは杉にざりける(拾)
我が來つる方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散りとまがふに(古)
つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆きぬとはしのばむ(古)
白山のかしらの雪は消えなくに何にか腰をやくとやくらむ(小出粲)(昭代集、老女ノ腰ニ灸ス
ウルヲ見テ)
うらやまし見と見る人のいかばかりなべてあふひを心かくらん(右京大夫集)
暮ると明くと目かれぬものを
カラ〱などの聲貌語につくを略しても用うるは、イフの目的名詞にトを拔くと同樣なるべし。
日月は流るゝ水と早し

會する者十人となし（數フル丈）
さ夜中と夜はふけぬらし（ナリ）
しばしと留む（イヒテ）

など副格名詞の下に語を略せるなれど、副詞と見ても可なり。名詞・形容詞をトを挿みて疊むも此の類なり。

よしともよし　いみじともいみじ（イフ）
うづまさは神とも神と聞え來る常世の神を討ちきたますも（紀）
世の中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心ちこそすれ（後）
うつゝにも心はねぬる夜の夢と夢ともいめと人にかたるな（中務集）
榊葉にゆふとりしでゝわがいのる神とも神の國としらずや（國體をとはれて、高見）

(5)（口語）動詞・形容詞の第四變化に附きて、準順態前提法をなす。

本をよむと頭痛がする
こんな日に出ると日射病になる

此はバよりは副詞的なり。

(6)　獨立詞に變ず。

一六代名詞

「とかく」「と見る」「とは云へ」「と」（さうするとノ上略）など副詞・接續詞などに轉ず。「といふ」の下略のト

はなほ上の語に附けるテニヲハなり。

口語、接續詞の「ソレトモ」副詞の「此ノ上トモ(共ナリ)」などの「と」の意義を考へ見よ。

九　より・から　發點を表し比較・所由・依託にも轉ず。

(1)　副格

天より落つ　鄕里より來る　人より勝る　氷は水より輕し　生絲は繭より取る

人より呼ばる　馬より通ふ　牛後たらむより雞口たらむ　短きより高きに上る　あへて口より外に出さず(宇治拾)

あたりよりだにな歩きそ(竹取)

花より外に　心より外なる事(葵)

よりは古くよともゆりともゆともいへり。其の比較物を表すは前項との(3)に似て、漢文にて與字のとにもよりにも當るに類せり。所由・出自を表すはニに近し。

わがせこをあが松原欲見渡せばあま少女ども玉藻刈る見ゆ(萬)

かしこきや御言かゞふり明日由利やかえがいむたねをいむなしにして(萬)

石見なる高角山の木の間從も吾がふる袖を妹見けむかも(萬)、

水底の月の上より漕ぐ舟の棹に障るは桂なるべし(土佐)

白川といふ處に住み侍りけるに前より大貳藤原興範朝臣のまかり渡りたる序に(後撰)

御形より始めて飽かぬことなく見ゆる人の御有様おほえなり(竹河)
いわけなくより宮の內より生ひ出でゝ身を心にも任せず(梅が枝)
天の戶をおしあけ方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる(新古)

(2) 動詞・形容詞・助動詞の第四變化に添ひて原由副詞を造る。口語のカラ是なる由、前に格の段に言へり。

彼は貪るより却つて損を招く
氣前が好いから人に愛される
內より御使ありきのふもえ尋ね出で奉らざりしよりおほつかながらせ給ふ(夕顏)

(3) 副格より副詞に轉ず。

君の考は頭から間違つて居る
彼の人は我から損を取る
我は中心より彼に敬服す

此等は「頭カラシテ」とやうに下に動詞ありて副詞小句を成すを畧せるなるべし。ヨリ・カラの下、體言につゞく者は特に此の動詞を入れて見ざるべからず。

東京より(シテ)西の方は平野なり
來月より(シテ)後は誓つて勉强すべし

此より（見テ）彼方は隣郡なり

その（梨花）色よりしてあいなく見ゆるを（枕、木の花は）

「花より外に訪ふ人もなし」などは「花ヨリ」より「外ニ」といふ形容詞に續ける者の副詞となれるにて「花の外に」といふ時は「花ノ」といふ領格より「外」といふ體言に續けるなり。「枕より又知る人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな」（古今）の「枕ヨリ」は「枕ヨリ外ニ」の意に解すべし。

私の友人はあなた｛より外／より（外に）｝無い

彼奴は風からして好かぬ

東京から見ると大阪は物が安い

此等は副詞小句をなすなり。

甲は乙よりも大家なり（スグレタル人ナリ）

我は君より二歳の兄なり（長ジタリ）

かゝる場合に副格名詞より名詞に係る様に見ゆるより「ナリ」に係る副詞かとも思はれるど、尙名詞の性質職掌は變らぬ様なり。さて是は副詞の指定助動詞に係る者あるが如く、副格名詞よりナリに係れるものと見てあるべし。

(4) 副詞にも添ふ。

最初より
兼ねてより｝我は從へり
東京に來てより十年をすぎたり
(5)（口語）逆態前提法に準ずべき者。
御逢なされてからたわいあるまい（忠臣藏）
此等はタトテタ所がの義なり。
(6)　主格の如くなる者。
それは私から申さう
親からかういつて來た
親からかういつてよこした
このカラマデ（までトイフコトモアリ）主語と見る外なからん。
此事お七親より聞きつけて（親詞）…………（五人女）
この親よりは親元ニオイテにて「親が」とは異なり、親においてといふも、主格の代になる事あると似たり。
…からだめだ＝（頭）（てん）からだめだ
（頭）より以上　腹から（名ニナル）（ノオト、ヒ）

十　まで　着點を表す。

(1)　副格

我は一度北京まで行けり

今年の冬は寒暖計零下五度まで達せり

宰相までなり給ふ

都まで送り申してとびかへるもの(萬)

(2)　副詞にも添ふ。其の他體言に準ずる者に添ひて副詞をなすものあり。

今まで知らず　遲くまで遊ぶ

さまで苦しからず　何時までかくてあらむぞ

言ふまでもなし　聞くまでのことなし

飽くまで爭ふ　死ぬまで學ばむ

夜明くるまで路に迷ふ

山とよむまで鳴く鹿に

萬葉集に「歸り來までに」拾遺集に「散る花は道絶えぬまで埋まなむ別るゝ人も立ちやとまると」など終止法に附けるは變例なり。

(3)　到着より一轉して程度を表し、併加又は單一にも轉ず。是には名詞なるも副詞なるもあり。

忍ぶれど色に出でにけりわが戀は物や思ふと人の問ふまで
冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞふりける(古)
忰まで御世話に相成
家寶まで賣り拂へり
風まで吹く　　　鳥にまで劣る
御見舞まで如此に候
御禮の印まで差上候
我は君の反省を促すまでなり
出來ぬ時はそれまでなり
彼は蔭に廻つてまで惡口をいふ
此の殿(義孝)は御形の有りがたく末の世もさるべき人や出でおはしまし難かるらむとまで
こそ見ぇ給へりしか(大鏡)
新聞賣とまで零落せり
此の終の二例のトマデのトより上は副詞と見てあるべし。
薄くこきのべの綠の若草に跡までみゆる雪の村消
思ひ入る深き心の便まで見しはそれともなき山路かな(新古)

御むこの少將までいで給ひていそぎ給ふ

折よくば見に來ぬまでも（ズトテモ(ソレマデハ)）我宿の櫻さきぬとつげましものを(和泉式部)

紅葉ちる野原を分けて行く人は花ならぬまで（トマデ行カズトモ）錦きるべし(山家集)

夢を信じて國を助くるたぐひおほう侍りけるを用ゐさせ給はぬまでもこのいましめの口を過さずこの由をつけ申し侍らむとて舟いだし侍りつるに(明石)

(4) ばかり丈の意を表す。

白藏主によう似たか知らぬまでい(こんくわい)

御無心申すまでゝござらう

…………たまで

上封じは仕直してその手に隨分違はぬやうにおれが書付するまで(禍福廻持當世銀氣質)

(までは丈ニテスムコト、………スルカラ差支ナイ、………分ノコトヨ、などの意)

以上九辭は名詞(體言)に附く者なり。

第二 動詞(形容詞助動詞の動詞に準ずる者)に附く者。

十一 ば

順說的接續の用をなす。(根本ハなるべし)

(1) 第一變化第五變化に附きて順態前提法をなす。

花咲かば告げむ　風吹かねば花かすむ　品もよければ價も安し

止せつてへば止さんか

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」「戀しくば尋ね來よ」などク、シク活の類なるは第一變化なければ、その第二變化の下に動詞を略せるなり。又連用的平接、及逆說のことも法の章に言へり。

(2) (口語) ならたらの外は第一變化に附かず。

どうしたらば好いか

天氣ならば行かう

「打たば打て」「行かば行け」とやうに文語その儘を用うる地方もあれど、一般にあらず。ナラバタラバもバを略すること多し。(ナラタラの確說に用るらるゝ事は前にいへり)

ござりませうば唱はしやれませい(狂言、ふねふな)(庄内語然り)

(3) (口語) ければ 打消のヌに附く。

行かんければならぬ

せんけりやならん

是はク活の第五變化の語尾ケレを吸收せる者にて、ケレドモの例と同じけれども、好ましき語法にあらず。而してンの下にのみ附く所注意すべし。之をナケレバの變と考ふる人あれど、ナイを用うる地方の語にあらざると、シンケレバと言はざるなどより見れば非なり。東北の一部及出雲邊の人の東京語を擬して往々

雨が降るければ　　　　　さうだければ

など確定前提法の意に言ふは一種の類推聯想より起れるなるべけれど、早く注意して改め貰ひたきなり。

十二　ど・ども　逆說的接續

(1)　第五變化に　附いて確定或は不定の逆態前提法をなす其のモは一種の咏嘆辭なり。

色は匂へどちりぬるを

位高けれども驕らず

青によし奈良の大路は由吉余家杼この山路はゆきあしかりけり(萬、十五)

無けども

(2)　(口語)　けれども(けども)　第三變化に附く。文語(1)に同じ。ケドモ・ケンドなどと訛る。ク活の語尾を吸收せるなり。

ゐませうけれども(擦過)

十三　と・とも　假定逆說的接續

(1)　第三變化に　附いて前提法をなす。クシク活には其の第二變化の下に動詞を略して附く。「知らずともよし」など之に準ず。助動詞ムラムケムの類に附かず。上一段活には古くルを略しても言へり。

夜泣すとたゞもりたてよ（命令）
繪に書くと筆も及ばじ少女子が花の姿を誰に見せまし(堀川後百首)（想像）
ひとり寢と薦朽ちめやも綾蓆緒になるまでに君をし待たむ(萬)
愛敬無くと言葉しなめきなどいへば(枕、憎きもの)
嵐のみ吹くめる宿の花薄穗に出でたりとかひやなからむ(蜻蛉日記)
萬代に見とも飽かめや(萬)
やまとべに風ふきあけて雲はなれそきをりともよ吾を忘らすな(丹後風土記神女ノ浦島ニイヘル歌)
(寧靜)いかさまに身は碎くともむら肝の心はゆたにあるべかりけり(明治皇后)（談理）
たちながらきたりとあはじ藤衣ぬぎすてられし身ぞとおもへば(金葉、七)
たのめずば人をまつちの山なりとねなましものをいざよひの月(新古、十三)
人は咎むと咎めじ人は怒ると怒らじ怒と慾とをすてゝこそ常に心はたのしめ(蕃山)
口語「グズ〳〵イハズト行ッテ來イ」「イハズト知レテル」などのは逆假提より起りて平接的にも用ゐらる。
(2) (口語) 想像に附く。(文語と同じくも用うれど)
死なうと構はぬ
惡からうとやる

どんな事があらうとも變らぬ

「無論好イトモ」「サウデストモ」などのトモは文語「メデタシトモメデタシ」などいふトモの下略にて「八」の(4)に屬す。

「宗論」都まで、とくと御供致さう、何がさて、とくと御供いたさうとも……(口語法別記、四五〇)斯ク重レル例多シ。

十四　て　一の動作より他の動作に移るを表す(此の辭もと完了ツの變化の如くなれど、今の職掌關係を表すに止るよりテニチハとす)

(1)　第二變化に　附きて連用(中止、副詞)或は前提法とす。ナリ　タリに添はず。

敎へて導く　　天高くて氣淸し

知りて行はず　　身にいたづきの入るも知らずて　(副詞ニセズ下ト並立ニイヘルニヤ)　うれしくておうせたる哉(竹取、御主人)

帝のめしてのたまはむことかしこしともおもはず(竹取、姫詞)

三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり(竹取)

さう{して　よからう
　　 するが

(2)　連濁　ガバマ行四段活及ナ行變格につきてはデと濁る。

〔注意〕 口語「知ランデ」「教ヘナイデ」「知ライデ」のデは此の連濁にあらず。又文語「知ラデ」等のデは打消助動詞ズテの合なり。

(3) 「といふ」をつむるて

(イ) ……したつて (終止)

(ロ) 馬鹿つて何（主格）

(4) 「と」の變音

何テト云ふ

(5) とよの約

花は櫻に限るて

〇東北方言……でと濁る

さうだ（て・で）

十五 つゝ

重複(反復)・繼續・兼他(時のみならず、場處にも云ふなり)の意にて第二變化に附く。

形容的及相以外の助動詞には添はず。完了ツの重用なり。

歩みつゝ語る　酒をくみつゝをり

筑紫に侍りける時に罷り通ひつゝ碁うちける人(古)

墓に行きて物いひつゝぞ歸りける(今昔)

さるべき日ばかり詣でつゝ見れば程なくそとばも苔むし(徒然)

音羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年をふるかな(古)

知りつゝ行はず

かくナガラに通ふ者あるより、ツヽを接尾語にするかナガラをテニハに移すか、兩者を同類にしたき樣にもあれど、此は更にテに近き所を取りてテニハに入れたり。ナガラには兼他の義あれど重複・繼續の義は遙に薄く、ツヽは動詞の進行繼續態を作るなど、文法上(割)ナガラよりは關係的なり場處にも云ふなり「女房の曹司には廊のめぐりにしたるをなむわりつゝ給へりける(藤原君)」

それより高くもりつゝあり(藏開下)

心ばへありつゝわたる(葵)

並べよせつゝあるぞいとをかしき(蜻蛉日記)

まぎれつゝあり(同)

ひきかへしつゝありし中に(枕)

いと限ありつゝ及ばざりけりや(若菜上)

於後手布伎都々逃來(記上)

皆とくおきいでつゝ庭面をみる(胡蝶日記)

由布嶽のすそのにあへる人のかほ家なる母に似つゝはかなし(中東)
形

十六　し

(口語)　終止形に附きて中止法をなす。

學問もあるし才氣もある

色も白いし形も好いし申分はない

はて來いで何とせう連ぢやものを編みつれた身ではあるまいし又どれへやら行くは(宗論)

これは動詞爲の轉にもあるべきか。「第三種」のシとは別物なり。

此の外は動詞所屬なるテニモがあれど、轉用なれば、各本來のに分ちて說けり。

第三　諸詞に附く者。

此に諸詞に附くといふは其の所屬を擇ばざる謂なり。その名詞に附く者も格に關せず、動詞に附く者も法を表さず、自餘の詞に附く者も皆テニヲハ自身の意義を添加するなり。この種を又二つに別つ時は、

(い)感嘆に基づく者。

十七　は

取り立て、區別し、感歎す。

(1)　名詞に附きて主格・處置格をなす。(自餘の格にも添ふ)

春は來ぬ　われ酒は飮まず

日本は神國なり　花は美し

主格ト虛飾格トヲ兼ヌルカ

ほそろぐせりといふ物は名は憎けれどおもしろう吹きすまし給へるに(紅葉賀)

和ごんを………かきあはせたりし程けしうはあらずかし律のしらべは女のものやはらかにかきならして簾のうちより聞えたるも今めきたるものゝ聲なれば淸くすめる月に折つきながらず(帚木)

無紋の上の御衣ににび色の御下がさね〔〇は(万水)〕えい出しき給へるやつれ姿花やかなる御よそひよりもなまめかしさまさり給へり(葵)

古文には副格なるもあり。

綱手とき今はと舟をこぎ出でば我は浪路をこえやわたらむ(貫之)

人の心こそうたてあるものはあれ(葵)

蠅こそ憎き物の中に入れつべく愛ぎやうなき物はあれ(枕)

殿守づかさこそなほをかしき者はあれ(枕)

何事も衰へ行けど此の道こそ世の末に變らぬ者はあれ(新古、十九)

男こそなほいと有りがたくあやしき心ちしたるものはあれ(枕)(コレラモシ同主格カ)

「あてきといひしは今は兵部の君といふ」ぞそひてよるにげて舟にのりける(玉葛)(タタミテ主トナル、同格ノ主ニナル)

「東海道は尾張の國熱田に一泊し」「伊賀の國は上野に於いて仇を討ち取り」などいふ時のハはノ

を提示したるものにて、領格なりとも言はれげに見ゆれど、尙主格にして下に語を略せる者の如し。

「東海道は尾張の國熱田(の東海道)」に一泊し、
「伊賀(詳しくいへば伊賀の國)は上野(の伊賀)」に
我は「讀本は一の卷(の讀本なる)」を讀む
貴殿は東京に住み給ふとや、「(その)東京は何處(の東京)」に住み給ふぞ

(2) 動詞形容詞の連用法、副詞・接續詞等に附く。(是に前提的なると然らざるとあり)

はさまれて足はうづきの時鳥鳴きはをれどもとふ人もなし(著聞集)
行きはやられず　見ずはあらず
悲しくは思へど今はあきらめたればやがては落ち居る時あるべし
斷じて行はむか但は見合せむか又は再考せむか
さてはあまりに未練なり

願ハクハ恐ラクハ等のハをバと濁るは前提のバと混じて非なり。されど一種の音便ならば、其の地方の方言として見るべし、處置格のハをも濁りて「酒ば飮む」などいふ地方もあるなり。イッソの意味に用うる「同ジクハ」は濁らざるなり。「もし誤る時んば」などいふは「ナクンバ」「ズンバアラズ」などの同例にて「イッパ」は「イフハ」の音便なるべし「今日は」を「コンニッタ」といふは「出來」を「シュ

ツタイ」といふに似たり又形容詞の副詞法にバをそへて前提法とする時、之を濁らずしてハといふ事あるは、テハの義にて誤にはあらざるべし。此の如く考へもて行くに、ハバ同源かとも思ひなるなり。

「源氏」に「同じくは」を強めて「おなじくこそ」とあり。

「枕五」に「おなじうはあまたを仕うまつらむ」とあり。

　來は來たが話相手のない徐福

　讀みはよめども意通せず

此等はクルコトヨムコトにて名詞ならんか。然らば主格なり。はたクルニハヨムニハと同じくて副詞ならむか。兩說遽に定め難し。

(3)　名詞及準體言に附きて文を結ぶ。ヨに通ふ。

吾が妻はや(紀)　　いかゞはせむは(伊勢物語)

さてその文は皆見てしはと宣へば(枕)

すは「奴めを手延にしてたばかられぬる」は(平家)

これ見よ「誠におはしましたる」はといへば(宇治拾)

君が住む宿の梢を「行く〳〵と隱るゝまでにかへり見し」はや(拾)

さはいへどすぐさゝざりけるは(紅葉賀)

此のハ蓋ハの第一義なるべし。今言にヮと轉呼し、音便にはヮィと延ぶ。而して終止の語にも添ふ。

まあ好いわ　知らんわい　止しませうわい　聟貰ひおうしたらえいわい(狂言記)

又どれへやら行くわ拔殼行きまするわいの(宗論)

撥音の下ナとなる。

某さんなどうなすつた(コレ或ハ本來ノなカ)

促音の下タとなる。

今日(コンニッ)た(タ)

十八　も

婉曲に感嘆し、重複を表し、逆說の接辭になる。

(1)　名詞に附いて主格・處置格をなす。(他の格にも添ふ)

年も暮れぬ　煙草も吸はず茶も飲まず　茶も酒も嗜好品なり　何もなし　これは金と純金なり　誰も知れり　いづれも樣いつもに變る　いくつもの

愚{も(主)／の(領)}愚なり　　{いみじとも(主)／いみじくも(副)}いみじ(四十二年九月四日案)

疑問につく時は無論、一切の義をなし、「か」の如くそれをこめて一體言の資格にもなる。

(2)　動詞・形容詞の連用法及副詞・接續詞に附く。

思ひも寄らず　いひも兼ぬ　聞いても下され　辛くも老いたり　覺束なくも呼

ぶ小鳥　　さても今宵は明月なり　　智にして而も仁なり

さやはとはわれはおもへど人言に又さもやともおもふ頃哉（さや＝アルベキ(反語)、おもへど＝おもふものから；さもや＝アルベキ(疑)、おもふ＝まどふ）

でもの意に當るもの。

　などてすこしも世に從ふ心をつかひけむ

(3) 動詞・形容詞の第四變化、及第二變化に附きて逆態前提法をなす。順態前提法もあり。

矢は當らざりしも痛手はおひぬ（平治）

人はいみじくたけくも力及ばぬことなりけり（愚管抄）

渠鳥ならずも羅に入りぬ獸ならずも狩場にあり（八犬傳）

我身只今人と等しくてもがな報せむとおもふも胸はしる（落窪、阿漕）

杖衝毛不衝毛（ツキモツカズモ）吾は行かめども君が來まさむ道のしらなく（萬、十三）

上田秋成の文反古に蘆庵へやれる「山に入るかしこきあとにならはずもうき世の道にまよひてぞ來し」とあるを六帖詠草には「山に入る人のためしはならはねど憂世の道にまどひてぞ來し」とかへて引けり。

(4) 終止せる語に附く、感嘆なり。

鶯鳴くも　　綱手かなしも　　かねて著しも

（附記）　春樹増抄

(1) 重ぬる、又にて兼ねたる
(2) 詞をやはらぐる（鶯だにも、玉にもぬける）
(3) 休（色よりも、年をへつゝも）

十九　ぞ

指し抑ふ。「其（ソ）」の濁れるなるべし「そ」とも淸む。

(1) 名詞に附きて主格・處置格をなす。（他の格にも添ふ）

花ぞ咲く　物ぞ思ふ　風ぞ強き　疾くするぞ善き　膽太きぞ男はあらまほしき

誰ぞある　何ぞ見出でよ　誰そ彼　何ぞも

それぞ辭世さてもその後さる程に殘る櫻の花し匂はゞ（近松自贊、松山米太郎所藏）

疑詞につけるはカと近し。されど疑問の意あるにはあらず。

(2) 動詞・形容詞の連用法・前提法・及副詞・接續詞に附く。（前提法＝假定あるべきか。逆はなからん）

思ひぞ歎く（／てぞ）　來ればぞ歸る

よくぞ來し　又ぞ行かむ

さればぞ人も懷くめる

何すれ(ば)ぞ斷行せざる

朝髮の念ひ亂れてかくばかりなねがこふれぞ夢に見えける（萬、四）

わがまちし秋は來りぬ妹とあれ何事あれぞ紐とかざらむ（萬、十）

時々の花はさけども何すれぞ母とふ花のさきてこずけむ（萬、二十）

(3)活詞辭の第四變化及名詞に附きて文を結ぶ(活詞辭＝動詞・形容詞・助動辭)

風はよきぞ　　此は彼が書きたるぞ　　彼は誰ぞ

(1)(2)は語を起す者にて係といひ、之を結ぶには下第四變化を用う。此の(3)は係にあらず語を抑へ止むるにて、實は體言として受くるなり。此のぞの上にナルを略せりと見る說もあれど、ナリの代にゾと抑へたりと見る方然るべきか

な來そ　　な忘れそ

など禁止なるには第二變化に添ふ(カ・サ變格は第一變化に)

人を食ふ人種もありとぞ

などは下に動詞を省けるにて係のなり。

天にます月讀男まひなはむ(／はせむ(萬六))こよひの長き(／者(萬六))五百夜つげそも(／ぎこそ(纖許增)(萬六))?(六帖)

(4)　ぜ(口語)　ぞの轉にて少し和げたるなりゾと同じく文を抑ふるに用う。但「何ぞないか」「誰ぞ居ないか」などの場合には用ゐず。

雨が降るぜ　　早く起きようぜ

面白いぜ　　それは棄てるんだぜ

〔附記〕ぞよりぞえとうつるかぞよの約ならん。

ますえ‖まつせ。
………したぞえ↓ぜ
わたしや西京のものどすえ‖
何ぞいな

二十　し

(1)ゾより少し輕く、取り立つる意あり。文を結ぶことなく、下語の法を變せず。用法ゾの(1)(2)に同じ。

君し思はゞ我もたのまむ
宮も藁屋もはてしなければ
たねしあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひばあはざらめやは(古)
人來〳〵と厭ひしもをる(古)
何しかもそこばく戀ふる
生きとし生けるもの
何しに急ぎ越えけむ(爲トイフ說モアリ)
何時しか年も過ぎぬ
今し代は盛なり

うゐしうゐば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへ枯れめや(古)

太政大臣禪師の理の如く勸め行はしめ教へ導き給ふに依りてしかく奇しく尊き驗は顯れ給へり(宣命)

猶し雪光の如く(無量壽經)

三間の萱屋かたしは土編み垂れ(藤原君)

(2)文を結ぶ。口語方言。

さうだつし(東北)　してるのやし(大阪)

(3)中止(口語活詞辭の第三變化に添ひて中止法を形造るものならん。說明も例もなし—)

二十一　なむ(なも)

ゾに似て稍婉曲に咏嘆する意あり。文の結となることなく、係なるを結ぶには第四變化を用う。用法ゾの(1)(2)に同じ。ナモは古し。共に散文に多く、歌には少し。

月をなむ見る　漕ぎになむこぐ

しかなむ思ふ　さればなむ我もいひたる

思はむ友と對ひ居たらむなむうれしかるべき　さるによりなむ

身まかりてなむ誠の名は定まるなる

云々といふ言に在るらしとなもおもほす……此の尊くうれしき事を朕獨のみや喜ばむと念じてなも太政大臣朕が大師に法王の位授けまつらく(宣)

……二禪師等…… 世間乃位冠乎波不レ樂伊末佐倍止毛奈毛（誤カ、メヅラシ）猶不レ得レ止天（ムコト）(第四十一詔)「逆確提法(逆假提法モ)になむつき得ば、この點ぞの所屬と異なることゝなる」

ナムは文を結ぶことゾの如くならず。

一言かくなむ(申ス)

昔の男は髮を結ひけりとなむ(イフ)

中將召しつればなむ(ワレ參リツル)

二十二 こそ 強く指して取り立つ。

(1) 名詞につきて主格・處置格をなす。又副格にも添ふ。

(2) 動詞形容詞の連用法・前提法(逆を除く)及副詞・接續詞に附く。此等のこその係を結ぶは第五變化にてす。(結ばざるもあり)

常磐なる松こそ立てれ

待たぬしもこそ待つにまされれ

云々の裝したるこそ重盛よ

人こそ見えね(ド)秋は來にけり

古は皆かくこそありければ人の心もすなほにこそありけれ

更にこそ信ぜられね(大鏡)

櫻花さきこそ匂へ

君を思へばこそ忠告もすれ(ド思ハズバセジ)

明日までも延べばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ(保元)

鏡なす我が思ふ妻ありと言はゞこそ家にも行かめ國をもしぬばめ(允恭紀)

此の山のつきばのみこそ此の川の絶えばのみこそ百磯城の大宮所やむ時あらめ(萬)

此の終の二例の如き順假提法の下に語を略しては、反語に用うるなり。

國の上など思はゞこそ(殊勝ニモアレ)彼は自己の利より外に知らず

君が代を何にたとへむと思へども果なきものはあらばこそ(譬フベキ方モ)あらめ(頼政)

コソの下にアレアラメなど受くる其の間に語を略する一種の用法あり。

忍ぶ人のあらむ程こそ(云々ニモ)あらめ(ド)そも又程なく失せて(徒然)

花もやう〳〵けしきだつ程こそ(云々ニモ)あれ(ド)折しも雨風うち續き(同)

此の一節錄し畢ること月も日もこそ(?)あれ七夕なればすなはち孟津抄と名づくるところ
な然り

(こそはぞなむ兩方に關し、理論的感情的をかぬ)

尙次の例に依りて考ふべし。——

里にすめどもあこより外に見え通ふ人のあらばこそ(俊蔭)
日比めされぬ所にてもあらばこそ(平家)
別の御使にても候はゞこそ(平家)
袂も袖もあらばこそ(卒都婆小町)
秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば(古今、秋)
常に行く道なくばこそ世をうみにあまの乘りたる舟も慕はめ(井上通女ガ了然尼ニ答フル)
天地もよりてあれこそいはゞしの淡海の國の(萬)
後湍山後もあはむと思へこそ死ぬべきものを今日までいけれ(萬)
梅一本あればこそあれ賤が家の軒に茶をうるのべの細道
朝夕にみればこそあれ住吉の浦よりをちの淡路島山(永仁六年津守國冬)
いはねば(ずにニアラズ)こそあれ戀しきものを(古)
年頃もあれば(シカ)こそあれ(カク)その事またむ程あらじ(徒然)(バコソの義)
そこ立つて失せぬかと叱られてもおぢるにこそ(傾城反魂香)
いかなどを通すにこそ(同上)
聊をしいとおもふにこそ(同上)

ゴザンナレの事は格の處に説明せり。副格以外に附かぬものなることを忘るべからず。八犬傳に

「よき敵にこそござんなれ」といふ滑稽あり。

木曾殿「さては不便の事をも申すござんなれ誠には汝下りて馬の草などをも構へさせよ」とぞ宣ひける(平家)

稻葉は我が領の土產乞ひ受けて奉行頭人に送らん苞苴の料にこそすれ(スル)ござんなれすべき樣こそあれ(藩翰譜、京極高廣の詞)

この白石の文も怪しきものなり。

さても奇れいな家作りかな此の如く中よそうにひつしりに建てならべた事は田舍などにござつて(ラバ)こそ(狂言、張蛸)

かやうの大慶の事はござつてこそ(同上)

入相ござめれいそが(せ)(脫ナラン)給へ(謠曲、通盛)

雨ござ(ん)めれ(同、絃上)

○すはや究竟の事こ(ニ)そあれ(太平記、阿新)

(3)(古語)呼掛にて呼格名詞に附く。結に關せず。是は(1)の轉用なるべし。今のャに近し。

我が君こそまづ物聞えむ(枕)

北殿こそ聞き給ふや(源)

花こそといふ文字こそ女童などの名にしつべけれ(宇拾)

く指して取り立つるよりの轉義なるべし。

(4)(古語)希望の意にて動詞形容詞の第二變化に附きて文を・

父こそと呼べば忠行何ぞと問へば兒のいはく(今昔)

鶯のまちがてにせし梅の花散らず阿利許曾思ふ子が爲(萬五)

わたつみの豐旗雲に入日さしこよひの月夜清明(アキラケク/キヨクテリ/サヤケカリ)己曾(萬)(或は此のコソの下にアラメなど略せられたるにて、形容詞には願のコソ附かざるにもあるべし)

大原の古りにし里に妹をおきて吾いねかねつ夢に所見(ミエ)乞(コソ)(萬四)

「津の國のなにはおもはず山城のとはにあひみむことをのみこそ」などの省略にも希ふ意あり。

あそびのみこそ(萬五)

酒にうかべこそ(萬五)

五百夜つぎこそ(萬六)

吾に告げこそ(萬七)

衣すらむにほひこそ(萬十)

はやく行きこそ(萬十二)

やまず見えこそ(萬十二)

二十三　や

二十四　か

兩辭感嘆より出でゝ、呼掛にも疑にも問にも疑問にも反語にもなる感嘆と疑問とはその區別の明瞭ならぬことあり。是此の辭の性質上已むを得ざることなり。

や‖胸中の疑、他問、不定緩長。

か‖胸中やゝ期する所あり。質問不定にても一定の範圍あり。急短。

(天)　疑問

(1) 名詞・代名詞・用言の連用法・順態前提法に附く。此の係を結ぶ用言は第四變化にてす。

(イ)　主格の外には格を表すテニハの添へるに附く「酒か飲む」など處置格なるは極めて少し。

春や疾き花や遲き　　人や來る

誰かある　　春立てば花とや見らむ

何とか言へる　　君よりや勝れる

(ロ)　副詞以下のは

君は何時か來たる明日や歸る

人知れず今や今やとちはやぶる神さぶるまで君をこそまて(新古)

花なき里に住みやならへる

見てのみや人に語らむ

たどりか行かむ文の林を
遲くや見たる
如何ならむいはほの中に住まばかは世の憂きことの聞ゑ來ざらむ(古)
心あてに折らばや折らむ(同)
衣しも多くあらなむ取りかへて着なばや(一者也)君が(之)面忘而有(ワスレタラム)(萬十一)
百敷の大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる(同)
久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらむ(古)
人そしればか今しはなひる
おほつかなうるまの島の人なれや我が言の葉を知らずがほなる(千)
我がせこに又は逢はじかと思へばか今朝の別のすべなかりつる(萬)
雲もなくそらすみわたる天の川今や彦星舟わたすらむ(落窪,三)
たが爲の錦なればか秋霧の佐保の山べをたちかくすらむ(古今)
いかなるものゝくるほしにてか侍りけむ
御前にて琵琶をひかるゝことも度々侍りき。始めたる事ならばや(コソ)臆して侍るべき(ケレ)。たゞ事に
はあらじ(家長日記)
公實(中略)議者モ實資ナドヤウニ思ハレタラバヤハアランズル(コソアラメに近し)タヾ外舅ニナリタルバカリ

ニテマサシキ攝籙ノ子ウマゴダニヘヌ人コソオホカレ、イカニ公實モサホドニハ思ヒヨリケルニカ(愚管抄四「鳥羽院踐祚ノ時ノ條」)

大作の大納言の人や舟にのりてたつ殺してそがくび玉とれるとや聞くとはするに(竹取)―疑問ノ重贅

……………とよみてましや(土佐)(燈ニ「ましや」トイフツヽキナシトアレド、「われ鶯に劣らましやは」「花と見ましや」トモアリ)

(2) 係とならざるもの。

(イ) 並立格に附けるは下の結に係らず。さてカは並べたる中に一つを擇ぶ意なり。ヤはトカヤラの如く輕く疑ひて其の等類を指す。

我か人かのけしき

茶や麥酒やを飮みたし

後見や何やとかねておぼしかはすとも(竹川)

簫や琵琶や笙の笛篳篥など吹き合せ(榮花)

柚や梨やなどなつかしげにもたりて食ひ(蜻蛉日記)

花や蝶やとかけばこそあらめ(夕霧)

羨し花や蝶やといふめれど皮蟲くさき世をも見る哉(堤中納言)

皆人は花や蝶やといそぐ日も我が心をば君ぞしりける(枕)

(ロ) 副格名詞に附けるものの中、カのみ。

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に「今年も今日に果てぬ」とか聞く(後撰)

近江にかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼(後拾)

彼の人は今日は横濱へか行ける筈なり

「昨日かも霰ふりしか信樂の外山の霞春めきにけり」(詞花)は副詞に附けるなるが、此に準ずべし。

(葵上源ニ) 四とせばかりかこのかみにおはすれば(紅葉賀)

(ハ) 疑詞につける中に、是もカのみなるが稍新し(もトノ關係)

誰か來たり　何かの役に立つべし

何處かに行かむ　いづれかを取らむ

何時か見し事あり　何故か時計止れり

何とかいふ處に住ませ給ふ(堤、花櫻)

誰やの人(太閤記、五)

當時味方に東國の勢何萬騎かあるらめど(平家)

(3) 文を結ぶ。

(イ) カのみ名詞に附く。

春雨の降るは涙か
はるゝ夜の星か川邊の螢かも我がすむ方のあまの燒く火か（伊勢物語）
かゝる夜の月に心やすく夢みる人はあるものか（横笛）
うちとけていぬるものか（夕顏）

口語方言にはャにて言ひ切る處もあり。

(ロ)　用言第三變化及終止に準ずべきものにャつく。

(ハ)　用言第四變化にカつく。

ありや　あるか　なりや　なるか　思ひきや　思ひしか　よしやあしや
早きか遲きか　物をば思ふらむや
涼しやと草むらごとに立ち寄れば暑さぞまさる常夏の花（六帖）
數ならぬ我がみ山べの時鳥木の葉がくれの聲は聞ゆや（後撰）
思ひ出づやみのゝを山の一つ松契りしことはいつも忘れず（伊勢）
蟋蟀夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかりゆく（新古）
多く拾ひとりたるも嬉しからじや（枕）
心おかれじやは（帚木）

近代、第四變化にもャを添ふるは、それを終止法と誤りたればなり。

旅の空雨のふる日はくれぬかと思ひてのちも行くぞ久しき(玉葉、爲兼)(千家尊孫、ぬやの誤と指摘す)

猶しばしこの一ふしは恨みはてじなしかとおもふなさけもぞ見る(風雅、永福門院)(同、「なきかの誤」とす。なじかにもや)

清正京城より直に東北して北韓に出でしや(コハ或ナリ)或は平壤海道を進む半にして東行せしや確ならず。(きやトハイハレズ。けむやトイフベシ)

衣更せんや(後ノニテ或カ)、さ公達や。

午飯をすますが(ヤ)否や(ハヤイカ)門外を過ぎる電車にのつて(永井荷風、冷笑)

(ニ)　(古語)第五變化にもヤカ附く。但メヤの外は稀なり。

古を仰ぎて今を戀ひざらめかも

今更に雪ふらめやも陽炎のもゆる春べとなりにし者を(萬)

母(オモ)なしに汝生(ナ)りけめや(紀)

一日も妹を忘れて思へや(萬)

まひなしにたゞ名のるべき花の名なれや(古)

花なれや外山の春の朝ぼらけ嵐にかをる峰の白雲(新勅)

川上やあらふの池の浮蓴憂きことあれやくる人もなし(後拾)

百磯城之大宮人者暇有也梅乎挿頭而此間集有

此の終の類は前提法に附きて下に「アラン」などを省ける者とも見るべく、尚攻究を要す。

(地) 感嘆　にてはヤの用多く、カは少し。

(1) ヤ　命令法・終止法につく。

なけや鶯　のめや歌へや

有明の月だにあれや時鳥たゞ一聲の行く方も見む(後拾)

かけじや袖のぬれもこそすれ

うらめしや　あさましや

更に筆投げすつべしや(梅が枝)

いみじくぞあるや　あはれいと寒しや

……「薫ヲ」にほふや薫るやと聞きにくゝめでさわぐ……形さへ有らまほしかりきや(竹川)

いまやうの葵八花形の鏡まきゑらでんの箱に入れたるに向ひたる心地したまふや(ノるイ)いでや

それはさきらめけどくもりやすくぞ(イナシ)あるや(大鏡、後一條帝ノ段)

まろは世の人のやうに思ふぞや死ぬやこひしやなども聞えず云々(落窪、中將詞)

(縱)よしや(感)　ましてや(イハンヤノヤニテ疑)

第五變化の終止法に準ずる者、亦ヤを添ふることあり。

雨降れば小田のますらを暇あれや苗代水を空に任せて(新古)

もゝしきの大宮人は暇あれや櫻かざしてけふもくらしつ(同)

あら磯の岩に碎くる波なれやつれなき人にかくる心は(千)

獨寢の夜寒になれる月見れば時しもあれや衣うつ聲(新勅)

楚狂接輿歌而過孔子曰鳳兮(ナレヤ)………何(ナレヤ)德之衰

(2) 連體語に附く

(イ) ャは領格及連體法に。

神風や伊勢　　葛城や高間の山

朝倉や木の丸殿　　難波津に咲くやこの花

押てるや難波

夕月日(夜イ)さすや岡べの松の葉の何時とも分かぬ戀もする哉(古)

うつや皷にさそはれて　　打つや霞

蟋蟀鳴くや霜夜　　燒くや藻鹽の

高行くや隼別　　さゞ波やしが

わが待つやしぎはさやらず

大原や小しほの山

準前提的に副詞句をつくるもの。

天つ風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞ思ふ(國臣)

如何有哉(イカナレヤ)人の子故ぞ通はすも吾子(萬、十三)

有栖川同じ流にかはらねど見しや昔の影ぞ忘れぬ(新古)

その始東京に來るや東西を辨ぜず

(ロ)　カは連體法に。

行く人を招くか野べの花薄こよひもこゝに旅寢せよとや(忠盛)(コノとやノ下ニハ略語アリ)

朝毎に御門にたつの市なれやうるか鮎の子あきな草(世繼歌)

うつせみの世にも似たるか櫻花さくと見しまにかつちりにけり

かなに似たるもの。

川風の涼しくもあるか打寄する波と共にや秋は立つらむ(貫之)

綾のきぬ麻の袂もすゞしきか(形容詞ニモツクカ)けふ夏川に大祓して(貴賤夏祓、重胤)

(3) 名詞について。

(イ)　文を結ぶ。

面白の景色や　　有りがたの事や

玉にもぬける春の柳か

とゞむべきものとはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふ心か(古)

嵯峨野路や秋の行くへをとめくれば雙が岡に時雨ふるなり(椎名ひで)（の野のカ＝井手今滋）（にノ格ニヤ）

(ロ) ヤのみ呼格をなす。場合によりては接尾語風に「金やは………」「坊やも………」など用う。

人々の蝶や花やとめづるこそ………(堤)

孃や入らつしやい

檀越や然もな言ひそてこら我が課役はたらば汝もなからかむ(萬)

何となく花や紅葉を見る程に春と秋とは幾めぐりしつ(風雅)

此の花や紅葉は並立格と見るべきが、感嘆なるは倚呼格より來たるなり。頼政集中、小侍従が歌に「雪とだに見るべき花のなどやさは雨やみぞれとふらむとすらむ」とあるも是なり「歌や詩」「忠岑や躬恒」などは前に言へる疑の並立なるべく、並立のヤに二様ありといふべし。

世の中はうきふししげし篠原や旅にしあれば妹ゆめに見ゆ(新古)

古池や蛙とびこむ水の音

三島江や露もまだひぬあしの葉につのぐむほどの春風ぞふく(新古)

朝霧やたつたの山の里ならで秋來にけりと誰かしらまし(同)

獨立格として修辭上一種の意義を含むるもあり。

此ロ乎不答之ロ(記上)

八千矛の神の命や(記)
汝がみこやつひに知らむとかりはこむらし(記下)
この蟹やいづくのかに(記下)
(ハ) 語句の中にも
すく〳〵とわがいませばや木幡の道にあはしゝをとめ(記中)
(4) 副詞・感動詞につく。カは少し。
是においてか君子なり
さぞやおもしろからむ
よしや免るとも
誠や人は感情によりて動くものなりけり
今や文運隆盛　此の日や天氣晴朗　いなやおもはじ　すはや　いでや　やよ
や　あはれや
又候や牛馬の年を重可申候(丈山)
秋は來ぬ今やまがきのきり〳〵すよな〳〵なかむ風の寒きに(古、物名)
(5) ャのみ順態假定前提法に附いて願の意をなす。(是は希望の助動詞の處に言へり)
さ月來ば鳴きもふりなむ時鳥まだしき程の聲を聞かばや(古)

あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや(後撰)

(八) 疑詞とヤカ

(1) ヤカの別　極めて言ひ難し。されど其の差の語調にあるは疑ふべからず。ヤは軟に婉曲にて、其の方より言へば意深し。カは硬く急に、其の方より言へば意淺し。此の兩辭はニヌとトツとの關係に相似たり。されば

故郷のならしの岡の時鳥言傳やりき如何に告げきや(萬)

を「告げしか」又は「か告げし」といひては全く作者の意と異なる者となる。「思ヒキヤ」を「思ヒシカ」といふも當らず。「月カモ」を「月ヤモ」と言ふは、さる語もなくよしありとも相應せず。「景色ヤナ」を「景色カナ」といふ時は強き樣なれど意薄く聞ゆ。又ヤカの用法の差ある處よりも推量るべし。ヤは終止を自然に受け、カは連體を體言として受く。ヤは命令に附けどもカは然らず。ヤはニに親しくニヤといひ、その意にてヤラムよりヤラといふ語を作り、カはトに親しく、トカと結合す。又

(2) 疑詞にはカを添へてヤを添へざるを本則とす。「イカデカ」「何カ苦シカラム」「誰カ言フ」「イツカ」など最自然なる語調なり。

荒れにけりあはれ幾代の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ(古)

誰が爲に引きてさらせる布なれや世を經て見れど取る人もなき(古)

さを鹿の妻とふ聲も如何なれや夕はわきて悲しかるらむ(千)

此等のヤは疑問詞に附きたる變例の如くなれど、熟考するに然らざるが如し抑疑詞には疑ふあり、問ふにもなれど、唯不定不明の者を大凡にいふ「某」の如きものありて、此は下の結には係らぬなり。前に擧げたる「幾めぐりしつ」の如き是なり。其の外「何時解くべしと見えぬ雪かな」「道のくは何處はあれど鹽竈の浦こぐ船の綱手かなしも」(古)「長濱の眞砂の數も何ならず盡きせず見ゆる君が御代かな」(金)など此の例なり。今右の三歌の如きも、イクタイカの疑詞は下の語に係ることなく「幾代ノ宿ナリトテヤ」「……布ナリトテヤ」「イカナリトテヤ」とやうに、ヤの前にて切れたれば、それを普通のヤにて受けたるまでなりと思はる。(「詞の玉の緒」「廣日本文典」の說は異なり)又

　程もなく戀ふる心は何なれや知らでだにこそ年は經にしか(後拾)

　山かげに住まぬ心はいかなれや惜まれて入る月もある世に(新古)

此の例なるは「ナルゾ」の意にてヤは感嘆なりといふ說もあれど、前例の如く「何ナリ」「イカナリ」と切れたる意味のものに附きたると見る方、妥當なるべし。口語「何デス」「何デスカ」「何デスネ」「何デスカネ」など參照すべし。

　世の中は如何にやいかに風の音を聞くにも今は物や悲しき(後撰)

　大方はなぞや我が名の惜しからむ昔の妻と人に語らむ(同)

　琴の音はなぞやかひなき棚機のあかぬ別を引きし止めねば(拾)

　などやかくさも暮れがたき大空ぞ我が待つことは有りと知らずや(千)

梅が香はしるべがほなる春風の誰が行くへともなどや吹き來ぬ(風雅)

いつぞやも花の盛に一目見し木のもとさへや秋はさびしき(總角)

此等の中「イカニヤ」は感嘆なりとし、其の他は特例なりと云ふ舊說なれど、愚考には「イカニアリヤ」「ナニゾヤ」「ナニトアリテヤ」とやうに直接に係るにあらで、疑詞ありて而も其の意の上にて切れたる者をヤと受けたるにて、尋常の疑のヤにて差支なしとす。かくておのれは「いづれ勝れり」「我は何なり」などの類も實は奇にあらずとし、「何ナリヤ」をも是認する者なり。隨つて書簡文に

如何に候ふか

は例も無く、且相應せぬ調子なり。「イカヾニ候フ」と切れたるものをヤと受くる、更に難なし。「如何哉(イカヾヤ)」といふも「候」を略したるにて不可なし。「何カアル」などやうに疑詞に直に附きて下の語を起す者との區別を見出すはさして難からじをや。萬葉集二の飛鳥皇女殯宮の歌に

何しかも吾が大君の立たせば玉藻の如くころぶせば川藻の如く靡かひしよろしき君が朝宮を忘れ給ふや夕宮をそむき給ふや

とあるも「何シ」に直接にカと附き、「ナニシカモ忘レタマフ、ソムキ給フ」と切れたる語をヤと受けたるなり。

何ぞ怪まむや

いかでさる理あるべ{けむや／きや／きか}

此等も從來は感嘆のヤなりと說き來たれど、かゝる場合に疑と嘆とを分つは口端にてこそはせられめ、眞正に區別するは難事なり。恐らくはその說者とても心の中にては明らめたらじ口語に「何デアヤシマウカ」「ドウシテソンナ道理ガアラウヤ」と言はむに、其のヤカを疑ならずと分けて心得つべしや。されば我は尙此等も疑とし、「何ゾ怪マム」「イカデアルベケム」「イカデアルベキ」と切れたるを受けたる者と言はむとす。難者或は「しか切れたる疑(反語)文ならば更に疑辭を附する謂なし」と言はむか然らず。現に此の口語は疑文に更に疑辭を添へたり。文にても「此は何なる」にて意は明なるに、更にカをそへて「何なるか」と云ふを以て知るべし。疑文は必しも疑詞を要せず、又疑辭をも要せぬものなり疑辭を添ふるは更に其の意を明にするのみにて、實は感嘆よりの變なり。

涙河流す寢覺もあるものを拂ふばかりの露や何なる(後撰)

聞くやいかに上の空なる風だにもまつに音する習ありとは(新古)

忘れぬやしのぶやいかにあはぬ間の形見ときゝしあけぐれの空(千)

春霞立てるやいづこ　主や誰

なども怪むに足らず。皆疑辭として難なし。此等疑詞に附ける者といふべきにあらず。但「イカニャ

聞ク」「立テルハイヅコヤ」(又イヅコナルヤ)「主ハ誰ヤ」(又誰ナルヤ)は無き例なり「イカニ聞クヤ」「立テルハ何處ナリヤ」「主ハ誰ナリヤ」は正例なり「ナリヤ」は「ゾヤ」と同じ。

(3) 特例　疑詞に附くヤ。

方言に「何ヤ」「誰ヤ」などいふは「ナリヤ」の義とすれば差支なけれど、今の口語の都べてカを用うるに對して正例にあらず。「何デスヤ」など亦然り並立格の

何やかや

など疑意ありとする時は此の特例なり。

あの鷹がや（トイフ）　あのこなたのまねをや（セヨトイフ）(擦過)(コレラ疑トモ感トモ見ラル)

何や（ダカ）けつたいどすけど(京都語)

二十五　よ　親愛・呼掛なるはヤに近く、少し指す意のあるはゾに近し。

(1) 名詞に附きて呼格をなし、或は文を起し、或は結ぶ。

皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ(古)

夏草の茂みに生ふるまろ小菅まろがまろ寝よ(ソレ)幾夜經ぬらむ(拾)

今はたゞそよその事と思ひ出でゝ忘るばかりの憂きこともがな(後拾)

世の中よ道こそなけれ　定なきこそ世の中よ

あはれ此の卿よ身を捨てゝ國と君とに盡し給ひしかひもなく流離の中に世を去り給ひし

ぞ痛ましき

此こそはよべもておはしたりし鈴よ(水鏡)

舞踏しさわぐよ　いかに年月の速なるよ　蛛の糸よりも心細さよ

玉の緒よ絶えなば絶えね

春の野に生ふるなきなのわびしきは身をつみてだに人のしらぬよ(拾)

その文よいづらとのたまへど(夕霧)

老いにけるよな(拾、秋)

連體法に附けるは其を名詞と見たるなり。

(2) 命令法に附く。

鳴けよ鶯　見よ　おはせよ

行きてよ(／アレ)　賊を討てよの詔

使人等聞給止倍與宣久　聞食止倍與宣(續紀、十九)

(3) 稀に終止したる語句に附く。

忘れずよ又變らずよ瓦屋の下たく烟下むせびつゝ(後拾)

忘れじよ夢と契りし言の葉は現につらき心なりけり(拾)

思はずよ越えて悔しき逢坂のせき止め難き涙なれとは(續後撰)

されば(サルコト)よと思ひあはせて(夕顏)

行くぞよ　　あるぞとよ

賴むぞよ天てる神の春の日に契りし末のくもりなければ(續後撰)

戀しとよ去年のこよひのよもすがら契りし人の思ひ出られて(平家、維盛)

夢かとよみしおもかげも契りしも忘れずながらうつゝならねば(新古、俊成女)

ふたゝび春は物を思ふよ(千)

人ははや人なみ〳〵にいでたちて沈みにしづむわれにあゆなよ(順集)

にくみ給ふなよと聞え給へば(澪標)

此等は慣用の例ありて、隨意に終止にヨを添ふること能はず。「心細シヨ」「疾シヨ」「來ヨ」「スヨ」「ナリヨ」「ケリヨ」などは都べて言はず。かくて終止に附くが極めて變例なるを知る、されど口語に

遲くなりますよ　　さうですよ

などいふは此の類の用法なり。

(4)(口語)　ろ　口語に上下一二段サ變の命令法に添ふるロはヨの轉訛にしてテニハなり。萬葉集十六に筑前志賀の泉郞の詠める

荒雄らは妻子のなりをば不念呂(オモハズロ)年の八歲を待てど來まさぬ(玉の緒繰分ニ「尊きろかもナドノろト同ジカルベシ」トアリ)

此の「念ハズロ」のロはヨと聞ゆ「見ロヨ」など重ぬるはロのヨなるを忘れて更に添へたるなるべし。

志太の浦を朝こぐ小舟さし寄呂吾佐平乘而成立志田乃浦乎美乎也

二十六　な　感嘆、ヨに似て指す意も呼び掛くる語氣もなく、咏むる方強し。モに近きも抑ふる意なし、略今のナネに同じく獨言にも言ひ、人にも言ひ掛け、同意協賛を得むと期待するにも言ふ。すべて文を結ぶ。

(1) 形容詞・助動詞(相を除き)の直說終止法、又命令法、或は終止せる語句に附く。

蟬の聲聞けば悲しな夏衣薄くや人のならむと思へば(古)

人言の賴みがたさは難波なる蘆の裏葉の恨みつべしな(後撰)

契りきな　あらじな　知らずな　思の外に心憂くこそおはしけれな(葵)

君と思ふらむな(帚木)　我は戀ひむな(萬)

水を賜へな(萬)　とへかしな

歸與(カヘンナンナ)(圖書寮嘉曆論語集解)

移りにけりな　咲きにけらしな

面白の景色やな　さればよな

見せばやな　思ひてあれな

宜なく　彼ぞ婿の少將な

某が敵人謀叛人と申上げ御前へ召出され頭を刎ねられんためな。よしく　それも力なし(鉢木)

露は袖に物おもふ頃はさぞなおく必秋の習ならねど(新古)

こゝは常陸の宮ぞかしな(蓬生)

捨てゝいにしうき世に月のすまであれなさらば心のとまらざらまし(新古、西行)

深からぬ外山のいほのねざめだにさぞな木のまの月はさびしき(同、良經)

袖にふけさぞな旅ねの夢もみじおもふ方より通ふ浦風(同、定家)

動詞の第三變化に附けるは皆禁止の助動詞にて、此處のと紛るゝことなし。萬葉卷一なる「巨勢山のつらく椿つらくに見乍思なこせの春野を」を舊來「見ツ、オモフナ」と訓みたれど、古義に種々誤を正して、見ツ、シヌバナ」と訓みたる極めて當れる如し。又同十三卷なる「珠手次懸而思名雖恐有」を「オモフナ」と訓めるはいかゞ、舊訓の如く、同十四卷なる「相模嶺の小峯見そくし忘れくる妹が名呼びて吾をねしなくな」を舊說「啼く勿」と見たるを古義には却りて感嘆のななりとせるは如何あらむ動詞の終止法には此のなのつける例、外に見ず。

(記中)「あしよゆくな」、(仁德紀)「うべなく我をとはすな」のなは未だ詳ならず。

(2)(古語)　動詞第一變化に添ひて希望を表す。是は話者の動作にも他人の動作にも附けて言

ふ(記傳三十一にムは己が上にも人の上にも物の上にも廣く用る辭なるを、此ナはたゞ自然せんとすることにのみ用ひて云々とあり)

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつゝ遊び久良佐奈(萬五)

夕さらば潮みち來なむ住吉の淺香の浦に玉藻刈りてな(てむ古義)(萬二)

みちのなか國つ御神は旅行も爲(シ)知らぬ君をめぐみ多麻波奈(萬十七)

消殘の雪にあへてる足曳の山橘を苞につみ許奈(萬二十)

家吉閑(萬)　いざ阿波那我ば(紀)

衆生濟ひ度したまはな救ひたまはな(佛足石歌)

いざ吾君(アギ)振熊が痛手負はずばにほどりの近江の海にかづきせな吾(ワ)(記、忍熊王辭世)

爲美斗能麻具波比(セナ(古訓))

此のナにムを添へたるが希望のナムなりとする說ありされどナムの誂なると此のナとは義異なり(おのれは曩にナムをば助動詞の變種としたれど、此の說も捨て難し)

第一變化につきてムに通ふもの。

ゆかな(萬六)　せな(萬九)

行きてはや見な(萬四)

死なと思へど(萬五)

裳のすそぬれな(萬十一)

佛足石の歌に美都々志乃覇止、奈賀久志乃覇止」とあるによれば「しのば」のみにて「しのばむ」と「む」を添へたる意あるにや「しのべと」とよむとすれば別なり。

否定に

新田山ねには都可奈那わによそりはしなる子らしあやにかなしも(萬十四)

しらとほふを新田山のもる山のうらがれ勢那奈とこはにもがも(同)

(3)(口語) 文語の(1)の外、終止動詞にも他語にも附く。

私はな行きませんでしたからな想像は出來ませんな

僕ならやるな　面白いな

……はいなあ
　　　のう

寺々の鐘つく奴は憎いな(狂言、花子)

是は聞き及うだよりは打開いた景のよい庭ぢやなあ(萩大名)

いかう早う來たな(釣女)

この花のもとにも又な生れなむいとひはてたる浮世なれども(近衞基熙、悠山の庭の櫻に行脚僧の結びつけたる)

命令に「讀ミナ」「御出ナ」「起キナ」など用うるは其の上に「ナサイ」を略せるにて、ヨミオイデオキは體

言なり。

疑問文にもつく。　何です（ね・な・よ）

諸詞につくな（なんノ義）(がニ通フ)

然もその手本な我等今日の………

喧嘩なその例證となりますので(澁柿)

泥坊な來て取つていつた(コレハなもなむノ轉カ)

手なふるへて　御馳走な藏いて

合戰ないたす　口上な以て

何格にもあり、卽ちなくてもすむ處に感辭を加へたるならむ。

○のをなとも轉ず。　おれなはよいなだ。

○撥言の下のははなになること。

二十七　かな　かも

是は複合辭なれど一辭の如くに用ゐらるゝにより、こゝに擧ぐ。カモは古し。

(1)　かと同じ所屬にて感歎を表す。語を結ぶ。

照る月の影きらめきて由比が濱よるしら波の面白きかな(佐々木高行)

大海の磯もとゞろに寄る浪のわれて碎けて裂けて散るかも(實朝)

洋々たるかな水

覺束なくも呼ぶこ鳥かな

年月の射るが如くもおもほゆるかな

「酒なくて何のおのれが櫻」かな

櫻花おもふあまりにちることのうきをぞ花におほせつるかな(俊成卿集)

白雲の八重降敷留還山還々曾老丹藝留鉇(菅家萬葉)

など名詞に直に附けるは上にナルなどを略せるなりとも言ふべきが、形容詞の語根に附きたる

あはれかな檜原杉原風さびてましらも鳥もかしましきさへ(拾玉)

などは奇癖なり。

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねてかへりにしかな(新古、十三)

朝夕になげきをすまにやくしほのからく煙におくれにしかな(新勅、十八)

こほれ梅こき紫の矜などのいとよく似あふ君なりしかな(大正八、四、心の花)

名詞の指定過去のかなは變なり、倣ふべからず。カナは口語ナ又はダナに當る。疑問のカにナを添へて言ふとは異なり。(原始にはカナのカにも疑問の意ありしならむ)

ぬす人うちうなづいてかの僧を引上奉り足下にひれふして實も哉とてそれよりもとゆひ

切則僧の弟子となる(伊曾保物語)

(2)　カモは疑問にもなり、文をも起す。

三笠の山に出でし月かも

戀ひざらめかも

今もかも咲き匂ふらむ

ひとりかも寢む

誰をかも知る人にせむ

否といはむかも　疑

嵐かも　寢せる君かも(萬二)　疑

おもほえむかも

嵐かも今來渡る

人乎熟見者猿二鴨似(萬三)

古語に「チカシカモ」「オムカシカモ」「乏穩(萬六)」など形容詞の終止に附ける者あるは變例なり、近文には倣ふべからず、又近頃一部の人の好み用うる「ンカナ」といふ方言は「之チ沽ランカナ(古訓沽之哉)」などの漢文讀より起れるなるが、此の「ンカモ」と語調似たり。

(3)　(古語)打消の「ヌ」を受けて希望の意をなす者あり。

出でゝ行かむ人を止めむ由なきに隣の方に鼻もひぬかも(古)
我が門の一村すゝき刈り飼はむ君が手馴の駒も來ぬかも(後撰)
吉野川行く瀨の早み須臾もよどむことなくありこせぬかも(萬)

此等は「飽カレヨ」を「飽カレヤハセヌ」などいふ如く、疑問より一轉せるものなり。

二十八　ね　親愛感嘆「ほゞナ」に同じ。

(1)　古語　第一變化に添ひて他の動作を希望す。

名宣らさね(萬)　榮えいまさね尊き我が君(同)
はや歸りこね(同)　鳥つ鳥鵜飼が伴はや助に來ね(記)
具して率ておはせね(竹取)
平けく舟出はしぬと親にまをさね(萬)
潮干なありそね(萬二)
野べの秋萩なちりそね(同)
柴なかりそね(萬七)
浪なさきそね(萬二十)
なふみそねをし(萬九)
犬なほえ行年(萬十三)

「雨ナ降リソネ」など禁止に附きたるものあるは、今の「フルナヨ」などに近かるべし。

なりをしまさに(萬)

はネの轉にて意は同じ(完了ヌの命令法なるネに混ずべからず)

(2) 口語　ナと略同じくして、語氣やゝ沈みたり。而して標準語として獨言にはネを用ゐざるを本體とすべし。ノともノウとも(方言ニイなども)言ふは皆同じ者の分れたるなるべきが、ノはオ列音なる丈、落ちつきたる心ちす。

感動詞に「のう我がつま角太ぬし」(八犬傳)など用うるも此の辭の轉にて俗にナウと書くは如何におぼゆ。もしはナの音便にてもあるべきか、いまだ究め得ず。

○薩摩にてはよの代にねを用う。(行けね、すんなね、さうしてはいかんね)

二十九　の　感嘆を表はす。

ちはやぶる神のみよゝり呉竹の世々にたえせぬ美阿閇爾阿布波乃。耶阿氣布乃美阿閇爾(日枝船記)

わがこひおもふわがせこを花のみさきて奈良受阿留波乃。阿耶たまかづらよの

君をのみしげみこちたみをのが世なればのヤアあさかわゝたる

花もさき鳥もなきて冬になり春さりくればのヤア春さりくれば

近代のうの短略のあり。

三十　が（がも、がな）

是は感嘆のカの轉にもあるべきか。希望を表す。（助動詞の段に說きたれど、體裁上此に重ねて記すなり）

(1)　名詞副詞にはモを添へたるに附く。モは物を緩めて指す意なり名詞は主格・副格なり。

ふりにし木の實なる時もがな

くる由もがな

池にすむわが名ををしのとり返す物にもがなや人を恨みじ（金葉七）

甲斐がねをね越し山越し吹く風を人にもがもや言傳てやらむ（古）

飛ぶが如くに都へもがな

此等はがの上にナラムセム物セム等の略語あるにやと大槻氏の考へたるもさる事なれど、又その下にアレシタシ物セム等と添へても通ずべく、とかく略言には相違あらじ。

わが命長くもがと（紀十四）

今も見るごと副而毛欲得（タグヒテモガモ）

彌乎必登母我聞（萬五）

奈羅倍弖毛餓望（紀十一）

加那須岐母伊本知母賀母（記下）

石竹之其花爾毛我（萬一）

等利爾母賀母夜。(萬五)
我が身たゞ今人と等しくてもがなむくいせむ(落窪)

(2) モを添へざる諸種の格(稀ナルカ)なる名詞に附く。

さらむ人をがな使はむとこそ覺ゆれ(枕)
いかで大納言をがな一たびなし奉りて(落窪)
枕をがなと忍びやかにいふ(千)
何をがな形見に姫に取らせむ(今昔)
熊谷あはれ猶よからむ敵がな組んで今一人首取らむと思ひて(盛衰)
さるべき人の娘がな言ひあはせむ(曾我)
いかなることをがなと風流をしいでゝもてまゐりあひたるに(大鏡、伊尹。行成ノ段)
芝居にがな行かう　　何がなあらうか

此等皆多少ナリトモデモドモなどの義あり。終の二例の如く、口語にも用う。但「日がな一日」などいふは「日が一日」にてなは離れたる嘆辭、「アナタガナハ此デセウ」といふは「アナタノハ」の意にてがは領格、ナも領格のノの轉なるべし。

(3) 動詞の過去のシを添へたるに附く。

心憂し深き山にも入りにしが(好忠)

秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがな(金葉)
耳無の山の口なし得てしがな思の色の下ぞめにせむ(古)
朝なくあがる雲雀になりてしが都に行きてはや歸りこむ(萬、二十)
此のガのみなるは準逆提法と同形なれど、之を結ぶ所にて明に區別すべし。
又かと淸みても用るしものか。
あまとぶや雁を使に衣氐之可母奈良の都にことづけやらむ(萬、十五)
須臾去而見牡鹿神名備の淵は淺而瀨にか成良武(萬、六)
中々に人とあらずば酒壺に成而師鴨酒にしみなむ(萬、三)
伊庶勿愛弖之可(萬五)

三十一　かし

終止完結せる語句を輕く抑へて咏嘆す。トヨサなどに通ずるもあり。平安朝以後の辭なり。かとしとの複合か。

とめ來かし梅盛なる我が宿を疎きも人は折にこそよれ(新古)
戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに(伊勢)
くもれかし眺むるからに悲しきは月におほゆる人の面影(新古)
とへかしなかたじくふぢの衣手に涙のかゝる秋のねざめを(同)
とへかしな尾花がもとの思草萎るゝ野べの露はいかにと(同)

さても君忘れけりかし鶯のなく折のみや思ひいづべき(大和)

光こそまさり給へかし(御幸)

女御のあまりやはらかにおびれたまへるこそかやうに心かけ聞えむ人はまして心みだれなむかし(若菜下)

人こそ心得ずおもひなげかむかし(濱松)

「これぞかの宮」かし(蜻蛉日記)

長きよの苦しきこととおもへかし何なげくらむかりの宿りを(詞花)

{見 / なし}たまひそかし(國讓下)

見ゆかし　　いとをかしかし

あはれなつかし　　しか覺ゆるぞかし

さは思ひつかし(桐壺)

うちひそみぬかし(帚木)

おほやけの世繼とぞ言ひ侍りしかし(大鏡)

嘸かし　　さかし(帚木)　　いざかし(若紫)

行けかしの仕向(シムケ)　　歸れかしに扱ふ

「ユケガシ」など連濁の發音をするは後世の訛なるべし。

○疑問文にかしはつかず。

三十二　さ　(口語)

ヨカシなどに近く、指定と感嘆との義あり。新しき辭なるべし。完結せる語にも、一語にも附く。

昔あつたとさ　まあ好いさ　それはだめさ

君がさしつかり御聞きよ　あれは僕にさ　だからさ行けないつてんだよ

(中橋文相ノコト)思ひきつて御用委員ばかり並べるさ(大正十、四、廿四、報知)

地方に因りてはシとも言ふ。同義なり。

さうだし　今日は雨ふるしい

そないな事は誰もいやだんべし

なもしといふ尾辭のしも是か。

三十三　を　「わ」　(古語)

重くるしき強めの感聲にて、體言・命令法・連體法に附けるはヨに近し。連用法・副詞などに附けるは自動詞に續くチに似て一種の調子を添ふ。

阿那邇夜志愛袁登古袁(記)

渡守渡船せをと呼ぶ聲の至らねばかも梶の音せぬ(萬)

こゝにてをめせ

昔も今も知らずとをいはむ(古)
こなたにをとてうちとけながら對面し給へり(蜻蛉)
いかでなほおほめかしくひがこと見つけてをやまむ(枕)
戀しくば下にをおもへ紫のね摺の衣色にいづなゆめ(古)
人しれずねたさもねたし紫の根摺の衣上着にをせむ(後拾)
伊せをのあま
怡奘過(神武紀)　　率和いで見む(萬)
かづきせ那和(記)
「香をだに匂へ」などのヲは此の辭に近けれど、尚(第一)のにてニの變なるべし。ヲヤヲバと續きたるにて、處置格にも準前提法にもあらざるものは此の感辭と見るべし。
されば言ひよりにけるをやとほゝ笑まれて(末摘花)
(惟盛ノ)今日はかくやつれ果て給へる御有様かねては思ひ寄らざりしをや(平家)
さる方にて捨てがたきものをばとて式部を見やれば(帚木)
あやしき女だにいみじく開くめるものをばさればとて(枕、心ゆくもの)
さはあらじものをや
「いはんや人に於いてをや」など用うるのみは今文にも存せり。此のヲヤはサなどに代へて可なり。

とく裝ぞきてかしこへをまゐれ(蜻蛉日記)

伊能知乎之またくしあらば有衣のありて後にもあはざらめやも(萬、十五)

その八重垣を

はつせ川白ゆふ花におちたぎつせをさやけみと見にこし吾を(萬、七)

大君の命かしこみさしなみの國にいでますや吾せの君を(萬、六)

三十四　い　(古語)

主・領格のがに近きもあり、モノヒトに當るもあり、名詞及連體形の體言に附く。一種の感辭なり。

吾がせこが跡ふみ求め追ひ行かば紀の關守い止めてむかも(萬)

ありち潟あり慰めて行かめども家なる妹いいぶかしみせむ(萬)

玉のをの絶えじい妹と(萬三、長歌)

否といへど語れ〱と詔らせこそ志斐いは奏せ强言とのる(萬)

向つ丘の若楓(カツラ)の木下枝とり花待つい間になげきつるかも(萬、七)

是を以ちて王たち大臣の子等治め賜ふいし天皇が朝に仕へ奉り姿々に仕へ奉るにはあるべし……子は祖の心なるいし子にはあるべし(聖武紀)

此を持ついは稱を致し捨つるいは謗を招きつ(孝謙紀)

橘守部の「助辭本義一覽」に、此のイをヤヨの通音にて呼び掛くるより出でたるなりといへる一種

の見解なり。朝鮮語イは主格助辭なれど、それとは異なる様なり接尾語風なる所もあるか。

三十五　ゐ　(古語)　ヨに似たる感辭なり。完結せる者に附く。(わゐそゐのゐはこの辭なるべし)

山のはに味村さわぎ行くなれど我はさぶしゐ君にしあらねば(萬)

上つ毛の佐野のくくたちをりはやし吾(アレ)は待たんゐことし來ずとも(萬)

於毛布惠爾安布毛能奈良婆之末思久毛伊母我目可禮弖安禮乎良米也母(萬、十三)

心はよしゐ　ことなぐしゐ(記)

ゐくるしゐ(記)

構へて直垂放すなえ(ナホ感辭ナラン)(大磯虎稚物語)

三十六　やし　(古語)　複合辭にもあるべきか。調子を整ふる感辭と見ゆ。「靑丹よし」の「ヨシ」に似たり。

よしゐやし浦はなけども(萬)

大君の帶のしづはた結び垂れ誰やし人もあひ思はなくに(武烈紀)

はしきやし君が使の(萬)

あなにやしふたぎの原(萬)

陀黎耶始比登(繼體紀)

三十七　のみ
三十八　ばかり　　二辭共に單一を表す。

(1)　名詞副詞及動詞形容詞の連體形に附く。其の連體形は下の體言を含めるなるべし。

我のみ行かむ　　音のみ泣く　　ひとりのみ眺む
今年のみ散る花ならなくに　　をぐらの山は名のみなりけり
君ばかりは殺さじ　　酒ばかり飲む
今日ばかり曇れ近江の鏡山
今年ばかりは墨染に咲け
名ばかり留めおく
「名にめでゝをれる」ばかりぞ
彼は「時に遇へる」のみ
人知れぬ大内山の山守は木隱れてのみ月を見るかな
泣いてばつかり居るわいな
そは「言語の巧なる」ばかりぞ
「今來むといひし」ばかりに
我を知る人は君のみ君を知る人も多くはあらじとぞ思ふ

けふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花の蔭かは(古)

打ちつけにことしや花の色をみむおく白露のそむるばかりを(古)

春くればさくてふことをぬれ衣にきするばかりの花にぞありける(後撰)

御胸のみつとふさがりて(桐壺)

さをしかのなきてかれにし朝より雪のみつもるしがらきの里(景樹)

梢ふく風も夕はのどかにて數ふるばかりちる櫻かな(同)

ノミにて文を結べるは下にナリゾなどある心なり。バカリは下に何ぞありて、省かず漢文讀に用うるノミはコソなどに通ふ者多し。是は一に限る意より強く指すことに轉じたるなり。

誤れるのみ　誤れるにこそ

他の辭と併用する時に、其の前後によりて意義の變ること多し「君ノミヲ思フ」は他の人を思ふことより限り、「君ヲノミ思フ」は他事なく君を思ふにて「君ヲ思ツテバカリ居ル」なり「君ヲ思フノミ」は他事にあらず君を思ふ事にて「君ヲ思フバツカリ」なり。前例の中にても「君ノミナリ」と「誤レルナルノミ(ナリ)」と聞方異なるべく、「名ニメデ、ノミチレルゾ」といひては遍昭が歌には合はずされど又前後の別なき樣なる場合もなきにあらず。「君ノミト遊ブ」「君トノミ遊ブ」は同義にも用うべく、異義にも用うべきが如し。而して大體に於て「君ノミト」は君にかゝり、「君トノミ」のノミは「遊ブ」に係る語氣にて、最タヾといふ副詞の用に似たり。

のみを略せる語。

これならず多し

海ならずたゝへる水の底までも

のみはこそに近くなる。

海とのみ圓居の中はなりぬめりそながらあらぬ影の見ゆれば(後、十五)

石をのみ玉といだきて(景樹)

(2) ノミは熟語動詞の中に挿る。

沖つ浪荒れのみまさる宮の内は(古、長歌)

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり(古)

新しき春さへ近くなりゆけばふりのみまさる年の雪かな(拾)

見し人はかれ〴〵になる東屋に茂りのみます忘草かな(右京大夫)

此等は多き例にあらず「考へテノミ日ヲ暮ス」なども似たる例にて、連用法にテを添へたるのみなれど副詞になり變れる者と見たり。前に擧げたる「泣イテバカリ居ル」は此の熟語の中なる者とも見らるれど、テを添ふる所異なれば、まづ副詞に準じて扱へり。「虎とのみ用ゐられしは昔(ノミ)にて今は鼠のあな憂よの中」など位置を變へて聞ゆる所、前例に似たり。

(3) バカリは動詞の終止せるにも附く。是はマデの終止を受くると同じき古き特例なり。

雲居にも通ふ心のおくれねば別ると人に見ゆばかりなり(古)

消え果てゝやみぬばかりか年を經て君をおもひのしるしなければ(後撰)

かくと聞きつばかりの御言の葉をだに(堤中納言)

(4) 口語はバカリのみを用うるを本體とす。

(5) バカリは丈程位等の義に轉じ、接尾語となる是はマデの轉用と同じ趣なり。

曉ばかりうきものはなし

三年ばかり研究せり

死ぬばかり思ふ　　泣きぬばかりにいふ

連體 丈 いはぬばかりなり(玉の小櫛)　連體 丈ノミ をれるばかりぞ(同)

わが戀はいはぬばかりぞ(新古) 程

死なむばかり(正)　　死なぬばかり(詭トモイフベカラザルカ) 單一

御咨をとらぬばかりにし給ふ(紅葉賀)

ノミには此の用法なきに、

さ{のみ}おもしろからず
かく{ばかり}拙き身ながら

などの場合のみは兩者通用するなり。すべてノミバカリの區別を考ふるに、ノミは今のバカリに

換ふべく、バカリはダケに換ふべき節あり。又接尾語ならぬバカリは新しく平安朝頃より多く用ゐたりげなる外は、取り立てゝ定めがたし。「あゆひ抄」には「ノミは事の心を主とし、バカリは物の様を主としていふ」といふ說あれど、むづかし。

三十九　だに　口語にはなし。サヘデモナリトに當る。

四十　すら　口語同じ。又はモデモナホヤハリ。

四十一　さへ　口語には無し。併加のマデ又はカラなどに當る。

此の三辭一つを擧げて他の事物を下に對比推量せしむる義あり。而してダニは消極、サヘは積極、スラは中間にあり。今の口語とは頗差違あれど、前揭の如く心得れば誤なし。但其の積極と消極となる兩極端のダニサヘの今は反對に用ゐらるゝ如く、ふと通じ言ふべき節ありと見えて、古くも兩傳ある者無きにあらず。

飛鳥川明日谷(イ左倍)見むと思へやも我が大君の御名忘せぬ(萬)

命だに(イさへ)あらば見つべき身の果をしのばむ人の無きぞ戀しき(新古)

音にだに(さへ千載)たもとをぬらす時雨かな槇の板屋の夜の寢覺に(金葉)

雄嶋のあまの袖だにも(春樹抄ニさへニカヨフトアリ)

此等はだにの方正しかるべし。

風吹くに雨さへ降る

我すら衣食に苦むに云々

衣食にだに勞せずば結構なり

夢にだに見む

風は吹くとも雨だに降らずば行かむ

母君なくてだにらうたうし給へ(桐壺)

鳥すら親を養ふことを知る(場合ニヨリテハだにトモさへトモイフベシ)

此の三辭は名詞・代名詞・副詞・動詞・形容詞などの此等に準ずべきものに附く。口語の外は其の下に格に關する辭を添へざる所、ノミバカリと趣を異にす。

三輪山をしかも隱すか雲谷裳心あらなむ隱さふべしや(萬)

深草の山煙だに立て

再とだに來べき春かは

はかなきことだにかくこそ侍れ(帚木)

春日すら我が待つ人の來じとだに言はずば明日もなほ賴まし(貫之)

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常磐の樹(萬)(此等カラト當テタシ)

梓弓おして春雨けふ降りぬ明日さへふらば若菜つみてむ(古)

月をだに飽かず思ひて寢ぬものを時鳥さへ鳴きしきるかな(六帖)

言問はぬ木すら春さき秋づけば紅葉散らくは常を無みこそ(萬)

瀧の音をいかに聞くらむ都すら物あはれなる頃にはあらずや(御堂集)

君すらも誠の道に入りぬなり獨や長きやみに惑はむ(後拾)

鬼すらも都の内と簑笠をぬぎてや今宵人に見ゆらむ(躬恒)

香さへなつかし山吹の花

香をだに匂へ

夜さへ見よと照す月影

夜だに自由の身なれ

「いつよりも曇なき夜の月なれば見る人さへに入り難き哉」(後拾)は副詞をなせるものゝ如し。實朝の歌に「物言はぬ四方の獸すらだにもあはれなるかな親の子を思ふ」など重用せるは奇癖なるべし。土佐日記の「祈り來る風間と思ふをあやなくも鷗さへだに浪と見ゆらむ」とあるはサヘタヾとある本に從ふべしとの事なり。「恨みわび乾さぬ袖だにあるものを」は、アルの上に云々樣と語を入れて見るべし。又ダニのみは熟語動詞の中に挿ることあり。

讀みだに習はゞ悟ることあるべし

尋ねだに來よ

ダモといふもあり。ダニモの約なるべけれど卑しく聞ゆ。

ノミ以下の五辭、意義を添ふる所は接尾語にも似たれど、さりとて此等をそへて定りたる某詞をなすにあらず、又他辭との關係を表す所も接尾語よりは著しきに因りて、テニヲハに攝したり。固より此等の意義は副詞を用ゐても表し得るものなれど、しかせずしてテニヲハを用うる時は、意味は似てもあれど言葉は異なるなり。

第二節　複用辭

四十餘のテニヲハ大抵他と合せ用うる中に、つのみは全く單用に限る。口語の中の四辭よ　な　ね　さ　は間投的に、又一塊團と見ては如何なる者の下にも添ふ。之を除外する時は、　ども　ど　とも　と(法)　し(法)　なども單用の者なり。口語の「ケレドモガ」と續くるは妄なり。又なむは他の下には附けど、他辭を添へず。

さて他と合するにも、法のテニヲハは他辭の下に附くまじきこと自然の理なるが、格のは意義によりて互に上下することあり。コソの如く他の下にのみ結合するあり、ノミの如く上にも下にも結合するものあり。およそ二個以上のテニヲハの並べる場合を數ふれば、三百以上に上る。今その主なるものゝ上辭によりて次第すれば左の如し

てにをは結合一覧

が　ノ、ニ、ハ、モ（上を名詞に見なしてなり。口語のデはニの中に攝す。口語のヨ、ナ、ネ、サはすべて略す。此の類以下一々注せず。）

の　ニ、ヤ(感)

に　ヲ(感)ト、ヨリ（ト、ヨリの上に省略あり）マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、テ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ

を　ト（上に略あり）マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ

で　ト、ヨリ、カラ（以上上略あり）ノ、マデ、ハ、モ、コソ、カ、ノミ、バカリ、サヘ、スラ

へ　ト、ヨリ（比較）（以上略）ノ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ヲ(感)

と　ガ、ノ、ニ、ヲ、ヘ、ヨリ、カラ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、テ、ノミ、バカリ、ヨ、ナ、ダニ、サヘ、スラ、ヲ(感)

より　から　ガ、ニ、ヲ、ト（以上略）ノ、ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ

まで　ガ、ノ、ニ、ヲ、ト、ヨリ、カラ（ヲ以下に上略）ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ヨ

ば	ノ、ゾ、ナム、コソ、ヤ、カ、　ミ、ヨ
て	ノ、ト、ヨリ、カラ、マデ、バ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ヨ、ナ、ヲ(感)
つゝ	ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ヲ(感)
は	モ、ゾ、シ、ヤ(臨終を今ハといふ時は全く一名詞と變ず)ナム、ハ、ヨ、ナ
も	ゾ、コソ、ヤ、カモ、ガ(願)(何時モは名詞に見なさる)ナム、ヨ
ぞ	ノ、ハ、モ、ヤ、ナ、ヨ、カシ(何處ゾは名詞に見らる)
し	ガ、ノ、ニ、ハ、モ、ゾ、コソ、カ、カモ
なむ	
こそ	ハ(「サレバコソナ此の報」などは俗の私造なるべし)　ニ(古)
や	ガ(並立のみ)ノ、ハ、モ、ゾ、シ、ナ
か	ガ(並)ハ、モ、ヤ、ヨ、ナ(何カは名詞に見らる)
よ	ヤ、ナ、シ、カシ
かな	ヤ(「悲シキカナヤ」など)
ね	ヤ(方言「サウダネヤ」など)
が	ナ、モ、モナ

かし	ナ、ヤ
を	バ、ヤ
い	ハ、モ、シ、ト（此の時イは接尾語の如し）
ゑ	ヤ、ヤシ
のみ	ガ、ノ、ニ、ヲ、ヘ、ト、ヨリ、カラ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナム、コソ
ばかり	ヤ、カ、ヨ、ダニ、サヘ、スラ
だに	モ、ゾ、ヤ、コソ
さへ	ガ、ノ、ヲ（以上口語或は方言）ニ、ゾ、ナム、コソ、ヤ、モ、ハ
すら	ガ、ノ、ヲ、ニ、モ、ヤ

（未定稿）

此等の中には口語ならでは用ゐざるも入りたり古語なるか、尋常ならざるか、又は一ふしあるものは、例を擧げて少しく説明せん。

一　がに　がは

御てぐらは我がにはあらず天にます豐岡姫の神のみてぐら（神樂歌）

私がは(も)それでない(方言)

二 のが　のの

いなといへど強ふる志斐のが強語この頃聞かずて朕こひにけり(萬)

日の暮に碓氷の山を越ゆる日はせなのが袖もさやに振らしつ(萬)

志斐は氏なり。その下にのあるは更に下に嫗君などいふを略せる親愛の語法にて、のなきとは大に異なり。略解に貴ぶ意ありといへるは當れるを、古義に排したる、中々にひが事なり。今も地方によりては「石川の御父様が」といふを「石川のが」といふ。それを「石川が」といひては見下したる言様となるなり。「せな」は「夫」なり。「せなの」といふ時は「夫ヂヤ人」などいふ其の「人」を略せるが如き語なり。今は「細いの(筆)の鞘」など、ののと續けて言へど、昔は之を避けてのがといへるなり。

三 にを　にし(は、ぞ、も)　にと　により　にまで(にてモコ、ニ附說スベシ)

命毛のあらむ限は書きつくす筆にをならへ丈夫の伴

今心のどかにを(末摘花、大輔命婦詞)

戀しくば下にをおもへ

思ふにし我が身はやせぬ嘆くにし袖さへぬれぬ(萬)

世の中にあらばぞ人のつらからむと思ふにしもぞ物は悲しき(後拾)
之をば貴君に(上ゲン)と思ひて持ち参れり
　貴君に(上グル)より外に上ぐべき人なし(にを略することもあり)
故障多之天今爾末天忌太利(文徳實錄、八)
樺太にまで行けり(此のまで到着と併加と兩つの場合あり)
(惟光詞)むかし女房のあまにて(ミシテ・ナリ)侍る東山のへんにうつし奉らむ(夕顔)
めのとにて(ニテタレリ)侍るものゝこの五月の比ほひよりおもくわづらひ侍りしが云々(同)
いと赤らかに淸げにて(必用)おはして(落窪)
鼻こそ中にをかしげにて(不必用)おはすとこそいはるめれ(同)
冷泉院の御有様のみぞ(ゾイ)…………くちをしき事にてはおはします
(左大臣)は家ひろき人にておはしける(竹取)
さやうにてあるべき女にはあらず(伊勢物語)
○海の上にたゞよへる山いとおほきにてあり(竹取)
○かくわづらはしき身にて侍れば(同)

四　をまで(現代併加)　をば　をし　をや

舟をしぞ思ふ　此をしも忍ぶべくば
命をしまたしあらば(萬十五)
○をと　特種の變例か。
汝乎與吾乎人ぞさくなるいで吾君人の中言聞きこすなゆめ(萬四)

五　とが　との　とに　とを　とより　とまで　とし　とは　とも
とや　とな　とよ　とて

花と月とが第一の眺なり(並主)
花と月との眺
暴風あらむとの警戒
風と雨とに惱む
人はいさ我は無き名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ(古)
花とより外に見えず(略語あり)
急ぐとしもはなけれども
夢がたりとまで聞く(浮舟)
末の代もさるべき人や出でおはしまし難からむとまでこそ見給へりしか(大鏡)

年毎にあふとはすれど棚機のぬる夜の數ぞ少かりける(古)
たのむかげなくなりはてゝとまるものとは花薄君なき庭にむれたちて(伊勢、長歌)
めでたしともめでたし(前節八ノ(4)參照)
この玉は本物にやそれとも硝子にや
此の上とも御願申上候
梅の花ありと(オモヒテ)やこゝに鶯のなく(古)
飛ぶかりがねの數を見よと(イフコトニ)や(古)
世の人々あべの大臣火鼠の皮衣をもていましてかぐや姫に住み給ふとなこゝにやいます
などとふ(竹取)
よい〳〵よおいとなあ
なに來客とな
我妹子がしのびにせよと附けし紐絲になるとも我は解かじとよ(萬)
やよや待て山時鳥言傳てむ我世の中に住みわびぬとよ(古)
大宮のほりに處やは侍りしとよさばかりの事こそ此の世には候はね(大鏡)
夢かとよ見しにもあらぬつらさかな憂きはためしもあらじと思ふに(狹衣)
元曆元年の頃かとよ云々

此度などやらむ逃げ憂きぞとよ(平家、頼盛の詞)
明日の軍には必討たれむと覺ゆるはとよ我いかにもなりなむ後、人はいかゞはし給ふべき
(平家、小宰相)
まことはうつし心かとよ（反語）たはむれにくしや(紅葉)
却つて景親に襲はれぬと覺ゆるぞとよ(盛衰、頼朝の詞)
乘せまじいとよ(七騎落)
だめなんだとよ
さきぬとて人もみに來ぬ木がくれのあたら櫻の花の色かな(宣長)
けふは老も忘れうき世のなげき皆さめぬる心ちなむとても又ない給ふ(朝顔)(とてはハ常ニアンバ、コレモアルベシ)
朕方佛乃御弟子等天(之ヲ補フ)(三十八詔)
とは副格と並立格とあるにて、結合にも兩種あり。とには並立のなり。副格のはなし「とにかく」のとには副格のなれど、此處にてはとは名詞の代をなせば、此の結合には取らず。古今集なる前のとはは下の「すれど」と共に尋常ならず聞ゆるが、スレドをイヘドに代ふれば聞き易きなり。前例のともは尋常の「何トモイハズ」などは異にて、ナガラの義あり。ソレトモは乍併或又の意「此ノ上トモ」は「此ノ上ナガラ」と換ふべし。

されど其の原義はとはにに通ふ者にて「ソレニモ關ラズ」「此ノ上ニモ」といふなるべし。となの少し問ひ懸くる意あるは「來客ト云フナ」の意にて、トヤトカに通ず。とよには噂する他說と、自己の上をいふ自說との二種あり。之を補足すれば「ト人ガイフヨ」「ト我ハ思フヨ」にもあるべきか。更に言へばトにヨを添へて感嘆せるのみなるもあり。其等は後に說く口語のテヤ又はテヘバに通へり。

○「一つとや」「一つとせ」のやせは調子の聲にて助辭となりかけたるものか。

六　からが　よりか　よりかも

見たからが氣に食はん（見タ所カラ）

それよりか（も）此方がよい（カを除くべし）

今よりだに用意し給へ（乙女）

處からさへ身にしみて思へり（榊）

參らむ程までだにひなびにいらへ聞えし（和泉式部日記）

七　ばの　ばや　ばよ

さればの事にて候ふ

心あてに折らばや折らむ

富士山に登らばやと思ひ候ふ

さらばよと別れし時にいはませば我も涙におほほれなまし（後撰）

片岸の松のうきねと忍びしはさればよつひにあらはれにけり（拾遺）

古も今も心のなければぞうきをも知らで年をのみふる（後撰）

参り來つることはしかぐ\のたまはせしかばなむ（俊蔭）

つきばのみこそ（萬六）

稱德大嘗會の詔に「汝タチ闕ニ仕奉禮方之奮云々」とある、一本之を己に作れども、ばしぞといふ接續は有るべく覺ゆ。

八　てし　てを　てな　てや

一人だに似てし行かねば（萬）

おびてし行かむ（萬、十九）

萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも（古）

君が代も我がよも知らむ岩代の岡の草根をいざ結びてな（萬）

復習してや來つる

口語「おゝてや」「もう歸らうてや」などいふは「云フヤ」の略にてトヨには通へど、此の辭とは異なり。

九　はも　はぞ　はし　ばし　はや

火中に立ちてとひし君はも(記)
我はもや安見子得たり萬
我はぞ戀ふる(萬)
これはし十人の子にていとゞ五月にさへ生れてむづかしきなり(大鏡、序)
遺恨ばし　む
愚なりとばし見給ふや
夏衣の薄き契は今はしや君が命は長き夜の月にはとてもねられぬにいざ〳〵衣うたうよ(砧)
底深き池におふてふみくりなはくるとは人に語りばしすな
少將殿の御心にばし違ひまゐらすな
すゑはししらず(萬十二)
必聲はし立な(太閤記)
釜ばしも引きぬかれなばいかにすべきぞ(更科日記)
つまおぼえて調べられたる御琴どもかな人のえせぬはや(コトデヤワイナ)(俊蔭)

我が心かくさじはやとおもへども見る人もなし知る人もなし(玉、四)
参り並ぶ人けしうはあらじはやとおしはかり聞ゆ(葵)
ばしははしと同じく、バカリをバカシ、バシと略せるとは根本異なるべし。

十　もぞ　もこそ　もな　も(や/よ)　もなむ

石橋に生ひ靡ける玉藻もぞ絶ゆれば生ふる、打橋に生ひをゝれる川藻もぞかるれば生ゆる(萬)
忍ぶることのよわりもぞする
人もぞ來る　　おもひもぞつゝ(危ム心アルモノ多シ。かも知れぬノ意)
ひとへなる人もぞあるとよをしればうすきふすまもさえぬ夜半哉(多々良政弘拾塵集
うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風(新古)
棚機の久しき程に待ちもこそすれ(古)
現にはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしさ(古)
鳴くとのみ我が心から思ふかな月には歌ふ蟲もこそあれ(村田春海)(コレハ未來ニアラズ事柄ヲオモヒヤレルナリ。コノ例昔モアリヤ)
うちはへてしめかざりせる門松に神代ながらの雪もこそふれ(胤平)
音高しもな(萬)　まぎらはしもな(萬)

住みすてしその故里を改めて昔にかへる心ちもやする(山家集)（眞ノ疑問）
かたまもよ
もちどりのかゝらばしもよ(萬、五)
しりひかしもよ(萬、十四)
あはもよ(記、下)　おきめもよ(顯宗紀)
ぬでゆらぐもよ(顯宗紀)
人の上にても今は忘れてもなむ(藤原君)（輔純ノ詞）
疑問に附けるもは合せて一詞の如く扱ひてガノニチなど添ふ。もぞは奈良時代にはもの輕きものもあれど、平安以後には必想像「カモ知ラン」といふ意味に用ゐ、下にはムの想像を略す。もこその下にムなきも皆其の意なり。

十一　ぞの　ぞは　ぞも　ぞや　ぞよ　ぞな

憂き人の月は何ぞのゆかりぞと思ひながらもうち眺めつゝ(新古)
何爲れぞの者ぞ
かへる山何ぞはありてあるかひは來ても止らぬ名にこそありけれ(古)
あはれてふ常ならぬ世の一ことも如何なる人にかくるものぞは(竹川)

色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも(古)
蚊遣火を間近く立てゝ山がつのおのれ煙にむせぶ何ぞも(堀川百首)
何ぞもぞなどさうどきて(竹川)
いさりせし海人の教へし何處ぞや(疑ナリ)島めぐるとて有りといひしは(拾)
何時ぞやも花の盛に一目見し木の本さへや秋はわびしき(總角)
頼むぞよ天照る神の春の日に契りし末の曇なければ(慈鎮)
さるにより難き世ぞとは定めかねたるぞや(帚木、中將詞)
この世になれぬまめ人をしもこれぞなくとめでゝ(槇柱)
もてはなれたる事ぞよ(朝顔)
是は仲頼ゆきまさぞな(宇都保、國讓)
是は名主たりし涼(スヾシ)、仲忠ぞな(同)
ぞなは口語に「行ケンゾナ」など用うる地方あり。
ぞのは略なると同じ位の語なり。
(實成顯信ヲ)出家相近くなりて見えつれいくつぞよ(疑問文ナリ)とのたまひければ(能信十九カト答フ)(大鏡、七)

十二　しが　しの　しに　しは　しも　しこそ　しか

一文字を知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ(土佐)

誰しの人か之を仰がざらむ

何しに來つる

常に八聲鳴くにしはあらず(奥儀抄)

時しはあらむを(萬、四、十七、十九)

浦風に物思ふとしはなけれども波のよるこそねられざりけれ(續古)

折しもあれ(ドノ義アランカ)　必しも然らじ

宜しこそ吾が大君は君のまに聞し給ひて刺竹の大宮こゝと定めけらしも(萬)

何時しか櫻はやも咲かなむ(古)

何しかも見捨て給へる(萬)

大原や小鹽の山もけふしこそ(六帖)

古のさおりの帶を結垂れ誰之能人も君には益さじ(萬、十一)

十三　やの　やは　やも　やぞ　やな　やし　かなやな　かなや

夕されば思ぞ緊き待つ人の來むや來じやの定なければ(後撰)

散る花の鳴くにし止るものならばわれ鶯に劣らましやは(古)(是ハ反語ナリ)

世の中は昔よりやはうかりけむ我が身ひとつの爲になれるか(古)(是ハ疑ノミ)

驚かむと思ふ心のあらばやは長きねぶりの夢もさむべく(山家、下)

をのこやも空しかるべき後の世に語りつぐべき名は立たずして(萬)

紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわがこひめやも(萬)

こゝにして家やもいづく白雲のたなびく山をこえて來にけり(萬)

常しへに君もあへやもいさなとり海のはまものよる時々を(衣通姫)

世の中をうしとら言はゞ片時も在り經なむやぞ忍ぶればこそ(好忠)

あな面白の景色やな

うれしやな(夫木)

あな心すごの夜すがらやな(松風)

かなしやな(羽衣)　不思議やな(忠度)

あまりに愚なる御僧の御諚かなやな(忠度)

うしともおもはぬ汐路かなや(松風)

陀黎耶始比得謀(タレヤシヒトモ)あひおもはなくに(武烈紀)

駄例夜矢比等母うへにでゝなげく(繼體紀)

やぞは小時期にのみ用ゐしものなりやよは感動詞としては用うれど、助辭としては見えず。

十四　かは　かや　かよ

如何ならむ巖の中に住まばかは世の憂き事の聞え來ざらむ(古)(唯ノ疑)

聲たえず鳴けや鶯一年に二度とだに來べき春かは(古)(反語)

何とかや草の姿はおもほえてあやしく花の名こそ忘るれ(拾)

名のりせで梢に來ずば時鳥春かけて來し鳥とかや見む(小大君)

慨哉(ウレタキカヤ)　此云于黎多棄伽夜(神武紀)

針はこのふたつの袖にさしつれどひとつもみえずおちにけるかや(散木奇歌集)

敷島のかげによるとかや(高砂)

さては天人にてましますかや(羽衣)

「道長の歌」とかや承りしとて心よくゑみたり(大鏡)

かやのやは詠嘆なり。かよといふに似たり。カヨは口語にのみ言ふ。口語に「さうかなあ」といふは疑問のかを詠めたるにて、文語のかなと異なり。

十五　よや　よな　よし　よかし　よの

助けよや猫またよや〳〵と叫べば(徒然)(古キ說ニ「猫またよやねこまたよや」トヨムトイフコ

トアリ。よやノミノ返シナリトモイフ)
知りにけるよな
青丹よし奈良　　　玉藻よし
勉めよかし
やほによしいきつきのみや(三重ノ嫉)
ま菅よし
……申さむずるやうはよな　云々(保元)
宮人答へていはく「それはよな……胎藏界の垂跡なり(平家)
はしきよしつまの命も(萬、十七)
おなじくはきせよな(狹衣)
かすめよな(同)
つきてをのこのはしとなりてかく物をいはむよな
和禮波乎止良志與乃
霜八たびおけどかれせぬ榊葉を佐爾己地乃爾己遲爾乃。耶阿さねこぢのねこぢよの
ゆふ日さすとよはた雲よのあかく　とつきはさしのぼるよヤア月はあかく　と

たびねする庵をすぐる村時雨名ごりまでこそ袖はぬれけれ(千)
いとかくぬひたる絲針目までや見とほしつるとて笑ふ(枕)
まことに問ひ給へ(武内)(古事記)
ありといはゞ許曾爾家にも行かめ(輕太子)(同)
なほふりがたきかたちなりかしや(宇治大納言物語 コノ書少シアヤシ)(玉緒、濱松中納言のかしやは慥なり)
物みなは新しきよし唯人はふりたるのみしよろしかるべし(萬、十)
かくのみしこひしわたれば(萬、九)
目(メ)耳(ノミ)谷(ダニ)我に見えこそ(萬、七)
加久乃未加良爾したひこし(萬、五)
山の井の淺き心も思はぬを影ばかりのみ人の見ゆらむ(古)
母君の六つ七つばかりまでおはしけるに(落窪)
明けばまづ尋ねに行かむ山櫻こればかりだに人におくれじ(後拾)
心もてちらむだにこそをしからめなどか紅葉に風のふくらむ(拾)
我をたのまむものにだもあらば(三部抄)
今日よりは夏の衣になりぬれどきる人さへはかはらざりけり(後)

文王の子武王の弟とうちすし給へる御名乘さへぞけにめでたき(榊)
よそにのみまつははかなき住の吉のゆきてさへこそ見まくほしけれ(後撰)
かたはらいたきまで數まへのたまはすればまばゆくさへなむ(若菜上)
道すらに時雨にあひぬいとゞしくほしあへぬ袖のぬれにける哉(貫之集)

「平安朝文法史」にもなむはなむなむはぞなむの例あり。

第三篇　文　章

第十三章　文

一　文

一個の完結せる思想を表せる二個以上の語の結付を文といふ。

雨　降る（細な　雨が　しめやかに　降つた）

月　清し（十五夜の　月　清く　中天に　照れり）

吾は　日本人なり（吾は　まづ　日本の事物を　講究せむ）

の如き是なり。宇宙間有形無形の事物の現象及心に思ふ所皆思想にして、其の分量は單複種々なるが、一つに完結せるを「文」といふ。（文章ともいふべし）この一個の文には長きあり、短きありて、一定せざるが、無量の思想を表すには適宜に之を重ね用うるなり。之を節とも段とも章とも篇とも種種に言ふは修辭學の事にして、文法に於いては唯此の一個の單位の「文」を論ずるなり。

二　文の分解

(1)　二部　如何なる文も二部に別つことを得。前例の雨　月　我は　は文の主部にして、降る　清し　日本人なりは敍述部なり。(括弧内のも準じて知るべし)されどその二部は互に分解し得るものあり。

(2)　四部　前例の中天に日本の事物をは敍述部中にありて照れり講究せむの目的なる事物にて、之を客部と分つべく、細な十五夜のは雨が月に對してその意義を修飾するもの、しめやかには降つたに、清くは照れりに、まづは講究せむに對し、日本のは事物をに對して修飾の用をなす。此の如きを修飾部とす。されば主部の中に修飾部あり、敍述部の中に客部・修飾部あることありて、こゝに四部の名を見るなり。

三　文と詞辭

文は固より詞辭の結合ならざるべからず。而して四部は詞又は詞辭の結合せる者より成る。本篇にありて之を「語」と稱す。辭は部をなすこと能はず。

第十四章　四部の成分

四部の成分(文素などゝもいふべし)一語なるあり、二語以上なるあり。今之を三種に分つ。

第一節　語

一　主語

は主格或は呼格の名詞・代名詞或は名詞と同資格なる者にして、助辭を添ふるも添へざるもあり。

花こそ　咲け
誰か　自尊の　性を　有せざらむ
死するは　易し
正しきが　善し
「あ」は　感嘆の　聲なり
汝　早く　行け

二　敍述語

は動詞・形容詞・同格の名詞或は其等と同資格なる者なり。（助辭有るも無きも以下之に傚ふ）前例の咲け易し聲なり等是なり敍述には肯定あり、否定あり、過去・現在・未來・想像・希望あり、疑問あり、命令あり、感嘆あり。前の「汝行け」の如きは「汝行く」に比するに、その主たり敍述たる事實上の意義は固より同じからざれども、文法上は等しく之を主とし敍述とするなり。

花の　色は　移りにけりな

春や　とき

花　遲きか

の如き感嘆・疑問の敍述も同樣なり。

夏の　嵐山は　凉しからむ

小倉山の　紅葉　今　一度の　御行　待たなむ

の如き、凉し凉しからずは嵐山を敍述するもの、凉しからむは人の心に思ふ所、又待つ待たずは紅葉の敍述、待たなむは人の心に思ふ所にはあれども、嵐山紅葉につきて、それを主として人の思ふ所を敍述すれば、言語の上には尚之を嵐山紅葉を敍述する者と見做し得るなり否見做し得るにあらず、言語にては然言ひなす者なれば、正（マサ）しく敍述語と見ざるべからざるなり。

旅は　愉快なり

北風　寒し

金が　入る
雪も　花と　見らる（思はる、疑はる）
春こそ　待たるれ

此等も皆人の情意・所思・狀態等にて他の事物を敍述せるなり。

三　客語

は處置格及副格の名詞・代名詞等にして、敍述語に對する直接間接の目的語なり。（「客」といふ語はもと「主」に對せるなり）前例の中「性を」「御行」「花と」など是なり。

我は　笑ふを　喜ぶ
大なるは　小きに　勝れり
彼の　人の　鼻頭　右へ　曲れり
我は　論より　證據を　取らむ
德　禽獸まで　及ぶ
天川屋義兵衞　男で　ござる
我　之を　思ふ（に／こと）　切なり
（客）（主）（敍）

左右する事に（客）　能はず（敍(狀的)）

副格名詞なるを補語とか補足語とか名づけて處置格なると區別する人あれど、國語の性質において此の兩種が主語に對するも、敍述語に對するも、さる區別を立つべき謂を認めざれば、今之を一括したり。尚後段に詳にすべし。

四　修飾語

は主・敍・客及他の修飾語に添へてその意義を修飾する者なり。而して名詞性なる詞に係るは、連體法の動詞・形容詞及領格・同格の名詞・代名詞卽連體語にして、動詞性なる語に係るは副詞及前提法の用言卽連用語なり。既出例の中にて細な十五夜の日本の自尊の感嘆の夏の小倉山の一度の彼の人の等は連體語にて、それぐ\主・客・敍を修飾し、しめやかに淸く早く等は連用語にて敍を修飾し、今は副詞なれば連用語として一度のといふ修飾語を更に修飾せり。此の外

吹く　風　涼し

譬へば　細き　絲に　似たり

富士の　山は　圓錐の　狀を　なせり

吹かば　飛ばむ

こゝに一言辯ぜざるべからざる事あり。通俗「修飾」といふ語は、無くても事缺かざるに用うれど、此の文法にて言ふは寧必要成分にて他語の意義を限定し補足する意味に用うるなり。例へば「雨降ル」と「細ナ雨シメヤカニ降ル」とは事實上には共通する所あれども、二個の修飾語を加ふれば、自ら別文となるが如し。「山ハ狀チナセリ」「紅葉一度ノ御行待タナン」「人ノ鼻頭右ヘ曲レリ」等にては殆無意義なるを見れば、所謂修飾語無はくて濟む者にあらざるを悟るべし四部の成分に輕重を附けて無くてもありぬべき者を修飾語とする時は、「富士の山」といふに、「山」は修飾的附けたりの者にて、「富士」こそ肝要の主なれといふ如き論に歸すべきが、文法上の詮議は其處まで行き過ぎしむべからず。唯言語の性質いづれか修飾し、いづれか修飾せらるゝと判定して、修飾語被修飾語を分つべきなり。「机ニ置ク」を「机ノ上ニ置ク」といふ時は上の輕きを認むれど、「目ノ前ニアル」を「目ニアル」とは言ふべからざる等の場合を見れば、言語を離れたる事實論は頗見當違なるを發見すべし。かくて修飾語が他の修飾語に係ることあり、又は一個の語に修飾語の二個以上係る必要ある由も了解せらるべし。

枕詞　は總べて修飾語なり。其の中「敷島の日本」「吳竹のよ」「足曳の山」など言ふは普通の修飾語と異ならざる語形なるが、「ぬば玉の」「梓弓」などより體言の夜春本にも、用言の黑き張る射るなどにも係るは特例なりとす。そは根本黑キに係るヌバ玉ノは主格、夜に係るは領格なり。張ル射ルに係る梓弓は處置格、本に係るは領格、春に係るは用言の音を體言に借りたる者なり。その他之に準じて

知るべし。

刈菰の（修）　思ひ亂れて。（主）（述）

五　四部以外の語

文中の語大抵は以上の四部に屬すれども、特殊なる文に在りては、四部のいづれにも屬せざる語も無きにあらず。之を四部以外の成分とす。

(1)　獨立語　呼格名詞の一部及感動詞は獨立語とす。

太郎や　御前は　水を　撒け

此の文の太郎ヤは「御前ハ水ヲマケ」といふ文を話し懸くる人を呼びたる語にて、下文には言語上關係する所なければ、之を獨立語とするなり。之を一方より太郎ヤは御前ハと同じ者なれば此の場合主格と見んとすれば、「太郎ヤ御前ヲ打ツゾ」といふ文にては客語となるにて、結局支障を來すなり。

瓢や　〱　我　汝を　愛す

君よ　君は　何故に　憂へ給ふぞ

ほい　此は　何と　した

あはれ　富士や　富士は　日本の　鎭なり

南無三　彼も　やられたか

あゝ　懐しき　故鄕　獨立小句　汝も　永く　我を忘れじ

獨立語が修飾語を取りて獨立部をなすこと往々これ有り感動詞の獨立語たる由は前篇第十一章と參照すべし。

淡路島　かよふ　千鳥の

面かげは　獨トスレバ事ナシ　身をも　離れず　山櫻　(ソレニ)　心の　限　とめて　來しかど(若紫)

抑是は　主カにカ獨カ　九州肥後國阿蘇の宮の神主「ニテ」カ友成とは我がことなり

なく泪世は皆海となりなゝむ同じ渚に流れよるべく(拾)

その——は一つにはイロ　獨　小　二つにはハニ　修　三つにはホヘ、獨　の　修カ　この三點である。

(2)　接續語　他の成分を接續する語は四部以外に屬す。此には術語を命ぜざるも濟むことあれど、詳しくせんには接續語と言ふべし。前にも說ける如く、我が接續詞は大抵副詞の意義を含む者なれば、中には修飾語と見るべき者もあるなり。前篇第九章第十章を參照すべし。

金剛石　および　ルビーは　日本に　產せず

我は　懐中時計の　側を　白金　或は　銀に　せむ

仁丹　もしくは　清心丹の　廣告を　見よ

〔附〕補足語　といふ名を立つる人あり。其の說一定せざれども、概要次の如し

(一)　副格の詞を補足語といひて客語と分つは前述の如し

(二)　敍述語のみにては其の意義完全ならざるを、客語又は修飾語風の語にて之を補足する時、兩者相俟ちて完全なる意義を表す者として、之を補足語と名づけ客・修と分つ。

案ずるに此の說詳しきが如くにして必しも然らず。前篇副詞章の終に說けると似たり。

夜　長く　なれり

清正　一軍の　將と　なる

我は　彼を　賢く　見る

僻すれば　愚をも　賢に　見る

小生は　大丈夫に　候ふ(候はず)

張良は　大丈夫に　候ふ(候はず)

此等の例に於いてナルミル候フのみにて補足語なき時は義をなさざるは論なしと雖、修飾語もしくは客語なくても義をなさゞるは前第四項に說けるが如くなれば、此の如きをのみ補足語と立つるは强ひて葛藤を求むるものなり。此等の語と敍述語とを合して一敍述部と見るは固より不可なけれど、其の爲に客・修といふ名を稱すること能はざる理由は萬々これ無し。

(三) 指定助動詞の體言に添ふ時、助動詞を敍述語とし、體言を補足語とす。

正成は　忠臣　なり

此の說によれば、ナリは動詞に準ずべき者、口語、デアルと共に一敍語とする價値十分なれど、前例の類にて不完全動詞なれば、體言の補足語を要するなりといふ。西洋流に解すれば最然るべき說なり。されど動詞の完全不完全といふこと、前のナルミル等の外にス思フ言フ願フなど總べて或は完全動詞たり或は不完全動詞たる如く、或る場合には說明の便宜を與ふれど、或る場合には何れとも定め難く邪魔物にもなる者にて、詮じ來るに利害相伴ふものなり。(有對・無對・單對・複對といふも同樣なり)我は徒に道具立の多きを欲せず、無くて濟む者は無くて濟ませたき者と思ふにより、完全不完全といふ道具を用ゐず。言語は意義をも論ずべき事勿論なれど、形式と相俟たざるべからざるを忘るべからず。

ナリの動詞を含むは論なけれど、我が國語の形式に於て附屬辭たるは爭ふべからず。特にその口語デアルを一詞と見るが如きは外人の爲を學ぶより出でたる陋見なり。デは上の體言に附きて格を表すもの、アルは獨立動詞なればデアルといふ一語は有るべからず。「忠臣デ」は客語、「アル」は敍述語と定りて、些も之を動すべき餘地なし而して此のデアルは文語ニアリに當る者にてナリに當るにあらず。ナリの口語はダ(ナ)なり。ダの中に動詞を含めばとて、之を一敍述語とせんは現在の語形を輕視するに過ぎたり、從ふべからず。かくて我は此の說をも否認し、助動詞は他の詞と合し

て一語をなす者とす。

更に之を體言の方より見るに、「正成ハ」を敍述する主要語は「忠臣」にして、「ナリ」は之に附屬せる言方なり。（「忠臣ニアリ」と言ふ言方は然らず）西洋の文は必動詞を要すといへど、國語も漢文も然らず。是に於いて國文の形式は敍述語に因りて三種に分る、動詞的なる、形容詞的なる、名詞的なる是なり名詞を敍述語とすること非論理的なれど、言語は必しも論理に一致する者にあらざるを知る時は、强ひて言語の實際を曲ぐるにも及ばざることなり。

第二節　句

文は最簡單なる者も主と敍とあり。こゝに主、敍を備ふれども完結せざるものあり、又完結すれども文の一部をなす者あり。此等を句と稱す。句に中止、修飾、敍述の別あり。

一　中止句

は句の敍述語の中止して、他の成分に從屬せず、相對並立する者をいふ。

鳥　鳴き　花　さく

目　涼しく　口　尋常なり

月　明にして　星　稀なり

夏　過ぎて　秋は　來れり
兄は　大臣　弟は　大將たり

之を裏面より見れば、二個以上の文を一文に平接する時、前なる者を中止句とするなり。さて詞辭の終止中止同形なる者は文か句か紛るゝことあり。左例を判定すべし。

左右には　諸弟子　侍り　前後には　家人　集へり
運は　天に　在り　牡丹餅は　棚に　在り
笑ふ　あり　泣く　あり　怒る　あり
人も　來ず　手紙も　來ず
我　彼を　恨みず　彼　亦　我を　憎まず
財産も　なし　手腕も　なし
味は　好し　香は　好し

此の終の二例は、形は明に終止すれば二文とも見るべき者の如くなれど、その實「財産も無しだし」「味は好くそれに」といふべき所を、強ひて終止として意義を含めたる者にて、なほ中止句と見るべきなり。（中止句又並立句ともいふべし）

二　修飾句

は修飾部をなす句にして、連體的・連用的の二種あり。

(1)　形容句　は體言に接續する句にして、敍述語は連體法の詞辭なる者なり。

花の　咲かざる　木　なし

水　清き　處には　大魚　住まず

我が　友に　父は　知事なる　人　あり

花　なき　枝にも　鶯　なけり

汝　我が　愛讀する　書を　知れりや

「甲斐なき」「情ある」「力ある」「罪深き」「事多き」「耳疾き」「心やすき」など句とも言はるれど、一熟語句ニモと見て可なり。「心にくき」「手輕き」「口重なる」「足ばやの」「人ずくなる」「風だてる」「氣まづき」「心ぐるしき」などは固より熟語なり。(ウラヤマシキ、ウラガナシキの類は一單語とすべし)

形容句の下に語を略せる、又は形容句とその係る語とを合したる者を名詞句といふ事あり。一便法にて、そのまゝ主・客・敍、或は修と解くなり。前例「花の咲かざる木」「水清き處には」「父は知事なる人」「我が愛讀する書を」及次の例なり。

君が　愛讀するは　歷史ならむ

アメリカは　コロンブスの　發見せるなり

人は　壽の・長きを　欲す

父は　知事なる　友人の　妻は　我が　從妹なり

我が　知れる　人の　一家族は　二十人に　上れり

名詞句の修飾部なるは、其の係る語を合する時は又名詞句にて、主・客・敍となり、或は獨立部ともなる。

君の　斷行せる　そは　甚　よし

彼の　天晴にも　働ける　事や　我は　之を　天祐と　言はむ

楠公の　七生　賊を　平げむと　いへる　此の　事　妄言に　あらず

此等は獨立句といふべし。

(2)　副詞句　は副詞の如く他の部を修飾する句なり。

水　清ければ　大魚　すまず

花　さかば　我　之を　君に　告げむ

聽衆　少けれども　演者　熱心なり

力は　強くとも　術　拙くば　其の　人　必しも　勝たじ

古人の　勉めし　如く　我も　勉めむ

（形句）（修）（副句）

人の　驚く　位　彼は　敏捷なり

（形句）（修）（副）

敵は　矢種の　續かむ　限　防ぎたり（副句）（形句修）

日　暮れたるに(を、も、が)　途　遠し

風　ふきて　花　ちれり

此の如く敍述語の前提法連用法なる者の外に形容句の體言副詞に合せる者など副詞句をなすなり。こゝに又中止句と副詞句と混じ易きことあり。「風蕭々として易水寒し」は何ぞ。「兄は軍人なるが弟は商人なり」は何ぞ。「甲は牛乳を好むに乙は之を嫌ふ」は何ぞ。連用法及がには單に中止すると副詞的に他語に係るとあるにより、その何なるかを見て判定すべきなり。

又一文の形をなせる者に、副詞句と見るべきあり。

寺の　奥に　額　あり。我　之を　讀まむと　せしも、字は　小し　日は　暮れかゝれり(暮レカヽリタレバ)　遂に　果さずして　歸れり

我　著述に　勉めむと　して　家に　居るに、客は　來る　子供は　騒がし(クテ出來ザレバ)　いで　明日より　旅行せむ

小生　幸　閑暇に　候へば、兼ねての　御相談も　殘り居り候　是非　御入來可被下候

小生も　禁酒致度　存居候　處　御忠告　一々　御尤に　奉存候　今日より　斷然　實行可致候

東京市長問題は………なりしが　尾崎　千家　兩男爵家の　婚約　成立したる　結果な
　るべし　極めて　圓滿なる　解決を　見むと　するに　至れり

此等の句その上に副詞句あれば、之を文と見るときは、下には係らぬ事となりて、いたく文義を損す。然れば尙上の句と共に下文に係る者と見ざるべからず。作者の意は「小生閑暇に候。又御相談も候へば」「……存居候處……奉存候に付」といふ樣に二句を併せて副詞的に言ふべきを、修辭上かく變更したる者なり。之を挿入的副詞句と謂ふべし。句讀法にても此等には〇を打たぬなり。又次の如きも副詞句なり。

　時は　八月の　末なり　殘暑　なほ　嚴しく云々
　我は　思ふ　彼は　いまだ　改心せず
　子　曰く　孝は　德の　本なり
　君は　知るべし　彼は　隱君子なり
　頃は　二月の　末つ方　空　吹く　風も　寒かりけり
　今ぞ　知る　手向の　山は　紅葉の　幣と　ちりかふ　名にこそ　ありけれ(千載)

こそを結べる者の前提法なるは固より副詞句なり。

　(人)　昨日こそ　早苗　取りしか(ド)　何時の間に　稻葉　そよぎて　秋風の　吹く
　人こそ　見えね(ド)　秋は　來にけり

不破数右衛門………其の　身の　刀も　(云々ナルヲ人)　さゝらとこそ申し候へ(ドソレニモマシテ)　及金は　皆無の　様にて　四五人も　切留候　積に　御座候(大石良雄)

こゝに又事實と記者の情懐想像とを二文に記述せるが、兩者の間に修飾的關係の認めざるべからざる者あり。是またその一を副詞句と見るべし。

雨　降りたらむ、(ト見エ)　路　ぬれたり

我は　今より　勉强せむ　落第の　恐　あり(レバ)

玉の　緒よ　絶えなば　たえね　ながらへば　忍ぶる　ことの　よわりもぞ　する　(ニヨリテ)

我は　歸らむ　空　曇り來つ(レバ)

君　心配は　ない　やれ

「小生モ閑ニ候御出候へ」「花サケリ君見ニ來マセ」などは其の間にサレバなどを略せる者として、二文と見るべし、又疑問文・命令文も副詞句となることあり。

此の　旱天に　雨　ふらむか　農作物は　蘇生すべし

人　我を　愚と　いはむか　我は　愚たらむのみ

形は　いかにも　あるべし　心中　邪念　あらば　(ソノ人)　正しき　人には　あらず

父にて　候ひし　義重法師が　教へ候ひしは　譬へば　(人)　山越の　狩をせよ　又は

かたきに　襲はれよ　深山に　迷ひたらんずる　時は　云々　(平家、鷲尾の母)
浪も　立て　風も吹け　今日の　船出は　止めじ

漢文直譯風なる次の例の如きは好き語遣にあらざれど、なほ副詞句なり。

此の　腰　一たび　屈する(セバ)　恐らくは　伸ぶる　期　無けむ
人　心　身　共に　病む(マバ)　醫家も　敎家も　之を　救ひ得ざらむ
君　今　遠く　去る(ラバ)　我は　孤立せむ

三　敍述句

主・敍を備ふる者の更に他の主を敍述する者をいふ。

薩州の　健兒　袖　腕に　至る
我は　兩親　あり
兎は　前足が　短い
隅田川　流　ゆるし
彼　家產　極めて　豐なり
國姓爺　父は　支那人にして　母は　日本人なり
(我)　醉ひて　沙場に　臥す(トモ)　君　笑ふ　こと　勿れ
主　敍

象は　鼻　長し

此等皆一文を構成せる者なれども獨立せずして敍述部をなせば、今之を敍述句と名づけたり。此如き言方は支那には少しあれども、西洋には全くなきより種々の說も有る中の二三をいはむに、

(1)、總主說　健兒我はの如き全文の主を總主といひ、袖兩親の如き句の主を小主と立てたり。此の說通ぜざるにあらざれども、ありといふ敍述語に對する主に我はと兩親と二個ありといふこと稍面白からず。又第一例の如きは至るに對して健兒を主とは言ふべからず。されば我は敍述部の方より見て敍述句といふなり。又强ひて主の方より說を立てむには、我は主・補足主など名づけて隅田川を主とし、流を補足主といはむと欲す。補足主とは卽補足語にて「隅田川ゆるし」のみにては足らざる故に流といふを更に補足せる言方と見るなり。

(2)　文主を句主の修飾と見る　卽「彼の家產豐なり」とやうに考ふるも一說なり。されど此の文は然樣に「家產」を主に言へるにあらざることは明瞭なれば、從ふべからず。第二例を「我の兩親あり」とせば最甚しく文意を變ずるを見るべし。

(3)　句主を客と見る　是は西洋流には好くはまるなり。「象ハ鼻ヲ長ク持ツ」など總て言ひ變ふべし。而して漢文流にしても「我ハ兩親ヲ有ツ」などに當る。國語は自動詞的狀態的の言方多く敍述句をなすを、その動詞なるのみは漢文にては他動詞的動作的に言ひなす故に、句主は客語となる。されど敍述語の形容詞・名詞なるは漢文も我と同じく敍述句をなす。其の形容詞・名詞なる敍述

に對しても、此の句主を客語にいひなすは西洋文の習なり。事實上より言へば、敍述句の主は文の主に對して客の位に居ることとなれば、この說にも一理あれど、それにては我が語性を強ふることとなるなり。此の國語の特性に就きては詞辭篇中にも處々に說きたれど、今此の文主に對する客にして、敍述には主となりて係る者の漢文脈と異なる者を類別するに、(一)可能動詞に係る者、(二)特殊狀態的動詞に係る者、(三)形容詞特に情意を表す者に係る者の三種となる。

私は　近頃　大層　飯が　食へる（「食が進ム」「飯ヲ食ヒ得」）

彼　今は　好める　酒も　飲まれず（酒ヲ飲ミ得ズ）

（ワレ）老いぬれば　同じ　事こそ　せられけれ（同ジ事ヲセザルコト能ハズ）

私は　金など　入らぬ（金ヲ要セズ）

君は　あれが　見えるか（アレヲ見得ルカ）

彼は　目こそ　利かね　手は　利きたり（目ヲコソ巧ニ活サネ、手ヲバ好クハタラカス）

我は　それが氣の毒なり（ソレヲ悲ム、ソレヲ氣ノ毒ニ思フ）

汝　何が　欲しきか（何ヲ欲スルカ）

おのれは　名こそ　惜しけれ（名ヲコソ惜メ）

君は　何人が　好（スキ）なりや（何人ヲ好クヤ）

日本の　地方稅は　課稅の　範圍に　制限法が　設けてあります（制限法ヲ設ケタリ）

諸君は　寄留届が　出してありますか(屆ヲ出シテ居ルカ)
私も　よき　心地は　致さず候
此の　笛は　極めて　よき　音　す
忍ぶる　ことの　よわりもぞ　する
此等の例にて、國語は言方にて客も主となる事を悟るべし。
(4)　文主を客と見る　此の說は可能相動詞の敍述語なる、又は少數の場合には通ぜざるにあらず。「我ニハ金ガ入ラズ」「我ニ兩親アリ」等の如し。此等は固より客なり。されど我ハと言へるに比するに言方の相違ありて、事實のみを以て一律に言ふべからず。「我策アリ」と「我ニ策アリ」とは區別せざるべからず。「此ノ笛ニヨキ音ス」「象ニハ鼻長シ」など、日本語とは聞かれざるなり。又處置格の客語とも見ゆるは
酒は　我　飲まず
うそは　私は　申しません
箱根は　君　見たりや
藏書は　彼　已に　賣り拂へり
などの場合なり。されど此等も「酒ハ我之ヲ飲マズ」とやうに敍述句の中に客語を省略せる者にて、文義上我君などは何主、箱根藏書などは文主たること爭ふべからず。「君箱根ヲ見タリヤ」の如く言

ふとは異なるなり。

(5) 文主を敍述の修飾と見る　說あり。「鼻ハ象ニオイテハ長シ」「彼ニオイテハ家產豐ナリ」とやうにニ於イテ又はナラバを入れて副詞樣にして聞くなり。「今日ハ天氣好シ」の今日ハの修飾なるなど聯想しても妥當なる如くも思はるれど、ニ於イテと場所の如く言ひ做し得るは此の場合のみにあらず。「我ハ惡シキコトヲセズ」の如き純然たる主語の我ハも、「我ニオイテハ」「我ナラバ」と言ひ得べきにて、實は尋常平凡の事なれば、それ無きと有るとを一にするは不可なり。今日ハは副詞にも名詞にもなる詞なれば、同列には論ずべからず。又「智者モ千慮ニ一失アリ」などの文主のモをふくめる者は「智者トイヘドモ」とやうに修飾にも聞ゆれど然らず。次の如く說くべきなり。

主　敍　句

金剛石も　磨かずば　玉の　光は　そはざらん

修　修　主　敍

こゝに西洋文に比して考ふべきことあり。「今日ハ天氣好シ」の文主は果して天氣なりや。その意ならば「天氣今日ハ好シ」と同じきか。今日といふ語は文主たり得ざるか。「今日ハ何月何日ナリ」といふ時は文主なるにあらずや。「今日ハ日ハ云々」とやうに西洋流に主語を補足する必要は國語に無し。少し變りて季節の名などは副詞にもなれど、まさしく名詞にもなりて、「春ハ花サク」「秋ハ實ナル」など、明に春秋を文主としてそれを敍述せるを見る時は、前の今日ハは別なり。「天氣今日ハ好シ」とは別義なり。「又胸中百萬ノ兵アリ」の胸中を主と誤るべからず。此は固より胸中ニの義にてその上に我といふ主あるなり。凡上下左右內外など副詞的なる名詞は主にも客にもなれど、場所の副詞と

見てよきこともあり、こゝのも胸中ニとして修飾語とも客語とも見らるゝなり。(「其の人の心の中如何にすゞしかりけむ」などは主なり)

(e) 句主を修飾と見る

米の　一年の　産額　平均が　四千萬石なり

半紙　一帖の　價　上等が　四錢なり

我が　嗜好する　物　第一が　煙草なり

彼の　學資　半は　借金なり(半ハ之ヲ人ヨリ借ル)

懐中金　十圓札　三枚　銀貨　銅貨　取交ぜ　一圓餘　あり

此等の例を「産額平均何程」「上等ノ所ニテ」「第一ニ」「學資ハ半借金ナリ」「十圓札ニテ三十圓」など言ひ換ふる時は正に修飾語なれば、それと似たる此の場合も準じて解くべきかと思ひよるはさることなれど、更に思ふに、異なるふしあり。此の例なるは語脈を變へずして詳しく言ふ時は、「平均額ガ」「上等ノ半紙ガ」「第一ノ嗜好物ガ」「學資ノ半ハ」「十圓札ノ數」となるべく、何處までも主語たるを免れざるなり。尙左例を見るべし。

彼　始は　勉めたり(副詞、修飾)

何事も　始が　大事なり(名詞、敍述句ノ主)

始を　愼めば　事　終　あり(名詞、句主)

こゝに前述の諸說を再記すれば左の如し。

我は（主）　兩親（敍句：兩親（主）　あり（敍））

我は（總主）　兩親（小主（補主））　あり（敍）

我（修）　兩親（主）　あり（敍）

我は（客）　兩親（主）　あり（敍）

我は（修）　兩親（主）　あり（敍）

我は（主）　兩親（客）　あり（敍）

我（主）　兩親は（修）　あり（敍）

敍述句を疊み用ゐたる文あり。漢文直譯體などに馴れたる目には、いぶかしく思ふべけれど、正しき我が語脈なり

昔の　士族の　子弟は　［父兄が　［敎育　ありき］］

君は　細君が　御父樣が　金が　ある

彼の　人は　鼻が　先が　曲ってゐる

櫻は　花こそ　見所は　あれ

北國は　山は　雪　まだ　消えず

禹は　吾　間然する　こと　無し

昨日は遠路御來車被下候事（主）　萬謝（主）（敍）　此事に（客）（句）　候（敍）

澄憲が高名（主）　不思議（トハ）（主）　此事に（客）　侍り（敍）（著聞、偷盜）

時下　益（主カ）　御精勤（修カ）（大賀（主）　此事に候（句・敍）
　　　　　　　　　　　（大賀の（修）　事に候

二重以上の敍述句は混亂し易ければ多くは用ゐず。又此等の中には「子弟ノ父兄ガ」「細君ノ御父様ガ」「鼻ノ先ガ」の如く言ひても同じ樣に思はるゝものあれど、(2)說の如く尙差異あるなり。

敍述句の主の畧せられたるは部とも語とも見るべし。

　この　酒は　(味)　甘し
　あの　衣は　(色)　赤し
　象は　大なり
　熊は　强し

敍述語が中止又は連體・連用となる時は修飾語となるが如く、敍述句を有する文も亦其の句尾を變ずれば、中止句とも形容句とも副詞句ともなる。

　正成　誠忠　萬世に　輝き　良雄　義烈　千古を　照す
　狂風　聲は　猛虎の　吼ゆるが　如く　怒濤　響は　萬雷の　轟くに　似たり
　里は　雪も　消えたる　街道を　荷車　ひく　男　あり
　花は　先の　尖りたる　者も　あり

月明なる　夜は　星の　光　薄し

今夜　月　明に　星　稀なり

櫻は　花こそ　見所は　あれ　木立　にくげなり

かくて又敍述句は連體に用うれば形容句に、連用には副詞句になるを見るべし。「誠忠萬世ニ輝ク正成」「聲ハ猛虎ノ吼ユルガ如キ狂風」「雪モ消エタル里」など變換し試むべし。さて又漢文直譯より出でたる

色は　即　是　空なり

小生　差支（主）　これ　あり（敍句）（敍句）

貴君　御構　これ　なく候ふや

桓魋　それ　我を　いかに　せむ

等も敍述句といふべし。漢文にて是は動詞ともいふ人あれど、尙代名詞主格なり。「有之」「無之」の之は漢文に擬したる誤用にして彼にありては客なれど、我には主となるなり。「差支有之」「御構無之」を一敍述部と見るは誰しも論なき所なるが、形式上は句と言はざるべからず。かくて二重敍述句となるなり。或は色は差支御構の類若しくはコレソレを獨立語とも見るべきか。なほ後に言ふ並置にはあらざるなり。

――なほ左の各句の例を考ふべし――

去年とやいはむ　ことしとやいはむ

とゞめおきて誰をあはれとおもふらむ子はまさるらむ子はまさりけり

天下誰か之を知るものあらむ

天下に之を知るもの誰かあらむ

誰か之を射るものぞ

誰ありて之を信ずる者なかるべし（日本の俤）

「車よりおり給ふやおそき」と北の方あこぎとて呼びのゝしり……

積りては拂ふが難くなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど

（ソノ塵）拂ふがかたくなりぬべし

（それ）古人の勉めし如く我も勉めむ

（その位）人の驚く位彼は敏捷なり

（ソノ限）敵は矢種の續かむ限防ぎたり
（主）

昨日は御出下され奉謝候
（副句）

昨日御出下されつる難有
（主）（客／を謝す）

折りつれば手ぶさにけがる立てながら三世の佛に花奉る（後撰）

或る時迎に馬をつかはしたりければはるかなる程なり（徒然、八十七）

椎の木は常の木はいづれもあるをそれしも葉がへせぬためしにいはれたるをかし

けがれなむ　手ぶさはふれじ極樂の西の風ふく秋の初花（喜撰）
（一語にも此の如きあり）

おのれが心に適へるによりてこの嘲をなすにて知りぬこの人は下愚の性うつるべからず
（副句）

僞りて小利をも辭すべからず（徒然）
（ザルコトヲ｜トアルトキ上ハ敍句ナリ）

山吹の花ぞ一むら流れける筏の棹や岸にふれけむ（景樹）
（副句）

子はまさるらむ　子はまさりけり（二文カ）

第三節　小句

句の主語なきものにして、敍述語と客語又は修飾語等と結合したる者を小句といふ。小句の種類は句に準ず。(凡小句は强ひて其の名目を立てずしても可なれど、又便宜あることもあるなり)

一 形容小句　卽連體的修飾小句

富士山に　登る　者　年々　多し

親に　孝を　盡す　人は　君に　忠なる　人なり

日本より　好き　國　あらむや

彼は　何と　なき　物思を　す

音に　聞く　高師の　濱の　あだ浪

彼は　親にも　勝る　背高なり

善く　泳ぐ　者は　水に　溺る

彼の　家に　ポチと　いふ　犬あり

鶯は　面白く　囀る　鳥なり

そは　頗　大なる　罪なり

彼の　母なる　人は　我が　叔母なり

我が　師なる　君は　善く　人を　敎へ給へり

おりたちて 昨日か つみし 芹川の 竹田の 原に 秋風ぞ ふく(景樹)

遠山を ながめやれば 「こんざうを ぬりたる」とや いふやうにて(蜻蛉日記)

武林を 介錯した 「拙者は 榊庄左衛門でござる」

我 百世の 師たる 孔子を 思ふ

花の 如き(樣なる) 顏も いつしか 衰ふ

西人 百行の 基なる 孝を 知らず

「我ガ家ノ法」「父ノ兄ノ子」「水ノ上ノ月」など同種の修飾語の重れるは小句と稱する要なし。但「我ガ家ノ子」と「我ガ家ノ子」「大理石ノ机ノ脚」と「大理石ノ机ノ脚」、「赤キ衣ノ裾」と「赤キ衣ノ裾」などは解剖に當りて適宜に區別するがよし。

形容小句の名詞と合せるか、略せるを名詞小句といふこと名詞句の例に準ず。

書を よむは 樂し

汝 利よりも 大なる 者を 思へ

好く 言ふは 好く 行はざる 證と なるべきか

一旦 忘れたる 事も 時々 想ひ起す

前に擧げたる、修飾語と結合せる名詞「我が家」又は「美しき花」の如きは某部とは稱すべけれど、名詞小句とは言はず。

二　中止小句

は他の小句と相並びて用ゐられ、それと同部をなす。

酒を　酌み　詩を　吟ずる　人　あり
（中止小句―形小句―形容小句）

我　山に　入り　野を　わたる

彼　善く　遊び　善く　勉む

花を　取り　枝を　折るは　禁制なり

三　副詞小句　即連用的修飾小句

我　子を　持ちて　始めて　親の　恩を　知れり

彼　自説を　主張して　人に　屈せず

月に　對して　誰か　古人を　忍ばざらむ

人は　足に　○して（よりて／をもちて）　歩む

彼　病氣に　因りて　來らず

富貴　我に　於いて　浮雲の　如し

（我等）天に　在りては　比翼の　鳥と　ならむ

智者と　いへども　千慮には　一失　有るべし

彼と　云ひ　此と　云ひ　不埒なる　事のみなり

某氏は　何と　なく　慕はし

來る　者　老幼と　いはず　男女と　云はず　皆　其の　德に　服す

汝　何を　以て　之を　謂ふ

そは　君に　取りて　一打擊ならむ

張良　かつて　黃石公に　就きて　學べり

金言は　誦するに　隨ひ　益　其の　妙を　增す

暹羅の　人頭稅　一人に　つき　六圓なり

公　人と　爲り　至孝なり（本來ノ名詞トハ云フベカラズ）

孔子　相と　なるや　三日に　して　少正卯を　斬れり

君子の　心は　水の　如く　淡し

彼は　讀むと　同時に　筆記す

能因　都をば　霞と　共に　出でたり

秋は 來ぬ(往カ) 紅葉は 宿に ふりしきぬ 道 ふみわけて とふ 人もなし

あゝ 我 誰と 共にか 昔を 語らむ

瀬を はやみ 水 岩に せかる

山 高み 人は すさめず

清涼殿に 鳴板とて 鶯張の 板敷 あり

其の 人 しばらく ありて 又 口を 開けり

汝 よく 考へて 事に 當れ

彼 一度は 非常に 苦みしかど 今は 成功せり

君 急ぎて 行かば 間に 合ふべし

人 書を 讀まむとも 思量を 粗に せば 益を 得じ

人を 殺せば 己も 殺さる

事と いへば(事モ事トテ。事モアラウニは別)

餘りと いへば

今や おそしと 待つ(「〇ハ 今ナリ 來ルコト おそし」にて、もと二文なり。されど今は二語なり)

なでふ(形小句ヨリ轉ズ) さる ことの 侍るべき

なでふ　物をか　なげき侍るべき(カグヤ姫)

連體ト見ルベシ。カヽルヨリ連用ニ移ルナリ

李陵が　親類　皆　以て　罪せらる(長門本)

そこで
前
中々
旁
} 以て

是非
必
} 共に

といつたものゝ實はその少からず聲がふるへた

何のそのいはほも通す桑の弓

「霞ト共ニ」は客と修との聯結とも思はるれど、こゝにては「都ヲ出ヅルコト霞ト共ナリ」とやうなる言方にて、「共ニ」をば敍述語に轉じたる者と見、その霞トに係るところより客敍の結合としたり。「山高ミ」の山は主語かとも思はるれど、前に副詞の章に言へる如く處置格の客語と見たり。「鳴板トテ」の類テの上に動詞を含めば、略したる場合にても副詞小句と見るなり。トシテ　ニテ　の類も同じ。其のテをも略して

勝たむと(思ヒテ)　打つべからず

負けじと(シテ)　爭ふ

など言ふは、一語にて副詞即修飾語と見るが可なり。凡小句は主語なきより言へる名なるが、其の

主語は補ひて聞ゆる場合も少からず。前提的に係る時に殊に多し。

富貴（我ソレヲ）我に於いて浮雲の如し

（人）禮服を着ざれば（我ソノ人ヲ）入れず

の如き、主語を補へば副詞句となる。之を理論一方より言ふ時は如何なる敍述語も必主語を見出し得べけれど、常識にて主語なきものと見たるをば小句と定めて可なり。或は學修の進境に從ひて、省略の補塡をするも可なり。中止小句・形容小句においても此の事あれど、彼にありては主たるべき語その直下に來る者多く、言語の上にては之を補塡すること却つてふさはしからざることあり。是西洋文などにては關係代名詞を用ゐて

（ソコニ人其ノ人ハ）酒を酌み詩を吟ずる人がある

（人ッノ人ハ）彼の母なる（所ノ）人は云々

といふやうに言ひなす所なり。

修飾語の他の修飾語と結合したる者にして副詞小句と見るべき者あり。是は小句の定義に適せざれど、こゝに附說す。

三月の三日雪降りし事あり

彼の事君の說の通確定せり

ある時は我原稿紙にも窮せり

彼も　長き間　流浪せり

頼盛は　頼朝の　爲には　恩人なり

臣は　君の　爲に　忠を　盡す

此の種の小句の連體形なるは形容小句といふべし。

返す　時の　閻魔顔は　誰しも　免れじ

副小

長き間の　流浪にて　我は　困難せり

形小

己の　爲の　謀こそ　第一なれ

文の形をなしたる副詞句の主なき者、亦副詞小句といふべし。次例など強ひて主語を補塡して句とするに及ばず。

梶原　たばかられぬとや　思ひけむ　續いて　馬を　乘り　入れたり

好意にも　せよ　其は　失禮なり

酒を　飲まむか　我は　伊丹の　劒菱を　擇ばむ

土足を　頭に　加ふる(レバ)　匹夫も　必　怒る

人を　殺す(ニ　吾人)　劒のみを、用ゐじ

任に　赴くや　否や　管下を　巡視せり

變を　聞くや　否や　彼は　蹶起したり

寫眞　とる　一目小僧　こはしちふ　鳩など　いだす　いよゝ　こはしちふ(鷗外)

四　敍述小句

は客或は修と敍述語と結合せる者をいふ。然れども右の如き場合に小句といふ名目を用うる必要はまづ無きことなるが、敍述句の主を略せる者にて通常その省略の認識せられざる者などは、簡單に敍述小句として説明すれば心得易きこと、形容小句・副詞小句の場合の如し。

玄德　孔明を　訪ふ

關羽　張飛　善く　戰ふ

此等は各語を解けば可なり。二語を結合しても敍述部といひて足れり。

京都は(人)　天子の　居る　處を　いふ

大國主神　又の　名を　八千矛神と　申す

机は（人之テ）木に（ヨリ）て造る
敍句　敍小

筆が（人之テ）並べてある
副句　敍小

訴狀が　もう　出して　ある

君の　事業は（吾人）近く　成功を　見るべし

イフ巾ス造ル並ベ出シ見ル等の主は京都大國主神机筆訴狀事業等にあらざるは明なれば、眞の主を補ふか、又は敍述小句として說かざるべからざるなり。尙後章「省略」の段に參照すべし。

第四節　引用

語・句・文がその儘に他の文の成分に用ゐらるゝ時、之を引用といふ。記者が人の言葉を記すにも、自己の言說にも、或は事を設けても此の法を用う。之を挿入ともいふべし。引用・挿入は客に多けれども、それに限りたるにはあらず。

「孔子閒居、曾子侍坐」は　玄宗の御筆孝經には　「孔子居曾子坐」と　あり

いろは歌の　終は　「ゑひもせず」なり

「籠もよみこもち」の　歌は　萬葉集の　最初に　あり

誰か　謂ふ　「文武　兼ね難し」と

「大博覽會　延期に　定れり」と　いふ

「秋の　夜は　長い　もの」とは　まん圓な　月　見ぬ　人の　心かも

黑田　如水は　かつて　「草履　かた〳〵　下駄　片方に　て　事に　赴く　心懸　肝要なり」と　いへり　「石橋を　叩いて　渡る」との　對照　面白し

「子を　持ちて　知る　親の　恩」は　文なりや

「行け」は　「行く」の　命令　或は　「行ける」の　連用なり

「コソの　結は　ケレぞ」と　いふは　「日本の　紙卷煙草は　敷島なり」と　いはんが　如し

引用・挿入を明瞭にせむとて勾（カギ）「　」を符號として用うること、今行はるゝは然るべきことなり。されど「アト驚ク」「ヤト叫ブ」「ウント言フ」「イナト答ヘヨ」「承知トテ歸レリ」「今年ハ上作ダト」其の他うるさき場合には用ゐざるも却つて可なり。引用には又ダッシを用うることもあり。

引用の重複する時は二重勾『　』を用う。されど三重以上には定れる符號なし。

『詩に　「戰々　競々と　して　云々と」　あるを　孔子の　孝子の　心に　譬へたるは　遠へり』と　我が　師　諭されき

『「昔を　今に」と　うたひけん　たをやめこそは　あはれなれ』かゝるを　今樣調と　いふ

「『藪蛇と　いふ　語を　「藪を　つゝいて　蛇を　出す」の　意味に　いふは　無理なり』とさる　人　いひし　如何　あるべき」と　我　此の頃　人に　問はれたり

引用挿入のトイフをチイフなどと變ふれば、尋常の文となるこれは時代にも因り修辭上の都合にも因りて、いづれをも用うるなり。

人 大博覽會(名) 延期に(句) 定れるを いふ

我 神恩 {を／を／の} 誠に {有り難く／「有り難し」と／有り難きを} 思ふ

「暑中休暇には 海水浴を {したり」など(ト)／したる 事など(ヲ)} 語る

彼の 人 卒業後は 更に 遠く 遊學せむ {と／事を} 願へり

引用挿入の句・小句など修飾部となる時は前述の副詞句又は形容句等となるなり。

(佐々木四郎高綱は) 姨母に 附きて 都の 東 吉田邊に 在りければ 世に 隨ふ 習なり 平家に 奉公も すべかりけれども 思ひけるは 「父 秀義は 故 六條判官 爲義に 父子の 義を なされて 代々 一門の 好を なす 淵は 瀬と なる 世の 中なり ある 樣 あらんずらん」とて 姨母に 養はれて 居たりけるが(盛衰)

さらでも さかしき 岨づたひを 道しるべする 山人の 笠は 重し 吳山の 雪

靴は 香し 楚地の 花「肩上の笠には 無影の 月を 傾け 檐頭の 柴には 不香の 花を 手折り」つゝ 歸る 姿や 「山人の 笠も 薪も 埋れて 雪こそ くだれ谷の 道」を たどり〳〵 歸り來て 柴の 庵に 着きにけり(謠曲葛城)

君ならで 誰にか 見せむ 我が 宿の 梅は 今日こそ 盛なりけれ(連體句に用ゐたり)

知る 人ぞ 知る 色も 香も 世に 類 なき 名花とかや

論より 證據 これは どうだ

殘し おきて いづれ あはれと おもふらむ。子は まさりけり、(レバ) 子は まさるらむ(和泉式部)

春日野は けふは な燒きそ 若草の 妻も こもれり われも こもれり

弊毒の 深き 洗刷 從つて 難く 臣の 菲才を 以つて 克く 濟す こと あるを 期せずと 雖 (事務)方今の急(ナルニヨリ) 止まんと 欲して 止むべからず

白菊や 吳山の 雪を 笠の 下(蕪村)

夜着は 重し 吳天に 雪を 見るあらん(芭蕉)

今一所は、故中務卿宮具平親王と申すは村上の七のみこにおはしましき』（独立的修飾）

その御男君三位中將師房の君と申すを、今の關白殿の上の御はらからなる故に關白殿御子にし奉らせ給ふを入道殿聟どり奉らせ給へり（大鏡）（小句）

蘇子荊と申すつはもの年十六になりけるを……胡國をせめに遣されけるに蘇子荊をば蘇武といふ彼をめして軍の旗を給ふとて

加藤次小長刀を以て障子をさし開きて見れば和泉の判官をば住所についで山木はう官とぞ申ける判官かたひざを立て太刀を額にあてゝ人らばきらんと思ひかけたるげにて待ちかけたり

第十五章 成分の用法

第一節 成分の並置

文の各成分は一個に限らず、二個以上並置せらるゝことも多し。前章中にも其の例あれど、今各部の語・句・小句等に就いて更に其の例を擧ぐべし。

一 主部

風も　雨も　穏なり

五日の　風も　十日の　雨も　時に　順ふ

飯を　食ふが　肉體を　保つが　汝の　目的か

何の　罪の　錯の　あれば　かく　翁をば　歌に　作りては　歌ふべきぞ（今昔物語）

（櫂子）握る　手の　節の　隆きは　眞黒きは　松の　小枝に　青筋　立てゝ　うんと
主　並立

かく　力の　脈を　通はせた　樣に　見える（虞美人草）

勳章は　時々の　恐怖に　代へたると　日々の　消化に　代へたると　あり（鷗外）

水と　空と　同じ　色に　見ゆ

桔梗　女郎花　龍膽　地楡などは　秋の草なり

鯛は　花は　見ぬ　里も　あり　けふの　月（西鶴）

二　敍述部

梅は　苦く　酸し

君の　眼は　圓く　太し

彼　來て　歸れり

此の　人　善く　飮み　善く　談る

我　茶を　好み　酒を　嗜む

田村麿　目は　蒼隼の　如く　鬚は　銀線の　如し

「雨　降れど　降らねど」　濡るゝ　我が　袖の　かゝる　思に　乾かぬや　など（後撰）

我　昨日　上野公園を　見　博物館　動物園をも　見　東照宮を　拜し　辨天に　詣でたり

武藏野の　秋を　さやけみ　妹と　われ　野べの　小路　行きつ　もどりつ

公は　實に　當代の　功臣　百世の　龜鑑なり

義は　宜なり　行つて　宜しく―するを　いふ

其の　人　美目　盼たり　巧笑　倩たり

槍の　權三は　伊達者で　ござる　油壺から　出た　樣な　男　しんとろとろりと　見とれる　男（以上一文）　どうでも　權三は　好い　男　花の　枝から　こぼれる　男　しんとろとろりと　見とれる　男　いとしい　男（近松）

勝間田の　池は　我　知る　蓮　なし　しか　いふ　君が　鬚　なきが　ごと（萬）（「我シル」は副詞句とも見るべきか）

一年を　去年とや　いはむ　今年とや　いはむ

木の　まより　見ゆるは　谷の　螢かも　いさりに　蜑の　海へ　行くかも（玉葉）

來た〳〵　春が　　ふれ〳〵　こ雪

三　客部

副格名詞と處置格のと並置せらるゝは論なきが、其の外にも同種の客の並置は甚多し。

諸子　明日　紙と　筆とを　持ち來れ
色をも　香をも　知る　人ぞ　知る
春は　來れり　野に　山に
天にも　地にも　此は　たゞ　ひとつ　あり
枕より　跡より　戀の　せめ來れば　せむ　方　無みぞ　床中に　をる(古)
杖とも　柱とも　たのむ
うんとか　すんとか　何とか　言へ
藤原の　龍麿　今年　む月ばかり　身まかれりけるに　その　墓に　高松山と　いふ
所に　詣でゝ　花など　手向けて(岡部日記)
順子も　其の　支度を　急いで　藥品から　滋養品から　婦人は　うるさき　頭の　物
化粧の　品々まで　細に　整へて　愈　明日　立てるまでに　荷物を　拵へた(こぶし)
ちり　ちらず　聞かまほしきを　故里の　花　見て　歸る　人も　逢はなむ(拾)

春や　とき　花や　おそきと　聞き分かむ　鶯だにも　鳴かずも　あるかな(古)

北山になむ　某と　いふ　處に　かしこき　おこなひ人　侍る(若紫)

一客部を二部にも分つべし。

恠みと　そこに　おもはく　家ゆ　出で　「三歳の　程に　牆も　なく　家　滅目八跡(ウセメヤト)」 愛ノ誤カ

「此　筥を　開きて　見てば　元の　如　家は　あらむと」　玉篋　少し　開くに(萬、九、浦島)

世と　共に　峯へ　麓へ　おりのぼり　ゆく　雲の　身は　我にぞ　ありける(後撰、雜)

詞をいくつにも分つこと。

「藏人の　少將　いかに　おもひ　給ふらむ」と。「女の　身は　心うき　ものにこそありけれ」と。おもひて　なけど　いふ　かひ　なし(落窪)

「うき　ことを　色は　かはらず　梅の花　ちるばかりなる　嵐なりけり」と。おしはかり給へと。のたまへれば

四　修飾部

高き　卑しき　身分　あり

春の　色の　到り　到らぬ　里は　あらじ(以上副詞句)　さける　さかざる　花の見ゆらむ(古) 熟語カ

行く　歸る　友を　送り　迎ふ

よき　あしき　事の　目にも　耳にも　とまる　有樣を………(帚木)

………ぞ　此の　道の　靈しく　奇しく　あだし國の　萬の　道に　すぐれて　正しき

高き　貴き　徵なりける(直毘靈)

清く　赤き　心を　みがけ

君　浮き　沈む　木の　葉　石の　性を　見よ

遲く　疾く　己が　樣々　さく　花も　ひとつ　二葉の　春の　若草(定家)

汝　明日も　必　來れ

器量なら　姿なら　何處　ひとつ　點の　うち所　なし

行けど　ゆけど　ゆけども　盡きず　小松原

答案　今　纔に　成れり

聲色なら　仕科なら　實物　そつくりだ

世の　靜ならぬ　ことは　必　政の　直く（きニテモアルベシ）ゆがめるにも　より侍らず(薄雲)

御惠投の　金子　仰に　任せ　甚　如何ながら　有りがたく　拜受仕候

此等二個以上の修飾語が他の一語に係れる者にて、並置の本體なり。通例「我が思ふ人」などいふ時は「我ガ思フ」は形容句にして並修にはあらず。「高ク卑シキ人」は並置なれど同一人の位高くして

心卑しきをいふとも說くべく「高キ卑シキ人」は高き人と卑しき人とをいふ區別注意すべし「行ク歸ル」は「浮キ沈ム」の如く「行キ歸ル」ともいふべく、此の場合には兩種の語法あるなり。「商人タリ軍人タル我ガ二弟」なども前のは中止なり、その中止形又は他の連體形を略しては

教員　判事たる　我が　二兒　云々

英　佛の　事情は　我に　知られたり

日本　支那の　文明は　同じきも　異なるも　あり

唐の　大和の　物語は　事　ふるし

奈良の　京都の　樂しかりし　漫遊を　思ふ

といひ、ノを一々にそふるは却つて特殊の場合の如くなれり。

前に形容小句の段に言へる如く、逐次的に一より二、二より三へ係れるを並置とは言ふべからず。「我ガ國ノ人」「君ガ家ノ兄弟」などの外、

あまり　甘き　菓子は　我　好まず

極めて　美しく　咲ける　花　盜まれたり

急ぎに　急ぎて　行け

屋根は　萱の　床下は　石の　家を　建てむ

など皆並置にあらず。左例の成分を解きつゝ並置を指摘すべし。

前途の　目的だに　慥ならば　一時は　乞食を　すとも　我は　厭はず
葛の葉　口を　もつて　筆を　くはへて　字を書く
我　一日を　煙草を　吸ひ　茶を　飲みて　暮せり
體温　下らず　食氣　進まずば　かの　病人　危からむ
汝　家に　在りても　外に　出でゝも　我が　此の　訓誡を　忘れずば　まづ　當分
甚しく　身を　害する　こと　無からむ
君　來ずば　ねやへも　入らじ　こむらさき　我が　元結に　霜は　おくとも
君や　こし　我や　行きけむ　おもほえず　夢か　現か　ねてか　さめてか
春の　色の　いたり　いたらぬ　里は　あらじ　さける　さかざる　花の　見ゆらむ
朝日　さし　さゝざる　垣の　内外には　きゆる　消えざる　霜ぞ　みえける(直助)

五　獨立部

も亦並置せらる。

眞や　〳〵　汝を　いかに　せむ
水　水　水を　持つて來い
さかまく　大浪　しのつく　氷雨　それも　物かは

山を　抜くべき　力も　折れぬ　あはれたをやめ　あはれ　我が　駒

諸君よ　諸君　諸君は　今の　時勢を　何と　御覧に　なりますか

あゝ　一代の　寵兒　亂世の　英雄　汝も　姣兎　死すれば　良狗・煮らるゝに　免れざるか

第二節　成分の位置

成分の位置言ひ易きが如くなれど、實は然らず。

一　正置

尋常普通の文は大抵主・客・敍と次第し、修飾部は被修飾部の上に、獨立部は文の始にあり。

修	主	修	客	修	客	修	敍
	子ども						立てり
小き	子ども		庭に				集れり
小き	子ども		庭に			樂しく	遊べり
怜悧なる	子	白き	紙に	黑き	馬を	巧に	書けり

あはれ(獨) いにしへ(修) ありき(叙) てふ(叙) 人麿こそは(主) 戀しけれ(叙)

暑さ(主) 往けば(叙) 寒さ(主) 來る

とかく(修) 氣候 不順なり(叙)

修飾部の一文に係るはその全體の上に在るべきこと論なし。さて二個以上の修飾語の重る時は、いかに之を次第するぞといふ事は頗判じ難きが、まづ被修と最密接なる者を最近く置くが正當なるべく、細なる事に至りては修辭上の問題たるべし。左例の如きは其の位置を變じ得ること勿論なれど、正置にあらずとは定めがたし。

君 來ずば ねやへも 入らじ こ紫 わが 元結に 霜は おくとも(古)

小鹿 鳴く この 山里の さがなれば 悲しかりける 秋の 夕暮(夫木)

道德的 二個以上の 事項

金米糖を 入れたる 染付の 古南京の 目ざましき 一個の 壺

ある なまけものゝ 學生の 佐藤と いふ 者

生唼 磨墨と いふ かの 二匹の 賴朝の 愛馬は 少壯なる 譜第の 郎黨 佐々木 梶原の 二人に 與へられたり

東湖は　中背で　がつしりした　骨組の　岩疊に　太つた　猫背の　丈夫な　體格であつた(日本人)

これを　上げると　母樣の　里の　土産に　戴いた　金平糖の　はひりたる　口の　小い　壺　ひとつ(前田純孝)

二　倒置

は修辭上の變なり。その場合には倒置せる方適當なる者なるが、前項の正置に對して之を倒置といふなり。倒置は、(一)主要なる語句をまづ始に提示すると、(二)密接なる語句を相接近せしむると、(三)音調を整ふるなどより起る。

(1) 敍述部を始に置くもの

やよや　待て　山時鳥

美なるかな　山河の　固

そいつは　御免だ　僕は

今日よりは　かへり見　なくて　大君の　醜の　御楯と　出で立つ　我は

吹きまよふ　野風を　寒み　秋萩の　うつりも行くか　人の　心の(古)

見よ　君　現下の　形勢を

とまれよ　蝶々

聲　絶えず　啼けや　鶯　　何だ　何だ　それは

請ふ　賛成せられむ　ことを　(請ふハ常ハ修飾語ナリ)

恨むらくは　我が　來る　こと　遲く　彼が　去る　こと　早くして　其の　愁死を救はざりし　ことをこそ(南谿)(是ハ倒置ノ如クナレドモ然ラズ)

(2)　客部を始に置くもの

かう　いふ　說で　彼の　人は　あつた

竹に　昔は　(人)　物を　記したりき

それを　あなた　どう　なさいます

君に　二心(主)　我が　あらめやも

ゆゝしき　者にて　義朝　ありけり(愚管抄)

「緣　なき　衆生は　度し難し」と　釋迦は　說けり

云々と　甲　問へば　云々と　乙　答ふ

釋尊に　亡父母に　見(マミエ)ん　事を　祈求す(新著聞集、一)

「我がアラメヤモ」の類は主敍を接近せしめ、且は主要なる客部を前に出せるなり。「我アニ君ニ二心アラムヤ」といふ文と比照すべし。「義朝アリケリ」は義朝といふ主を略せむとして言ひ出した

るが、思ひつきたる樣に挿入的に主を後馳に入れたるなるべし。ト思フト云フの場合、今の漢文直譯調なるは客部を主の後、敍の前に正置すれど、其の客部長きときは極めて心得にくし。その長き客部が一文の主要なる所にもあれば旁之を抽出して前に置き、其の下に主敍を置くこと日本文の慣例なり。修辭家宜しく思を此に致すべし。

(3) 修飾部(主の修ならぬ)を始に置くもの

自家の 感情と 技巧とを 土臺と して 歌は 作る 者で ある

三人 その 子は あり

のどやかに 世は なりにたり

頗 愉快に 我は 一日を 暮せり

(4) 主・客・修・獨を終に置くもの

あらはれて いとゞ 淺くも 見ゆるかな あやめも わかず なかれける ねの(螢の卷)

春は 來にけり 野に 山に

幾夜 ねざめぬ 須磨の 關守

梅の 花 折りて かざゝむ 老 かくるやと

對島の 海 あなた こなたを 結びとめて 浪の あや 織れ からの やまとの(惟

助)

戀す てふ 我が 名は まだき 立ちにけり 人 知れずこそ 思ひそめしか

思ひきや 「雪 ふみわけて 君を 見む」とは

ちぎりきな 「末の 松山 浪 こさじ」とは

おのづから 涼しくも あるか 夏衣 日も ゆふぐれの 雨の なごりに(新古)(是ハ夏衣ニツキテ兩樣ニ見ラル)

折られけり 紅 にほふ 梅の 花 けさ 白妙に 雪は ふれゝど(新古)

今更に 雪 ふらめやも 陽炎の もゆる 春べと なりにし ものを(萬)

舟 とく 漕げ 日の よきに

(5) 二種の客部及修飾部と敍述部との關係

命を 君に 捧ぐ

金を 懷中より 出す

成敗をば 天に 任せむ (實隆公記、中臣祓於御前說之)

膝を ひどく 打てり

我 彼と 親しく 交れり

此等尋常の例とも聞ゆるが、抑副格の客と處置格の客との位置の前後言ひ易からず。案ずるに國語は主・客・敍と次第し、漢文・洋語などは主・敍・客と次第すること何の理ぞといふに、彼は主・敍の係屬密接にて、客を下に彈き出し、我は客・敍を合せて然る後に主に係屬する差異あるなるべく、其の客は處置格なるが最も敍述に密接なる理なれば、勢副格なるは更にその上に彈き出さるべき筈なり。之に因りて前項に正置の場合を說けるが、此處の倒置の時は、處置格なる客は特に終に抽出する必要ありて、その爲に副格の客が敍語と親しく結合せる者なるべし。修・敍の關係も同樣にて、尋常ならば客敍の一團に修の添ふ所を、客を抽出して修と敍と密接すれば此の倒置をなすなり。

(6)　不穩當なる倒置

決して「之を　以て　憲法を　破壞した」など丶　いふ　自分は　其の　觀念を　持たぬので　ある(伊藤公)

左樣な　自分は　考を　以て　進止を　伺つたのでは　ない(同)

是が　一つの　大問題と　我々の　醫學社會では　今日　なつてをる　所のもので　ある(北里博士)

それ丈　先方に　益する　所が　私は　無かつたかも　知れませぬ(同)

ハイ　昨年の　四月　中旬　赤穗城内で　木村の　爲に　討たれました　淺野の　家來宮原大學の　私は　悴で　ございます

此の如く修と被修との間を割りて、主又は他の修飾語を挿入すること今の口語には極めて多き事なれば、不穩當にはあれど許容すべきものなるべきも、

此の 時局に 對する 教育に 從事する 人の 心得に ついては 開戰の 當時に おいて 文部省より 訓令を 發して 置きましたからして 云々(久保田文部大臣)

。これは ある 人 神わざなりと。 いへり

さても 競を(客) 宗盛(主)「年來の 主を すて 他人の 門 ふまんずる もの」と おもひ(敍) けむ あうなさよ

は前後せざれば如何にも不明瞭なり。

外に 數 なき 類 なき 御家の これが しるしなり(近松、薩摩歌)

梅が 枝に 來るる 鶯 春 かけて なけども いまだ 雪は ふりつゝ(古)

みる め なき 我が 身を 浦と 知らねばや かれなで あまの 足 たゆく 來る(古)

わが 園に 來て 鳴かぬ 日は 鶯の あれども 聲を きかぬ 日は なし(景樹)

秋の 田の 穗の 上に すがく さゝがにの いと(修) 我ばかり(修)(ノ如ク我ハ物オモフ) 物は 思はじ(金槐)

近松のは珍しきが差支なし、春カケテはフリツヽに係る修飾なりと宣長翁言はれたるが如何あ

らん。ミルメナキは我が身と浦と兩方に引きかけたるより此の如きものとなれり（「見ル目ナキ我ガ身ヲ海松メナキ浦ト知ラネバヤ」なり景樹のは鶯ノを始は來テ鳴カヌの主とし、次には聲の修飾として用ゐん爲に「鶯ノアレドモ」といふ讀方になりて無理に思はるゝなり。

凡成分の位置は時代によりても修辭によりても變更すること此の如くなれど、無理にならぬ樣に注意せざるべからず。 御製

とこしへに 民 安かれと 祈るなる（以上修飾部にて大神にかゝる） 我が 世を 守れ
（挿入） （敍）
伊勢の 大神
（主）

などは巧なる排列なるべし。

(7) 修辭上の倒置　と文法上の倒置とは一致すること多けれど、又おのづから異なること無きにあらず。韓愈の

奔走に 衣食す（衣食於奔走）

は修辭上の倒置なれど、文法上に倒置として「衣食ス奔走ニ」と置換へらるべきにあらず。又白樂天の

林間 酒を 煖めて 紅葉を 燒く（延慶本朗詠ノ訓之ニ同ジ）

（金子元臣、「煖めて、題して」ト訓メレド義通ゼズ」トテ「煖むるに」「題するに」ト訓マセタリ）

の如きも「紅葉ヲ燒イテ酒ヲ煖ム」といふ事を斯く言へるなれど、國文に「紅葉ヲ燒ク酒ヲ煖メテ」と言はれざるのみならず、「酒ヲ煖ムルニ」又は「紅葉ヲ燒イテ」と修飾に言ふも共に作者の意を損す。此は修飾と敍述とに言ふべきを敍述の並置に言ひなしたる處に妙味あるを思ふべし。因果の關係ある事にても、それを言語に言ひことわらず、たゞ二つの事の樣に言ひなせる者は、之を前後すること修辭者の隨意にして、文法上より其の位置の正倒を言ふべきにあらず。

星　稀に　月　明なり（月明星稀）
夜聞歌者宿鄂州（白氏文集十）
石　出で　水　落つ（水落石出）
月　小に　山　高し（山高月小）
後客　來り　先客　去る（先客去り　後客來る「兩事前後不定ナリ」）
石上に　綠苔を　拂ひ　詩を　題す（石上題詩シテ拂綠苔）

第三節　成分の省略

或る成分は之を省略しても意義明瞭なることあり。又慣例に因りては之を省略する方むしろ分り易きこともあり。

一　主の省略

主たる事物の眼前に在るか、前後に在るか、或は特別なる敍述語に依りて、或は大體に於いて明なる時、

(貴君) 御機嫌　能く　被爲入候哉

(小生) 御蔭に　(より)て　無事　罷在候

(天氣) 好い　天氣です

(秀吉)・今年　朝鮮を　征す(家譜)

(政府、國家) 貨幣を　改鑄す(年代記)

公園の　樹木　(人之ヲ) 折り取るべからず(掲示)

(一般ノ人) 土手に　登るべからず

(全員) 集れ(部分ノ時ハ「小隊集レ」トヤウニ)

(主上) 八幡に　行幸あり

(上皇、女院) 大原に　御幸せさせ給ふ

明治二十三年　(天皇) 教育に　關する　勅語を　下し賜へり

柏原の　御門の　御時　(上) 平の　宮　造らせ給へり(續世繼)

今年は　(作) 豐作なりと　(人) いふ

(二月列見ノ式、上卿以下) かんざしの　花を　上卿以下の　冠に　さす　(ソノ花ハ) 大臣

は　藤の　花　納言は　櫻の　花　參議　六位　皆　造花なり（公事根源）

卯の　刻より　巳の　下刻まで（——）防戰候と（——）いへども（蔚山狀）

然りと　いへども

「是ぞ　國の　爲に　身を　つくし　心を　つくして　命を　ちゞめ給ひし　本」とは

（ワレ）しらる（非カ）（井上子未亡人）

やるより　外（方法）（主）なし

その　樣子と　いつたら（譬樣が／世に ?）ない（圖だ）

博く　愛する（吾人）之を　仁と　いふ

大臣は（國家之ヲ）親任官と　す

終の二例の如きトストイフはナリタリに通へば、之を附屬辭と定むれば、「仁トイフ」「親任官トス」を一敍述語と見るべけれど、言語の形式上そは强ひたるを免れず。トを含めるは客語にしてイフスは敍述語なりとするに、その主は大臣にあらず、博ク愛スルにもあらず、別に省略の主ありて一敍述句をなせる言方なり。此の如き文を解剖するに句主の省略の事を略して言はざる時は、之を敍述小句といふことを得べし。

此の　晝は　(晝者ノ積ハ)　虎の　積なり

彼は　(筈ハ)　卒業した　筈だ

(譯ハ)(人)　親には　孝行を　しなければ　ならぬ　譯だ

(事ノ相ハ)　新潟に　大火が　あつた　相だ

(樣ハ)　風　吹く　ごとし

(由ハ)「春暖之　候　貴家(修、主)　皆樣　御障も　なく　入らせられ候　由」(ニテ(修) ナルヲ(客))　奉賀候

昔は(修)　「(ナラハシ)(主)　男も　髪を(形)　結ひし(句)　(ナラハシ)なり」(敍)

(ナラハシ)(主)「昔は　男も　髪を　結ひし」(ナラハシ)なり(敍)

此の敍述語の積筈譯相などは名詞なるが、晝彼人大火などの主を敍述し得べき者にあらず、其の主は補塡せる樣の者ならざるべからざれど、前の「好イ天氣デス」の例の如く、言はでも著き事なれば略したるなり。此等をもし一種の接尾語に轉じたる者と見れば、其の上なる成分の附屬物となりて一敍述部をなす事となれど無理なり。「同じ相にても「雨が降相なり」といふ時は熟語形容詞にて雨の敍述語たり。又此等の四語と類似せる如きゴトシ樣ナリ通ナリマ、ナリなどは皆前體後用の形容詞にて、實は相違あるなり。挿入的副詞句の例に擧げたる「世ニ隨フ習ナリ」なども

(世ノ習ハ)　世に　隨ふ　習なり

（世ノ中ハ）淵は　瀬と　なる　世の　中なり

と見るべく、

君は　「（御考ハ）學者に　｛なる　御考に　候や／なるのですか｝」

（君ハ「（オノレ）……ニ　ナラン」ト　思フカ）

君は　（考ハ）學者に　なる　（考）なりや。（有ヤウハ）「我　一度は　しか　思ひし（コト）」なり

（主）「君臣の　道　立つ　ときは　夫婦　父子の　道も　亦　隨つて　立つ　こと」なり

など、口語ノダと敍述する者も皆敍述句の主を略せるなり。

二　敍述の省略

その　理由は　｛いかに　（アル）／（イカニアル）｝

我は　行かむ　君は　（行カズヤ）

鶯の　宿は　（イヅコ）と　問はゞ　いかゞ　答へむ

主上は　何處に　おはしますぞ　（主上ハ）　黒戸の　御所に　（オハシマス）　上皇は　（イヅクニオハスル）（上皇ハ）　一本の　御書所に　（オハス）　内侍所は　（イヅクニオハスル）（内

侍所ハ）溫明殿に（オハス）劍璽は　何處に（オハスル）（ソレハ）夜の御殿に（オハス）と　左衞門督　次第に　尋ね給ひければ　別當　かくぞ　答へ給ひける（平治）

おのれ　今日の　喜を　かくなむ（申ス）

君が　代は　さゞれ石の　苔の　むすまで（マシマセ）

年來　いかで（見ム）と　思ひし　處をも　見たり

和泉の　國まで　平に（アレ）と　願ひ立つ

鳥だに　孝を　知れり　いはんや　人に　於いて　孝　無くてやは（アラム）

（ソレハ）如何にも　仰の　通で（ゴザイマス）

仁と（イフ　コト）は　二人の　義なり

奈良七重七堂伽藍八重櫻

鶯や　柳の　後　藪の　前

川上は　柳か　梅か　百千鳥

ゐは　巨勢の　あふみ　手は　紀の　貫之　かけり（繪合）

敷物には　紫地の　からの　錦　うちしきは　えび染の　唐の　綺なり（同）

天の　原　ふりさけ　見れば（月）　春日なる（出デタリソレハ）　三笠の　山に　出でし　月かも

むつとして　歸れば　門の　柳かな（柳ハ風ニナビケリ）

髮結は「……私も　御伴を　したいもんだ」などゝ　大分　冗談交りの　御せじを　使つた

末「どうぞ　御ゆるり」と（言ツテ）歸つて　行つた（四十二年一月三十日「永日小品」ノ人間）

およづれの　狂言等かも（アル）高山の　いはほの　上に　君が　こやせる（萬三）

鹿の　なく　音に　めを　さましつゝ

雪は　降りつゝ

大波　碎けたるか／たり　と（オモハレテ）凄じ（比喩、假定ニハイハレズ）

梅　遠近　南すべく　北すべく

八汐ぢを　なきわたり行く　かりがねに　われ　まさきくと　言づてや　せむ

願はくは（修）　花の　下にて　死なむ　ことを（客）（願フ）

此の省略は大抵主の場合と同じきが、疑問文に多く、又修飾の下に多し。

第二變化にて文を結べるは敍述全體にあらず、その一部を略せるもの多し。

松たけや　知らぬ　木の　葉の　へばりつき

かくて　ましますも　いまくしう　辱く(候)(桐壺)

三　主と敍述との省略

かくては客か修飾のみとなりて、文の主要成分は無き事となれども、其の主も敍述も或る場合には分り切りたることありて、省略しても更に意義を誤らざるなり。

「新潟市は　ほゞ　燒き盡されたり」と　(人イフ)
（客）

「某侯　昔は　極めて　卑賤なりき」とぞ　(ワレ聞ク)

「彼も　壯時は　一代の　豪奢を　極めたりき」とかや　(世人　噂す)

「何如なる　故にや　贓品　我が　袂に　在りしかば　さてこそ　(汝　盜人ナレ)と　警官
（修　副詞句　客　主）
（修　修　主　修　客　敍　修　主　敍）

我を　疑へり
（客　敍）

(ソレハ)　御めでたう　(ゴザル)
（主　修　敍）

やあ　(アナタ)　御機嫌　好う　(入ラッシャルナ)
（獨　主　修(副句)　敍　主　敍）

さ　どうぞ　(アナタ)　此方へ　(入ラッシャイ)
（獨　修　主　客　敍）

「書生ですら　二十圓は(彼之を)　使ふ」　まして　君の　地位でさ　(百圓ハ　當前ダ)

(余)　いやだつてへばさ(オマヘ　ヨサンカ)

蟻すら　貯蓄を　知る　いはんや　人に　於いてをや　(貯蓄ハ　必要ナリ)

いざ　さらば　雪見に　ころぶ　處まで

子曰はく　巧言令色　仁　鮮し

詩に　云はく「…………」　蓋(ミアルハ)　此の　謂なり

歌垣に　歌ひかゞひし　初瀨女の　末ならむ(ト　見ユル)　子が　窓に　機　おる

春は　花(ヲ賞シ)　秋は　紅葉を　賞す(一語ノ附辭モ略セラル)

今日は今晩ハサ樣ナラなどは修飾語なるが、完結せる思想を表すものとして「好イ天氣デス」「御機嫌ヨウ」「御ワカレ致シマセウ」などを補塡すれば文と見るべし。ハイ　イエ　は獨立語なるが、文と見る必要はなかるべし。シカリは副詞シカと動詞アリと熟せる動詞なれば、單に之を用うる時は主語を略せる文と見るべし。「然り我モ歸ラム」などの時は修飾語と見るべし感動詞及名詞などの一語にて用を辨ずるものは文とすべきが如くにも思はるれど、其等は人の注意を喚び起

す丈の用をなすにて、己の思想を完全に言ひ表せるにはあらさるを思ふべし

四　客語の省略

第一の　矢　うまく　(的に)　中れり

まあ　一服　(茶、煙草など)　御上り

中納言も　法師に　なり給ひぬ　惟成の辨も　(法師ニ)　なり給ひぬ(榮花)

梶原　佐々木に　續いて　(馬ヲ　川ニ)　うち入れたり

信頼　馬に　乘りかね給ふ　所を　侍　二人　つと　寄つて　(信頼ヲ　馬ニ)　押し上げたり

月や　(昔ノ　月ニ)　あらぬ　春や　昔の　春ならぬ

貧乏だに　(苦シキ　モノニ)　あるに　重病に　かゝれり

陸奥は　何處は　(ヨキ　所ニ)　あれど　鹽竈の　浦　こぐ　舟の　綱手　悲しも(古)

酒　あらば　(ワレ　ソレヲ)　飲まむ

四十三年度　評議員を　(貴下に)　御願申度　此段　得貴意候也

世の　中は　何は　あれど　春の　海　秋の　山べに　ます　ものぞ　なき(齋昭)

春　來ぬと　人は　いへども　鶯の　なかぬ　限は　あらじとぞ　おもふ

○萬里路長在、六年今始歸、所經多舊館、太半主人非(舊主人)(白)

此の類の省略數ふるに堪へず。普通には省略とも知らで過し居る者多し。されど「ソレハ筆デアルカ」といふ問に對して、

はい (ソレハ筆デ) あります

といふが如き省略のなすこと能はざる所、注意すべし。英語などは此の筆デといふが同主格(補足)にてその省略も出來れど、我のは副格の容語にて省略せざるなり。かくてかゝる場合に我は敍述を略して「筆デ」「サ樣デ」と言ひ、又は之を修飾語に「サ樣」とも「サウ」とも言ふなり。さて又之を甚しく略するに「デゴザイマス」「デスヨ」などいふ一種の語遣あるは習ふべきにはあらねど、尙容語の面影をデに存する所注意すべし古語に

月に 見る 片山もとの 薄ぐもり 霧か あらぬか 鹿火の 煙か(諸平)

(ソレハ)(シカ) あらず そは 竹なり

とやうにいふことあり。これは今は副詞なる修飾語の省略と見て可なるが、其の根本は容語より轉じたるにもあるべく、漢字非に當るなり。

「何時は あれど 照る 月の 秋の さかり 何處は あれど 行く 水の すみだ川に 夕波の ふた國 かけたる 月 見むと て 唐 日本の 文人 糸竹にしも たへたるを つらねて 浮ぶる こと あり(眞淵)

凉しさの　いづこは、あれど　山里は　清水に　月の　影　やどる　頃(春海)

の如きも、アレドの上の省略は容とも修飾とも言はるべし。

五　修飾の省略

常語にて修飾といふ時は無くても可なる者の樣に聞ゆるより、其の省略といふこと有るまじくも思はるれど、文の修飾部は一種の要素なれば、其の省略も亦無きにあらざるなり。

(問)　明日　行くや

(答)　(アス)　行くべし

の如き、アスといふ修飾語を省略したる者と見ざれば、單に「行クベシ」といふは無意義となるを、問答の時間短き故に略したるなり、此の類頗多し、又

(好キ)　天氣に　なれり

そは　(好キ)　都合なり

(私ノ)　母に　やる

(ワガ)　國に　歸る

もう　(櫻ノ)　花も　咲きませう

(今日ハ　天氣ガ)　お寒う　ございます

さらば　かの　人の　御子に　なりて　おはしませよと　聞ゆれば　うちうなづきて

よう（サヤウニ）　ありなむと　おぼしたり（若紫）

時しも（……）　あれ

程こそ（……）　あれ

などの場合も言語の上よりは省略と解かざるべからず。但一修飾語が二以上の語に係れる左例の如きは省略とは言ふべからず。

善き　筆と　紙と　あり

我が　心も　體も　よわし

新しく　流行する　靴や　帽子

……位置を　占め　居れば（…………）　居るものゝ　（修）（修）

……と　いへば（……ト）（シカ）　いふものゝ　（客）（修）

少し無理なる樣にて却つて面白き省略は

秋も（最中ノ）　秋　今宵も（晴レタル）　こよひ　月も（十五夜の）　月　處も（賀陽院トイフ好キ）　處　見る　君も（前關白ナル）　君（後拾、光源法師）

西郷も（エライ）西郷だが　大久保も　えらい　、

相手も（奸惡ナル）相手なれど　手前も（不注意ナル）手前なり

貧賤ならばこそ（サモ）あれ（ド）貴族の　儉約は　絶對の　美徳に　あらじ

春　きぬと　人は　いへども　鶯の　なかぬ　限は（サハ）あらじとぞ　おもふ

折も（………）折とて　悲の　最中に　男子　生れたり

身こそ（オイテモ）あれ　老いくちぬとも　思はぬは　御國に　つくす　心なりけり（猪熊夏樹）

わが　身こそ（………）あらぬ　樣なれ　それながら　そらおぼれする　君は（サナガラ）君なり（若菜、下）

たはやすく　來れる　罪だに（………）あり　いはんや…………（俊蔭）

（………）ありつる　隨身

（………）件の　隨身

（能登内親王）伊都之可　病止弖　參入弖　朕　心毛　慰米麻佐牟止　今日加（………）有牟　明日加（………）有牟止　所念食都々　侍比　賜問爾（五十八詔）

コソアレの事は第十二章のコソの段を參照すべし、或は客を略せるものと見るべきあり。

六　修飾の下なる種々の省略

世の　中は　いづれか　さして　我が(宿)ならむ　行きとまるをぞ　宿と　定むる(古)

君の　筆は　我の(筆)より　好し

主　敍句

馬は　太く　逞しき(馬)が　よし

修　主　敍

主　敍句

木は　(ワレ)　花の　咲く(木)を　植う

「むかし　我　親の　教に　從ひて　物　かく　わざを　習はましかば」(ワレ今カク恥ヲ見ジ)(正直)

月影の　入るを　惜むも　苦しきに　西には　山の　なからましかば

初雪の　降らばと　いひし　人は　來で　空しく　晴るゝ　夕暮の　空

笛の　音の　春　おもしろく　聞ゆるは　花　ちりたりと　ふけば　なりけり

櫻花　よきてと　おもふ　かひも　なく　この　一本と　春風ぞ　ふく

見るも　うし　さすが　さこそ(來メ)と　待つ　暮に　明日　必(來ム)の　人の　玉章

三位中將　熊野にて　身を　投げて　とて　人の　いひあはれがりし……

法住寺殿の　御がくに　青海波　まひての折など…………

なほ　ことに(云々ニ)　おほゆ(右京大夫集、てドメ甚多シ)
都いでの　冬
何の　心　ありてと　つれなく　おほゆ
ましてと　物を　思ひ　出でつる
常よりも(立派ナリ)と　覺しき　塚の　見えける(山家、下)
手を　擧げて(見ヨ而ル後{イヘ／イフベシ})

昨日／今日}行つて{見タカ／見タ／見ルカ}

君　これ{出來{なくて／て——}(物スルカ／アルカ)／よめて——／よめるの(デスカ)}　前ノ類推カ

教へて(ホシイ。下サイ。願ヒマス)
『おとゞ　うちゑみて「すきものなれば　いひしりためり　はや　御かへり事　をかしくし給へ」とて　立ち給ふ』(ソノ語)を　きくに　四の　君　かたはらいたく　わびしく　おほえて　よりふしぬ(落窪)

（玉垣ヲ「タマキ」トヨムベシトノ眞淵說ニ對シ）もし紀ならむには木或は城と書べきに垣と書るは此の記の傳へは加岐なり（記傳、二十四）

月　出でたれば　窓　明し

（ソレ）月　出でたれば　（然ル）にや　（アラン）（終止セル副詞句）　窓　明し

月が　出たから　窓が　明い

（ソレ）月が　出たから　（サウ）だが　窓が　明い

風の　散すは　花の　爲（ヨキ／スル）事ナリ

落第せるは　勉强せざれば（落第セル）なり

大鹽の　擧兵も　（カレ）人民を　思ひて（セルコト）なるべし

終の三例は簡單にいふ時は省略を含めて敍述部と解きてもあるべし。此の思ヒテセザレバを連體語に思ヒタル　セザルとする時は次の如くなる。

大鹽の　擧兵も　人民を　思ひたる(コト結果)なり

落第せる(コト)は　勉强せざる　(結果)なり

此の語法を更に變化しては「大鹽ノ擧兵モ人民ヲ思ヒタリ」「落第セル(人)ハ勉强セズ」といふことを得。左の歌の如きは此等と同樣なる言樣なり。

白雲の　この　かたにしも　下り居る(事)は　天つ風こそ　吹きて來ぬ(ル・レバ然アルコトナル結果ナ)らし(躬恒)

折々に　蚊やりの　煙　たきけつや　賤も　心を　月に　よすらむ(ルナル)(春海)

此の種の省略を進むる時は修飾語が其の形體を變じて直に主・客・敍の形體をとることあり。簡單に解くには省略を言はでもあるべし。

起床(ノ時間)は　五時　正午が　食事(ノ時間)なり

君(ノ服裝)は　洋服　我(ノ服裝)は　和服なり

彼は　病氣なり

我が　國體は　諸外國(ノ國體)と　異なり

此の　事は　某博士(ノ所說)に　よれば　云々なり

大將軍 義經は 熊の 皮の 頰貫を はき 自余は 牛の 皮(ノツラヌキ)を はく(盛衰記)
（修 客 客）

如何なる 人の 像にかと 尋ぬるに (ソノ像ハ) 佐藤繼信 忠信 二人の 妻(ノ像)なりとかや(東遊記)

陶器は 有田(ノ陶器)が 最 堅し
（主 敍句）

高山 正之 畫は 沈南瀕(ノ畫)を 學べり
（主 敍 敍句）

此等を西洋流に一々ソレといはんは無用の繁雜なり、さて始の二例の如きは

起床は (時間ハ) 五時
（主 敍句 主 敍）

の如くも解せらるれど、前説の方妥當なるべし。こゝに又一問題あり「我ハ讀本ハ一ノ卷ヲ讀ム」の讀本ハの如き領格とも或は副詞とも言はるべけれど、尚主格にて「讀本ハ一ノ卷ノ讀本ナリ」といふ文を、客に用ゐたる一種の語法と見る方、眞を穿てるなるべし (第十二章ハの段參照)

此の 書は 紙は 舶來(ノ紙)を 用ゐたり

(前の「正之」の例の如く「紙は舶來を用ゐたり」を敍述句とも 〃 べし)

これは 珊瑚も 土佐產(ノ珊瑚)なり

我が 住所は 東京も 四谷の 奥(ノ東京)なり

「見給ふ 限の 人は うちとけたる 世なく ひきつくろひ そばめたる 上べ(ノ人ナル、ソレ)をのみこそ」見給へ、かく うちとけたる 人の あり樣 かいまみなどは まだ し給はざりつる ことなれば……(空蟬)

此の修飾語と省略語とを熟語にする時は、次の如く尋常の形となるなり。

彼は 金も 純金なり(金も 純なる 金なり)

これは 珊瑚も 土佐珊瑚なり

以上六項に分ちて略省略を說きたるが、其の應用頗廣く、文を解するに極めて肝要なり。諸種の例に之を試みて會得すべし。

鎌倉の 海に かつをと いふ 魚は かの 境には さうなき 物にて この 頃もてなす 物なり(徒然)

昔 唐土に 孔子 林の 中に おはしけるに(宇治拾)

伊藤侯は「海軍なら 方々で 陸軍なら 奴等」(トイフノ)でせう(兒玉源太郎)

今こそ　あれ　我も　昔は　男山　さかゆく　時も　あり來し　者を(古)
月は　あれど　花は　あれども　樣　かへぬ　富士こそ　國の　ながめなりけれ
結構な　御菓子を　有り難う
今度の　一件は　どうです　英吉利も　英吉利だが　獨逸も　獨逸ですね
天地の　理は　周流活動する　者で　ある　あるから　區々の　私見で　死縛しては
ならぬ
貴意　如何に　此の　使に　御返事を
拾遺集　花山院　御自撰と　いへど　此(新古今)の　序は　公任卿の　撰と　決してなる
べし(八代集抄)
鶯の　なかぬ　限は　あらじとぞ　思ふ
今は　つきぬ　名殘なり　歸の　陸路も　遠ければ　こゝより　上り給へ(クマ川南谿詞)
この　使に　御返し(下サルコト)を　願ひます
京橋は　南紺屋町　電車なら　有樂橋前と　呼ぶ　其處——昔は　六代　音羽屋の　住
居であつた　土藏造の　一棟が　今度　化粧煉瓦の　艶々しい　セ、ツション式の　三
層樓に　改築された

秦王ー〻殺人如(恐)不能擧刑人如恐不勝(擧)(照略)

梅が　香も　柳の　糸も　色　そひて　つれ〴〵ならぬ　春雨の　空(有功)

「かくれぬの辯」の難者「も」「色」の下にあるべし。「柳の糸もうちそひて」などいふべくや。辯者曰はく、空穗ー俊蔭に「木の實くずの根をほりて養ふこのほり拾ひ集めたるものどもをとらせて」とあると同省略法なり。難者の歌にも「魚は水鳥はみそらをとびかけりつゝ」とありとか聞く。それも同じ。

修辭の變略

(記中)此建内宿禰之子並九男七女二○(コヽニ「其子」ナドノ修語アルベキヲ略セリ)波多八代宿禰者波多臣林臣……次許勢小柄宿禰者之祖也

次蘇賀石河宿禰者……次平群都久宿禰者……(ハ)次木角宿禰者……次久米能摩伊刀比賣。次怒能伊呂比賣。次葛城長江曾都毘古者……又若子宿禰……

右衛門督「馬頭の物(見)よりさしいでたりつるこそむげに出家の相ちかくなりて(近クナレル相)見えつれいくつぞよ」とのたまひければ(大鏡、道長ノ段)

第一の相(人ノ相ノ第一)には虎子如渡深山峰なりと申したるに(大鏡、道長ノ段)

二文以上をまとめて敍述部とせる主の大文あり。二文以上にかゝる副詞句あり。

朕惟フニ(副句)「我ガ……深厚ナリ。(ソレニ)ワガ臣民……濟セル」ハ是我ガ國體ノ精華ニシテ教育

ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

頼朝 即 幕府ノ 創立者ハ 治國(上)ヨリ此ノ 新制ヲ トリタルナラン

某ト 某トノ 對戰 正ニ コレ 龍虎 相搏ツモノナリ

寶石トハ 金剛石 ルビー等 是ナリ

志士ノ 命ヲ ステタル モノ 多シ。

頼、梅田、橋本、吉田等 即 是ナリ

例へば 竹を 破るが 如く 數節の 後は 刄を 邀へて 解くべし

思へば 三年の 昔なり われ 大阪に 在りし 時 一日 人 あり 訪ひ來る

里内裏 鴛鴦の 瓦 玉の 石疊 いづれも 〱 三年が 程に あれはてて 舊苔
道を ふさぎ 秋の 草 門を とぢ 瓦に 松 生ひ 垣に 蔦 茂れり」 臺 傾き
て 苔 むせり 松風のみや 通ふらん」 簾 絶え 閨 あらはなり 月かげのみぞ
さし入りける」(平家、福原落)

此大國主神の兄弟八十神ましき然れども國者避於大國主神、 避ケタル所以ハ「其の八十神
各稻羽の八上比賣をよばゝん心ありて共に稻羽に往きし時、大汝神に袋を負はせ從者とし

て率て往きき。是に氣多の前に到れる時、裸なる兎ふせり、八十神その兎にいひけらく汝本の兎にならんとせばこの海鹽を浴み風の吹くに當りて高山の尾上に伏せれといふ。かれその兎八十神の教のまゝに伏しき(こゝに云々六枚中略)かれその太刀弓を持ちてその八十神をおひ避くる時に坂の御尾ごとにおひ伏せ河瀬ごとにおひ撥ひて始めて國を作り給ひき」
(カクノ所以ナリ) 敍

赤松松雲は名は元字は季吉、通稱を元四郎といふ。(「コレハ」トスレバ二文トナル)美作の人にて此頃遠田郡涌谷の伊達氏に聘せられて教授たりき。

第四節　係結

一　成分の係屬

四成分の中にて主と客とは敍述にかゝり、修飾は被修飾に係ること今更いふに及ばず。されど成分には並置あり倒置あり省略あり挿入などありて、複雜なる文にては此の係屬必しも一見明瞭ならず。「美シク咲ケル花ヲ飾レリ」の美シクはサケルに係るや飾レリに係れりや不明なること多き由は「副詞」の段に言へる如く、「戀シキ故山ノ風物」の戀シキは故山に係るや風物に係るやの

事は「成分の並置」の段に言へる如し。其の他

此の　風は　「龍の　吹かする(風)」なり(竹取)

かく　いふは　「播磨守の　子の　藏人より　冠　得たる」なりけり(若紫)

直衣　着たる　人の　おはする　「宮の　おはする」なめりと　聞ゆれば………(若紫)

などの龍ノ子ノ宮ノをナリナリケリナメリにて受けて結べりと大槻氏は見られたれど、恐らくは然らじ、此の類の事は「省略」及「挿入」の段に說きたるを參照すべし、又

そんな　私は　積で　なかつた

のソンナは私に係らざる由は「倒置」の段に言へる如く、文法を考ふる者、及古文を解釋する者は深く此の成分の係屬を思はざるべからず。

二　係結の意義

(1)　係結　直說終止法の敍述語に係る主語客語修飾語(連用的副詞)に疑詞辭又はゾナムある時は第四變化、コソある時は第五變化にて之を結ぶ。之を係結といふ(此等の係なき敍述語は第三變化にて終止するは尋常の係屬なれば、特に說かず)

(2)　結ばざる敍述語　疑問辭に係とならざるものある事は第十二章のヤカの段に言へり。其等の外に係となる者にても、之を受くる敍述語が終止せずして小句・句をなす者は固より之を

結ぶこと能はざるなり。

年頃　よく　具しつる　人々なむ　別れがたく　思ひて　その　日　頻に　とかく　し
つゝ　のゝしる　うちに　夜　ふけぬ(土佐)

形なん　いと　よかりし　人なり

安和三年とぞ　いふめるに　位に　て　三年にこそは　ならせ給ひぬれば(月宴)

そは　誰が　いへる　言ぞ

後宇多の　御門こそ　ゆゝしき　稽古の　君に　ましましし(後醍醐)

されば　ぞ　賞せられたる　次第と　知らる

言掛なるも結ぶこと能はず。引用・挿入には適宜に原文を切斷すれば係結に與らず。

小夜千鳥　聲こそ　近く　なるみ潟　傾く　月に　潮や　滿つらむ(新古)

いつか　我が　身の　をはりなる　熱田の　八劒　ふし拜み(太平記)

梅の　花　誰が　袖　ふれし　匂ぞと　春や　昔の　月に　とはゞや（新古）
強ひて　なほ　袖　ぬらせとや　藤の　花　春は　幾日の　雨に　さくらむ（定家）
よそ人に　とはれぬる哉　君にこそ　見せばやと　おもふ　袖の　しづくを（千載）
〔葵〕　あてきは　今は　我をこそ（大本こそは）　思ふべき　人なめれ（湖月）（大本なめり（万水））（大本ヨシ）
かの　都の　人は　いと　けうらにて　おいせずなむ　思ふ　こともなく　侍る（コヽニテ流シ）
なり（タルナランカ）（竹取、下）
名にし　おはゞ　あだにぞ　あるべき（結ビタルカ、連體カ）　たはれ島　波の　ぬれぎぬ　きると　いふなり
（伊勢物語）
涙にぞ　ぬれつゝ　しほる　世の　人の　つらき　心に　袖の　しづくか（同）
古は　月をのみこそ　眺めしに　今は　日を　まつ　わが　身なりけり（金葉）
句中の係は他句に及ばぬなり。
初装ひしを夢とや　思ふらむ」様なる（ニテラズ）
(3)　結べる前提法　下にドモの意あり直說法にあらざれども、尙結といふべし。

色こそ　見えね　香やは　かくるゝ

彼は　評判こそ　高けれ　實力は　なし

疑問文中のこそ

念佛　申すに　化佛を　見奉ると　いふ　事の　候なるこそ　大念には　大佛を　見

小念には　小佛を　見ると　いへるか（歎異抄）

これこそ　適例ならむか

(4)　二つの結　一つの主・客修の係る敍述語の並置せらるゝ場合に、各敍述語にて之を結ぶことあり。

「鏡なす　吾が　思ふ　妻　あり」と　言はゞこそ　家にも　ゆかめ　國をも　しぬばめ（輕太子）

「日の本の　やまとの　國は　言靈の　さきはふ　國」とぞ　古言に　流れ來れる　神言に
傳へ來れる（續後紀）

人こそは　狂とも　いはめ　愚とも　そしらめ

汝は　何をか　いへる　思へる

(5)　二つの係を一つの敍述語にて結ぶこともあり。

何處に{誰と／何しに}　行ける

止りてや　行きてや　あらむ

花をなむ　その　花をなむ　吾は　忘れぬ

此の　山の　盡きばのみこそ　此の　川の　絶えばのみこそ　百敷の　大宮處　やむ
時　あらめ(赤人)

高砂の　峰の　松とや　世の　中を　守る　人とや　我は　なりなむ(貫之)

かく　してや　なほや　退らむ　近からぬ　道の　間を　なづみまゐ來て(萬)

此の　皮衣は　火に　やかむに　燒けずばこそ　誠なら{むイ／め}と　おもひて　人の　いふ
事にも　まけめ………めら〳〵とやけぬ　さればこそ　異物の　皮なりけりと(レノ誤寫カ)　いふ(竹
取)

ゾ・ナム・ヤ・カ・コソ互に重りて敍述語に係ることなし。さるは「今日コソ花見ニゾ行カメ」など強ひて言はゞ言はるべけれど、コソとゾと相尅殺して兩方の意義を損するより修辭上之を取らざるなり「思フ心チヤ今ヨリコソハ試ミルベカリケレ」(蜻蛉)のヤも「夏ハツル賀茂ノ河原ノミソギコソ神ヤ受クラム秋風ノ聲」(千五百番)のヤも調はず「詞の八千草」の誤寫ならんといひ、千家尊統もうくらめかうくらしの誤といへど、それにても非なり。同じ辭なるも用法によりては調子を損ず。「世ヲ捨テ、入リニシ道ノ言ノ葉ゾアハレモ深キ色ゾ見エケル」(續拾)又は「立チネトヤ言ヒヤヤラマシ白雲ノトフコトモナク宿ニ居ルラム」(貫之集)などの類倣ふべからず。

(6) 連體法にて文を結ぶこと

ヨロヅ(修) サコソ(修) 便ナキ(敍) 御事ニテコソ(客(修トモ)) 候フラメ(敍)(太平記)などは別々なり。

(――コハ項目ノミアリテ說明ナシ――)

三 係結の變

(1) 疑詞及ヤの係を第三變化、卽尋常の終止法にて結べる者あり。

涙川 流す 寢覺も ある ものを 拂ふばかりの 露や 何なり(後撰)

嬉しきを 忘るゝ 人も あるものを つらきを 戀ふる 我や 何なり(後拾)

起きて　ゆく　空も　知られぬ　明ぐれに　いづくの　露の　かゝる　袖なり(若菜下)

(3)ト同類カ)

君　戀ふる　涙に　ぬるゝ　我が　袖と　秋の　紅葉と　いづれ　まされり(後撰)

吾が　髮の　雪と　磯邊の　白波と　いづれ　まされり　沖つ島守(土佐)

淡路島　通ふ　千鳥の　鳴く　聲に　幾夜　ねざめぬ　須磨の　關守(金葉)

年　經たる　宇治の　橋守　言問はむ　幾世に　なりぬ　水の　みなかみ(新古)

住吉の　松の　千歳と　君が　代と　いづれ　久しと　神に　問はゞや(拾玉)

をかしの　ことや　たればかりと　おほゆ　この　君」と　のたまへば(玉葛)

龜の　トと　周易の　うらと　いづれ　深しと　いふ　ことを　いひ出して(續古事談二)

此等は皆疑問文なるが、連體形にて結ばぬは此の頃よりの一種の語法にて柔なる言樣なり。「ヤ何ナリ」は「何ナリヤ」と同じく、「イヅレ勝レリ」は下にヤを添へたると同じ源氏物語の歌なるは「イヅクノ露ノカヽル」といふ疑問修飾句より「袖ナリ」といふ敍述語に係るにて、口語「誰ノ本ダ」といふに同じ此等變例にはあれど、國語として決して不正なる者にあらず。かく言ふが此等の場合に

最適當せるなり第十二章ヤーカの段と參照すべし。

(萬十八、七夕歌)　こゝをしもあやにくすしみ往更(ユキカハ)る年のはごとに天の原ふりさけみつゝいひつぎにすれ(玉緒、シモの結とす)

琴　うちひきなど　してこそ　ながめ給ふらむかし(濱松)

古代の　けさう文の　かへりごとは　かくこそ　しけるかし(狹衣、三)

(2)　コソの結　奈良朝時代までクシク活の第五變化の形完成せざれば、コソを第四變化にて結べり。

衣こそ　二重も　よき　小夜(サユ)床を　並べむ　君は　恐きろかも(仁德紀)

おのが　妻こそ　とこめづらしき(萬)

玉くしろ　まきぬる　妹も　あらばこそ　夜の　長けくも　歡有倍吉(ウレシカルベキ)(萬、十二)

たくぶすま　白山風の　ねなへども　ころが　おそぎの　あろこそ　えしも(萬、十四)

更に　いとこそ　いみじき(落窪、二)

後世のにも「年フレバ忘レヤセムト思フコソ逢ヒ見ヌヨリモ我ハワビシキ」(信明集)など此の類なるも少しはありされど「萬代チヨバフ山邊ノヰノココソ君ガ仕フル齡ナルベシ」(蜻蛉日記)や「諸共ニコソ笑ヒテキ」(同上)や「紅葉ハ惜シキ錦ト見シカドモ時雨ト共ニフリテコソ來シ」(後撰)や「來ムト云ヒテ來ザリシ夜モアリシカバ待タヌシモコソ待ツニマサレル」(六帖)「コノ殿バカリ

コソ見奉リ侍ランズラント思ヒケレバ……住ノエ殿ト申ス所コソ京ノ尼上トテオハスルトイヒケレバ(住吉物語)などは正しき者とはいふべからず。(「侍ランズラント」は「侍ラメト」「オハスルトイヒケレバ」は「オハスルナレ」の省略にてよきか)

こぞの　秋　あひ見しままに　けふ　見れば　おもや　めづらし　都かた人(萬、十八)

今衣(イマヅ)　吾(ワガ)　來禮(クレ)　(萬、七)

よそ人に　とはれぬる哉　君にこそ　見せばやと　おもふ　袖の　雫を(千載)

駿河舞、有渡はまに　するがなる　うどはまに　うち寄する　波は　七種の　いも　ことこそ　よし」　ことこそ　よし七種の　妹は　ことこそ　よし　あへる　とき　いさゝは　ねなむや　七種の　妹　ことこそ　よし

催馬樂、大芹　小せりこそ　ゆでゝも　うまし

(3)　係屬の變

紫苑と　いふ　草こそ　「それを　見る　人　心に　覺ゆる　ことは　忘れざなれ」(宇治拾)

人の　心ぞ　「風も　吹きあへぬ」(古)

象こそ　體　大なれ

大きおとゞの　山里に　こめおき給へる　人こそ　いと　上手と　きゝ侍れ(少女)

かのおとゞ いと 心 ことにこそ 思ひて の給ふ 折々 侍れ(少女)

などは文主の係を敍述句・敍述小句にて結べるにて、係屬上難なきが、

明けぬれば つれなく なりぬ「女郎花 人 知れずこそ 折らむ」と 思ふに(躬恒)

あはれ てふ ことに しるしは なけれども 言はでは えこそ あらぬ ものなれ(貫之)

「是も 亦 これの 島根の 人にこそ 有りき」と 云ふなれ(續後紀)

あまり よろづ 勝れ給へらむ 女の 御あたりには 誠の 御せうとならざらむ 男は いみじうとも 睦しうこそ おふし立て給ふまじき わざなりけれ(狹衣)

この 帝……父帝の 位に 卽かせ給ひて 五日と いふ 日に 生れ給へりけむこそ いかに 折さへ 花やかに めでたかりけむと 覺え侍れ(大鏡)

「まだ 世にこそ おはす」なれ(同)

「明けてこそ 見む」と 思ひし 箱崎の 波間に かすむ 松の 村立(景樹)

などは係屬を誤れり。されど此等のコソを正しく結びて試むるに、語氣何となく相應せず。かゝるは敍述句の場合と等しく、成分の係屬をば忘れて唯語氣にのみ釣られて、「折ラムト思フニ」「アラ

ヌモノナレ」などを一敍述部と見て、それにて結び或は流せる者なり。又はコソの位置の轉じたるにて、「折ラムトコソ思フニ」「人ニアリキトコソイフナレ」の意なりとも見るべし。此等好んで學ぶべきにあらざれども、破格とは言ふべからず。

喜憂は　見る　人の　心による　物にこそ　あれ
心にこそ　よれ
心にこそ　よるものなれ

など三文共に用ゐらるゝなり。此の點に於いては係結と成分の係屬と一致せざれども、其の他は全然一致すべき者なり。さて茲に一言辯せざるべからざるはこの係結と歌文の終との差別なり歌文の終には、敍述語のみならず、主語も客語もありて、敍述語以外なるは結に關係せざるを、古人は係結の一部として說けるもあるは丁寧すぎて體を失せり、又敍述語なるも用言用辭以外は結に關らぬを、體言にて結ぶとか何辭にて結ぶとか沙汰するも無用なり。而してこの係結は主として平敍・疑問の二文に存する者にて、命令文・感嘆文に於いては趣を異にすること多し。そは後章に就いて見るべし。倒置なき文の終にあるべき助辭のことは各の段に言へり體言にて終れる者は後章にていふ提示文なり。

降る　雪の　みの代衣　うち着つゝ　春　來にけりと　驚かれぬる(後撰)
あひに　あひて　物　思ふ　頃の　我が袖に　宿る　月さへ　ぬるゝ顏なる(古)

梅の　花　香をのみ　袖に　止めおきて　我が　思ふ　人の　おとづれもせぬ(新古)

時鳥　峰の　雲にや　交りにし　ありとは　聞けど　見る　由の　なき(古)

の類、皆連體法にて結べるにあらず。ノを係辭とするは妥しからず。但疑詞を係とせぬ人もあるは如何あらむ。「長濱ノ眞砂ノ數モ何ナラズ」などのナニは固より不定詞なれば係にあらざれど、疑問文を成すものは尙係にて、連體形にて之を結ぶなり、其等をすべてカの省略とは言ひ難かるべし。

(4)　近文係辭を引用的として、尋常の結法をとるものあり。

……とは知る人ぞ知れり

これこそ……………なり

――なほ諸例を擧げん。

新年の第一日はこの壯嚴なる賢所の御式よりこそ始るなれ　ニコソアレ／リ(亦正)

打かすみたつ木もみえぬ春の野に聲をやしれと鶯のなく(曾丹集)(疑問の命令はありえず。「聲をしれとや」とあるべきならん)

みるめかるかたぞあふみになしと聞く玉もをさへやあまはかづかぬ(後撰)

罪もなき人をうけへばわすれ草おのが上にぞおもふといふなる(伊勢物語)

鼻こそ中にをかしげにておはすとこそはいはるめれ(落窪、二)
香をとめて人もとひけり梅の花鶯をこそさそふと思ひしに(月詣集)
塵をこそすゑじと思ひし四つの緒に老の涙を殘しつるかな(著聞、孝道)
よろづのことは月見るにこそなぐさむものなれ(徒然)
實に人の運命こそははかりがたきものなれ(トイフハ尋常、サテはかりがたけれトモイフベシ)
古のかべにだにこそありときけ池にうつれるかげもみえなむ(赤染衛門集)
みるめかる潟ぞ近江になしときく玉もをさへやあまはかづかぬ(後撰、十一)
ちりをこそすゑじとせしかひとりぬるわがとこなつはつゆもはらはず
曉はゆふつけ鳥のわび聲に劣らぬねをぞなきて歸りし(大和物語)
人はなどとはですぐらむ風にこそしられじとおもふ宿の櫻を(新續古今)
心あらむ人は後世をこそ思ひ定むべきにて候へ(日蓮、南條兵衛七郎ヘノ書)
夕月夜覺束なきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見め(古、九)
播磨路や月も明石の浦風に波ばかりこそよると見えしか(忠盛)(アリアケノト俊成ナホシテ、千載ニ)
戀しきがかたもかたこそありときけ立てれをれどもなき心地する(古)

もろこしも天の下にぞありときく照る日の本を忘れざらなむ(新古)

ゐのころは何の心もなかりけり何の心かありと尋ねむ(景樹)非ヵ

あふことは夢にのみこそならひ來て現ともなきこよひなりけり(千五百番)

何れもさもこそあるべき事にて候へとて(太閤記)

降る雪に色はまがひぬ梅の花香にこそ似たるものなかりけれ(拾遺)

稲葉もる聲こそよるの小山田は音せぬよりも淋しかりけれ(西公談抄うらかへりたる心の歌)

似げなかるまじき心の人のあはひなりかしとぞおぼしなしてとがめさせ給はざりける(榊)

音はしてまつ間程なく來つれども車は人ののりこぼれたる(崑山健)

冬草のかれもはてなでしかすがに今としなればかりにのみくる(貫之集)

久に來ぬ人をまつにやあえぬらむときはの戀と我はなりぬる(躬恒集)

暮れて後うしろめたきを山櫻風の音さへあらく聞ゆる(元輔集)

深からぬ外山の庵のねさめだにさぞな木のまの月はさびしき(良經)

さるべきがなきと聞ゆる(おぼしわたる程に(落窪四))

第十六章　文の種類

文法上に言ふ單位の文は、其の組織上より、性質上より、又は事物の待遇上より、語氣上より種々に

分類すべし。

第一節　組織上の種類

最簡單なる文は一主語と一敍述語とより成る。而して之に客語又は修飾語を加へたるあり、其等の語の二個以上並置せられたるあり、其の成分の小句又は句なるあり。今主語と敍述語との關係によりて單文・複文・重文の三に分つ。

一　單文

一個或は並置せる主語の一個、或は並置せる敍述語・敍述句に係る者を單文といふ。

花　さく

夜　漸く　長し

家康　かつて　今川氏に　質たりき

よく　勉强する　人は　將來　必　何事をか　世に　殘すべし

我　昨年　支那に　遊びて　風俗　人情を　視察し　彼の　大官　紳商　或は　靑年に　交りたり

梅も　櫻も　散れり

竹の　幹は　圓く　長し

彼　よく　勉め　よく　遊ぶ

此の中の並置成分なるは主敍の關係單一ならざれば單文にあらず、聯構文なりと說く人もあり成る程事物は單一ならざれど、主敍の關係は然らず「梅チレリ」「櫻チレリ」といふ二文を併せたる者と、「梅も櫻も散れり」といふ一文とは意義同じからず「竹ハ圓ク長シ」も單に圓シといひては球の如くも誤られ長シといひては草木の如くも誤らるべく、「圓ク長シ」にて始めて竹幹に對する其の人の思想を表すべきなれば、「竹ハ圓シ」「竹ハ長シ」の二文を併せたる者とは言ふべからず。

天と　地と　分る

太郎　次郎は　兄弟なり

謙信と　信玄とは　戰國の　二傑なり

せきと　熱と　繼續せば　危險ならん

に於いて　天ト地ト　太郎次郎ハ並置主なればこそ分ルとも兄弟ナリとも言はるべけれ、「天下分ル」「次郎ハ兄弟ナリ」にては何の意義をも成さぬを見るべし是に由りて並置成分なるは二個以上の文を聯結構成したる者にあらず、本來思想の形式がかく成り出でたる者なるを知るべし

(聯構說に從ふ時は修飾語・客語などの並置の場合も同樣に言はではならぬ理となるべし)

象は　鼻　大なり

我は　財産　なし

の如きは主語と見るべきもの二個あれば、單文にはあるまじきかとも思はるれど、この際の敍述句は一個の主語に係屬せる者なれば、主敍の關係單一なり。從つて

日本は　面積　狹く　人口　多し

公　學　博く　德　高く　才　長く　而して　其の　官位　甚　上らず

の如く敍述句を並置せるもなほ單文とすべし。是に於いて更に單文は形容句・副詞句・中止句を含まざるものなりといふを得べし。

二　複文

文の本系に對して、他の主敍の關係ある句の附屬せる者を複文といふ。

我　先日　牧溪の　かける　龍虎を　見たり

君が　いふ　美は　我と　異なり

孔子の　說ける　天と　耶蘇の　說ける　天とは　同じからず

月　明なれば　星　稀なり

水　餘り　淸き　故に　大なる　魚　すまず

雨は　ふるとも　風だに　吹かずは　我は　行くべし

此等は形容句・副詞句を含める文にて、主・敍の關係の單一ならざるより、複文といふなり。獨立句あるも然り。

月の 明なる、星の 稀なる 兩者 因果の 關係 あり

副詞句の前提的なるは下の全文に係りて、他の形容句又は形容句ある、副詞とは趣を異にすれど、今は大體に之を複文とせり。

二重前提

老いぬれば さらぬ 別の ありと いへば いよ〱 見まく ほしき 君かな

急がずば ぬれざらましを 旅人の あとより はるゝ 野路の むらさめ

三 重文

文の本系に附屬せずして主・敍の關係ある句を含む者をいふ即中止句ある文を重文といふなり。

花 咲き 鳥 歌ふ

春 すぎて 夏 來たり

平氏は 壇の浦に 亡び 北條氏は 鎌倉に 終れり

月 明に 星 稀に 烏鵲 南に 飛ぶ

信長は 身を 全くせず 秀吉は 一代の 榮を 極め 家康は 十五代の 基を 開

けり
事務の精通は尾崎千家に（如かず）名利を見る明は千家尾崎に如かず
〔と某男の評語面白し(42、10、26、讀賣)〕
更に宮廷の要職を汚し重任を辱むるは尸位素餐臣誠に自安ずる
事能はず
明正天皇は後水尾天皇の女一宮にして、御母は中宮源和子なり(是は敍と敍句との並置
にして重文と混じ易き例)
春は暖にして日長し(是も混じ易き例なり)
「處の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は白く、貝の色はすはうにて」
五色に今一色ぞ足らぬ(是は重文を重ねたる例)

四　混交文

以上諸種の組織の混交せるをいふ。

花さき鳥なく春の景こそをかしけれ(重文組織ある複文)

體温下らず食慾進まずば彼の病人は危險なり(同上)

父慈に子孝なれば家治る(同上)

雨降れば吾書を讀み天晴るれば彼耕す(複文組織ある重文)

君が教へし子は賢く我が生めるは愚なり(同上)

先生の徳山高く水長し(重文組織ある單文)

薩の健兒衣は肝に至り袖腕に至る(同上)

我雨ふれば讀み天晴るれば耕す(複文的重文を單文に組織せる文)

東風吹かばにほひおこせよ 敍 梅の花 主 主なしとて春な忘れそ 敍 (同上)

春(節)は花さき鳥うたひ秋は實熟し葉枯る(重文組織あるを重ねたる重文)

「今は富士の山も煙立たず 副句 なり長柄の橋もつくるなり 客」と聞く人は歌にのみぞ心をなぐさめける(複文を含む重文を客とせる單文)

鶯は春來れば 副句 鳴く(複文)

鶯は春になれば 副小句 鳴く(單文)

およそ此の組織上の名は人爲の人爲にして極めて妥當なる名にはあらず。されば某句ある文、又は某句と某句とを某樣に併せたる文など稱しても事足るなり。惡しく拘泥すべからず。

○野に　花　さけり
　　山に
　　　鳥　なけり

○英語を　我は　學べり
　　　　君は　學ばず

○雨　きのふも　ふりき
　　　けふも　降りつ

第二節　性質上の種類

文の性質は平敍・疑問・命令・感嘆の四種に分る。

一　平敍文

事物情意の有の儘を敍述せる文にて、肯定・否定・斷定・想像・希望・完了・過去・現在・未來等に小別することを得。

人は　萬物の　靈なり

君子は　人を　責めず
子　泣くらむ
水の　清き　心に　なりたし
鳥も　啼きぬ
秀吉も　かつては　走僕たりき
明日さへ　降らば　若菜　つみてむ

二　疑問文

或は疑ひ或は問ひ或は疑ひ問ふ者にて疑詞辭あるを常とし、對話體なるには之を缺けるもあり。
其の敍述語の用言は連體法なるを常とし、稀には終止法なるもあり。

春や｜　とき
彼は　誰｜ぞ
君は　何｜處にか｜　行きたる
明日　御出被下間敷哉｜
そは　信なりや｜
その　喜　如｜何｜ならむ

須磨の　關　有明の　空に　鳴く　千鳥　傾く　月は(イヤ)　汝も　悲しき(イヤ)(千載)
帶刀「知らぬ　けしきをだに　見給はずや　ある　腹立ち　恨み給ふ」と　腹立たせも　あへず　たはむれ　したり(落窪)
はや　ね給へる(蜻蛉)
あれは　出來たの(か)
係結は　もう　濟んだ(か)
我が　髮と　雪と　磯べの　白浪と　いづれ　まされり　沖つ島守(土佐)
戀しきに　思ひこめつゝ　ある　ものを　人に　知らるゝ　涙　何なり(後撰)
お前は　何を　するんだ(ネ、ヨ)
「いかなる　宏智の　者の　奴　なりける」と　思ひしに(南谿)
ゾ
ニカアラン
ニカアリケン　ト云フベシ
(千載雜上)　もろこしに　沈みし　人も　わが　ごとく　三代まで　あはぬ　なげきをば(ヤ)せし(和歌新呉竹集)(ばせじ、　ばせし、　やせし、　三トモキコユベシ)
いかに　なりにけむと　いつぞや　の給はせし　世こそ　定なき　物なれ(帚木)
イヅコ
イカニ?
イカナリ
磯上丹根蔓室木見之人手何在登問者語將告可(萬三、大伴卿)

朝茅原小野印　空事　何在云　公待(萬十一)

「思ふてふ事こそいかになつかしな　後うきものとおもはずもがな(後撰)(誤用ノ始カ)」

疑詞辭ありても疑問文をなさぬ者あり。

長濱の　眞砂の　數も　何ならず　つきせず　見ゆる　君が　千代かな(金)

ぬれつゝぞ　强ひて　折りつる　年の　内に　春は　幾日も　あらじと　思へば(古)

誰ぞ　來よ　何人も　來な

如何に　親子とは　いへ　あまりなり

物　思ふと　過ぐる　月日も　知らぬ　間に　今年も　今日に　はてぬとか　聞く(古)

いかなるべしとも　身ながら　覺えねば(右京大夫)

何時か　一度は　行き見む

それは　何處かに　有つた　筈だ

昔　何とかや　いへる　大臣　ありけり

これか　かれか　と　名ざして　見たり

いかにも　困つた

何か　御世話に　相成

幾夜かは　月を　あはれと　ながめ來て　浪に　折りしく　いせの　濱荻(新古)

法師　たゞ人に　あらずと　おもひて　いかに　すべしとも　なく　恐しく　おぼえければ(著聞)

なに（修カ 獨カ…………）大丈夫だ

何だか　分らぬ

三　命令文

は他に事を命令する者にて、必命令述語を有す。

雁　雁　わたれ

東風　ふかば　匂ひおこせよ　梅の　花

汝　君子儒たれ　小人儒たる　こと　なかれ

軒端の　梅よ　春を　忘るな

女は　やさしかれ　男は　をゝしかれ

知つて　知らざれ

君よ　しか　な思ひ屈せそ

四　感嘆文

は感嘆的に言ひ表せる文にて、感嘆の詞辭あるを常とす。

あはれ　今年の　秋も　往ぬめり

花の　色は　移りにけりな

あな　戀し　なき　その　人

南無三　しまつた

鶯　なくも　綱手　かなしも

彼こそ　あつぱれ　大將や

坊ちやんは　御利口ですね

それは　行けませんよ

津の　國の　難波の　春は　夢なれや

梅　盛なる　我が　宿を　とめ來かし

ちと　入らつしやいましな

わたし　嫌だは(はい)

何と　いふ　美しさだらう

いかに　與一　あの　扇の　眞中　いよ　なんと　大した　ものだ

感嘆文は平敍・疑問・命令の三文の感嘆なるに外ならざれば、もし「各三文の感嘆」といふ名目を立てなば、漠然と感嘆文といふことは不用となるべし。かくて歌などの大方感嘆なるは固より、對話も切口上ならざるは大抵感嘆文なるを見るべし。さ樣に感嘆文の多きは如何あるべきなれば、口語のネヨなどは輕き辭として平敍文に繰り入れてもあるべけれど、又考ふれば、これが國語の一特徵にもあるべきなり。但いはゆる感嘆は強き驚嘆のみにはあらで婉曲なる咏嘆もあることを記憶すべし。

されど

我はもや　安見兒　得たり

これも　皆　さぞな　昔の　契ぞ（と　思ふものから淺ましきかな）（千、和泉式部）

誰かは　春を　恨み果てたる

わりなしや（獨立語）　人こそ　人と　言はざらめ　身づから　身をや　思ひすつべき（紫式部）

の如く、一語に感嘆辭の附ける者あればとて、其の全文に係らざるは感嘆文とはいふべからず、又「ヤヨヤ待テ山時鳥」「ソ、來ニタナリト集リテ」（今昔）「ヤチレ一同慥ニ聞ケ」「世ノ中ヨ道コソナケレ」の如く感動詞あるも、全文に係らぬは尚感嘆文といはず。（コソゾシ等を用ゐたる、又は「有リ

ハシナイ」「逐電シタル其ノ時ハ云々」などの強意文も感嘆とは異なり）

感嘆文の形式

こゝに感嘆辭の全文に係るといふ事につきて、文の形式に一問題を生ず

そは終止法・命令法に附きたるは論なけれど、

鶯の　今朝　なく　聲の　めづらしきかな

の如く連體法に附けるは、感嘆辭を除ける全文は實は形容句(名詞句)にて、それに感辭を添へたりとて文なりとは言ふべからざるに似たり抑此等は完結せる思想を表せりやはた感嘆文は性質上敍述的ならで提示的なるべきものか。まづ次の例を解き見むに、

波に　さまよふ　捨小舟(名詞小句)

(人)　子を　持ちて　知る　親の　恩(名詞句)

(ワレ)　まだ　(ソレヲ)　ふみも　見ず　天の　橋立(平敍文)　〔獨立〕

(事ノ由は)　某氏　昨日　上京せる　由　〔主・名詞句・敍〕

(物ハ)　親には　孝行する　物だ　〔主・名詞小句・敍〕

(スベキ事ハ)(人)　若い　時に　勉強する　事ですね　〔名詞句〕

一同　隨分　奮發候ふ　樣(ワレ望ム)　〔副詞句〕

（境遇、處ハ）我は　今　外出せむと　する處なり

私は　知らない　ことよ

まあ　あれの　怒つた　こと（アレハ何トシタ事ダラウ）

（世ハ）三年の　あなたにも　なりにける　世かな

（定ヤハ）何と　いふ　まあ　譯の　分らない　定やでせうねい

（我ノ此ノ頃ハ）風を　いたみ　岩　うつ　浪の　おのれのみ　碎けて　物を　思ふ　頃かな

あらざらむ　この　世の　外の　思出に　今一度の　逢ふ　こともがな（アレカシ、等）（又ハ「逢フコトモアリシガナ」）

（君ニ似タルモノハ）めぐり逢ひて「見しや　それ」とも　分かぬ　間に　雲がくれにし　夜半の　月かな

（クヤシキコトハ）やすらはで　ねなまし　ものを　さよ　ふけて（我）傾くまでの　月を　見し（コト）かな

秋風に　たなびく　雲の　絶間より　もれいづる　月の　影の　さやけさ（ソレ譬ヘム

カッソナケレ）

かく　すれば　かく　なる　ものと　知りながら　やむに　やまれぬ　大和だましひ（我之アルヂ如何ニセン）

夕雲雀　芝生に　落ちて　聲　やめば　山より　のぼる　春の　夜の　月（契沖）

此等は省略として補塡すれば普通の形式となり得れど、尚獨立句のみなるを補ひて文とせんは「火事々々」と叫ぶを文とせんが如く、やゝ穩當ならざるべきか。されど我が歌文は短歌俳句のみならず長き者も多く此の如き形式にて成れるものなるを、文にあらずとせんは、それら完結せる思想を表せる者にあらずといふ事になりて、是亦中正の解にあらじ。省略とせざらむには、提示文などいふ名を立てゝ平敍文以外にかゝる形式の文ありと定むべきなり。而してカナ｜を添へたるなどは簡便には「メヅラシキカナ」を一敍述語とも解き得べく、其の他には獨立句と言ひ得べきも之あるべし。今はしばらく斷言を避けて三說を存し、學者の研究を俟つ。

五　意義上の相關

前述四文の性質は各差異あれども、之を實地に用うる意義よりすれば、互に相關係することあり。

(1)　想像の平敍文及口語ネ｜ナ｜を添へたる感嘆文　は言ひ懸けて念を押し、對手の同意を求むる點に於いて疑問文に類似す。

君は　九州人ならむ　言語に　その　特徴あり

諸君は　もう　了解したんですね　それでは　前へ　進めます

あの　方は　君の　骨肉なるべし　容貌　似たり

あなた　一杯　御やりなさいましたね

君は　あす　歸るね

「君ハ明日歸ルカネ」の如き疑問文なるとは音調にも差あり、又カを添へざる疑問文にはネと感嘆せざるなり。

「よの　人々『あべの大臣　火鼠の　皮ぎぬ　もて　いまして　かぐや姫に　すみ給ふと　な　こゝにや　います』など　とふ

(2)　疑問文　は反語となり、誘引・希望となり、推問の意滅じて了解驚嘆などの意ともなる。(疑辭は感嘆に通ふは本來の意義なり)

いかで　さる　事　あらむ(アラジ)

駿馬の　骨を　買はずやは　ある(買ハズハアラジ)

古の　野中の　清水　流れ來し　末のみ　淺く　汲みて　あるべしや(豐頴)(アルベカラズ)

火　なき　處　豈　煙　あらむや(アルマジ)

(人)　古を　仰ぎて　今を　戀ひざらめかも(戀ヒズハアラジ)

ちと　御出被下間敷哉(御出ヲノゾム)

御同行　如何に　候哉(御同行ヲスヽム)

早く　よさんか(ヨセ)

櫻花　春　加れる　年だにも　人の　心に　飽かれやは　せぬ(古)(アカレヨ)

時鳥　聲も　聞えず　山彦は　おのが　鳴く　音を　こたへやは　せぬ(古)(答ダニセヨ)

思ひやる　心も　空に　白雲の　出で立つ　方を　知らせやは　せぬ(新古)(シラセヨ)

あゝ　印度は　遂に　自立せざるか(餘儀ナノコトヤ)

某氏　果して　死せるか　(シニケルヨナ)(是　國家の　不幸なり)

あの　人が　いよ〳〵　始めましたか(マア〳〵)(それは　結構です　屹度　成功しませう)

然様ですか(オヤサウデスネ)(それはどうも……)

山里に　家居を　せずば　見ましやは　紅　ふかき　秋の　梢を(山家集)

(3)　命令文　は勸誘・希望・許可・放擲などの意ともなる。

心配し給ふな　試み給へ(給フガヨシ)

徒然なる　今日　人も　來よかし(來レバヨイ)

君　願はくば　吾をして　三年間　某事を　研究せしめよ(セシメンコトヲ望ム)

汝　確固たる　成算　あらば　行へ(行ヒテモヨシ)

そは　とも　あれ　かくも　あれ(アリテモ構ハズ)

思ひ入る　道に　此の身は　捨小舟　風　吹かば　吹け　浪　立たば　立て(吹キテモ立チテモマ、ヨ)

牛の　子に　ふまるな　庭の　蝸牛　角　あれば　とて　身を　なたのみそ(夫木)(蹈マレズタノマヌ様ニ)

(4)　感嘆文　は希望を表すもあり。

世の　中は　常にもがもな(常ニモアラセタシ)

出でゝ　行かむ　人を　止めむ　由　なきに　隣の　方に　鼻も　ひぬかな(古)(ヒレバヨイ)

我が　門の　一むら薄　刈り飼はむ　君が　手馴の　駒も　來ぬかな(後)(コムヲ願フ)

かくて希望を表す文は平叙も疑問も命令も感嘆もありて、言方の最豐富にして複雜なるを知るべし。

第三節　待遇上の種類

事物を待遇するに尊卑を問はず平等にするあり、崇敬するあり、卑罵するあり。此等は各語に存するものにて、前篇各條に説きたるが、之を湊合する時は文の種類となるなり。

一　平說文

事物を平等に待遇して其の有やうをのみ表し、上下なき語より成る者なり。

大日本帝國は　萬世一系の　天皇　之を　統治す

西鄕　隆盛は　維新の　功臣なり

德川氏　國家に　罪　ありや

汝　活眼を　開きて　歷史を　見よ

あゝ　江戶　時代の　封建制度は　眞に　世界の　偉觀なるかな

大は美稱なれども、自稱にて尙平說なり。天皇汝は敬語なれど、他に敬語なければ、こゝにては平說なり。隆盛と名をいふは貶する場合もあれど、今は然らず。

二　崇敬文

事物を崇敬するより、其の主體・所有・動作・狀態を尊び、或は自己に關する者を卑下し、或は聽者を敬ふ者なり。崇敬に尊他・自卑・關係・對話の四種あり。名詞・代名詞・動詞・形容詞(副詞・接續詞・接頭語・接尾語)の如何によりて之を表すこと、前篇第七章に言へり。今之を湊合せる二三の例を示す。

皇御國は　すめらみこと　しろしめす

西郷は　功臣に　候ふ（對）。

徳川氏　國家に　對し奉り（關）　罪　あらせられ候ふ（對）や

貴君（尊）　御目を（尊）　御開きなされて（尊）　御覽（尊）　候へ（對）

伜（卑）も　參上仕る（關）べく候ふ（對）

あなた樣（尊）にも　御入來被下度（尊）　御願申上候（關）（對）

あはや　法皇の。流されさせ（尊）　おはしますぞ（尊）や

○自動詞は他動に對して敬文となる。

願はし、望ましの類　大樣にいふ事を直接に對話に他に言ひかくる時は自尊の氣あり。故に下より上へはいふべからず。

三　卑罵文

殊更に事物を侮蔑して惡しく待遇する者なり。名詞代名詞によりて之を表せども、極めて小數なり。

權助の　野郎め　何を　ぬかす

貴樣も　けつかるか
ざま　見あがれ　この　餓鬼
人の　物を　盜みくさつた　こん　畜生　やい
うせる　くたばる　ほざく　さへづる

第四節　語氣上の種類

語氣といふは其の意義頗る廣し。

尋常	强意
花咲く	花こそ咲け(各種感嘆文及提示句)
流たえず	流たえせず
ほうつておかう	ほつておけ(命令文)
我が忠告せる主意	我が忠告せる其の主意
音信なし	音信のなき
かゝる中に夜もあけぬ	かくして夜を明しぬ
まづい物も旨く食はる	まづい物を旨く食はす
口は禍の門なり	口は是禍の門(なるかな)

君は此の事を知らん　―　知らずや君は此の事を(疑問文)

かゝる強意の文も語氣上より尋常平坦の文と區別するを得べけれども、其等は各語の用法として已に說きたればこゝに言はず。今は聽者の間接なると直接なる、及言表の自己の上なると他の上なる、即話者記者の位置によりて生ずる語氣の相違を述べむ。

一　對話體と記錄體

自己の言說を聽く者、直接に眼前に在るか、然らざるも一定し居る時は、其の聽者に對して自然に一種の語氣をなす。之を對話文といふ。人の言說は必聽者あるを期すれども、之をそれと定めずして、或る事物に就きて思想を言ひ表せる者は、亦之に相當する語氣あり。之を記錄文といふ。言語は自己の思想を他に對して言ひ表すより生じたる者なれば、根源に於いては兩體の區別なかるべきも、今は頗るその相異を認むるに至れるなり。例へば物語の地・脚本類のト書・歷史・律令・諸記錄・科學書・獨言等は大抵記錄體にして、物語脚本類の詞・詔勅・上奏・祝詞宣命・手紙より、日常の談話は皆對話體なり。兩體の語氣の異なる所、頗微妙にして甚言ひ易からざれども、今其の中に顯著なる者に就きて說明すべし。

(1)　兩體と崇敬文　　記錄體の文は事を記すが主眼なれば、崇敬すべき人の上にても敬語を用ゐず、

など樣に言ふこと多し。而も此の尊は已に敬語なれど、今は固有名詞中に包含せられたれば、敬語を用ゐざらむとしても之を省く事能はず、省きては特殊の省略の樣に聞ゆ。是は天皇皇后某親王、官位の名、或は崩薨卒幸行啓勅奏などの敬不敬共に之を變ふること能はざるが如く、「天皇大和ニ幸ス」も敬文と言ふを要せざる例なり。されど、記錄文は必ずしも崇敬を用ゐざるにはあらず。征シ給フ或は幸セサセラルの如く、或は

三條公　辭表を　呈出せらる

の如き、國民一般に敬する上の事をば崇敬文にすること、今の新聞紙・雜誌・歷史等に見て明なり。但特に世界一般の人に讀ましむる記錄文ならば、世界一般に通用する敬語に限り用うべき理なり。對話體の文は之を聽く人定り居るに因りて、記錄體に用うる敬語の外に、對者と自己とに相當する敬語を加へざるべからず。

あなたが　なさる　　　私が　致す

御出被下候へ　　　參上仕り候

御覽被成候哉　　　拜見致し候

の如きは、西洋文の人稱、數などの一致と同じく動すべからざる者なり。かくて對話文には更に侍り候フマス等の對話敬語ありて、非情物にも貴者にも賤者にも之を用うるは、唯對聽者を敬して

言詞を丁寧にするなり。此の敬語は平安時代より起りたるが、今世の奏啓文など之を用ゐざるは、それ以上の古文の體をとれるか、漢文直譯流をとれるか、今文としては體を得たる者にあらず。學校の祝祭日又は葬式などに

謹んで　〇〇を　祝し奉る

〇〇は　某君の　長逝を　悼み　恭しく　弔辭を　呈す

と述べ又は讀み上ぐるも誰に對するにや、語氣不當甚し。さるは凡支那文は記錄體に、西洋文は對話體に偏して共に兩體の語氣を區別せざるより、我が國文もさることゝ思ひて之に注意せざるなるべし。之を獨言もしくは古言の體なりと言はむは一理あれど、今の言としては尙ふさはしからず。さて又之と反對に記錄體なるべきに對話體を用ゐたるものあり。古今和歌集序は記錄體なるが、歌の端書には侍りマカルなどの對話敬語あるは天覽に供せむ心掛より自然に混じたる者なるべく、それより以下の歌集或は其の外にも同樣の敬語あるは、讀者を尊び作者みづから謙りたる語氣なり。德川時代の候文の記錄は全く對話に擬したるなるが、實は其の人記錄文の筆法に習はず、已むことを得ずして常に書きなれたる消息體にて間に合せたるものなり。近頃言文一致體の文に、記錄體にても私僕しますなどの對話語を用うるも其の類なれど、うるさきものなり。又外國人に對して

我が　國は　最　御國と　親密です

など言ふは片成なり國人どちこそ我がとも言はめ、外人に對しては今言として敬語にあらず記錄文を人の前にて講釋するに

雨｛〇／が｝降｛れり／つて居ます｝

とやうに言ふは、古語を新語に代へたる上に、更に記錄文を對話文に代へたる者にて解釋としては却つて精確ならざる樣にも言はるれど、尙考ふれば、人の前にて講ずるはやがて其の人を聽手とするなれば、對話文とする方至當なるべきなり。

對話體の崇敬文に就いて注意すべきは、聽者に對する第三者の待遇法なり。記錄文に於いては貴賤尊卑その本來の位に從つて之を待遇すれば可なりといへども、對話文に於いては更に聽者と第三者との關係を見て、大體は聽者の尊ぶ所を尊び聽者の卑む所を卑まざるべからず。されば肉親の尊長も他人に對すれば我と同等の者として卑下し、官職同僚も上官に對すれば我と位を等しくす。人の子弟は我が門人下輩なりとも、我と同等の父兄に對しては之を優遇するは卽其の父兄を敬する所以の道なり。妻子弟妹乃至下輩も、僕婢下司の尊敬する所は之に對して優遇するは下人をして其の尊ぶ所を尊ばしむる所以なり。此の如きもの複雜重疊して實際の對話をなす。事固より容易ならず。鄙人の禮に習はざる者の之に苦むは無理ならずといへども、文明の言語は社會の禮に伴はざるべからざるは辯を待たじ。

昨日は　愚父　罷出　御馳走に　相成　奉謝候
佐藤は　まだ　出勤致しません
令息　必死の　御勉強に　て　著しく　御上達云々
奥様は　御出かけか(主人)
いゝえ　まだ　入らつしやいます(婢)
旦那様は　入らつしやいますか(主人ヨリ卑キ客)
御主人は　御宅か(主人ト同等以上ノ客ガ僕婢ナドヘ)
あ　居るよ(主人の長者或ハ子供ナドガ目下ヘ)
はい　入らつしやいます(召使ナドガ)

(2)　兩體と四種の文　性質より分てる平・疑・命・感の四文は此の兩體とは別種の者なれども、其の間に一種の關係あり。四文共に兩體ある中に、

大日本は　神國なり　天祖　始めて　基を　開き　日神　長く　統を　傳へ給ふ
長袖者流　何をか　知らむ
彼の　前途　幸　多かれ　と　願ふ(多カラムコトヲ願フ)
あゝ　盛なるかな　明治の　代

などは記錄體にして、

天地　開闢の　始　天御中主神と　いふ神　まし〱き

君　何をか　學べる

（汝の　前途は　多望なり）勉めて　怠る　こと　勿れ

とへかしな　梅　盛なる　我が　宿を

鍬形の　兜　着けたるは　大將よな

などは對話體なり。疑問文は記錄體にては疑文にして、對話體にては多く問文なり。而して對話體なるのみヤ|カ無くして問をなすこと前にいへり。命令文は記錄體にては希望・放擲の義をなし、對話體にては眞の命令なり。前例の外に「留レト思フ人ノ早ク歸ル云々」「サモアラバアレ」「風吹カバ吹ケ」「彼ノ景色ヲ御覽候へ」などの如し。感嘆文は獨言體なる外は對話體に言ひ懸くる者なり。

かくて注意すべきは疑問文なり。

予は　何故に　軍人と　なりたるか

など言ふ題の下に記錄文を書くこと近頃流行するは、西洋文の對話的なるを其の儘に學べる者にして、國文には相應せず。此は「我が軍人トナレル理由」などいひてあるべき所なり。ヤ|カのある疑問文は、記錄體なるも無きにはあらねど、概しては對話の語氣ある者と知るべし。

四種の文の外に提示文に關して特徴あり、提示文は獨言又は普通の記錄體にも存すれども、對話體なるに提示文が多きなり。物語の詞なるは多く連體語にて止めたる、よく注意すべし。總べて事

はその動作・狀態を其の儘に平敍するよりは之を名詞句として提示する方、人の耳に入り易き傾あり。故に對話體にては用言の終止せるよりは連體法にて結べるが多く、それやがて今の口語即對話文の體裁を成せるなり。口語の連體法にて切れたるは偶然の誤にあらで、理由ある變遷なること深く思惟すべし。

あれ　見よ　もみぢ葉の　數多　流るゝ

石王寺(シャクワウジ)は　しろみ　堅くて　切り　にくき(七十一番歌合、硯士)

くちをしく　この　をさなき　ものは　こはく　侍る　ものにて　對面すまじきと　まうす(竹取)

「いみじからむ　心ちも　せず　悲しくのみある　されど　おのが　心ならず　まかりなむと　する」と　いひて(竹取)

うましきと　いひける　ものども(宇治拾)

(3)　兩體と詞辭　また多少の特點あり。

(イ)人に於いて、記錄體は固有名詞を用うること多く、對話體には代名詞多きを原則とするが、對話體にても上或は下に對する時、わざと代名詞を避けて固有・普通の名詞を用ゐて、「實美謹ンデ奏ス」「臣ノ願ナリ」「親ノ遺言ヲ忘ルナ」「母人モ御承知ナラン」「先生教ヘ給ヘ」などやうに言ふことあり。

(ロ)補助動詞侍リ候フ及形容詞副詞接續詞の敬語オメデタウオ立派ニサウ致シマスレバなどは對話體にのみ存し、又有リ難ウ然ルベクヤナサレタクなど、クシク活の連用法の下に敬語ゴザル候ハム存ズ等を略する文も對話體にのみ存するなり。

(ハ)助動詞にては「時」の段に述べたる如くキは主として對話體の直說過去に用る、ケリは又多く記錄體の間接過去に用う。かくて歷史などは多く記錄體なれど古事記・大鏡の如く對話體なる者もあるなり。ツヌも之に準ずる傾あり。

(ニ)助辭にては主格のガ副格のへは共に對話體に多く感辭のヨヤナネカシの類も對話體に存すべき者なり。さて其等の記錄體にも用るらるゝは轉じたるなり。すべて對話體の語氣なる者の記錄體に轉用せらるゝは多く記錄體の語氣なる者の對話體に轉用せらるゝは比較的に少し。

(ホ)呼格名詞は對話體にあるを本則とす。

(4) 兩體の錯綜　記錄・對話の區別略前に說ける如くなるが、一篇の文としては物語など始に「云々アリケリ」と記錄體に書きて、終には「云々ナリトゾ」と對話體に結ぶ樣の例少からず。演說なども首尾は聽衆を前に控ふることを忘れずに對話體に言へど、中程の議論などは大抵は獨言的記錄體に演じ去る習なり。此等は修辭上隨分あるべきことなるが、文法の單位にあらねば、茲に說かず。此等の外に文法上の一單位の文にも兩體の錯綜することあり。物語などにて云ふ地と詞の流しあひなり。

是は　諸國　一見の　僧にて　候ふ

の是ハは地より仕手を指す語なるに、之を仕手に言はしめ下を詞に候フと流すなり。

（熊谷）「存ずる　旨　ありて　申すなり」………（敦盛）「存ずる　旨の　あるなれば　聞かず

るぞ　是は　故太政入道の　弟に　修理大夫　經盛と　いふ　人の　末子　いまだ　無

官なれば　無官大夫　敦盛と　て　生年　十六に　なるなり」と　宣ひけり（盛衰）

などは詞を地に流したるなり。地を詞にして人に語らせ、詞を地にして事情を說明するは舊時の

作者の慣用手段なり。かゝる詞は眞正の對話文にあらず、作者の記錄體の筆を入れたる者なれば、

間接對話とも謂ふべし。

明日　行かむ｛と／ことを｝　いふ

などの例にて前者を直接對話、後者を間接對話といふことあれど、今は主として記者より第三者

の言語を引き直したるに言はむ。

大御神　怪しと　思して　細く　天の岩屋戶を　開きて　內より　告り給はく「吾が

隱り坐すに　因りて　高天の原　自　闇く　又　葦原の中つ國　皆　闇けむと　思ふを

云々」（記）

（素尊）「吾　此の　地に　來まして　我が　御心　須賀々々斯」と　のり給ひて（記）

○山の　あるじ　俊蔭に　のたまふ「おのれは　天上より　きたり給ひし　人の　御子どもなり　この　山に　下り給ひて　云々

○波斯國公　のたまはく「この　奉れる　琴の　聲　あしき　所　あり　しばし　ひきならして奉れ」

此等も詞は詞と見ゆるにコモリマス御心などいふ記者よりの敬語によりて眞正の對話文にあらずなれり。之を古の神は自の上にも敬語を用るたりと思ふは甚しき誤なり。太閤などこそ自稱に殿下思召スなどとも言ひけめ、さては子供も坊ツチャンがなどとは言ふべけれど、常識ある人には有るべくもあらず。

さて又前に述べたる第三者の待遇といふことを繰返さむに、貴者が「行ク」といへるを取り次ぐ言は『「入ラツシヤル」ト仰セラレマシタ』といふ如く、又先方より「明日參上可仕候」と言ひ越せるに對し、「御來臨可被下旨拜承」など言ひて鸚鵡返には言ふべからざる道理なると等しく、尊き人の言語をば其の儘に繰り返しまねばざるが我が國風なり。されば史書の傳ふる所にては、歌文などの外には貴人の眞正の言語は見るべからず。天祖の神勅

豐葦原の　瑞穗の國は　我が　皇御孫命の　君と　ますべき　國なり

の如きも、意を取りて言ひ傳へたる者、祝詞宣命の如きも皆執達の人の宣する言にて直接の御言にあらず。然るに支那風にては天子も直接に臣下に對話し、それを直接に記し傳ふるより、我にも

王朝の古にはそれを學べる漢文の詔勅あり。今の御代には其の風を受けて、五條の御誓文より始めて種々の詔勅の直接對話なるあり。制度の然らしむる所、私議すべきにはあらざれども、其の御言の儘を臣民の口に懸け奉るは畏き業にあるまじきか。但は之を支那風の記錄體の文と見ることを得べきか。識者深く攻究せざるべからず。

二　自記と記他

自己の上を話記すると他人の上を話記すると、其の語氣固より異なり。此の兩種を今自記・記他と命名す。或は自稱の文、他稱の文とも謂ふべし。兩者の相違は崇敬文にもあれども、其は特に說くに及ばず。今特殊の詞辭に就いて說明せむ。

(1)　獨立詞

我 { 愉快に / 樂んで / 勇みて } 行へり

汝 / 彼 / 人 { 興じつゝ / 勇ましく / 痛快に } 行へり

我も　應分の　事は　せむ

相當の　御寄附を　乞ふ

愉快ニなど自記の方のは記他にも言はるれど、勇マシクなどの類は自記に用ゐられず。應分は自己或は第三者に言ふべく、對する人の上には之を支配する者の外には言ふべからず。大擧傳道などは仲間内或は他人の上に言ふべく、人に對して自己の事には用うべからず。

たらちねも子らにまじりてたのしげにかるたとるなり年の始は(たらちねハ子ヨリイフベシ。人ノ親ハイハズ)

一人稱　　　　　　　　三人稱
老の身も處女の中にまじりつゝとり爭へる歌かるた哉

記他　げなる　自記
けぶり草くゆらしながら大井川下す筏の安らけき哉

三たり四人まらうどつどひものがたる池の汀に花あやめさく(井上氏祝)(まらうどコヽハ人トノミイフベシ。第三者ヨリイフ語ニアラズ)

吾々は………一身の糊口にも窮し實に憫然たる有樣に陷りし(神奈川縣日清役負傷者請願)

己ノカニノミイフベシ
好便に任せ御送り被下候云々

適(記他)
獨逸の粗豪なる意氣
自記(記他ノトキハ意別ナリ)

(2) 接尾語

子供が　うれしがる
彼は　學者ぶつて居る
君は　强相だ
私は　負相だ
……は拙論に畧盡したりげに覺え候

相ゲは自記にては形容詞には添はず。ガルブル共に記他なるを、「僕モ學者ブラウ」「オレガ嬉シガツタカ」など言ふは、他人が見て我をブルガルと思ふ樣にせむ、したるかと言ふ義なり。

(3) 助動詞

鳥も　啼きぬ
我は　其の聲を　聞きつ
我も　一度は　高尾の　紅葉を　見たし
高尾の　紅葉　月末まで　我を　待たなむ
春は　來ぬらし

ツヌはキケリと語氣の似たること前にいへり。(ケリ對話體の記他にあるまじ)かくてヌは記他に傾きたるが、自己を他物の如く取りなす時は自記にも用ゐらる。「我ハヤ餓ヌ」(記)などの如しタシ

ナムの別は前篇に說ける如し。ラシの外メリラムも他の上を想像するなり。俳人などの自記の文に「云々スルモノナラシ」などいへる、屢見ゆる、皆誤なり。

後拾遺序………今の　撰べる　心は………古も　今も　情　ある　心ばせを　行く末にも　傳へむ　ことを　思ひて　撰べるならし………同じき（應德）三つの　年の　暮の　秋の十六夜の　頃ほひ　撰び終りぬる　ことになむ　ありけると　いへり（通俊）

十訓抄序………たゞには　いかゞ　やまむと　て　ならし………念佛の　ひまに　之を　記しをはる　こと　しかりとなむ　いへる

「玉霰」に「ものならし」と題して「近世人の序の終は必ものならしとゝぢむるものとや心得たるらむ云々」といへり。

新古今序………この　うち　みづからの　歌を　のせたる………三十首に　餘れり………かきすてず　なりぬる　ことは　道に　耽る　おもひ　深くして　後の　あざけりを　かへり見ざるなるべし

駿臺雜話といふ書は記錄・對話・自記・記他の語氣の支離滅裂甚しき書なり。今その序文を抄して本節を終へむ。

武藏の　國　大城の　東　駿臺の　もとに　草の　庵　結びて　住みける　ひとりの翁　ありけり　そのかみ　北國より　爰に　來て　家居せしが………はや　二十餘年に

及べり　近き　頃より…………日夜　衾枕をのみ　親み　書籍にさへ　疎く　なりにたり
何をか　世に　在る　思出に　せまし　爰に　此の　翁に　就いて　物學ぶ　輩　あり
て…………何時も　賓主　共に　唐錦　たゝまく　惜しくなん　見えし　翁も　客に　對
して　清談する　事を　好みて…………我ながら　をかしと　思ふ　一節も　あれば　そ
の席　はてゝ　我が　子弟に　命じて　大和文字に　寫しおけるに…………さすが　反故
と　なして　かい破り棄てむも　本意　なければ　さて　兒輩に　與へて　讀ましめむ
とて　しばらく　殘し置きけらし
享保　壬子の　年　九月　中旬　鳩巣の　翁　駿臺の　草の　庵に　して　筆を　とる

國語の文法こゝに盡きたるにあらず。聲音の意義、接頭尾語・造語法・文字の表記法・活用の原義、其の他の高等なる事項は他日更に公にせむことを期す。

高等日本文法　終

おのれ　我が　言葉の　道に　志してより、拾へる　玉の　數　そふまゝに、みすまるに　貫きなさむと　思ひよりしは、はやく　十年あまりの　昔なりけり。しかはあれど　ことばの海　限なく　廣く　底ひなく　深きに、あさりもて行く　事どもはいつ　究め得たりと　いふべくも　覺えず。かくて　年月を　ゆかば、身　死に　子うまごの　代に　なりぬとも　事　果つべからず。まこと　萬の　ことは　一わたり　さたし終へぬれば、人に示して、いまだ　至らぬをば　導き、至れる　人には　敎をこそ乞ふべけれと、かつは　思ひなりぬる　をりしも、いざなひ立つる　人の　これかれあるに、いでと　事　おこししは　去年の　初春なりけり。取りそむる　筆は　秋ばかりには　終りなんと　あらましゝも、はかなや　うつせみの　世の　繁き　事わざかに　かくに　障　多み　あはれ　今年の　秋も　往ぬめる　頃とぞ　なれる。成りつる　玉の　御統は、天なる　おとたなばたの　うなじにや　かけつべき、國つ神の　くしろにや　巻きそへつべき、えみし　八掬脛の　あゆひにや　とり結ひつべき。ひとつの　ふみ　見るにこそ、た易く　よしあしを　言ひ定めて、今　一きは　などか　かくは　言はざりつらむなど　思ひおとす　たびも　多かりしが、我が　此の　ふみよいかばかりかは　まほならむと　かつは　恥しくさへ　なりにたり。そも〳〵　敷島の

道と　嚴しげに　いひなしけむ　古より、からことばをのみ　宗と　物學に　する　近き　代まで、眞の　ことばの　道は　普く　ひろごらず、僅に　事の　意を　得れば、さて　足りぬとし　思ふらむ　人の　多かるは、なか〱に　國の　恥とも　いひつべきを、しかだに　思ひつく　人の　少きこそ　うれたけれ。さるは　國人の　心を　ひとつに　固め成すに　言の葉ばかり　くすしきは　あらざるなるを、その　道　いかで　輕き　ものには　あるべき。易りゆく　世の　さがなれば　言のは　はた　神代の　まゝなるべきには　あらねど、本つ手ぶりは　あきらめおきて　移すまじきは　移さじと　思ふ　心の　一すぢは　さりとも　いたづらにのみは　なりはてじと　われだのみをなん　力にて。はた　かの　易りもて來し　新しき　姿にも、かたはなる　よこなまれる　くさ〲の　しな　ありて、こゝだの　人の　いへるからに　よしとは　言はるまじきを、いづれ　正しと　いひさだめたるなど、をこなりと　人の　咎めむも　え憚らざる　さかしらは　さる　方に　見ゆるしてよと、思ふが　まゝを　とぢめに　書きつけつるは明治　四十一年　十一月　四日　東京　牛込の　やどりに　して　三矢　重松。

附録一

作歌と助辭

目次

第一　序説

およそ言葉を離れては歌あるべからず、されど歌は言葉を離れざるべからずといふも道理あること、言葉と歌との關係頗言ひがたし「世俗の言葉を離れて、大和言葉を離るべからず」「言葉は古を慕ひ心は新しきを求めよ」などいへる、皆かいなでの論なり。新しき語なりとて、正しきは用ゐざるべからず、古き語のみにて、いかで新しき心を詠み出づべき。古きを雅とし新しきを俗とすることの誤れる由は、先人も早く之を言へり、雅俗正訛は新古の外にあること固よりなれど、歌の言葉の雅正ならではあるまじきこと、亦辯ずるに及ばず。この雅正といふこと、誰しも至り易きものにあらねば、心を留めて學びもし思ひもせざるべからずさらでは美しき心も人にはえ知らるまじきわざなるを、心をのみ主と重んずる人は、大和言葉は我が國人のおのづからなるものなれば、故と物學するには及ばじといふ。さる人の詠歌、十に五つ六つは通るべけれど、殘の四つ五つは通らぬが多し匡房卿が八幡公を無學なりといひしが如く、誠に惜むべきことにはあらずや。さはいへど言葉の學にのみ卽きて離れかねたらんは、更にくち惜しく、かの趙括の兵法、儒者の治國策などやうのものにも似たらんかし言葉の道をば學びたらん人の、よく之を己の物と心に得て、さて心をばおのづからに詠み出でん、これぞ言葉を離れたるものにはあるべき。不卽不離は萬の事に

わたりて大事の戒なり。歌と言葉と、また此の外に出でじ、言葉を重んずる人も、この戒をば忘るべからず。

おのれは、今かゝる意にて、歌言葉を論じ見むとす。かく言はゞ、人は「さ樣の事は、先哲已に說きおきたり何を苦みて蛇足を添へむとはする」とや言はむ。それには又說あり。よし其の實質內容は同じくとも、古の人が古の時に言ひしことは、今の人に悟り易からず、今の人が今の時に言ふことは、古の人には決して解せらるまじき道理あり。されぱこそ、古より時に從ひて同じきことを樣々に言ひ來しなれ。同じ事だにかく言葉を換へて說き諭す習なるに、まして同じからざる事あらば、いかでかは默すべき。

抑我が言の葉の道は、近く契沖法師賀茂本居の二大人などより開け始めたるものにて、いまだ硏めたらぬことの多き上に、先人の考へ誤れるなども少からず。此の物學の盛に起れる御代には、新しく考へ出したる事も少からずありて、先哲の業を成し固めんといそしむ者は、その新しき說どもを彼此の事に應用して其等の改良進步を計らんとする、これ學問に對する誠の情なり。

歌語はおしなべて延喜天曆の頃を標準とするに、その時代を去ること遠きに從ひて近き世には、其の意義をも用法をも誤りて、事の意の知られがたきがあるは、其の美しき錦心繡腸に對しても惜むべくあたらしき極ぞと思ふにつけて、人の多く誤り用うる樣の言葉の沙汰せんとするなり。歌には忌むなる理窟を談ぜんとするにはあらで、歌には離るまじき言葉の、いづれは通じ、いづ

れは解せられずとか、又はいづれは正しくみやび、いづれは訛り鄙びたりとやうに、實地の事を定めんとするなり。その說に誤あらば、願はくは四方の大人だち之を正し給へ。はた先人の玉詠名吟をとかくに言擧する無禮さをば、海原の廣き心に、ひとへに道の爲ぞと、見ゆるし聞きはなち給へかしな。

かくて、おのれが言はむと欲することは、助動詞「てには」の意義用法に歸すべく、言葉の活用などあまりに幼き誤謬は、さしおくべし、例へば

　腸を斷たる思ぞ知られける妻ゆき子やむ五月雨の頃

　三つになる子の手をひきてわが妻の墓に詣でば山茶花の散る

の如き、タ、ルは、下二段活の終止法なれば、「思」といふ名詞(體言)に連るべくもあらざるは、一讀して誰も知らるゝ事なるに、之を敢へてしたるは「タ、ル、思シラレケリ」にては飽かぬ所あり、「タ、ル思ゾ」として音は餘る故に、作者自からも知りつゝ、所謂文法の許容といふ惠に浴せんとしたるにもあるべきか。マウデバも其の類なり。マウヅは下二段活なれば、これは假定前提法とてマウデルナラ、又はマウデタラの意、こゝはマウヅレバと確定(昔の已然)に言はでは語を成さゞると、是亦作者みづから知りたるべし。音餘ればとて許容すべき性質の語遣にはあらず。八音を避けんとならば、全體の構造を改めざるべからず。かやうなる類は今は言はざる事として、直に本說に入らむ。

第二　らむ

一

古のかしこき道を一筋にふみ見て國はひらきますらむ　岩倉右府
秋の夜の今宵いかなる今宵にてひとり野寺の月を見るらむ　同
改る春の景色のいかなれば變らぬ松の色に見ゆらむ　景樹
踏み分けて人の摘むらむ今日をこそ若菜も雪の下に待つらめ　同

此の五つのラムに就きて其の意味を考ふるに、皆現在もしくは實在の動作の、目に見えざるか又は其の然る原因を想像せり。卽第一は「國ハ開キマス」といふ事實の原因を「……一筋ニフミ見テ」と想ひ、第二は「ヒトリ月ヲ見ル」ことの原因を「イカナル今宵ニテ」かと想像し、第三は「松ノ色ニ見ユ」ることを「イカナレバ」ぞと想ひ、第四は「人の摘ム」は確なる事なれど今目に見えねば、婉曲にラムと想像し、「待ツ」は若菜の動作なれば固より斷定し難きが、「待チ居ル者」と定めて之を想像せるにて、正しく當れるが

後れなば梅も櫻に劣るらん先がけてこそ色も香もあれ　河上彌一
家の内に吹く春風の絕えせずば心の花も咲き匂ふらむ
家の風のどけき庭の敎草やがて錦の花やさくらん

などは、總べて聞えず。さるは、ラムは、現在又は一般不定の動作にのみはか丶れど、未來の動作にはか丶らぬを、此等は、上に「後レナバ」「タエセズバ」「ヤガテ」などを受けて未來の想像なること著しければ、「劣リナム」「劣ルベシ」「劣ラム子」「匂フベシ」「匂ヒナム」「咲キモ匂ハム」「錦ノ花ヤ匂ハム」「花ト咲クベシ」「咲キ出ム」「咲キナム」など改めざるべからず。

二　抑今の口語にて想像といへば、ウ　ヨウ　ダラウなどなるを、そのダラウはダといふ指定の想像にて、文語のナラムに相當すれば、實は想像辭はウ　ヨウのみなり。然るに文語殊に平安時代の語卽歌語にはウ　ヨウに當るムの外に、ベシ　ラム　ラシ　メリ　ケム　マシなど種類多く、各固有の意義用法あれば、漢然とおし當てたるにては、當らぬこと多きなり。このラムも、今の口語にひたと譯し當つることは能はず。まづ「テ居ルダラウ」「ノダラウ」などに近からむか。而もそれ等は場合によりては未來にもなることあれど、ラムは決して未來に用ゐたる例なきにて、未來は、ム　ベシ　テム　ナム　タラム　ツベシ　ヌベシの中に限るなり。古書を讀むに好く注意すべし。「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそのかの母も我を待つらむぞ」は、「泣イテルダラウ」「待ッテルダラウ」に近く、現在の動作の見えねば想像するなるを、「泣カム」「待タム」としては、更に意も聞えぬを思ふべし。

和歌の浦にあさる海士舟楫を絶え蘆邊を何時か漕ぎ出づるらむ　陸實

は、接續法に於いても誤あり、正しくはイヅラムといふべきなるが、それよりもラムを、未來に用ゐる

たるが調子外れたるなり。「コギモイヅベキ」「コギモイデナム」などあるべきなり。

三　先日或る雜誌に松延齡友といふ題の賀歌の竝べるを見しに、いづれもラム好の人達と見えて、一頁の上段の中に五つありし中に

老松も千歲の友は君ならで誰をかはとて心寄すらん

のみ正しく、後の四つは皆誤なりし、左の如し。

庭松の千歲を友に今よりはいよゝ稀なる年を經ぬらん

ながらへて君ぞ見るらん常磐なる松の梢の十返の花

十返の花咲く松を友として幾千萬を君は經ぬらん

常磐なる松を齡の友として七十八十を夢に越ゆらん

景樹翁はラムを多く用ゐしかど、さすがにかやうなる誤は無きやうなり。但ナルラムなどは濫用に近く、其の他にも隨分如何しき言ひまはしの多き、今の歌の一種の調をなしたるに影響を與へたるなるべしさる人の「なるらむと歌は止むらむ調ぶらむらむより外は詠まぬなるらむ」といひしは心すべきなり。

ふしなれし去年のねぐらの吳竹はよも鶯の忘れざるらん　景樹

ヨモをザルラムと受けたる聞かぬ語遣なり。ヨモの下は、ム　ベシ　マジ　ジなど受くべし。歌を詠み調ぶるに、意味を思はで音調にのみ拘泥すれば、かゝる誤に陷るなり。

第三　しとたる

來て見れば裏も表もなかりけり如何に織り出でし山の錦ぞ　景樹

もみぢ葉はきたなき裏も見えぬかな如何に織りたる錦なるらむ　桑

此の二首の「オリ出デシ」と「オリタル」とはいづれ正しき言樣ならむ。前のは「イデ」といふ語加りたる修辭の上には相應しけれど、無くては叶はぬ程の語にもあらじを、「タル」と「シ」とは如何あるべき。之を今の口語に改むれば、共に「タ」となりて區別は無き樣なれど、文にては昔より「シ」とも「タル」とも言ひ分けたる趣あり。且は今の口語は極めて粗雜簡略なる者なるより思へば、口語に當てゝ別なしとても、文語の區別をも無視すること能はざるは誰人も首肯する所なるべし。然れど怪むべきは、詠歌者が唯音數の都合上より勝手に「タル」を「シ」とも言ひ換へたる樣の見ゆることなり。抑「シ」は「キ」「シ」「シカ」と活用し、「タル」は「タラ」「タリ」「タル」「タレ」と活用して、共に連體法なるが、意義は活用によりて異なる者にあらざるは何人も異論なき事なれば、「シ」と「タル」と同義ならば、兩者の「キ」と「タリ」とも同義なるべき筈なれど、古來それを混同して「思ヒキヤ」を「思ヒタリヤ」と樣には言へる人も見當らざるなり。されば「シ」と「タル」とも同意の辭にはあらざらむと先おし量らるゝなり。今其の意義を詳說せむには數十頁を費さゞるべからず。又そは本篇の主意にもあらざ

れども、此は所謂「時」の問題にて、古來人の最心得がてにすることなれば、其の大旨を一わたり述べ置かむとす。

二　動詞（作用言）即事物の動作を表す詞には、過去現在未來の時の別あり。現在は動詞の本體のみにて表し、未來は「ム」「ベシ」などの想像辭を添へ、過去は「キ」「ケリ」といふ助辭を添へて表すなり。動詞には此の三つの時の外に言方の態の區別あり。單に動作丈を表す平常の態の外に完了態とて動作の完了せるを表す者、繼續或は存在態とて動作の引續き或は左樣に存在するを表す者あり。而して其等の平常・完了・繼續・存在等の諸態に過去現在未來の三時あるなりさて完了態を表すには助動詞「ツ」「ヌ」「タリ」「リ」を添へ、繼續存在態には「タリ」「リ」を添ふ。之を表示すれば左の如し。

態＼時	現在	過去	未來
平常	雨降る	ふり{き / けり}	ふ{らむ / るべし}
完了	雨{ふりつ / ふりぬ / ふりたり / ふれり}	{ふりて / ふりに / ふりたり / ふれり}{き / けり}	{ふりて / ふりな / ふりたら / ふれら}む ふり{つ / ぬ}べし
繼續存在	雨{ふりたり / ふれり}	{ふりたり / ふれり}{き / けり}	{ふりたら / ふれら}む

此の平常態の過去と完了態の現在とは、口語は共に「ツタ」にて今人には分ち難き所あるより、完了の現在を小過去といひ、其の過去なるを大過去といふ人あれど、過去に三種の別あるべき道理

はなし。もし之あらば大過去の上にも更に遠き幾種もの過去あるべき道理となりて、所謂不通の說なり。さて完了の現在は口語「フッタ」の外に「フッテシマフ」又は「フル」にも當ることあり。その過去は「フッタ」の外に「フッチヤッタ」などに當り、未來の「テム」「ナム」は口語には實は當るものなく「フッタ」「フラウ」「フル」「フッテ居ヨウ」「フリ相ダ」など場合々々に變ずるなり、凡今の口語は漢文の影響にて「時」が殊に粗末なる者となれるなれば、古文によりて其の義を學ぶことを勉めざるべからず。次に繼續存在態は口語の「フッテ居ル」「書イテアル」の類にて、此は明瞭なり。さて「タリ」「リ」は完了と繼存と兩態に通用するは如何なる理ぞといふに、此の兩辭の語源は「アリ」にて本來は繼續存在を表す者なりしに、平安朝の初頃より次第に完了態にも用ゐらるゝやうになりたるにて、完了を表す本體は實は「ツ」「ヌ」なるに、今は「タリ」に半その職務を讓れる體なり。

三　「時」には更に心得置くべきことあり、動作には過去現在未來の別あるべき理なれど、格段なる動作とせずして一般の事柄とか習慣性癖眞理などをいふ時には「時」に關せず、之を「不定時」といふ。「春ハ花咲ク」「我ハ煙草を好ム」「酒ヲ飲メバ醉フ」「樂アレバ苦アリ」の類なり。かゝる動詞も極めて多き者なり次に略態とて完了存在などを平常態にいふことある、亦知らざるべからず。

某年月日某しるす（シルシツ）　都を江戸に遷す（ウツシヌ）

おくれて咲く（サケル）櫻二木ぞいと面白き花宴

女郎花叢毎にむれ立つ（タテル）は誰まつ蟲の聲に迷ふぞ後撰

の類また少からず。次には「事實の時」と「言語の時」といふことなり。理のみにて言へば現在といふものは一瞬も止住することなければ、動作は總べて過去か未來ならざるべからず。されど言語にては或る範圍を定めて之を現在とし、それに比較して過去にも言ふなれば、言語の時は常に事實に一致する者と思ふべからず。事實はすべて過去なるを、言語には現在に言ひ表すこと最多し。

四　こゝに本說に立ち返りて「シ」と「タル」卽完了と過去との別を定むべき時となれり。「オリ出デシ」は過去にて「オリタル」は現在完了なり。錦を織る動作は事實過去なるべきも、言語上現在の如何なる動作に對せりや。「ドンナニ織ッタ錦ダラウ」といふ時、その「タ」に過去の意味あるべきか「オル」といふ動作完了せねば錦も出で來ざれば、之を完了態に言ふ必要はあれど、「過去ニ織リシ錦」といふ思想は此處には不適當なり。およそ動詞にて事物の性質を表す(形容詞風)に場合は過去辭を用うることは殆無しといひてもよき位の者にて、「本居先生の著せる書」といへど、「著しゝ書」といふ場合は極めて少きなり。「机ハ木ニテ造レル者」なれど、「造リシ者」にあらず。「道風が書ける和漢朗詠集」を「カキシ」とや言ふべき「誰某がヨメル歌」とは常に言へども、「ヨミシ」とは言はず。

常夏の匂へる庭は唐國に織れる錦もしかじとぞ思ふ　榮華、後拾

天つ風仰ぐともゆめ霧立つなこは棚機のおれる錦ぞ　新續古今

流れ來る紅葉見れば唐錦瀧の絲もておれるなりけり　拾遺

ふぢ衣織れる心も云々　古今長歌

君が爲手力勞れ織りたるきぬを、春さらばいかなる色に摺りてばよけむ萬葉

などの例をば見れど、「オリシ錦」といへるは有るべしとも覺えず景樹の此の歌は正に語をなさず

と定むべきなり。此の場合强ひても「イヅ」といふ語加へたくば、「オリイヅル」と「イデタル」の完了を

略して言ふべし。

五 此の景樹の誤の類近來の歌に極めて多し。山東京山が「蛛の絲卷」の題歌「花の雲ちらすは惜

しき春の暮しばし止めし蛛の絲卷」といふを齋藤彥麿が「とゞむる」と正せるも、前の略態をとれる

なり。

海原の沖の高くも見ゆるかな幾世積りし水にかあるらむ景樹

河中に溺れし如くいひなして心は水の泡にぞありける同

消えてしも玉の聲こそ殘りけれ生田の森の五月雨の露知紀

駒の鼻いざひき向けてかけ立てむ色めきそめし山かげの敵勝安房

厚衾重ねし人は知らざらめ鋒に劒に霜氷る夜は同

うら枯れし軒ばの荻の初時雨あはれは秋にゆづらざりけり

冬枯れし林の中のひとつ松ひとりあらしのものとなりけり

おし立てし旗さへぬれて春雨の惠やゞやがて廣島のさと

去年の塵淸めし窓の文机に年の初日の影ぞさし入る

門すぐる車の音の聞ゆるや年のかへりしるしなるらん

君が代ののどけき春ぞしられける兜の鉢に植ゑし梅の木

年老いし親の歎は如何ならん身は世の爲に思ひかへても　國臣

岩清水掬びて立てばその底にやせし我が影老いし松かげ　直文

いつかれし神や植ゑけん廣前をおほひて立てる松の一木は

廣前に杖ゆるされし老松は神に仕へて幾代經ぬらむ

我が耳の遠くなりしは年を經て聞えぬ歌をよみし報か　季鷹

此等皆誤用なり。第一は「積レル」といふ可し。第二は「溺レタル」又は「オボレタラム」略しては「オボル、」なり。古今の序に「商人のよき衣着たらんが如し」とあるを「着しが如し」などいひて語を成すべきかは。「消エテシモ」は「消エテシカドモ」の意にやさらばこゝは「消エタレド」只は「消ユレドモ」と略し言ひて聞ゆ。次の十三首は皆「タル」といふべく、或は略すべし。「ウラ枯レシ」「冬枯レシ」の類は通ずべきかとも見ゆれど、尚然らず。兼好の「霜さえし矢田野の淺茅埋れて深くも雪の積る頃かな」などゝ比して其の差を知るべし。「清メハラヘル文机」「カヘレル」にて可なるべし。「植エシ」動作は過去にもあれ「植ゑてある」を如何にせむ。「植ゑし時花待遠にありし菊うつろふ秋にあはむとや見し」に比すべし。又神武御製の「垣本にうゑしはじかみ口ひゞく」も其を掘り取りて食膳に供したる上より過去に言へる者にて、事實標準にはならざるなり。「年老イシ」も「老ユル」にて可なり。落

合氏のは結構を改めざるべからず。「イツカレシ」「ユルサレシ」共に何時ぞさる事のありし樣に聞え、現祭神、現存老松とは聞えず。但後の歌「幾世經ニケム」と過去想像に言はで「經ヌラム」と現在完了の想像に言へる、極めて當れり。季鷹の「ナリシ」は「ナレル」なり。「ヨミシ」は通ぜざるにあらねど、完了に言ふ方優れり。季鷹の歌の聞えぬ、恐らくは過去のみにあらじ。このほか「榮えゆく國の基は人みなのつみし黄金の光なりけり」（渡邊千秋）「數多き甍をこえていと高う霞みて立ちし十二階かな」「テニスすと網をはりたる公園の芝生に咲きし蒲公英の花」などいふ類枚擧に勝へず。「シ」の用法の正しき例をも擧げんと思へど、あまり長くなりたるにより之を略す。古の正しき歌集につきて心をとめて會得せられたきものなり。

六　こゝに今ひとつ言ふべきことあり。景樹の

皆ちりし後にそめんともみぢ葉の淺きは深き心なりけり

といふ歌、面白き節もある歌なれど、「チリシ」といふ語には恐縮せざるを得ず。こは前にいへる未來完了に當る時にて、過去とはあまりの相違なり。これも、口語には「散リタラム」「散レラム」の想像の、略して「散リタル」「散レル」「散ッタ」と、未來にも「タ」といふを、やがて「シ」と直譯せるものなり。古今集の「見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞ咲かまし」とある手本を思ふべし。口語に「此ノ度一度助ケテ戴イタ節ハモウ二度ト御スガリ申シマセン」「言ハレタ義理カ」などいふ皆此の未來完了にて文語には「給りなむ」「給りたらむ」「言はれつべき」などに當るなり。

七　古今集雜下に「左近將監解けて侍りける時に女のとむらひにおこせたりける返事によみて遣しける」と詞書せる小野春風の歌に

天彥のおとづれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

といふあり。契沖の餘材抄までは、舊說も一樣に「シ」を「ジ」と濁りて、「山彥は呼ぶにつけて答ふるものなれば、今は答もせじ」と釋して聞えたるを、縣居翁の『打聽』に至りて之を「シ」と過去に見る說生じ、(『續萬葉論』『續萬葉秘說』にはなほ餘材抄に從ひしを)本居翁亦之に從ひて餘材抄を駁し『遠鏡』に「今デハモウハヤ天人ノ御尋ネ下サレタ樣ニサ存ジマスル」と說かれたるより、さやうに心得る人も今は出で來たり。抑『打聽』には「こは憂に沈みて我が身はありとも思えず、我か他かと身をたどる時なれば、誰として言問ふべき由なく今は成りぬるにと、訪ひしを嬉しくて言ふなり」といへるに『遠鏡』は一步を進めて「天彥とは天上の人をいへり、物語どもに此彼見えたり。餘材打聞に山彥と同じとて說きたるは叶はず云々」といへり。誠に、「オトヅレシ」と釋せむに、「天彥」を「オト」の序詞のやうに見るのみにては物足らぬことなれば「天人」と言ひ進めたるも理なれど、天人をアマビコといへるは無きことなり。「あまびと」の「と」を「こ」に誤れる本などあるをや見られけむ。是ひとつにて打聽の說は已に半破られたれど、更に女の訪へるをオトヅレシと過去に言ふは決して有るまじき事なるを知らざるべからず。今の人は過去と完了との別に疎きより「音ヅレツル」も「音ヅレシ」も同じと見るめれど、大なる過なり。事實上の時は何にても存在せるは皆過去なれど、返事を言ふ

に「御尋下サレシヲ謝ス」とやうには言はぬなり。(今かく書く人あれど誤れり)過去に言ひなすべき必要は無き場合なるを思ふべし。凡候文には完了は略する慣例なるを初學者は過去ぞと思ひて

昨日御願申上 ｛候／候ひし／候ひつる｝ 件早速御取運被下難有奉存

など「候ヒシ」と書く、いとわろきなり「候ヒツル」とは古來いへれど、「候ヒシ」といへるは見も及ばず。言語に過去にいふ場合にあらざればなり。されば此の歌「天彦」はいかにもあれ、「オトヅレシ」と過去に解すべき餘地は毛頭これ無きを悟るべし。縣居翁は此の事極めて心を得られずありけむやうなり。本居翁は大抵は正しく心得られたれど古事記の訓を始め諸處に誤られたるも交れり。學問の開け行く代にあへる人々よ、心して正しき語の道をたどり給へ。

第四　まし

一　助動詞の中に同類にして而も微細の區別あるは想像推量を第一とす。今の口語には唯ウヨウとラシイとの二種のみなるに、文語にはムベシラムラシメリマシの六種ありて、之を直に口語に譯すること能はざれば、其の眞義を心得て適當に用うるは、多少の學習を積まざるべからず。(ダラウナラムは指定辭とムウとの複合なり)中に就きてラムの事は第一回に言ひたれば、今は其

の次に心得にくきマシの沙汰を試みむとす。

散る花の鳴くにしとまる者ならば我鶯に劣らましやは(1)古今

秋なれば山とよむまで鳴く鹿にわれ劣らめや獨ぬる夜は(2)古今

此の兩歌の「劣らましやは」「劣らめや」を口語に改めて「劣ラウヤ」と言はゞ兩者の區別無くなりて都合次第に言ひ換へらるべけれど、實は然らず。(1)は鳴きて止る者ならば我も劣りはせず泣くべけれど、さる譯にも行かねば諦めて泣かずといふ意にて、(2)は我が獨寢ぬる夜は泣くこと鹿にも劣らずといふ意なれば、歸する所は相反對せり。(1)に就きてマシの意を見るに、事實にあらざるを假定して、しか想像し見る趣なり其の他のマシを見るにも、

兼ねてより君來まさむと知らませば門に宿にも玉敷かましを(3)萬葉

うれしきを何に包まむ唐衣たもとゆたかに裁てと言はましを(4)古今

など、知らざるに因りて玉を敷きて歡迎すること能はず、又袂ゆたかに裁てと命ぜざりしより、袖の狹きに因りて、此の嬉しさを包むこと能はずといふ意を下に含めり。かゝる所より橘守部は「悔みて言ふ樣の辭なり」と說きたる、(3)(4)には當れども(1)には當らざる、不完全にはあれど

「君」といへばなめし畏しはしき子を「梅」と名づけてさかえ見ましを(5)作樂

武藏野に捨てられぬとも久延毘古の又秋の田に立ち榮えまし(6)篤胤

などの甚しき誤謬には陷らざるなり。

二　抑マシに希望の意ありといふこと誰人の言ひ出でけむ、人惑しなる言樣なり。想像辭はムもベシも皆希望の場合にも用ゐらるゝことあれど、さりとて希望を表すが此の辭の職能なるにはあらず。マシも其の如く、

猿澤の池もつらしな吾妹子が玉藻かづかば水ぞひなまし(7)萬

は「水が乾レバヨカツタニ涸ナカツタノデ吾妹子が溺死シテ了ッタ」といふ意より希望に通ふにて事實ならざるを假定して想像する本義に外ならず。「外の散りなむ後ぞ咲かまし」は「外ノ散ッタ後ニ咲ケバヨイニサウデナイカラ人に賞翫サレヌ」意、「やすらはで寢なましものを」は、グヅ〳〵セズニ寢レバヨカツタニ」の意、「露と答へて消なましものを」も、「消エレバヨカツタニ」の意にて、「消エタカツタ」、「寢タカツタ」等の希望にはあらざるを思ふべし。此の類例なるバヤも此の假定より生ずるにて、「見せばや」は「見セタラナア云々」、「聞かばや」は「聞イタラナア嬉云々ダラウ」といふより希望の意となるを參照すべし。かくて(5)(6)は何等此の如き假定の義なく、「榮ユルヲ見ム」とか、「榮エテム」など言ひてあるべき所なり。

みてぐらにならましものを皇神の御手に取られてなづさはましを神樂
花にあかで何歸るらむ女郎花多かる野べにねなましものを古今
秋の夜の曉方のきり〴〵す人傳ならで聞かましものを新古

など總べて此の假定にて、然らざる希望は決して之あることなし。されば前の(5)(6)は固より、有名

なる

身はたとひ武藏の野べに朽ちぬとも留めおかまし大和魂 松陰

草より出でゝ又草に　入りし昔や問ひてまし　人草しげく咲きにほふ　花の都の月かげに 中學唱歌

更に又わりご開きて遊ばまし月夜になりぬ梅の花園・

あはましと思ひしものを紅人手ひとつ拾ひて歸り來しかな

あか井汲む道も絕えにき降り當る雪を佛に奉らまし 明如

武夫の磨く心の玉葛かゝらば遂に光增さまし 井伊直弼

年經し杉の蔭ふみて　大谷の流ながめつゝ　心に偲ぶ古の　すぐれし人の俤を　規律正しき生活に　心を鍛へ身をきたへ　暑さを知らぬ日光に　我等は夏を過さまし 精華小學校旅行歌

なれし小路今日もまた牛と共に急がまし 中學唱歌

大和心を經として　武備に文事にたゆみなく　進み行く代の唐錦　緯の色々織りてまし

など皆誤れる者にて實に調子も下らず、意義も通ぜざる者なり。かゝる誤用は誰人か始めけむ、德川氏の頃となりてよりなるべきが、いまだ調査し得ず、心づきたらん大方君子の教を仰ぎ置くものなり。玆に滑稽なるは、人を祝して

「君はいよ〳〵榮えまし」とか、
「世の博士とも仰がまし」とか、
「いみじき名をも立てなまし」などいふ事なり。是は祝するにはあらで、弔ふことになるものなるを思はざるは、傍痛き限なり。ましの奥には、事實の反對なる者あるを忘るべからず。

三　さて始に歸りて、マシは假定想像なれば、其の上に假定前提法の語あること普通にて、殊にマセバマシカバセバなどを受けたるは、今人も大抵は誤らざるなり。

ならしつる扇の風と思はましおくれて竹のそよがざりせば　景樹
梅かをる春なかりせば法の師も住まぬ野寺を誰かとはまし　正風
急がずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野ぢの村雨
伊勢ならばひがごとぞとや思はまし大和なるてふ美作の池　堀川次郎百首
櫻花風にし散らぬものならば思ふことなき春にぞあらまし　能宣
家にありて母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも　萬葉

此等すべて事實ならざる假定にて、ウモノタラウモノなどに近きなり。但上に假定のバを受けたりとて、

眞直なる大和心に學びてば神のまことの道は得てまし　大平

といふ樣なるは、事實となるべき積極的の想像にて誤れり。此は隆正の「立てそむる志だに撓まず

ば龍のあぎとの玉も取るべし」とやうの類にて「得ッベシ」とか「得テム」とやうに言ふべきなり

　樂しげに舞ひかざせどもうかれ女の涙を包む袂ならまし

などは又別にて、べシ又はムとのみあるべき所なり、此等の反對に、

　なか〳〵に霞まざりせば照る月の光に花やまがひはてなむ　景樹

　埋れずば春ごと花はさきぬらむあはれはかなき谷の埋木

は「はてまし」「さきなまし」と言ふべき所なり。

四　假定想像の意義前述の如く略盡きたれど、疑問と結合する時に少し心得にくきことあり。

　春來れば雁歸るなり白雲の路行きぶりに言や傳てまし　古今

　秋の野に道も惑ひぬ松蟲の聲する方に宿や借らまし　同

　立ちそひて消えやしなまし憂きことを思ひ亂るゝ煙くらべに　柏木

　雪ふりて木ごとに花ぞ咲きにける孰れを梅と分きて折らまし　古今

　行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主人ならまし　忠度、旅宿花

此等は、「傳テム」「借ラム」とやうに、簡單にも心得らるべきが如くなるが、實は皆ムよりは深き意あるにて、「傳言シタモノデアラウカ」「宿ヲ借リテモ見ヨウカ」「消エレバヨカツタラウカ」「折ツタモノダラウカ」「主タル者デモアラウカ」など樣に、なほ假定の意義は十分に含める者なることを注意せざるべからず。散文ながら徒然草に「しやせましせずやあらまし」などあるも、「シタモノダラ

ウカ、シナイモノダラウカ」の義にて、「ショウカ、シマイカ」と短く言へるにはあらず。源氏物語帚木巻、品定の中に、頭中將の「その棚機の裁ち縫ふ方をのどめて長き契にぞ背えまし」云々」とあるも「長キ契ニ背エレバ好カッタニ、短カッタノハ氣ノ毒ダ」といへるにて、大抵は過去の事實に反したる事を假設して想ふ、其のタといふ意の過去ならぬにも存するを記憶すべし。

五　最後にケムとの比較を說かざるべからず。ケムは過去に有りし事實を想像し、マシは其の反對の事を假設するなれば、口語には同じくタラウと言ひても、區別は明に立てざるべからず。

大江戸も燒野の原となりやせむ眞心盡す君しあらずば

此は故勝伯を詠じたる歌なるが、君ありし故にこそ燒野ともならざりけれといふ下心なれば、ヤといふ疑辭は無くても通ずべく、「なりなまし」とあらまほしく、それをもし「なりにけむ」とせば甚しき方角違となる。此の誤も折々見かくるなり。今ふと思ひ出でねど「黑船の來らざりせば日の本も今日のさかえはあらずやありけむ」「太閤の君我が國に生れずば亂れたる世は如何になりけむ」など樣に。又散文に

天富士谷氏に年を假し云々、或は又さなくとも之を祖述して精錬を加ふる者ありしならば、或は日本語學の一旗幟を、東京の天地に押立つることを得けむものを(某文法論)

此の近俗の體に「シナラム」と言はゞ通るべけれど、ケムとは言はれぬ所なり。シナラムとケムとにも此の如き相違ある、歌には用ゐぬ樣なれど、序に言ひ添ふ。

六

竹取物語に、倉持皇子玉の枝を取り來りて赫夜姫に見する時の歌に、

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らで更に歸らざらまし

といふあり。竹取物語抄の頭書なる入江昌熹の說に「カヘラザラマシ此の助辭今を以て見れば如何侍らむ、今はカヘラマシヤハカヘラザラメヤなど有るべきか。かゝる助辭の遺萬葉集などにも見ゆれば古は斯くて通じけるにや」とあり、田中大秀の竹取物語解には「サラニを寫本はタヾニと有り。それも惡からず。一首の意はいまだ玉枝を採り得たまはぬ前の意にて、かく志を剛く立て辛うじて採り給ひし由を知らせんとて、杖に付け給へるなり」とあり此の外に如何なる解說ありや知らねど、此等の解にて世人は如何に心得べき、おのれはいと覺束なく覺ゆるなり。

頭書は此のカヘラザラマシをてにをはちがひと心得て、萬葉集にも多しといへる、いと大膽なる態度とや言はむ。言語を解するに當りて「かゝる違古書に多し」といふは狂にあらずば愚の極なり。而してザラマシといふ否定想像をマシヤハと反語に換へたるは聞えたれど、ザラメヤと否定想像の反語を以ても之に擬したるは如何なる思違をせしにや、意味は反對になるなり。とかくは此の歌の心得にくきより、大秀は玉の枝取らぬ前の意を歌へるならむと言へる一わたりは好き思ひつきとも見ゆれど、事態頗迂遠にして、例へば成業して鄕里に錦を飾れる人の學若不レ成死不レ還と歌ひたらむが如く、有るべき事とはおぼえず。おのれは前段に「マシ」の本義を解きて事實に反せることを假設して想像する助辭なりといへり。此の解說を此の歌に試むるに、亦よく通じて悖ら

ざるなり。卽事實は玉の枝を手折りて歸り來たるなるを、其の由を表面より正說せずして、「手折らで歸らざらまし」と假設想像し、やがて「手折りてこそ歸り來つれ」といふ意になるなり同竹取物語に、此の歌の前に、石作皇子の佛の御石の鉢を持ち來たるを赫夜姫見るに螢ばかりの光だになしとて詠める、

置く露の光をだにも宿さましをぐら山にて何もとめけむ

といふ歌ありて、頭書に「一本ダニゾとある宜し。ゾといひてマシと結ぶ格あり。云々コソ有ルベキ事ナレと云ふ意なり」と釋せる、是も「眞物ならば光を宿さましを、僞物なれば露の光だに宿さず」といふ意にて能く聞えたり。ダニモをダニゾと改めて始めて聞ゆるにはあらず。マシの本義にて、上はゾにてもモにても、然樣に聞かざれば語を成さぬなり。「萬葉集にも此の如き違あり」といへる人は、すべてマシの意を解せぬなり。萬葉集卷二、日並皇子の薨去を傷める舍人等の歌二十三首の第一

高光る我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

といふあり。此等も助辭ちがひの例に入らむか。入江、田中二氏のみならず、詞書を隱して之を見せむに、世人は恐らく大抵祝の歌と解し去るべしと思ふは非か。我が古言の學起りてより二百餘年なるに、鈴屋大人の後には斯の道盛なるが如くにして其の實は幾ばくの進歩もなく、「ラム」を以て未來を想像し「マシ」を以て未來を豫想し希望するなどの誤謬の今に絕えざるは誠に斯道の汚辱

とこそ謂ひつべけれ。中に就きて「マシカバ」「マシチ」「マシモノヲ」などあるをば大抵は誤解せざる様なれど、其の本體の「マシ」に至れば、やがて後世の人の意もて「ム」と等しなみに說き去る心淺さよ。さるは此の萬葉の歌も「皇子マシマサマシカバ萬代ニ知ラサマシヲ、早ク薨ジ給ヘレバ其ハイタヅラナリ」と反實假設想像に悔み言へるなり。悔みの詞を祝賀の場合に述ぶるは呪咀にこそあれ。さる御慶事を祝ぎ奉れる歌の中に、

天の原はねうちかはし飛ぶ鶴の千代の契ぞ果なからまし

といへるは「千代の契も果はありけり」といふに歸すべし。言はまくも忌々しく懸けまくも畏き極にはあらずや。高畠式部の

この春のめぐみのかたま持ち出でゝ老せぬ若菜千代も摘ままし

これも自身の上にはあれど、悔みの歌となれるは笑止といふべし。かゝる人は出關の言にも「學モシ成ラズバ死ストモ還ラザラマシ」といふべく、前の倉持皇子の場合にも「手折ラデハヨモ歸リ來ザラム」など言ふべし。心せざるべからず。

七

漢籍の訓にマシを用ゐたるは、

遊仙窟　韓娥宋玉(ト云ヒシカホヨイ人モ)見(マシカバ)則愁(ヘマシケルコトヲ)レ生

日本書紀(繼體元)　懿哉(ヨキカナ)馬飼(ノ)首、汝若無(カラマシカバ)ニ遣(シテ)レ使(ヲ)來告(リ)ニ殆取(グルコト)ニ嗤(ワラワレナマシ)於天下(ニ)ー

朗詠　劉白若知(ラマシカバ)ニ今日(ノ)好(ナルコトヲ)ー應(ベシ)レ言(フ)ニ此處(ノ)ー不(ラマシ)レ言(ハ)レ何(トハ)

後漢書　莽　不レ如レ是（ザラマシカバ）當下與二霍光一等上（キナラ、ヒトシカラマシト）云（假字遣沿革史料四九）

など、枚擧に遑あらず。古訓點の漢籍ならば必ムとマシとの用法には截然たる區別あること、此に擧げたる例の如し。翫味すべし。

第五　む　べし

一　想像推量の助動詞の中に最心得にくきラムとマシとの事は第一と第四とに述べたれば、其の次にはメリを說くべきなれど、これは今の人の用うること極めて少ければ、しばらく後日に殘して、今はムベシの事を定むべし。此の二辭は實に差し當りては餘り誤用は無きことなれど、其の眞義を知らぬ人は、時々之を用うべきに、あらぬ他の辭を用ゐて、誠の意味を沒却することあれば、先その義を一わたり說き置くべし。

ムは最簡單なる想像にて今の口語にウヨウと云ふ。現在にも未來にも不定一般なるにも通じ、過去なるにはケムと云ふ。自己の決意を表すも、其の動作の現實ならざるを想像するよりの轉義にて、更にうつりては希望なるにも用うべし。之を未來を表す助辭ぞと說く人あるは誤なり。未來の動作は斷言しがたき習なれば、ムと想像する場合極めて多けれど、未來ならぬにも用うること極めて多きを思はゞ、其の說の非なるは多言を要せず。且さやうの事は或る一部の學者の言ふのみにて、實用には其等の說に束縛せらるゝこと大體これ無き現狀なれば、これにて差し置きつ。

べシは想像ながら適當可能勸誘義務などを表すところムに比して意義深し。今口語にベキの音便ベイをウヨウと同じ場合に用うる地方あるは、重きを輕き義に取り做せるなり。「秋の野に宿りはすべし」は適當なり「若菜つむべく野はなりにけり」は適當と可能とを兼ねたり。かくてムべシ共に完了のツヌタリと結合する時はそれ〴〵意味を附け加へて强意となる。テムナムタラムツべシヌべシなり。(タルべシは完了又は存在の想像なり)之を未來完了又は强意未來の想像と云ふ。デヤラウテクレウテ置カウテ居ヨウテシマハウラレヨウ相ダラレルテヨイタ〇〇樣ニなどそれ〴〵當つべし。

二　余が見る所によれば、今の歌人ムべシを用うべきにラムマシなどを誤用するもの頗多きが如し。歌は俗言に耳遠き語を用ゐたりとて何の猛きこともなきものなる上に、一知半解の語法を用ゐる試むるは師に添删を受くる場合の外は愼むべきものなり。前段に篤胤先生の「又秋の田に立ち榮えまし」は「榮エテム」など言ふべしと說きたるが、又同じ先生の久延毘古を詠じたる

　まさしかる事のしるしは天の下の物しり人や問ひて知らまし

といふ歌は誠に聞え難き語法なるが、人に尋ね試みたるに「久延彦の天下の事を知ることの正しいことは博識の人が問うたら知れよう。問うて知るだらう」といふ意味ならんとの事なり然らばヤ辭まづ以て不用なり、單に想像するのみにてあるべく、「物知人ぞ問ひて知るべき」など有らまほしく思はるゝなり。

石文に刻まずとても朽ちざるは我が大君のいさをなるらむ(1)

人知らぬ片山陰の姥櫻世に埋木となりやはつらむ(2)

埋木も花や咲くらむ久方の光のどけき御代にしあれば(3)

埋木も喜びつらん年を經てみな呉竹の世にぞ立ちける(4)

掘り立てゝめでらるゝ世は埋木も空しく地にぞ埋れざるらん(5)

かくなせばなに埋木と思はなん生くるが如くゑりし唐獅子(6)

此等はいづれも初學の稽古歌なるべく、何も咎め立つることにはあらざれど、(1)は「動なるべし」とあるが古來の定例なり。(2)は「第一」にも言へる如く現在想像ならねば、「果てなむ」又は「果つべき」とあるべく、(3)は「埋木も花咲きぬべし」又は「花に咲きなん」などか、(4)は「喜び居らむ」「嬉しかるらむ」「嬉しかるべし」又は「さぞな嬉しき」として下の「年」に言ひ續くるか、なほ有るべし。こゝはラムとは言ふべけれどツラムと言ひては完了想像「喜ンダラウ」となりてふさはず。(5)は作者の意のままならば「地に埋れざるべし」とあるべく、少し作意を變へては「つちに埋れざりけり」とも言ふべし。(6)は「なに埋木と思ふべき」又は「思ひなん」とも言ふべし、「思はなん」は誂の願となること誰しも知れる如し。それに「かくなせば」の意味不明なり。もしは「なさば」の意か。又「ゑりし」の「ゑれる」なるべき由は「第二」に詳說せる如し。

以上いさゝか幼きに過ぎたることなれど、ラムマシの說の補遺を兼ねて記しつ。

第六　疑問のや

一　前項篤胤先生の歌にヤ辭の濫用ありと言へるが、此の誤謬外にも多し。同じ先生の有名なる

　雲となり或るは雨とも降りしきて神代の道に身をや盡さむ

といふ歌、おのれ早くより心得かねて人にも問ひ質しつれど、いまだ明に教へ諭しくるゝ人なし。抑古文にて名詞に附ける疑辭ヤカの下に動詞形容詞に係れるは、今の語にては其を最後にカと附けて聞く例なれば、此の歌の結句も「身ヲ盡サウカ」と聞くより外は有るまじきに、さるにては餘り信のなき言樣なり。作意は極めて堅き決意を言ひ出せる者なるを思ふに、此も亦ヤ辭の濫用にはあらじか。「身をば盡さむ」「身を盡してむ」などにては如何あるべき。かくて國學の四大人と崇めて第一に言ひいづる歌に此の歌を取るは誰人のせし事にか、おのれは飽かず思ひ居るなり。それに縣居大人の

　飛驒工ほめて作れる眞木柱立てし心は動かざらまし

といふ歌も素人耳には雄々しく響けど、マシは前段に言へる如く誤用にて、むしろ「動かざらなむ」とか「動かずもがな」とか何とか工夫すべきものなるべく、又「立てし心」も辯護の餘地はあれど、「立てむ」といひても有りぬべき所なれば、「立つる」「立てたる」「立てつる」などあるが最尋常に正しき

言方なり。かく思ひ至れば四大人の中に二大人のは皆瑕歌なる上に荷田大人の「踏み分けよ云々」も餘り面白からず、鈴屋大人のは固より難なしとして他の三歌をば、別のを選びて謳誦することにしたき者と思ふは、さかしらにや、切に大方の批評を仰ぐ。

二

談おもはず餘事に入りぬ。立ち返りて

高砂の尾上の月やふけぬらむ澄み渡りぬる鐘の音かな　景樹

今はとてうち置く閨の扇かな寢る間や秋の心なるらむ　同

此の二歌のヤ辭は如何に。兩首共に「カナ」止の句と「ラム」止の句とありて結構似たるが、いづれも面白からねど、その點は今はさて措きつ、「月ガ更ケタラウカ」「ネル間ガ秋ノ心ダラウカ」にて何分附惡しからじや。おのれは前のは「月ぞ」又は「月も」とし、後のは「ぬるまぞ秋の心なるべき」又は「は……べし」とせんと欲す。抑も疑問と想像とは打聞きたる所にては類似の事の如く、重ね用うるも一方を倒るも事の意に害なき樣にも思はるれど誠は然らざるなり、「雨降るや」は疑問なり、「雨降らむ」は想像なり、「雨や降らむ」は想像の疑問なり。之を等しく見るべきにあらず。婉曲に謙遜して言ふ語法に、「然ルベシ」を「然ルベクヤ」とやうに言ふは言語の上には尚斷言を避けて想像疑問とせるにて、此處などの例には當らざるなり。されば桂園遺稿を見るに、

梅の花咲かぬ宿こそなかりけれこの岡べより春や立つらむ

とありしヤを後にハと訂正せられたるもあり。此の歌などはヤとありても前の兩首よりは聞き

易きが如きに、尙かく改修せられたるより見れば、前のも再考せられましかば必改められなましとこそ思はるれ。「ながらへば又この頃やしのばれん」など、ヤもムも確に利きたるを思ふべし。

三

誰が爲に花や咲くらむ玉鉾の道の行く手の梅の一本
埋木の身にしあれども朽ちざればいつか花咲く時やくるらん
荒金の土より出でし埋木は神代の神の御手ふれぬらむ

始の歌、疑は「誰が爲に」といふ所にあるべく、それにかなど添ふるは好し、「花咲く」といふことを疑ひては何の意をも成さぬにあらずや。これは是非とも「花咲きぬらむ」とあるべきなり。中の歌はすべて難物なれど結句のみの事を言はむに、「時にあふべし」とか「時も來ぬべし」などあるべし。ラム聞えたりとも覺えず、終の歌スラムは過去想像ケムの誤なるうへに、こゝにこそヤと疑ふべけれ、「フレヌラム」と正直に想像するは幼きに過ぎたり。「ヌラム」は例の完了想像にて過去の事に關らざれば「神の御手や觸れけむ」としてこそ好く通ずべきなれ。又第二句「土より出でし」もいかゞ「イヅル」「イデタル」「イデヌル」など有るべきにて、音の餘る時にはヨリをユ、ヨなどするか、それ古過ぎて調はずば他の細工を施すべきなり。

第七　希望

一 な む

淺くとも心深めて青桐の葉かげの淸水われは汲まなむ　陸實「愚庵十二勝、碧梧井」

磯草のかりそめながらしばし世のあらしを波の音と聞かなむ　同上「臥病」

陸氏は文章家にして歌人にあらざれども、其の詠歌頗高調にして、誦すべき者多きは、我が輩の深く敬服する所にして、歌人者流の特に留意すべき所なり。此の二首亦固より俗惡の詠にあらず、掬すべき淸韻乏しからざれども、言詞の意義を誤れるは、惜みても餘あることなり。抑「ナム」といふ助辭には三種あり。一は係のテニヲハ、「花ナム咲ク」の類二は未來完了或は完了想像とて、「散リナム後ゾ戀シカルベキ」など、動詞の第二變化に附きて「メ」とも活用する者、三は誂(希望)の意にて「山ノ端逃ゲテ入レズモアラナム」など、動詞の第一變化(古の將然言)に附きて活用なき者なり。此は今の人も大抵心得たる事なれど、第三の誂といふ意義を悟らぬ人多きなり。

およそ希望願望などいふは、意義頗廣きことにて、俗意のみにては明らめ難し。中に就きて「汲ミタシ」「聞キタシ」など、極めてうちつけに自己の動作の希望に言ふは、歌詞には用ゐ馴れざることなれば姑く措き、「汲マヽホシ」「聞カマホシ」といふは、「欲シイ」といふ今言に當てゝ「汲ミタイ」「聞イテモ見タイ」など心得べく、事物の動作(狀態的なるにも)の然せむこと、然あらむことを願ふものなり。然らば、他の事物の動作を希ふ「人ガ汲メバヨイ」「人ガ聞イテ欲シイ」などは、如何に言ふぞといふに、

（イ）　人も汲めかし　聞けよかし
（ロ）　人に聞かせまほし　汲ませせまほし
（ハ）　人の汲まなん　聞かなん
（ニ）　人の汲まぬか　聞きやはせぬ
（ホ）　いかで人に汲ませむ　人も聞かるべし
（ヘ）　人に汲ませてしがな　聞かせにしが

など色々あるべきが、命令なると打消の疑問なるとは、今も言ふことにて心得やすし。「ム」「ベシ」も、今も「ウ」「ヨウ」と想像し決意するが、轉じて希望となることとなるが、他の上には、「汲マセタイ」「聞カセヨウ」と使役相に言ふ所、「マホシ」と同じ。「テシガナ」の類は、後に言ふべし。(ハ)の「ナム」こそ、最普通に此の場合に當るにて、所謂誂なれば、自分の「汲ミタイ」「聞カウ」と望むとは異なり。前に擧げたる「入れずもあらなん」も、山の端に誂へたるにて希望するものは、我なること勿論なれど、動作は我のにあらざること忘るべからず。願の「ナム」の意義正に此の如きに照す時は、前の二首如何にとも聞くべき由なし。此は「ワンハ汲ミテム」「音ト聞キテム」とすべきか。さては、完了の「テ」少し强過ぐる感あり。「ワレコソ汲マメ」「ワレハシ汲マム」「汲マムオノレハ」「音ト聞カムナ」「音ト聞カムヤ」などは、何れも妙ならざるか、尙他に工夫あるべし。先年何かの行違とて、文部省の檢定試驗問題に、「我行カナム」とやうの文ありて、世の物議を招きしことあり、思ひ合すべし、又

言の葉の道を諭して外つ人も我が日の本の人になさなむ　吉川樂平

此の「ナサナム」の「ナス」を作者以外の人の動作と見る時は誂のナムにて通ずべきが如くなれども、全體に調子の整はぬ感あるは、さはあらぬ證なり。「ナシテム」「ナサバヤ」などあるべし「うるはしき菊に紅葉に劣らざる色をも香をも世に殘さなむ」も同様に、他人の上と解すべき由なければ非なり他人といふ事ならば槌に「殘せかし」などやうに命令法に言ふべし。命令にいふべきを「ナム」と誂へては調子狂ふこと、「とめ來かし梅盛なるわが宿を」を「とめ來なむ」に變ふべからざるにて知るべし。此の誤今人に多し深く注意すべし。

梅の花庭もせきまで咲きみちぬ吹き來る風よ心せななむ　鈴木重嶺

これは伊勢物語の「宵々ごとに打ちもねななむ」を學びたるべきが、「シナナム」の誤なり。「ナナム」は無意味に重ねたるにあらず、「タラナム」などの如く、完了の「ヌ」の第一變化なる「ナ」に誂の「ナム」を添へたるにて「ネナナム」の「ネ」は第一變化にあらで、第二變化連用なるに、完了の「ナ」を添へたるなり。サ行變格の第一變化「セ」に「ナム」を添へて、「セナム」と願ふは可なれど「ナナム」とは續かず。更に言はむに「ネナ、ム」は「寢テヲレバヨイ」「ネテシマヘバヨイ」にて、「ナ」といふ完了の意義よく聞えたれど、「心セナ、ム」の方は、完了の「ナ」少し響かぬ心地もするなり。「心ヲシテ居テ欲シイ」など聞きて然るべきにや。

二　がな

鬼薊の下に幾世の埋木をいつかは花と咲せてもがな

鄙にして世は過ぎぬれど一度は上りてがもな花の都に

うかとせば讀み過しつべき樣なれど、此の希望辭も當らず。(歌も全體わろし)此の辭の根本は「ガ」にあるが、名詞副詞に附く時は、上に「モ」と置き下には「モ」「ナ」と添ふること「老イズ死ナズノ藥モガ」「常ニモガモナ」「無クモガナ」の例にて知らる。さて動詞に附く時は、連用に「シ」「テシ」「ニシ」を添へて、それより續くこと、「甲斐ガ嶺ヲサヤニモ見シガ」「今モ見テシガ」「深キ山ニモ入リニシガ」などの如し。「テ」を添へたる連用動詞に、「モガ」「ガモ」と添へる例も道理もあるべしと思はれず。されば前の歌は、尋常には「咲カセテシガナ」とすべく、或るは「咲カセテモ見ム」などゝも言ふべくや。後の歌は、「上リテシガナ」とも言はゞ言はるべけれど、少し過ぎたる心地す。凡この「ガナ」の類は叶はざることを願ふ場合に用うる者にて、輕き願には相應せず。今の言にもいふ「無クモガナ」は、「無イ方ガヨイ」といふ如き處に用うる樣なれど、實は「現在有ルノデ仕方ガナイガ、有ラセタク無カツタ」といふ意味十分に存するなり。されば此處は其の人に因りては叶はざる願として通ずることもあるべけれど、尋常ならば「上リテモ見ム」位にて事足るべきなり。

三　ばや

燒かばやと毛蟲に怒る法師かな

此は歌にはあらざれど、一寸面白き句なり。意は殺生戒を有つ法師ら、毛蟲の多きに詫びて、「燒イテ

モヤラウ」と怒る樣なるべし、謠曲などに多き「……セバヤト存じ候」など、「ショウといふ意に用ゐたるより見れば雖も無き樣なるが、「見セバヤナ」「マダシキ程ノ聲チ聞カバヤ」などの用例を見るに、此の希望は、「云々シタラナア」といふ假定の感嘆より起れること顯著なり。卽「見セバ」「聞カバ」は「見セタラ」「聞イタラ」といふ假定の前提法にて、「ヤ」は感辭、其の下には「嘸云々ダラウ」とやうの意を含めり。されば、此の俳句を其の儘に「燒イタラナア嘸心行クダラウ」にては、「怒ル」に適はず「燒キテムト」「燒立テムト」、又は倘外にも言樣あるべし、歌にても、此の「バヤ」を誤用することあるやうに覺ゆれど、適例の手元に無きまゝ此の句により序に一言し置く次第なり。

第八　係結

一

明けき御代にあはずば埋木の花さく春も知らで經ぬべき(1)
桃生けて棚にひゝなを祭るにも猶袖ぬるゝ亡き子思ひて(2)
くちなしの色にも出でぬ埋木の世に隱れたる身こそうたてき(3)
年ふりし谷の埋木世にいでゝますら武夫の妻戶にはなれ(4)
荒磯波碎けて後は名のみなるつはものどもの名ぞはかなけれ(5)

かゝる引歌を見む人は、我が所說も極めて幼かるべきを思はむか、然り、此等はあまり分り切つた

る事にて、我が輩も論外に置かんと一度は思ひたりしが、更に考ふるに、此等の作者は、世に言ふ係結の法則を一わたり心得たる上に、進んで斯樣なる新しき語法を造り出でたる者と覺しき節あり。然れば、少し所說を尋常の係結說の上に高めて、果して此の如き變法をなし得べしや否やを論定せむとするなり。(右の歌に想も拙劣なるあるは、さる方に見ゆるし給へ。)

抑係結の法とは、(一)尋常に活用する詞辭の第三變化にて終止し、(二)ゾヤカナン又は疑詞を受くる時は第四變化連體の形にて結び、(三)コソをば第五變化卽バドモに續く格にて結ぶことなり。何故に(二)(三)の如き變異あるかは、從來いまだ明にせられざれども、さ樣に言はでは、國語は整調せざること萬人の認むる所なり。今我が輩の所思を一言述べ試み置かむに、連體の結は、實は下に體言を略して、用の詞辭を體に言ひなせるもの、コソの結はバドモと續くを強ひて斷ち切りて、其文の強みを利かせたるより出で來し語法なるべし。此の事を詳說せむは、本篇の主意にあらざれば、筆を此に止めつ。更に係結の法に特例として見るべきは、(二)の係辭なくて連體語にて文を結ぶことなり。此は下に「コトヨ」などの意を含めたる者として誰しも承認する所なり。

前揭(1)(2)の歌の連體法にて結びたる、さる省略含蓄あるべしや。之を有りとしも思ひたらむは、修辭法の濫用なり。(1)は正しくは「經ナマシ」といふべきなれど、略言とすれば「經ヌベシ」と終止すべし。「經ヌベキコトヨ」と聞きて、何の面白きことか有るべき。(2)は「袖ヌレヌ」とあるべし。作者は、さては「ヌレタ」と過去に聞えて、宜しからずなどゝも思ひたらむか、其處に誤解あるべし、「ヌ」は過去

にあらで、完了なり。「タ」とも「シマフ」とも今言に當つべし「ヌレヌ」としても、心配なきなり。(3)は「コソ」を連體にて結べる、尋常ならずとは作者も知りつゝ、尚奈良時代の古言に形容詞ク活シク活の連體にて結べる例あるを、後援としたるにもあらむか。此の語法は、下に「コトナレ」とやうの意を含めたるなるべけれど、此の歌は、さる古調の者ならねば、成るべくは避けたきなり。「身コソツラケレ」にては、作者の意に中らじか。「ウタテキ」は「ウタテシキ」とシク活にも活用する語なれば、「身ゾウタテシキ」など、もいふべく、又は「ハカナ此ノ身ハ」などもあるべし。(4)は尋常に「妻戸ニハナル」としたらむは、實にも興なかるべけれど、そはナルと終止法に言へる故にはあらで、全體の結構と想との關係なるを思はざるべからず。此の歌ナルといふべきを、ナレといひたりとて、實は、何の興もなきこけおどしといふものなり。まづは「トゾナル」位にて御免を蒙るべきならむか、(5)も同樣に下らぬことなり。コソとすれば一音殖え、ハカナキとすれば一音減るによりての惡戲とは覺ゆれど、近來新派の歌人といふものの得てかゝるすさびをするなり。

黄昏を巷あゆみて物おもふ愁に似つれ萎え行く灯影(6)

目さめたる朝の窓のすきまより白き雲見えうら悲しけれ(7)

など、音數の都合上「コソ」を略して、其丈の意味を利かする便法なりといふに至つては、呆れざるを得ず。(6)は「愁ニ似タリ」にて足れり。(7)は手の入るべき樣なし。「ソヾロ悲シキ」位か。かゝる語法は、修辭の便宜なりとて、動すべき性質の物にはあらざるなり。ゆめ邪道に迷ひ入り給ふこと勿れ。

二

あふことは夢にのみこそならひ來て(コヨヒハ)
（修）（主）（客）（敍）（主）　副詞句(修)

現ともなき今宵なりけれ(千五百番歌合)
（客）形容小句(修)（敍）（敍）

是は文章論の目より解剖したるなり。およそ文法上の文には必主と敍述とあり、更に客と修飾とに依りて擴げて行く。修飾は、主にも客にも敍述にも係り、主と客とは、必敍述に係る。此の例に於いて、アフはコトに係り、「アフコトハ」と「夢ニノミコソ」とは「ナラヒ來テ」に係り、以上は副詞句となりて、更に下文全體に係る。下文には、主語略せられたり。疑詞及テニヲハの係といふも、此の外には出づること能はず。之を簡單に例示すれば、

君こそ　いみじく　歌を　よめ（主）（敍）

君は　いみじく　歌をこそ　よめ（客）

君は　いみじくこそ　歌を　よめ（修）

の三種にして、其の外には係り得ざる理なり。

君は　歌をこそ　よめども　詩をば　作らざれ
（客）（敍）（修）（客）（敍）

などいふは、誰人聞きても調子の合はざるを覺るべし、然るに、前現の歌を見るに、文の敍述ケレと結びたるは、何を受けたるか。その語の(主は略せられ)修飾にも、はた文の修飾なる副詞句にもコソといふ係はなく、コソは副詞句中の客にありて、「ナラヒ來テ」と受け流したるを、いかで「ナリケレ」にて結ぶべき。相應の古歌にはあれど、傳寫の誤にあらずば、千慮の一失にもあるべし。

三　さて此の種の誤謬は、世に多からぬことなれば、先人もさして言擧はせざりしことなるに、有名なる景樹の

明けてこそ	見むと	思ひし	箱崎の	波間に	浮ぶ(以上修飾部)	松の	村立
修	敍	敍	修	客	敍	修	獨
客							
修							

に至りて、世論一時に喧しくなれり。之を正面より見れば、此に解剖せる如く、「アケテコソ」は「見ム」にこそ係れ、「思ヒシ」に係るべき謂なければ誤なりと定めたる諸說は、固より正しきなり。されど、別に側面の觀察を要する者あり。そは發音の間隔斷續の如きも、意義とは全然一致するものにあらず。客語の下に添る「ト」といふテニハの敍述語の上に、接頭的に添るなどの變化もあり。俳句、詩などには音數の都合上、一連續の語を兩句に裂くことあり。それ等より考へ合するに、意義に一致せぬ言語の斷續といふ變例も、絶無といふべからざる筋合も生ずべきにあらずや。

諸越も天の下にぞありときく照る日の本を忘れざらなん新古今

戀しきか形も形こそありと聞け立てれ居れども無き心地する　古今

塵をこそすゑじと思ひし四つの緒に老の涙を殘しつるかな　著聞集

よろづの事は月見るにこそ慰む物なれ　徒然草

此等の例尚多きが、いづれも誤とはし難く、我が耳には調へる樣に響くなり。之を意義の斷續上より、「天の下ニゾアルト聞ク」、「形コソアレト聞ク」としては辭調却つて非なりと感ずる人多きが如し。「塵ヲコソ」は「スヱジ」にて結べる者とは見がたし。ジは活用なき助動詞にて、連體には用ゐらるれど、バドには接すべからず。隨つてコソの結にはならず、且之を流せるにもあらず、「思ヒシ」に受けて流す外に途なし「月見ルニコソ」は、「慰ム」にて受けて、流して「慰ムモノナリ」としてもあるべき樣なるが、此の儘にて前例に準ずべからざる理なし。されば、此等はすべて「アリト聞ケ」「慰ム物ナレ」などを一連續のものとして、係を結べるぞと見て正例に立つべきなり。更に又一考すれば、他の解法あり。そは、コソの地位の轉ぜるものと考ふるなり。即

「天ノ下ニアリ」トゾ　聞ク

「形モ形ハアリ」トコソ　聞ケ

「塵ヲスヱジ」トコソ　思ヒシ

「月見ルニ慰ムモノニ」コソ　アレ

「アケテ見ム」トコソ　思ヒシ　箱崎ノ

ノミバカリにも此の用法あり。旁此の考も捨つべからざるなり。是に於いて、我は景樹の歌をも、其の儘に承認し、併せて同翁の

ゐのころは何の心もなかりけり何の心かありと尋ねむ

といふ歌も正例に收めむと欲するなり。「何ノ心カアルト尋ネム」にては、尙聲調を害するなり。

第九　めり

メリは、推量想像の助動詞なる事は誰しも知れども、さて如何さまに推量想像するぞといふに誰しも答へにくきなり。舊說に「樣子ダ」「ト見エル」など釋したるは略當れるが、之を「ダラウ」「ウ」「ヨウ」と聞きては、大に誤るなり。

かく言はゞ、氏は「そは複語尾ゆゑ別なり」ともいふめれど云々（某文法論）

此は、「ベケレ」といふべきを誤れるなり。メリとベシと、活用は、ラ行變格的とク活とにて異なれど、メとべとは、音義上同類なるべく、かくも言ひつべきかと思はるれど、決して此の如き用例も意義もなきなり。又

夏の盛を箱根鹽原などにて送りたらんには如何に心のゆくわざなめり

などいふ文も見しことあり。此は「ナラム」を誤れるなり。抑此の辭は歌語に用うること昔より少く、今人は特に使はぬ方と見ゆれど、一わたり沙汰して置かんに、「ナリ」と斷定しても不可なき程の事

柄を言辭の上にて婉曲に和げて、「メリ」といふものと心得べし。「ナリ」の想像の「ナラム」又は「ナルベシ」にはあらざること、呉々も忘るべからず。されば、文語にも平安朝以後は極めて少くて、今は然ナンメリ」「ソレナンメリ」などのみ人の口の端に上るは、「ナルナリ」を和げたるにて難なけれど、「誰ナラム」といふべきを、「誰ナンメリ」などいふもあるは滑稽の極なり。

大船にまかぢしゞぬき琵琶の湖漕ぎたみ行かば心ゆくめり

君いなば後に殘りし我がともは誰を力に世には住むめる（「殘リシ」は「殘ラム」「殘レル」の誤）

「ユクメリ」は未來想像に「ユクベシ」「ユキナン」とやうに、「スムメル」は「スムベキ」といふべきなり。此の二歌の如きは、餘に幼稚なるものなれど、轉ばぬ前の杖と言擧するなり。

うたゝねの夜舟こぐまに過ぎぬめり夢の浮橋浮島が原

此の「メリ」はよく當れり。かくツヌなどゝ結合したる場合には、テムナムツベシヌベシなどゝの相違著しく明瞭なるを本としてたどりなばメリの意義も會得せらるべく、更にツナリヌナリに比して、其の稍和ぎたる者なるを思ふべし。今の口語には、ひたと當るもの無ければ、まづはダと指定すると略同じと見て可なり。

第十　らし

一　「ラシ」は、根據ある想像にて、「ラム」の漠然たるに異なり。目に見る場合に「メリ」といふらむ樣

の事を、目に見ぬ時に推し定めて、「ラシ」といふ如き心地あり「立田川紅葉亂れて流るめり」は、遠方よりなりとも、まづ打ち見たる姿にて、「み山には時雨ふるらし」は目には見ず、唯外山なる眞拆の蔓色付けるによりての推定なり。此の二つを取りかへては、意義通せざるは明なり。又「ラム」に比するに、今の口語の「ダラウ」と「ラシイ」との差の如く、「今もかも咲きにほふらん」を「匂ふらし」とは言ふべからべからざること明なり。

一昨日も昨日も降りし夕立は今日も降るらし雨づゝみせむ　景樹

此は、未來の想像に用ゐたるよりして惡きなり。ラシは「時」に關せぬ辭なるが、先は現在と心得て可なり。此の歌は今の口語の、「今日モ降ルラシイ空合ダ」といふやうの意義に聞きたるなるべきが、歌語にはなり居らざるなり。普通に、「今日もや降らむ」と想像の外にヤと疑ふか、それを略しては、「今日もぞふらむ」などあるべし。抑ラシといふ辭、今の「ラシイ」と類似して、中には違ふ事あるを知らざるべらず。今の口語は粗雜にして、「降リ相ダ」「フリゲダ」など動作につきては未來なる事を、「フルラシイ」などいひても通ずることとなれども、文語にては「降リ相ダ」は「フリヌベシ」「フリナム」とこそいへ、「降ルラシ」とも「フルラム」とも言はざるなり。更に又形容詞の「シイ」と「ラシイ」とも別あるを、今は混同して、「雄々シ」「女々シ」を「男ラシイ」「女ラシイ」といふ。是も訛言にして正言にあらず。「男々シ」は誠の「男的」にて、「男ラシイ」は實は「類似男的」なり。之を極言すれば、ラシイには似て非なる心も存するなり。(此は形容詞としての場合に就きてなり)景樹翁の「歌は歌らしくよめよ」とい

ふ教なども、一わたりはさることなれど、その弊は、似非歌に流るゝこと、此翁の歌に見て知るべく、ましで其の末派輩の歌に至りては、唯ラシキのみにて、實なき者の多きこそうたてけれ。「味噌の味噌臭きは眞の味噌にあらず」といふ言の當否は今姑く置きつ、歌よみらしき人の歌に、好き歌少く、豪傑らしき人に眞の豪傑なく、教師らしき人に眞の教師なき樣の事は、疑ふべからざる實事なるに考へて、ラシキ事を鼻先にぶら下ぐることは、戒めたきことゝ思ふまゝを、序に書き添ふるなり。

二

立ちかへり、

網引する海人の子さわぐ明石潟夕立すらしあまのこさわぐ

荒磯にあまの子出でゝさわぐなりいさりの舟や今歸るらし

は如何に。「夕立スラシ」「今歸ルラシ」は、共に、「アマノ子サワグ」といふ根據を有する想像にて適當なるが、後の「舟ヤ」のヤの辭は、折角の推定を疑ひ崩すことゝなりて整はず。「ラシ」に對して疑辭あること、後拾遺集に「聞きつるや初音なるらし時鳥老はねざめぞうれしかりける」といふ歌あれども、此の用法決して宜しからざるなり。又こゝの「ヤ」を疑ならで感嘆なりとも謂ふべけれど、そは私造の語法にて卑しきなり。おしなべて「ヤ……ラム」「ゾ……ラシ」といふ教あるは、聊語弊はあれど、とかく此の歌は「歸ルラム」とするが整へり。

折々はひれふる魚やさはるらん獨ぞうごく河骨の花　明如

此の歌、上にヤなくば「サハルラシ」ともいふべけれど、疑ふ意ある上は、ラムを變ふること能はず。隨

つて、前の歌「舟ヤ」を活さんとならば、下を「今歸ルラム」とやうに整ふべきなり。

鐘の音絶えずも聞ゆ今日もまた世は何事かあるらしげなり

此の「何事カ」は下に係らざれば、カ辭ありてもラシは難なけれど、ラシゲと續けたるは卑しき無用の重語にて歌語には相應せず。但作者はさる事に拘泥せぬ說なるべければ、此の非難は一般の人に對していふなり。

三　語格階梯異見答書といふ書あり。堀秀成翁の語格階梯に對する里見義氏の異見に、再堀翁の答へし者なり。其の中にある「ヤ…ラシ」の論の大意

階梯　ヤカの係をラシにて結ぶは誤なること、語格全圖解に云へり。

異見　このラシは一種特別の結辭にしてモニヲハバ又ノガゾヤカコソまで押並め結ぶは證例のあることにて吾輩異論なし、先輩も其の論なり。ヤは證例數々なり(但カの例は追つて云ふべし。)

山姫の霞の袖や匂ふらし花にうつろふ横雲のそら　續拾遺

長き夜に秋の寢覺やふけぬらしさま〴〵になる身のゆくへ哉　壬二集

菊の花折りて夜ふけぬ白露は我が手ながらに置きやしぬらし　躬恒集

五月雨はこよひばかりか時鳥聲もや今の限なるらし　同

天の川梶の音聞ゆ彥星の棚機つ女と今やあふらし　赤人集

夜舟こぐ櫂の雫やしげからしぬるゝ袂に宿る月影　新後拾遺

答書　詞の玉緒六の巻に「ラシ」はラムの活きたる辭にて疑の重きと輕きとのけぢめと聞ゆれど、古き歌どもを考ふるに、又さる意にもあらぬが如し。但しヤ何などの結にはラムのみ多くしてラシはいといと稀なり。後撰五戀ひ〳〵て逢はんと思ふ夕暮は棚機つ女もかくヤなるらし、是も一本には「カクゾアルラシ」とあるより論ぜむ。ラシをラムの活きたるといふは聞えがたきことなり。ラムは疑のまゝに大方に思ふ意なるを、ラシはもと疑はしきものを傍に慥に思ひ定むべき證ありて聢と思ひ定めたる意にて、疑の意はやゝ放るればヤカを上に置くべき理はあらぬ筈なり。里見氏の引證は後世のものゝ家集か又は赤人集の如き疑はしき書のみにて、之を信ずべきにあらず、「山姫の」は「袖や匂フラム」とあるべく、「長き夜に」は同じく「更ケヌラム」とあるべし。云々。

此の答書の旨よく當れり。赤人集の歌は萬葉集十卷に「天漢(アマノガハ)梶音(カヂノト)聞(キコユ)孫星(ヒコボシ)與(ト)織女(タナバタツメ)今夕(コヨヒ)相霜(アフラシモ)」とあるをひがめたる者にて、赤人集の如きは實に拙劣支離を極めたる者といふべし天平寶字六年五月高野天皇の詔に此波(コハ)朕劣爾(アガヲヂナキニ)依弖(ヨリテ)之加久(シカク)言良志(イフラシ)上(ト)念召波(オモホシメセバ)とあるも、上にテシのシとありて下にラシといへるを、此等も今の人は惡しくせば「ヨリテヤ」とも言ひ兼ぬまじくや。

第十一　可能動詞に對する標的名詞

物かはり星ぞ移れる世の樣をこの埋木に知られけるかな

山中のいでゆの宿のしづけさに晝も夢路をたどらるゝかな

(前略)ながめられけり朝夕に、なれし故鄕その空を　落合氏、白菊の歌

此等の歌を讀みて別段心に留めぬ人世に多き樣なるが、實は大ぬかりなり出來る意味のルラルを添へたる可能動詞に對する名詞にヲを添へたるは決して無き語法なり。前の三首の歌「世ノ樣モ」「夢路ノ」「ソノ空ノ」と改めたらむには、誰しも其の穩當なるを思ふべし。凡てこの標的名詞はテニヲハなきとガノハモゾヤカナンコソノミシなど主格助辭を添ふる者とありて、處置格(目的格)のヲは決して添はざるなり。

身の上が案じられる　　春の待たるゝ

なほこそ國の方は見やらるれ　　酒ものまる

音ぞ泣かれける　　十里の道や歩まるゝ

何里か走らるゝ　　むだ口なんせらるゝ

君しのばる　　故鄕のみ忍ばる

同じ事こそせられけれ

之を何故に人の誤るぞといふに、口語と他の文語との混同よりするなり。今の口語にては、「飯ガ食ハレン」を「飯ヲ食ハレン」といひても用は辨ずる心地のせらるゝこと一〳〵、次には「食フコトガ出

來ル」と同義の「食ヒ得」「食フベシ」「能ク食フ」などは必「飯ヲ」といふより、それに準じて「食ハル」「食ヘル」にも「飯ヲ」と誤ること是二つなり。今此の兩者を區別せんに、「食ヒ得」「食フベシ」などは何處までも他動詞なれば「飯ヲ」と云ふこと當然なれども、「クハル」「クヘル」は可能相にて自動詞に準ずる者なれば、たとひ同義に歸するにしても「飯ヲ」とは言はれざる道理なり。此の誤今の散文にル極めて多きこと注意を要す。そは今の文は多く漢文讀より出でたる者にて、その漢文讀には、このラルを用うること絶無なるより、自然にこの標的名詞は皆「飯ヲ」の流にヲ一點張なるを、近代可能相のルラルを時文に用うる樣になりても、尙別の動詞なることに氣づかずして、ヲを濫用するものなり。ゆめ〳〵此等に誤らるべからず。御製の

開け行く時にいよ〳〵仰がれぬひじりの御世の高き敎は

といふを、日月帖に「敎ヲ」と書けるは不謹愼なり。(東京朝日新聞に「敎ハ」とせるぞ正しき)

かけ捨てし鏡の面に影ふれて誰ぞやと影を驚かれぬる　景樹

といふ歌も調をなさず。「影ノ」とせむに難なきをや。

第十二　せば

君の爲世の爲何かをしからむ捨てゝかひある命なりせば　新葉集、宗良親王

こは人口に膾炙せる御歌にして、士氣をも鼓舞しつべきものと、おのれは早く思ひ寄りて、さる書

にも揭げしを、此の頃ふと讀み上げ見るに、はたと行き詰りて解くべき樣も無き心地せりそもそも先人は之れを如何に釋しつらむ。一首の意は「命ナルモノ」「命ナレバ」「命ナル上ハ」などあるべきにて、「ナリセバ」にては意味裏表となるべきにあらじか。即「捨テヽカヒアル故デアル、然ラバ何デ惜シカラウゾ、顧ミナイデ奮戰スルガヨイ」の意なるべきを、此の儘にては「カヒアル命ナラバ惜シノハナカラウシカシ犬死ダカラ詰ラヌ」といふ意味に聞えはせずや。いで「セバ」といふ語の意義川例をたどり見む。

およそ順態假定前提法には、(イ)然あるべき者をさらばと言ひ懸くると(ロ)然はあらざる者又然あるまじき者を虛設して若しさらばと言ひかくるとの二種あり此の後の(ロ)種は、前に述べたる「マシ」の意義にて反實の虛設なり。之を言語に表すには

(甲)伊藤公兇手に斃れざ｛らましかば／らませば／りせば｝なほ長く國家の重鎭たらましと樣にいふを正則とし、或は之を略しては

(乙)　斃れ｛ざらむには／ざらば／ずば｝　　斃｛れば／れなば／れてば／れたらば｝

と樣にも言ふべし。されど(乙)の形式は、然あるべき者なる(イ)種をもかく前提に言ふなれば、精密には(甲)式を用ひざるべからず。又近時の俗文には

(丙)　斃れざ ┬ らしめば
　　　　　　└ りし ┬ ならば
　　　　　　　　　└ ならむには

と樣にもいへど、是は歌などには誰も言はぬことなれば、まづ差し措きて可なり。此等の中にて、「マシカバ」「マセバ」の事は已に「マシ」の條下に述べたれば之を略し、「セバ」の用例を見るに、

一つ松人にありせば太刀佩けましを、古事記

梅の花ふりおける雪にまがひせば誰かことごとわきて折らまし古今

吹く風と谷の水としなかりせば春來ることを誰か知らまし古今

などすべて「人ニアラズ」「マガヒセズ」「風ト水トアリ」といふ事實に反したる虚設なり。之を

小黑崎みつの小島の人ならば都の苞にいざと言はましを古今

けふ來ずば明日は雪とぞふりなまし

風と水と無くば誰か春の來るを知らむ

とやうにいふは略言なり。(イ)種の前提を「セバ」にて表すことは例もなく理もなし。さるは「セバ」の「セ」は動詞「ス」の第一變化にて、他の用言の第二變化に之を附くるは、特に或る意味を添へむとす

るよりせる事にて「アラバ」「マガハヽ」「ナクバ」にては(イ)種の前提と區別すること能はざればなり。こゝに念を入れて「命ナリセバ」と續ける例の歌のみを調査するに、

思ひ出でゝとふ言の葉を誰見ましつらきにたへぬ命なりせば 後拾遺

たらちめや留りて我を惜まゝし代ふるに代る命なりせば 千載

ながらへて物は思はじ今のまの憂きに限れる命なりせば 續古今

程ふべき命なりせば誠にや忘れはてぬと見るべきものを 玉葉

限ある命なりせばめぐりあはん秋ともせめて契りおかまし 新拾遺

此の五首皆「云々ノ命ナラズ」といふ事を下にふまへたり。然るに少し後の世になりて

いかゞせん逢ふにかへんと思ふ身のそをだに待たぬ命なりせば 新後拾遺

つれなしと人には見えじ有りはてぬ契にかへし命なりせば 新葉

此の二首は(イ)種前提の意にて、宗良親王の御歌と用法相同じきは如何なる仔細かあらむ。こゝに合せて三首の異なる用例あるを是認せんとすれば、それより以前の幾十の用例を捨てざるべからず。おのれは道理上より且多數につきて、此の南北朝時代のは不用意に誤用せるものと斷ずる外なしと思考せざること能はず。隨つて章首の御歌も畏けれど誤として大方の注意を乞はむと欲するものなり。

かゝる誤用近代に至りては、却りてをさ〳〵見えぬは學問の進めるにやあらむ。たゞ海上胤平翁

の長歌の中に

たま〳〵に人と生れて人の道守らざりせば
梟に等しかりけり狐にもひとしかりけり

とあるは、奇拔とやいはむ、下句に「ケリ」と押へたるなどあまり武斷ならずや。清正を詠じたるに

浪華津の蘆の若葉に吹く風も君いましなばすさまざりけん

是は、想は尋常なるに、惜しき語遣なり。「ナバ」は(イ)種前提にて、「ケム」も事實の想像なり。「君シイマサバスサマザラマシ」とせば合格すべし。「イマサバ」は(ロ)種前提の略式なり。此の前提に完了「ヌ」を誤用せるに對して、直接終止の結に用ゐたる誤もあり

吹き返す風だに無くば葛の花葉かげながらにちりやはてなん

此の「ナクバ」は略式にて可なるが、「果テナム」は是非とも「果テマシ」と反實虛設の想像に言はざるべからず。

第十三 ぬ

一 明治二十年代に國文の勃興せし頃、「ヌ」といふ助動詞の濫用せられしこと今に記憶に殘れるが、近來は歌にも屢さる事の見ゆるなり。これは第一回に略解說せし事なるが、今の口語に「タ」といふは文語のツ・ヌ・タリ・リ・キ・ケリの六つに通ふより起ることにて無理ならぬ様にもあれど、「テ

ヰル」などにも「ヌ」を充つるは妄といふべし。今最心得易く誤の甚しきもの二三を指摘すべし。

老人が生ける敎の物がたり月は若きが面わ照しぬ

こは常盤會詠草中の名ある歌のよし、まこと一寸面白くは誦せらるれど調子の合はぬは耳立たぬにや。此の儘にては「月ハ若イ人ノ面チ照シタ」なるが、「照シテヰル」又は「照ス」と目に見る樣に書の樣に言ふべき語氣の場合にて、「照セリ」として始めて落ちつくべしと我は考ふるなり「秋ノ野ニ道ハ惑ヒヌ」「櫻狩雨ハ降リ來ヌ」「秋ハ來ヌ紅葉ハ宿ニ降リシキヌ」などゝ比較し見れば、其の區別明なるべきをや。

二

そら色の衣を吸はせて君ありぬ椅子のうしろの藤の網代に

あな熱き君が口つけあな眞ひる日は中空にくもりてありぬ

此等は新派某宗匠又はその選にて、眞面目なる人は「アリヌ」などいふべくもあらねど、轉ばぬ先の杖其の理をいはんに、「アリ」といふ存在動詞は、動作的ならねば、完了のツヌタリなどは添はざるもの、口語に「アッタ」といふは過去にて「アリキ」「アリケリ」と云ふ古歌に「アリヌヤト心ミガテラ逢ヒ見ネバ」といふは珍しき例なるが、そは「アリヌベシヤ」の意、「サモアリヌ」なども然り。かくて此の歌、前のは「君居タリ」「君ゾ居ル」にて事足るべく、後のは「クモリツヽアリ」にて可なれど、修辭は拙なり。とにかくにヌは共に不用なるを音數足らずとて強ひて添へたる非事なり。

大木の幹に耳あて小半晌かたき皮をばむしりてありき

前の「アリヌ」と似たるが、キと言へるは實に過去の事を言へるにやあらむ、「ムシリタリケリ」とやうに言ふべき意にや、分らず。

鏡とり能ふ限のさま〲のかほをして見ぬ泣きあきし時

愛犬の耳きりて見ぬ要するに物にうみたる心なるらん

共に恐しき歌なるが、語のみをいはゞ、「見ヌ」は共に「見ツ」とあるべし。こゝは「見ル」といふ動作をそのまゝにとぢめたるにて、動作的に「ツ」と抑ふる定なり。「ヌ」は狀態的に緩に傍觀的に敍事的なるを受くるなり。

時計鳴るいくつと知らずたゞ時の進むを感じ靜やかに居ぬ

板庇かたぶく軒のくらがりにちご泣き居れり秋風の家

ふる里のさぬきといへば鹽けぶり風になびくをのみ描き居ぬ

此の二つの「居ヌ」は「ヲリ」といふべく、中のは「チゴゾ泣キヲル」とあるべし。かくて「ヲレリ」といふ語法は無きことなれど、文部省の許容案といふ者にては俗文に許すことゝしたれば、歌もそれに均霑すとせば、まづ勝手として、「ヰヌ」と「ヌ」を添ふるよりはよく、語氣は正しく表れ居るなり。さて文語「ヲリ」は「居タリ」の義にて、許容の「ヲレリ」に當る。こゝは「ヰル」とのみ言ふべく、「ヰタ」とは言ふまじきこと前の「面ワ照シヌ」と同じ。古歌と誦しあはせて其の意義と語氣と調との異なるを知るべ

し。

一八に似し草ありぬ塚の邊に

これも宗匠の選句なるが、いみじくも振ひたるものかな。「一八ニ似タ。ル。草ア。リ。」の意にはあるまじきか。さもなくば「アリキ」なるべく、音數は別に工夫を用ゐて都合せざるべからず。

第十四　つゝとけり

一　「ツ、」は連用法附屬のテニヲハにして、「ケリ」は過去の助動詞なるに、此の二つを對せしめて題とすること、讀者はまづ見て怪まむか。然り、これは文法上には對位すべき者にはあらねど、修辭上短歌に於いては、此の對比を試みざるべからざる由あり。近く八田知紀翁の

諸人のたもとにかへる春の色は降る白雪も埋みかねつゝ(イ)

といへる歌を、海上胤平翁の「ツ、はケリと言はでは調はず」と評せしは當れりや否や。古き方より檢し見るに、後撰集に、天智天皇御製として載せたる、

秋の田のかりほの庵の苫を荒み我が衣手は露にぬれつゝ(ロ)

は萬葉集卷十に讀人不知として擧げたる「秋田刈る借廬を作り吾が居れば衣手寒く露(ゾ落チタルカ)置きにける」を訛れるならんとの說なるが、原歌のケルをツ、に改めたるは、早く此の頃より、兩者の相通と人の嗜好の異なりしとを知るべし。續いて新古今集の、

田子の浦に打ち出でゝ見れば白妙の富士のたか嶺に雪はふりつゝ（ハ）

は萬葉集卷三の「田子の浦ゆ打ち出でゝ見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」の改作なること知られたるが、此の頃に至りては、歌人の頭腦痲痺して、漠然と此にて意通ずと思ひなしけむと見ゆ。更に古今集に立ち上りて見るに、光孝天皇の

君が爲春の野に出でゝ若菜つむわが衣手に雪はふりつゝ（ニ）

に至りて、「ツヽ」の用法意義始めて尋ぬべし。抑「ツヽ」は動作の重複、反復を表す連用辭にして、固より終止の者にあらず。其の文末に居るは、必別に連接すべき用言あるか、若しくは下に「アリ」などの語を略して繼續存在、進行等の態をなす者にて、此の御製及

山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ（ホ）

などは、第五句より初句に返りて、「若菜ツム」「ワビシケレ」に收る者、

宿りせし人の形見か藤ばかま忘られがたき香に匂ひつゝ（ヘ）

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見えつゝ（ト）

梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつゝ（チ）

などは下に「アリ」を略せるなり。而して、此等の「ツヽ」を口語に譯せば、（ニ）「雪ニ降ラレ〳〵」又は「降ラレナガラ」、（ホ）「サマシ〳〵シテ」、（ヘ）「匂ヒ〳〵シテヰル」、（ト）「見エテヰル」又は「見エ〳〵スル」、（チ）「降リ〳〵スル」又は「フツテヰル」などに當るべく、前に言へる「動作の重複反復」は、必しも間斷なき

を要せざるは、(ホ)(チ)などの例に見るべし。是に於いて(ハ)の歌を見るに、「田子ノ浦ニ出テ見ルト富士ノ高嶺ニ雪ハフリ〳〵シテ居ル」と解する外なく、其の「降リ〳〵スル」動作は間斷ある方の義にても差支なけれど、「打チ出デ、見レバ」といふに對しては、繼續せる動作ならざるべからざれば、如何に讓歩しても事實有るまじき事に歸せざること能はず。(ロ)の歌は「露ニヌレテヰル」又ハ「ヌレ〳〵スル」にて意義は通ずれど、なほ萬葉の原歌も棄てがたし。

二 飜りて「ケリ」の意義を求むるに、是は「キアリ」といふ樣なる意にて、「キ」と過去に言ひたるを「アリ」と狀態的繼續存在的にしたる、繼續存在過去などゝも謂ふべく、又傍寫的間接敍述過去などとも謂ふべき者なり。されば有りし動作を傍寫的に物する物語の地の文などは「皆男アリケリ」とやうに「ケリ」を用うるなり。今(ロ)の原歌に就いて見るに、「衣手寒ク露置キニキ」といふ直接の過去動作を間接に然ありと傍寫して「オキニケル」事よと歎意を含めたる者にて、正に過去なるを「濡レツヽ」と改むれば、現在の事になるなり。(ハ)の原歌も「降リケル」なれば、「フリキアリ」と降れる動作は過去ながら、今に繼續して眞白に見ゆる意にて、好く實景を得たる者なり。之をいかでか過去の意なき「ツヽ、アリ」といふを得べき。凡「ケリ」の本義此の如くなるが、轉じては道理をことわり、其の事を感歎する意にもなる。さるは、物の道理は、過去の經驗に徵し來り、有りし事實は眞理に相違なければにぞあらむ。之を口語に「タワイ」とやうに充て、又「テヰルワイ」といふ現在の感歎をも「ケリ」に充てゝ歎じことわる意を深くするが、早くより修辭上の慣例となれり。是に於いて、「ツヽ」と「ケ

り」とは稍交渉の途を開き、現在の事實をことわりの様に「ケリ」と歎じ言ふことを得るやうになりたるが、さりとて「ケリ」といふ過去事實を「ツヽ」と現在に言ふことは、道理も無く慣用の例も無きこととなるを知らざるべからず、又「ケリ」とことわるも、現在に動作の進行し反復する様に言はざるが、却つて意長き場合に限るなるを忘るべからず。例へば在原元方の

あらたまの年の終になるごとに雪も我が身もふりまさりつゝ（リ）

といふは、「雪モ冬ノ終トテ降リ増リ、我ガ身モ年々ニ舊リ増リ、兩ツノ者ガ同ジコトヲシツヽアリ」といふ意なるを、「ケリ」とことわりては、不倫なる「雪」と「我」とを合類せる作者の感想は沒却せらるるなり。此の歌及前の（ト）（チ）或は甚しきは（ヘ）の歌なども、今の人はやゝもすれば「ケリ」と言ひもし解しもしぬべく恐れらるゝは、あらじか。されば、前の（ニ）（ホ）及井上通泰氏の「君が代は荒野ぞ多くなりにける開けぬ國の御手に入りつゝ」の如く、前に返る「ツヽ」止めには、今の人も誤ること少けれど、下に略語ある「ツヽ」どめは、頗危きなり。

人皆のあはれと聞きし蟲の音も暮れ行く秋を止めかねつゝ（ヌ）

の「ツヽ」は「ナガラ」としても「止メカネ〳〵スル」としても、「止メカネテヰル」としても聞え様なし。「ケリ」はあまり平凡なりとてかくや修せられけむ、覺束なき歌なり。

三　さて今は、（イ）の八田翁の歌を判定すべき時とはなりぬ。此の歌の意は「雪ハフレドモ春色ノ顯著ナルヲ埋ミ兼ネタリ」となるべく、飽くまでも理にかけて反復や繼續進行などの意はつゆ見

えざるを「ツ、」といふべき謂れは何處にかあらむ、論なく海上翁の評に傾聽せざるべからず。八田翁また之を聞かば、推敲の至らざりしと、輕く首肯すべきなり。

亡き妻の形見のちごの霜さゆる夜中に泣けば父も泣きつゝ(ル)

寒くしてねられざりけり宵のまに飲みし寢酒もいつかさめつゝ(ヲ)

雨戸うつ嵐の音もさえ〴〵て長き夜すがらいをねかねつゝ(ワ)

とけてねぬ夜半の枕に響くなり霰のつぶてうち騷ぎつゝ(カ)

大丈夫も今宵は口に出しけり烈しき寒さ凌ぎかねつゝ(ヨ)

火桶かへ衾重ねて冬の夜をいたはる妻も共に老いつゝ(タ)

山陰の草の庵は寒けれど衾一つに夜を明しつゝ(レ)

とる筆も忽凍る夜半も猶盲人は笛を吹きて行きつゝ(ソ)

此等の中、(カ)と(レ)は當れり。(タ)は(リ)の如き意ならば可なれど、「老イタリ」にてもありぬべきか。(ル)は都べて覺束なし。(チ)(ヨ)は共に「テ」といふべき場合なり。(ワ)は「ケリ」なるべし。(ソ)は「行クナリ」なるべし。

第十五　かなとなり

一　四十三年の御歌會の豫選歌の中に

降る雪をまづめづるかな月花のたのしみ長き年の始に

といふは、如何にも好き歌に相違あるまじく、おのれも敬服する所なり。されど度々誦し見るに、「カナ」といふテニヲハは少しいかゞと打傾かれ(「樂長キ」も穩當ならず)試に「マヅメヅルナリ」と改めては如何にと人に問ひしに、贊成すると反對すると略同數なりき。實をいへば、おのれは「マヅゾメヅナル」と言はまほしきなれど、さては今人の口には物遠からむと思ひて、少し俗に砕けて「メヅルナリ」と言ひしなり。其の後又「マヅコソメヅレ」にては如何にと言ふ人あるに、其も一案なりと思ひも寄りぬ。抑「カナ」と「ナリ」とは、意義の頗異なる者なるに、如何なる由ありてか斯くはまがふらん、考へずばあるべからず。まづ「カナ」は、名詞に附きて「夜半ノ月カナ」「山櫻カナ」といふやうに感歎する助辭にて、其の用言に附けるは、連體法の下に名詞を略せるなり。前の「メヅルカナ」も「メヅルコトカナ」の意にて、用言に附くべき性質の者にあらざるは一考すれば、直に悟らるべし。さて此の助辭は、「カ」と「ナ」の複合なるが、「カ」は疑問にも感歎にも用うれど、「カナ」となる時は感嘆のみにて、疑問の意には用ゐざるが、「カモ」と異なる點なり。「ナ」は今の口語にいふ「ナァ」と同義にて、「契リキナ」「移リニケリナ」「見セバヤナ」の「ナ」と同じ次に「ナリ」は體言に附く助動詞にて「ニアリ」「デアル」「ダ」「チャ」の義、卽指定說明なり其の用言に附くは、連體法の下に名詞を略せるなると、前の「カナ」に同じきが、終止法に附けるは、上の語句を一團の者と見て「丈夫ノ鞆ノ音スナリ」とやうに指定するなり。かくいへば、「カナ」は感歎のテニヲハ、「ナリ」は指定の助動詞の區別判然たれど、指定一轉

すれば一種の感嘆となるを以て、終止に附く「ナリ」を感歎なりと說明するより、混同を來す次第なり。感歎の「ナリ」といふことは、便宜上差支なけれど、感歎のみにて指定の義なき者と思ふが誤の本なり。連體用言に附ける「メヅルナリ」にても、「メヅ」に比すれば感嘆強意の義をなすことは、口語に「賞翫スル」と「賞翫スルノヂヤ」とを比較するにて察すべし。(口語「スルノ」「スルン」といふが連體用言を體言にしたる符徵なり)更に之を「賞翫スルヂヤ」「オレハ早ク歸ルダア」と、終止用言に直接に「ダ」を附けて言ふ時は、感歎強意の義更に加るを見れば、「スルナリ」よりも「スナリ」の方感嘆の義切なるが、而も別物にはあらで、唯用法の異なるに因ることを知るべし。こゝに前說を總合して、類似せる場合の「カナ」と「ナリ」とを一言に別たば、「カナ」は提示的感嘆にして、「ナリ」は指定的感嘆なり。されば「サテモ……コトカナア」「コトヨナア」などには「カナ」を用ゐる。「ヂヤナア」「コトデアル」「コトデアルワイ」などの場合には、「ナリ」を用うべきなり。「皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よわきだにせよ」(遍照)は、「ナッタヂヤナア」にて、「女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば」(兼覽王)は、「見エルコトヨナア」なり。「見エルコトカナ」も「見ユルコトナルカナ」の略にて、「カナ」といひても、「ナル」といふ指定の義あるは同じと說く人あり。いかにも從來は皆「ナリ」を補ひて說きしなれど、さては痛く語氣を損ずるなり。我が國語には、指定的に言ふと提示的に言ふと、二つの語法あること近來漸く自覺せらるゝに至り、之を呼喚體の文とか提示句提示文とか稱するなり。

二　若竹の節は白くも見ゆるかな新皮落ちて程なかるらむ

箱崎の浪路はるかに見ゆるかな君が經ぬべき千代の松ばら

前のは愚劣、後のは高崎大人の秀歌にて、明治の歌の幕の内なるべく、竝べ掲ぐるも禮なき心ちすれど、「見ユルカナ」といふ語は似通ひたり。而も兩者共に、「見ユルナリ」とあるべき格にはあるまじくや。兼覽王の歌の「見ユルカナ」とは異なりと見ゆるなり。

有明の月の光とまがふかな曉深く積る白雪

有明の月の光とまがふかな落葉の上における朝露

これは、上句共に同じきは珍しきが、「カナ」は「若竹の」よりは利きたり。されど、「ナリ」とも「マデ」とも言ふべし。

白露の霜となり行く宮城野の木の下蔭の月を見しかな　景明

有明の閨の寒さに寢覺してしづるゝ雪の音を聞くかな

などは愷に動かざる「カナ」なり。凡今人の歌も、五句の「カナ」は大抵聞えたれど、三句切の危きが多し。初心の人妄に學び給ふべからず。桂園派の人、殊に愼むべし。

三　歌はコトワルものにあらずとて、指定すべきを只管提示的にのみ詠ずるは柱に膠するものなり。古今集時代に流行せる「ベラナリ」といふ語は、「ベキカナ」に近き意義なるが、「カナ」と言は

ぬ處に妙もあるなり。「くらぶの山も越えぬべらなり」「はてはもの憂くなりぬべらなり」などに就きて試み見るべし古今集の歌の結末を調べ見るに、「テ」を一として「ツ、」は三、「カナ」は六、「ナリ」は八、「ケリ」は三十位の比例となる。徒に古人の口癖を模すべしとにはあらねど、意義を損ずるまでにシラベむとするも、愚ならずとせず。

さて「ナリ」は、「ケリ」にも「ツ、」にも通ふ如く見ゆることあれども、語は飽くまで混ずべからず。

深山には松の雪だに消えなくに都は野べの若菜つみけり 古今

み吉野の山の白雪積るらし故里寒くなりまさるなり 古今

曉の月の影かと窺へば窓には雪のふり積るなり

此等「ケリ」も「ナリ」も憶に落ち着きたり。「若菜ツムナリ」「ツミツ、」「ナリマサリケリ」「ナリマサリツ、」「フリ積リツ、」など言はれざるにはあらねど、言變れば事また變り行くを思はざるべからず。

附けて言ふ。感嘆のテニヲハは「カナ」の外に、「ヤ」「カ」あり、「さればよな」「人の知らぬよ」「我は思ふよ」などの「ヨ」あり、「契りきな」「咲きにけらしな」「我は戀ひんな」などの「ナ」あり、古くは「ネ」「ヱ」などもあること、初心の人は注意し給へかし。

(明治四十四年二月十五日發行)

附錄二

文法雜纂

目次

助動詞「らむ」の意義

「らむ」は想像(推量)の助動詞だといふことは誰しも知つて居るが、想像には色々の言方があるので隨つて「らむ」の意義を心得かねて誤る人が、相應の學者にもある樣に思はれるで、此の意義を說くには、まづ想像の助動詞の概略の類別をして置かねばならぬ。

一、想像辭の類別

1、む　不定時と未來とに通ずる。
2、べし　不定時と未來に通じ、適當・可能・義務等の意味を含む。
3、まし　過・現・未に通ずるが、多く假定の意味を含む。
4、まじ　「べし」の打消、「ざるべし」「べからず」に通ずる。
5、けむ　過去の想像(無かつた事は假定せぬ)
6、めり　現在、「なり」を和げていふ。
7、らし　現在の事を、或る根據によりて想像する。但「けらし」と過去辭にも結合する。
8、らむ　現在の動作ばかり想像して、未來にも過去にも係らぬ。

かやうに八種ある中、「けむ」「まじ」を「む」「べし」に附屬させれば、六種となる。その「む」「べし」「まし」は未來に係る點で、一種になり、「めり」「らし」「らむ」は未來に係らぬ點で、又一類になるけれども此の六種には其々の意味があつて前の二類に分けた丈では、とても分らぬ。それに今の語では、想像辭はウ・ラシイの外に比況のヤウダやト見エルなどが手傳をして居る位で、簡單になつて居るから、此等の古語は誠に心得にくい。例へば今は想像といふと、ダラウ一點張で通る樣なもの丶、ダラウは文語のナラムにこそ當れ、ムやマシやラムなどにはとてもはまり切らぬ。

二　「らむ」に當る今の言葉

古今集の春上第二に「袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらむ」とあるのを、遠鏡に「袖ヲ濡シテスクウタ水ノ氷ツテアルノヲ春ノ來タ今日ノ風ガ吹イテ解スデアラウカ」と釋し、同第六の「春立てば花とや見らむ云々」をば「春ニ成ツタレバ花ヂヤト思ウテヤラウ云々」と釋してある是でも大體の事柄の意味は分るだらうが、言葉の意味は釋けて居らぬかう。いつては「とくならむ」「花と見てにやあらむ」といふ語に當る丈のことしかし是は宣長先生の惡いのではない、譯し樣がないのだから、遠鏡の端書に色々と辨じて置かれた。それは、

らむの譯くさ〴〵あり。(中略)「いつの人まにうつろひぬらむ」などはイツノヒマニ散ツテシマウタコトヤラと譯す。ヤラらむに當れり。「人に知られぬ花やさくらむ」などは人ニ知ラサヌ花ガ咲イ

タカシラヌと譯す。カシラヌやとらむとに當れり又上にやなどいふ疑問なくてらむと結びたるにはドウイフコトデといふ詞を添へてうつすも多し又「相坂の木綿付鳥も我が如く人や戀しき音のみ鳴くらむ」などは、人が戀シイヤラ聲チアゲテ只管鳴クと譯す。是はとぢめのらむの疑を上へ移してやと合せてヤラといふなり。ヤラは卽やらむといふことなり。又「玉かづら今は絕ゆとや吹く風の音にも人のきこえざるらむ」などの類も、同じく上へ移してやと合せてヤラと譯して、下の句をば一向にオトヅレモセヌと落しつけてとぢむ此等はらむと疑へることは上に在りて下にはあらざればなり。

遠鏡の解釋としては、まづこれ位で濟むでもあらうが、如何にも茫漠としてゐる。それに「らむと疑ふ」などいふ說もよろしくない。疑と想像とは別物である。よし俗の語には同じに言つて分る場合があるにもせよ、言葉の學問の上では明に區別を立てねばならぬ。疑つたらば疑問文、想像したのは只の敍述文で、甲か乙か分らぬことは疑ひ、甲だらう、乙だらうと思ふのみで、斷定されぬことは想像するのである。富士谷成章は「あゆひ抄」には

里「デアラウ」といふ。其の心いづれも、見えたる物と隱れたる理とを合せてよめり。細にいはゞ、人を見て心を知ると、木を見て花を思ふと、草を見て種を疑ふとの三あり。さてらむは人をも受け心をも受くるあゆひなり、人をも心をも顯してよめるもあり、片つ方を省きてよめるもあり、片ひゞきの歌も之に同じ。

萩が花散るらむ(チルデアラウ)小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

(中略)「なるらむ」とつきたるは正しく當てんには里言ゆき合ひ難き故に假に裝(ソヒ)(卽動詞)を受けたるは「ノデアラウ」、名を受けたるを「ヂャモノデアラウ」と當てたり。

など言つてあるが、如何にも粗末で、本書中の他の部分より劣つて居る。その上「たらむ」などいふのまで此のらむの仲間に入れて居る。

三　口語譯は出來ぬ

かやうに古人の說はあるが、いづれも不完全、結局口語に譯すことは出來ぬのだと思ふ。そこで自分は唯解釋丈を付けて置く。

第一　らむは現在(現存する)の動作を想像する。

　憶良らは今は罷らむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ

罷らむのむは未來の動作の想像である。「今は」といふ副詞は事實上では現在の事をいふのだが、言語の上では過去にも未來にも言ふ。マカル動詞がまだ行はれない點から慥にマカラウと未來である。是をマカルデアラウと言つては、マカルを名詞にして其の事實をデアルと指定する不定時の想像となるから意味が通らぬ

泣くらむは憶良が現在家に居つて子が泣く動作中にあるのを想像する語、强ひて云へば「泣イテ

ルダラウ」と完了現在(存在態)の想像に近い之を「泣かむ」ナカウとしては固より通らず、又「泣くならむ」ナクダラウとしては、ナクが名詞即事實となりて動作そのまゝを想像する語氣が現れぬ。

待つらむも同樣「待たむ」「待つならむ」は未來又は不定時の「待タウ」事を指定する想像の「待ツダラウ」「待ツ事ダラウ」となりて待ツ動作そのまゝを想像することにならぬ。ダラウは名詞を指定するダの想像即文語の「ならむ」だといふことを忘れてはならぬ。「なり」は決して動詞を指定するものでない。此の「待つらむ」を强ひていへば矢張「待ツテルダラウ」に近いが、もし「待ッテヨウ」とすると、自己の決意をいふ語か又は未來完了の想像に誤られる恐がある。但しダラウでは語氣のうつらぬことは前同樣。

色も香も同じ昔に咲くめれど年ふる人ぞ改りける

故郷に今宵ばかりの命とも知らでや人の我を待つらむ

あごの浦に船乘すらむをとめらが玉裳の裾に潮みつらむか(萬一、人麿が京に留りて伊勢行幸を思ひて詠める)

すらむみつらむはすみつの動作の現在にあるを思ひ遣つて想像したの、「咲くらめ」は咲く動作は現實にあるが、其の修飾語「色も香も同じ昔に」といふのにかけて想像し「待つらむ」も待ツテルことは現在の動作だが、それを「云々とも知らで」にかけて想像したのである。是は他の想像辭にも澤山例のあることだから略して、玉の緒」に「かなの意に通ふらむ」として十五首ばかりを擧げてゐる、その

久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ

は「あゆひ抄」を始め、通例「ナド」「何トテ」といふ語を添へて解釋して居る。自分の考では、花ノ散ルノハ靜心ナクナラム（語氣ハウツラナイが）といふ樣に言つたもので、ナドなどを入れては歌の意が大變まづくなる樣に思ふ。殊に五十嵐力氏の文章講話に、「此の歌は精確を缺いてる」とやうに言つてあるのなどは最感服しかねる。但しいづれにしてもらむが現在動作の想像であるといふことは明で、誰れもさう思つて居るらしくぼんやりと解釋してる。

第二　らむは現在完了には係るが、過去には係らぬ。

完了を小過去とか半過去など言つて居る人には分らないが、つらむぬらむは完了想像、つべしぬべしは未來完了、けむは過去想像と、ちやんと區別を立てねば、とても日本の文章は解されぬ。

人は皆しづまりぬらむ（徒然草、時頼が宣時を呼んだ處）

昨日までさばかり有りけむものを夜の程に消えぬらむことゝ言ひくんずれば（枕、雪山の段）

誰が王章をかけて來つらむ（古今）

しづまりぬらむはシヅマツタラウと譯してよい。もう寢てしまつたらうと完了したことを想像したのである。もし之れをヌベシとでもしようものならシヅマリ相ナ・シヅマルダラウとやうに未來完了となる。

消えぬらむは、今は消エテシマツタ事は事實であるが、昨日までは慥にあれ程も有つたものを、一

夜の中ニ消エタラウ其の事よといふので、らむは「夜の程に」強くかゝるけむはしを婉曲に想像した丈、之をツラムとしたら昨日の過去にはならぬ

來つらむは、來つることは事實だが「誰ノ玉章ヲカケテ」と想像したので、皆現在の想像である。らむを過去に誤ることは、まづ少いが、誰れやらが

誰が方に靡きはてゝか富士の根の煙の末の見えずなるらむ

を破格だと言つたその理由は、ハテ、のテ(完了)は過去だのにナルラムといつては呼應せぬ故にナリケムと直すがよいといふ說を出したことがあつたと記憶するが、是れは以つての外で、見エスナル動作はハテ、カラでなければ起らぬから、ハテ、と言はねばならず、又ナルラムと現在を想像せねばならぬ。少し似たやうな話だが「玉霰」にある。

〔春や來ぬらむ〕必「春は來にけり」「秋は來にけり」とあるべき歌を初學の輩など詞の艶なるを好むとては「春や來ぬらむ」「秋や來ぬらむ」とよむこと多し。そもけりとらむとのけぢめをも知らぬ程の人はせん方なけれど、是ばかりの事はよく辨へつべき程の人も、折々此の事あるは如何にぞや

立田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ

をタユラムとかタエヌラムとしては、聞えない譯で、隨つて近代の文なり歌なりに未來に用ゐたらむは皆誤とするより外は辯護の法もないのである

さりともとかきやる浦の藻鹽草誰が下り立ちてかづき上ぐらむ(岩倉右府)

行けど行けど行けど松原小松原かくて山路に今日は暮るらむ(佐々木弘綱)

御恵の露あたゝけし來む春はいかにのどけく花や咲くらむ

量り知られぬ樂しさを容れなば渡つ大海も溢れて空をや涵すらむあふれてや空をひたすらむ(新曲浦島)

かういふ例は、いくら有つても正しいことにはなるまい。

四　疑問

とは言ふものゝ、此處に問題といふのは、

かへりごとはいかゞすべからむ、この餅腅もて來るには物などやとらすらむ知りたる人もがな(枕草子春曙抄七卷)

「春は來にけり」は俗語に「春ガ來タワイ」といふ程の意、「春や來ぬらむ」は「春ガ來タカシラヌ」といふ意なり然るに「春ガ來タワイ」といふべき所を「春ガ來タカシラヌ」といひて聞ゆべしやは、よく思ふべし。

何をして身の徒らに老いぬらむ年の思はむことぞやさしき(古今)

此の歌を朗詠には「老イニケム、……コトモヤサシシ」としてあるのは惡い又萬葉集一卷の川島皇子の

白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經去良武

に「一本云經爾計武」と添へてある方も面白くないが、前の歌よりは助けられる點がある「古義」に「經ぬらむ」の方で解釋を下しながら、爾計武にても「いづれにてもあるべし」とあるは詳しくない(此の說あまり長いから略する)

第三　らむは未來に係らぬ

「玉の緒」にある幾十のらむその外自分の見た所では、らむを未來想像に用ゐた例は全くないのである裏から云へば、

(公任が)この女御(詮子)はいつか后に立ち給ふらむと打見入れての給へりけるを(大鏡)

此の殿は御形のありがたく末の世もさるべき人やおはしましがたかるらむとまで見給へりしか(大鏡)

此等は何と說明したら好からうか不定時と見る說もあるが、少し面白からぬ所もあるし、又愚見の及ばない事もあつてかやうな例が澤山あるとすれば、前說が破れるかも知れないので、伏して大方君子の教を仰ぐ次第である。(國學院雜誌第十二卷第三號、所載)

「らむ」について又

本誌第三號に「助動詞ラムの意義」と題して意見を述べた所、先月發行の國學院内の囘覽筆記雜誌「未袁毘支（ミヲビヤ）」に折口信夫氏が色々意見を書いて、「ラムが現在以前の動作にかゝらぬといふは面白い樣だが、未來にかゝつて居るのも澤山ある」と色々の例を出された自分は其の說を讀んで利益も得たから、返答かたがた此に書いて前說を補はうと思ふ。

第一に少し修正したいのは、前には「らむ」が不定時の動詞にかゝるといふのは面白くない心地がする」といつた事である。あれは段々考へて見ると、差支ない、不定時でよろしいのである。何故かといふと、不定時は時に關係なく、動作そのものの丈を代表するのだから、現在動作にかゝるのと同じ關係になるのである。尤もラムが現在想像を表はすが本體といふことは少しも變らぬ。不定時にかゝつたのは本の少々全體の一割もあるまいと思はれる。

次に一般の學者に研究して貰ひたいのは動詞の時である。時の解釋が違つて居ては此の論もつまり出來ぬのである。折口氏の現在でないとして呈出された例の中半分は立派な現在と思はれるので、他の人の爲めにもと次に解釋を試みて見よう。

萬葉五　たらちしの母は目見ずておほゝしくいづち向きてかあがわかるらむ

このラムはイヅチに強くかゝり、ワカルは現在の動作、ドッチへ向イテ別レヨウゾ、別レルコトデアラウゾ等に近い意味である。

躬恒集　今日暮れて飛鳥の川の川千鳥今いくせをか鳴きわたるらむ

此のイマを未來にかけて見るがよいといふ折口氏の考だが、それは慥かに惡い。しかしさういふ考の人もあつたと見えて、一本にイク瀨チカをイクトセカにしたのもあるそれがどうしても正しいとなる時は、此のワタルは不定時に變る。「ならむとすらむ」といふやうにあるムトスラムの場合は皆不定時である。

友則集　初時雨ふれば山べぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ

時雨ふれば紅葉する定だによつて、時雨と同時に紅葉する現在の動作を何方が先にと想像したのである。

人麿　柔膚すらを劒太刀身にそへ寢ねば烏玉の夜床母荒良無（初瀨皇女に上る長歌の一節）

前に「ソヘネネバ」と確定に言つてある所から推しても「アルラム」はアレテヰルダラウ位の現在想像に見なければ此の語は解かれぬ。一本に「何禮奈無」としてあるのは惡い。

紫式部日記　讀みしふみなどいひけむもの目にも止めずなりて侍りしに、いよ〳〵かゝること聞き侍りしかば、いかに人も傳へ聞きて惛むらむと恥しきに、云々

是もドンナニ惛ンデルダラウ位の立派な現在想像である。うつかりすると未來でも分る樣に思

はれようが、それでは筆が死んでしまふ。

忠岑集　水かげを得にける松はいとゞしく波の上にや生ひまさるらむ

水影を得にける松は確定完了である。その生ひまさつて居る所をイトヾシクと言つてラムと想像したのである。次に不定時のは

土佐日記　親やまほるらむしうとめやくふらむ

之を未來にマボリナムとかクヒヌベシと言つて分らうか。此等の時に不定時はあるので、マボルコトデアラウ、クフダラウなどにまづ近いのである。

古今十八　世を捨てゝ山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ

同　十九　ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ

前のナホ憂キトキは不定時で、隨つて後の行くらむも不定で、主としてラムはイヅチにかゝる。事實は未來に起るべき事にしろ、語は未來になつて居らぬ。この點はよく考へなければならぬ。意味丈ならば「イヅチ行ク」とラムを取つても分るが、ユクは矢張不定。又「イヅチ行カムトスル」とか「イヅチ行カントスラム」としても、スルスラム共に不定時で、未來の動作を表す語はどうしても出て來ない。後のナルラメも事は未來で起るべきだが、さりとて之をナリナムとしたら意味は分つても語は大變違ふであらう。此の點に注意して見ると、ナゲキノ森トナルコトダラウヨ位の意味で未來想像にはならぬことが分る。

躬恒集　秋の夜のあはれはこゝにつきぬれば外の今宵はつきなかるらむ

拾遺十七　世をうみて我がかす糸は七夕の涙の玉の緒とやなるらむ

古今四　秋萩にうらびれをれば足引の山下とよみ鹿の鳴くらむ

此等のラムは皆不定で、ナカラムとかナカリヌベシとか言ひ換へても、それは想像は想像だが未來といふべきものではない。(形容詞に時はない)ナリナムは未來だが、意味は分つても面白くない。此のナルラムナクラムを脚結抄流に譯して見ると、「ナルコトダラウゾ」「山下トヨミテ鹿ノ鳴クデアラウコトヨ」などゝなるので、「脚結抄」の解は大抵よい樣だ。結局不定時の動作卽事實として想像するより外に、ラムは動作の未來を表すことが出來ぬ。

なほ愚說に誤がありましたなら、どなたにも御指摘下さる樣に厚く願ひます。

（國學院雜誌第十二卷第六號、所載）

「ごとし」の論

一　「ごとし」は助動詞と定むべきか

「ごとし」は祝詞・宣命・記・紀・萬葉の古より明治の今日まで用ゐ馴れたる言葉ながら、其の意義及文法上の位置につきては、昔より等閑にせられたり。今まづ文法上の論より言はむ。

本居翁及その流の人には此の言葉を論じたるを知らず。富士谷氏は「あゆひ抄」の十二身の終に收めたる、ともかくも好き思寄なり。されど此に謂はゆる「あゆひ」といふは今の助動詞・てにをは・接尾語を混同したる名なれば、今の代には用ゐるがたし。其の後の語學書には取り立てゝ言ふべき者なきが、近く大槻氏に至りて、助動詞・てにをは・接尾語の別を立て、「ごとし」を助動詞の中に收めたるは一段の進歩と謂ふべし。

爾來諸學者に襲用せられ、我も亦久しく此の說に從ひしが、近來漸く其の當否を疑ひ、昨三十九年九月以後は改めて一個獨立の特殊形容詞として之を說くこととしたり。今其の理由を述べて大方の批判を乞ふ。

二　助動詞の二種

助動詞といふ新名目には二種の義あり。一は動詞を助くる者にて、否定・想像・希望・完了・過去等皆動詞に附屬する者、一は助くる動詞の意義にて指定なり・たりと比況ごとしとなり。而して前者と後者とは、所屬其の他此の如く異なるに、等しく助動詞と定むるは、共に獨立詞にあらず、而も活用あるに因ること、是萬人不言の中に默認する所なるべし。此の標準固より捨つべからざれども、ここに一考を要することあり。そは凡そ附屬辭は、「てにをは」と助動詞とを問はず、必ず一定の所屬あることなり。

前者即動詞に附屬する者は論なし。後者のナリ・タリは名詞・代名詞等體言に附屬する者にして、其の動詞・形容詞の第四變化に附屬するは連體法の下に體言を省略せる者に附屬するにて、決して動詞・形容詞等の用言に附屬するにあらず。是は口語のダ・デアルなどに比して考ふれば誰しも了解し得べきこととなるが、一派の人はナリ・タリを以て獨立詞と立てむとするもあるべし。此に就きては文章論の上より少しく言ふ所なかるべからず。

(イ) 正成は（主語）　忠臣（客語又ハ補語）　なり（敍述語）

(ロ) 正成は（主）　忠臣なり（敍）

(ハ) 正成は　忠臣に（客又ハ補）　あり（敍）

(ニ) 正成は　忠臣で（客又は補）　ある（敍）

(ホ)正成は　忠臣（客又ハ補）　だ（敍）
(ヘ)正成は　忠臣だ（敍）

此の例にて(イ)(ホ)の如く說明する人はナリ・ダを獨立詞と見るなるべし。もしナリ・ダを附屬辭の助動詞と見ながら此の見を立つとせば、我が國語の助動詞は西洋語の助動詞の如き者となりて、國語の性質には適はぬものとなるべし。さりとて又ナリ・ダを獨立詞と見るはニアリ・デアルと混同するものにて、事實上は相違なくとも、言語の上よりは何分にも首肯し難し。事實と言語とは一致することもあれど、必しも然るにはあらず。此の關係を輕んじて事實意義のみを見ては到底言語は解すべからず。故に余は「文の成分は詞或は詞辭相合せる者なり」と定め、附屬の辭卽てにをは助動詞等は一成分たること能はざる者とし、前例に於いては(ロ)(ハ)(ニ)(ヘ)の說明法を取る。ナリは遂に獨立詞たること能はじ。(タリも之に準ず)是に於いてナリ・タリの體言所屬辭たることは定りたるべし。ナリは又動詞第三變化に屬することあり、咏嘆のナリといひて指定のと分つ人多けれど、實は同物なり。(國學院雜誌にて岡澤氏も論ぜられたりきと覺ゆ)

殘れる助動詞「ごとし」の所屬は如何に。或は連體を受け、或は領格を受くること不規則千萬なり。左に見よ。

(イ)年月は　流るゝ　ごとし

(ロ)心　空しき　ごとし
(ハ)花　雪の　ごとし
(ニ)愚　我が　ごとき　者
(ホ)年月　流るゝが　ごとし
(ヘ)心　空しきが　ごとし

(イ)(ロ)は動詞・形容詞の連體法に接し、(ハ)(ニ)は名詞・代名詞の領格に接し、(ホ)(ヘ)は連體法にガを挾んで接せり。かくて此の言葉は體言に附屬すといはむか、用言に附屬すといはむか。はた助辭に附屬すといはむか。「てにをは」の互に結合する者はあり、又助動詞に附屬する「てにをは」はあれども、「てにをは」に附屬する助動詞は有るべくもあらず。體言もしくは用言に附屬する助動詞はあれど、兩者に附屬するものは此の外に有るべしとは覺えず。名詞・代名詞に附屬する「てにをは」はあれど、「てにをは」を附して格を表したる名詞・代名詞に附屬する助動詞といふもの有るべきか。動詞・形容詞に法あり。法を表す爲に附屬する「てにをは」バ・トモ・ド・ドモは有れど、法に附屬する助動詞有るべきか。國語の助動詞は動詞の如く直說(終止・連體・連用)命令・前提の三法の一もしくは二もしくは三を有して、動詞に附屬する時は全體の法を此の助動詞にて引き受くる事なるに、連體法に附屬する助動詞あるべきか。(大槻氏がズ・ム・マシ・ベシ・ラム等を某々法に附屬する者の如く說けるは取らず。そは只第一變化第三變化等の形に附屬せるなり。助動詞の附屬する動詞本體の法は說くべか

らず)余は皆之を非認す。

然らば「ごとし」の用法に於いて何等か一貫の理法存せりやといふに、すべて連體詞に接せるを見る。連體法の動詞・形容詞は連體詞なり。領格の名詞・代名詞も連體詞なり。ホ)(ヘ)の例に於いて流るる　空しきは下に體言を省略せる名詞にしてガを添へたる領格名詞の連體詞なり。連體詞の下に接する言葉は必體言ならざるべからざるは國語最要の制約なり。誰か之に對して異言を挾むべき。誠に「ごとし」は體言なり。さては體言の助動詞といふ者あるべきか。助動詞は活用ある者といふにあらずや。然り「ごとし」には活用あり。さては體言にして活用ある者あるべきか。乞ふまづ之を解決せむ。

三　半體半用の語

體言にして活用ある者あり。オトナは體言なるが、「大人(オトナ)シ」とシク活をなす。「事々(コトゴト)シ」「物(モノ)シ」「業々シ」等皆此の例なり。アキラカは體言なるが、アキラケシ、アキラカナリとシク活ナリ活を成す。「靜ナリ」「ノドケシ」の類皆是なり。「奇麗」「結構」は體言なるが、ナリ活をなす以上、皆體言にて活用ある者なれど、熟して形容詞をなせば、純然たる用言の用法にして連體語に接する體言の資格を失す。

「夜ノシヅケサ」といふ時はシヅケは夜を敍述せる用言即形容詞なるが、シヅケサといへば體言となる。此の如きを前用後體の詞といふ。其の例極めて多し。「花ヲ見ニ行ク」、「義經賴朝に哀訴ノ

事」「深ク心配ハ無用ナリ」の見哀訴心配は上の詞に對して明に動詞卽用言なるに、下のニノハに對しては又明に名詞體言なり。「ワレヲオモヒ顔ナリ」「大船ヲコギノス、ミニ」など皆然り。一詞體用を兼ぬるは有るべきことなり。然れども他は皆前用後體なるに、此の「ごとし」のみは前體後用なるは、珍中の珍といふべし。そもそも又前體と見たるは僻目か。しばらく「ごとし」の意義を釋して之を檢せむ。

四　「ごとし」の意義及語源

「ごとし」は今の口語九州邊にては尚「ゴト」「ゴトアル」など用ゐらるれど、一般には「樣ダ」といふ。文語にも亦「樣なり」といふ。その意義全く相同じ。「樣」はサマにて字音ヤウなるが、本源の名詞たることは言ふに及ばず。されど「花雪の樣なり」「年月流るゝ樣なり」と用ゐる時は「樣ナリ」をナリ活形容詞と見るが穩當なり。何となれば此の時は事物の名を表さずして狀態形狀を表せばなり。但し此をも名詞と釋くこと能はざるにあらず。

花は（主(總主)）　（その樣は）（主）　雪の（修）　樣（名）なり（敍）　〔敍述句〕

年月は（主）　（その樣）（主）　流るゝ（修）　樣なり（敍）　〔敍句〕

此の如く見れば「樣ナリ」の「樣」は「ソノ樣」の「樣」を敍述せる者にて、名詞を以て名詞を敍述せる文となるなり。此の釋法極めて正しくして眞なり。されど今の人の腦裡には此の如く精確なる觀念あるにあらずして、只その狀態を言はむとして言ふなれば、形容詞と見るが最當れり。此の「樣」は上詞に接する法全く「ごとし」に同じく、前體後用の形容詞なり。さらば「ごとし」のゴトは「樣なり」の「樣」の如く根源は名詞にあるまじきか。

雪{の／が} 降る{事を／樣に} 望む

風を 引かぬ{事を／樣に} せよ

かゝる{事／樣} ならば 早くより 勉強すべかりき

水の 流るゝ{事／樣} に あり

此の諸例を見るに、コトとサマと意義甚近からずや。只コトは事物・動作を直指し、サマは其の樣を婉曲に間接に指すにあらずや。コトの明に有樣を表すは左の副詞の例にて知るべし。

長く 雨 ふらず　　美しく 咲けり

長いこと　雨　ふらぬ　　　美しいこと　咲いてゐる

速く　走る

速いこと　走る　（急々如走）

體言の副詞は此の「○○コト」の外にも例多し。而して此の「○○コト」は皆狀態を表す。而して漢語の「○○如」の「如」が之と一致するは極めて奇なり。「突如」は「突ナコト」なり。「勃如」は「勃ナコト」なり。此は蓋し偶然にはあらじ。

「事」の「コト」が如何にして濁音「ゴト」と成れるか。カマ(蒲)をガマといひ、ヒキ(蟇)をビツキといひ、カヘル(蛙)をガヘルといふ。清音の濁音に變れるは珍らしきことにあらず。而して一歩を進むれば、此の「ゴト」も古は「コト」なりし者の如し。

萬葉七　殊放者奥從酒甞云々

同十三　琴酒者丹於嘗

同十　如是有者何如殖兼山振乃止時喪哭戀良久念者

古今春下　ことならば咲かずやはあらぬ櫻花見る我さへに靜心なし

同戀五　ことならば言の葉さへも消えなゝむ見れば涙のたぎまさりけり

此等の「コトサカバ」「コトナラバ」の「コト」は「如」の意なること「顯注密勘」の說を始として鹿持氏の萬葉古義に殊に精しく說かれたり。如何にも然らでは說き兼ぬるなり。鹿持氏は又允恭紀の「許

等梅涅麼波挪區波梅涅孺」の「コト」も、源氏帚木、品定の「ことが中になのめなるまじき人の後見の方云々」の「コト」をも「如」なりといへり。(詳しくは古義を見よ)それもさもあるべし。是に至りて余は一層「如」の「コト」が「事」の「コト」と同言なるを主張し、更に「異」「殊」「特」の「コト」をも同語なりと言はむとす。

さあ　事だ(異變ナリ)

特に　(事ニ、事トシテ)然リ

(態と(故意ニ、業ト、專業トシテ)言はず)

獨立詞は　附屬辭と　異なり(事ナリ、事ナキニ非ズ)

極端は相近し。同一根より反對の語を生ずる例は極めて多し。此の三例を見ば、我が言の妄ならざるを知るべし。

五　結論

前節に於いて「ごとし」の「事し」にして「樣なり」と同義なるを悉せり。而して「樣なり」を形容詞とすれば、「ごとし」も形容詞なるべし。大槻氏の「別記」に、

「何のごとし」「何がごとく」ナドノ用例ニ據レバ獨立ノ形容詞ナルガ如シ。然レドモ一文ノ冒頭ニ用キラレザレバ(語首ノ音モ濁音ナリ)尙助動詞ナルベシ。

と書かれたるは、學に忠實なるものなるが、余は之をナリ・タリに比して、それと同列に置くを欲せず。よし文の冐頭に用ゐられずとするも、そは此の言葉の本來の性質にあらず。「コトナラバ」の例を思ふべし。（漢字に「君子哉若人」とあるも同例なり）〔二〕に於いて論じたるが如く、助動詞とする時は其の所屬の點に於いて甚しく助動詞の性質を損するを以て、その外に排出せむと欲す。且ナリ・タリに比して文章論上より見むか、

年月は（主）｜流るゝ（修又ハ補）｜ごとし（敍）（樣なり）

花（主）｜雪の（修又ハ補）｜ごとし（敍）（樣なり）

と獨立詞に釋するが至當なるを覺ゆ。形容詞には特殊なる者多く、特別に說明せざるべからざる者此の外にも多しとすれば、文法上取扱の便宜も亦失ふ所あらず。其の稍附屬的意義あるは余も十分に認知すれども、助動詞風なりといはむよりは寧ろ接尾語風なりと言ふが妥當なるを思ふ。

雨ガ　降ル　相｜ダ

人ガ　來ル　筈｜積｜ナリ

來デハ　ナラヌ　譯｜ナリ

等の相・筈・積・譯も名詞より出でて形容詞的接尾語的に用ゐらるゝ者にて相類せり。

「ごとし」の特殊なる點は又活用にあり。今初學に之を圖示す。

第一變化	第二變化	第三變化	第四變化	第五化變	第六變化
○	ごと ごとく ニバ	ごとし	ごとき	○	○
ごとくなら ムズバ	ごとくなり キ	ごとくなり	ごとくなる	ごとくなれ ドバ	ごとくなれ
ごとから バムズ ごとけ ム	ごとかり キ	ごとかり	○	○	○

カリ活の第四・五・六變化は用例なかるべし。

余が說は思はず長談義となれり。之を煎じ詰むれば、

「ごとし」は接尾語的に用うる特殊形容詞なり。

となり。（國學院雜誌第十三卷第一號所載）

日本語の動作と狀態

序‖あり‖す‖ず‖つ、ぬ、き、けり、めり、べし‖主格と賓格、助辭「の」‖能性動詞の目的‖狀態的の敍述語の容語

序

「動作と狀態」といふと、動詞と形容詞の論に思はれるかも知らんが、問題はなか〳〵大きくて廣い。外國の文では是がどんな關係になつて居るか、詳しいことは自分には分らんが、日本の語は特別に此の事が大切である。是から論ずるのはたゞ八ヶ條の事であるが、此の方面から十分研究したらば尙面白い事實が擧つて來るかも知れん。自分が此の事に氣がついてから、十年ばかり、之を解剖刀として日本語をためして居るが、隨分切れ味が善い樣に思はれるので、一般に使用したならばと。

一　あり

作用言と形狀言の論は維新前から相應にあつたことで、「あり」を作用言とするのは惡い。むしろ形

狀言に入れろ」といふ說は道理のあることであるけれども詞の分類は單に性質一方でされるものではない。形態の關係も見て便利に取扱はねばならんものだから、存在を表すこのありを動詞に入れて置いたとて、あながち不合理ともいはれない。一體ありは動作的の意もあり、狀態的の意もある。

あの　人は　金が　ある

鴨には　水搔が　ある

などは無論狀態的の書方であるが、しかし其の中に動作的の意もないではない。「金をもつ」「蹼をもつ」といふやうに動作的にもいはれる。それは丁度漢字の有をありともも(つ)とも訓ずる樣な譯である。此のありと同類の良行變格の居り侍り異なりなども餘程早くから四段活に誤られてをるのは皆動作的の意に近く人が解釋するから、自然にさうなつたものかと思はれる。良行變格に再轉して全現在を現すのは四段活と佐行變格とに限つてをるのに、普通の人は　居れり　侍れり　異なれり　などともいひ相に思ふ。それは多少道理のある事と自分は思ふ。現に、僧正遍昭の

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな

のをれるは「折れるでは無くて居れるだ」といふ學者もある位である。狀態的の方はいふまでもない。形容詞と結合して　よかり　よからず　よかれど　などいふのは皆此の爲で、又久活・之久活の第五變化の　けれも　あれ　の結合、卽　けれの變形に相違あるまいと思はれる。

二　す

佐行變格の　す　は他性の動詞で最動作的の語であるのに、不思議にその意味が消えてしまつて狀態的に用ゐられることが多い。

　さすれば——さあれば

　而して——而ありて

　さうすると——さうあると

　忙しくあり風も引いて居りするから行かん——……をりだから

　むげに弱るやうにし給ふ——弱るやうなりの敬語

　皎々として——皎々とありて

助辭の　して　は本來は動詞だが、ありて　を强める爲に用ゐられて、そして其の意味が消えて助辭の樣になつたのである。

　山高くして——高くありて

　我が身ひとつは元の身にして——身にありて

　土佐の國にして死にたり——國にありて

す　は又　あり　の樣に　もつ　といふ意になることがある。そして第二變化に　て　を添へて

矢張助辭のやうに。

手して書く＝手をもちて

人して云ひ遣る＝人をもちて

「一人して行く」「二人して動かす」などのは　行く　動す　の動作を前に言つたものだらう。もつ　とは解かれない。使性の動詞にかゝる名詞につく助辭　をして　は　もちて　の意味でし　が強いから　を　と受けたものであらう。

人をして之を殺さしむ＝人をもちて

す　の動作的の意味が失せて只語を強める爲に使はれることがある

夢と知りせばさめざらましを

此の　せば　に過去の意味があるやうに說く人もあるけれども、自分は取らない。口語の「知りはせん」「しはせん」などと同じに、居體言の下を佐變で受けたものである。

余を頑なりとや誹らむずらむ

彼は敵にてもあらむずらむ

これは「風吹かむとす」「遂に雪とも降らむとすらむ」など始は實辭だつたのが、つまり其の意味が消えて强めの語になつたのである。

す　といふ他性動作的なのを　あり　なる　など自性狀態的に言ふことがある。

出御あり、 出御なる――出御せらる
下向あり 下向なる――下向せらる

これは敬語であるが、自然にさうある、さうなる樣に狀態的に言つたもので、 せらる の被性が能性となり又敬性となるのも、 すよりは遙に狀態的なのである。

三 ず

助動詞の動詞的か形容詞的かを詮議することは普通の文法には入らんことだが、詳しくすることには矢張一應は調べて見なければならん。其の中で曖昧なのはこの ず である。 ずぬね の變化の模樣は動詞的だが、第三變化よりも第四變化より

○ ず バ、テ シテ ケリ ず ぬ ね

ざら バ ム ざり キ ケリ ざり ざる メリ、ラム ベシ、ラシ ざれ

も想像の助動詞に續かない。 して といふ助辭は前に言つた樣に動詞のものだから、形容詞の副詞法を承けるので動詞からは續かない法だのに、 ず は して に續く。そんなら狀態的かといふに、古文には「若かずけり」など第二變化から けり を承けてをる所は動詞的であるが、それは特別の例であつて、ない と打消す語だから矢張狀態的の語で、形容詞の樣に副詞法となつてば

て　して　など承け、又は副詞句を造るものと解釋するが至當だらう。

四　つ、ぬ、き、けり、めり、べし

つきめりは動作的で、ぬけりべしは狀態的である。これは日本の文語で一番むづかしい助動詞だから、少し丁寧に說明して見よう。まづつとぬは時が少し違ひはせんかといふ疑もあつて、多少はさうかとも思はれるが、矢張時は同じである。之を簡單に說くと、動作的と狀態的の一言で濟ませられる。尙いへば、つは急に強く、ぬは緩に弱い。つは殊更にする意があり、ぬは自然になる意がある。之を自他で區別しても大抵は當るけれども、自他は動詞の固有の性であつて動かないのに、つぬは其の時のいひ方次第で自他兩方に附くから、どうしても其のいひ方かき方について動作的狀態的と區別せねばならぬ。

日高くさし昇りぬ(傍カラ見ル狀態)
けはしき山を登りつ(ソノ方カライフ動作)
時鳥鳴きつる方(動作ヲ直ニ)
去年は立夏の日より鳴きぬ(他カラ記載スル狀態的)
殿におはしましして泣音に臥し暮し給ひつ(フシ暮シタ人ノ動作ノ上カラつトイフ)
浮きぬ沈みぬ漂ふ(浮ク沈ムヲ自然ノ狀態ト見テ)

立ちつ居つ待つ(立ッ・居リチ動作的ニ)

立ちぬ居ぬおよびさしなど(コレハ狀態的ニイツタノミ)

夜明けぬ(アタリマヘ)

夜明けつる程は云々(動作的)

つぬにべしをつけて見ると又よく分るつべしはされる意、ぬべしはし相な意(したい位にもなる)

見つべし(見ラレル)　謂ひつべし(イハレル、イツテヨロシイ)

雨降りぬべし(フリサウナ)　殆動きぬべし(動キサウナ)

讀みつべくば早よめ(ヨマレルナラ)

てばなばてむなむてましなましてけりにけりなど皆これでよく說明される。尤日本語も近來は此の歪現在のつぬの所をたりで表し、又は助動詞を用るないで、書く　書くべし　書かば　書かまし　など粗末にいふ事になつたから、此の區別が大變むづかしい。自分の書いたものゝ終に「誰某識しぬ」など書くのも無理はない樣なものゝ、こんな時にはどうしても「識しつ」でなければ通らんのである。源氏の胡蝶の巻に詞と歌とでつぬの用る方がある。

きのふは音に泣きぬべくこそは「わが宿の梅のほづえに鶯のねになきつべき戀もするかな」鶯の鳴いたのは動作的になきつである。それを受けて泣かれる程の戀をすることぢや。さてその樣に昨日は泣き相であつたといふので、このぬべくつべきがはつきりと分る。それから

き　けり

日本語には單の敍述文と對話文とあつて、對話の方は直接に話すもの、敍述の方は事柄として他から記載するものである。それで過去の時などにも大きに關係がある。物語などの地(チ)の文は敍述で詞(コトバ)は對話、直接の對話體では動作的になつてきを用る、間接の敍述體には狀態的となつてきありの樣な意味のけりを用る。つぬも矢張さうで、つは對話に多く、ぬは敍事に多い樣な傾もある。で、大抵の歷史などは此の間接狀態的の敍述法だが、古事記・大鏡などは對話式で、きで持ち切つてをる樣子がある。源氏物語の始に

すぐれて時めき給ふありけり

とあるのは物語の地の正則だが、又時には

始よりおしなべてのうへ宮仕し給ふべき際にはあらざりき

とやうに、此の文を對話式に代へてをることもある。これは前後の語勢から起つた變則である。それでけりの方には繼續態の意味もあり、轉じては全現在にも用ゐられ感歎辭にもなることがある。それは皆動作的でないからで、きししかには決してそんなことはない。

君が名も我が名も立てじ難波なる見つともいふなあひきともいはじ

夜舟ひくよどの舟人はからるな招くは岸の尾花なりけり(景樹)

さをしかよ招く尾花にはからるなねらふさつをの弓末見ゆなり(頓阿)

此等は皆對話的で始のは全現在のつと過去のきとでよく整つてをるが、景樹のけりは全く無意味で語にならない。是は後の歌を下手に燒き直したので、つまり景樹などはきけりの別などいふことにはちつとも頓着が無かつたのである。末摘花に

故常陸の親王のすゑにまうけていみじうかしづき給ひし御むすめ心細くて殘り居給ひたるをことの序にかたり聞えければ

地の過去のけれ、それに對する現在のたる、けれに對するしとよく揃つてをる。次に　めり　べし、めりは見エアリの約など昔からいつてをるが、自分の考では、此の兩の語の原はべらべみなどのべでそれが狀態的になると久活に活き、動作的存在的になるとべがめとなつて良變にめりと活くと說く方が分りよいやうに思ふ。　それで　つぬとの接續を見ると參考になることである。それは動作的のめりには動作的のつが續いてめりつるともいふが、狀態的のぬがつゞいてめりぬるといつた例がないことである。そのやうにたりもつは普通につゞくが、たりぬといふことは滅多にない。是で助動詞の動作的狀態的といふことかざつと分つたらうと思ふ。

五　主格と賓格　助辭「の」

がは主格に接き、をは賓格につく、此の點から見ると、區別が如何にもはつきりして居て少しも紛れない樣だが、少し奥にはひつて見ると、案外千萬、「てにをは」ばかりではなかなか解けない。

我は酒を好む　　　　　酒が好きなり
酒は嫌なり　　　　　　酒の嫌になる藥
酒を欲す(要す)　　　　酒(が)欲し(入る)
餅が食ひたい　　　　　ふぐは食ひたし命は惜し(命を惜む)
友を訪はばや　　　　　國害を除かなむ

此の十の例で、賓格な筈の語ががとものとも變じて居るが、それををに更へることは出來ない。何故かといふに、がののついた目的語の下は必形容詞又は狀態的の語で、をの下は必動作的の動詞に限るからで、して見ると同じ目的語でも狀態的の語の上にある時は賓格とはいはれない。賓格は動詞の處置を受ける格であるのに、形容詞は物を處分する力がないから、無論又主格ではない。して見ると副格(第三格に)と極つてしまふ。卽がは主格の外に狀態的の語の目的を表して副格となるのである。こゝに又一の特例がある。「たし」といふ助動詞のついた動詞は結合した上で、動作的にも狀態的にも、言ふ人の心持次第で變る。

「餅を食ひたい」は「食ひ」を重く取り
「御話をしたい」はしを直接に「御話を」に續け

たもので、「食ひたい」「したい」を結びつけて「餅」「御話」を承けると「が」に變るのである。これは日本語にとつて特別な性質で、極大事なことであるのに、是まであまり人の論じて居ないのは、漢文直

譯體の文章に此の樣な例の少いのと、今一は西洋語の形容詞との區別がよく分らんでをつた爲だらう。

の｜といふ助辭が動詞の目的語に添ふことがある。例へば保暦間記に

諫言の｜用ゐず　　謀叛の｜起し

禁中の人々隨分朝恩の｜蒙る程に

先陣の｜仕る　　鳳輦の｜さしよせ

鎭西の者共義經に相從ふべき旨院宣の｜給はり候はゞやと申されければ

三十餘年の｜經て今始めて見給ふ

三河物語に

御恩之｜報ぜんこと　（各鐙が｜合）

後之世に御譜代之御主樣之｜しらせん爲に

謠曲・狂言などに

同道の｜致さう　　酒宴の｜設けて

興行師の口上などに

藝當な｜致させます　　御機嫌な｜伺ひます

などゝある「の」は「が」と同じで、轉じては「な」ともいはれる。かやうな語は理窟の上から見ると、一寸

をかしい、間違であり相にも思はれるが、しかし日本語では其の時の語氣次第で言はれんことも
ないのである。だから、是も一の法として說明しなければならぬ。
中古文には又少し變つた「の」がある。源氏物語に

夕貌　この扇の尋ぬべき故ありて見ゆるを
乙女　この君のきのふけふのちごと思ひしを
同　大殿の太郎君の試み給ふべき故なめり
若菜　忍びたる御ありきのいかゞと思ひ憚りてなん

などあるのは今の文ではまづ「を」と書く所だ。尤第一の「扇の」は「見ゆる」にかゝるのだから、「を」で
はあるまいとも謂はれるが、矢張「尋ぬ」にも餘程密接になつて居る所は「を」の格なのである。

菊を植ゑたる畑　菊の植ゑたる畑(菊の植ゑられたる畑)

これでも今文は第一の「を」の方が多いけれども、中古文などには第二の「の」も隨分多くある。平治
物語に

科なき母の命の失はんことの悲しさ

なども皆此の例で、下を狀態的に言ひなした心である。
又此の「の」の反對に

あるじをよそなる振舞

足を空なり
能をつかんとする人
上を下にて惑ひあへり

などいふのは「主人を外にする」「足を空にす」「能をつけむ」「上を下として」と續く其の動作的の語を狀態的に變じながら、目的の語をば元の儘に殘して置いて意味を持たせる修辭法である。此の修辭法からして自他混合の誤謬と間違へられ易いことが往々ある。修辭上自然に有るべき法だから、文法でも誤謬とはされない。

日本歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける

これを間違だといふ人もあるけれども、それでは面白い日本文は出來まいかと思はれる。自分は「人の心を種にて」といふ場合をも認めるから。

六　能性動詞の目的

能性(可能・勢相)の動詞の目的語にはがのはもぞやかなんこそなどのつくのが本體である。中古位までの文には「を」と承けた例がない。今の口語では稀に「本を讀まれない」とか「酒を飲まれない」などともいふが、それは「讀む」「飲む」といふ他性の動詞を主にしてそれに引かれるので、能性動詞の方からいふと宜しくない。かやうな法は今でも三分通位しかあるまい。能性は直接に動作するの

ではなく、たゞその事が出來るといふのを現すのだから、畢竟は狀態的の意味に歸するからであらう。

亡き人の事をしのびて泣く
亡き人の事のしのばれて泣く
本を讀む　本讀まる　本が讀める
噂を聞く　噂が聞える(能性自然)
君は鳥を見る　我は近視眼ゆゑ鳥見えず(能性)
主義を賣ることを得ず　主義は賣られず

この「を得」といふ法は漢文の直譯で日本語法には根柢から背いてをる。口語で「が出來る」といふのが正しい日本語である。こゝの「得」は動詞でなく能性を現す助動詞だが、本來の語法では無く只直譯した丈の事である。

被性(受身)の動詞も多少狀態的になることがあるので、その場合には目的語の「を」が變る。けれどもそれは少い。

私は一方にのみ氣がとられた
人の首を斬られたる場所
鳥が人に羽を討たる

七　狀態的の敍述語の客語

先年「帝國文學」などに總主論といふことが喧しく起つた事があつた。御存じの方も有らうが、畢竟「日本の文には一の敍述語(說明語)に對して二つの主語があることがある」といふ面白い議論であつたのだが、自分はどうも承知が出來ん。謂はゆる總主・小主に關係ある二三の文章を解剖して見よう。

象は身體大なり
支那は國土廣し
徂徠論語徵を著して其の名大に顯る

こんな文で、「身體」「國土」「其の名」は「大なり」「廣し」「顯る」の主語の樣にも一寸見える。さうすれば「象」「支那」「徂徠」を總主とか本主とか名を付けなければならぬことになる。けれども並立しない二の主に對して敍述態が一であるといふは誠に不理窟なこと。そこでこんな文の敍述態の性質を吟味して見ると、多くは形容詞で、動詞なのもあるが、それは動作的なのではなくて皆狀態的の者ばかりである。それを言ひ方を變へて動作的にして見ると、「第五」の所で言つた樣に皆客語の形になる。

大に其の名を顯す

梅の花は香あり　　香をもつ

君は官吏に適す　　官吏がよし

金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん　　光を添へ

人も學びて後にこそ誠の德はあらはるれ　　德を顯せ

かうして見ると、下の敍述語に對する主語でないことが分る。誠の主語は決して是ばかりの言ひ方のちがひで變るものではない。「徂徠を顯す」とか「金剛石を添ふ」など言はれんので分る。此等は皆客語である。精密にいへば補。足。語。になる場合もある。そして敍述語と統合して一の敍述部を作るので、本當の主語に對しては小主といふやうな關係は無く、全く客語の地位に立つものである。

この方針で例の文を解いて見よう。

主　客　敍　客　敍
日本は山水秀麗に氣候溫和なり
敍述部　敍述部

主　客　敍　客　敍
余は學問淺く才疎なり

修　主　客　敍　客　敍
維新の元勲は西郷が第一にて木戸が第二なり（西郷を第一とし木戸を第二とす）
主部

主　客　敍　客　敍
日本人は髮黑く皮膚黃ばめり

日長き春は樂し(余は)‖余は日長き春を樂む

君に二心わがあらめやも(二心を有たむやも)

(余は)憂しと見し世ぞ今は戀しき(……世を戀ふ)

私は金が無い(金を持たず)

(余は)月見れば物ぞ悲しき(物を悲しく思ふ)

悲しいとか、嬉しいとか、歎かはしいとか、をかしいとかいふ樣なことは皆人の感情を表したことだから、その主語は必人に歸する譯合、物は客語に立つのである。「が」や「は」などの助辭にのみ拘ると本體が分らなくなる。外にむづかしいこともあるが、まづ大體こんな風に說明したらどんなものだらう。(國學院雜誌第七卷第四號所載)

國語に特有な文の三體

文法を文法學上より別けると、組織の上では單文・複文・重文となり、性質の方では敍述文・疑問文・命令文・感歎文となる。又是を修辭學の方から見ると、記事文・敍事文・議論文・解釋文となる。此の方法は大抵凡べての國語に適用される方法であるが、それは大體一般の區別であつて、尚立ち入つて見たならば、それ〴〵の國語によつて增減すべき區別方法が少くあるまいと思はれる。

今文法學の上より我が國語を觀察して見るに、前の組織性質の二方面七種の文の外に、なほ注意しなければならぬ二方面の事がある。一は敬語即崇敬體で、他は記錄體と對話體とである。尤どんな國語でも全く敬語の無いといふのはない。皆多少は有るに相違ないけれども、日本語の樣に複雜なのは殆無い。記錄體對話體でも其の通で、語氣に相違のある事は明であるけれども、日本語の樣に微妙なのは是亦類が少からう。して見れば、此の二方面三體の文を研究する事は、國語の爲にはもとより、世界の言語の學問の爲にも有益で趣味のある事であらう。

第一　崇敬語

敍述・疑問・命令等の文に平語なのと崇敬體なのとある。此の崇敬體を性質によつて別けると、

一　尊他　尊敬すべき人の身體・所有物件・動作・狀態等を敬ふ。

御顏うるはしく笑はせ給ふ

御病氣御宜敷入らせられ候

御立派なる御帽子　善き御家來

二　自卑　他を崇敬するにつけて、自己の身體・所有物件・動作等を謙り卑む。

愚父先年死去致し候

明日參上仕るべく候

三　關係崇敬　他を處分し又は直接に他に關係する自己の動作を謙る。

御主人の難儀を御助け申す

天長節を祝ひ奉る

四　一般崇敬　話しかける人又は聽く人を敬ふにつけて、一般の動作を丁寧にいふ。是は自卑より轉じたるもので、對話體にのみある近古よりの語法である。

昨日御出なされ候節云々

雨降り候はゞ不參可致候

御飯を食べ候へ

此の四種類になる。之をまた言語の上から見ると、崇敬體を形成するに、一個そのまゝの敬語があ

り、助動詞助辭・接頭語・接尾語等の添ふのがある。今ひとつ〲吟味してみよう。

一　一個そのまゝの敬語

甲　名詞　尊他

方(カタ)　「奥方」「此の方」など用ゐる。直接に人を指さないで、其の人の居る方向をいふので敬語となる。

殿(トノ)　是も其の人の居る場所を指す。「何某官」とか「北堂」などいふのは皆此の類である。

乙　代名詞

（イ）　尊他

なんぢ　汝(ナ)貴(ムチ)の意味で、詳しくいへばムチは接尾語であるが、今殆一個の語になつてをる。そして尊他の意味も減じて只なといふと同じ位になつた。

あなた　は彼方で、方向の遠稱代名詞であるが、轉じて人代名詞の二人稱となつた。「其方(ソナタ)」「其(ソ)の方(ハウ)」なども敬語である譯だが、今は一般に反對に他を卑む意味に用ゐられる。「そこ」「そこ許」なども同様。

（ロ）　自卑

私　公に對して、名詞より轉じたもの。

僕　君に對して、

「此の方」などは威張る意味に聞え、「我が輩」「我等」など複數にいへば是も、同輩以下に對する語となる。

丙　動詞

（イ）尊他

宣る　仰す　給ふ　下す　います　おはす　おほす　しろす　きこす　御座る　使ふ

「仰す」は「命す」の轉。「召す」は「御覽なさる」の義。

（ロ）自卑

申す　奉る　上げる　頂く　給はる　侍り　候ふ　致す　仕る　仕へる　參る

「する」を「致す」といふは、「至る」の他動で、ある點から見ると、特に意を用ゐてする意味であらう。

「仕へる」は「使はる」の意味。「つかうまつる」は「仕へ奉る」といふ關係崇敬の轉じたのであらう。

（ハ）一般崇敬

ます　御座る　頂く　たべる　侍り　候ふ　致す　仕る　參る　申す

自卑の語の一般崇敬となるのは、どういふ譯であるかといふに、是は聽手を尊敬する點から、一般の事物を自己と同じ待遇にし、聽手を極めて權力のある樣に言ひ做したものでもあらうか。例へば

上から下さつた御菓子を頂戴する(又、たべる)

といふ文は「それを頂戴して食ふ」意味だから、「給はる」とも「食べる」とも言つて差支ない譯だが、自分の力で稼いで得た「飯を食ふ」のに、

御飯を頂く(たべる)

といふのは、尊敬せんでよい所を尊敬する譯合になつて甚可笑しい。けれども病氣の見舞を受けた時に何の世話にもならぬ人に向つてでも、

御蔭で大きに心ようございます

などゝ、御威光を此方から聽手に有たせてやる樣な事もあつて見れば、「自分の飯」も「御飯」とし「食ふ」ことを「たべる」(給)とされない譯でもない。木石などの「ある」をも「侍り」「候ふ」といひて聽手をえらものにし、「どうして」を「どう致しまして」「どう仕りまして」といひ、世間が勝手に「いふ」事を聽手に「申さ」せるなど多少解釋が出來る。それから尚又考へると、今でも田舍者などは敬語の尊他・自卑の區別の分らぬ者があつて、敬語はたゞ一般に語遣を丁寧にする譯のものだと思ひこんで居るものが多い樣に、自己の動作でない事をもその積にしてやつて退ける樣な事もまづ想像出來ぬでもない。此の方から見ると、尊他を一般崇敬に轉ずる心持が分る樣である。「ます」は「います」で「御座る」「入らつしやる」と同じに「在」「居」の尊他崇敬であるのを自卑の「候」「侍り」と同じに見て、

是は筆で御座る(入ラッシャル)

など〻いふ。實は不都合千萬の語法である。

二　助動詞

(甲)　尊他

る・らる(下二段活)　す・さす(同上)　す(四段活)　しむ　給ふ　あり　なる　なさる(下二段・四段)

めす　ます等

(イ)　る　らる

「讀まる」「見らる」が何故に敬語となるか。元來此の助動詞には外に被性(受身)と能性との意味があるのであるが、何方が根本義であらうかといふに、自分は被性が第一根本義だと思ふのである。其の「他からせられる」動作は「我自身がする」のでないから、自身の力の足不足は措いて、楪に出來る動作と認定してよい。そこで可能の意味が第二に起つて來る。さてその可能には自然にさうなる樣な意味もあるので「どうしてもさう思はれる」「その深切に泣かる」など、自然的不能、不能的意味が起る。一體貴人は自分で身を勞して事をすることはない方の者だから、「する」といふ故意特別他動的のことは失敬になり、此の自然的能性が其の代になる樣になつたものだらう。是は臆測の嫌があるかも知らんが、あまり大した違もあるまいと思はれる。

此の敬語は上代にはなかつたので、源氏物語中にも二つか三つかしか見えない。それが段々盛に

なつて來て、最普通の敬語であつたのが、近來は又「ナサル」といふ語に壓倒される樣な姿である。

(ロ)　す　さす

是は下に「らる」又は「給ふ」を添へて用ゐる。元來此の助動詞は使性(使役相)の本義であるが、前にも言つた通、貴人は人に事をさせて自分はせぬのが當り前であるから、かやうに轉じられる譯と見える。

(ハ)　す

是は奈良時代の四段活の敬語である。今でも方言には「先生が本を讀ました」「字を書かした」などと用ゐて居る。どういふ意味で是が尊他の語になるかといふに、矢張下二段と同じに使性より轉じたものであらう。中古文を標準とした今の文法は使性の助動詞は佐行下二段と「しむ」との二つと立てるが、その以前はそればかりでは無かつた。例へば動くといふ自動詞が、他動詞動(ウゴカ)すと佐行四段になるが、その他動といふのは使性から轉じたもので、着せる見せる似せるなども皆使性の意味は有つて居るのである。なほいへば驚す　活す　習す　令溺(スオボラ)　令亂(スミダ)など此の例である。萬葉十四に

なせの子やとりの岡路なかたをれ安乎禰思。奈久與いづくまでに　とある「アヲネシナクヨ」は「吾を不令寢」で今の語の「寢せなく」であるから、古代にはさ行四段活の使性があつたといふ事は想像說としてもまづ動かない方であらうと思はれる。前に擧げた「おぼす」「きこす」なども實は此

の使用より轉じたのであるが、その轉活の形式が普通の例にはまらないから一個の語として置いた譯であるさて此の佐行四段活の使性は長い間中絶して居て近來は又下一段活の代に隨分多く用ゐられる樣になつて來た。

(ニ)　しむ

常に「給ふ」を下につけること「させ給ふ」と同じである。此の語鎌倉前後には多く用ゐたが、その外には用例多くはない。古訓古事記に

命詔　マヲサシメタマフ

大鏡に

(道眞、時平)共に世の政をせしめ給ひし間

など

(ホ)　あり　なる

漢字音の動詞の語尾として敬意がある。それはするといふよりは自然狀態的だからであらう。

御嘉納あり　出御成る　行幸成る

近代の語では「に」を添へる。

御出になる　御讀になる

(ヘ)　なさる

「なす」が良行下二段の助動詞を添へた語で、するの尊他となる。是は極新しい語だらうと思ふのに、後撰集に、枇杷左大臣の歌に(大和物語にも)

ならの葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな

此の頃からあつた語か、まだ類例が見つからん。それから此の語は下二段活の語であるが、近來は四段活にも活用する。

(ト)　めす

是は見るの尊他で「物す」などの様に色々なことに用ゐられる。「知しめす」「聞しめす」など。

(チ)　ます

「來ませ吾が背子」「大君の敷きます國」「生みませる御子」など。兼盛の子日行幸和歌の序に、

世の中も樂しければ今のみゆきはありますなり

とあるは珍しい使樣である。

(乙)　自卑

候ふ　侍り　給ふ(下二段)　しむ

(イ)　「給ふ」の下二段活が自卑になるはどういふ爲か。試に言へば「使ふ」が「仕へる」となる樣な譯であらうか。尤此の語は平安朝ばかりで後には多く用ゐない。此の「給ふ」の用法にひとつ特別がある。それは熟語の動詞にそふ時は其の間を割つて入ることである。

桐壺　身づからはえなん思ひ給へ立つまじき

落窪　思う給へ忍びつれど

又自卑のにも四段活と思はれる例が少なからずある。此は本の誤とのみもいはれない。當時も混同して使つたものであらう。

萬十八　みちのくの小田なる山に黄金ありと麻宇之多麻弊禮

出雲國造、初賀詞　恐美恐毛美申賜久

難後拾遺序　オノレ人に讀ませて聞き給へれば

此の外物語類にその例が多くある。

(ロ)　しむ

候文などに

一筆令啓上候

令參內之處

など多くあるが、今は用ゐない。

丙　關係崇敬

奉る　まつる　參らす　申す

(イ)「參らす」は「參る」の使性だが、此方の動作を他に受けさせる意味でもあらうか。

(ロ)「申す」は口でいふ事だが、外の事も之に準じていふのであらう。

丁　一般崇敬

侍り　候ふ　ます　御座る

(イ)「ます」は「申す」の轉じたのであらう。古くは「ござり申す」などと用ゐたのである。さて此方に用ゐてより活用が佐行變格に代つた。

凱陣八島　奥樣へ御取次頼みません

小栗判官　元の山雀かへしません

「ませう」を「ません」といつた時代もあるのであらう。珍らしい例の樣である。それから動詞の外、接續詞や副詞句として用ゐられる語にも附くのは煩はしい樣に思はれるが、元が動詞だから有るべき譯でもある。

御當地に於きまして

御蔭を以ちまして

左樣に御座りますれば

三　助辭

尊他　に

敬語に關係ある助辭はにである。にには元來場所を示すのであるが、敬語の場合には主格となる。

御尊父樣に。も御變御座なく候哉

貴君に。は此頃御旅行なされ候由

是は前にもあつた樣に、人を直接に指さないで其の場所を指すといふ意味合から自然に「に」が挿つたものであらう。

四　接頭語

（甲）尊他

み　おほ　おほみ　おほん　おん　お（おみ）　御（ヨ）　大（ダイ）　賢　貴　等

（イ）名詞所屬　此等の接頭語はすべて名詞格の語につく。その中でみとおほとが合語になつておほみおほんおんと約（ツヾマ）り、結局おとなる。おみは「大御（オミ）」の意で漢字の御を二つ重ねて「御御（オミ）」といふのではない。どうかすると、そんな解釋をして可笑しい語だなどゝ言ふ人がある樣だが、それは却つて間違である。　おみ帶　おみ足　おみお汁（ツケ）など普通「お」とのみ言つても濟み相な所を「大御（オミ）」といふのは敬語が過ぎる樣にも思はれるが、尚考へて見ると、　お帶　おおつけ　などはおが重つて語路が惡い、お足は錢に混ずるから、自然淘汰でおみの方を用ゐる樣になつたものであらう。「御」は元來漢字の意味では天子の動作に添へる接頭尾語であるが、日本のみに當る漢字は外に

ないから之を用ゐると、それが總べての尊地の敬語となつて御の字は何にも添へられる樣になつて、その本義は今は每年一月の御歌會に「御製」とあるのや、又は接尾語の出御入御寢御などいふ場合にのみ殘つて居る。その外大賢貴等は美稱より轉じて崇敬となつた支那仕込のものである。

(ロ) 動詞所屬　みお御などは動詞その他形容詞などにも添ふ樣に見える事がある。

御立派なる御屋敷　　御尤なる仰

等は形容詞に附いたのに相違ないが、尙立派尤など體の語についたものとして說明が出來る。しかし

御よろしい　　御めでたい

等は用言についたものといふより外に仕方がない。是は近代の語法としてよろしい。

御出で下さる　　御覧なさる

御讀みなる　　御習ひになる

等は敬語に出來あがつた上から見ると、動詞所屬とも見えるが、しかしよく調べて見れば、其の下の出で覽讀み習ひなどはいづれも名詞になつて居るから、是は矢張名詞所屬と立てゝ置く方がよい。すべて動詞の敬相は中古までも助動詞で現すのが本則であつたので、助動詞の(甲)(イ)(ロ)(ハ)に說いた樣に、今でも自分の鄕里(莊内)などでは「お……なさる」といふ語法は用ゐない。是から見ても動詞に接頭語の敬語が附くといふ事は極めて變則と思ふ。ところが奈良時代の古い所にみの動

詞についた例のあるのはどういふものであらう。

古事記上　於是伊邪那岐命拔所御佩之十拳劍斬其子迦具土神之頸云々

之を古事記傳には「ミハカセル」と訓じて「さてかく用語にも御といふこと古は記中に御寢坐、萬葉に御立など猶多し」と解いてあるが、自分は直に贊成は出來ぬ。何故かといへば、所佩はハケルでその敬語所御佩はハカセルと訓ずべき譯で、現に自分の見た古い本にはハカセルと訓じてある。それから御寢御立とあるはミネ、ミタチとやうに直譯せねばならぬ譯はないから、此の訓はネサシマスともタ、スとも言はれる。或は其の方が正しからうと思はれる。鹿持雅澄氏も矢張此の本居說で、

萬葉二　御立爲之島乎見時庭多泉流涙止曾金鶴

同十九　船騰毛爾御立座而

仁德紀　爾天皇御立其大后所坐殿戸歌曰

などをミタ、シ、ミタ、シマシテミタ、シテと訓じて居るが、假名書でないから證據にはならぬ。タ、セリシタ、シマシテタ、シテと訓じても差支はない。たゞひとつ

萬葉五　帶姫神の尊の魚釣らすと美多多志世利斯石を誰見き

此は假名書で「御立たしせりし」とあるが、「たゝし」は佐行四段活の第二變化名詞法であるから、是も動詞に附いた例にはならぬ。此の外に古人が動詞の上にみをつけて訓じたものも皆此の例で

ある。實に疑はしい一の問題として尙研究したいと思ふ。

(乙) 自卑

愚　野　小　など。　鄙

此等はすべて字音の語に附いて愚父野生小宅など用ゐてすべて名詞所屬、「愚考致し候」なども尙體言所屬に相違ない。鄙は自卑の動詞の轉じて接頭語となつたものだから、無論動詞につく。

(丙) 關係崇敬

お　御

是は(甲)と同じに名詞所屬である。

小生より御返事(御通知、御誘)申すべく候

御心配申し候

御祝まゐらす

「敎へ奉る」「導き申す」など接頭語のない時は動詞であるが、接頭語が附くと體言の格になることは容易に分る。此の接頭も近代の語法である。

(丁) 一般崇敬

差　相　御

(イ) 動詞所屬　さし　あひは動詞の轉じたもので、無論名詞には附けられぬ。一體此等は敬意な

どのある語ではないけれども、語に重みを附ける爲に用る出したもので、それから嚴格な語となり一般崇敬ともなるのである。

（ロ）名詞所屬　御飯　おまゝ　おそば　お味噌　お醤油　お天氣　御粗末な物等、此等は尊他から轉じたもの。

五　接尾語

（甲）尊他卽敬稱

命（ミコト）　殿　樣　君　先生　御前（ゴゼン）　前（マヘ）　上　御（ゴ）き　陛下　殿下　閣下　足下

いづれも名詞所屬である。

命は御言で御事に當てた文字、尊と書くのは其の意味から御事に當てたのである。是は通例三人稱に用るるが、「汝命（イマシミコト）」又は「汝（ナ）が命」略しては命命達等二人稱の代名詞にも用るる。それから延いては三人稱の代名詞にもなる。

殿は貴人の居處を指す所から轉じて接尾語となつた者、平安時代より用る初め今も消息文に殘つて居るが、口語にはお三の專有となつてドンと轉じてをる。軍人社會には今も口語に使用してをるのは、威嚴を保つ爲に一般の樣と區別したのであらうが、隨分耳だつ。

樣は方角をいふ所から人を直接に指さないといふので敬語となつたものだが、殿よりは

新しくまづ室町時代よりの語であらう。轉じてはサンとなり、チヤマ　チヤン　チヤ等となる。殿と合しては殿樣となり代名詞狀に用ゐられる。殿が獨立して用ゐられる樣に樣も名詞を異にすることはあるが、普通ではない。東京の下等な語にチヤンといふのはトツチヤンの上略で、某樣を樣といふと同じである。

君　先生　は名詞より轉じ、御前　前　は其の左右を指すので常盤御前　玉藻の前　等用ゐ、父上　兄上　葵の上　などの上は上位の人の意味、父御　妹御等は接頭語の下に用ゐられたもの、きはきみの意味で、犬き　あてき　兄きなど用ゐられる。

陛下　殿下などは其の左右を指すもので、轉じて二人稱の人代名詞となり、又轉じては三人稱ともなるのは、あながち道理の無い事ではないけれども、しかし善い語では決してあるまい。

（乙）　卑稱

め(奴)　男（ヲトコ）

接尾語には自卑や關係崇敬や一般崇敬の區別はないで、卑稱として擧げるが、此のめ男は一人稱の時は自卑となるのである。　私め　大犬丸男など。（國學院雜誌第八卷第六、第七號、所載）

（大尾）

明治四十一年十二月五日印刷
明治四十一年十二月十五日發行
大正十五年十一月二十日增訂印刷
大正十五年十一月二十五日增訂發行
昭和二年二月二十五日增訂三版發行

高等日本文法

定價金五圓八拾錢

不許複製

著者　三矢重松

東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　三樹退三

東京市本所區番場町四番地
印刷者　守岡功

東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
發行所　株式會社明治書院

電話神田(25)
二一四番
二六四番
九九一番
六五四番